柳田泉著

柳田泉

明治文學叢刊

明治初期の翻譯文學

東京
春秋社藏版
松柏館發賣

第247號

序

此の頃、少々わけがあつて木崎好尚氏の『頼山陽全傳』や森田思軒の『頼山陽と其時代』などを讀んでみたがあの通り文名一代を掩ふた山陽でさへ、その畢生の心血を傾注した『日本外史』を生前上木する機會を遂に得てゐない、縱し『日本外史』の上木には幕府の思惑といふ特殊な理由から時機を待たなければならなかつたにせよその生命の一半たるべき自分の『詩文集』さへ存分なものゝ刊行を生前見ることが出來なかつた、さういふことを考へて、古來學者なるものゝ惠まれぬ境涯を想ひ、悵然悲涼の感を催うしたことであつた。然るに今や私は、山陽死歿の年に比すれば眞の少年といつても可い今日、早くも過去十數年明治文學研鑽の成績をかういふ堂々たる book form に纏めて世に問ふ機會を得た。この點で、私はつくづく貧寒な一學徒たる自分の望外の幸福といふものをあり難いと思ふ。

この幸福を思ふにつけても、私は十餘年の研鑽中に私を誡勵し、奬誘し、啓導して、具さに懇情を示していただいた先輩友人同遊諸氏に謝すべき多くのものをもつてゐる。特に長い間私の研鑽を見護つてゐて下された吉野作造博士（私は敢て故の字をつけない）、聖經にいふ「盲者の相手」の如く私の研究の傍杖となつて來てくれた木村毅君、無盡藏の處女鑛ともいふべき明治文庫の資料を私の自由な使用に任した宮武外骨氏に先づ謝意を表する。その他斯の道の先輩たる石川巖、齋藤昌三兩氏、尾佐竹猛博士を首班とする明治文化研究會の諸氏にも負ふところが多い。これ又感謝の意を表しなくてはならぬ。その他有名無名幾多の謝すべき人々がある。最後に、友情の

二字に打算を一擲して快くかゝる不利得的な出版に着手した神田豐穗君の雅懷も亦、當然私の感謝をわかつものでなければならぬ。

たゞ愧づらくは、此等諸氏の懇情の深厚に對して、私の業績が果して何れだけの學的價値をもち得るものか、それは疑ひなきを得ない。學は獨創を貴ぶといふ、その點よりせば、私の書物は、私が資料を集め、私が選擇し私が案を立て、私が按排し、私の頭で記敍論斷したといふ點で、(幾多の缺點があらうに係らず)若干の獨創が無しとせぬらしい。公然取柄といへぬところもあらうが、明白に取柄といへるところもあらう。苟くも多少の獨創があれば、此の書も亦學界に存在する一分の理由をもつといへる。然しながらこゝで私の業績の學的價値、史的價値を云爲するのは、私の任ではない、その點では私は讀者諸君の公論を甘受する。然しその公論の如何に係らず、私自身として欣喜に堪へぬのは、この書の公刊により、幾多の先人に對して私の報本的氣持の幾分を果すことを得た點である。

抑も外國文學專攻の私が明治文學研鑽に十年の歲月を抛つたのは何故か、その第一理由は宿好の致すところといふより外はない。然しそれだけではない、私には漫然とした宿好以上により強いより明白な理由があつた。それは、自分が外國文學の飜譯によつて永いこと衣食してゐた關係上、飜譯なるものゝ如何に勞多くして報少ない仕事であるかを知り拔いてゐる、それと同時によく考へさせられたのは、此の道に於ける幾多先人達の嘗めた苦勞が吾等より如何に大きなものであつたかといふことである。私は度々さう考へては此の人々に對して實に同情の念禁じ難いものがあつた。而かも創作文學の方では、文學史といふものがあつて、兎もかくも、斯道先人達の

勞が多少とも記録されてゐるが、普通の文學史では飜譯文學、飜譯文學家の勞の如き、一二の特殊な場合の外には取り揚げてくれない。若し彼等の勞を特別に表章するとせば、特殊な飜譯文學史を書くより仕方がない。可矣、それではさういふ飜譯文學史を書いて彼等の勞苦に報ふてやれ、私の同情なり報本的氣持なりは、遂にさういふ具體的な形をとり始めた。この事は又、明治文學史研究の上からいつても意義がある、明治の社會が、その初期に於いて一見西洋文明模倣の世界であつたやうに、明治の文學史も、その初期に於ては、大體外國文學の飜譯移入史に外ならぬといへるからだ。『明治初期の飜譯文學』の誕生は、實に此の一念に由來してゐる。

従つて私は、此の書に於て、能ふ限り多くの飜譯文學書と飜譯文學者を傳へることを努めた。讀者は或はいささか繁雜の感を催うすかも知れない。然しこれは私の著作動機からいつて、さうならなくてはならぬのだ。勿論私は古籍を多く傳へ、古人を多く語つただけで、それで立派な飜譯文學史だとするものではない、然しかく古籍を傳へ、古人を語るその事が、立派な文學史を生む因子とはなり得る。私としては、私の傳へた結果が無意義でなければそれで滿足である。

私の最初の立案によれば、單に「飜譯文學史」だけでなく、寧ろ時代的にも資料的にももつと浩瀚整備した「西洋文學移入史」を纏め「飜譯文學史」をその一部分たらしむるつもりであつた。然し私の經濟的微力の爲めに遂に一應主題を「飜譯文學」だけに限らざるを得なかつたのは、遺憾といへば遺憾である。私は他日此の書の姉妹篇として『明治初期西洋文學移入史』を是非書き上げたいと思つてゐる。

思ふに、私の此の書に傳へられた飜譯文學書、飜譯文學家のうちには、私の書物が書かれずとも當然傳はるべ

き運命のものも若干はあつたらう。然しながら、それ等の書、それ等の人といへども、此の書の出たことによつてその後世に傳はる可能性を更に幾分確實ならしめたことは事實であらう、況んや此の書の出現によつてのみ傳へられる飜譯文學書、飜譯文學家も若干はあるに於てをや。私の欣喜に堪へぬところは、一に此の點にかゝつてゐる。古羅馬の詩人テレンスは歌うて曰く Homo sum : humani nihil a me alicuum puto（我は人なり、人に相應はしき事は何事にても餘所事と思はず）と。昔のテレンスの氣持は今の私の氣持でもあるのである。

昭和十年二月

柳田泉

目　次

研　究　篇

傳記篇

沙翁文獻篇

明治初期飜譯文學年表

研究篇

明治初期の飜譯文學

——明治飜譯文藝史研究手引草——

おことわり三つ

此の手引草で敍述するのは、大體歐米文學に限られてゐる。

歐米文學も小說が中心である。

基督教關係の宗教文學には殆んど觸れられず、世俗文學だけに限られてゐる。宗教文學はそれだけで既に專門的研究の對象となるし、現に又さういふ專門の研究家が出てゐるからである。

一

明治飜譯文學の最初　明治の飜譯文學では何が最初であるか。これを廣義に解釋すれば困難な問題ではないが、私のいふやうに純文學と限つていへば、今日尙ほ決定し難い問題であらう。單に時間的先後の上から意見を立てると、近藤眞琴の『新未來記』は明治元年の譯であるから最初とも考へられるが、十一年迄出版されてゐない。さらば、明治五年の『魯敏孫全傳』などが何うかといへば、これは嘉永初年ごろの譯の重版である。同じ五年の『倭國字西洋文庫』はナポレオン傳聞書を題材にしたものではあるが、飜譯といへる代ものではない。從來諸家の說では大體明治十一年刊織田純一郎の『花柳春話』を最初の飜譯小說といふ風に扱かつて來てゐるが、

勿論これには異議があり、年代をもつていへば、明治七年の『開化後世夢物語』あたりを最初（六年の『伊蘇普物語』には純文學か否かの問題が伴はう）とするが至當らしく、同じ十一年でも川島氏の『八十日間世界一周』の方が數箇月先に出版されてさへゐる。要するに、これは今後の發見と研究に待つべき問題であらう。たゞ然し『花柳春話』が大に流行して飜譯文學の勢力を（といふのも可笑しいが）社會に強く植ゑつけたことは既定の事實であるから、これに依つて『花柳春話』を劃時代的所產と見、飜譯文學らしい飜譯文學の嚆矢としてこれを据ゑるといふ意見ならば、大した異論も起るまいと思ふ。これだけ斟酌した上で、私は依然『花柳春話』嚆矢說に理由があると認めたい。然し時間的に『花柳春話』を明治飜譯小說の元祖とか鼻祖とかいひ切るのは、妄論であることはいふまでもない。注意を要する。この『花柳春話』嚆矢說は、岩城準太郞氏が『明治文學史』に述べて以來、この著を資料とした文學史論家は大抵これを自說かの如く平然と採用してゐるが、これは、いさゝか不詮索の誹りを免れまい。『花柳春話』を飜譯の嚆矢と公言した最初の人かと思はれる森田思軒（岩城氏の意見は思軒の言葉に依つたものであらう）も、彼の言葉を細かに味へば、單に時間的意味で『花柳春話』を嚆矢としたのではなく、私のいふ如き斟酌を加へて、飜譯らしい飜譯といふ意味での嚆矢である、といつたものと解釋されるのである。

明治初期飜譯文學の三轉機。森田思軒の說　さて明治十一年の『花柳春話』を起點として明治二十二三年頃までを明治飜譯文學界の初期とみれば、この間に、勿論大體上からみてゞあるが、飜譯文學の大勢が三變する、卽ち三期に分れることになる。第一期は、十一年『花柳春話』が出るまで、第二期はそれが出てから十八年に藤田茂吉氏の『繫思談』の出るまで、第三期は十八年『繫思談』の出てから、二十一年二葉亭の『あひゞき』、二十二

年益田克德の『夜と朝』の出るまで、それ以後に四期五期云々とする。この時期別は、森田思軒が明治二十二年に『夜と朝』の叙として書いたものに依つたのであるが、此の敍文そのものは、實に明治初期翻譯文學の大勢を知るになかなか好いものであるから、左にその全文を掲げてみよう。

曩ニ我國小說ノ趣向將ニ一變セムトスルヤ、織田氏譯スル所ノ『花柳春話』之ガ嚆矢ヲナセリ。而シテ是レ實ニリットン氏ノ『マルトラバース』ナリ。而後西洋小說ノ我邦ニ譯サレ、モノ紛然群起セリ。然レドモ其ノ文體ハ率ネ東洋ノ舊ニ仍リテ。未ダ生面ヲ其間ニ開クモノアラズ。藤田氏ノ『繫思談』ヲ譯スルニ及ビ。造句措辭別ニ一新機軸ヲ出ダシ。或ハ眼鼻ニシテ通ジ難キモノ無キニ非ズト雖モ。其ノ原本ヲ墨スル謹嚴精緻。今日無數ノ周密文體ハ其ノ紀元ヲ此ニ溯求セザルヲ得ズ。而シテ『繫思談』ハ亦タ實ニリットン氏ノ『ケネルム・チリングリー』ナリ。何ゾ其ノ遇ノ太ダ奇ナルヤ。曾アリットン氏ガ政治世界ノ生涯ヲ顧ルニッピーコンスフヒールド伯ヲ少年ノ日ニ知リテ。之ヲ愛蘭黨ノ首領ニ薦メ。グラッドストーン氏ヲ下僚ヨリ拔テ、アイオニアン群島ニ使セシメ。其ノ鑑識徒ネニ常人ノ先ニ居ルナリ。然レドモ夜安ゾ其ノ著作ガ身後遠ク我邦ニ入リテ猶ホニ文學世界推移ノ先ヲ爲ス、ヲ知ラムヤ。嗚呼推移ハ勢也。一リットン氏勢ニ何カ有ラム。然レバモ從來ノ迹ニ由テ之ヲ考レバ、益田氏（克德）ガ之ヲ口譯シ。若林氏ガ之ヲ筆記スルモノ、乃チ亦タ我國文學世界ニ一變ヲ生ズルノ朕兆ナルコト毋ラムヤ。（明治二十二年仲秋後三日）

以下この三變した翻譯文學界の大勢について、具體的に譯本を本として語りつゝ筆を進めて行きたいと想ふ。

二

『花柳春話』以前の飜譯文學　『花柳春話』以前、即ち明治十一年以前の飜譯文學書は、數が甚だ少ない。今日知られてゐる限りでは精々で十部を出まい。中で主なものは、明治五年齋藤了庵譯の『魯敏孫全傳』（同年の假名垣魯文譯の『倭國字西洋文庫』は略す）、同六年渡部温譯の『伊蘇普物語』、福澤英之助譯の『訓蒙話草』、七年上條信次譯の『開化進歩後世夢物語』、小林雄吉譯の『西洋孝子流別奇談』、八年永峯秀樹譯の『開卷驚奇暴夜物語』、同九年佐藤喜峯譯の『天路歷程』、十年山田正隆譯の『回世美談』、これに沙翁物の紹介一二篇を加へるとそれで先づ全部である。この外にも斷片的にならば歐米文學の片端を窺ふに足る材料はある（直接的のものでは成島柳北の巴里書翰に少デュマの悲劇『椿姫』の消息を傳へてある如き、間接のものでは中村正直の『西國立志編』の中に英米その他諸國の文學知識が可成り多量に織り込まれてゐる如き）、然し多少纏つた飜譯紹介としては大體以上で明治十年までの分が盡きるといつて可い。

尤もかういふと、此の頃殆んど西洋文學を讀んだ人がないやうに聞えるが、それは、讀んだ人はいろいろあつたに違ひない。もと靜岡の葵文庫の所藏となつてゐた貴重洋書は、明治の初め徳川幕府所藏の本を移したものが大部分だと聞くが、この洋書中には、數多の西洋文學書がある。『ドン・キホーテ』、『トリストラム・シャンディ』の如きものからヂッケンズの諸作（佛譯）などもあり、シャトウブリアン全集もあつた。たしか英文學史さへ加はつてゐた筈である。幕府の役人が洋行の途次手當り次第に買集めたものか先方から寄贈されたものであら

うが、これで見ても、明治以前にも西洋文學を味ふ機會はあつたわけである。古くは高野長英の傳記にも、長英が蘭文の小說を愛讀したといふ記事があり、勝海舟が蘭語の讃美歌を和譯し、澤太郎左衞門が歐洲から小說をもちかへり、英學者尺振八なども好んで英國小說を讀んだとのこと、又神田孝平は『楊牙兒奇獄』『靑騎兵吟味一件』などといふ探偵實話めくものを紹介してゐる。だから西洋文學が多少輸入され、これを愛好した人々も稀にゐた。然しながらそれは極々少數の好事的精神の持主だけのことで、洋學者の九分迄は專ら利用厚生の一點張りであつた。だから明治十年迄の飜譯文學書は驚くべき貧弱なものであるが、それは今日から見てこそ明治以前の皆無に近いのに比較したらその反對に豐富と感じられたかも知れない。

上記の譯本について語るとして、第一に來るのは、明治五年の『魯敏孫全傳』である（明治三年の『西國立志編』で始めてもいゝが、これは寧ろ文學知識移入の點から認められるべき書で、この書自身を直に文學書と見てしまふのは何うかと怪ぶまれる。且つ又別の方面で非常に有名なものになつてゐるから、旁々こゝでは何もいはぬことにしよう）。

『魯敏孫全傳』には英國と角書がある。齋藤了庵譯、高田義甫校となつてゐるが、實は麴所蘆の黑田行元の嘉永初頭譯した『漂荒紀事』中の初め二冊を明治になつて齋藤了庵の名で上梓したものといふ。了庵の名にした理由は分からない。卷頭に譯者の緒言と和蘭譯者自敍とあるから、勿論黑田氏が『ロビンソン』の蘭語譯から重譯したものである。文體の漢文直譯體なることは次の文例で知られるであらう。

西暦一千六百五十九年（我萬治二年己亥之歳也）第九月、第三十日、同船ノ人皆、溺死シ我獨リ溺ヲ免レ赤身ニテ此荒島ニ漂着ス無人ノ域、衣食住ノ人ヲ養モノ一ヲ得ルニ由ナシ瞽者ノ杖ヲ失ヒ暗路ニ燭ノ滅スルガ如ク自ラ思惟スルニ到底、猛獸、或ハ山賊ニ死スルト餓死スルノ二ツニ出デズ其夜ハ樹上ニ棲臥ス（巻之一下冒頭）

緒言は譯者誌とあるが刊行に際して書いたものであらうから勿論齋藤氏の文章であらうが、その一節には、當時の時代なり社會なりに照して面白いと思はれるところがある。

此書モト英國ニテ童蒙輩ヲ耐忍ノ術ニ勸誘セン爲メニ述ベシモノナレバ自ラ小說ノ體裁有テ確實ナラザル說アルハ固ナリ然リトイヘドモ大方君子賤近ナルヲ以テ捨ス熟讀玩味セバ自ラ魯敏孫ノ如ク一頭固島ヲ開化セシムルニ至ンノミ

この「一頭固島ヲ開化」せしめるといふ語に、『魯敏孫傳』紹介の主旨がこもつてゐるわけであらうが、これはデフオーの原作の意義と新日本の國際的位地を考へに入れると、決して狙ひ所が狂つてゐはしない。原譯者黒田氏については、傳記も大分明白にされてゐるが、齋藤了庵については何等知られてゐない。

『通俗伊蘇普物語』。明治六年の『通俗伊蘇普物語』は半紙本六册、和裝で、有名な河鍋曉齋が挿繪をかいてゐる。譯者は靜岡（舊幕府人）の人渡部溫氏である（後に實業界に入る）。イソップの全書について、興味ある話柄だけを二百幾篇抄出して譯したものであるが、そのうち譯者の補說もあり、イソップならぬ書（『經濟說略』）からの補入もある、譯文は俗語口語も雜へた一種の文體で、ものがものだけにたゞ理解專一を旨としたらしい。然しすつかりは消化（こな）れきらず、直譯體のまゝで殘つてゐるところも少しはある。

第四　呆鴉の話

或呆鴉いかにもしこ身を飾り。仲間鴉に誇らんものをと。前に孔雀の脱羽を拾ひ。尾羽根の間にさしこみ。今迄の朋輩を輕侮で。美しき孔雀の群へ飛いると。孔雀は直にこのまぎれものを見出し。にくき奴かなと其羽を剪とり。汝は汝の事をしなせいとて嘴をそろへて驅逐しにけり。そこで呆鴉は外に行べきかたもなければ。また故の處へ立かへり。ふたゝび仲間へ入らんとすると友鴉ども承知せず。さきに彼奴の誇りたる顔色がにくしと云つて。なかなか仲間入をばさせず。ときに古老の鴉が親切に說諭して。「コレ汝。虚物者賤則之分際を守つて居たなら、なんと長上のものに侮れもせず。同輩のものに害められもせまいに。」

大體こんな風である。別に渡部氏はイソップの英文の方も校刻してゐる。その他いろいろな意味でこの人は明治初期の英學界の恩人の一人といはれていゝ。

『訓蒙話草』　これも同年に出たイソップ物語の譯であるが、あまり人に知られてゐない。これには話柄の數は九十餘ある。譯文は當時の普通文であるが、譯そのものは、却て渡部氏の方よりも消化されてゐる。

これを譯した福澤英之助は、福澤諭吉の門人で、諭吉と同じく豐前中津の人である。元と和田慎次郎といつたが幕府から洋行させて貰ふ都合で諭吉の弟分となり、福澤姓を名乘つたといふ面白い經歷の人である。

『流別奇談』。　明治七年五月に『西洋孝子流別奇談』二冊（四六和綴木板）が大阪で出版されてゐる。譯者は備中倉敷の人で林雅吉といふ。凡例にいふ「此の原書は西洋紀元千八百六十七年佛國出版オルレンデルフ氏の著す所なり、標號して『レクチュール』といふ」云々。オルランドルフは出版者の名か著者の名かこれだけでは不明

であり（同名の出版者はある）、書名も簡に失するので正しくは何といふか未詳である。何方かフランス文學研究家の示教を得たい。同じ凡例に又いふ、「今再是を抄譯して（中略）文辭は俚諺俗語を用ひ專ら婦女童幼にも通じ易からしめん事を要とす」云々、飜譯の態度、動機はこれでほゞ分かる。出版は明治七年であるが、譯述は明治五年のことである。

　フランスの商人モリスは妻子を伴なつてインドに出稼し、成功して歸國の途中、難船して妻子と分れ分れになる。妻はジアン（兄）とマリー（妹）の二人と共に一無人島に漂着し、そこで六年間を過す。この間、二子の教訓や養育やに並々ならず困苦するが、それが積つたゝめに此の島で死ぬ、二子は一日此の島へ水汲みに立ちよつた黑奴等に捕はれ、その國に伴はれる。こゝで數年を過すうち（この間王がマリーに戀慕すること、兄弟で神獸を退治する武勇談などある）、此の國は隣國の黑奴族に破られ、ジアン兄弟は隣國の王の捕虜となる、この時隣國の王の許に別に一人の白人の捕虜がゐる、同じ白人なのに驚いて懷しさに語り合つてみると、これは兄弟の父モリスの果であることが全かる。そこで三人は脫走を計畫してゐるうち、此の黑奴國がヨーロッパ人と戰端を開くことになる。一夜マリーは父と兄と打合せの上、かねて自分に思ひをかけてゐる國王を色仕掛で刺殺し、首をもつてヨーロッパ軍營に走る。この功によつて、父子三人大に榮華を得るといふ筋である。モリスの妻が孤島で死んで、兄弟が悲嘆するところを文例に引いてみる、

　振殘されし同胞男女は母の教へは聞と雖も了得童のまだぐはんぜなく死骸の傍に打守りゐて矢張世に在如く思ひ（喃母さまなぜ言曰はぬ是寢入らずと眼を覺て給べ是喃是とゆり動かして叫びつ哭つ呼立るは餌をあさり出

る親鳥に巢に遺されし子鳥の心地目も當られぬ哀れなり人なき島ゆゑ誰訪ふ者なく落る涙は草葉を浸す悲哀號(原文のまゝ)天の外は生ある者に見る縡なき同胞のいぢらしき云様もなし中にも兄の慈顔は涙を止め妹の怜悧へ稟しけるは吾們に過失の有と見へて母さま怒りて言曰はぬこそ慍も倶々詫して給へと云に怜利も昏惑らせつ晡母さまよなぜ起て言曰はぬ今から何時まで睡り給ふお前は物欲ふなからずとも我們は饑空腹に成侍るかし寒き遊戯はせまじき程に堪忍して目覺て給はれ是い晡是と母の掌を把つ縋りつ同胞が洩つ涙は秋雨の軒しめらす別れの悲歎空しき骸に降灑ぐ涙の外は同胞に答ふる物も無りにけり。

『後世夢物語』。上條信次の譯『開化進歩後世夢物語』二冊(半紙本版和裝)は明治十一年出版の近藤眞琴の『新未來記』と同一原書を譯出したものである。『新未來記』の例言には『原書ハ『紀元二千六十五年』ト題シ又『未來ノ瞥見』ト云フ、和蘭ノ博士『ジヲスコリデス』ノ著ト記ス、三百年來學術次第ニ進ミ人生ノ狀昔日ニ異ナルヲ以テ推テ二百年ノ後ヲ想像シ夢ニ託シテ之ヲ記スル者ナリ』云々、一八六五年の著述であることはこれで分かる。但し上條信次氏はオランダ語から譯したものではない、英譯からの重譯である。それは書中の人物などの發音でも分かる。近藤氏がロジエル・バァコとオランダ讀みか何かに發音してゐるのに、上條氏はローゼル・ベーコンと英語流に發音してゐる如きである。近藤氏のは明治元年の譯であるが十一年まで出版されなかつたもの故上條氏は近藤氏の譯を見なかつたであらう、偶合といふべきか。且つ上條氏の用ゐた原書には二千七十一年云々とあるといふから、近藤氏の二千六十五年より六年後の版(恐らく英譯)らしく思はれる。

内容は豫言的寓意小說で、『余』なる人物が、碩學ロージャア・ベーコンとミス・ファンタシア(幻影)に導かれ

英京ロンドンの後身たるロンデニアに周遊し、更に宇宙の旅行に出て紀元第二十何世紀の進歩せる文明の諸相を見物して驚異するといふ「午睡ノ夢」を書記したもので、『夢想兵衛』を西洋流で行つたものと思へばよろしい、然しただのユートーピヤ物語ではない。科學的豫言書ともいふべき性質の寓意小説である。

余高堂ノ傍ニ至レバ駛空船會社ト書セラレシ大招牌ヲ掲ゲタルヲ見ル。何レノ場所ヨリ駛空船ノ出立スルヤコレヲ視認メントセシニ其所ヲ知ラズ只人家稠密ナル中ニアルヲ以ツテ大ニ驚目セリ蓋シコレ手券(テガメ)ヲ受ルノミノ役局ナラント思ヘリ然リト雖モ尙近寄リテ之ヲ見ルニ他ノ屋宇ニ異ナル所アリ其ノ屋上平坦ニシテ恰モ舟ノ如キモノヲ保テリ精密ニ之ヲ知ラムト欲スルモ衛上ヲ掩ヒタル玻璃ノ爲ニ遮ラレテ熟視スルコト能ハザリシ云々

譯者上條氏は信州東筑摩郡和田村の生、夙に上京して大學南校に學び、曙新聞、東洋自由新聞等に關係し、自由民權運動にも參加した人である。(傳記篇參照)

『暴夜物語』。明治八年刊の『開卷驚奇暴夜物語(あらびやものがたり)』二冊(半紙木板和裝)永峯秀樹譯。永峯氏は舊幕人で甲斐の出生、維新後海軍に入り終生海軍教育に從事してゐた。氏は文學の嗜みがあり、この他にも『キゾオ文明史』その他の譯があつて、當時高名の飜譯家であつたものだ。この暴夜物語は英譯のタウンセンド版『アラビヤン・ナイツ』に依つたものと斷わつてあるが、無論全部ではなく、有名な漁夫の物語から黑島國王救出のところまでで終つて居り、中間抄記省筆によつてゐるところが明に見える。漢文直譯體を基に和文體を交へ一種の文體をつくつてゐる。譯文はこの頃としては巧みの方であらう。第一冊は片假名交りで稍や硬く、第二冊は平假名をつかつて和文に近い消化(こな)れた文章である。文中挿んである畫圖も、原書か何か據るものがあつたのではあらうがなかな

か面白いものがある。

韃靼王（弟、額拉是甫）ハ兄帝ヲ見遣リ獨リ一室ニ閉籠リ只管身ノ不幸ヲ思ヒ出テ悲歎ヤルカタナク折カラ心ナク窓ノ開ケタル處ヨリ園庭ノ草木ヲ展眺ムレバ忽チ數對ノ男女青天白日ヲ憚カラズ青苔ニ坐シ一對一對ニ相擁シル者アリ王怪シミ是レ何人ナランカト瞻タ定メテ熟視レバ豈圖ランヤ中ニ就テ最モ美貌華麗ナル婦人ハ別人ニアラズ即兄帝ノ愛后ナリキ（第一編の文例）

夜も既に明け方に近つけば朝拜を了り再び第四回の網を撒きたるに先きに増して重かりける此度こそは必ず多數の魚を得たるならんと力を極めて曳き擧げたるに又一尾の魚もなく只黄銅を以て製したる稍重き古瓶のみ一個浮び出たり漁夫怪み近ひて注視れば鉛を以て固く封じ封の上には印章を捺し打ち打ちたる字畫尚は明瞭と讀得べし漁夫之を見て大に悦び之を以て鍛冶に賣らば今日の食糧を購ふに餘りあらん耆き物得たりと獨語しながら猶打返し心を注めて上下周圍を檢究し中には何物か入りて有るやらんと躊躇して試むるに響なし（第二編の文例）

此の年九月の平假名繪入新聞に『ハムレット』の筋書を載せたものゝあるよしは舊早稻田文學附錄の明治文學一覽明治八年の條に見えてゐるが、正確には分からなかつた。然るに偶然にも、その日附と號數だけは判明した。即ち明治八年九月七日、九日、十日、同紙第七十二號以下三回といふのである。三回出たところ何うも時好に投じなかつたので、止めにしたといふ。この紹介者は假名垣魯文であつたといふから、何れ位な、『西洋之趣』のナポレオン傳式なものであるかも知れない。然し時好に投ぜず中止したといふところに意味があらう。

シェークスピヤ物の斷片的紹介は『西國立志編』、東京日々等を中心に早くから見えてゐる。有名なのは明治八年のヨコハマパンチに出たハムレットの獨白であるが、福地櫻痴、末松謙澄等が日々の論文に時々シェークスピヤを引いてゐることは、知らぬ人が多い。だから時好は兎も角、シェークスピヤ物は相當移入されつゝあつたと見て可い。

『天路歷程』はいふまでもないジョン・バンヤンの宗教的寓意小說『ピルグリムス・プログレス』の譯であるが、これは明治九年四月十四日から神戶の七一雜報（第十五號以下）に連載され、約一年半足らず續いて十年八月二十四日第二卷第三十四號で完結した。（明治十二年十一月刊）。

譯者については、七一雜報所載の時には何の記事もなく、十二年の單行に及んで、始めて佐藤喜峯譯となつてゐる。然しこれは眞實の譯者でなく、眞實の譯者は七一雜報の編輯長格だつた村上俊吉であるといふ。而かも、これは漢譯の『天路歷程』からの重譯であることが、今日では明白になつてゐる。

この譯で注意すべき點は、初頭の譯文が口語體であることである。これは、格別言文一致とか何とかいふ喧しい理論的主張から割出されて出來たものではなく、七一雜報の性質上、文章の平俗を貴ぶために、自然に口語體を採つたものであらう。今口語體のまゝの文例を左に掲げて置かう（十二年の單行には少しく文語に訂正してある）。

我が此世の曠野に行きましたら不斗一つの穴がありました我がその處に偃臥て睡り一つ夢をみましたが其夢に一人の人が破爛た衣をきて一所に立づみ面は家から轉けて他のところを視手には書物を持ち背上には大任を負て居りましたがやがて彼の人は手に持ちたる書を展きて觀め頻りに戰慄流涕とう〳〵こらへかねて大聲を發げ

我はマアどふしたら善からうやと言ました云々

又原文に挿入されてゐる詩句は皆漢詩のまゝ採録されてゐる。例へば（其九、六月九日、第二十三號）

罪人奔離必亡城
來扣二宰門一望レ得レ生
求三主垂レ憐開二活路一
鴻恩永頌樂高聲

といふやうなものである。

『胸肉の奇訟』（十年十二月）は、これ又早いシェーキスピア物の一つで、『ヴェニスの商人』の飜案的飜譯である。慶應義塾出版の民間雜誌第九八、九九號に載つてゐる。誰の手になつたか分らないが、何れ福澤門下の若手たるは疑ひないところであらう。飜案的といつても何も筋をひどく變へたのではない、たゞ地名人名を日本人の耳に分かりいゝやうに日本風に取りかへてしまつたのである。ヴェニスを堺の浦、ポーシアを淸香、シャイロックを意張頭八アントニオが松枝節之助、バッサニオが室野梅次郎といふ風にである。所謂譯書でなく小說風にしてある點も注意されていゝ。

かゝる薄命の重りて、積る負債に迫られて、詮方なくも松枝に此事を談せしかば、素より義氣ある松枝は輕く諾ひしが、折節都合の惡しければ、我持船の遠からず北國より入津すべきを心當て、三千兩の大金を富商意張り頭八より、三十日期限にて借受けたしと掛合しに、頭八何か思ふ仔細ありけん、色和らげて申す樣、北國よ

りの人情を換ふて言ふにはあらねど、願ふは和殿胸肉一片を證文に抵當となして給へと、開松枝非道と思へども云々

『同世美談』は『ロビンソン・クルーソー』の譯であるが、譯者は小本六十冊にして出版を願ひ出で、遂に二冊ばかり刊行したらしい。私はまだ刊本を見てゐないが、第一回二冊發兌の旨新聞廣告（十年十二月十三日朝野）に見えてゐるので分る。譯者は山田正隆氏といふのみ、その他は何等知るところがない。然し勿論何回かで（恐らく第一回で）中絶したものであらうと考へられるのは、今日傳本が殆んど無いのでも知られる。

此の頃の飜譯文學の特色。 以上諸書の飜譯紹介の動機は大部分は功利的であり、教訓なり實益なりを教へようとしたものであるが、好奇心から出てゐるのも一部分はある。何れにしても、作物そのものを傳へるといふよりも西洋文明、西洋精神を知る道具にさせるつもりから出てゐることが多い。これは當時の社會的要求なり思想なりを反映してゐる。飜譯紹介されたものゝうちには文學として立派なるものもあるが、紹介者の意識に文學尊重の念がなく、又周圍一般が又さうであるから、內容本位で、これを紹介して西洋なるものを幾分でも知らしめ、自國民の教訓啓蒙に資すれば足りるといふだけ、立派な文學だから文學らしくとか、原作のもつ眞の美しさを出すとかいふことは考へもしてゐない。たゞ紹介されたものゝ多くは、世界的古典ばかりだから、見やうによつては西洋文學全般の豫備知識、基礎知識の紹介といへぬこともない。『夢物語』の如き科學的寓意譚や脅敏孫の如き特異な冒險小說が二度も移入を試みられてゐる如きことは、當時の日本國家の國際的地位と後年の經濟的勃興と

を併せて考へると、かすかながら社會意識のいぶきを示してゐるといへやう。

三

明治十一年。『花柳春話』。飜譯文學界の第一轉機。『歐洲奇事・花柳春話』五冊は明治十一年十月から十二年四月迄に出版されたもので、譯者は京都の人織田（初め丹羽）純一郎、その英國留學より歸る船中で愛讀したロードリットン原作『アーネスト・マルトラヴァース』（一八三七年）及び『アリス』（一八三八年）を抄譯したものである。此の時初版の譯文は漢文直譯體で、假名も片假名を用ゐてゐるが、十六年に再刊した『通俗花柳春話』（坂田貞知畫）は通俗と冠らせ、文精言に婦人童幼に語きかせ云々と斷つてゐるだけに、馬琴流七五調、總振假名に書き改めてある。

織田氏が此の小說を飜譯した目的なり動機なりは『通俗花柳春話』の序文を見れば分かるが、大體二段に簡約される。曰く日本人に西洋の風俗人情を知らしめること、次に、これを知らしめることに依つて英國近世史の理解を助けること、これである。かく二段に分けられはするものゝ、第二の目的は第一とは獨立したものではなく結果として派生するものであるから、二つを一つに合してかういふことが出來る。曰く情的生活を介しての西洋そのものゝ紹介、これである。從來の抽象的主知的西洋の紹介ではなしに、具體的實例によつて情的西洋に日本人の眼を開かしめんとすること、是である。此の飜譯小說の世間に歡迎されたことは、譯者が後年述懷して「當時としては價も不廉な出版物ではあつたが思はぬ大歡迎を受けたので本屋も儲かつた」云々と語つてゐるのに徵

し、又これ以後何々春話、何々情話と春とか花柳とか話とかいふ文字を題名に織り込んだ著譯が續いたことによつて明白である（『春風情話』、『群芳綺話』、『春窓綺話』、『花情粹話』等々）。私自身も『春風情話』の譯者坪内博士御自身から、「あの頃は『花柳春話』の勢力が大へんなものだつたから。春とか話とかの文字を使はなければならなかつた」と話されたことがある。明治の新しい人情小說の先驅たる菊亭香水（佐藤藏太郎）の『月氷奇遇・艶才春話』（十五年）は後に『悲風慘雨・世路日記』（十七年）と改題して大に行はれたものであるが、これなど、題名のみか內容文章まで『花柳春話』の影響を大分受けてゐる。挿繪さへ『花柳春話』と同じ筆者らしい。和田竹秋の『鶯春話』（十二年刊）もこの仲間であらう。森田思軒が「我國ノ小說ノ趣向一變セムトスルヤ、織田氏譯スル所ノ『花柳春話』ソノ嚆矢ヲナセリ」と高唱力說したのも過褒ではない。譯者織田氏の目的たる情的西洋の紹介は十分その目的を果したといつて可い。世間に歡迎された理由としては、いろいろあらう。卽ち明治九、十年頃の殺伐な騷々しい空氣が落つくと共に時代が清新な讀物に渴してゐたこと、當時の西洋崇拜熱に迎合したこと、內容が、才子と佳人と流離艱難多年の後團圓するといふ日本人の在來の小說的理想にひたと當嵌つてゐたこと、文章描寫に一種清新な味（當時としては）のあること、政治的色彩のあること、皮相的な道德的倫理說敎卽ち勸懲的意見のあることなど、それぞれ考へられる。猶ほ、この政治的色彩のあるといふ點で、この小說を政治小說だなどといふ議論もあるが、この小說は決して政治小說ではない、原作も譯書も、政治を主體としたものではない。西洋流の才子佳人人情小說である。大體の調子は、——

杜鵑血ニ叫ンデ綠樹陰ヲ成シ晩鶯口ヲ箝ンデ牡丹花(ヘナ)ヲ着ントシ恰モ是レ春末夏初ノ天ナリ時ニ見ル繡幕半ハ開

ヒテ窓下ニ萬卷ノ書ヲ積ミ甁花盛ンニ綻ビテ牀上ニ一張ノ琴ヲ置キ中ニ佳麗ナル一少女(アリス)テー頭ニハ捲ノ美髪ヲ結ンデ身ニハ淺紺ノ美衣ヲ着ケ坐シテ籠中ノ鸚鵡ニ新詩ヲ教ユ傍ラニ一少年アリ机ニ靠テ頻リニ書ヲ讀ミ一室ノ景況活畫ニ異ナラズ誰カ此兩人ヲ美マザルモノアランヤ時已ニ斜陽猶紅ヲ斂メテ流靄黃昏ヲ帶ブ少年業ヲ收メ少女ニ對シテ曰ク余ハ此薄暮ノ時ヲ愛ス卿亦然ルヤ曰ク妾最モ此時ヲ好ムコト遙カニ君ヨリモ甚シカラン他ナシ唯此時ハ妾ガ君ヲ思フノ情殊更ニ切ナレバナリ疑フラクハ君卻テ妾ヲ思ハザルベシマルツラバース微笑シテアリスノ額前ニ垂ルヽ數縷ノ鬈髪ヲ撫シ去テ曰ク黃昏ニ卿ヲ看レバ眞ニ少年ノ如シ曰ク妾若シ少年ノ如クナラズンバ君ノ愛忽チ衰フル歟曰ク余ノ始メテ卿ヲ見ルヤ卿ノ容貌少年ノ如クナラズンバ爲タシメ卿ヲ愛スル此ノ如ク深キニ至ランヤ曰ク妾ハ之ト異ナリ縱令君老大ナルモ妾ノ心ハ固ト一ツノミ。

梗概は別に解題があるからその方に讓つてこゝにはのべぬが、今日讀んでも相當興味深く一讀出來る。

譯者織田氏は京都の人、一條家の臣若松氏の子で、三條家の諸大夫丹羽氏に養はれ、後故あつて織田姓に改めた。お茶の水聖堂、高知致道館等に學んだ後、明治三年英國留學、エヂンバラ大學で法律を修めた。七年三條家の公子公恭君の補導として再び渡英、十年歸朝。『龍動繁昌記』『花柳春話』等を譯刊して一躍文名を揚げた。後諸官衙で法學を講じてゐたが、十七年頃から新聞に關係し、殊に大阪朝日新聞の爲めに大いに盡した。この時代の先覺者の例にもれず、事志と違ひ、晩年不遇不如意のうちに病んで歿した（大正八年二月）。飜譯小說には以上の外に『寄想春史』（十二年、リツトン『ポンペイ最後の日』）、『いき子姫』（二十二年、ウード女史『イーストリン』）がある。織田氏は專門の文學者ではなかつたが、風流才子の名を博してゐただけ、文學に對する理解は相當あつた

ので、氏の飜譯小說は皆讀むに足る。氏の弟若松永風も戲作小說を出してゐるが、或は文學的遺傳でもあつたのであらうか。

『八十日間世界一周』。同じく十一年に出たものに『新說八十日間世界一周』がある。事實は、前編は『花柳春話』に先立つこと四箇月（六月刊）だが、完結が遲く後編は十三年六月である。ジュール・ヴェルヌの同名の作の飜譯で、譯者は川島忠之助である。川島氏はもと江戸本所の人、舊幕府家人の出である（後實業界に入り、正金頭取となつた）。氏の談によると、此の飜譯はフランス原書からやつたものであるが、參照した英譯は、實に明治九年歐米旅遊の途次アメリカの某驛停車場賣店で求めたものと聞く。英人ファイリアス・フォッグなる一紳士が一夕倶樂部で友人と八十日間に世界を一周する賭をなし、いろいろな冒險の末見事にそれを成就したばかりでなく此の冒險が機緣となつて愛人を得るといふ筋で、この種冒險物探險物の紹介された始めかと思ふ。譯文は嚴正な逐字全譯で、往々譯語の妥當を缺くものもあるが、一讀するに足る。次には冒頭の一節を文例として揭げる、

千八百七十二年中ニ龍動ボルリントン公園傍サヴヒルロウ街第七番ニ於テ千八百十四年中シェリダンガ物故セシ家ニ同府改選進舍ノ社員ニテ自身ハ勉メテ行狀ノ人ノ目ニ立タヌ樣注意シアリシモ何時トナク奇癖家ノ名聞轟キケルファイリース・フォッグ氏ト稱スル一紳士ゾ住ヒケル云々。

ヴェルヌの科學的ロマンスは、この後漸次紹介が盛になるが、これは新興工業日本の姿を豫想し反映するといふ點で明治文學研究家の重視するところとなつてゐる。この小說の異常な內容が時の識者に如何に啓蒙的なものであつたかは、栗本鋤雲の評言にも知られる。支那や日本の小說だと、災厄が四方に迫り、進退全く谷まるの窮境

に際し、之を救ふ者は神佛の加護に非ずんば、必ず狐狸妖怪の助力である。然るに此の小說を見ると、さうした窮境を救うてゐるものは常に金である。――日本でも今後はこのやうに金が口をきく世の中にならう、云々（本村毅氏、改造社、現代文學全集、明治開化期文學集解題）。この小說も、「花柳春話」程の人氣は得なかつたにしろ、時人の注意は相當惹いたらしく、この年のうちに松林伯圓が講談化して聞かしてゐる。

此の年（七月）出た文部省百科全書中の一冊『北歐鬼神誌』（[illegible]）は、嚴密にいふと文學のうちに入らないかも知れぬが、面白い內容のものである。內容は

蘇干地那威鬼神誌

日數及火數

魔神及人性

獸數

小惑

第一　幽魂

第二　巨人並ニ侏儒

馬日術

醫術

祈禱呪咀
算　命
妖　術
蘇國ノ妖術
英國ノ妖術
幽魂説

等であるが、細説を要せずしてその如何なるものなるかは、分明であらう。第一はスカンデナヴィア神話の紹介といふだけであるが、第二以下は西洋人の心靈の背後に横はる大きな神祕世界の存在を告げたものとして、今日からは、注意される價値があらう。種々例話が擧てあるが、その例話が誠に面白い。

版權書目（第七號）によれば長澤正毅譯の『**へねろむ物語**』（渡部温藏板）といふものが出版を願出たことになつてゐるが、これは遂に出版されずに終つたものらしい。内容は不明であるが、或は有名な「テレマク冒險譚」かも知れない。

四

明治十二年。此の年からは、十一年に英國物一、佛國物一といふ對等の均勢であつたのが崩れ、英國物が漸次多くなる。この年に於いてさへ、早くも英國三、佛國一といふ割合で紹介され出すのは、誰しも氣づくところで

あらう。

『寄想春史』。　明治十二年六月に初編の出た『歐洲奇話・寄想春史』はロード・リットンの有名な『ポムペイ最後の日』（一八三四年）の抄譯、譯者は織田（丹羽）純一郎氏である。（二編は十二年十一月、三編は十三年三月）この飜譯は初編だけとして久しく愛書家の間に珍重されて來たが、近來所謂明治物の編出の盛に行はれる世運に際會して、三編完備のものが發見されるに至つた。挿繪の圖様が本文の記事に照して當然西洋紀元第一世紀頃のものにすべきを平然と十九世紀後半のまゝで濟し、背廣姿のグローカスなど判事に見えるのも愛嬌である。『花柳春話』が大當りに當つたので矢つぎ早やに出したものであらうが、然しさうは問屋で卸さず、この方は餘り賣れなかつたといふ。內容が既に當時の讀者に緣遠い紀元一世紀頃のローマ時代のものである上に、宗教上、乃至似而非哲學思想じみた問答や說教の多いのも、讀者の心を惹きつけなかつた一因であらう。譯文の文體は『花柳春話』と全然同調のものであるから、都合でこゝには引用しない。詳しくば後章の冒頭を參照されたい。

時代物の『寄想春史』に對して、同じリットンの現代小說『父子奇遇 白浪艷話』が譯出されてゐるのは、好い對照である。これは我人ともに意外と思ふかも知れないが、戲作滑稽の雜誌『日本一・驥尾團子』に掲載されたもので、譯者は小川漁史といふ、何れ何人かの變名であらうが、リットンのことなりリットンの小說乃至英國文學なりに多少造詣ある人らしい。然しその飜譯振りといひ文章といひ、到底『花柳春話』の比ではない。

この小說の原作は『Paul Clifford』といふ、俠賊傳奇である。ポールは幼時故あつて父母に別れ、他人の手に生長した、始めは怜悧敏捷且つ正直な性質であつたが、誤つて代言人ブランドンの爲めに寃罪に陷られて牢獄に

入つてから、朝夕惡人と交つたので、遂に强盜となつて四方を横行する。その際或る貴族の娘ルーシーと相思の仲となるが、ルーシーは意外にもブラントンの娘なのである。やがてポールも惡運盡きて捕縛され、法廷に引出されると、この法廷の長官は昔の代言人ブラントンであつた。而かもポールの吟味の進むにつれて、これは昔し自分が妻と共に棄てたわが子だつたといふことが分かる。(ポールとルーシーは遂に北米に逃れて幸福に暮す)といふ物語である。譯者の序によると、リットンのこの小說を著したのは、

英國の法律制度頗る其本旨を失ひ善を勸め惡を懲し弱を助け强きを抑ゆるの効能なきのみならず却て反對に結果ことの多きを患へ風に其弊を示して囚獄中懲役場の制度を良きに改させん事を計ん爲め

であるといふ。(二十四年單行)。

此の年又一つ『ロビンソン・クルーソー』の紹介がある。これも同じく右の『驥尾團子』に掲載されたもので『九死一生魯敏孫物語』と題し、横須賀の人橋園迂史なる人物の譯となつてゐる。譯は勿論意譯で文飾があり例へば

實に光陰は流水の如く歲月の移行は矢よりも速にて魯敏孫十七八歲に至り獨り心に思ふ樣我父母の命を奉て何事も敎へに任せしかども其爲す處畢竟一家の繁昌を期する迄にして痛快き偉業を爲すに足らず宜しく海外に航行して各國の人民と貿易の路を開き莫大の國益を起さんこそ我欲する所なれ人生幾何ぞ死生は命なり今更疑ふことかはと目的此に定まりしかば初めの樣子に引換へて目に修身の書を曬さず口に讀經の聲を發せず日夜孳々として在りしに因り父母も稍其意中を推量なし一日魯敏孫を閑室に招き深く其意望を抑へ其意を咎め古語を引き正理を述べ辭を盡して諫ける樣云々

となつてゐる。

同じ雜誌に「紐約繁昌記」といふものゝ劇場を紹介した項にシエークスピヤの「ハムレット」の梗概が掲載されてゐるのも意外である。

ハムレット獨リ其跡ニ殘リ留リ天ヲ仰ギ泣テ曰ク今王ト母ト我ニ謂ルハ只管ニ亡父ノ喪ニ哀嘆スル勿レト若ノミ今王ハ吾亡父ノ兄弟ナルニ其死亡ヲ哀ムノ情毫モ見エザルノミナラズ死後未ダ二週間ニ過ギザルニ吾實母ト婚姻シテ嗹國ノ王トナリテ國權ヲ擅ニス且ツ叔父ノ義婦タル者ト起居ヲ共ニシテ殘害ヲ極メ人民ヲ仕役スルコト奴隷ノ如シ實ニ民ノ父母タル行狀ニアラズ誠ニ人面獸心ト謂テ可ナリト手ヲ拱キ頭ヲ低レテ嘆息稍久ウスル處ヘ家臣ホレシヨ。ボナルド。マルセルロ。ノ三氏出テ來リ太子ニ對シテ恭敬再拜ス。云々

見たまゝの記であつて小說化されてゐないこと、シエークスピアの書物から譯したのでないらしいことは注意される。

以上の外に、明白に此の年のシエークスピヤの紹介としては未刊ながら河島敬藏氏の『李王』があり、『リヤ王』の梗概を漢文にしたものである（英語青年第四三卷一二號、武藏全吉氏記事及び引用文參照）又此の年かこの前年のあたり成つたと思はれるものに古河獸阿彌手記の『ハムレット』紹介がある、材料は新聞雜誌から出たものらしいといふ。この二部は有名な人の手になつたものであり、夫々紹介されたこともあるものだから、今はこれだけで筆を止めて置かう。

『哲烈禍福譚』。明治初期翻譯文學界で唯一の珍本である宮島春松譯の『歐洲小說・哲烈禍福譚』（フェヌロン著

作、テレマック（七）が豫約で出版されたのも、十二年である。此の年五月卷一を出し、全部三十六卷に及ぶ豫定であつたといふが、實際は幾冊まで出たか、八冊迄現存してゐることは明白であるが、第七冊（十二年十二月）と第八冊（十三年六月）の間が半年以上もあつたところから見れば、或は此の邊で豫定遂行不能になつたのでないかとも察せられる。第一卷には假名垣魯文閲・三浦義方校、鮮齋永濯畫となつて居り、二卷以下は三浦義方校の名はない。宮島春松氏は信州松代の人、若年武田斐三郎に學び英佛學に堪能であつた由。三浦義方氏も同地の生で宮島氏の友人である。此の小說の譯文は逐字譯を潤飾した瑰麗な文字で、馬琴調の七五五七流を基調として朗々誦するに足るものがある。この點では初期飜譯中第一位のうちを下らない。聞くところに依れば此の文章の美は大半校者三浦義方の功に歸すべきであるといふ。義方には別に蘭省亭花時の狂歌名がある。裝幀は四六和裝、綠地の表紙に朱色の題簽、それに永濯の挿繪も好い、殊に第四卷の哲烈が獅子を手擲にする圖など風生じ沙驚くの勢ひがある。第七卷の哲烈が夢中にキユピツト（愚非鈍童子）の箭にねらはれ、女神ミネルヴァに救はれる圖樣も見事である。文例を引用しよう。讀者長々しきを咎めたまふな、私としてはこの幾倍も幾倍も引用したい思ひがする。第一卷、仙姬カリプソの窟に哲烈が始めて伴はれたときの、その窟の光景である、

去程に哲烈は刈浮蘇に伴れ。行こと凡五六丁。媛が窟の邊に來にけり。目をとゞめてこれを見れば。正に是天然の洞にして造化の工を極し者なり。洞門は大にして花崗石を丸く鑿もて穿に等しく。巖石を以て障壁となし天を突て高く聳つ。窟の裡は廣くして金銀珠玉を飾たる。刻梁畫壁は見えねども。天井には自然と鏤む光貝朱甲。席には展るたかむしろ。空氣通てそよそよと。風和に吹誘ひ。暑からず又寒からず。甘き泉は瀉々と。流

れて落る水晶池に。かけ渡たる橋石は。さながら瑪瑙と見るばかり。楓は流に吹散て。波は錦中や繡なる風情あり。こなたに見ゆる花園には。七百年の齢を延し。春は東の籬に開き。三千年に一度咲く。桃は南の枝に綻ぶ。菩提樹の花は爛漫と盛を爭ひ。常磐木の松柏は晩翠の色深なり。昔の人の袖の香の。花橘は實を結で。黄金の玉を掛しが如く。朱を奪ふ紫の玉葡萄は瑠璃の珠を列しに似たり。或は無花果檳榔柘榴。草はやさしき春日野の。若紫の菫菜草。富貴の名ある牡丹の花。卯の花垣を月と見て。咲亂る鷄頭花。桔梗女郎花。千樹萬草目の前に。總て春夏秋冬の。四時の詠を纏ひなく。更る／＼新しき艶を競つて馥郁たり。後の方は星羽の山また山と連りて。峻岑は高く雲に入り。麓に茂る林あり。鬱々として奇郁を挽ひ。さながら夜かと見るばかり。日の光線さへ射て透らす。耳にはいまだ聞も得ぬ。伽陵頻迦の鳴聲は。佛の國かと疑はる。樵文師は欝然青海原の目も春に。霞靉靆闇靄に。日なみもよしやあし田鶴の。漁打際に群集ひ。鳴渡りつゝ夕方の。雲井遙に舞遊び。松吹風の箏の音は。いづれの緒より調けん。波の鼓に聲和して。風も靜に凄の。日影に映じて時になり。實に是價千金の。常世の春の光景は。桃の林にわけ入て。仙家た遊びて樂たる。人も斯やと見るまでに目を驚かす輾然は。あきるゝことと半晌ばかり。

此の小說は、譯者が緒言に

其說所は國に君主たる者の政教を主とし風雅快樂滑稽興適を反和に表はし誠意正心治國平天下を心意に書ひ諷諭規諫に云々

といつてあるやうに、本質は一種の政治小說であるが、譯者の意識には多少その邊のことを考慮に入れてあるや

うに現はれる。然し勿論宮島氏はこの小說に說かれてゐる政治思想を宣傳するためにのみ譯述したのではなく、第一には小說としての面白さに惹かれたものに違ひない。又讀者の間にもまだこの小說を政治的に受けとるだけの政治熱が生れてゐなかつた。この小說を政治小說視するに至つたのは、今少し後のことになる。

又小說ではないが、菊池大麓譯の『**修辭及華文**』は、西洋の文學藝術の知識を紹介した纏つたものとして、又『**小說神髓**』に對するその影響を考へるとき、初期文學論の重要資料として忘れてはならぬものである。

五

明治十三年の飜譯文學。この年出版された飜譯文學中、先づ英國方面からいふと、古いものでは先づシェークスピーヤの紹介が一つ、『泰西奇聞愛姬譯（あいひめものがたり）』といふものが出てゐるらしい（十二月十八日鳳鳴新誌第十八號廣告）。その廣告に曰く此は是れ有名の英國詩人サクスペアー氏が所作の佳章によりチャーレズ及びメリイランド氏（ラムブ即ちラムの誤記か）が編輯されて當時歐米諸邦に傳播せし一大奇書を社友某氏が譯述されしものなり云々

次には『**鵞瓈皤回島記**』、これはいふまでもないジョナサン・スウィフトの『ガリヴァ旅行記』の譯である。譯者は片山平三郎（この人は口譯者）九岐晰筆記と註してある。譯文精密のうちに何處となく口譯の和か味がある。逐字全譯だが『小人國』だけで終つてゐる。裝幀高雅、綠色のクロースに金字金模樣で、當時としてはなかなかの美本である。これの政治諷刺も、まだこの頃はそれ程痛切には響かなかつたであらう。

『**春風情話**』。『春風情話』は橘顯三譯となつてゐるが、實は大學生時代の坪內逍遙先生の譯であることは、今

日大抵の人が知つてゐる。原作はスコットの『ランマアムーアの新婦』（一八一九年）であることも、この翻譯の附言に斷つてある。坪内先生の處女譯といふ點、スコット物の最初といふ點で、明治初期の翻譯文學界に重視すべき一であらう。坪内先生がこれを譯されたのは、明治十二年の冬休みで、丁度スコットを夢中になつて讀みふけつてゐたころであつたが、此の作の暗鬱悲涼な、物凄い程に悲劇的な結構が先生の心を惹きつけて、たうとう譯筆をとらせるに至つたものであると。學生の身分といふ諱遁から學友の兄の橘氏の名をかりたものである。挿繪の純日本化されて、上下長袴に大小、といふ打扮の人物、いゝい、うちかけ姿の姫君など見えるのもスコットだけに興を添へる。譯文は勿論馬琴張りであるが、先生の持味も出てゐなくもない。この翻譯についても私は既に『明治初期の翻譯英國小說』のところに解題めいたものを認めたので、詳しいことはそれに讓る。

「瑠紫は忽然として息吹返し、あたりを見まはす美しさ、花の容顏色青ざめ髻の髮は打亂れて、宛然水鳥「夜叉」が其戀人に見顯され名殘惜みし面影も斯やとばかり思はるゝ、欹斜める柱に倚かゝりて桂衣の襟のしどけなく水に浸りてないがしなるは雨に惱める花の陰に深山鶯かいひそめ囀りかねる風情あり。

『龍動鬼談』『開卷驚奇・龍動鬼談』これはリットン原作、『不思議な話』（一八六二年）幽靈物語である。譯者井上勤は明治初期翻譯文學界の第一人者であり、又事實それだけの力量があつた。尙ほ氏については『月世界一周』の條に讓らう。この小說はロンドンの化物屋敷のことを書いたもの凄い物語である。當時かういふ讀物があつたものか、それともリットンの製作になるか、何れにしても怪談小說としては稀に見る面白いものだ。それが怪談好きの日本人に大歡迎されるべくしてされなかつたのは、この譯本が總品拙陋のものであつて、井上氏に翻譯

の才が豐であつたから、譯文に些の危げがない。

左ル程ニ彼ノ戸ハ我等ノ力ニテ開キ得ザレバ其儘ニ閉テアリシガ今ガタ何ヤラン音ノ聞ヘシト思ヘバ戸ハ忽チイト徐カニ軋々（アツアツ）ノ音ト、モニ半開キタル戸ノ透間モル風ニテ推シ開カル、ガ如ク自然ニ開キタリ乃チ我等ハ急ギテ裏ノ荷揚場ニ至リ見ルニイト大キヤカナル青白キ幽靈火アリ其大サ恰モ尋常人體ノ如クナレバ固ヨリ定形實質アルニアラズ閃々トシテ我等ガ目前ニ飛ビ廻リ飛ビ揚リ少焉（シバシ）ハ其處此處ト徘徊セシガ頓テ彼ノ荷揚場ヨリ續キタル二階ノ梯（キザハシ）ヲ昇リタリ余（ワレ）ハ直ニ續キテ彼ノ幽靈火ノ後ヨリ梯ヲ昇リ奴僕モ亦タ我後ヨリ昇リ來タレリ其時彼ノ幽靈火ハ梯ノ右ノ傍ラヨリ飛ビ揚リ兼テ小窓ノ開キテアリシ三階ノ小窓ニ入ルヤ否ヤ云々

此の小說は怪談小說としてはかう面白いものであるから、この後も一度ならず二度ならず譯された。

次に佛國物だが、この年譯刊された主なものは、二種あり、その二種が何れもジュール・ヴェルヌの科學小說であることは注目される。

『月世界旅行』。詳しくばは、譯者は井上勤『九十七時二十分間・月世界旅行』（原名は『地球より月へ』）、初め分冊十卷で出し、後十九年に合冊したものである。此の小說の內容は題名で分かる通り、巨砲の砲彈中に身を潜めて月世界に向つて發射せしめると月世界に達することが出來るといふ一時或る種の科學者間に唱へられた思想を直に小說に仕組んだもので、本書は月世界に赴くまでの事を記し、別に姉妹篇『月世界一周』（明治十六年）は想像と實際と半ばした月世界の光景を描寫してゐる。

井上氏は阿波德島の人、號春泉、父（不鳴）は蕃醫であつたが文墨の人としても有名であつた。勤氏は少年の時

から外人について英佛獨語を修めたが、天稟の才があつたものか、上達著しく、明治初年には稀に見る豐富な語學の才能を示した。初め大藏省文部省の飜譯で衣食しつゝ、續々と西洋文學紹介に筆をつけたが、初期の文學界に對する氏の貢獻は頗る大きい。後内閣に官仕したが、間もなく辭し、神戸に赴いて實業に志した。然し遂に成功せず、不遇の裡に昭和三年十月歿した。（傳記篇參照）

今一つのヴェルヌ物は、鈴木梅太郎譯の『二萬里海底旅行』で、井上氏の英譯からの重譯なるに反し、これはフランス原語の直接譯である。此の鈴木氏は後の理學博士となつた鈴木梅太郎氏であらうか。これは京都出版で和裝木板といふが、完結したものかせぬものか、未見に屬するもので、何ともいひ難い。稀本の一に屬する。

版權書目（第十七號）によると、此の年ドイツ物が紹介されたことになつてゐる。『瑞西獨立自由の弦』がそれだ。長崎縣士族齋藤鐵太郎譯となつてゐる、原作がシルレルの『ウィルヘルム・テル』たることはいふまでもない。小本二十冊で完結することになつてゐるが、何うも一二冊は出版されてゐるらしい。然し今日なほ稀本が一冊も出て來ぬところを見ると、あまり流行したとは思へない。若しこれが出版されてゐたとせば、ドイツ文學紹介の嚆矢となるわけである。獨立といひ自由といふ、かういふ文字に、時代が次第に政治熱に犯され、自由民權の勢力が文學方面にも滲み及んで來たことが察せられる。譯者はさういふ點をねらひ當てこまうとしたのかも知れぬ。

概していつて、十三年の飜譯文學は十二年に比してやゝ衰色を示したやうに思はれるが、これは矢張り時代の政治熱が高まつて來て、當時輕視されてゐた文學の如きが益々度外視された爲めであらう。これが十四年になると益々甚しくなる。

明治十四年。飜譯文學の振はぬ理由。 明治十四年には紹介すべき飜譯小說は極めて少ない。これには相當の理由もあらうが、私の考へるところでは、當時の飜譯者は大抵專門文人でなく政治家、官吏、敎師、新聞記者などの片手間が多かつたらしいので、丁度自由民權の叫びが勃興して世間の騷しい時であつたころ故文學や小說の飜譯などに手をつける人が少なくなつたこと、又出版書肆が、かゝる政治關係の書册の出版に追はれて文學物などに手が廻はらなかつたことなどであらう。

『五九節操史』。 此の飜譯小說は『佛(法)國情話・五九節操史』といふ、四六和裝唐本仕立で三册ある。譯者は福岡の人松岡龜雄氏、原作者はデュマであると斷つてあるだけで、原名を何といふか別に語つてゐないが、此の飜譯の題名を讀み解けば、デュマの傑作の一たる『四十五衞士(レ・カラント・サンク)』であることが推察される。先づデュマ物の飜譯の最初であらう。この飜譯は三册より出版されなかつたものであるか、それとも更に引續いて出版されたものか不明であるが、物語そのものは丁度半分程のところで中斷されてゐる。或は繼續すべき筈のものが都合上出來なかつたものか。英譯からの重譯でなしにフランス文から譯したものらしいが、抄譯である。出版書肆が山梨溫故書堂(內藤傳右衞門)とあるのは珍しい。

時代は千五百年代の後半、フランス王ハンリ三世治世中の出來事に題材をとつてゐる。ハンリ王とギイズ公の對抗、ハンリ王を守護する忠誠なる四十五衞士、滑稽多智の王の股肱シコーの活躍、衞士の一人エルノートン・カルマンジュとギイズ方の女丈夫モンパンシェー女公の戀などが錯綜して興味豐かに描かれてゐる。此の飜譯の

方ではギイズ方の一將サルセイドが王を討つて成らず、グレーヴに馬裂の刑を受けるに始まり、ドコーが王の命でナバールに使し、ギイズ方の謀將マイアンヌ公が之を追ふて一騎打の勝負を試みる事を中にし、エルノートンが計らず負傷せるマイアンヌ公から書翰をモンパンシェー女公に呈せんことを託され、相會ふに及んで兩者共相知る間なるに驚き、兼ねてよりの戀情を吐露しあふところで終つてゐる。女公はサルセードを助けんとて單身男裝して刑場に赴く際、エルノートンに助けられ、爾來兩者の心中に相乘て暖い想ひが漲つてゐたのである。譯文の基調は純然たる漢文直譯體である。

最後の一人、名をエルノートンと云ひ、姓をカルマンジュと稱す、年齡二十三四、丈け甚だ高からず、衣服體度、人品骨格、並に貴く、面皎く、眼涼しく、姿儀端正儼然として豹韉の駿馬に騎る、後騎に人あり、劍を刀尾を牽く、エルノートン驚き且つ怪み、首を回らして一視するに年僅に二十許、色の白き膚の美なる、眼眸を脫して鼻目耳口を畫くが如く、身甚だ矮くからず、肉太だ豐ならず、只眼と眉彎月を呈して女子に髣髴たるを衣と云ひ、裳と云ひ、美を極め麗を盡して、更に倚は粗を雜ふが如く、短劍を佩びて赤騙に騎し一僕を從へ轡を執らしむ、其狀一目して、其貴族たるを知る、エルノートン問て曰く、僕が刀尾を牽きたるは子歟、美少年曰く、然り請ふ恕せよ、僕足下に乞ふ所あり、足下允さるるや否や、云々。

譯者松岡氏について、福岡縣の人といふ外何等知るところのないのは、遺憾に思つてゐる。

今一種は、前にも出た滑稽雜誌「驥尾團子」に掲載されたもので、『放鳥古墨錄』(十四年七月から十五年四月迄)といふ。原作も原作者も分からない。たゞ内容によつてドイツ物たるは明らかであるが、譯者山賀義雄とあるが。

勿論變名か匿名であらう、校訂三谷南翠となつてゐるが、この人についても知るところがない。若し十三年の『白山の弦』が未刊であれば、この小說は(取るに足らぬ小話にせよ)ドイツ文學紹介の嚆矢とならざるを得ぬ。內容の如何は序言に詳しい。

普漏生王、非的利、維廉一世は性異だ奇異を好む癖ありて非常ぬ長身の人を撰擇し近衞兵を編制せられしことは詳かに普國の史上にありて普く人の知る處なり今是に基て佛朗克福府の豪商に黍阿、里伯哈といふ人の其軀幹の長大骨節の强健なるを群衆に秀るを以て普國の爲に着目され竟に同國に强誘されしより古鄕にては主人の踪跡の絕たるを死亡ものに決し老母妻子は悲歎に沈み且雇人某が姦計に陷りて悉く財產を擧て之に讓り主婦は三兒の慈愛に引かれ常磐の破操に傚ひ竟に三兒をも毒殺せられんとするに至りしも天神の救助を得て災禍を除かれ又主人は伯靈府の兵營に勞役せられて古鄕を思慕し心身を勞苦し適ま新聞紙を讀んで己が妻の雇人と結姻する日の近きにあるを知り吃驚の餘りに兵營を脫出しやゝ逃走せしも中途にして追兵の爲に捕攫せられ旣に嚴刑酷罪に處せられんとするに臨み不測奇緣に因て之を免かれ枯楊復活を生し枯魚再波に躍るが如く禍轉して祉となる千變萬化勸善懲惡の一奇談を通俗の雅言に譯述せるものにて其局を結ぶに至り初めて題號の意味を會得し忽ち案を拍て快呼一聲を發するの珍話なれば江湖の諸君博愛を給らむことを深く冀ふと云爾

此の二つは、現に飜譯紹介されたものであるが、版權書目によるに飜譯されたかと思はれる作品が數部ある。

先づ英國側からいへば、スコットの『湖上美人』を譯した『春江奇緣』、これは高田早苗の名でこの年版權屆を出してゐるが、間もなく返納してゐるから、譯は成つても出版はしなかつた(十七年服部撫松の名で改題出版)。リット

ンの『ユウジイン・オチム』を譯した『昔ゆうぜん荒夢物語』、福岡縣士族上田秀成譯といふ、小本十冊で完結する筈といふが、一二冊も出たか何うか。佛國物では、シュブール氏作『ル・ボルトレー・ド・ペルト』といふものが『伯爾士姿繪』と題して刊行されることになつてゐるが、果して出たか何うか。譯者は東京府士族水谷由章。更にヴェルヌ物の試譯らしいものが二つ、『北極一周』、原作は『大氷原』といふもの、譯者は井上勤氏、『地中紀行』。これは原題であるが、譯者は靜岡縣士族織田信義となつてゐる。何れも刊否未詳である。かくヴェルヌ物に頻りに着眼してゐるところに、當時の社會の科學文明への憧憬と、文學社會の改良的空氣がいさゝか窺はれる。

此の年あたりの譯業かと推されるものに、外山正一博士の『嗹馬皇子之仇討』がある、『ハムレット』を淨瑠璃風に全譯しようとした最初の試みである、全文は『ゝ山存稿』に收まつてゐるから一瞥だけして置く。

政治熱の反映として、純文學的作品の紹介のかう衰へた一面、虛無黨文學、革命文學が始めて擡頭する。前者の例には『魯國烈女ヴェラサシュリッチ糺問ノ記』(十五年刊『露國奇談烈女之疑獄』)、『魯帝弑逆記』(『魯國皇アレキサンドル二世非命之殂落』)、『レオ・ハルトマン虛無黨陳實書』の如きもの、後者の例には『西洋血汐の簇』(本名佛蘭西大革命の原因) の如きものがある。然し文學として立派なものはない。

それから、これも文學の書とはいへぬが、『情況裁判誤判錄』これは、その實例が何れも稀有な犯罪實話であるだけに、それ自身が一種の讀物として面白いばかりでなく、幾多の探偵小說乃至大衆文學の藍本として利用されたといふ點で、文學の書と同様にその名を記憶されてゐるものである。

六

明治十五年。政治熱。政治熱の最高潮に達した年であるだけに、十三年來からの飜譯文學への影響を例にとれば、この年など最も衰へるべき筈であるが、事實は然らずで、先に飜譯文學に祟つた政治熱が今度は反對に飜譯文學の助長者となり、一度衰へかけた飜譯文學が又もぐつと盛になり始める。それは、政治的必要から政治小説の出現が要望されたが、創作の方は急に間に合ぬので飜譯文學を利用して假造りの政治小説を捏ち上げることになつた爲めである。勿論政治熱だけが爾後の飜譯文學を助長したとはいへない、敎育の普及、讀者階級の擴大、交際社會の出現などがそれぞれ因果關係によつてそこに大に作用してゐることも、認めなくてはならない。

今政治熱と連絡ある飜譯文學から述べてみよう。

飜譯譯文學中の自由民權分子。『西洋血潮小暴風』と『自由乃凱歌』。此の二つは共に初めは自由黨の機關紙たる自由新聞に揭載されて、全國幾萬の靑年志士を唸らしたものである。『自由乃凱歌』（二册）はデュマの原作『バスティユ奪取』の前半を宮崎夢柳居士が意譯したものとなつてゐる。夢柳居士の外國語の素養は、何の程度のものか分らないが、兎に角多少あるにはあつたらしい。此の原作の後半は更に明治二十二年夢柳著『自由乃凱歌』と題して大阪で出版されてゐる。十五年版の方には一松齋新井芳宗の豪宕な挿繪がある。『西洋血潮小暴風』の方は刊本は第一編だけで、後の二三章は自由新聞に揭載されたのみで斷片の儘殘つてゐる。百華園主人櫻田百衞の譯に渡邊文京が校閲を加へたもの、畫工は矢張り芳宗である。原著者は『自由乃凱歌』と同じくデュマで、『醫師の

回想錄」の一部分の抄譯である。兩書とも原作に於いては別に自由民權の教科書といふ程のものではないが、それが飜譯に於いては巧みに攝取され鼓吹されて立派に自由民權の教科書と化されてゐる。此の相違は殊に『西洋血潮小暴風』に於いて甚しい。此の小說は本來かの十八世紀の大山師カリオストロ伯（ジヨゼフ・バルサモ）を描いたものであり、成る程所々に政治社會や祕密結社の描寫はあるが、カリオストロを自由民權の權化視してゐるところなど決してない。然るに飜譯でそれを讀めば、カリオストロ伯バルサモは宛も自由の大戰士かの如く思はれる。これは何れも此等の小說を飜譯するのが主意でなく、當時の民權論者が直接に叫露し難いところを、間接に外國小說の飜譯に託して述べたからであらう。譯文の體は宮崎氏のは太平記調、櫻田氏のは馬琴調が勝つてゐる、——

志氣凛然と程もなくピロウ、カミルデ、モルラン等はバスチールの方へ近づきし折柄その樣子に當りてブルバードと云へる街衢の中央より思ひも寄らず忽然と鼓の聲天地に響き現はれ出し一隊の軍馬スハ敵の我れに先立ち寄せ來りしこそ健氣なれ花々しき手始めの戰なし革命黨が千辛の程を見せ與れんと急に隊伍を立直し今や遲しと控へし所ろ是は全く敵にあらず巴里の護衛兵の政府に背き人民を援けん爲め此處まで來りしものなるにぞ革命黨は愈々是に勇氣を增し云々。（「自由乃凱歌」）

斜陽林を染なして、暮色梢にかゝるとき、疎らに見ゆる白屋の、烟を籠めて鐘の音に、世に無常の感を起し、羊をつかふ牧童は、家を求めて呼ぶ聲に漫に寂寞の情をひく。夕ふくればセルウ川の、水も汀の蘆の葉も凄然として眠るが如く、浮屠氏の所謂阿毘國も斯やと忍ぶ許りなり。想ふ野をすぎ山を臨て落日の晩鐘アルゼートと

シュチュイスホーランドを通りつゝ。テンフィルス村の近傍より。此方へと來る旅人あり。

面白いのは、『西洋血潮小暴風』の第三回バルサモーが祕密結社の頭領からその誓約條々をきく箇所で、その筋の干渉からか筆者の遠慮からか大分〇〇〇が入つてゐるが、その回の終りに譯者の言葉として、

百華園曰く本文盟約條中忌諱に觸る所あるを以て已を得ず之を抹殺し〇〇を塡めて諸彥の眼光を汚す其遺憾果して如何ぞや

噫予は素善美なる天賦の權理を有し活潑なる自然の良能を持する者なり然るに何が故何が爲に筆舌を自由にする能はざる耶倚机泣血

とあるなど、此の時代として如何にも煽情的なものがある。

私に別に櫻田氏、宮崎氏に關する研究がある、(櫻田氏の事は昭和八年十月明治文學創刊號、宮崎氏の分は昭和九年四月『明治文化研究論叢』、參照されたい。)

譯者の中、櫻田百衞は岡山の人、同人社に學び、腰拔新聞から自由新聞の記者として名を馳せた人で、政治小說界では先驅者の一人である。宮崎夢柳は土佐高知の人、高知新聞から自由新聞に入り、繪入自由、自由燈、東雲新聞(大阪)等に執筆して、操觚者としては有名なものであつた。宮崎や櫻田の飜譯は譯といつても、以上のやうに增補刪削勝手次第といふ物おそろしいものなので、後世の評者からは豪傑譯といふ名をもらつてゐる。

『壓制政府顚覆論』(一名自由の旗揚)といふ小說が刊行された由、この年の出版物の廣告に見えるが、これはまだ見てゐない。然し恐らく中江兆民の『政治叢談』(五月から七月に亘つて)に載つた『壓制政府の顚覆』といふも

のと同じものではあるまいか。これは一七九一年パリで上演された戯曲でアルニー・ド・ヴィルヴィルといふ人の作だといふ。フランス人民が啓蒙思想家に眼ざまされて革命の旗を翻へすに至つたことを、極てざつと書いたもので、譯はたゞ梗概程度のものである。

同じくフランス物で『勇婦テレーズ傳』といふものが日本立憲政黨新聞に載つてゐる、これは後に『勇婦の鑑』と改題して出版されてゐる。譯者は無署名であるが、河津祐之氏が原譯し小宮山天香氏が文飾したものであるといふ。原作はエルクマン・シャトリアンの『マダム・テレーズ』なるものである。左に勇婦テレーズを載せる冒なるものを掲げて置く。

左の一篇は佛蘭西の史家エルクマン・シャートリアン氏の著す所にして十八世紀の末該國革命の時に當り當時共和黨員たる一少婦の其の黨義の爲めに自ら一身を抛ち賤むべき糧食小商賣部の一員となりてキリール河方面の共和兵と共に獨逸に入り同國アンスタットの戰に傷を負ひ死に瀕したるを同地の一醫師の爲めに撫養せられたる一條の奇譚を記したるものなり斯る稗史を紙上に掲げ加へんことは元と我が自由新聞の旨には非ざれども且は二三讀者の希望も默止がたくて復遊小子の爲めに斯くは物するに至れるなりそも原著は譯文巧妙にして寓意も亦深く片語短冊の間讀者をして彼の共和兵の勇敢義烈なる克く艱苦險阻をもて堂々たる大敵に中り辛苦曲さに嘗めて遂に自由の大義を立て佛蘭西國をして歐州列國の侵凌を免れしむるに至るの慘狀を想見さしめ奮然懦夫をも起すに足るものながら如何にせん如何にせん新聞は紙幅に限りありて全く原意を盡すに便ならず或は却て其完璧を毀つくるの恐あるを讀者諸子幸ひに之を諒し給ひて且らく彼の霧外に花を見ることの趣を忍ばれ

んことを

河津氏は司法官として又立憲政黨の幹部として有名な人物であり、改めていふまでもない。小宮山氏は水戸の人、有名な楓軒の孫に當る。新聞記者として小說家として明治初期（二十年前後）の文壇に名を馳せた人であつた。

なほフランス物ではないが、門田平吉の『眞段郎蘭傳』がある。米人アボットの『ローラン夫人傳』を抄譯したもので佛國革命・自由黨魁と角書がしてある。後に十七年に坂崎紫瀾がこれを材料として『自由の花笠』といふ政治小說をつくつた。一言書き添へて置く。

中江兆民の『民約論』（ルソー）が出て、自由民權論者の木鐸とも聖典ともされたのは矢張りこの年である。次にドイツものが一つ、『哲爾自由譚』一名自由之魁といふ、此の原書については、勿論斷つてなくともシルレルの『テル』であるのは想像がつくが「一千八百六十九年スツットガルト出版ニ係ル日耳曼國有名ノ詩人フリードリッヒ、フォン、シルレル氏ノ全集中ニテウイルヘルム、テルト題ス」と分明に凡例に斷つてゐる。自由之魁といふ副題をつけたのは、此の頃の政治趣味、自由民權趣味だ。譯者は大分縣の人山田郁治氏、松湖漁史と號するドイツ學者で、諸方の高等學校の教授をしたことがあつたといふから、此の譯書が原語譯たるは疑ひがない。吉野博士の仙臺第二高等學校在學時代に山田氏は現に教授であつたと。此の書は原語譯だが逐字直譯でないことは凡例中の次の言葉で分る。

譯者ノ用意ハ。能ク作者ノ隱微ヲ知ラシムルニ在ルヲ以テ。其ノ趣向ハ之ヲ變ズルコト無シト雖モ。其ノ言句ニ至テハ換易スル所少シトセズ。

且つ原作は脚本であるが、此の譯では小說體の物語に改められてゐる。文章は馬琴張りの七五調が雄で、朗々誦すべきものがあり、中々の名文である。第一回扁舟救俠客から文例を引く、テルが舟を出さすといふ演說に諭す言葉である。

此の頃の世の有樣を觀るに。威權を弄する暴官等が。壓制の弓に束縛の絃。日夜放つ非道の矢は。東西南北別なく。當るに任する暴政の。的はいづくか一國の。民の頭に降かゝる。雨ならねども吾人の。袂は乾く遑ぞ無き。實に國民の大不幸。之をのがるゝ法はしも互ひに心を一つにし。力を合すにあらざりせば。終身安堵の時なからん。かゝれば人の軀の。今日のなげきは明日遂に。吾身の上に降り來る。瑰となるか行末を。知る由もなき白波の。山なす如き潮を。渡すは難き業ながら、壓制の岸を船出して自由の港に達すると。思はときのみ艱難も。之を避るに足らざらん云々。

政治的意味のある英國物はといへば、——

『英軍記』と『良政府談』がある。戸田欽堂の『薫兮東風英軍記』は內容アルフレッド大王の事が飜譯と受取られるものであるが、「著」と署名してあるから、先づ著として置かう。サア・トマス・モーアの『ユートピヤ』の譯『良政府談』(井上勤譯)もこの年の譯刊である。これが更に『新政府組織談』と改題して十六年に出てゐることを知つてゐる人は少ない。此の原書については知る人が多いから何とも述べずに置かう。

續いて虛無黨文學はといへば、——

『虛無黨退治奇談』。此の年九月『虛無黨退治奇談』が出たが、譯者は川島忠之助氏、原著者はフランス人で

ール・ヴェルニエ、原名を直譯すれば、『虛無黨退治』又は『虛無黨狩り』といふ程の義であるといふ。緒言に於いて川島氏の語るところを聞くに、「予之ヲ繙クニ所謂政論稗史ノ體ニシテ專ラ先帝（アレキサンドル二世）ノ被害前ノ事ヲ記ス書中曲ニ該黨ノ露國ニ發セシ原由ヨリ蔓延今日ノ熾ヲ極ルニ至ル迄ノ事情政府ノ之ニ對スル政略ノ現況及ビ之ヲ蕩掃シ亂ヲ轉ジテ治トナスノ策略ニ至ル迄網羅遺ス所ナシ」云々。虛無黨に狙はれてゐる參政官を父にもつボリス・ニキチンなる青年とその友のフランス人アルベル某とが偶然のことより虛無黨を相手に戰ふことになり、種々苦心の後遂に虛無黨の魯帝暗殺の陰謀を破る顚末を述べたもので、これに相手たる虛無黨方の美人アンナの活動、壯士ステッパン・クワリコッフ（實はボリスの庶兄）とアンナの悲戀などが織り込まれてなかなか面白く讀ませる。後十七年に坂崎紫瀾はこれを更に和解して『露國安那物語』といふ政治小說をつくつた。（『改造』大正十五年十二月號木村氏記事參照。）

十四年曙新聞に出た女丈夫ヴェラ・サシュリッチ裁判記事が『魯國奇聞烈女之疑獄』と題して出版されたが、宮崎夢柳がこれを材料にして『魯西國虛無黨寃枉（むじつ）乃鞭笞（しもと）』を書いた。この小說は譯といへないかも知れないが、簡短に述べて置かう。

陸軍大尉サシュリッチといふのは武功の士であつたが、十六になる女ヴェラを殘して歿した。ヴェラは母と共にカルコフ郡に流寓し、一商家の世話で漸く衣食することになつた。その商家の一子ボゴンボッフをヴェラは心に慕つてゐたが、商家の主人もヴェラの心中と素性に感じて、わが子と結婚させるつもりでゐた。ところがボゴンボッフは、郡に出て大學に入ることになつた。ボゴンボッフがいつ頃からバクニン（此の小說の所謂バクミン）の

虛無黨思想を奉ずることになつたかわからぬが、やがて學生過激派の牛耳を執るやうになり、一八七七年事を擧げんとして、敗れて捕はれた。丁度その頃ヴェラも慘禍にかゝつた。ヴェラの女友にネップチェーフトといふのがゐたが、これが虛無黨の一人であつた。それが、黨員中の最も危險なスパイを殺した廉で捕縛され、家宅搜索をうけたとき、文書の中からヴェラの手紙が出て來た。それは何の害もないものではあつたが、ヴェラは直ちに拘引されて、都に護送された。ヴェラは初めは自分の無罪を信じ、不幸を憐れんでゐたが、一日獄内で囚人ボゴボッフが大警視トレポフへの不敬から打殺されるのを見て、急に官吏を憎む心を起し、虛無思想の洗禮をうけた。間もなく罪案が定つて、キエフ地方に三年流刑にされたが、期滿ちて歸鄕すると、老母は憂鬱の餘り彼の世の人となつてゐた。母の仇、夫の仇と、恨み骨に徹したヴェラは、變裝して都に上り、トレポフを狙撃して重傷を負はせる。一度は逃げのびたが、ふと考へる所があつて、わざと捉はれる。公判の日、ヴェラは雄辯を揮つて官憲の暴惡を訴へ、自己の無罪を述べる。青年アレキサンドロップがこれに感奮して、立つてヴェラの辯護をする。聽衆が味方して法廷を騷がし、ヴェラを逃してしまふ。これが機となつて人民が覺醒し、止むなくば暴力によつてロシヤ政治の改革を行はうとする陰謀が續出し、遂に一八八一年の皇帝アレキサンドル二世の暗殺となつた。

ヴェラ及び虛無黨の此の擧は世界を驚かしたものだけに、當時日本の操觚家志士達も大分これに刺戟をうけ、興味をもつたものと見える。

政治的意識をもつものは以上で止めて、以下政治的意識のない作物の紹介に就いて語らう。

『群芳綺話』。同じ十五年六月大久保勘三郎譯『歐洲情譜・群芳綺話』初編が出た。これは初編より無いものと考へられるが、然し『寄想春史』などの例もあるから一概にさう斷定が出來ないかも知れない。ボッカチョの『十日物語』をフランス譯から重譯したものである。後に用ゐられてゐるフランス譯が皆カストルのそれであるところから推して、此もカストルの譯を底本したのであらう。第一『月下氷人　媒二介奇緣一』、第二『慕二生佳人一起二死佳人一』、第三『痴僧不レ圖　濟二度鴛鴦一』、第四『哀情忽去　歡樂忽來』、第五『名花多情　却失二宿鴦一』、第六『主尼誤レ冠　業尼滅レ法』、第七『奇夢符合　痴蝶失レ耦』の七篇が收まつてゐるが、第一は二日目の物語の第三話で英國王女が僧に扮裝して良緣を得る事、第二は十日目の物語の第四話で他家の夫人に戀慕してゐた紳士がその夫人を死後掘起して蘇生せしめた事、第三は三日目の物語の第三話で、美人が僧を詐いて不義の仲介をさせた事、第四は五日目の物語の第七話で、主人の娘と戀に落ちた奴隷少年が偶然身分が知れてその娘と婚する事、第五は四日目の物語の第十話で、誤つて魔醉劑をのんだ醫師の妻の情人が死人と誤まられた爲めに種々喜劇が生じた事、第六は九日目の物語の第二話で尼僧院長が部下の尼僧の失行を責めんとして却つて自家の醜事を暴露する事、第七は四日目の物語の第六話で、戀人の死んだ夢を見た美人が、翌日密會中戀人に頓死される事を記してゐる。挿繪の服裝器玩が凡て十九世紀以後の風體なのは閉口である。畫工は分からない。譯文の體は漢文直譯調を和文の物語調で和げたもので、

法師ハ眷戀ノ情益ス切ニシテ寐テ寢ネラレズ轉輾反側歷山ノ主翁ト談話スルヲ聞キ其聲一々耳ニ上ツテ轉タ春情ヲ惹キニケル既ニシテ彼レ厨房ニ入リ來ルハ是レゾ月下氷人ガ戀情ノ切ナルヲ憐ミ良緣ヲ結バシムルノ時機

ナリト獨リ心裏ニ喜ビツ低々的ニ二三聲歴山ヲ呼ビケレバ他ハ何等ノ思念モナク襖ヲ隔テヽ聞イタモハ薦ど臨キ臥室ニ喚イテ安眠ヲ妨ゲタルカ曰ク否ナ夜方ニ午ヲ過ギ四隣闃寂時アツテ微風颯々窓ヲ叩キ獨臥凄然ニ堪ヘズ請フ來ツテ倶ニ寢ネヨ曰ク眞ニ然ラン云々（第一章十二頁）

此の文例でその大體が分かるであらう。

『西洋夫婦事情』（加勢鶴太郎譯）にはチャールズ・ヂッケンズのものといふ署名があるが、何を譯したものか、未詳、『スケッチェズ・バイ・ボズ』の中にこれの內容と一致するところもあるが(Sketches of Young Couple)、然し私の藏本とは合しないところも多いから、よく調べてみたい。『相愛夫婦』、『懶惰夫婦』、『野合夫婦』、『貧乏夫婦』、『いさかひ夫婦』の五つが收まつてある、短かい割合に面白いものである。

『蝶舞奇緣』。「英國情史・蝶舞奇緣」和裝二冊ものも亦、明治翻譯文學界中の珍書の一つであらう。一八四八年フヒラデルフヒヤ發行の『アルビニヤ、一名若き母』といふ書を譯したとあるが、原著者は未詳、譯者自身にも不明の由。譯者桑野鋭氏は筑後柳河の人、戲文家から出身し、不思議な緣で王子傅育官とまでなつた。稿樓して出版する筈であつたが、書肆の都合で初編二冊で止んだといふ。英國貴族の女アルビニヤ・タラベリレダなる佳人とジョオジ・デロレインなる才子との間の纏綿たる情事を寫したものであることは察知される。出版は明治十五年五月である。

『英國奇談毒婦歐士勤小傳』、意外にも地方的政治新聞たる土陽新聞に出たものである。譯者は分からぬが、原作は一時有名だつた英國の女流作家メリ・ブラッドンの『オードレー夫人の秘密』である。明治もまだ早いこの頃、

かういふ地方新聞に默つてかういふ有名な大衆小說を揭げてゐるなど聊か心にくい業ではあるまいか。(中絕はしてゐるが)。

梗概をいへば、三年濠洲で苦勞して富貴となつたジョオジ・タルボーイスが妻子を喜ばせようと英國へ歸つて來ると、妻は彼の歸る數日前に死去し、子は祖父の手許に引取られてゐると分る。彼は深く悲み再び濠洲へ航しようとするが、舊友のロバァート・オードレーといふのがこれを引止め、氣を慰めるために田舍の叔父の邸に遊びに伴ふ。ところがこの叔父のサァ・ミケェル・オードレーの新夫人といふのが死んだと思つた妻ヘレンにそつくりなので大に驚く。夫人の方でも大に驚いた樣子である。間もなく單身夫人に會ふべくオードレー家に行つたジョオジはそれ切り行衞不明になつてしまふ。ロバァートはジョオジの身上を案じ、頻りに彼の踪跡を探るが、なかなか分からない。然しロバァートは種々な點を綜合して、オードレー夫人がジョオジの舊妻ヘレンではないかと深く疑ひ、この祕密が解けると、自然ジョオジの方の問題も判明するであらうと考へる。その間ロバァートとジョオジの妹クララの戀などがあり、一脈花やいだ空氣もないではないが、然し中心はロバァートとオードレー夫人とのいきづまるやうな智慧の戰ひである。一度はロバァートも夫人に殺されかけるが、最後には遂に夫人が負けて、自分がヘレンなること、ジョオジを殺したのも自分なることを告白し、オードレー家の名譽のためにベルギーの片田舍の瘋狂院に幽閉される。ところが、殺された筈のジョオジは、殺されてゐず、生きてアメリカから歸つて來る。さうして所謂毒婦は悲慘な最後をとげ、善人は平和に榮える。

此の土陽新聞の方は中絕したが、これが後二十六年に國會に完全に揭載されてゐるから(「隔簾影」森田思軒譯)、

その方で讀まれる。やゝウヰルキイ・コリンズの脈を引いたかと思はれる、極めて面白い大衆小説である。勿論興味の中心はロバァートの探偵、ロバァートとオードレー夫人の對抗にあるが、それが次第に最高頂に達するあたりは實にヒヤヒヤする。

この頃、戲作小説方面、新聞讀物方面では勸善懲惡の毒婦物が全盛の傾向があつたから、譯者は幾分新しい西洋の毒婦傳としてこれを紹介したものである。

『新體詩抄』中の譯詩。 終りに、同じ十五年に出た『新體詩抄』について一言したい。『新體詩抄』のことは、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎三氏の選に成り云々と、わたしが今更めかしく説くまでもないところであるが、たゞこゝで注意したいのは、此の詩集の內容十九篇中、飜譯物が十四篇で創作が僅かに四篇よりないことである。この詩集そのものを直ちに飜譯文學に伍せしめることの無謀なのはいふまでもない、然しこの內容を見て此の詩集が當時の飜譯文學熱に大に刺戟されて出來たといふことは明瞭であらう。譯の巧拙は區々ながら、收まつてゐるものは、グレイ、テニソン、カムベル、ロングフェロウ、キングスレーなどの名作であるのは嬉しい。シェークスピアの詞曲の譯も三篇加はつてゐる。それ等のあるものは一度新聞雜誌に掲げられたものであることもいひ添へて置きたい。グレー氏墳上感懷の詩、尙今居士（矢田部良吉氏）譯を一寸引用する。

山々かすみいりあひの　鐘はなりつゝ野の牛は
徐に歩み歸り行く　耕へす人もうちつかれ
やうやく去りて余ひとり　たそがれ時に殘りけり

四方を望めば夕暮の　景色はいと〻物寂し
唯この時に聞ゆるは　飛び來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやにつく　羊の鈴の鳴る響
猶其外に常春藤しげき　塔にやどれるふくろふの
近よる人をすかし見て　我巣に寇をなすものと
訴へんとや月に鳴く　いとあはれにも聲すなり（下略）

此の人々が此等の詩を飜譯紹介した動機が多少とも純な藝術愛好心に出るものと認められるのは、從來の飜譯文學家の態度の功利的實用的なのに比して、正に一進歩といゝ。

七

明治十六年。飜譯意識の進歩。　明治十六年の飜譯小說を說くに先立ち、聊か述べなければならぬことがある。思軒居士が「造句措辭別ニ一新機軸ヲ出シ」云々と讃した藤田茂吉氏の「繫思談」（十八年）が、『花柳春話』以後一新期を劃するものであることは、前にも述べた。さて、『花柳春話』が明治の飜譯文學界に一轉期をもたらしたのは、その飜譯紹介した小說の內容の清新にある、然るに『繫思談』が更に一新期を劃したといふのは、所謂る

遺句、措句、飜譯の外形即ち文章にある。約言すれば『花柳春話』は飜譯の內容そのものによつて一轉期をつくり、『繫思談』は飜譯の態度によつて一新期を劃したものといつてよい。『繫思談』についてはその條に再び說くつもりであるが、此の外國文學の內容外形併重といふ飜譯の態度に近いものを『繫思談』に先立つて宣明した飜譯小說が十六年に出てゐる。伊澤信三郎氏譯の『處世方針・鐵烈奇談』(フェネロンのテレマック傳)がこれである。

『鐵烈奇談』。この『鐵烈奇談』をもつて逐字譯の祖とするのは、有體にいふと當らない。十二年の『哲烈禍福譚』はこれと同じ原書を飜譯したものであるが、その逐字譯に文飾を加へたものたることは、前に述べた通りである。若し又この文飾といふ點を嫌つて逐字譯といふ語と抵觸するところがあると假定したにせよ、川島忠之助氏の飜譯小說の如きは二書共に立派な逐字譯である。先に『哲烈禍福譚』の現存か否かゞ問題にされてゐたころは唯一の『テレマック』の古譯として權威をもつてゐたが、今日『哲烈禍福譚』が立派に現存してゐるためにその權威もなくなつた。かく以上二箇條の尊重資格が失はれたに係らず、猶は此の『鐵烈奇談』が明治初期飜譯小說史上に尊重すべき一位を當然占め得るのは、全く此の飜譯態度の宣明によるのである。

總じて『繫思談』以前(乃至『鐵烈奇談』以前といつてもよい)の西洋文學飜譯の態度は、今もいふ如く內容偏重で、外形には無意識であると斷じ去ることが出來る。傳へんとし、譯さんとするものは內容である。西洋の奇事異聞、人情、風俗、文明、政情、總括して西洋そのものである。かゝるものを載せてゐる乘物(文章)には一切無頓着に吸收させ吸收しようとする、これが大體十五六年頃迄の西洋文學飜譯の態度である。これを稱して無意識的飜譯時代といつてもよろしい。然し世人の文學意識乃至文學への理解がすゝむにつれて飜譯家達の意識には、か

く内容のみを偏重して可いものであらうか、いやこれではいけまいといふ觀念が、半ば意識的、半ば無意識的に暗々裏に發展させられて來た、併し未だ誰もそれを明白に、飜譯はかくしなくてはならぬと公言するには至らなかつた。それを始めて『鐵烈奇談』の譯者伊澤信三郎氏が言葉に現はしたのである。『鐵烈奇談』の緒言は伊澤氏の意を體して校閲者森重遠氏の執筆したものであるが、それにかうある

此書（テレマック）文章の絶妙なるは彼邦傳へて文林の規範となす由なれども彼我言語文章の異なる假令直譯するも能く其妙を寫し得べきにあらず是譯者の嘆息するところにして苦心も亦極れり故に原文に從つて譯し去り務めて作者意匠の密なるを害せざらんとすれば譯者も亦刪除に失せんよりは重複に失せんとするの思ひあり故に文章往々渾融を缺き語氣重複を免かれざるものありて看官諸君の思想を煩はさんを恐る云々

但注意すべきは、此の宣言には外的尊重の意は十分見えてゐるが、その尊重の程度動機が甚だ消極的な半意識的なことである。『繫思談』の積極的なのに大きな相違がある。こゝが單に先驅たるに止まつて『繫思談』の如く一新期を劃らすことの出來なかつた所以である。

伊澤氏は信州高遠の人、明治の教育界に令名のあつた伊澤修二氏の弟である。校閲者森重遠とは修二氏の夫人の父君で阿州侯定府の臣であつた人と聞く。刊本は第一卷だけで、第一編から第五編に至るもの、譯文は和文の稗史調で、太平記調と馬琴調を混ぜ合はした氣味がある。此の小說の文例はわたしも木村君なども方々に引用したと記憶するので、こゝには略す。（例へば大正十五年四月「新小說」參照。）

たゞ面白いのは、十二年の『哲烈』とこの小說が同一原作を譯したものであるに拘らず、世人のそれに對する

態度が違つて來てゐる、十二年にはこの小說の政治的分子に氣がつかなかつた人々が、今度はそれに氣がついて、この小說を半ば政治小說扱ひをしてゐるのである。

此書ハ歐洲小說ニシテ希臘時代ノ事跡ニ托シ政事ノ得失人情ノ曲折自由ノ眞理法律ノ要等ヲ詳論シ頗ル面白クシテ必要ナル珍書ナリ

云々といふその廣告文面にも、その邊のことが窺はれるであらう。

『歐洲奇談ジュリアス・シーザルの劇』が立憲政黨新聞に掲げられたのも、同樣に政治的意味を寓されてゐたものに違ひない、譯者は河島敬藏氏、河島氏はその頃立憲政黨員で度々政談演說などをしてゐる、文章の校閲者は小宮山天香であつたといふ。これは明治最初のシェークスピヤ原文全譯である。河島氏はこの外にも幾篇かのシェークスピヤを飜譯しかけて居り、遂にはシェークスピヤ全集に及ぶつもりであつたといふが、それは實現せず、僅に十九年に『春情浮世之夢』を譯刊したのみで終つた。

河島氏は紀州和歌山藩士、藩の洋學校その他で英佛學を學び、更に神戶大阪等で英學を專攻した。氏の名は久しく忘られてゐたが、明治文化研究會同人が『明治文化全集』發行の際に、氏の門生たりし野々村戒三氏の手から氏の存在を知り、その傳記等もやゝ明白になつた。

同じく政治的動機から着手されたかに見えるものに、『民約論』の著者ジャン・ジャック・ルソーの自叙傳がある。一は『盧騒氏懺悔紀事』と題して小野篤門太の試みたもの、一は『懺悔自叙傳』と題し、藤原希一の試みたものである。原本は何れもルソー懺悔錄の抄譯であるらしい。小野氏については何等知るところはないが、藤原

氏は自由黨の一名士で、板垣の祕書格の一人であり、十五年の洋行にも同行したものであつた。然しこの二部は何れも刊行されたか何うかは未詳である。

『龍動塔話』。宮崎夢柳譯、わざわざ意譯と斷はつてあるから、譯し振りは想像がつくと思ふが、有名なウィリアム・エンズワースの『ロンドン塔』の第一篇第一章の約四分の三ぐらゐのものを手加減自由自在の太平記調且つ馬琴調で四回にわけて引のばしたものである。たゞ原書の大旨、いはゆるこつと稱するものはしつかり握んである。卷首に括弧して（板垣先生歐洲より携帶の書に係る）とあるから、明治十六年六月板垣退助が歐洲漫遊から歸朝の際に持つて來た書物の一つであることが分かる。書出しのところにロンドン塔に關する解說と此の小說を譯述する趣意を述べてゐる叢談子といふのは、夢柳ではあるまいが、よく要を摘んでゐる。「抑も此の塔は昔し英國の專制政治たる時代に方りて惡むべく悲しむべきの牢獄となり當時暴君奸相の爲めに厭嫌忌憚されたる幾多の志士仁人が塔内に幽囚せられて殘忍苛酷なる刑に處せられ滿地の熱血を灑ぎ千歲の寃魂を留めたるの舊跡なるが故に今に至るまで佛國巴里の牢獄たりしバスチール城と共に永く世人の記性に印し遊客の其地を經過する每に尙ほ存在するところの斷頭機上の血痕を認め又獄室の壁面に囚人の手づからなる詩歌を鐫入し堪ゆべからざる悲憤慷慨の情を寫せしを見て以て壯快活潑なる自由革命の一大氣運は此の慘澹悽愴の中に胚胎し來りしを回想し感淚の衣襟に滴るを覺えずと云ふ」云々。本書の記述に政治的寓意のあることは勿論である。

本文は、ジェーン・ダッドレーが父と夫の野心の犧牲となり、女王の冠を戴かされるためにノーザンプトン公の邸からロンドン市をさして船行列美々しく練り出して來る、途中何處からともなく彼の女の船の前に奇怪な老

婆と子供が現はれて不吉な豫言めくことをいふところで終つてゐて、完成してゐない。譯文は例の如く太平記調と馬琴調を交ぜ合したやうな流麗なものであるから、讀んで美しいことは美しいが、あまり意譯々々と手加減を試みた結果、少々可笑しなところもなくはない。本文冒頭——

但た見る四通八達の街衢は鐵路長く琴絲を曳き電信高く蛛網を撒じ、櫛比鱗次の家屋は白堊燦かに朝暾に輝やき丹瓦聳えて映霞を籠む、大小の店舗幾千萬の人の影、長短の橋梁東西南北の車の響、瓦斯燈は夜を照して花を散ずる如く蒸汽船は水を蔽ふて山を築くに似たり繁華の景況雜踏の情狀は實に目を驚かし魂を奪ふ蓋は是れ世界第一とその名も高き英吉利の龍動府と知られたる。

成る程十九世紀のロンドンならこれでもいゝかも知れないが、十六世紀のロンドンでは何うであらう。勿論かういふ文句は原書には一つも見當らない。然し夢柳當時の大衆讀者にはかういふロンドンの描寫の方が却つてよく頭に入つたのかも知れない。

『一滴千金憂世乃涕涙』 これは明治初期飜譯小說中の珍本の一つである。原著者は米國の人エドワード・キング、演義者はこれも夢柳である。演義の二字でその飜譯振りの何んなものかゞわかると思ふ。此の年九月から十二月に亘つて自由新聞に載つた(十七年刊行)。明治十六年十一月五日『歐米政理叢談』第五十一號の卷附廣告に、日本出版會社の名で此の書出版のことが見えてゐるが、此の方は出版されなかつたものらしい。然し此の時の廣告文は此の小說の由來、大旨を知るに重寶なものだと思ふから、引用して置く——

右(即ち此の小說)は先きに板垣(退助)君の海外より携帶せられし書中本年初春英京倫敦にて出版せしキドサー

ド・キング氏著作ゼントル・サヴェーヂと題せし一篇を宮崎夢柳の譯述補綴せし者にして此の人間社會は百事萬物悉く邪惡なり須らく進んで改造すべしと云へることを大趣旨とし其間英雄烈女の傳記才子美人の遇合等より魯國の虛無黨佛國の共產黨等の事情を詳說細錄したる政治上の稗史小說なり今般自由新聞より拔萃し猶夢柳氏の校訂を經且つ數箇の插畫を加へて近々出版せんとす云々。

時代は十九世紀の中頃ででもあらうか。北米合衆國政府では、自家の屬國でもないチロキー族の土地を通つて鐵道を敷設する許可を某會社に與へたので、チロキー族の議會はこれを不當とし、此の鐵道敷設を中止させることを議決し、ブリーザント・メルリノーといふ靑年志士を代表として此の鐵道會社の有力者たる銀行家のハルレストンの許に派する。ところがハルレストン一家は歐洲漫遊中であつたので、メルリノーも歐洲に渡りスヰイスのインターレークンといふ地でハルレストンに會ふ。始めはハルレストンも取り合はなかつたが、メルリノーの熱誠と才辯に動かされて考慮を約する。メルリノーは猶ほハルレストンと交涉を保つ便利から滯在する。滯在中樂師スタニスローといふ者と相知る。ハルレストンの娘にアリスといふ美人がある。或る日散步の歸途雷雨にあつて氣絕してゐるのをメルリノーに助けられたのが機緣で、二人はやがて相思の仲になる。メルリノーは過激主義の志士で、社會は邪惡也、大破壞して大改造を加ふべしといふ論を持してゐる若者だつたが、アリスの純情には心を動かし、いさゝか變節しかける。ところへ故國では賣國漢の輩出で形勢不利の報が來る。メルリノーは愕いて故國へ歸らうとベルンまで來ると、故國の同志から更に消息があつて、留つてハルレストンの說得に專心せよといつて來た。ベルンにゐる中に、不圖した機會から、メルリノーはスタニスローと再會し、彼がロシヤ革命

黨員なることを知り、互に素志を談じて大に共鳴する。スタニスローとベラの兄妹は此の地に集まつてゐる革命黨員の牛耳をとつて、武器密造にかゝつてゐるのである。スタニスローはバクーニンと師友關係がある。現に此の小說第二十六、七、八回はバクーニンの傳記である。（これは多分原書が所謂補足した部分であらう。）メルリノーは遂に革命黨に加盟して、社會大改造の理想を遂げんとし、同黨の指導黨員に會ふためにパリに出かける。一方アリスの方では、メルリノーを慕ふ餘り病氣になつて、同じベルンまで來てゐたのにメルリノーに會ふ機がなく、それなりパリなる父の許に歸つてゐる。メルリノーはハルレストンがパリにゐる由を耳にし、故國の用事で再び出入する間に、アリスとの舊情が再燃し、社會改造の理想のことも革命黨員との會合のことも一時忘れてしまふ。黨の長老イグナチィスは、アリスを思ひきれとメルリノーに忠告する。折柄ベラはロシヤ政府の探偵の手で虐殺される。と同時に、スタニスローの告白から、ベラは實は彼の情婦で、彼はベラの生命を助けたさに、政府の手先になつてゐたことがわかる。メルリノーはこれを見て翻然と悔悟し、急に故國に歸つて同志を集め、後援を頼まうとかゝるが、却つて失敗して、身は山中の孤屋に重傷を養ふことになる。所が此の家はアリスの女友達ローの母の家であつたので、折柄アメリカに歸つてゐたアリスは雪を冒して尋ねて來る。アリスと會つて間もなくメルリノーは恨みを呑んで死ぬ。アリスは戀人に遺志をつぐことを誓ふ。

（前略）斯る都域（モスコー）の中なれど、兹は人家の多からず、竹籬茅屋此處彼處に、貧しき民の住居して、見るも憐れの勞役に、其の生活を營む土地、遠く聞ゆる番犬の、聲より外は物淋しき、坊に一箇の寺院あり。但だ見る土を堆ふして橋と爲し、樹を植へて牆に代ふ。燈花黯然として只寒光を發たり。余佛殿に進んで讀文目に

暴らす。草枯れて殘碑を沒せり。未だ何の年の寶刹なるを審らかにせず、塵晴ふして古額を封せり。焉んぞ誰が代の琳宮なるを知らん。遙に見れば疑ふて樵戶と爲す、近く到れば初めて僧家なるを覺ふ。過ぐる頃より此の寺院に、住居へる兩個の僧尼あり。

此れこそイグナチィス、アリスの二人である、二人はかうしてロシヤ革命に活動しようといふのである。夢柳は此の物語の拾遺を出す意志を卷尾にほのめかしてゐるが、それは成らなかつたらしい。

井上勤氏の飜譯小說。 明治十六年に於ける井上氏の活動は目立つたもので、『全世界一大奇書』、『空中旅行』『魯敏孫漂流記』、『人肉質入裁判』何れも氏の譯である。

『全世界一大奇書』。『**魯敏遜漂流記**』。『**空中旅行**』。『全世界一大奇書』は『アラビヤンナイト』の飜譯で、量からいつて永峯氏のものに數倍し、無論抄譯であるが略ぼ首尾とゝのつてゐる。此の譯書の文體は一種の新體といつていゝものである。『魯敏遜漂流記』は、井上氏の譯書中の白眉であらう。實に正確な逐字譯であつて、この頃には珍らしい、井上氏の語學力の秀拔を證して餘りある。裝釘も當時としては面白いものである。『亞非利加內地三十五日間・空中旅行』は、ジュール・ヴェルヌ原作の科學的冒險小說で學士サミュエル・ハァゲッソンが氣球にのつてアフリカ探險に赴き種々の冒險に出會ふことを記したもので、『八十日間世界一周』と同じく後年の冒險小說の先驅をなしたものである。初め分冊七冊で出版され、後に合本された。三書共に比較的容易に手に入るものであるから文例を引かない。

『人肉裁判』。 嚴密に小說とはいへないが、同じ十六年刊に井上氏譯の『西洋珍說・人肉質入裁判』がある。

シェークスピヤの『ヴェニスの商人』をラムの物語から譯したものである。これは有名なものであるから、茲に委しく述べるまでもあるまい。

此の年のシェークスピヤものでは、此の『人肉質入裁判』より少し前に『佛蘭某州領奎麻吉侯情話』といふのがある。西基斯比耶叢書の第一編といふ觸れ込みである。譯者は琴嵐先生といふ。シェークスピヤの『お氣に召すまゝ』をラムの物語から譯述したものである。ところでこれについて語る以上は、これの母胎ともいふべき、『春宵夜話』なるシェークスピヤ紹介叢書めくものゝあること語らなくてはならぬ。

『春宵夜話』(後に閑話)は、單行の本ではない、この年三月から六月に亘つて郵便報知新聞に連載された幾篇かのシェークスピヤ紹介の總名である。これが總て琴嵐生と署名してある。これは今迄何人も氣がつかなかつたものであるが、蓋し私の發見と自讚してもいゝものであらう。その目次を擧げると

○ウィントルス・テール(三月十五日――二十八日)
○アズ・ユー・ライク・イト(四月七日――五月一日)
○ヴェロナの二紳士(五月三日――二十四日)
○デンマークの王子ハムレット(六月四日――二十一日)

譯者の琴嵐生(先生)については、今日のところ何人かといふ明證はない、或は然しこれは大方藤田鳴鶴の筆のすさびではなからうかと考へるやうになつた。その理由は十七年の條に述べるつもりである。

卽ち『奎麻吉侯情話』は、右の『春宵夜話』の第二の單行本である。以上の四編を悉く西基斯比耶叢書といふ名

で出版しようといふ計畫があつたものであらう。然し『靡吉侯情話』の外は、別に單行されたものはないらしい。兎もあれ左に翠嵐生の緒言と、譯文の文例とを引用することゝする。

緒　言

余甚だ酒を好む然れども多く飲まず又た詩を好む然れども多く作らす（蓋し作らざるに非ず作り能はざるなり）書畫骨董茶の湯挿花圍碁將棊皆之を好まざるはなし然れども敢て耽らず唯り新聞紙は之を好み之を愛し之を讀んで厭ふことを知らず之を見て措くこと能はず他人をして評せしめば必ず新聞紙に狂せる者と云はん而して最も貴社の新聞紙を好む（近頃諂諛に似たれども決して然らず）蓋し其諸種の事態を包羅して備はらざるなきを以てなり紙幅の廣大なるは見聞には少々不便なりと雖も其廣くして大なる所以は卽ち諸般の事態備はり盡せる所以にして此小不便は彼大利益を以て償ふに餘りあれば余は暫く其不便を忍ぶものなり抑も余の新聞紙を好む所以は其必要と娛樂とを兼ぬるを以てなり夫新聞の用今日に於ては幾んど空氣の人身に必需なるが如く苟くも此世に生きて人間並に世を渡らんと欲せは之れと相離る可らざるに至れり然れども唯必要のみにては未だ以て余を滿足せしめざるなり必要に加ふるに娛樂を以てするは新聞紙に若くものなし紙中載る所の物奇談珍說は言ふもさらなり詩文滑稽故事來歷圍碁の手合せ演劇の評話貴社唯之を備へたり卽ち必要と娛樂とを兼ぬるものにして余をして貴社の新紙に愛戀せしむるは此にあり然れども余未だ貴社に論說を投じたることもなし亦詩文を寄せたることもあらず通り一遍の御得意樣なり而るに余も亦少々筆をひねくり廻はすことの備を知る（蓋し大言）かの演劇を好むの餘り役者とならんと欲するが如く余も亦記者の眞似方をなして貴社に一臂を添へ貴社新聞紙に一

賤の光榮を汚たしめんと欲す（これは失敬）否な貴社新聞を汚さんとす是れ他にあらず淺言の一欄を暫く借り切りとなし最も面白く殊に絶妙なる西洋の小說類に就き其粹を拔き其精を選み世に必要に人に快樂を與ふるものを余が愚夫（否）余が拙文にて譯出し以て貴社に寄せんとす是れ余が寢物語に子供等に話し聞かせる種本なり因て其題號を春宵夜話とは名けたり而して余は先づ「セキスピーア」が鈍作の筋書を至極平易にものして言葉にも解し得べき話となし左に綴ること然りなんと而白いものではござらぬか

次の文例は、右のうち『ヴェロナの二紳士』の冒頭である。

瞥倫（べろな）の都に住居せる二人りの少年紳士あり甲を馬連陳（ばれんちん）と云ひ乙を普捋陶（ぷろちす）と云ふ互に深く交りて膠漆も啻ならず常に學窓を共にして片時も相離るゝことなく骨肉同胞の親みも及ばざる有樣なり斯くて年月を經る程に普捋陶は夜李（じゅりや）と云へる或る貴族の娘に語らひ寄りて深く言ひかわしたるが親み深き馬連陳には聞ゆよしもあらざれば其事を打明けて學びの窓の徒然には夜李のことを言ひ出てゝ相愛相戀の濃かなる其情其意の形容すべからざるの趣あるを語るに附けても馬連陳は蒼蠅事と擯（しりぞ）けて其痴情を誡めけるに普捋陶は夜李の情に絆されて情の海に溺ひつゝ流れも早き歳月の手束の隙も夜李をば忘るゝことのあらざるを馬連陳は深く憂ひ或る日普捋陶に打向ひ微笑ながら言けるは戀は癡情の病のみかゝる病は速かに其根を絶つこと肝要なり丈夫の精神は癡情の間に消滅し愛戀の快樂は色香と共に衰凋すべし身を立て名を擧げ千秋に其功業を輝かすは男子の所爲と云ふべきのみ溫柔鄕の巷には公益事業を求むべからず青雲の志は獸慾苦樂の間に伸ぶと友誼に篤き忠告も空と聞と多録きたる男女の間を隔き離しと悟りし後に馬連陳も唯其意に見過したり斯て一日馬連陳は普捋陶の家に至り小生は近日

の爲め美蘭に赴くべしと已に其義に決したれば別れをおん身に告げんとて來りしなりと告ぐるを聞き普魯節は深く悲み親しく結ぶ友垣の中を絶つべき遊學は相成るべくは止りたまへと只管其出立を沮みけれども馬連陳は聽き入るゝ氣色なく普魯節に言ひけるは假令ひ千萬の語を費やし止むるとも小生決して從はじ今より開く苔の花斯く爲す有るの時節をば空に郷里に費やしがたし足下もし我李の愛に牽かれずば小生勸めて共々に郷關を出づべきに如何せん足下は人の情郎なるを我々が住み馴れし郷里の天地は頑霧深かり墳墓の土地を踏み出さずんば廣き世界を知るべからず小生已に決心せりと思ひ切りて見ゑにける

『歐洲新話花月緣』は明治二十年刊行『歐洲作劇斷腸花』の原譯（大阪朝日新聞に出たもの）であるが、後のものに宇田川文海の署名あるに對し、初譯は何も署名がない。原著はジェームズ・スタッフォーヅの『青年學生』（序文に西班牙の書生云々とあり）といふものゝよし。『花月緣』は劇のまゝで記述してあるが、『斷腸花』の方は小説めかしく書き換へられてある。梗概は『斷腸花』の方に讓るとして、こゝでは『花月緣』のまゝの序と目次だけ掲げる。

此物語は原題を西班牙の書生といひ歐洲に其名高き情史なり爰に採譯する編者の微意は其事の奇と其趣の新なるを以て看官諸君の永日の睡氣醒しに供へんとするのみならず兼ては女兒稚童の未海外の事情に通ぜざる者をして些少其風俗人情の如何を知らしめ開明進歩の一助にも供へまく欲しと思ふにありされば諸君編者の意の在る處を察し譯文の拙にして原文の玉に瑕くるを恕し通遍一讀を給はらば幸ひ何事か之に如ん左に全編に現出する人名を記して閲覽の便兼て記憶の用に供ふ

○比久止爾○比保利（共に阿留計羅大學校の書生）○羅々侯（西班牙國馬德里府の貴人）○鈍賀羅斯（羅々侯の朋友）○僧

正〇僧都（共に羅馬法皇の大臣）〇邊留津（志布士人の大名）〇馬郷春（若き志布士人）〇啓得、京列斯〇婁、亞蘭哥〇智斯琅（以上比久止爾の家臣）〇佛蘭哥（羅々侯の家臣）〇波羅多（馬德里府より密偵計畫へ赴る宗中若者の一人）〇毘列志（志布士人種の女舞姫）〇奴魯士（彼列志の婢）〇毘世利（貴女）〇摩留祥邦（彼得・京列斯の朝）以上

だがそのうち第一編 羅々侯邸内の場、第二編 馬德里街の場、第三編 彼烈志閣房の場、都合六回で中絶してゐる。

ロシヤ物が一つ。

『**花心蝶思錄**』。「露國奇聞・花心蝶思錄」はロシヤ小說飜譯紹介の最初か。原作者プーシキンと斷つてゐるが、プーシキンの有名な『士官の娘』の抄譯である。譯者は高須治助氏（『露和字彙』の著あり）、明白に原語譯らしいのに何かの都合によるものか、出て來る人物の名を二三英語流のものに引直してある。此の小說は後十九年に『露國情史スミス・マリー之傳』と改題して出版されたが、一は片假名（十六年）、他は平假名（十九年）だけの相違で、文章挿繪皆同じ。畫工は芳年である。スミス・マリー之傳といつても、スミスとマリー之傳の意で、スミス・マリー一人の傳といふ意ではない。だが兎もかく明治初期飜譯珍書の一つであらう。『士官の娘』は此頃の譯もあること故、特に梗概を述べる必要もあるまい、文例だけを添へて置かう、——

此ヨリ幾タモナクシテスミスノ瘡痍漸ヤ癒ユミローノフノ家人皆ナスミスノ爲メニ病ヲ看ル殊ニマリーハ暫タモ他ノ枕席ヲ離レズ從容トシテスミスニ謂テ曰ク妾若シ君ノ妻タルヲ得バ何ノ幸福カ之レニ過ン而シテ獨リ妾ノ幸福而已ナラズ妾ノ双親モ亦タ大ニ悅バン然ドモ謂フ熟考セヨ君ノ父母遠地ニ在リ其ノ意未ダ知ル可ラズ唯

獨リ之ヲ奈何ンセン スミス 是ニ於テ獨リ思ヒラク阿母ノ性ハ温柔慈仁ナリト雖トモ乃爺ノ性ハ少ク倨傲剛愎ニシテ恐クハマリーノ我ヲ愛戀スル此ニ至ルヲ信ズゼト唯ダ其レ之ヲ憂ヒテ竊カニ其ノ意ヲマリーニ告ゲ遂ニ意ヲ決シテ一尺素ヲ認メ勉テ文辭ヲ婉曲ニ綴リ以テ乃爺ヲ感ゼシメント欲シ書了テ之ヲマリーニ示ス マリー大ニ感激シテ曰ク之ヲ與ヘバ乃爺必ズ感動シテ我ガ請ヒヲ聽容セン若復タ憂フ勿レト

『維氏美學』（中江兆民、野村泰亨共譯）の紹介が明治文學思想史上の重要事件となることはいふまでもないが、その違いことを詳しく論ずるのは、この篇の目的でもなく、又論ずれば、『維氏美學』一部だけでも立派に單獨の專門的研究が出來る程であるから、こゝではしない。たゞ飜譯文學研究といふ立場から見て、この書が現代フランス文藝を材料として論步を進めてゐる點が注目される。即ち現代フランス文學の知識が實に豐富に織り込まれてゐることである。この書は、この點だけからでも貴重すべきものであらう。出版當時は讀者も少なく、影響の見るべきものがないが、この書の出現は、實に二十年以後の森鷗外の文學批評の出現と相呼應するものといつてよく、『小說神髓』の著者の如きも、早くこの書に接したなら、その論旨を多少變更し、別の行方でもつと確固とした基礎を立てたであらう。維氏は即ちヴェロン氏、ユージェヌ・ヴェロン氏の『美學』(L' Esthétique)を先譯したものである。ヴェロンはティヌの思想をうけてこれを訂正する立場にある人、社會主義的な革新的情熱と理想をもつた人であつた。從つて『美學』の如きもアカデミイ派に對する新文藝の擁護が强く出てゐる。

八

明治十七年。『春鶯囀』本格政治小說。　關直彥氏譯の『政黨餘談・春鶯囀』四冊は、本格政治小說の出現として、裝釘內容と相俟つて十七年翻譯文學の最大收穫の一つであらう。此の譯書の原作は往々にしてビーコンズフィールド伯デスレーリの『ヴィヴィアン・グレイ』だと誤まられてゐたが、事實は同卿の『コーニングスビイ』である。原作の何ういふものかは、譯者が自序にかう述べてゐる、「卷中コニングスビイ（主人公）が他人の中に人となり、一たび大貴族の嗣と定り又其權を失ふて再び辛酸を嘗め終に擧げられて代議士となるに至るは恰も春鶯の幽谷より出でて喬木に移るの狀あり其唱ふる處の主義は大中不偏の正義にして文彩の嚶々たる中に黃鳥の睍睆たる流朗なるに等し即ち書名を春鶯囀と名く」云々。あらゆる點で此の頃の翻譯小說としては完璧に近いものゝ一つである。自序、著者の略傳、凡例等、遺憾なく原書の辯解として役立つ。挿繪は矢張り郁田良知であるが、此の小說に至つて稍程巧妙になつてゐる。『通俗花柳春話』や『春窓綺話』に對して一段の進步であらう。全冊四冊のうち第一卷は三月に、第四卷は九月に出版されてゐる。共に此の年中に終つてゐるのは此の小說の歡迎されたことを語つてゐる。因に、此の翻譯小說はデスレーリ物紹介の嚆矢であらうか。自序にあるやうに、原作は純然たる政治小說である。記者が時の風潮に迎合して漫りに政治小說めかしく改譯したのではない。文體は櫻痴一派の新聞小說調で、意譯ながらに一種新規の譯文體を成し、『繫思談』の前にあつては注意すべきものである。文例を引いてみよう。

第六十回（千思百考心を定めてコニングスビー
祖父侯の命を辭謝す

憐むべしコニングスビーは祖父侯が手詰の嚴命に進退共に不可にして我ながら身の措く方を知らず若し之に背かん歟目前の富貴は忽ち失ひて究迫浮浪の身と落魄ざるべからず若し其命に從はん歟自己が數年の間に貯はへ得たる政治の眞理を放擲して主義なき黨派の奴隷となり器具とならざるべからず剰へそが愛情さへ犠牲に供して抛たざるべからず如何はせんと思ひつゝも祖父侯の館を辭して一人馬に跨りて侯家の門を出でし時の心中の苦しさ辛さは凡そ罪なき人の心には想像にだも及ぶまじ、たとひ其身が富榮利達を失ふともエジスが恩愛の尙ほ存しなばコニングスビーが心を慰むる種ともなりぬべし又其愛情を失ふとも此方に富榮利達を得なば之れ亦少しく其心を慰むべしとは云へコニングスビーが現今の有樣此兩つながら共に失ひ果てなんとし愛を失ひ富を失ひ零落憂苦失望の一時に其身に降り掛りたる思あり。

この書に政治小說的分析を加へることは興味があるが、それは『政治小說研究』の方に讓つて今はしない。たゞこの書が、ブルジョア階級の擡頭、貴族とブルジョアの抗爭、最後に貴族とブルジョアが妥協して國政改良に邁進することを主眼としたものだ、とだけいつて置かう。

『自由太刀餘波鋭鋒』。坪内博士の『該撒奇談』、別名「自由太刀餘波鋭鋒」は普通には明治十六年とされてゐるが、これには疑問がある。此の譯の奥附には成る程「明治十六年十月三日版權免許、同年五月出版」となつてゐる。然し坪內博士の御言葉には、「十六年六月出版の契約をした」、卒業と略ぼ同時云々とある（大正十四年七月號『早稻田文學』）。六月に約束したものが五月に出版されるとは奇蹟である。更に面白いのは東洋學人小野梓氏の

序文に明治十七年春三月とある。十六年の五月に出版したものに十七年三月の序文が書けやうか。わたしは以上の理由によつて斷然「同年五月」は「十七年五月」の間違ひであると思ふ。これは斷言してよからう。

此の飜譯の原作がシェークスピヤの『ジュリアス・シイザー』であることは勿論、この譯者の譯文が明治初期飜譯文學界第一ともいふべき見事なものであることは、先輩諸氏が言ひ盡してゐる。『自由太刀[illegible]』の題目は矢張り當時の政治熱、自由民權熱を思はせる。譯者がこの頃改進黨の共鳴者であつたことも、一考されるべきであらう。渡邊脩亭の挿繪も雄勁で見事なものである。博士の附言にはかうある、——

全文意味の通じ易きを專要とし淨瑠璃にてすめ(原文のまゝ)易き所は之にしたがひ散文にして解し易き所は又之に從ふ蓋し原本の意を失はざらんを努むるのみ原來此の國の梨園子弟に與へて直ちに之を演戲させんとにはあらず具眼の人院本の規矩に戻れるを笑ふ勿れ原本の意は成るべく失はざらんを力むるといへども中には彼我思想の異なるまゝにいかやうにも譯し難き條なきにあらずそれらは譯者の意匠もてことさらに取捨し又は骨を換へたるもあり云々

これで所謂意味が逐字直譯ではなしに、それ迄に多少の潤飾を加へられたことが分かる。例を引くと、——

淹屯尼は悵然と死骸の傍に立寄りて淚の眼をしばたゝき(泣)若し諸君にして涕あらば今こそ涕を灑がれよ、各位には顯底亞公の、此外套を御ぞんじならん、思ひ出せ、顯底亞公が始めてこれを着用ありしは、時しも恰ど盛夏の夕べ、ネルバイ族を追討の其陣中のことなりしが、其日の戰我軍利ありて、ついに勁敵ネルバイを、難なく亡し給ひたる、其紀念とも見做すべき、此外套をば無殘にも○見られよこれぞ輕志喀酒が短劍をもて刺し

たる跡なり○これぞ卽ち加須加が嫉妬の劍の跡○又これなるは獅威差殿下が其子の如く愛し給ひし、あの舞妻多須が、不仁の刀に、情容赦も荒々しく突きたりける切口なり、彼に、舞妻多須が非道の刄を、一ゑぐりして拔取たるを諸共に殿下が總身の鮮血の、滾々として、流れいでし、跡著るしき此血痕、

『春窓綺話』(一名春江奇緣)。十七年一月刊『泰西活劇・春窓綺話』二冊は服部誠一の纂述といふ名になつてゐるが、これは實は高田早苗、坪內雄藏二氏の共譯にかゝり、スコットの『湖上の美人』を散文物語に譯したもの、十四年の條に一寸擧げて置いた。內大半は坪內氏の手に成り、漢譯の詩の一部は天野爲之氏の手を勞した。此の新進文學士三人をもつて猶ほ服部誠一の名で出版しなければならなかつたのだから、當時の服部氏の文學界に於ける勢力思ふべしだ。初め題して『春江奇緣』といつたのを、出版の際服部氏が今の名に改めたものであるといふ。服部氏は題目を改めたのみでなく敍事の順序を顚倒したり文章を改作したりして公にした。文體は漢文直譯體で初刊の『花柳春話』のそれに甚だ似てゐる。篇中の挿繪は正しく『通俗花柳春話』の畫工と同一人(郁田良知)の手に成る。服裝、景物、新の如く古の如く交へ、甚だ稚拙である。『湖上の美人』は此の後數種の譯があり誰も知つてゐる詩で珍らしくもないが、たゞ此の『春窓綺話』の方が甚だ少なく、又譯文が珍らしいので例を揭げてみよう、

「　第十一回　獨唱正義俺嘗艱難　一身陷虎窟却獲虎兒

斷岸石痩セテ激浪鞺鞳打ツガ如ク崩スガ如シ荒渚蘆枯レテ風聲淅瀝咽ブガ如ク悲ムガ如シ夜維レ幾點ゾ已ニ三

更ヲ過ギ山谷闃寂トシテ樹木モ亦眠ル恰モ是レマルコルムロック・カトリン湖ヲ渡ルノ時ナリマルコルムハ
ロデリックノ侮辱ニ遭ヒ憤然刄ヲ撫シテ之ニ向ヒ已ニ雌雄ヲ決セント欲セシガ恩人ドグラスノ爲メニ遮ヘラレ又
情人エレンノ爲メニ隔テラレ強ヒテ怒焔ヲ抑ヘナ黙然身ヲ起シ飽クマデロデリックヲ罵ツテ其家ヲ去リテアラシ
ベインノ舟ヲ艤シテ遁リ去ルヲモ省ミズ俄然身ヲ躍ラシテ碧波瀲灧タル湖水ニ投ジ一揮一沈波ヲ截リ流ヲ冒カ
シ方ニ纔カニ前岸ニ達スルヲ得タリ、

これで大體の調子が、如何に『花柳春話』にそつくりだかといふことが分かる。因にいふ、服部氏は『花柳春話』の校閲者でもあつた。

此の作の如きは、政治的意識とは何等緣がないものであるに係らず、服部氏はこれを一種自由民權の教科書ででもあるかの如き態度をとつてゐる。この序文によると、全く政治小說と見てよいやうに受けとれるのである。

フランス側で本格の政治小說ともいふべきは、『佛國革命修羅の衢』である。原作はヴィクトル・ユーゴーの『九十三年』で、坂崎紫瀾の譯演に成り、自由新聞に載つたものだが、恐らく纏つたユーゴー小說を紹介した最初であらう。原作は、勿論板垣が洋行の際持來した政治小說物の一つであらう。譯は丁度原本の第一部第四編第四の終るところまで行つて、中絕してゐる。これは所謂明治初期の豪傑譯とは違つて、逐字譯を文飾したまで、先づは佳い譯といふべきであらう。紫瀾が洋語の讀みがきさうなかつたといへば、原譯者は果して何人であらうか。此の頃の自由新聞には英佛語に通じた士が多勢ゐるから、分からない。

只見る千年の喬木蓋暗く生ひ茂り梢より洩る日影さへ蒼を映じて物凄く此は名に負ふ佛蘭西國革命歷史に紀念

あるラザミトレーの森林頽ろしも五月雨（さみだれ）の空晴れゆき露の珠なす下蔭の涼しさ謂ん方もなく小徑を鎖す草叢に燕紫躑紅こきまぜて今を盛りと咲き出しは萌黄の地絹に花形の縫箔したるが如くにていと美しき眺めなり斯るところにしづ〳〵と喇叭も吹かず旗を卷き共和政府の斥候隊此處に三人彼處に五人思ひ〳〵に進みつゝ前後左右に眼を配れば果せるかな向ふなる澤の邊りに今引拂ひし陣屋の跡と覺しくて云々

『佛蘭西太平記鮮血の花』十七年五月――七月自由燈に載つたもの、これに就いては譯者宮崎夢柳が記して曰く――

此の一編の小説は元と學士デューマ氏の著作に係る『メモリィ・オフ・フジシァン』と題せしものにて亡友百華園主人曩きに之れを譯し西の洋血潮の小暴風と題して自由新聞に揭げたりしが未だ業を卒へず空しく別世の人と爲りしは遺憾と云ふべし故に余は其の稿を續ぎ每號之れを本紙（自由燈）に載せんとす云々。

この書に政治的意識のもたしてあるのは勿論で、劈頭暴力革命の慘禍を說き、本書の譯述は此の害毒を明知せしめる爲めと斷つたり、聊か戒心する所があつて原書の儘に譯すと蛇足を添へたりしてゐる所は、眞實藥の効き過ぎを恐れたといふよりも、寧ろ厄除けの呪文と見て可い。それにしても一應『西洋血潮小暴風』を物語る必要があらう。

發端は一七七〇年モンネール山の廣墟に於ける鮮血革命黨の祕密會である。ジョセフ・バルサモーは始めてこれに加はつたがその智辯膽勇で會議の牛耳をとる。集まつた志士は各自の仕事を分擔して散會する。バルサモーはフランスの革命を分擔する。バルサモーはパリに向ふ途中大雷雨に遭ひ、落雷にうたれて氣絶する。そこを通り掛つた一青年ギルベルトがこれを助ける。ギルベルトは附近のパール・デュークのタベルネー男爵家の書生衆

下僕（實は乳母の孤兒）で本篇の主人公である。男爵の吝嗇と壓制に憤り、ルソー民約論の愛讀者で熱烈なる自由論者である。バルサモーは男爵を金で欺いて逗留して養生することを許される。或る日、思ひがけなく此の家の長男のヒリップが來て、皇太子妃として御入輿の途中にあるマリー・アントアネットがわが家に立ち寄ると注進する。男爵はその光榮に恐懼する。バルサモーはマリーに謁見し、妃の將來を繪に描いて占ふ。マリーはその恐しさに卒倒する。バルサモーは護衛の白刄銃口を逃れて身を匿す。マリーはタベルネー家に恩遇を與へ、男爵を供奉の列に、娘アンドレーを宮女に召し出す。支度金を與へて後から來れといつて先づ急いで去る。タベルネーは手落なく支度の上、費用の上からギルベルトに暇をやる。ギルベルトは豫々アンドレーに戀してゐたが、主家の一行が明日パリに去るといふ前夜アンドレーの寢室に入り魔睡劑で正體のない彼の女を犯す。主家の一行はかくとも知らずパリに上る。ギルベルトは數箇月の内は手當金や何かで生活してゐたが田舍に埋もれるに忍びずパリに上る。途中路銀を失ひ、暑氣と空腹と疲勞のために氣絶する。そこを通りかかつた一人の貴人が助けて馬車にのせる。

『鮮血の花』の物語はこれに直に續く。ギルベルトを助けた貴人はマリー・アントアネットの宮女で王黨員の一人なるシオンといふ女性である。ギルベルトを助けたのは、物の役に立つ若者と見て、王黨方に引き入れ、自由志士等のスパイに使はうとしたのである。それと知つてギルベルトは監禁された家を脫走する。パリに赴いてルソーの弟子になるつもりで走つたが、路に迷ひ、雷雨にあつて野宿する。翌朝ギルベルトが眼を覺して、出かけようとすると、程近い草原に身を横へて讀書を樂んでゐる一人物がある。初めはギルベルトがパリへの方角を聞

いても答へさへしなかつたが、やがて打ちとけてパリへ何の爲め行くかと問ふ、ギルベルトは、ルソーの弟子になつて學問修業し、自由擴張、壓制排斥に盡力したいといふ。その人は、ギルベルトを伴つてわが家に來、食客とする。主人の留守にギルベルトは一編の懺悔日記を見つける。天地間これ程壯快な文字がないと思ひ、やがて此の家の主人がルソーなのだらうと察する。主人が歸るときさう打ち明けて、改めて入門を乞ふ。ルソーも隔意なくその貧乏生活を共にすることを許す。ギルベルトは寫字生となつて生活を助ける。一日ギルベルトは町の酒場で鬱懐を慰めてゐると、明日マリー・アントアネットがシント・デニー（サン・ドニー）の尼僧院に參詣に來る由をきく。そこで急にアンドレーに會ひたくなつて明日又出かける。アンドレーに會ひはあつたがタベルネーに叱り懲され本意なく別れる。だが何うしても思ひきれず、歸途アンドレー父娘の馬車の跡をつけると、意外とも意外、自分のゐるルソーの家と背中合せの裏屋敷がタベルネー家なのである。これよりギルベルトは勉強に事よせて裏手の部屋に籠り、アンドレーの起居を窺ふ。ルソー夫妻は漸くギルベルトを探偵に非ずやと疑ふ。思ひ切つてギルベルトに告白させて、アンドレー一件を知り、安堵する。一方バルサモーは此の頃バスチイユ城の附近に姿を現はし要害を探りつゝ、祕かに大事を擧る機會を待つてゐる。（以下中絶か）

原書の儘に譯す等と言譯してゐるが、改竄增補、大筋をデュマの原作に借りてゐる外は創作に近い譯し振りなことは前々と同斷である。たゞ流石に百華園の文章に比較すると、大分穩かにぼかされてだけはゐる。

此の小說は單行されなかつただけに知る人は少ない。

『虛無黨實傳記鬼啾啾』これも此年十二月から十八年四月迄自由燈に載つたものである。これは『自由乃凱歌』と並んで

夢柳小說中の代表譯の如く有名になつてゐる。此の小說を著とするか譯とするかは異論があり、夢柳は自ら著と表してゐるが、寧體には意譯ともいふべきである。夢柳自ら此の小說の由來を述べていふ——

（前略）頃日偶々『地底の祕密』と題し、彼の全世界に向つて至大至强の感觸を與へ人々の注意を喚起したる魯國虛無黨の形情を記せし一書を得たり抑も此の書は一千八百八十二年即はち我が明治十五年の春三月英京倫敦に於て魯人ピレウロッフ氏の手記せしものなり（中略）其の說く所精確切實（中略）加ふるに該黨の領袖たる人々の詳傳をも掲げたる故一讀人をして身親ら魯國に至り虛無黨と相往來して其の事情を知悉するの思ひあらしむ（中略）感歎措く能はず直に全篇を譯出せんと欲す而して又心窃に憚るところあり果さず窃に稿中兩三人の事蹟を拔萃敷衍して且つ近日西字新聞の傳ふるところを參酌して此の一部の小說を作れり（下略）（自由燈、十七年十二月十日）

『地底の祕密』とあるのは、本文を讀んで明らかに『地底のロシヤ』のことだとわかる。レウロッフの手記とあるのは夢柳が序文の記者ラウロッフを著者と誤認したので、有名なステプニヤクの著たることはいふまでもない。八二年は英譯の出版された年である、夢柳は、又『鬼啾啾』より前に日本に紹介された虛無黨文献（田島象二『西國烈女傳』中ヴェラの項、精田東太郎『烈女之疑獄』、西河通徹『魯國虛無黨事情』、川島忠之助『虛無黨退治奇談』など）を悉く涉獵して作中に利用してゐる。その他夢柳自身の想像や創作も可成り多分に加はつてゐる。『地底のロシヤ』そのものに就いてさへ、勝手に剪裁綴合してゐる。著と署名したのはその爲めであらう。

挿話の長い割合に、本筋の物語は長くない。一八七八年の秋若い男女の虛無黨員が露都彼得堡で祕密內閣議員

警視總監メセンチェフ中將を暗殺する。これが發端である。兇漢は二人ともにネワ河に身を投じて逃れ去る。ここに虛無黨の歷史、主義、成因について長講があり、一原因としてヴェラ・サシュリッチの警視總監トレポフ狙擊事件を說き、さて男女刺客の成行に及んでゐる。男刺客はブラントネルといひ、女はソヒヤ・ペロウスキーといふ。ブラントネルは同志のリソップとその娘アレイに救はれる。アレイは思ふところがあり、リソップとブラントネルをわざと密告して入獄させる。これは獄中のクラポキン侯を脫出さすための苦肉の計である。クラポキン脫獄の計は見事成功したので、更にリソップとブラントネル救出の計畫が立てられる。これも成功して、二人は救出されるが、一寸油斷してゐるところを、隱家を警吏に包圍され辛うじて散々にのがれる。一人アレイは重傷を負ふて死ぬ。ソヒヤの方は氣絕して河水に漂つてゐたのを漁人に救はれ、モスコー附近の廢宅を隱家として同志と交通してゐる。こゝでソヒヤの傳が數回つゞく。夢柳はソヒヤが大に氣に入つてゐたらしく、筆力を盡して描出してゐる。此の隱家で黨員が討論した結果、全力を擧げて暴力運動を續けるに決し、先づ時の露帝アレキサンドル二世の暗殺を計る。所が九分通り成就したと思つてゐると、パリにゐるクラポキン侯から、足がついたから用心せよといふ飛札が來る。ソヒヤとリソップは父子に化けて國境邊の汽車でパリから來た祕密探偵を欺いて密書を奪ふ。だが遂に計畫が發見する。黨員は逃れて再擧を試みる。此の間宮廷に血染の諫告書を投げ込むなどの怪事がある。遂に一八八一年春の露帝暗殺の大變となる。ソヒヤその他が處刑されるが、虛無黨の勢は日に日に強くなつて來た。

各刑場に近接せし埋葬地は日々に穿たれ古杏舊艸を見ざるの光景慘憺たる情勢は人をして魂消ゑ膓斷ゆるの思

ひあらしむ或は云ふ夜陰風雨のときに當れば從來死刑に處せられたる百幾千の虚無黨の幽魂四方より飛び來りて聖彼得堡府の中にも最とも廣衢大路ネワ河の流れに沿ひ大帝彼得の騎馬像を安置したるところに聚り一團の燐火となつて熖々と燃ゆるかと思ふ間もなく散亂しいつくとなく滅ゆるや否や啾々たる哭聲あり遠く耳を穿つれば悲雁の長空に鳴くが如く孤猿の斷橋に叫ぶが如く忽ちにして擊筑變徵の聲を成し忽ちにして彈絲調鼓の響を起し愴然悽然聞くに忍びず良あつて又た燐火となり帝宮の上に至つて呵々と笑ふなど怪しきことのありしとかや云々

一寸、夢柳自身の想像や創作云々について二三例を擧げると、ソヒヤは美人で魅力と精力に富んでゐたことは夢柳の描く通りだが、大抵黑幕參謀で、表面へ出て將軍暗殺など荒仕事はしてゐない。ブラントネルとの戀仲云々も事實ではあるまい。又ブラントネルはソヒヤの相手役に撰ばれる程有力有能な人物ではなかつたらしい。此の小說中のブラントネルはオスシンスキーといふ天才的革命黨員の面影が大分加味されてゐる。特にこれが脫獄の條でよく分かる。又リソップの娘アレイといふのも夢柳が點綴した女性らしい。クラポキン（クロポトキン）の脫走についても、原本必ずしもリソップ、ブラントネル等の仕業とは明記してゐない。夢柳の想像に止まる。

以上によつて夢柳が敢て著と署名した理由の一般を推して知るべきであらう。

開花新聞所載、須藤南翠筆かと思はれる「秀才奇勳雪の下萠」はプルウハムなる青年土耳其志士が、苦心奮勵して遂に英國の後援で土耳其に立憲政治を起す物語であるから、政治的寓意のあつたことはいふまでもない。然しこれは飜譯ではなしに、或は種子のある案作らしいところもあるから、その心算で見なければならぬ。

これは必らずしも政治意識からではあるまいが、ジャンヌ・ダルクを稗史化したものが二種出てゐる。一は松村操の『女俠全傳科戸風』で、これは譯といふよりも著といふ方がよい、一は『回天偉蹟・佛國美談』、これの譯者栗屋關一とあるのは前の文部次官たる栗屋氏であらう。

これに似た稗史風のものに吾妻新誌に出た三木愛花の『露國水滸傳』がある、コサックの隊長エルマックのシベリア遠征のことを書いたもので、後に『名將佳人遠征奇緣』と改題して出版された。

尙ほ『開巻驚奇第二十世紀未來誌』(富田兼次郎酒巻邦助合譯)といふのが分册一册だけ出てゐるが、これは後に語る服部誠一の『世界進歩第二十世紀』と同じものであるからその際に語ることにして、こゝでは略す。

明治十七年の井上氏の譯書。 井上勤氏は此の年に四種の譯書を公にしてゐるので一括して紹介する。『獨逸奇書・狐の裁判』、『白露革命外傳・自由の征矢』、『六萬英里・海底紀行』、『英國太政大臣難船日記』これである。明治十六年から十七年へかけては井上氏の全盛時代ともいふべく、精力の旺なことは驚くべきものがある。

『狐の裁判』。 『狐の裁判』は、ドイツの大文豪ゲーテの原作で、原名を『ライネッケ・フックス』とよぶ、ライネッケといふ狐の義である。即ち中古時代の敍事詩『レイナード・ゼ・フォックス』をゲーテが換骨奪胎して當時の政治社會を諷刺したものであるといふ(以上山岸光宣博士の示教)。此の譯書は、明治十七年版權免許とまでは分つてゐて、出版されたか何うかは疑問だつたが後にそれが發見された。文章は渡邊義方の校正、別に銅版の挿繪が數葉入つてゐる。內容の大體をいへば、ライネッケといふ狐が餘りに奸惡害毒を逞くするので、多勢の禽獸がこれを獅子王に訴へる、その訴訟者側の代表はイゼグリムといふ狼である。獅子王は怒つて狐を召喚して糺

間する。然し狐は詭辯を弄して放免される。だが矢張り奸慮が止まないので再び拘へられ、一時獸類の權利剝奪とまでなるが、然し生來の狡智を無限に用ゐて再び三たび放免されつひに、原告たる獅との單身決鬪となる。これは中世時代の訴訟が裁判の正邪を決し難い場合に採つた方法である。かくて狐はなは狡智をもつて獅に打ち勝ち、獅子王の信任を得るといふ、卽も惡が善にかつ諷刺の面白い比喩譚である。"

『**自由の征矢**』。『自由の征矢』の原作者はジュール・ヴェルヌ、原作の名は『マーチン・ポス』（一八七六年）であるらしい。ペリュー革命の外傳と銘うつてゐる通り、舞臺はペリューのリマ市で、マーチンといふ青年インヂアン黨の壯士が、貴族黨の娘サラーと戀し合ひ、革命勃發の日此の貴族（ペガル侯）親娘を救はんとして味方のインヂアンのために悲慘の最後をとげるといふ筋である。再版の折、改題して『政治小説佳人の血涙』となつてゐる。新聞連載らしく抄譯で物語の脈絡の續かぬところもある。文章も平生の井上氏と大分調子が違ふ、得意のものではない。政治小説のつもりで紹介されたものたるはいふまでもない。

『**海底紀行**』。『六萬英里・海底紀行』（上下一册）これも原作者はジュール・ヴェルヌ、有名な『海底二萬リイグ』の譯である、これは抑々の名譯で、井上氏の譯としては『魯敏遜』に劣らぬものだと思ふ。體裁、井上氏の翻譯は他人の文飾を經ぬときの方が成績がよい。此の譯書なども、上條信次の『俄世夢物語』などと同じく、中村正直氏の『西國立志編』あたりから傳はつた文脈で、漢文口調と和文調を七分三分にまぜたもので、いはゆる周書文體の先驅の一つであらう。插畫は原書のをそのまゝ西洋木版にしたらしく、面白いものがある。

天ノ原コメシ濃霧ヲ沙風ニ吹キ掃ハセテ差シ昇ル朝日ノ光リイト目映ク海ノ面ヲ照ラシケレバ予ハ直ノ艙ヲヨ

ク見ルニ宛カモ船ノ甲板ニ似テ平面ノ形チヲ爲セリ今如何ナシケルニヤ水ノ表ニ浮ミシ部分次第次第ニ減ジツツ沈ミ果ナン有樣ナリ「ネッド・ランド」ハ此有樣ヲ打チ見ヤリ再三度足踏ミ鳴ラン「我儕ヲ捨テ、沈マントハ無情ト云フモ餘リアリ止マレヤツ」ト呼ハレバ恰カモ其ノ聲ノ通ゼシ如ク沈ミ掛リシ怪物ハ忽チ足ヲ留メツツ不測ト思フ間モアラズ内ニ當リテ何ヤラン鐵製器械ノ音響キ其ノ音次第ニ近寄ルヲ打チ聞ク折シモ側ヘナル鐵板下ヨリ刎ネ上ゲツ忽マチ一人顯ハレ出デ何ニヤラン呼ハリツ、再ビ内ニ隱レタリ餘リニ事ノ不測サニ三人共ニ顏見合セ默然トシテ言葉モアラズ折柄八人ノ大漢執レモ假面ヲ蒙ムリテ忽然トシテ顯ハレ出デモノヲモ云ハズ我レ等三人ヲ引キ捉ラヘ怪シキ機關ノ其ノ內ヘ伴ナヒ行ケドモ拒ミモ得ズ三人共ニ唯々順々彼等ガ跡ニ從ガヒケル

此の年、井上氏の『海底紀行』の譯の外に、同じ原書を太平三次氏が譯し、『**五大洲海底旅行**』(四六版二册)と題して出版してゐる。これは文章は大に流暢に讀み易くしてあるが抄譯であり、挿繪の點でも井上氏の本の敵ではない。然し普通『海底旅行』の飜譯といへば、この方のみ云々されて、井上氏の『紀行』の方は餘り知られてゐない。

『**英國太政大臣難船日記**』。 この表題が頗る妙で、何か英國の總理大臣がシェークスピヤの『テムペスト』の中に見るやうな強い暴風雨にでも出會つた記事らしく思はれやうが、然しこれは、いはゞ太政大臣號といふ船の名だ、太政大臣號も可笑しいが、英譯で『The Chancellor』といふ。原作者は矢張りジュール・ヴェルヌだが、この小說は彼の作中でも頗る付きの悽慘な海洋冒險小說である。この時の井上氏の譯は分册二卷出てやんだが、

遙か後年大正時代に安藤勵城氏が全譯したものがある、一讀するに足るものである。

此の年飜譯紹介されたもので、特に私の發見と自負したいものに、シェークスピヤ物が二篇と小アレキサンドル・デュマの『椿姫』がある。

『歐洲奇聞 花月情話』は十七年二月岡山日報に掲げられたもの、譯者は菊亭香水、即ち有名な『世路日記』の著者佐藤藏太郎氏である。原作は『ロミオとジュリエット』であるが、『花月情話』はこれを譯したといふよりも、寧ろこれを敷衍して哀艶極りない一篇の小說にしようとしたものである。だが、永く續かず、僅に六回で中絕した。その六回には毎回當時の本格小說に倣つて漢詩風の標題がついてゐる。例へば第一回「風動花枝探月影・天開月鏡照花妖」、第六回「徘徊月下惡花落・徙倚花邊怕月斜」の如きものである。

此時夜ハ已更ケ初メテ聽多ノ賓客モ皆ナ殘リナク各々我家へ歸リシカバサシモ賑ヤカナリシ宵ノ景氣ニ引更ヘテ最ト寂莫トゾナリニケル靑李唉散ハ只ダ獨リ我ガ室内ノ孤燈ニ對シ寂ト物思ハシキ情態ナリシガ何思ヒケン衛ト窓ノ扉ヲ押シ排キツ外面ノ方ヲゾ打眺ムルニ折シモ雨催ヒノ天朦朧トシテ春月ヤヤ西ニ傾カントシ庭園ノ擧花雪ノ如ク白ク梟ノ鳴ク聲遠近ニゾ聞ヘケル倩需李唉散ハ此時マデモ宵ニ旅テル手袋ノ儘ナリシガ俄ニ「ア天打仰ギ

天帝御神ニ誠アラバ妾ガ心ヲ憐レミ給ヘ麗シキ人ハ怨ミアル門須其家ノ詩ヲ聞ク可キ一子ナリトハ何等ゾ祐ノ神ヨ情アラバ妾ガ願ヒヲ適ヘテ給ヘ崙謨ヲシテ今宵ノ我ガ御身ガ語リシ言ノ葉ニ許リ無ク眞實ニ妾ヲ憐レミ給ハバ妾ハ今ヨリ知炎列戸ノ家ハ固ヨリ萬年ノ命モサラナガラ情マヌカシ其等ノ事ニテ父母ノ白河ニ粗ヲ

セ給フトモ御身ガ爲メニハ千早振ル神ノ誓ヒニ背カマジ今一回ノ逢フ事ヲ妾ガ爲メニ得サシツル神聖モナヤ
ト打咳ツ聲聞ヘテヤ窓ノ下ニモ誰カハ人ノ潜ビ居テ又下ヨリモ聲ヲ揚ゲテ答フル次第ハ次號ヲ讀テ知ル可シ

（第五回ノ續キ）

聞くが如くば、菊亭香水は英語の智識はないといふ。このシェークスピヤ戲曲の內容は彼が昵近してゐた矢野龍溪の弟小栗貞雄氏から聞いたものであると。兎も角も明治初期沙翁文獻中の一珍たるは疑を容れない。

十六年に『春宵夜話』を揭げた郵便報知新聞は、この年十二月、九皐山吏の名で同じくラム物語のうち『シムベリン』を譯し、『花間の一夢』と題して紹介してゐる。この九皐山吏が藤田鳴鶴たるは明白であるが、これが鳴鶴であるといふと、前の翠嵐生(先生)も矢張り鳴鶴でなければならぬことになる。それは、九皐山吏は『花間の一夢』の序でかういつてゐるからである。

余往キニ攝斯比亞ノ稗史ヲ抄錄セル一書中ヨリ最モ邦人ノ耳目ニ入リ易キ小話ヲ譯出シ之ヲ春宵閑話ト題シテ本紙中ニ揭ゲ一ハ以テ泰西ノ稗史ニ存スル風味ヲ知ラシメ一ハ以テ余ガ文藻ヲ培養スルノ一助ニ供センコトヲ期シ三四種ヲ譯シ了レリ云々

『春宵閑話』(卽ち夜話の後名)の譯者が九皐山吏と同一人であれば、その人は藤田鳴鶴だといふことに結論される。さうすると『春宵夜話』の緖言に投書なるかの如き文辭を陳ねてあるのは、蓋し鳴鶴が戲れたもので、英雄欺人底のいたづらであらう。文章の調子は全く『春宵夜話』中のものと同じである。

爰に又王黨に生長して今茲十七に及びたる丈夫あり其名を保秦美と呼びなして文武の道に長けたるのみか心術

さへ優美にして何時貴人に相應しき品位に缺くる所なければ其名世上に隠れなし元文保斯常は國王志別林の爲めに自堕しき働きして戦死したるに母は悲みの中に保塞突を産落して間もなく卒去しかば世に便なき孤子なるを志別林は深く憐み王宮に養ひとりて文學技藝されへに良き師を擇みて教えさせ玉ひけりされば幼き時より以茂杢と立ち並びて生ひ立ちつゝ中睦ましく戯れ遊び互ひに隔つる心もなくいとし可愛の闘と闘思ひ思はれいつしかに結ぶ縁の糸すゝき穂に出るまでになりたるを當初は知るものなかりしが間なく遂に姫君の起居動作に目を注けし職様は早くもそれと覺りかねての目算外れしを深く恨みて胸にすへかね靜しかゝゝと國王に告げしかば固より短氣の志別林は烈火の如く憤り保塞突を召出して其罪を譴め並り永く騒利太を追放すべし疾くゝゝ此地を去るべしと厳しくおきてたまひけり

『椿姫』の飜譯に至つては、或はこれが明治で最初ではないかと思ふが、それは此の年七月函右日報に掲げられたもので『巴里情話 椿の俤』といふのである。譯者は碑館戸主人、當時函右日報の記者をしてゐた人であらうが、匿名ゆゑ何人か分からない。譯はフランス原文からの直接譯であるが、多少の省略は加へてあるらしい。蓋し所謂豪傑譯を普通とするこの頃では、先づ逐字譯に近い立派なものとして賞めていゝ。最初に序詞があり、椿姫の何者なるかを簡短に語つて、本文に入つてゐる。序詞には例によつて年少者の色情を戒むる勸懲の意を寓してあるのは、勿論であるが、フランス文學に對して多少知るところのある人でないと書けさうにもない。

巴黎一日の事なりけん佛國の神官亞歴山日瑪今日も例の如く書齋に在りてなき我の人を友としつゝ書を綴る文豪が選ふてふ文字など寫し綴りにければ稍倦眠たりけん散策せばやと宿を出て巴里の街衢を徘徊する只ある傍へを

見れば競賣の報條(ひきふだ)あり何心なく讀み下せば種々(くさぐ)の珍寶奇品數多(あまた)あるよしを附記(つけしる)し且つ其の場所を何邊(どこ)と見ればアントアン街九番地とありたれば此所より程遠くもあらず珍寶奇品なんどは元より好まねど多く在る物の內には又何とか操觚(ふでとり)の參考(ため)になるものもあらんヨシあらずとも一見せば見ざるに勝る事しあるべし然なり〳〵と獨り思案を決(さだ)めつゝ彼所を差して赴きけり云々

丁度アルマンとマルグリットが馴れ始めるところで譯筆が中絕してゐるが、これは惜しいものである。然し從來十八年の『黃昏日記』に椿姬の最初譯を見出してゐたのが、この『椿の俤』の發見で完全に破れたことになるから、これだけは私の手柄と誇つても可からう。

九

「繫思談」の出現と飜譯文學界の一轉機。「諷世嘲俗・繫思談」の初編の發刊されたのは明治十八年の十月であるが、此の譯書の出現とともに明治初期の飜譯文學界は更に一轉化の機に逢着した。さうして先に揭げた森田思軒居士の「藤田氏ノ『繫思談』ヲ譯スルニ及デ造句措辭別ニ一機軸ヲ出シ。或ハ艱奥ニシテ通ジ難キモノ無キニ非ズト雖モ。其ノ原本ヲ臨スル謹嚴精緻。今日無數ノ周密文體ハ其紀元ヲ此ニ遡求セザルヲ得ズ」といふ語で、此の一轉化の根本特質は道破されて居る。言ひ換へれば、私の言つた飜譯意識が、この譯書が出るに及んで、完全な意識的表現を得たといふことである。內容偏重の無意識時代から內容外形併重の意識時代に入つて來たといふことである。此の飜譯意識の完全な意識的表示といふ點で、『繫思談』は實に明治飜譯文學界でエポック・メー

キングな位置を與へていゝものである。この飜譯意識の進步が、時代の文學意識の進步を背景としてゐることはいふまでもない。

尤も前に（十六年『鐵烈奇談』の條下で）述べたところでも推察がつくと思ふが、此の小說を逐字譯の元祖と考へるのは間違つてゐる。何故ならば、これも繰返すやうであるが、明治十一年の川島氏譯『八十日間世界一周』などは立派な逐字譯である。いな純文學物でこそなけれ、それより數年早い中村正直譯の『西國立志編』の如きも逐字譯といつていへないことはない。若し逐字譯をもつて外形尊重の態度とみれば、外形尊重の態度なり又意識なりは早く明治十年以前からあつたのである（一時中絶したといへる）。又周密文體についても、これも大體逐字譯に伴つて生れた一種の文體と見ていゝから、矢張り逐字譯と共に『西國立志編』まで溯るのを穩當とする。即ち、換言すれば、周密文體は、中村正直に始まり、森田思軒に大成されたものである。『繫思談』の發明でも一手專賣でもない。此の點で思軒の言葉には說明がいるかも知れない。こゝは注意すべきところである。たゞ『繫思談』は此の外形（文章）尊重の態度を意識的に宣明し乃至中興して、無意識的態度から意識的態度に向はしめた。周密文體についても同樣である。從來は何も此の文體でなければ飜譯にならないなどといふ意味の事をいつたものがない。たゞ一つ『鐵烈奇談』があつていさゝか先驅をなした感があるが、これも甚だ消極的で結局先驅をなしたといふにとゞまる。ところが、『繫思談』に至つて、積極的にかうすべきが當然だと提唱することになつたのである。『繫思談』の重視さるべき價値はこゝにある。『繫思談』が一度公にされて以來、眞の飜譯はかくあるべしといふ一種の飜譯意識が定まつて、此の態度、此の文體が當分飜譯文學界の主潮となる。此の事は、これ以後も『繫

思談』と態度を異にする飜譯が澤山出るが、その時には大抵陰に陽に『繫思談』を標準にして、かうあるべきだが次善的方法としてかうしたと一々斷つてゐるところをみても分からう。此の功に於いては、『あひびき』と並んで明治飜譯文學中第一の功勳といつても可い。「其ノ紀元ヲ玆ニ遡求セザルヲ得ズ」といふ思軒の言葉も、かう廣義に解せば誠によく分かる。決して溢美の言ではない。

『繫思談』の譯者は、藤田鳴鶴、尾崎庸夫となつてゐるが、實は鳴鶴氏は文章の訂正ぐらゐで、尾崎氏も名義人だけ、眞の譯者は朝比奈知泉である。當時知泉は大學生であつたので他人の名をかりたのである。十八年一月から郵便報知新聞に掲載され、第二編に及んで掲載を中絶し、單行として出した。單行本は初中二編あるが(中篇は二十三年刊)、下編は見たことがない、多分未完で終つたものである。原本はロード・リットンの『ケネルム・チリングリイ』(彼の浮沈と持論)で、ケネルムの頭文字Kケイとチリングリィの頭文字Cシイをとつて、『繫思談』と選んだのだと斷つてゐる。署名者二人のうち、鳴鶴居士は誰でも知つてゐるが、尾崎氏は福井縣の人で郵便報知の社員だつた。知泉氏に至つては贅するまでもあるまい。別の意味で此の小說を重からしめるのは、書中挿入してあるフランス人ビゴオの挿繪で、これは全く見事なもので、事實賞玩に値する。

此の飜譯小說の例言にかうある、——

〔上略〕著者ノ意蓋シ專ラ英國社會實際生活ノ現狀ヲ描寫シ流俗ヲ嘲罵シ一世ヲ諷規スルニ在リ而シテ其最モ意ヲ用ヰタルハ代議制ノ弊ヲ矯ムルニ在ルナリ

これで原著の如何なる主旨のものかといふことが多少わかる。さて次に左の一項があるが、此の一項こそ吾等

の最も注意してよむべきところで、これが即ち譯者の飜譯意識を完全に宣明したものであり、貴重な文獻であるから全文抄出する。

稗史ハ文ノ美術ニ屬セルモノナルガ故ニ構案ト文辭ト相俟テ其妙ヲ見ルベキモノナルコト論ヲ待タザルニ世ノ譯家多クハ其構案ノミヲ取リテ之ヲ表發スルノ文辭ニ於テハ絶テ心ヲ用ヰルコトナク全ク原文ノ眞相ヲ失フモ肯テ顧ミザルハ東西言語文章ノ同ジカラザルニモ因ルベシト雖モ美術ノ文ヲ譯スルノ本意ヲ亡失セルコト之ヨリ甚シキハナシ譯者竊ニ茲ニ慨スルコトアリ相謀テ一種ノ譯文體ヲ創意シ話格ノ許サン限リハ努メテ原文ノ形貌面目ヲ存センコトヲ期シコレガ爲メニハ瑣末ニ渉レル邦文ノ法度ノ如キハ寧ロ文ヲ破ルモ肯テ顧ミル所ニ非ズ精緻ノ思想ヲ敍述スルニ方リ往々已ムベカラザルモノアレバナリ英賢カーライル氏ノ獨逸大家ギョーテ氏ノ書ヲ譯スルヤ殆ド其一字一句ヲ増損セズ譯文既ニ成テ精彩原文ニ減ズルコトナシ論者イヘルアリカーライル誠ニ善クギョーテヲ譯セリ但未ダ之ヲ英文ニスルコト能ハザルノミト抑我ノ英ト語脈ノ源流、體裁ノ程度固ヨリ甚ダ相懸殊セルコト英獨兩語ノ其本宗ヲ同フシ其進度ヲ均フスルガ如キニ非ズ故ニ原文ノ辭句ヲ増損セザルガ如キハ得テ能クスベキノコトニ非ズ而シテ之ヲ邦文ニスル能ハザルノ病ハ亦從テ多カラザルヲ得ズ譯者ガカーライル氏ノ心ヲ以テ心トナサンコト東施ノ顰ニ倣ヘルヨリモ猶甚シキハ其自認スル所ナリ然レドモ既ニ自ラ創意トイフ舊格ヲ以テ新體ヲ論ジ之ヲ邦文ニ非ズトイフモノアルモ固ヨリ其嘲ヲ甘受セントス

飜譯の根本態度の宣明として誠に堂々たるもので、今日でもこれ以上に加ふべきところを知らない。左にはその趾の書の所謂周密文體の見本を引用する

語未だ畢らざるにミス・サレーは笑ひを忍びつゝなにか言出でんとせしをミス・マーガレットは出過ぎすなとたしなめたり斯くて穉兒は乳母に抱かれて入來りしかば衆皆起つて其周邊に聚まり殘れる者は相續人の資格を失ひたるゴルドン一人のみなり。穉兒は冷眼人を瞰るともいふべき態にて親戚の人々を見廻したるにミス・シビルは第一に此兒の品格に就いて意見を下し

　如何なる天上愁人の顏色ぞ其神仙を離れたるを悲めるにや

と謹嚴なる音調にてさゝやきたり（第三回）

此の周密文は、歴史的にいつて、思軒の考へた如く、後世幾多の周密文體の元祖となつたといふ見地からはその功を認められるが、それ自身としては左まで成功したものではない。思軒の所謂「艱奥ニシテ通ジ難キ」ところが澤山出て來る。此の簡單な引用文だけでもそれが分かるであらう。こゝが後世の研究家から非難されるところで、「新しい酒が古い革袋に盛りきれなくなつて出來あがつた急場の鵺的なもの」、「バタ臭いコジレたもの」などときめつけられても、何とも、辯明することが出來ない。かゝる缺點は掘くればいろいろ出て來るが、一切を恕して以上述べて來たところにより『繫思談』の功績は大に認められて可い。

尚ほこの小說の譯者がこの小說を一種の政治小說と考へ代議制體の批評の心算で紹介したことは、前に引いた例言でも察しられるが、原作は必らずしもさうではない。『花柳春話』の原作たる『アーネスト・マルトラヴァース』と同じく、ゲーテの『ウィルヘルム・マイスタア』の影響を受けた遍歷小說の一種で、主人公の理想の探求が目的となつてゐる。

現實主義思想で教育されたケネルムは、父の言葉によつてその所謂現實主義に疑を挾み、單身家出して人生のあらゆる場面に遭遇して現實を知らうとする。然るにその所謂現實は實は人生の假を寫したものではなく單なる假面なることが次々と分かるので、ケネルムはこゝにその現實をすてゝ理想主義を尊ぶ英國傳統に歸ることになる。當時の日本人讀者にはやゝ掴み難い作品なので、簡單にその政治的な點だけを高調してこれを政治小說とよんだものであらう。

『慨世士傳』。同じ十八年に出た飜譯小說で重視すべきものに逍遙遊人坪内雄藏譯の『開卷悲憤・慨世士傳』がある。原本は矢張りロード・リットンの『リエンジイ』である。これも坪内先生のは初編だけで、下編は廣告に見えるが實際は先生の譯としては出なかつた。後に某氏(牛山鶴堂だともいふ)の譯で出たとも聞いてゐるが、結局出ずに終つたらしい。名家の末裔コーラ・リエンジイが、古文學研究から大志を發してローマ統一の大業を企て、一度は人民の助力で成功するが、遂に成功に慢じ民心を失つて失敗し悲慘の最後をとげるといふ正史上の事蹟を稗史化した才子佳人風の作である。リエンジイが人民の權力を主張する點が(方便的だが)この頃の政治熱と合つて、政治小說と見られた。譯者も亦幾分さう見せかけようとしてゐる。文體は當時先生得意の馬琴張りの七五調朗々誦すべく、内容は意譯であるが「力めて原文に意を注いだ」と斷つてゐる。第七齣の『女丈夫丈夫に逢ふ。深閨の窓の下』から一節引用する。

然程に郭以那嬢は。倭比屯離何の情譜をば。くりひろげつゝきしようつぴう。一向默誦なすものから眼は紙上にあらずして。夜氣に觸る紙鳶の。未立着する庭徑に。庭の隅のみ打見やる。向ひに一簡の古柳あり。尋枝り士

る月影の。しばし雲間に入るときは。星光水に映するありさま。幾千萬の螢火の。散りて亂るゝ風情あり。荒増りたる園生をば所得貌に蔓延せる。葡萄の蔓の長く垂たる。月に映じて其影の躍るもさすがに趣あり。夜はまだいたく更ねども四面靜にして萬籟死し。見渡す限り幽雅にして。いと麗き夜景色をば。めで眺るとも思はれぬ。那以那の姫は只管に、園の彼方に生茂る。木立に添ふたる塀へのみ。眼を注ぎつゝさながらに。人待貌なる折しもあれ。風なき園にさわ〳〵と。梢搖ぎて忽焉と。塀へ降立つ者あり。四下見廻し忍やかに。さし足なして那以那姫が書を讀居たる牖の下へ。歩寄りつゝ聲うちひそめ「首尾はいかにや那以那御寮。」といはれて此方は驚きあはて「我情人の來ませしぞや。喃々瑠志婭。」云々

此の『慨世士傳』の序言は此の譯書を公にするに至つた動機を述べたものであるが、その動機を論ずるところが日本の小說と西洋小說の比較となり、一篇の小說論を成してゐる。大意は、小說は人情を主とすべく、勸懲を主とすべからずといふにあつて、先生の著『小說神髓』の所說と大體同じである。勿論此の時には『小說神髓』の腹稿が熟してゐたことであらうが、たゞ世間に發表されたのは此の序文の方が先とされる。それだけに『小說神髓』を論ずる人には貴重な文獻となる筈だが、從來餘りこの序文を云々した人がない。特に注意して置く。

『羅馬沒落奇談 榮華の夢』 この年一月より二月にかけて繪入自由に出た未完もの、譯者は未詳であるが、宮崎夢柳の徒ではあるまいかと思ふ。原作はウィルキイ・コリンズの『アントナイナ、別名ローマ沒落』といふものである。

該西洋小說は英國ウイルキー、コリンス氏の原著に係り古代羅馬の旺を盛極めし有樣より遂に沒落せしまでの事實を婦女子童幼にも讀み易く解し易きやう小說體に綴りたるものにて主義目的を異にするため親子兄弟も骨

肉慾愛の至情を斷て公義の爲に戰かふあり或は才子の時に遇はず亦た佳人の薄命なるあり而して小説著述の尤も難しとする幾多の隱微を含蓄し脚色巧妙文詞艶麗實に西洋政治小説中の巨擘と謂へし云々

と序文にあるから、矢張り政治小説のつもりで譯述されたものである。然し折角の意氣込に似ず、眞の發端寸立消となつたので、梗概も語られない。ゴス人の酋長アラリックがローマ侵入の戰爭を背景としたもので、本書は歷史小説であるとだけ承知されたい。

『英國名士回天綺談』。坪陽加藤政之助纂譯とあるが如何にも英國歷史を抄出して綴り合せたやうなものである。英國第十三世紀、國王ジョンがランニミイドの原で貴族に迫られて大憲章を公にする件とその後日物語とを政治小説風にしたもので、全く『經國美談』の模倣といつて可い。然し脚色も文章も比較にならぬ拙劣なものであることだけはいつて置く。

『佛亂餘聞霜夜の月』。これは十七年『佐羅の衢』と同じくユーゴーの『九十三年』を譯したものである、譯者は何人であるか、紫瀾も夢柳も退社した後であるからこの二人でないことは明らかだ（自由燈）。政治的寓意を含めて譯されたのは勿論であらうが、これも亦、三十餘回掲載されたのみで、丁度ランテナック侯爵が幼兒の難儀を救ふところで中絶してゐる。或はユーゴー流の政治理想は、この頃としては少し高尚過ぎて大衆受けがしなかつたのかも知れない。文章も少々見本だけを引用する。

この光景にミョセルは且つ驚き且つ訝かり猶も櫓を左視右瞻一瞬もせである程に櫓の二階に開きたる窓の裏頭最と明るくて歷々見ゆる書架や椅子や机のその中に倏然目に附く三つの床揚かる騷動のあるとしも知るや

知らずや頑是なき三人の兒女はすや〳〵と夢穩に熟睡する寢顏は日來ミッセルが寢ても醒ても忘れ得ぬレニジヤン、グロサラン、ショーゲット夫れと見るよりミッセルは「噫眠かしや我子かと寄らんとすれど前は谷那方は高き樓櫓の二階二階は岸と相對ひ呼べば應ふる程なれど數丈の壁は峭立て登る梯子もあらされば見す〳〵我子を殺すかと心は空に氣は狂亂立たり居たり陵の岸往きつ戻りつ身をあせり翅もあらば飛び入りて救ひ出さん心根も能はぬ時の神だのみ「噫我神よ我子をば救はせ玉へ活けたまゝへ噫我神よ我子よと聲を限りに泣叫ぶ有恁し程に下層なる火焰は愈々熾にて早や天井も燒落ん氣勢なれば熟睡せし兒女も熱氣に目を覺し「己れは熱いとレニジヤンがいへば弟のグロサラン二歲に足らぬショーゲット廻らぬ舌に熱ひよと手を擧げて呼び合る中にも長せたレニジヤンは「噫母樣が眠かしや我等は熱さに耐へがたし此方に來ませ母樣と涙にうるむ目を瞻張り小さき雙手を差出して招く哀れさいぢらしさ母は身も世もあられぬ思ひ胸張り裂くるばかりなり

序に『薔薇の露』といふものも紹介して置く。これは小說めかしく書いたフランス虛無黨の青年首領ビゴーなる人物の傳記、文章の癖が何うも宮崎夢柳かと思はれる。矢張此の年七月自由燈に出たものである。

その他政治小說のつもりで書かれたものに『歐洲忠臣藏』があるが、これはスヱーデン王グスターフヴァサが王政中興の事歷で、眞の些かの歷史記事を引のばして小說風にしたものであるから、寧ろ譯者三木貞一の著といつた方がいゝかも知れない。

以上十八年の政治的飜譯小說を通覽して感ずることだが、數は相當多い割合に、何となく氣勢がなく、いさゝか衰徵の色が見える、これは一つはこの頃には漸く創作政治小說が盛んになつて來て、何でも彼でも手取早く譯

迷し政治小説にしてしまふといふ氣分が少なくなつたからでもあらうが、大體はこの一二年來の政治界不振、政治熱の下火、暴動の不人氣などのため、政治飜譯文學の方へもその煽りが來たものである。

政治的寓意のない文學物として、先づシェークスピヤを取り上げると、第一に擧げるべきものは、坪内先生の『甸國皇子 斑烈多物語』である。これは物語とはいつてゐるものゝ、ラムの物語から譯したのではない、原曲そのものゝ紹介である(中央學術雜誌)。尤も第一幕のみで中絶してゐるがその序の語によると、——

專門學校に於て學生諸子に英の「シェークスピヤ」翁の院本を講義せし際。戯に飜譯せしものに係り云々

とあるから、先生は十八年乃至それ以前に於て東京專門學校(今の早稻田大學の前身)でもシェークスピヤを講義してゐたわけである。從來研究家は高田早苗氏のシェークスピヤ講義のみ云々してゐるが、然し坪内先生もかく夙くからシェークスピヤに着手してゐたのだ。これは坪内先生の業績を論ずるとき見逃すべからざるものである。

飜譯の體裁は。總て拙譯該撒奇談(自由太刀餘波鋭鋒)におなじ

文章は院本に擬してはゐるが、院本といはんよりは小説に似てゐる。冒頭を文例に引く。

不善を顯明の中になせば。人得て之を誅し。不善を幽暗の中になせば。鬼得て之を戮すとかや。蒼天道の極なからん。隱れたるよりあらたまる。甸マルク國の新内裏。宮居の柱つぎかゐて。兄に代る當今の。御代萬歲とことほぎの。壁の中にもしかすがに。前の國王斑レットが。不慮の崩御をうちなげく。上下貴賤の民草の。葉末まだひぬ露しぐれ。晴間定めぬ秋の空。之れならなくに人の世は。去るもの日々に疎はしや。血統を分し現在の。前の國君の皇弟。狗ラッジャスに皇后が。夫がきれなる婚姻沙汰。其よしあしをいろ〳〵に囂を民の

ロのはも。靡くや今ぞ盛んなる新王君の時つ風。枝も鳴らさず波靜に。木艸も眠る眞夜中すぎ。委ルシノウアの城外の。非常を守る職掌柄。油斷あらしの音にさへ。聞耳たゝていかめしく。本丸まへに控へしは。げに一心の浮ランシスコウ。名詮自稱の番卒なり。云々。

こゝで番卒フランシスコウとバアナァドウとの出會ひとなり、漸く本文に入る。かういふ形式も、シェークスピヤ移入史上からは注意されて可い。

十六年の琴嵐生、十七年の九皐山吏（藤田鳴鶴）は、この年に又ラムによつて三篇のシェークスピヤ物を郵便報知新聞紙上に掲げた。その掲載された物語三篇は

○落花の夕暮（「ロミオとジユリエット」）四月―五月

○榮枯の夢（「マクベス」）七月

○雨後の月（「末よければ總てよし」）七月―八月

である。前の分も前々の分もさうであるが、譯文は當時としてはなかなか佳いものといふべきである。紹介の主旨は、十七年「花間の一夢」の序でわかるやうに（一）西洋小說の紹介（二）譯者の文學的試筆といふ二つである。

見本に『雨後の月』の一節を引かう。

少女邊列奈は兼てより辨杜蘭を深く愛慕し世にある限りの誠を傾け切なる思ひに沈みしも貴賤の差別は中を隔つる籬となり少女心に思ひけるやう辨杜蘭は佛國世家の貴紳にて侯爵を保てる身なるに其身は一士人の娘にて祖先は世に知られたる名家なりしも兩親は果敢なく暮らして早く世を去り其身は他人の保護にて人となりし賤

しき産れにあるものを所詮適はぬ戀なれば可憐可愛の御主人樣と思ひ做して唯婢女の分際を守るべしされば遍列奈の戀愛は高く中天に懸りたる明星を慕ふが如く餘りに距離の懸隔したれば迚も双方一處に集まり夫よ妻よと呼びかはす幸福は得られまじく思はれたり然るに戀といへる曲者に兎角得難く遂け難き戀を挑んで惱むものにて邊列奈は其頭上に輝きて遙かに隔たりし明星を思ひ染め切なる情を運びしも其身を恥ぢて彼の曲者(戀)をば抑制してありけるに今戀人の故郷を去りて都の空へと赴くを見るに附けても唯戀しさの骨まさり目には涙の雨を湛へ胸には愁の泉を開けり

『趣向は沙士比阿の肉一斤
文章は柳亭種彦の正本製』と長い角書をした『何樣彼樣鑑世中』が、朝日新聞に出たのは、この年四月である。全七幕を花莚七枚としやれてゐるのも、此の時代らしい。これはいふまでもないシェークスピヤの『ヴェニスの商人』の飜案であるが、なかなか上手に飜案してあるので、少しも原作の趣向が崩れてゐない。これは始め小宮山天香氏が考へついたのを、親友宇田川文海の乞ふまゝに讓つたものであるといふ。これが朝日に出ると殆ど同時に更に勝諺藏が脚色して大阪戎座で上演した。これが明治に於ける日本人による沙翁劇の最初であらう。(或は日本に於ける最初といつても可からう。これ以前の日本人による沙翁劇上演の嚆矢は、明確には判つてゐないからだ。)

飜案だけに人名は皆日本式にし、時代も徳川時代にしてある。ポーシャが中川玉栄、バッサーニオが青木庄太郎、アントニオが紀伊國屋傳次郎、シャイロックが桝屋五兵衛といふ如くである。その一節を引いて見よう。(第六齣東役所裁決の場　其二)

川島「傳次郎此證に其方が差入れたに相違ないか」傳次「毛頭相違ござりませぬ」川島「然らば何故約束の通り金子

を返濟いたさぬぞ　傳次「證文面の約束の如く昨日の七時迄に　川島「フンスリヤ金子を返濟したといふか　傳次「如何にも返濟しましたれども五兵衞は之れを受取らず強て抵當物の胸三寸を渡せといひ張りお上へのお手數　川島「五兵衞其方は傳次郎が約束の如く金子返濟するを何故受取らぬぞ　五兵「役人樣の仰せには御座りますれど約束に背きました故金子は請取ませぬ　傳次「アヽモシ五兵衞どのソリヤ何を何はツしやる私がお前の處へ金を持參したは昨日の朝證文に書のせた夕七ツ時よりは半日餘りも前の事　五兵「エヽ又しても其強辯豫ての對談は曉七ツ夫に晝前に金を持て來て約束に違はぬとは何の譫語　庄太「五兵衞どの何を謂るゝぞ約束の時間は夕七ツ　五兵「エヽ此方の知つた事ではないすつこんでおゐやれ私と傳次郎の約束は曉七ツ證文の面に夕とも曉とも書いて無いのが何より證據　傳次「成程證文の面には書て無れど互の約束は夕七ツ然し今更此場にて朝夕を爭ふも水掛論畢竟起りは金銀の貸借　庄太「元金に利息を添て返せば夫迄のこと　五兵「又しても靑木めが差出口此方には用は無いコレ傳次郎能く聞けよ其方は平生から俠氣ぢやとやら利口ぢやとやら長堀邊での評判な和郎ソレガ立派に判證文をしながら今更女々しい時刻の爭ひそんな卑怯未練な事を云ずに抵當に書入た胸三寸四の五の無しに渡すが好い。（下略）

尙ほシェークスピヤの作物の紹介が他に一二あるが、左までではと考へるから一々は擧げない。年表で覽られんことを望む。

英國物の古典ではその他にスコットがある。橫山鉾呂六譯『壽其德奇談』がある、原本は譯本の表紙に題した英文によつてスコットの『祖父物語』なることが知られる。一種の少年史譚めくもので純文學物ではないが、讀

んで極めて興味が多い。著者スコットがその故國スコットランドの古史談中マクベス、ブルータス等大英雄の事績を抄出して祖父が兒孫に物語る體にしたものである。譯は自由譯であり、多少の抄略があるらしい。十一月刊行である。

大陸文學物としては、古典として先づボッカチオの『デカメロン』中の一話が紹介されてゐる。九月朝野新聞所載「指環ノ裁判」がそれだ。これは『デカメロン』の第一日第三話で猶太人メルキゼデックが三つの指環の話をしてサラディンの設けた極めて危險な陷穽から遁れた話であるが、それをその三つの指環にだけ力を入れて紹介し、宗教的解説をしてゐる。紹介者の木葉天狗といふ事は勿論戲謔につけた名であらうが、宗教關係の人物らしいことは、その前置の文章でも分かる。

『〔歐洲情史〕玉蕃薇』は二十年刊行『美人の良』の原譯であり、吾妻新誌に出たもの、『美人の良』の方には譯者中村柳塢、三木愛花校閲となつてゐる。セルヴァンテスの『ドン・キホーテ』中の一挿話をフランス譯から重譯したものといふ、『美人の良』の原作者を佛國セルバント氏などといつてゐるのは、佛譯から譯した爲めであらう。なほ插繪その他は『美人の良』の條に讓る。

フランス物では、ユージェース・シューの『〔情態奇話〕人七癖』といふものがある。原名は Les sept péchés capitaux 卽ち「七大罪」、逆に「七癖」の義で、人七癖などといふ輕いものではない、これは古くから基督教でいふ語で、シューの造語ではない、人によくある吝嗇、肉欲、傲慢、羨望、貪欲、懶惰、憤怒の七つの道德上の罪惡を指すのであるが、シューはこの一不德を一篇づゝとして此の大部の小説を書いたものである。翻譯されたのはこのう

ち「吝嗇篇」といふので、それも中絶してゐる（分冊九册迄判明）。譯者は二愛亭花實、淡々亭如水二氏合譯となつてゐるが、奥附に飜譯人森澄德聰とのみ署名してある。花實、如水のうち何れが森澄か不明である。譯は大體原書を忠實に譯してゐるらしく、文章としても先づ佳の方であらう。

「吝嗇篇」だけについていへば、ルイ・リシャールの父は一種の吝嗇哲學から、財産一切を貯蓄して貧民の如き生活をし、眞向蓄積に心がける。さうしてルイにも吝嗇家の富家と婚せしめようとするが、ルイは貧民の女で工女をしてゐる少女マリエットと將來を約してあるので聞かない。父は代書人を業としてゐるので、マリエットがそれと知らずにルイへの手紙を賴みに來たのを幸ひ、種々離間策を講ずるがきかない。然るに父はルイに婚姻させる筈の富家の女を迎へに行つた途中、奇禍に遭つて死ぬ。それでルイは始めて父が大財産家であることを知り吝嗇の用を知る。だがともかく此の金でマリエットの養母の心を和げ、マリエットと無事結婚する。ところがルイの友人サンテッランといふのは又一種奇妙な浪費哲學をもつてゐる青年で、金錢財産は浪費した方が社會のためだといふので、盛に浪費する。浪費で養家を二軒つぶしてしまふ、然るに或る才女がその浪費振りを見込み、持參金で嫁に來る。サンテランはこれも浪費してしまはうとするが、ルイと相談して、二人ともその財産を貧民階級のために使ふといふ筋である。（死んだと思つた父が、最後に出て來るが、これは本筋に關係がない）。

シューは當時の社會主義者の思想的感化をうけたので、財産や經濟に對するさういふ考へ方をしてゐる。この篇なども其の思想が隨所に出てゐる。財を集めるのは社會の爲めでいゝが、集めたらこれをよく散じなくてはならぬといふ點に主張があるらしい。マリエットの女工生活の描寫はリアリズムで相當よく出來てゐる、然し譯者

はそこまで深く考へてやつたものか何うか、たゞ教訓小說的な考へから紹介したものであらう。

『拍案驚奇地底旅行』、三木愛花と高須墨浦(治助)と共譯である。同名のジュール・ヴェルヌの科學冒險小說である。ドイツの碩學アイセリがその叔父と共に、アイスランドのスネフェリスといふ噴火山の洞孔から地球の中心に下りて見學して來る物語である。勿論意譯であることは、その序文で知られる。

此の頃ヴェルヌ物はやゝ下火かの如き觀をみせるが、事實はさうでなく、今迄出版された飜譯は或は合本し、或は再版三版され、或は飜刻されたりして、相當出てはゐるのである。

『新編黃昏日記』。少デュマの『椿姬』の飜案であるが、筋は原作を追つてなかなか巧妙に飜案してゐる。ただ最後が戀人同志二人團圓して目出度しになるのだが、この邊に日本式の小說理想が出てゐて面白い。著者と署名してゐる醒々居士とは、小宮山天香(桂介)その人である。原譯者は何人であらうか、それが知りたい。

此の年東洋學藝雜誌(一月、四十號)へ醫學士森林太郎と署名して、ハウフの小說、大盜オルバサンの物語を七言古風の漢詩に譯したものを揭げてゐる。或は巨人鷗外が明治の飜譯文學壇に名乘り出た最初かとも思ふが何うであらうか。

一〇

明治十九年に入つて飜譯文學は俄然その數が數倍に殖える。而かもこれは今日知られてゐるだけでの計算だから、今日まで調査の屆かぬ新聞雜誌に出たものゝ分も考へると一層大變なことにならう。從つて語るスペース

できう無數の作品の紹介も出來かねるから、勢ひこれからは可成り撰擇的にならざるを得ない。又引用なども止むを得ないもの、重要なもの丶外は避けたいと思ふ。又今日いふ文學といふ概念に嵌まらないものは省いて言及しない。又純然たる飜案として移入され紹介者の著作と見なされてゐるものは、一々擧げないかも知れないからその邊お斷りして置く。

十九年度に何うしてかう澤山の譯物が出たか、これは一考に値する問題である。これを詳しく語つたら、これだけで一章にならうも知れぬが、今はその餘裕がないので、極て簡明に幾つかの理由を列擧するに止める。その理由の第一は文學意識の進歩と文學改良運動のためであらう。改良小説の手本として西洋小説がよく引合に出されたので、かういふ大流行を見たこと、それが一つ、第二は歐化主義全盛となつたので、何でも彼でも西洋小説を讀まなければならぬといふ要求が出で、その要求に應じたこと、これが二つ、第三は日本がこの頃ではや丶國際的に進出したので西洋列國との接近の度も以前より進んだものになつたので、各國の文學に接する機會が多くなつたといふこと、これが三つ、先づ大體の三つの理由からと見てよからう。

政治的寓意の勢力は、十九年に入つてもまだ相當强い。たゞ調子が變つて來た。これは十八年の條でもいつた通りで、過激主義破壞主義的空想を暗示したやうな政治的飜譯小説は甚だ少なくなつて、建設的秩序的な實際的な空氣を帶びたものが多くなつた。當時の政治界がフランス流の革命政治よりも英國流の國會政治に對して關心をもつて來たことが示されてゐる。もつとも、十九年の飜譯文學の總數が殖えた割合には、政治文學の方が殖えてゐない。この點も漸く時代の形勢を卜知するに足るものがあらう。

だが然しまだ矢張り第一に政治物を取り上げなくてはならぬ。

『三英雙美・政海之情波』。これはビコンスフヒールド卿ヂスレーリの晩年の作「エンヂミオン」の譯で、『春鶯囀』と共に本格の政治小說である。譯者は水戸の人渡邊治（時事新報記者）、明治初期に僅か以後の飜譯にして是程親切なものはない。卷頭に『人物案內』（作中の人物と實在人物との比較）があり、別に『人物傳』があり、解釋めいた『自叙』がある。此の書の反譯の態度については譯者自身『自叙』の中で次のやうにいつてゐる。

從來西書を譯する法二つあり。一は譯者が自身に筆を執り、原字原文に基て譯述を爲すもの。（中略）其二は講義にして。譯者が原文を說明折衷して。その文章は兎も角。唯意味の明瞭を旨として。他人が之を筆記したるを云ふなり。（中略）予が此書を譯するに當りては自身下筆の反譯法にも又他人筆記の講義法にも依らず。幸ひ二三年來世に行はれ初めたるシャルト・ハンド卽ち速記法なるものを利用し。速記學者市東謙吉君を傭ひ。予は原文の通りの意義を酌んでは平易にこれを日本語に譯し。市東君は側に在りて逐一余が言ふ儘に筆記し。一字一句予が脣口を發するの聲音は悉く其紙面に上るなり云々

生硬な逐語譯でもなく從前ある意譯でもなく、專ら素人に解し易いやうに譯したといふのである。此の態度が今一進化すると益田克德氏譯『夜と朝』となり、一轉して黑岩淚香流になる。第一回冒頭の一節を例に引かう。

折しも夏の夕なり甍瓦を燒す眞日中の炎威は消えて街燈點く夜風を迎ふる頃しもあれ。一紳士正服に上衣つけセントジェームス街頭の俱樂部館より出來り。其處なる坂の中段に至れる時。不圖一友に邂逅して言葉をかけ云々

此の作は著者ビコンズフヒールド卿の閲歴を經とし當時の佳人傑士の境涯を緯としそれに著者の政治理想を加へた規模雄大な政治小說である。『エンヂミオン』の原名は主人公のエンヂミオン・フェラーズ（ビ伯）から出る。譯文の『三英双美』とは、篇中の英傑フロレスタン公（ナポレオン三世）とフェロール伯（ビスマルク公）にエンヂミオンを加へて三英と呼び、ミラ・フェラーズ（ナポレオン三世の后ユージニイ）とベレンガリア・モントフォート（ビ伯夫人）の二佳人を双美と稱した所から出る。『政治小說研究』に讓つて細かしい分析は一切やめることにするが、エンヂミオン姉弟が苦心して家を與し、遂に姉はフランス皇后の位地に即き、弟は大英國の宰相となるといふ筋で、背景には當時の英國政治界の策謀駈引などが取り入れてあつて、政治小說としては極めて面白い。

『經世偉勳』は尾崎咢堂が、『エンヂミオン』の著者を主人公にした傳記文學だが、その書き振りからして一種の飜譯小說らしく思はせるものがある、一寸注意して置く。

『政治小說・梅蕾餘薰』。これは政治小說といふより寧ろ歷史小說と冠するのが妥當なのであるが、時好を迎へる意味でかう題したものであらう。原本はスコットの『アイヴァンホウ』で、譯者は鶴堂牛山良介氏である。牛山氏も明治初期の飜譯家中、可成りな功績を殘した人であるが、履歷の知れないのが惜しい。纂譯と斷つてあるから勿論全譯ではない。譯文の調子は明快流暢だが、跡部素山氏に補刪を賴んだといへば、文章の功は半ば跡部氏に歸すべきものであらうか。その又跡部氏のことも分からないまゝである。レベッカが、敵中に捕囚となつてゐる病臥のアイヴァンホウに窓越しに城壁外の戰況を物語る有名な場を文例にする（後編第三十回中）。

以汎波（オウアンホー）は此の騷動を聞き心ろ大るに勇氣を增し起出て勃惠宇布（ボエウフ）を切殺さんとまで思ひしが身體の利ぬに心焦激

涙浮べて令嘗可に向ひ(中略)御苦勞ながら令嘗可女史寄手の者に知られぬ樣今一度戰爭の模樣を知らせて給はるべし、とあるからに早速起て窓に至り樣子如何にと見てゐるや以汎渡は待兼て　且何を見られて居らるゝにや早く模樣を話されよ　令「マ待給へ雨と射る矢の激しさに寄手の樣子も知れざるなり　以「黒き纛を建てゐる武士は如何に働らきなし居るぞと問はるゝ儘に眸を凝し凡そ二十分間も見究居りて以汎渡に向ひ　令「黒き纛の武士は櫓の方を目的となし隊伍を揃えて進み來たり堤を崩して屯せり又物惠宇布も手の者率ゐ砦の門を出んづ有樣兩勢ともに弓を發し接戰なさんの企だてあるべし　オー物惠宇布は既に門を出で黒武士と戰ひ居れりアレ〳〵黒武士は馬を下たりヤレヤレ黒武士の刀折たりオー之は是は黒武士の勇氣なるアレアレ物惠宇布勢の者より棒を奪ひ取打　廻して戰ふ樣の勇ましや云々。

これに含まされた政治思想は、流石物が物だけに普通の民權思想はいかぬと思つたか、專制反對になつてゐる。序文などを見ても政治意識が明白である。

『亂咲自由之初花』。これには「査列の虐政、凱丁の義勇」と角書がしてあるから、英王チャールス一世と人民黨の名士ハムデン等との對抗、人民黨の勝利を描いたものたることはこれだけで明白であるが、原書が小説か又は歴史を小說風に記したものかは、一寸分からない。星亭の主宰した自由燈(從du明十七年)へ出たものであるが、伊藤痴遊氏の記憶によるとこの筆者は何うも齋藤緑雨であつたらしいといふ。政治小說としては氣の抜けた、熱のない、從つて政治的興奮を與へることの少ないものである。遂に完結せずに中絶した。

是より上下相隔り上は神權を張らんことを謀り下は自由の振はざるを歎じて寄り〳〵其議を凝らせし中にも註

國會の時に當り初めて議席に列なりたるバッキンガム州の下議員ジョン・ハムデンと云へるは當時齢ひ二十六歳血氣熾んの折柄なれば其身を自由の犧牲とし國家の爲に力を盡し彼のゼームス帝の開きたる第三國會の議場に出て一場の激論の下に其議案を破ると云ふ最と勇ましき物語りは次の回を見て知り給へ（第二回）

『維廉得自由の一箭』。 これはシルレルの『ウィルヘルム・テル』の譯で、譯者は中川霞城氏、譯されたのは十九年であるからこゝに入れておくが、實際發表されたのは、二十三年に創刊された『少年文武』といふ雜誌に掲載された。立派な逐字譯で勿論ドイツ原文から譯したものであるが、惜しいかな完結してゐない。十九年の日附で春のや主人及び河竹默阿彌の序がついてゐる上、譯者も自序で「此の譯本は嘗て山人が演劇改良の議論盛んなりし頃梓に上せ世に公にせんと」云々とあるに照して、題目の自由民權思想を反映してゐるに似ず、演劇改良の爲めに譯されたものだといふことがわかる。譯し振りはこの頃としては先づ上乘の方である。中川氏は總體ドイツ文學乃至文化の紹介者として明治初期に於いては記憶さるべき人である。

『世界進歩第二十世紀』。 これの初頭は明治十七年、酒卷・富田兩氏の譯で、分冊一冊だけ出てゐる。それは既記の通りである。この方は服部誠一譯となつてゐるが、服部氏は歐文が讀めない人であつたから誰かの飜譯したのに署名したゞけであらう。或は酒卷氏等の譯を買收して、それを訂正したものかも知れない。行文に實によく似たところがある。原著者はフランス人ア・ロビダー。これも始めは第一編だけのものと思はれてゐたが、私が嘗て傳通院前の古書肆で第二編を見つけ、ついで石川巖氏が上野圖書館藏本で續編を探し出したので三篇あることがわかつた。『開化進歩後世夢物語』の脈をひいた未來記だが、單なる未來記といふのではなく面白い政治小

說的結構をもつてゐる。こゝにも時代推移の影がみえる。それに『夢物語』では舞臺がロンドンだが、此の書ではパリである。物語の發端は一千九百五十二年から始まる。勿論未來記だけに荒唐な點もあるが、想像が奔放で文中には今日の世界を豫言してゐるところもある。飛行機の常用、テレヴィジョンの發明などはこれに當る。面白いのはヨーロッパが一國家と合すること、太平洋に新大陸の發見されることなどであるが、殊に眼を見張らせるのは、政治上の模擬革命の實行である。あまり同一政府の政治が長びくと人心が倦むといふので、十年毎に一度模擬革命をやつて人民總出で模擬革命戰爭をやり、日を定めて勝負をする。さうして勝つた黨派が次の十年間政治をするといふ趣向だ。これはフランス人の短氣を諷したのであるが、然し當時の日本などにも當るところがあつたかも知れぬ。然し總體この小說がかう三編を出す程流行したのは、かういふ政治的寓意からでなく、社會改良意識の反映で、つまり改良された未來社會を描いてみせたといふ點で紳士淑女に愛讀されて、種々社交界の談柄となつたものであらう。何れにしても、明治初期飜譯文學中の奇書である。

藤山廣忠氏は明治二十年にこれと同じ原書を譯して『社會進步・世界未來記』と題して出版した。

原作者アルベール・ロビダー（一八四八――一九二六）は元來畫家で有名であつたが、不思議に豐富な想像力の持主で、この種の幾多の物語を作つたといふ。

『西洋奧談・政治之曙』。幽川漁夫著となつてゐるが、表題にドイツ譯で『スペイン革命』といふ文字が入れてある。序文に一種の小說論がある點から見て著作と見る方がいゝかも知れない。然し飜譯ものらしい匂ひもするから一寸解題して置く。時代はスペイン、フェルヂナンド大帝の頃、時の宰相ベダルーといふものが、私利を

計り、マウレン人征伐に托して人民に重税を課す。ところが忠臣フロレンツ・グローブ（氏名はドイツ讀み也）といふものがペグルーに反對して、彼の姦を大帝に直奏せんとする。ペグルーは恐れ、グレドリーといふ腹心と計り刺客を放つが成功せぬ。それでグローブが大帝に內謁を求めるのは、大帝の御身に害を加へる逆意があるからだと誣ひ、グローブを捕へて追放の刑に處する。グローブは國境に往つて歸參の機をまつてゐたが、重病にかゝつて生命の程が危くなるので、子のグレゲリーに遺言してペグルーをうつて仇を報ぜよといつて病床で自盡する。これが第一卷の終りであるが、第一卷以後は中絕して出なかつたものらしい。

歐化主義の流行と共に、女子が社交界に進出して來た、その事實を反映するものに、『**泰西女丈夫朗蘭夫人傳**』（春の屋朧譯）、「**春鶯女史傳**」（仁田桂次郎譯、二十二年「しがらみ草紙」發表）などがある。前者はフランス革命で有名なマダム・ローラン傳、初めは多少の政治意識があつたらしいが、間もなく『交際之女王』と改題してゐる。後者は、マカウレイ卿の『マダム・ダルブレー』、卽ち英國十八世紀の閨秀作家で才女のファンニイ・バアニイの傳記をいさゝか實錄小說風な筆で譯したもの、「しがらみ草紙」に出た方は小金井きみ子と共譯となつてゐる。

以上とは別に、各國文學を國別に述べると、先づ英國ではシェークスピア物が壓倒的に多い。

『**露妙樹梨・春情浮世の夢**』。これは明治初期飜譯文學中稀書の一で、和歌山耕文舍の出版、譯者は河島敬藏氏瀧本誠一校とある。此の河島氏については明治十六年の條にいさゝか語つてある。序文に「坪內君のシーザル奇談の例に傚ひて」云々といつてゐるから、その飜譯の態度目標の如何なるものかゞわかる。河島氏にはこのころ實際數種シェークスピヤ物の飜譯があつたことが、此の書の緖言に「セキスピヤ氏ノ院本ヲ學ブニ當リ從テ讀

ハ從テ譯シ數種ノ劇ヲ替リ」云々とあるので分かる。此の書の插譜は何人の筆か知らぬが、簡朴で却つて興味がある。裝釘も氣持が可い。文例を引かう。

第二回第二齣（キャプレット館前の段
此齣はロミヨーがカプレットの館内に思ひ入りジュリーと密會して痴話問答をなす）

案内も知れぬ邸宅に紛れ忍びて行く程に何處を當とも知眞弓の聲に心を引く弓の二階の火影しきりにて近づくまゝに立止りロミ「ヤレ卿が傷は負ふたれど痛を覺ゆる程でもなし」と獨り語る其折柄二階の窓を推開て此方を見下す一人の美人ロミョーは之を眺めつゝロミ「彼方を望み視仰れば窓よりさしつるあの光これ東より出たる日輪か但しはジュリーは日輪か」云々。

『羅馬盛衰鑑』。小宮山天香氏と河島警林氏との共譯に成る。河島警林といふのは、『春情浮世の夢』の譯者たる河島敬藏氏の號である。十六年の『ジュリアス・シーザルの劇』を訂正して單行本としたもの、例言に「此文は必ずしも院本の文體に拘泥せず間々謠曲物語等の體をも併用ゐて譯出せり」とあるによつて此の書の譯文の調子の大體がわかる。毎齣の標題は概して原文通りだが間々違ふのもある。例へば第一回第三齣羅馬公會場とあるのを羅馬府公園の段などと改めてる。又毎齣の前に「一齣の蛇足」を加へてその齣の大意を說示してゐる外、頭註があつて彼の地の風俗その他を說明してゐる。他は全く嚴密に原本に從ひ、立派な逐字譯である。單に飜譯といふ點からせば、文章の美は及ばぬが、或は十七年の『自由太刀』に比して一段の進步といへる。たゞ此の書の挿繪が甚だ拙劣で、殊にシイザーが議事場で刺殺される所で、シイザーの額に頭髮を高々と生やしたり、草人

の服裝が十九世紀頃の歐洲大陸邊の服裝そのまゝであるなどは大に興を殺ぐ。

『西洋歌舞伎種本』。これはシェークスピヤ筋書第一冊とされて居り、奥附裏に第二冊から第六冊迄の刊行豫定が載つてゐるところから察すると、更に續刊するつもりであつたらう。或は續刊したかも知れない。たゞわたしの見たのは此の一冊だけに止まる。ラムの『物語』の中、リヤ王の項だけを拔いたもので、譯者竹内余所次郎氏の自譯自刊に成る。その譯述の態度動機は、凡例の一節に「譯者ハ此書ヲ反譯スルニ當リ成ル可キ丈原書ノ意味文勢ヲ變更セザランコトヲ務メタリ蓋シ原文ハ當時諸學校ノ學科課程ノ中ニモ入リ居ルコトナルユヘ殊ニ初學者ノ爲メニ便センコトヲ欲シテナリ」云々とあるので大概推察がつく。譯者竹内氏(石川縣の人)については、平民社關係者として比較的人が知つてゐる。且つ文藝的試筆はこれ以外ないといつてよい。

『セキスピヤ物語』。品田太吉譯。ラムの物語のうち『ハムレット』、『リヤ王』、『ベロナの二才子』、『マクベス』、『シンベリン』、『ヴェニスの商人』だけ收めてある。品田太吉氏は新潟縣の人、現存で、今では方面違ひの萬葉集の研究者として有名であるといふ。私が、大正十五年四月號の新小說に、明治飜譯文學のことを一寸書いた時には、この書はまだ珍本中の珍本であつた。ところが此の頃では大抵の古書展覽會で見かける、それだけ研究者の熱心が本尾を驅り立てたのである。

叢菊野史仁田桂次郎氏は伊豆仁田村の人、慶應義塾に學び、尾崎行雄、高橋義雄等の人々と同窓であつた。篤學で文筆の嗜みがあり、『人類成來論綱』、『哲學管見』等の著書があるが、肺を病んで早く歿した。この人が明治十七年偶然のことからラムの『シェークスピヤ物語』を讀み、その數篇を飜譯し、これに**『泰西奇談』**の名を附

したのであるが、此の年始めてその第一編に相當する『冬物語』『因果物語』合本が出版された。これが二十一年に亘つて、『女房持虎の巻』、『鼠の巻』、『智孟物語』と四冊まで發行されたのである。今その第一編だけについて語ると、卷頭には藤田信及び尾崎行雄の序がある。尾崎氏の序は最もシェークスピヤの愛讀者たりしことを示すものとして面白い文獻である。内容の『冬物語』はわかるが、『因果物語』は何かと思ふかも知れない。これは『メジュア・フォア・メジュア』である。而して序文によつて、同じシェークスピヤが、此等の翻譯者では、小說として賞讃されてゐることを注意したい。即ちシェークスピヤ物も十五六年頃は政治的寓意をもつてゐたが、此の頃に至つては、或は演劇改良のためといひ、或は小說の軌範と見る如く、主として文藝的態度なり觀點なりから採されるに至つたことは、これ又時代の文學意識の進歩を反映してゐるものといふべきであらう。

譯文の見本として

禍福門ナシ只ダ招ク所ナリ列王ハ其猜忌ヨリシテ其仇視セル保王ノ脱走セルヲ知リ怒リニ堪ヘズシテ乃チ邊后ノ室ニ至レリ恰モ此ノ時邊后ハ其太子麻密留斯ト共ニ室内ニ坐シ麻太子ハ其母君ヲ樂ムル爲メニ或ル愉快ナル談話ヲ語リ初メントセシニ思ヒキヤ列王邊后ノ室内ニ闖入シ邊后ノ手ヨリ麻太子ヲ奪ヒ邊后ヲバ直チニ獄ニ下セリ榮辱得喪ノ定メナキ昨日マデハ深窓ノ裏ニ春ヲ鎖シ金屋ノ内ニ粧ヲ凝シヽカルニ今日ハ慘酷ノ獄ニ下リ不貞ノ汚名ヲ被ムルニ至ルコソ無情ケレ（『冬物語』第一回）

『葉武列土倭錦繪』。本文には『日本の改良劇は英國の時代狂言』と角書があり、扉書には『劇場の改良案は英國の時代狂言・紙上の改良面は我國の時世狂言』といふ長らしい角書がついてゐるが、要するにシェークスピ

ヤの『ハムレット』の飜案である。署名者は筆硯童叟とのみあつて誰か分からぬことになつてゐるが、途中度々說明の書き入れがあり、それに記者假名垣魯文云々とあるから、この童叟が魯文の變名であることを知る。十九年十月から十一月へかけて東京繪入新聞に出たものである。これも恐らく存在は分かつてゐたらうが、今こゝで紹介されるのが紹介の始めであらう。序幕から大切までの梗概の完全な飜案で、人物、時代、場所などは全然日本風になつてゐる。例へば時代は南北朝前後で、ハムレット王亡靈は出羽山形の太守斯波修理太夫源の兼頼、夫人(ハムレットの母)芹戸の前、新王クラウヂァスは、斯波彈正忠兼壽、ハムレットは葉叢丸、ポローニァスは執事宮内主膳宗晴、レーアチィズは同苗禮之丞晴貞、オフェリアは、みかり屋姫、ホレーショは岩室主稅虎長といふ妙なものになつてゐる。見本を次に掲げる。

「入相のかねて設けの別間には葉むら丸が今宵の催ほし京都下りの俳優を聘へて所望む演劇の遊覽深き脚色の正本に作意を示す樂屋の祕事かくともいざやしら眞弓ひくにひかれぬ我子の請待芹戸の前はすゝまぬ本夫兼壽を促し立て宗晴はじめ近習のさぶらひ侍仕のこしもと數多引つれつゝ設けの席の高みくら假の棧敷に着座ある程もあらせずうちはやす鳴物しばし銀燭に輝き渡る錦の滿幕卷揚る正面舞臺の道具建斯波家最上の御所造り凉しき風も吹水の機關こまかき書割に庭の立木の葉をそよがし扮且俳優は大國の領主とおぼしき衣裳の飾り奥方諸共高二重の屋臺を徐々をり立たまひ(立役臺詞)日影を覆ふ館の內も九夏三伏の水無月はじめ取分てことしの激暑ひるのあつさを避むには此清凉園の庭中に月を灯の轉遊び奥も倶にと手を取りたまへば(女形)我君そゞろに端居したまひお風邪にても召たまふな(立役)イヤ苦しうない最前より奥殿にて數杯をすごせし酒氣の酩酊一

時に發し身中の熱し堪がたし此涼風は出羽一國に換る鵠物ハテ心地よやと木陰に腰かけ互に双方の手をひき双ぶ鴛鴦のふすともなしに睡まくら（下略）

これは第三幕中、劇中劇の場である、以て全體を徴することが出來る。なほ丁度此の本文の出たところに HAMLET-THE PLAY SCENE と題して木版の舞臺面西洋畫が挿繪になつてゐる。

英國物でジョンソン博士の「ラセラス」傳が一つ、『王子羅西拉斯傳記』。譯者丈山居士といふのは何人か知らない。當時既にこの書は教科書などに盛に用ゐられてゐたものらしく、その當て込みと見られるが、併し譯は相當精良なものである。これも一時は珍本の部に入れられてゐたが、今日では少々出て來るやうになつた。

轉じて大陸物になると、古典としては先づボッカチョの『デカメロン』を擧げなくてはならぬ。

『ボッカース翁十日物語・想夫戀』。ボッカチョの原書をア・サバチエー・ド・カストルが佛譯し、それを大分の人佐野尙氏が重譯し、更にこれを菊亭靜が校閲したもの、明治初期飜譯文學の珍書中の白眉であるとされてゐる。だがその珍なのは内容的價値ではない。その裝釘と挿繪にある。即ち和裝日本紙活版摺といふ體裁と佛人ビゴォの銅版畫が數葉入つてゐるためで、此の書のビゴォの繪が又素敵な出來である。内容は『デカメロン』の第五日の第七話（即ち明治十五年の『群芳綺話』の第五）で、テオドルといふ少年奴隸が、主家の女ヴイオランテと通じ、事露はれて處刑されんとする間際に身分が分つて却つて偕老の契を結ぶといふ話を譯したのである。否な單に譯したのではない、譯して出來得る限り敷衍して一部の小説に纏め上げたのである。これは校閲者菊亭靜の跋で分かる。曰く「本傳の如きは原文僅に二葉之を直譯するに至ては[illegible]として十餘枚を出す[illegible]に於いて[illegible]

余に請て曰希（ねがはく）は譯稾增補して以て吾國の人情に適合せしめよと（中略）此を以て主人を輔けて諸書を參觀し纂譯補述して此書をなす」云々。『想夫戀』の題は原話にあるのではない、「此舊書全篇の（中略）敍事の精神は少年少女に懸想して辛苦の中に其志節を全ふせし一段の艶話なり而して其事吾國のお染久松の狂言に類してやゝ高尚なるものなるが如し故に本書題するに『想夫戀』の三字を以てす是はこれ讀者の知る處の雅樂の名稱を假用せしものなり」云々と譯者佐野氏は斷つてゐる。譯文は調子が低くて稱するに足らないが、注意すべきは會話の中に口語調が入つて來たことである。これは從來の飜譯小說には見かけない現象である。譯者は別に意あつてした譯ではあるまいが、此の翌年二葉亭の『あひびき』の出たことを思へば何となく意味が深くも受取られる。

此の書の奧附に同じ『十日物語』のうちの『佛國女皇春遊傳』なる小說を近刊する由見えてゐる。譯者は同じ佐野尙、フランス譯の重譯、菊亭靜校閲、ビゴォの畫、皆此の書に同じである。廣告に曰く、

此書は有名なる佛國皇后が總理大臣に戀慕して內庭を紊するの記事に初り遂に總理大臣は乞食と成て英國に漂泊し千辛萬苦の間に其位置を復して榮名を歐洲全土に輝す事及女皇は却て位を去りて悲風慘月の間に沈みたる一種不可思議の幻像を寫出せしものにて云々

これで見れば何うも第二日の第八話ダンジェー伯の物語のことらしいが、果して刊行されたものか、未だに現物を目睹したといふ人がない。特に書名を擧げて疑問を存して置く。

フランス文學はロビダー以外新しいものがあまり見當らぬので淋しいやうに思はれるが、然しヴェルヌ物が凡て重版になつて居る、又その模倣じみた冒險小說風のものも出てゐるので、數量的には決して不足ではない、寧

ろ數量的にはシェークスピヤ物などを何倍も凌いでゐるやうに思はれる。それにしても、『鍛鐵場主』の紹介は、幾分ながら氣を吐くものであらう。

『鍛鐵場主』。詳しくは『修羅浮世・鍛鐵場主』といふ、加藤瓢乎譯、原著者はフランスの小說家ジョルジュ・オネーで、オネーの『生活戰場』と題する小說叢書の中の一篇であるといふ。讀賣新聞に連載されたものを後に單行本にしたもので異版がいろいろある。題名も『鍛鐵場の主人』などと變つたのがある。初版にはビゴオの銅版畫二三あり、芳年の挿繪などあつて見事なものである。譯者瓢乎氏とは後に小說家になつて傑作『寒潮陣』をかいた紫芳山人(美濃の人)である。鍛鐵場主デルブレイが意外の事から貴族の女クレイア・ド・ボーリューと婚したが、始めは如何に冷遇されたか、而かもその眞心によつて如何に彼女の心を獲るに至つたかを語つたもの。

此の書(初版)の奥附の廣告に二葉亭主人(冷々亭杏雨)の『虛無黨氣質』の出版のことが報知されてゐる。これは廣告のみで終つて現實されなかつただけに、この廣告は、二葉亭に此の譯書があつたことを證する材料として尊重すべきものである。

フランス物の新しい紹介が減つたに對して、ドイツ文學が少しく注意され始めて來た、これは日本とドイツが文筆に文化的に接近して來たことを意味するものに違ひない。

先づ紹介されてゐるのは、有名な『ニイベルンゲン・リイド』の一節、『美人薄命・歐羅巴紀兒權』(通俗學藝志林第二號以下)といふのがある。紹介者は喜蓮亭主人といふ、戲名たるは勿論である。勿論梗概紹介で、ジークフリードが美人さがしにウォルムス城へやつて來て、クリムヒルドに見染められるところで中略してゐる。

青年の春の齢晴やかに丈夫の勇氣新らしく鼎をあぐべき力あるニーデルランドのジークフリードは萊因の河の邊たるザンテンといふ地に生長し父の君はジークムント母の君はジケリンド少にして早や旣に偉丈夫の名いと高く偉大なる膂の力をば驗して見んと折々に諸國に遊び玉ひしが萊因の上流ウォルムスに美人あるよし聞より今又國を出んとて用意は旣に整ひぬ云々

次は『滑稽演劇・支那皇女虎姫』。これはシルレルの作として紹介されてゐる。然しこれはイタリー人ゴッツイの歌劇『トゥランドット』のドイツ譯たるに外ならぬものであり、從つてドイツ文學の條で紹介するのも如何かと思ふが、然しさうとして紹介してあるので、ともかくこゝに入れて置く（通俗學藝志林第五號）。紹介者は太郎冠者、第一齣北京城外の場で、カラフと舊家臣と支那皇女虎姫のうはさをしてゐるところでこれも中絶した。

『一讀千嘆・歐洲書生氣質』。これも珍らしい點では珍本の一つであらう。題號は勿論、體裁の木版半紙假とぢなところまで、春のや主人の『一讀三嘆當世書生氣質』の連冊を眞似たもので、序文にもその由書いてゐたと思ふ。原書はドイツの文人ウィルヘルム・シュレーデル著『スツデンテン・ウント・リュツオウェルン』とかいふものである云々。譯者は斷つてゐる。私は一度これを所藏者（大阪の人青山督太郎氏）から借りて讀んだことがあつたが、何か他の用事に紛れて覺書（ノート）もとらずに返還してしまつたので、今は梗概も忘れてしまつた。兎に角珍らしいものだから、他日何かの機會に、その詳しい紹介を試みたいと思つてゐる。譯者は寸木田人、村田某氏（文夫か）であつたと記憶してゐる。

ロシヤ物が一つ。

「泣花怨柳・北歐血戰餘塵」。明治十九年八月刊。これは珍らしくも、大文豪トルストイ伯の『戰爭と平和』の譯である。譯者は岡山縣の森體といふ人であるが、その來歴を詳にしない。此の飜譯の底本に用ゐたものが、ロシヤ原本ではなくて英譯かららしいのは、著者の呼名をトウストイなどと讀んでゐる點やその他から伺はれるが、然し表紙にはロシヤ文字で『戰爭と平和』と入れてあるので、何とも斷言し難い。大體は英譯によつたものであらう。第一卷とあつて、第六闋即ちガーネットの英譯で第一編の二十三章邊までしかない。續稿するつもりで果さなかつたものであらう。例言には、

是ノ繙務メテ原著ノ面目ヲ失ハザランコトヲ期ス故ニ結構間架ニ至リテハ敢テ彼此移易○左右擾亂セス但零々碎々太ダ冗漫ニ渉ルガ如キハ間二三刪削ニ附スル者アリ云々

と斷つてゐるから、抄譯たることが明白である。而かも二三の刪削程度のものではなく更に甚しいものである。それは邦譯の『戰爭と平和』と對照すればすぐわかる。朝雅號と署名した挿繪が數葉入つてゐる。畫工朝雅の何人たるかは、只今のところ、わたしには分からない。割合上手な繪組である。ピェール等が亂舞して巡査を熊に結びつけて河中に投げ込んでゐるところなど中々面白い。だが譯文の調子には些の新味がなく、種々工夫を凝して譯してあるらしいが、その工夫は皆舊體文章に巧く當てはめんがための工夫で、新機軸を出すための夫れではない、次に文例を引く、

第六闋〔天資の至愛高人志を風塵外に傲くし／兩也の多難壯士身を矢石間に擲んず〕

桃花流水杳然去。別有二天地一非二人間一。世を棄てし身の長閑さは、春の花秋の月心の儘に賞の樂し。何とて觀

ぬこともなく。實に逍遙遊の別天地。人間世の最快樂また上もなき清福なり。話出安獨象が父なる牟渾士奇はさしも時めける貴族なりしかど。先帝の御代に總督の官職を罷られたりしより。世を憂者と思ひ成し。己が領地ルイスイヤガルイに退隱せしが此地は莫斯科府より百五十里許も隔たりたる僻地なれば親戚も族も故舊き朋友も今は訪來る者も無ければ世の風塵を厭ふ身にはそれさへ中々心安く云々。

別に此の年譯述されたといふのではないが、たゞ此の年刊行された本で珍書が二つある。その一は『和蘭美政錄』これについては、大正十四年十一月號の中央公論で吉野作造博士が詳しく紹介してゐるからそれを參照されると可い。譯者は神田孝平氏、譯了は明治以前文久元年に成つたものだといふ。原は上下二卷でオランダの政治の美を實證する例話として譯出されたものらしいが、原書はいはゞ探偵實話集めくものである。上は『楊牙兒奇獄』內容はヨンゲルといふ書生の死にかゝる探偵譚である。後十何年かたつて成島柳北の『花月新誌』第二十三號(明治十年九月發行)から第三十六號迄連載され、此の年單行本に纏められたのである。此の譯書の由來を知るには卷頭にある柳北の序文が一番可い、それを揭げて置かう。

和蘭美政錄は神田孝平君が十餘年前に譯述されし奇書にして二件同一卷なりき。余之を借覽し、餘りに面白かりし故、君に請ひ、之を昭德公に見せ奉りしに、不幸にして柳營の災に罹り原稿は泯びたり。余深く惋惜したれども甲斐なかりしに、亡友安田次郎吉往年柳原の書舖にて其寫本(上卷楊牙兒の一件のみにて下卷は闕く)を購ひ得て珍藏せり。次郎吉の易簀前に藏書數卷を遺物として余に贈る、美政錄亦其中に在り。余其書の存する者此

一本に止り、且つ、其事の甚だ奇なるを以て之を謄し、普く五洲名勝志に代へて看官に示す。蓋し原書のまゝにては其文頗る長くして新誌に收むるに不便なれば、今稍之を刪り之を節約す看官幸に諒せよ　柳北拜識。

即ち現存の『楊牙兒奇獄』は神田孝平氏の原譯に柳北の手が大分入つてゐるものと見て可い。

下はその後發見されたもので『青騎兵一件』といふ、これについては『新青年』昭和六年四月號を參考されたい。『青騎兵』についてだけでなく、『美政錄』全體についての吉野作造先生の補足的說明もある。原書についての話もある。これは青騎兵一族に纏まる殺人嫌疑の探偵事件を說いたもので、事件として『楊牙兒』よりも複雜であり、面白くもある。後に二篇とも博文館『日本之法律』に複刻された（二十四年）。

珍本の今一つは、『伊曾保物語（いそほものがたり）』（大久保常吉編）で、これは初め十八年精入朝野に載つたものといふ。編者は大久保常吉となつてゐるが、本文初めの擔當者香雪散人は前田夏繁（健二郎）のことである。日下部鳴鶴の藏本を借りたものといふ。話數は約四十章ほどある。全章が雅文體で書かれてはゐるが、その詞がそれ程ひどく古いものとも考へられない。香雪は足利末期のものではあるまいかと考證してゐる。この書については別に新村博士の考證があつた筈、就いて見られるが可い。

最後に注意を惹いて置きたいのは、郵便報知新聞の『寄城論信・報知叢談』のことである。明治十九年矢野龍溪は森田思軒や小栗貞雄を從へて歸朝し、やがて報知新聞の改革を試み、そのプログラムの一つとしてかういふ欄題名の下に、面白い西洋小說を逐月紹介した。その紹介された小說は大抵ヴェルヌ流の大衆ものや當時西洋の新聞雜誌に出てゐる探偵文學などであるが、概して種子も精選され、譯し振りも上手の方であつた。紹介に筆を

とる豫定であつたのは、矢野氏を始め、小栗貞雄、森田思軒、藤田鳴鶴、尾崎咢堂、箕浦青洲、加藤城陽（政之助）、枝元虬岳（長辰）、芳川春濤（俊雄）、倉宮米華（篠介）、井上孤山（寛一）などであつたといふが、この連中が果して實際悉く筆をとつたか何うか、恐らく豫定きりのものもあつたらう。然し假に執つたとしても、紙面には皆別に假號戲號を署してあるから一々判別はつかない。たゞ後に單行したものなどに照して何が誰の譯筆といふことを推察するわけである。

今もいふ如く、これは幾十の小說の紹介であるが、その各々には一々連絡があるわけではない、たゞ『デカメロン』の體にならつて、『新坡通信』で一括してあるだけである。フランスの富豪ロイ・ミチェルといふ人が、奇事異聞を欲する餘り、シンガポールに一大旅舍を設け、旅客一人毎に宿料代りに一奇話を語らしめて樂む、これを矢野氏の友人英人ジョセフ・クラークが通信してよこしたといふ形式になつてゐる。いはゞ西洋の宇治大納言流といつても可い。物語の端をこの年十月開くのであるが、この年紹介された作物を擧げると、――

○志別士商人の物語　天峯居士譯

譯者天峯居士は矢野氏自身であるといふ。これの原話は何の書に出るか未詳であるが、一志別士商人が鄕人耶格(ヤコブ)思明(イシメ)のことを語つたもの。慈悲善根の靑年思明が一夜可汗の知遇を得る事、夢に可汗宮中に擔ぎ入れられて可汗の代理をする事、可汗から美人明珠を賜はつて妻とする事、貧乏した揚句、互ひに死人の眞似をして可汗と妃の双方から賜物を受ける滑稽などが述べられてゐる。（二十年刊行。）

○印度太子舍摩の物語　笠山樵客譯

印度某王國の太子たりし舍雕が亡國の民として奴隷に賣られるまでの奇談冒險を、舍雕が老年に及んで歸國の際に物語つたものとなつてゐる、これは實錄かも知れない。（二十年刊行。）

○忘々利譚　空々生譯

空々生は小栗貞雄氏、原作はル・サージュの『ジル・ブラス』の一章、致命の結婚といふあの恐ろしく奇拔な結物語である。後に村井弦齋はこれを種にして歷史小說『沖の小島』を作つた。（二十二年刊行、『色是空』と改題。）

二

二十年になつて紹介された飜譯文學の數は十九年度の分の更に倍數になる。正に飜譯文學全盛といつても可い感じがする。だがかく倍數倍數と殖ゑるにつれて、逆にこゝで語られる作品の數が減る道理であるから、二十年度の飜譯文學は更に十九年よりも大に減さなくてはならぬ割合となる。

かく夥しく一時に殖ゑたのは、總體的には前述の如く歐化主義の影響、社交界の繁昌のためであるとし、數の殖ゑた割合からいつて、政治小說めくもの、譯がめつきり少なくなつた。これは一つは、政治小說方面でもう創作の準備が出來た爲め飜譯のカムフラージュ的乃至應急的援助をさう必要としなくなつたからでもあるが、囂々たる政治熱そのものが衰へて社會改良熱に變つて來た爲めでもあり、又一つには十七八年來の文學的議論が此の年に於て目立つて飛躍して來た結果でもある。

だが飜譯着手の動機は、矢張り時代の改良熱に促がされて小說改良の參考書といふ意味から譯されたものが多

く、彼を取つて我を補ふといふ態度をなしてゐる。然しそれは主として描寫手法とかプロットとかいふ技術方面のことで、內容的には好奇心的な教訓的なものがまだ可成り殘存し、眞に文學的に、眞面目なものは僅に數ふる程しかない。然し無選擇混沌たるが如き中にも、次第に良い文學を取り上げて來てゐる傾向が見えるのは喜ぶべきである。文體は、周密文體が森田思軒の手によつて大成され、周密文及びそれに近いものが本格的な作品の飜譯に用ひられ、一方又、會話その他の點で口語文體の分子が漸く增加して來る。戲曲が戲曲として、從來混同されてゐた小說から獨立して紹介されるに至つたのも注目される。これは勿論演劇改良運動の勢力が及んだものである。

先づ政治小說と銘うつたもの、乃至政治的寓意をもつた作物を擧げると――

ビコンズフヰールド卿ヂスレーリ作『**ヴィヴィアン・グレイ**』の紹介があるが、これは雜誌「文學之花」に發端が出たのみで中絕したので、格別の注意を惹かなかつた。譯者は井上勤氏といふ。

『**政治小說・妻の嘆**』。同じ井上勤氏譯、原著はウィルキィ・コリンズの『夫と妻』であるが、此の譯はたゞその前半に止まつてゐる。譯書には政治小說と冠されてゐるが、それは此の場合、目的小說の意義に解してよく、原著第二十版の序に(譯文は井上氏)

此書一度世に出しより遂に議院の一問題となり(「ルッセル・ガーネイ」氏が與かりて力あるを謝す)婚嫁せる婦人が所有物(財產)の安全を謀るにつき大に議する作となり(中略)竟に議決して一個の法律となれり云々

とあるので婦人問題を扱つたものだといふことが分る。然し惜しいことには此の譯書は原著の前半だけに止まる

から、著者の目的は十分示されてはゐないか、讀んでは面白い。譯文の調子は井上氏の特色とした直譯的周密文體ではなく、地の文は當時の七五調がかりの新聞小說體、會話は口語體であるが、まだ生硬である。末段を引用する、——

早や武蘭朱は戶口に來り燕が名を呼ぶ聲の聞えければ燕は遽だしく亞農士の腕を把り耳に口寄せ「疾くお隱れなされ」と云ひつゝ亞農士を突き遣りつゝ手早く卓上に置きたる一對の蠟燭を吹消したり。

『ヴィヴィアン』を紹介した同じ雜誌にヴィクトル・ユーゴーの『イストワール・ドン・クリーム』を『名士盟雜・政界暴風』として紹介されてゐるが、これも首の一部分で終つたので矢張讀者の愛讀とまではいかぬ。譯者は匿名だが矢張り井上勤氏だといふ。尤も少し後に此の同じ原作が野田夢城氏によつて詳しく譯述されて『五日紀變・英雄之肝膽』といふ題で單行で出てゐる、上篇だけであるが、フランス語からの直接譯でなかなかいゝ譯文である。此の書はいふまでもなく、小說ではなく實錄である。ナポレオン三世が帝位に即くためにクーデター(一八五一年)を行つたその記錄であるが、然しその面白さは政治小說以上であるといつて可い。何しろ事實が事實である上に、文豪ユーゴーが亡命中に滿腔の憤慨をこめて書き上げたものだけに、讀者を興奮させることは、デュマ、リットンなどの所謂小說の比ではない。惜い哉、本が餘り多くないので知らぬ人が多い。此の書の出た年の末に明治のクーデターたる『保安條例』の出たことは一奇とすべきであらう。

『斷蓬奇緣』、これは前にも述べたが(十五年の處で)エルクマン・シャトリアンの作『マダーム・テレーズ』である。前譯を改竄して出版したもので和裝木版[illegible]畫を模した面白い繪が入つてゐる。此の方の文章は周密文體で

はないが、暢達な新聞體の文章で決して拮据生硬な讀み辛いものではない。その戰後荒涼の夜景や、烈婦事中の語を述る邊は覺えず誦するに足るものがある。大體の骨子は千七百九十二年代のフランス共和黨とドイツとの戰爭に材を取り、それに義人の醫伯ワグネルと烈婦テレーズを配し、間に共和主義の論旨を交へ、共和黨の意義を說いたものだが、千八百七十一年普佛戰爭の際本國人民の愛國心を喚起せんが爲めに著したものであると。全篇ワグネルの甥フリッチェルの物語の體となつてゐる。千七百九十二年プロシヤの西境アンスタットで普佛兩軍の交戰があつてフランス軍は敗退したが、此の時醫伯ワグネルは半死の女國士テレーズを救つて我家に連れ歸り、村人の猜疑の眼を顧みず回復せしめる。テレーズの感謝の念とワグネルの嘆美の情とは愛とかはる。やがて平和の日が二人の上に來やうとしたが端なく惡徒の密告によりテレーズはプロシヤ軍は捕はれんとする、ワグネルは危機一髮虎口を脫し、テレーズと共にフランス軍に投ずる。その中時運一轉してフランス軍の勝利となり、二人は故村に歸つて結婚し平和に暮す、これがその梗概である。婦人の愛國といふ點がやまである。

兎角シテ喫飯終リケレバ。余ハ指頭ヲ洗ハンガ爲メニ。厨房ノ方ヘ赴キタルニ。此時偶ト病室ノ一方ニ當リテ何カ頻リニ談話スルガ如キ聲ヲ認メタリ。耳ヲ欹テ偸聽スレバ。此ハ彼病婦ノ囈語ニゾアリケル。怪ミテ窃カニ其言フ由ヲ聽ケバ。一聲ハ高ク一聲ハ低ク。或ハ强ク或ハ弱ク。聲病斷續相交リテ發スレドモ。少シモ慥カムベキ連語トテハ成サズ。唯グ時トシテハ「我國。」又ハ「我父。」「我ガ嚢（ジャン）。」「殺サレタル、」「都デ殺サレタル、」ナド云フ數語ノミ。殊ニ際立チテ分明ニ聞ヘケリ。云々。

「葉里西（セウリス）物語」。これは、元來小說ではなく實傳記であるのを、譯者大石高德氏が小說風に譯して政治小說と

銘うつたものであるといふ。内容は出版者の廣告が要をつくしてゐる。

本書ハ佛國カロー女史ガ天眞ノ才筆ヲ借テ世有名ナル道德家「モゥーリス・ヘラギウ」ノ寡婦「マノン・メース」ノ仁惠ニ依テ人ト爲リ父ノ死後イゥストン街ニ遊ンデ時計ノ精工ナルニ感動シ此ニ意ヲ立テ巴里府ノ工師ニ隨ヒ職工ノ業ニ從事シ遂ニ富有ノ身トナリ次デ郡政ノ候補者ニ擧ラレ一世ノ勳功ヲ立タル顚末ヲ物テタレバ歐洲ニ於テモ已ニ世人ノ喝采ヲ博シタル實傳記ナリ云々

これに見れば普通の意味の政治小說ではなしに、ブルジョア的成功の讃美が第一の目的にあり、勤儉力行のブルジョア道德の鼓吹が第二の目的であるらしい。こゝに當時の新興日本の理想の反映されてゐるものがあらう。

同じ大石氏の手に成る『**泰西美聞・共和之色旗**』は政治小說と銘うつてゐる。此の飜譯小說は私にとつて未見のものであるので、果して出版されたものか、又出版されても發賣禁止等によつて流布されるに至らなかつたものか何うか、その邊は不明である。たゞ内容の如何なるものであるかは、同氏譯の『花情粹話』の廣告によつて知ることが出來る。

政治小說共和之色旗ハ千八百十五年ニ起リ千八百三十年ニ終ル彼ノ佛國革命ニ際シ名士民間ニ蹶出シ自由熱心家ノラヒット氏ヲ補翼シ帝政黨ヲシテ地中海ヘ水葬シシヤルル帝ヲシテ遠ク國外ニ追放ス其手段ノ愉快ナル實ニ文明國民ノ所爲ヲ通曉セシム而シテオルレアン公爵ルイ・ヒリップヲ立テ佛國ノ君主ト仰ギ純然タル共和政治ヲ組織スルヲ以テ本編ノ骨髓トス且名士輩ノ萬難ニ坐シテ敢テ志操ヲ變ゼザルト淑女父ヲ諫ムルモ容レラレズシテ死スルガ如キハ其皮膚トナルモノナリ云々。

佛國革命云々とは有名な大革命ではない。一八三〇年七月の巴里の革命のことである。

『字血句涙・回天之弦聲』。これは如何にも飜譯くさい臭ひのするものであるが、廣田束雄著となつてゐて譯とはないので、こゝで詳しくは述べない。内容はスウィス民權沿革の演義體小說である。勿論シルレルの『ヴィルヘルム・テル』その他を材料にしたものらしいことは、一見して明白である。

『政治小說・佳人之血涙』といふのは、十七年に出た『自由の征矢』の改題したもの。

八木半治の『他國侵略・露人氣質』。これも前に出たエルマックのシベリア征伐物語を小說化したもの、何等珍らしくはないが、たゞ他國侵略といふ點に露國に對する當時日本人の一種の氣持を表明したところが政治的といへばいへる。

『鐵血政略』全四卷は必ずしも小說ではないが、ビスマルクの傳記及び政策を中心に近代歐洲の形勢を詳しく說明したものとして、又日本の政府が疾にドイツ政治に傾倒してゐたが、今や民間にもドイツの勢力が及んで來た一證左として、刮目して見るべきものである。譯者は『政海之情波』の譯者渡邊治氏、同氏の言によつて本書の主意を見ようか。

(上略)編者嚮カコヽニ見ルアリ。乃チ歐洲最近ノ四十年ヲ割シ。其間邦家治亂盛衰ノ跡。國民隆替强弱ノ如何ヲ鑑ミ。併テ憲法政體ノ沿革ヲ敍シ題シテ鐵血政略ト曰ク。ソノ稱固ニ獨逸宰相比斯馬克ノ言ヨリ來ルト雖モ此書必スシモ比斯馬克一人ノ爲メニ。專ラ紀傳ヲ立テズ。仍テ別ニ題シテ。歐洲最近四十年政治史ト云フ。抑ミ故アリ。夫レ歐洲今日ノ形勢。强國互ニ雄ヲ張リテ。虎視驚眄。動モスレバ輙チ相搏タント欲ス。其執ル所

ノ外交主義、皆鐵血ノ本質ヲ帶ビザル無シ。獨リ比侯ノ此政略ヲ怪マザルナリ云々

彼の尾崎學堂の『經世偉勳』と相對映すべきものとして、政治小說ならぬ此の書も大に注目に値する。

以上にて知らるゝ如く、この年頃の政治物は以前のものと違ひ、單に自由民權の宣傳とか政府攻擊とかいふ單純なものではなく、目標とするところが複雜になつて來た。單に政治問題といふよりも寧ろ廣く社會問題といふ方により强く興味を惹かれるに至つてゐる。

以下文學作品の飜譯を紹介するが、第一に、前年から引續き連載されてゐる『喜披迪偕・報知叢話』について總括的に語ることにしたい。

此の年第一に紹介されたのは不語軒主人の『金驢譚』である。これは有名なアプレイアス（アフリカ、マドゥラの人、紀元二世紀頃）の『黃金の驢馬』を譯し」たものであるが、その抄譯大意ものたるは勿論で、彼の有名な「キューピッドとサイキ」はこの物語の中の一章となつてゐるのに、此の譯にはその片鱗も見えない。主人公リューシアスはテーサリーの首都ヒパタで或る女魔法使ひの家に泊り合したが、よくない好奇心を起した爲めに、自分が驢馬にされて、種々樣々な冒險をする。その數多い物語を集めたものである。これは芥川龍之介の愛讀書の一つであつたといふ。『デカメロン』の如きもこれに負ふところがあるらしく、同じ趣向の話もある。次に『英國士官の物語』、譯者未詳、一英國士官がロンドンで寶貝を盜つて惡漢の手に落ち、財物は愚か生命も危かつたのを、催眠術を應用して逃れるといふ話。

『佛曼二學士の譚』。ジュール・ヴェルヌ原著、紅芍主人譯、後「鐵世界」として單行された。此の書の原作について、思軒は單行本の序でかういつてゐる。

頃日吾友紅芍園主人ジュール・ヴェールヌ氏ノ「ヂ・ベガムス・フォルテュン」ヲ譯述シ題シテ鐵世界ト曰フ。余略ボ之ヲ删潤シ且ツ序シテ曰ク。此著蓋シ普佛ノ戰ノ後ニ成リ。其意大ニ佛國人ノ心ヲ快ニスルニ在リ。其曼國人ノ刻薄殘冷ノ風ヲ模スルニ至テハ殊ニ怨毒ノ深キヲ見ル云々。

譯文の體は周密文體に近いものであるが、飜譯としては逐字直譯ではない。凡例に「東洋に特種の思想文體を混入せざるを旨とし些意剪裁せる廉々もあれば單に譯と曰はず更らに述の字を加へて」云々とある。左に文例を掲げよう、——

頃は十一月の央(なかば)にて輕暖輕寒の好時節鍊鐵村の村門近く進み來る少年あり其樣子を如何にと見ればダク〳〵としていと寛(ゆる)やかなる上衣を一枚着たるほか下には唯だフランネルの襦袢を着けたるのみにして襟もなく襟飾もなく白シャツもなく頸の邊には一條の赤き手拭を卷きたるのみ足には粗き堅筋つきたる鼠天鵞絨のズボンを佩き身體の格恰には不釣合なる計りなる大なる靴の其底には繁く釘打ちたるを穿ちたり、問はでも知るき是れ一個の職人とぞ見えける旅びして來りし風には見え乍ら手には一個の行李さへ携へざるは既に客店(はたご)に着きし後歟此の少年は既に鍊鐵村の模樣をば善く聞知りたるがゆゑ村門通行の免狀をさへ所持したるものなりけん何の憚かる色もなく濶步(かつほ)に村門指して近づきたり

梗概をいふと、題名のベガムはインドの王公族の妻妾をいふ、フォルテュンとは勿論財産の義だが、インドの某

殃の未亡人が白人と結婚し多大な財産を遺して死ぬことから發端するのでかう呼んだものと見える。此の財産が相續者の死後久しく宙に迷つてゐたが遂に近親のフランス醫博士サラゼンとドイツ化學士ニヒトの手に兩分される。サラゼンはこの金で北米ロッキイ山の附近に不老長壽村をつくる。ニヒトはその反對に鐵世界といはれる錬鐵村をつくり、主義相反する長壽村を滅し、且つラテン系人種を世界から一掃してゼルマン人世界統一の理想を遂げようと種々秘密武器を考案する。然るにサラゼンの書生ともいふべきマックスは兼ねて職工に化けて錬鐵村に入つて秘密を探偵してゐたが、いよいよニヒトが流動炭酸瓦斯を填充した巨砲で長壽村を全滅させようとする段になつて、脫出してサラゼンに警告する。だがニヒトの巨砲は第一發が狙ひを損じて遙か遠方に逸れ、第二發の用意中偶然の手落から砲丸が爆發して自身その犧牲になる。原作ではマックスがサラゼンの一女と婚約で、その爲めに働くことになつてゐるが、翻譯の方はその點を省いてある。因に此の翻譯は、そのまゝ再譯されて「科學小說鐵世界」として刊行された（光緒二十九年六月）。

この小說は科學的愛國小說として押川春浪等の先驅をなしてゐる。標中新武器の發明談等には、當時として餘程注目させられるものがあつたといふ。

「天外異譚」。大塊生譯。ジュール・ヴェルヌの原作で『ヘクトール・セルヴァダック』といふ。これはとてもグロテスクな物語で、地球が彗星と衝突した結果、北アフリカ、アルゼリ近くの一部がもぎとられてその彗星の一部となつてしまふ。その彗星はそのまゝ一つの世界となる。だが地球の何分の一何十分の一といふ小さなものであるから、その世界では引力が三分の二に減じ、晝夜の長さが減じ（晝夜十二時間、晝も夜も各六時間）、方

角が全然狂つてしまふ、重量は輕くなる。さうした世界に不圖したことで地球の破片と共に連れて行かれた佛人露人、英人、西班牙人の生活を描き、約二年の後、再び彗星が地球と衝突したときに、一同が歸郷するまでを物語つてゐる。發端は戀の爲めの決鬪沙汰だが、物語の中頃では二人は怨を忘れて助け合ふ、而かも地球に歸つてみれば肝心の美人は既に第三者に嫁して子まで成してゐたといふ。彗星のこと、彗星と地球の衝突する可能のこと他の天體のことなどが、實に詳しく說れてゐる、科學的啓蒙小說としては、上乘のものであらう。

『貧福』。薔薇園主人譯。富は資本によるといふ論者と天運によるといふ論者が賭をし、第三者を使つてその論を實行させてみるが、遂に天運の方が勝つといふ話。場所はスペインのグラナダで、まだムーア人が同地を占領してゐたころのことだとしてある。原作は未詳。『煙波の裏』は矢張りジュール・ヴェルヌの『封鎖破り（The Blockade Runners)』である、譯者は獨醒子、何人か不明である。物語の筋は、北アメリカの南北戰爭の頃、グラスゴウの冒險商人が、北軍の封鎖を破つて、チャールストンに武器を輸入し、代りに棉を買つて巨利を博した話だが、これと、男裝してこの船に乘り込んだアメリカ美少女のために死刑と定まつた父を助け出してやる義俠の話が一緒になつて、短かいながら、面白いものになつてゐる。此の青年商人は巨利を轉じ、囚人を助け出した上に、立派な花嫁をも手に入れたといふのである。

『盲目使者』。羊角山人譯、ジュール・ヴェルヌ原著、原名を『ミシェル・ストロゴッフ』といふ。後『瞽使者』と改め、森田文藏譯として單行した。例言に、始め羊角山人が譯して報知新聞に掲げたものを改めて集編して思軒に文章を删潤してもらつたものであると斷つてゐるが、此の書の原譯者羊角山人とは何人か不明であり、

單行本の與附には譯者森田文藏とあるから、改修刪潤者の思軒をもつて單行本の譯者とみてよからう。此の飜譯の用意については原譯者羊角山人は例言にかういつてゐる、——

此書大抵皆な原本に照らし敢て私見を其間に交ゆることあらず是より先き書友紅芍園の鐵世界を譯述する肆意剪裁十之二三に居る我は則ち然らず然れども仍は譯述と稱して紅芍園の例に因るものは東西文章の相異なる時に到底相容れざるものあり我は寧ろ稍や西の文章に遠ざかるも東の文章に不通なる艱曲の語路をば用ゆることを避けしなり是れ餘儀なきに出でし事なれども此飜にせよ既に一に原本の面目に同じからざる虞あるからは單に譯と曰ふことを憚かればなり

嚴密にいへば「瞽使者」は思軒の飜譯文章の大成したものではない、從つて完成された周密文體の好模範とはいへない。これは恐らく他人の文章を刪潤した爲めであらうか。此の點を除外せば「瞽使者」は仲々の名譯であり、思軒の出世譯といつてもよからう。文例を引く、ストロゴッフ所刑(盲目の刑)の場である。

暫しは滿場聲もなく寂然たりしが韃靼將の旁へに立てる彼の士官は再び進みて韃靼將の肩に手を置き復た「汝の能く觀る間之を視よ」と繰返へしたる一聲は轉た慘然として耳底を震へり婦夫はコナタより之を見るに士官は此時既に彼の拔きたる大刀をば手にし居らずイヴヨに置けるやと眺めをはせは兩面紫の濃熱色を吞吐せる緩の烈炎の炭火の上に横はつて眞赤となつて燒け居たり

此時日は既に地平線下に沒し黄昏の色は茫然と遠くより掩ひ到りて一齒に園に襲り來りて立てる樹、すず、の群喬木は其影の次第〳〵に闇々と益す黑く濃くなりゆきつ帶に流るゝトムの水路方は既に見へわかぬ迄暗ら

くなりて唯だ眼下に淡(あは)く一帶の蒼白(あをじろ)き色を留めたるが漸々に黄昏と相混(あひこん)じて黯然となりゆくのみ

梗概をいへば、露國陸軍出身の不平兒革拳王忽烈(イーバンオーゴレツフ)はボカラのフェオハル汗を煽動して叛亂を起させシベリヤに侵入させる。露帝は當時シベリヤ總督としてイルクツクに駐屯してゐた皇弟の身を氣遣つて密使を急派する、密使の名はオムスク生れの彌圭兒(ミケール)・蘇朗笏(ストロゴツフ)といふ、別にイルクツクに配流の父を訪ふ那貞雨道(ナヂャフエドール)といふ少女があつて二人は途中の冒險に助けあふ。端なく蘇朗笏は王忽烈の手に囚はれるが、故郷オムスクを通るとき無心の母に出會つたが禍ひとなり、密使なることを見露はされ、密書を奪はれた上、熱刄で眼を拂つて盲目の刑を與へられる。僞使者の名はこゝから出てゐるのである。これに屈せず蘇朗笏は那貞の助けを得て、イルクツクに辿りつき、僞密使に變裝した王忽烈(オーゴレツフ)が皇弟太公を刺さんとする刹那、奮然王忽烈を手刄する。彼は盲目の刑を受けた當時母を思ふて流した涙の作用で視力を失はずにゐることが出來たのである。蘇朗笏と那貞の二人が何うなつたかは讀者の想像に任せよう。此の小說は先年前田曙山氏が飜案して『糸の亂れ』と題し、講談倶樂部に連載したことがあつたと記憶する。

因にいふ『報知叢談』を合收した單行本は『世界一大奇聞』(二十年)、『天外奇談』(二十年)、『才子寄合演說』(二十一年)、等がある。

此の年度は『報知叢談』はこれで終るので、次に普通の文學物に移り先づ古典から語らう。

古典もの。 此の年譯刊された古典ものとしては、シェークスピア、ボッカチョ、セルヴァンテス(セルバント)などがあるが、そのうちで英國物はシェークスピアの『西洋娘節用』と『誠の鏡』の二部の外に、新聞雜誌に散

見するものが二三種ある。

『仇結奇赤縄（あだむすぶふしぎのいろなは）西洋娘節用』といふ長々しい外題であるが、これは、たゞシェークスピアものと聞いたばかりで、一寸心得のある人ならもう『ロミオとジュリエット』だといふことが分からう。譯者は春煙小史木下新三郎氏（後赤司氏）佐賀縣の人。依田百川閲となつてゐる。これは勿論文章だけのことである。坪内博士の序がついてゐる。序中「知人春煙ぬし」云々とあれば多少面識のあつた人であらう。然しこれは博士の序中にもあるが、「其大要をば譯された」ものであつて、原本のまゝの譯ではなく、小說體の筋書である。「文章平易淺に過ぎず率に過ぎずいとよく原書の意を傳へたるに似たり」と博士は序中に賞讃してゐるが、大體その通りであらう。文例を引く、——

第五章〔佳人含愁慕阿郎〕〔富豪誇勢使聘媒〕

（前略）已に其夜も深ければ龍女男は儒麗亞邪の家に尋ね行き昨夜忍び入りし裏園より身を潛ませて庭傍に內の動靜を窺ふ處に彼方の窓を排きて此方此方と細聲に呼ぶは稍に儒麗亞邪見上ぐる男に見下ろす女見る目涙の初時雨互にはつと苦笑ひ二階に登るも待どふく手に手を取つて握りしめ逢ふて嬉しや戀しや云々

通篇かういふ馬琴張りの七五調が基調となつてゐる。

『哀別奇遇・賤之鏡』。シェークスピアの『ペリクリイズ』の譯である。譯者は「西洋娘節用」と同じく春煙小史であるが、此の時には赤司生となつてゐる。

序によると、「西洋娘節用」が歡迎されたので譯したといつてゐる、なほ此の譯書の利益として「一は西洋演劇の端を窺ひ隨て其風俗等を知り、一は高尙の快樂を生じ猥褻卑下の情思を去るを得べし」云々といつてゐる。「娘節用」と同じくこれもシェークスピヤの原曲から譯したものだが、矢張り大意を小說體に傳へたものである。

第三回

大風のあとなれば彼處此處を見んものと二三の貴人打揃ひ昨夜の風のこわさを語りつ濱邊の方にたゝずみて居たりしに一人の下奴がいと大いなる箱を持來りて這は是の濱邊にて拾ひとりたるものなりとて差出せば貴人は直に下奴に命じて箱を開かせけるにまだ蓋をとらざるうちより香氣紛々として鼻をつきいとも不思議に見ゆるにぞみる〳〵打寄りて改め見ればはなやかなる衣裳をまとひたる美人の亡骸にして香木珍寶をさへ添へてあり又一片の書紙ありて之を開き見るに

タイヤー王ペリクリスは　世界の價値にかへがたき后を失ひたることを　知らせん爲にものすなり。見當らん者は葬れよ　后は王の娘なり　其償は珍寶の　外にあらゆる神々の　惠を受ることぞある

以上の單行本の外に、シェークスピア物としては。——

禿山居士の「**嗹國皇太子ハムレットの譚**」(中央學術雜誌)がある。いふまでもなく「ハムレット」の梗概である。

『**カセリン婚姻奇話**』(敎育雜誌)といふのは、いはゆる『じやじや馬馴し』の梗概、これは原曲からでなく、ラムの物語の寫しである。

「**轉合笑話**」、『**妙緣奇遇・白金の指環**』。この二つは共に高知の土陽新聞に出たもの、前者は「間違ひの喜劇」、

後者は『シムベリン』を小說化したものである。前者は此の年二十回に及んで完結してゐるが、後者は翌年一月二十一回で完結してゐる。譯者は後者にのみ管城子と署名してゐるが、その誰なるかは知るよしもない。地方新聞にして珠勝なことである。文例を揭げよう。

話說すいつの年代かは確に知るよしあらねども希臘の連邦たりし時サイラキュース、エフヘサスと云へる二州は如何なる原因ありしにか互に不和を生じ來り雙方の人民各忌みそねみ久しく和睦する靜なく通商貿易は更にもいはず萬事不通のありさまにて終にエフサスにてはサイラキュースに對し殘酷なる法を設け若しサイラキュースの商人にしてエフサスの都府に入來り發見さるゝ事あらば「一千マーク」の償金を直に拂ふに非ざれば犯罪を以て處斷するとの堅き掟を定め居たり斯く軋轢の情狀なればサイラキュースの商人等もエフサスに來る者絕えて一人も有らざりして已に數年を經過せしが茲に一日二個の商人エフサスの都府に入來り其街道を彷徨ふうも何か怪しき處ありて邏卒の爲に捕へられサイラキュースの者ならんとの疑ひより嚴しく詰問せらるれしに彼の商人は始めこそいかで此場を遁れんとさまざま辯解したれども烈しき邏卒が糺問の責に今は堪え兼ね今は何をかお隱し申さん實は全く拙者こそサイラキュースの商人にてイーヂオンと云へる者云々（「靜岡新報」二の冒頭）

これには挿繪があるが態々今風にするよしで、風俗器物一切が現代歐洲風に描いてある。

茫々たる天地の間指を撲へて數へ來り圓を動かして算し來れば美人固多し才子數少からん美人は其偶を得ずして空しく薄命風雨の間に憔悴し才子は志望を達せずして徒らに轗軻多難の界に落魄す嗟々たる天意怜者亡せふる耶何ぞ夫れ斉しく不幸なるや又何ぞ獨り其不幸を共にして共に相逢ふの數を俱にせざるや若しく所謂天道は

偏に共滿つるを缺ぐ者耶江淵多少の傾國の色世間幾許の抜群の才能く薄命の區を脫して歡娯の域に相逢ふ者蓋し果して幾何ぞ玆に說出す物語は幾多の薄命の風雨を凌ぎ不思議に妙緣を結び得たる佳人才子の一奇遇今は昔羅馬帝國がオーガスタス、シーザーの配下に在りて共國名を普天の下に轟かしたる時現時はさして盛大なる英國も研かぬ璞の玉くしげまだ開けやらぬ有樣にて國名もブリテンと名けし時の事かとよ當時ブリテンの國王にシンベラインと云へる人ありけり云々（『白金の指環』(一)の冒頭）

これにも挿繪があつて、矢張り現代風になつてゐる。然かも此の頃の挿繪としては巧みな方であらう。本文も文飾が多きに失するが、兎も角も面白く讀ませるのは凡手ではない。

今一つ、『情天恨地しゝりい物語』と題し、集藝之世界といふのに載つてゐるものがある。架空道人譯といふが、此の架空道人の何人なるかは分からない。內容はシエークスピアの『冬物語』の梗概を傳へたものである。前の小栗氏の『志々利譚』と間違はれさうであるが、全く違ふものである。注意して置く。文例は略す。

同じ英國古典ではロビンソン物か一つ、『新譯魯敏遜漂流記』、牛山鶴堂譯、跡部素山校補とある。これは全譯ではなく一種の抄譯であり、又その譯文の點で井上勤氏の『漂流奇談』に比ぶべくもない。文例を略す。

ボッカチヨものでは、『デカメロン』から脫化した『鴛鴦奇觀』と『密夫之奇獄』の二篇がある。

『伊國情史・鴛鴦奇觀』は近藤東之助重譯、菊亭靜の校閲となつてゐるが、重譯の原本がカストルのフランス譯であることは、『想夫戀』の場合と同じである。たゞ表紙にも奧附にも、譯者を近藤東之助と著しながら、口繪と本文初めとには菊亭靜譯となつてゐる。何れが是か、或は當時の習慣か便宜から校閲者の菊亭を譯者と署名し

たものか。兎にかく眞面目な飜譯ではない。緒言を讀めば本書の如何なるものか推察がつかうから、緒言を引いて置く、——

一、本傳は伊太利國ボッカス翁の情史より抄譯せしものにしてポール女の情話と看く可きものなら原文僅に一葉にだも過ぎず余飜案修述して一篇の小説とはなしぬ

一、本傳中原文は憚る處ありて姓氏を録せず余讀者の便宜を圖りて悉く氏名を附しぬポール、パァブールの如き是也

一、本文只管文字を淺近にして婦人の愛讀を期する由書肆の依頼あるにより勉めて俗談平話を旨とし亦敢て文字の装飾を事とせず

内容は、一讀して分かる通り、原本では第三日目の第三話となつてゐるもので、美人が情を欺いて不義の仲介をさせた物語である（即ち明治十五年の『誹芳譚話』のうち第三の「師僧不圖爲情夫媒」に相當する、本書の外題も此の邊から出てゐることが明白であらう）。まさかに「一葉だにない」短かい物語ではないが、兎にかく簡短な話なのを、いろいろ尾鰭を添へ、引のばし得られるだけ引のばして一味の勸善懲惡的教訓を加へたものが本書なのである。嚴密にいへば、むしろ飜案の方に入るかも知れない。大體『想夫戀』と同じ手法だが、それでも『想夫戀』はその装幀と挿繪で珍重される價値があつたが、此の書に至つては内容がかくの如きものであり、文辭も論ずるに足らず、挿繪に至つては、畫工肖耕の筆力を別にせば、その全然現代式な服裝器物の點など、何等論ずべきものがない。而かも此の書は現に明治飜譯文學書中珍品の一とされてゐるが、それは一に數が少ない爲めである。

『泰西情譜・密夫之奇獄』。同じく菊亭靜譯、だが奥附に近藤東之助譯とある。此の書は手法文章とも『鶯鶯奇觀』に等しい。たゞ挿繪が石版畫であり、本文が五號（前は四號）活字であるなど些細な相違はある。内容は原本第三日の物語の第十話（『群芳綺話』では第五）で、醫師の妻の情人が誤つて麻醉劑を飲んで死人と誤まられた爲めに種々の喜劇が生じた物語である。此の書の由來はその緒言に詳しい。本文は引くに及ばぬが、緒言だけを引かう。此の緒言は『鶯鶯奇觀』を知るにも參考になる。何故なら此の方は出版されたのは後だが、譯は『鶯鶯奇觀』より早いからである。

余嚢者臥牛主人を補けて伊太利の碩學ボッカス翁著十日物語の中ビゥランド（ヴィオランテ）女の情話を抄譯補述して「想夫戀」と題せり其書出づるの後ち書肆某余が忍岡の書屋に來りボッカス翁の十日物語を出してサルレスの大醫夫人密夫に關するの情話を譯出し更らに補修して人情小説となさむ事を請る、余此頃本務忙はしくして筆硯を弄するの時間一日の間僅に三時間を出す此を以て讀者の意を滿す事はもとより期するを得ざれども前譯の因緣もだし難く諸の小説を參觀補修して此の一小册を編成しぬ

ボッカス翁の文章は男女の言語を眞寫するにあらずして俗に物語體の書様なり近世は小説の體も一變して言語のみを以て一編を組成せるもあり余は近代の體に據り成る可く俗耳に入りやすきを旨として此書を綴れり（下略）

本傳七分は「デカメロン」の脚色なれども記者聊か蛇足を畫きて吾國の婦女子に了解し易からん事を注意せり故に參譯とも稱すべく直譯にはあらず讀者幸に此意を了せらるべし」總じて此書の如き千三百年代の小説には

當今の人情に適合せざる者多し（中略）、法律習慣、人民の嗜好、男女の風俗等同じからざるを以てなり此を以て記者は多少の着色を加ふる事勢ひ已を得ざるの事情なるべし敢て好事の野にもあらじかし

本傳の挿繪は時代に應じて畫かしめたるにあらず余初め佛國史によりて下畫を草したれど書肆は專ら近代の畫樣を欲し衣服調度の事も近代のものを寫さんと請ふ是も亦書肆の便宜なれば其意に任せつ故に畫の體は千三百年代を寫せしものに非ずと知るべし

底本がカストルのフランス譯であることは勿論明記してある。挿繪は專ら近代にしたとあるが、事實は新古とりまぜの混合畫樣である。又末段裁判の一段の如きは全然他の小說から補入したものである。以上によつて、此の書の飜譯としての價値の如何程のものかゞ分からう。主意が勸善懲惡にあるはいふまでもない。

珍らしくスペインの文豪セルヴァンテスのものが三篇ある。

『歐洲新話・谷間之鶯』。三木愛花仙史閱、齋藤良恭譯とある。佛國セルベシト氏著とあるのでその底本としたものがフランス譯であつたことが知れる。原作の何であるかは愛花氏序文に、「西著爾爾生一書を挑へ來り、日く是れ西班牙の小說『ドンキーシヨット』中に錄するものにして」云々とあるから、『アレキホーダ』中の一挿話であることがわかる。未だ仔細に對校してみないから斷言は出來ないが、直譯文は逐字譯でないことは確かであらう。內容はスペイン富家の子ラドロフと美人レヲカジの奇緣を說いたものであるが、この人名も怪しい。不思議な事には、故あつてラドロフがイタリに流寓する餘モヲアドロフの見聞するイタリの事情が丁度現イタリ建國の際に當つて居り、サルヂニヤ王チャーレス・アルベルトとかジョーセフ・マッジニとかガリバルジなどが出る。

こゝに少し自由民權、國會願望臭がある。これは十六世紀のセルヴァンテスの小說には有り得ぬ筈の事である。フランス譯がさうなつてゐたものか、又は本書の譯者齋藤氏の加筆したところか、それとも校閲者三木氏の爲すところか、不明であるが、恐らく三木氏の加筆改删の結果、かく今めかしくしたものであらう。

『歐洲情史・美人の罠』。これの底本も勿論フランス譯であつたのであらう。矢張り原著者は佛國セルバント氏となつてゐるが、然し序文には『谷間之鶯』と同じ種本のよし記してあるから、矢張り『ドン・キホーテ』の一挿話であらう。これの原譯については前に少しく述べて置いた。

譯者は中村柳塢、愛花仙史の校閲は前と同じである。武官カンピュザノの一代記をカンピュザノ自身が友人の學士バルレーに物語ることが內容になつてゐる。『美人の罠』といふのは、カンピュザノがドナ・エステハニーといふ淫婦に欺かれて結婚する一條があるからである。型の如く、一美人の困苦、一義僕の實意がそれに配されてゐる。然し大體の調子が十九世紀頃の出來事らしく見え、セルヴァンテス時代とは受けとりかねる。故鄕の兩親から電報で息子に歸れといつて來たなどといふところがあるが、勿論十六世紀には電報などない。これも譯者が改作したところがあるか、此の場合書肆の註文といふことも刻目があるので、或は校閲者か譯者が多少の加筆をしたかも知れない。十日物語の內の諸篇の例もあることだから。

『鈍喜翁奇行傳』。これは正銘の『ドン・キホーテ』の譯として試みられたもので、教育雜誌に連載されただけで單行本はない。譯者は「ワ、シ」とのみ署名してゐるが、その誰かは勿論分からない。十回續いて(第五回の下)で終つてゐるが、それが丁度原作の第二十章あたりまでに相當してゐる。處々木版の挿繪で原書の洋畫を模

したのが入つてゐるが、稚拙で面白い。冒頭を見本に出して置く。

第一回　○純奇者の來歷○奇武勇試業の志を起す○義士冑を投げらる

今は昔し西班牙マンシャ村に一人の武士住みけるが常に槍構の類を備へ又乘馬一頭に獵犬一疋を飼ひ、衣食萬事質素にして年々幾分の收入を殘せり家には四十許の取締一人と廿許の姪一人と外に小僮一人あり、主人は年齡五十の上を超え容貌身體は瘦せたれども至て屈強にして早起きを好み殊に田獵の達人なりと聞えたり、主人の名をアロンザ・キ・シャナと云ふ好んで軍記を讀み深く武士の功名を慕ひしが遂に自ら遍歷武士に身をやつし世界を周ぐりて其勇を試みんと心を定め先づ用意の手初めに甲冑一具を取出して磨きにける、そも此甲冑は數代前の人が用ひて庫に藏めたるまゝ年數を經たることなれば虫食ひ黴生して痛く汚れたるを己れ自から手を盡して之を磨き上げしか此時兜の無きに心づきたれば更に板紙をもて巧みに兜を造り之を頭に戴くに眞物の如くに見えたり斯くて其粗造なる兜の强弱を試さんとて刀を拔て之を斬りしに一太刀めに破れしが再び紙片を入れて之を造り此度は自ら堅固なりと安心し別に試しもせず最上の兜と思へり、又その乘馬は皮と骨のみの瘦馬なれども逆上せる眼には世界第一等の駿馬と見えしかば之に美き名を附けんと四日の間心を苦しめたる末抑痢毛とぞ名づけゝる又八日の間苦心して其身の名をも撰び其地の名を取りてマンシャの純奇者と稱しけり

フランス物が一つ、ル・サージュの『ジル・ブラス』中の一挿話、『歐洲奇談・戀情花之嵐』といふのが出てゐる、これは、前年の條に述べた『志々利譚』、即ち『[illegible]』といふものと同じであるから、內容も別に述べない。別々なものであるかの如く傳はつてゐるから一寸附言して置く。

次に近代文學の紹介の方を大別して英(米)國物と大陸物とに分け、先づ英國物の方から備忘的に簡單に書いて行かう。

英國物

リットン卿の作品が二つ譯刊されてゐる、「ハロールド物語」に『連理談』これである。

『サクソン王の名殘・ハロールド物語』は有名な無腸道人磯野徳三郎氏の譯である。磯野氏はその『依緑軒漫錄』に此の小説のことを記してかういつてゐる。

最後のサクソン王ハロールドと題するは、歴史小説即ち稗史にして、當時サクソンイングランドに於けるノルマンの勢力を叙述し、ハロールド王の徳望もウヰルリヤム公の策略に當るに足らざる所以を寫し出せるものなり。ハロールドの未だ王位に登らざるや、英國に君臨したりしは、所謂僧王エドワルドにして、其資性の統御の才に乏きは勿論なれども、只管ノルマン人のみを愛し、朝廷の役人は更なり寺院の僧正僧都に至るまでも皆ノルマン人を任じたるを以つて、遂に質樸なるサクソン風は變じて、驕奢なるノルマン風に化し、衣服言語も亦舊態を失はんとするに至れり。之に加ふるに英人の獨己心の强き、身ありて國あるを知らず、利に集りて義に集らず、故に時當既にウァイタンと稱する國會様の公會ありしと雖も敵國外患に當るべき全國の統一を來たすこと能はず。慧眼なるウヰルリヤムは早くも其機を見て取り、陰謀詭計施さゞる所なし。さればハロールドは如何に智勇に富みたりとて、かく僧王の餘弊を受け人心澆季の中に立ち、いかで其大勢を挽回するを得ん、竟

にサキソンの王統と共に、ヘースチングスの露と消ゆるに至れり、リットンは善く此情勢を叙して、巧に興亡の跡を説き、往々慷慨の氣の筆端に溢るゝを見る。

『依緻軒漫録』のうちに引いてゐる文例の譯は所謂周密文體であるが、此の時の『ハロールド』は抄譯も抄譯、譯の梗概物語といつていゝ。序文を大和田建樹氏が新體詩で書いてゐるのは當時として珍らしい。

『文學小説・連理談』。表紙には服部誠一先生著述と署名してあるので、大體の人は見違ふが緒言を見ると、「此書の原書は英國にても最も有名なる小説家ヱールド・リットン氏の著作にしてユージョン・アラムと題したる」云々とあるので、『ユージン・アラム』の譯であることが分かる。服部氏は情文を解しなかつたといふから、或は他人の代譯に加筆したものではなからうか。何れにせよ、原書の前半だけよりなく、且つ意譯抄譯省譯を交へて編成したものであることはその緒言に「專ら其意を取りて我邦の小説體に綴りしがゆゑ文句に異同もあり、又增減せし處も少なからず」云々とあるのでも知れよう。此の書を紹介した主旨は緒言の中に見える次の數言で判明する。

人情風俗を知らんとするには小説に由るより外に捷徑はなかるべし此書は(中略)本國民間の事情を知るに足りなんか(中略)文學上の助けとなることも亦少なからざるべし云々

依然として人情風俗を知ることが第一、文學上の助けが第二である點は、十年前織田純一郎氏が『花柳春話』を譯したときに目的としたものと比較して、些の進步もない。當時の飜譯文學界には未だかゝる翻譯觀念も存在することが出來たのである。

此の小說の完譯は明治三十年代に原抱一庵によりて成されたが、その前に湘煙女史中島俊子によつて『善惡之岐』と題して飜案されてゐることは、餘り人が知らない。初め女學雜誌に出たものである。

『昆太利物語』。　これは前々の例によれば政治小說のところに入るべきであるかも知れないが、然し譯者に政治的イデオロギーがないので敢て政治小說とせずに置く。明治二十年七月から十二月に亙つて東京日々新聞に連載されたもので、翌二十一年十一月その上卷が單行された。初名は『昆太郎物語』といつたが、それは一回だけで「昆太利物語」とされた。

> さるは原書の題目コンタリニー、フレミングと云ふに據るなるが猶「昆太郎」といふ詭譎き文字を充塡たるは其初此を稍々滑稽めきたる小說（勿論純粹小說には非ず）に書んと思ひたればなり、然るに此物語の主人公、昆太利、布令民が冒險の旅行して兇漢に騙かれ又は空想の哲理を唱へて貴公子の山賊となりたる抔種々様の物笑ひなる猿楽したるは全く前半の世界にして、其後父の大臣を輔けて政敵を挫き或は外務の次官となりて立談の間に一國の運命を決せる如きは、天晴の敵役なり、立役なり、殊に其威尼斯に行て昆太利孃と戀憐の一段に至りては生粹の濡事師にして決して半道の所作に非ず、然して此物語の眞面目は彼に在ずして此に在る如くなれば發行二三回の後或人の忠告に任せて『昆太利物語』と改めぬ。

以上ははしがきの一節だが、これによつて、原書の何か、又どういふ性質の小說かといふことが、大概分かる。原作者はビコンズフヒールド卿、譯者は福地源一郎、塚原靖（蓼洲又は澁柿）の二氏、挿繪は始めは年恒で、後に年方になつてゐる。はしがきの筆者塚原蓼洲は更に文體についてかういつてゐる、——

其初は唯新聞の材料として筆を執たるにて後に一部の冊子とせんとの心構ありしにも非ず、殊に前後百二十回に餘れる長物語、更には日々一二時間僅少なる際に竊じ果る常仕事、其上に或時は飜譯口讀して速記者をして書取らせつるを予が筆加へて綴りしも有り、又或時は予自ら飜譯の筆執たるを同君の是正を乞ひ其を物語文に綴たるも有り、斯る體なりければ小說に要する「文體の一樣」缺くる所あるは詮術なき事なり、

塚原氏は更に再び原書について語り、此の書飜譯の用意に及んでかういつてゐる、——

此原書はビーコンズフヒールド伯が生涯の傑作なりと云ふ、左も有るべし、其叙事の精巧細微なるは姑く言はず、彼の主人公昆太利布令民を掌中に使ひ廻して其をして憂苦快樂吉凶禍福冷熱盛衰の苦海に流轉せしむる圓巧なる傀儡師が死偶を活人の如く操つるを觀るよりも面白し（或は曰く此物語は伯自身の經歷を小說として自ら書はされたるなりと云ふ、然る隱れたる意味も有ぬべし）、然して其最も趣向を凝たりと見ゆるは中篇、彼此勃窣林山賊の圖りより、下篇、布令民夫人（亞爾西貞）が終焉の段に至る前後數十回に在るが如し、故に譯者も此の回々は特に心して其幹旨を漏なく寫しぬ（されど其中敍事形容の餘に細微に渉れるものは讀者が厭を催なるにも何ぞ譯者の文筆を嫌んことを恐れて省けるも有り云々）夫より後南歐の遍歷、西亞の巡遊の卷に至りては作者が戯やりの筆とも見ゆれば四五の興ある場所のみを拾ひて其餘は棄つ

以上の一節によつて、此の飜譯の如何なるものかゞ大體わかつたことゝ思ふ。下卷の第二十三回「大詭」といふ章から文例を一節引用する、

此時恰も月は山の端にさし上りて樓の顏も白々と見ゆ小川の岸に腰打ち掛け休息するに蝶は翅翼を閉たる儘に

して少しも開かず又身體をも動さず、竊に胸の上に手を當て覗へば心臟の動氣は激くして宛ら浪を打つが如し兎角する中に眞白なる腕をバッタリと落したれば予は遽てゝ阿爾西貞(アルセスティ)よ氣分は如何に。其時孃は僅に細き呼吸を出して愛嬌にて滿たる黑き眼をパッチリ開きエースと云つゝ莞爾笑ひしが、實に此の一つの笑顏は、予が今迄の辛勞を償(つぐな)ふて猶餘ある程なりき。

『曼府の叛亂』。塚原蓼洲譯、原作は英國歷史小說家エインズウァースの『マンチェスタァ・レベルズ』である。「本文の繁を芟り要を摘み務て讀者の理解し易からんことを圖る」と前書にあるから、逐字譯でも全譯でもないことがわかる。二十年十二月から東京日々新聞に揭載され、後で雜誌『小說萃錦』中に收められた、その『萃錦』の合綴したものが往々見受けられる。內容は英王ジョオジ二世の代に英蘇間に起つた爭亂の始末で、亂魁といふのは史上にいふ大王位要求者ジェームズ・フランシスの子たる少王位要求者チャールズ・エドウォードである、チャールズは一七四五年六月フランスからスコットランドに上陸したが、小說は彼がスコットランドの高地に陣を取つて、今や英國に攻入らうといふ時に筆を起し、「其軍の始終につき哀れにおもしろき(又勇ましき)話柄を編成せるもの」である。主として活躍する人物では、美丈夫令廉(レイグ)、佳人君子丹(コンスターンス)、勇士屯禮(タウンレイ)大佐その他を數へる。

『雙鸞春話』。鶴堂牛山良助譯述、跡部素山校補、ビコンズフヒールド原著となつてゐる。原作はビ卿の『ヘンリエッタ・テムプル』で、勿論抄譯たるに疑ひがない。ビコンズフヒールド卿得意の才子佳人小說だが、例になく政治的加味が少ない。主人公ファーヂナンド・アーミンの素性、ファーヂナンドとヘンリエッタ・テムプルの戀、二人の結婚が本筋で、これに今一組のロード・モントフォート及びカゼライン・グランヂソンといふ才子

佳人を配してゐる。變愛の意味はこれで明白である。譯者牛山氏がこれを紹介したのは「此書を譯して世に示さば將に風敎の裨補を爲さんこと疑ひ無けんと知り」、「本書の大に風敎に裨益を與ふるを信ずる」を以つてゞあるといふが、此の小說は純然たる人情小說であつて、これを讀んで何も風敎に益あるとまで思へる小說ではない。此の頃の外國文學鑑賞眼は今日から思へば隔世の感どころではない。譯者はグラストンベリの敎訓などのことを指すのか知れないが、作者の主旨は人情描寫に腕を見せるにあつたことと、從つてファーヂナンドとヘンリエッタとの情事纒綿を語るのが本意であつたことは、そのファーヂナンド卞なくヘンリエッタを題につけたのでも知れよう。

『戀慕と嫉妬』。井上勤譯、英國の女作家ルシイ・ランダル・コンフアルトの『Love and Jealousy』といふものゝよし、第一篇より刊行されてゐないので、全篇の結構は何ういふものか、發端で見ると可成り複雜な家庭小說めいたものになりさうであるが、何分物語り得ぬのが遺憾である。然し此の譯本そのものは、井上氏の譯著のうちでは稀本の中に入つてゐる。

『許隱發祕・一讀三嘆』。尾崎行雄、尾崎行隆譯、行隆は行雄の弟である。原著はマクス・オーレルの『ジョン・ブルとその島國』で、此の原書は世人周知の小說でもあり、又その後新譯も出てゐることだから、詳しくは語らない。只次の例に見る通り飜譯は甚だ暢達である。

一日英人余に「佛國の物價は非常に高く如何ほど金錢を所持するも常に不足する旨」を語りければ余は「左樣に御考へなるや私は巴里の旅館に滯在し一日五圓の寄宿料を拂へば帝室にもをさ〳〵劣らぬ程の饗應を致し

候」と答へけるに

英人　否な非常に高く候。

著者　去りながら足下には來月再び佛國に漫遊せらるべしとは申されずや。

英人　左樣に候、左れど這度は細君を同伴可致候。

著者　細君御同伴とな。少なくとも二倍の經費を要すべく候。

と何氣なく答へけるに英人は「否な」と述べたるのみにして後とは口籠り俄かに赤面したるにぞ余も始めて心附き「請ふ恕せよ。々々々。果して高說の如し。無考にて圖らず失敬致し候」と詫び入り我れながら淡白卒直なるに驚けり。

『鮮血日本刀』。題だけを聞くと何か忠君愛國の武俠小說らしく思はれるが、實は原名を『クリスマス前夜の犯罪』といふ探偵小說である。篇中日本人某が佛國巴里府にて日本刀を以つて猶太種の金貸マイスネルを暗殺するの一事は實に本篇の骨子たるを以て今改めて鮮血日本刀と題したと譯者は斷つてゐる。譯者は本多孫四郎、原著者は此の譯書の緖言には英國人某氏とだけ書いてゐるが、『出版月評』の批評によると、英國人ノニイム・ホルセットだといふ。日本人三倉(みくら)なるものがマイスネルに高利を借りたのが返せず、傳家の寶珠を預けたまゝ自殺する。弟京阪なるものがマイスネルを殺して復讐する。丁度これが同じくマイスネルから借金してゐたラウールといふ書生に嫌疑がかゝる。然して探偵ブレリーの妙腕で冤がとけるといふ筋である。會話は總て純然たる口語體である。內容からいふとわざ〳〵紹介に値する代物ではないが、研究家の間で喧しくいはれてゐる本であるのと

當時かういふ探偵小說趣味が入り來つてあつたことを少し示したいので一言する。

『新案奇想 英和小說 新世帶』一名戀娘。原名『婿えらび』といふ、英國ウィリアム・ギルバート氏作『ザ・ウイザード・オヴ・ゼ・マウンテン』といふ原本から抄出したものであるさうだが、私は未だ此の原本に寓目したことがないから、たゞ譯者のいふまゝに傳へて置く。譯者は芳丘居士本多金十郎、新案奇想とか英和小說とか、いふのは、書中對話のところに原文が入れてある點から來たものである。成る程「譯者が一奇を思ひ附いた」ものに違ひない。「英語の講習必要なる今日に方り小說を讀みて心目を娯しますする內に自から英語會話の體を知り其話し方を覺えるの便に供するもの」であるといふ。ベッポーにカーロといふ二人の少年が主家の娘ギセピナに戀する。ギセピナの父グラッヒは榎那寺の和尚エトロの智慧をかり、二人を世間に出して一年後を約して成功したものを婿にするといふことにきめる。二人の身の上にいろいろな幸不幸があつて、とゞベッポーが婿になるといふ話。

英國と同じ系統の米國文學では、初めてポウとブレットハートが紹介されてゐるのが注目される。ポウの作では『**黒猫**』及び『**ルーモルグの人殺し**』が紹介されてゐるが、共に紹介者は洋語の讀めぬ饗庭篁村であるから、何人か（高田坪內の諸氏か）が物語るのを聞書したものであらう。ブレットハートも同じく篁村で、『**深山木**』と題するもの、これは彼の野生の少女を描いた『ムリッス』である。ポウの紹介は、恐らく黒岩涙香の探偵小說の人氣によつて案じついたものであらうが、それにしても此の早い頃ポウを紹介してゐるのは、注意されて可い。ガボリオー、ボアゴベイ以外にポウが入つて來てゐることは、人は餘り知らない。尙ほアメリカ作家では探偵小說家のアンナ・カサリン・グリーン女史の『X・Y・Z』が『**廣貨つかひ**』と題されて出てゐる（二十一年單行、讀賣

所載)。春のやおぼろの譯、譯といふよりも梗概といつても可い。譯名來栖政道といふ探偵がX・Y・Zと名のる僞貨つかひを探索に赴いて圖らず別の殺人事件の渦中に捲き込まれる話で、可成り面白く讀ませる。卷頭に春のやの長い序文があつて、此の小説の成立や、飜譯の用意態度などを詳しく述べてゐる。

大陸物の飜譯。大陸物といつても此の年の分は殆んど八九分フランス種であるといつていゝ。

井上勤氏の飜譯雜誌「文學之花」でユーゴーの『レ・ミゼラブル』が試譯されてゐるのは、新しい發見である。題して『**寸斷分裂美人の腸**』といふ、頗る奇妙な題目であるが、正に『ミゼラブル』たるに疑ひがない。然し眞の數回で止んだので別に人の注意も惹かずに忘られてしまつたものであらう。

『**西洋復讐奇譚**』。有名なアレキサンドル・デュマの『モンテ・クリスト伯』の抄譯で譯者は東京日日記者として當時日の出の勢ひがあつた橋郁居士關直彦氏である。この譯本は第一だけは坊間よく見る、第二が少ない。第一的比較的詳しく骨も折つてゐるが、第二は大に端折つて殆んど梗概みたいなものにしてしまつてゐる。第一卷はダンテーの父親がメルセデース(メルセード)の腕にすがつて死ぬところで、これ以下が第二卷となつてゐる。

同じ作者の『三銃士』が『**三人銃卒**』と題されて、加藤紫芳の手で讀賣新聞に一部分譯載されてゐる。その文例だけを次に出して置く。

第一章の、ダルタニヤン大にミュゥン府を騷がすといふところである。

此ミュゥン府を騷したるは一人の少年にして其打扮(いでたち)と人柄の大略を記さんに此少年は其年齡(とし)十七八歲にして兵

裝は着て居れど胸當も無く襟當も無く毛織のチョッキを着せしが其色は青く寒色なるも大く褪め果て一面に葡萄酒の汚物の如き斑點の出來たるは餘程年を經たるものゝ如く猶は面長にして兩頰の顴みたるは機敏の相また顎の長く大いなるは疑ひも無くガスコン人なる事を認め得べし而して此少年は頭に鳥の羽を以て飾りたる帽子を被り目は大きくして鋭く鼻は下に曲りて世に云ふ鷲四郎鼻なるが丈は中丈にして少年には大きく成人には小さく傍より之を見れば一目して田舍者の息子が旅行するものと認め得べし去れど夫にはチト不釣合なる長劍を横へ歩行く時は其股を打ち乘馬の節は絶ず馬の脇腹を打て至極難儀に見受られたり

譯の態度については、加藤氏が、「原文のくだ〳〵しき處は其大意を抄譯し讀者の讀倦まざらん事を勉むるが故に事に依り短きも有れば長きもあり」云々といつてゐるので、分明である。

『原書は佛國の革命 譯書は明治の維新 美人の勳功』。これはやまと新聞に出たもので、探劍散人補綴と署名してあるが、その內容の如何なるものかは、發端の大略によつて知られる。

德川氏政權を掌握爲して以來漸く王威の衰ふるを憂ふる者年々に增加し就中文久慶應の間に至りては勤王の有志四方に起り王政の復古に奔走爲す者陸續たり此時に方り由比前の內府（路易十六世に比す）と聞えし公卿ありて王威の回復を謀るに最も急激の論者にて在しけるが遂に中山忠光等と俱に天誅黨の巨魁に擁されて兵を大和に擧げ十津川に籠りて戰ひしも衆寡敵せず津藩の爲に破られ黨兵或ひは戰死し或ひは囚となり獨り中山の忠光は殘兵を率ゐて長門に走りしかど憐れむべし由比は此役に討死せり是に於て幕府は其妻參所鷹見夫人及び公達鷹麿丸令姫百合咲姫等を捕へ二條の城內（タンプル獄に比す）へ嚴重の監督を出來い就中に幽閉爲せるを有志是を助け出し當

王政復古の速ならん事を企圖せり云々

これによると、「原書」といふのは、アレキサンドル・デュマの『シュヴァリエー・ド・ラ・メーゾン・ルージュ』即ち紅家の騎士で、勤王の騎士がマリー・アントアネットとその子女を助け出して國家の再興を計らうとする物語を明治維新に引直したものである。丁度文久三年から明治維新に亙る出來事にしてある。

「大東號航海日記」。 ジュール・ヴェルヌ原作、『ヂ・フローチング・シテイ(浮べる都府)』の譯、森田思軒が國民之友に連載したものである。此の「シテイ」が即ち大東(「グリート・イースタァン」)號で、大西洋の海底電線を据える役目を遂げた大汽船である。ヴェルヌは實際この船で航海したことがあつた、さうしてその時の經驗を一篇のロマンスにしたのが、この小說だ。凡て大東號がリヴァプールを出帆してから米國の港に入る何日かの間の出來事になつてゐる、昔の戀人が今は人妻となつてゐるが、虐待のために死なんとしてゐる、これを護らうとする若者と彼女の夫との暗默乃至公然の爭鬪、それが骨子であり、最後の決鬪の場で、夫は雷火にうたれて死し、戀人は正氣に歸つて若者の胸に歸るところは、讀者の手に汗を握らせる。

『萬里絕域・北極旅行』。 原著は同じくジュール・ヴェルヌ、譯者は鐵研福田直彥、直譯ではないかも知れないが周密文體に近いものを用ゐてはゐる、これは面白いことには、ロシア語譯よりの重譯である、それは篇中の固有名詞の發音で分かる。原作は恐らく『北極に於ける英人』といふものであらう。此の譯書の廣告に見える『非常旅行並びにカピタン・ハトラス氏の果敢』といふ題名はロシア譯の題名であらう。英國の冒險富豪ハトラス氏が探險船『フォーアウォード』號を仕立てゝ北極探險に赴き、船員に背かれ、船を失ひ、非常の艱難に會つて、而

かも屈せず、遂に北極發見に成功せる事を書いたもの、例の日記體に科學的知識を満載して、而かも人情味を失はぬ好箇の探險小説である。

『歐洲小説・西洋梅暦』一名戀情月廼叢雲。齊夢樓主人の序に、「佛國小説」云々と断つてあるからフランス物ではあらうが、誰の作で何といふものか分からない。放蕩不貞な夫と貞淑なその妻、奸黠な淫婦などのありふれた物語だが、末段、夫が悟悔して妻の手に戻らずに奸婦を殺して自殺する箇處だけが聊か型を破つてゐる。森知蕭と福田直彦の合譯である。

『改良小説・奇遇魯國美談』。大石高德氏譯。フランスのドンペイ及び同男作といふから父子共著なのであらう、原名は『ボン・フレール』と呼ぶ。此の書については出版者の辻岡文助の廣告文がよく要を盡してゐる、

本書は彼一千八百十二年佛帝ナポレオン第一世ガ大軍ヲ發シテ魯西亞ニ遠征ヲ試ミタル際ニ當リ同國ノサン・ミシエル府ノ同胞ファミエー、プウシェー、シャーペル(妹)三人圖ラズモ哀別離苦ノ境ニ陥リ東離西泊ノ中其一人ガ獄裡ニ於テ故郷ノ慈母ヲ夢見タルヨリ情懷ニ堪ヘズ遂ニ破獄ヲ企テ逃レテ英船ニ救ハレタルモ其船ノ沈沒ニ遇ヒ已ニ魚腹ニ葬ムラレントセシヲ辛クモ九死ヲ出テ一生ヲ得ルコト又ハ妹ガ一個ノ才子ニ脅嚇シ僻縛其身ニ迫リ來リ殆ンド命ヲ失ハントシテ忽チ危難ヲ免カレ才子佳人相共ニ千艱萬難ヲ嘗メ盡シ遂ニ奇遇スルコト等總テ情海ノ波瀾中ニ湧出シタル一美譚ヲ寫シタルモノ云々

譯者大石氏はこれに附言して、此の原書の趣旨は「專ら童蒙婦女に德義を涵養せしめ併て節操を固守せしめんにあり」と述べ、譯者については「前出の趣旨に出童蒙婦女に閲讀せしむるを主眼とするが故に假名を以て平易に

譯述し且稗史體に書し」云々。以上によつて本書の大體が分かるであらう。

此の他何々美談と題する譯書でよくあるものに『英國美談』、『蘇國美談』などがあるが、省いて述べない。此等は譯書も手に入り易いから就いて見られるを可とする。

「**人情小說　花情粹話**」。これは元々フランス小說ではない。イタリーの『ガゼット・ピエモンテーズ』新聞記者たるビトルリオー・ベルセジオ原著のフランス譯（アメデー譯）を右の大石氏が重譯したものである。原名を『新ピエモント婦人』、ピエモント即ちピエドモントの地方の新婦人の義である。譯者序に、

> 頃日意太利國ノ人ビトリオー・ベルセジオー氏著す新ピエモン人と題する一小冊を閱するに二男一女に係る情海の波瀾を綴り巧に人情を穿ち其情慾の遠因を說かれたり(中略)婦女を教戒するに極めて切なり

とあるが、單に才子佳人と言はんよりは、かゝる場合には女子はいかにすべきかといふことを說いた庭訓風の小說である。ブランシュといふ妙麗の美少女はボンビゾー伯に求愛され。又後見人アブバンチナにも暗に伯を夫にとすゝめられるが、自分は從兄アンニバールと約束してゐるので、大に懊惱する、ボンビゾー伯とアンニバールは決鬪せんとするが、愈々の場合ボンビゾーは哲人リウシの諫言によつてブランシュに對する執着を諦めるといふ筋の小說である、ブランシュの身の落着は何うなつたか、たゞ學校に入つて政治學を勉强するといふのみでは尻切蜻蛉の感があり、且つ十分婦女の教戒になるとはいへまい。畫工小林茂麿の石版畫が數葉あるが、普通の石版と變つてゐて面白い。

「**西洋古事・神仙叢話**」。桐南居士菅了法譯、一寸聞くとギリシヤ神話の紹介か何かのやうに思はれるが、こ

れはグリム童話集の飜譯である。表紙に英語でフェイアリ・テールズと書いてあるから勿論重譯であり、又全部ではなく、僅かに十話だけ抄出して飜譯したものであるが、明治六年の渡部温の『伊蘇普物語』以來、童話ものゝ譯のあるのは珍らしい。譯者の意では子供よりも大人に讀ませるにあるので、文章もさう子供らしく譯してはゐないが、流石に原本が原本だけ流麗な譯文である。

仙禽を逐ふて公子金城に入る

或る城主その城外に廣ろき苑囿を持ちけるがこゝに一樹の林檎ありて金の果實を結びけり稀代の名果なればとて林檎の數を算へ三人の公子に命じて每夜代はる／＼守をばさせられける第一の公子先づ林檎の番をつとめけるが夜のふくるころ少し眠り氣さしてそのうちに林檎ひとつ失せたりけり第二の公子は深更まで眠らず見張りてありしが夜明くるころ是れもたへがたくてまどろみ林檎また／＼ひとつ失せたり第三の公子は年なほ幼ければ父君も危ぶみとゞめけるをしひて望み樹の下に立ち夜もすがら見張りけるがやがて空中に光あり颯と羽音して樹上にとまりたるは金色の鳥よと見るうち林檎一つ啄みはやくも飛び去らんとするところを云々

グリムの外、ドイツ物として見るべきものは、ハウフの『沙漠旅行物語』がある。これは例のメルヘン集『キャラヴァン(隊商)』から譯したものであるが、勿論全譯ではない。譯者は霞城山人中川重麗氏である。通信學藝志林に出たものである。中川氏の譯は、外に『一千一夜譚』もある。然し發端だけで中略してゐるのは惜しい。譯

體からいつて、此の中川といふ人は、明治初期のドイツ文學の紹介者としては重視すべき人であると思ふ。

戯曲が漸次小説を離れて獨立的に紹介されるやうになつたことは既述の通りだが、その第一は**『梨園の曙』**である。譯者は淮亭居士高橋義雄氏、今日實業界に名のある高橋氏である。收むるところは、（第一）**『洋琴調子整（オルガンてうしそろひ）』**英國ヘンリー・イー・ジョンス作、篇末に末松青萍の解題批評がある、「此脚本ハ西洋ノ世話物ニシテ飲酒ノ弊害ト孝女ノ情態トヲ描出シ之レニ貧民社會ニ往々見ル所ノ眞摯淡泊ナル事情ヲ付加シタル者ナリ」云々。教會附の音樂師が酒に溺れて職を失ふが、娘の孝心とその戀人なる後任青年樂師の親切とで眞人間に立ち歸り、娘と青年樂師と結婚するといふ筋。（第二）**『戀衣乾ぬ間の渚（こひごろもひまのなぎさ）』**二幕八場、英國ゼヲヂソーン作とある。末松青萍いふ、「此脚本ハ中世歐羅巴ニテ沿海警察ノ不行届ニシテ密輸入ノ流行シタル時代ノ様ヲ描出シタルモノ」云々、密輸入者の頭目ハーロップは船を燒かれて口惜し紛れに役人を殺す、その嫌疑が漁夫リチャードにかかる、が、リチャードの戀人で酒場の娘マリーの一心で救はれるといふ筋。（第三）**『ガイフォークス地雷火奇譚』**三幕十二場、英國ゼヲヂ・マクフハーレン作とある。末松青萍のいふ通り、「此脚本ハ當時ガイフォークスガ地雷火ニテ大逆ヲ企タル事實ヲ基トシモンチーグルトアリス姫ノ艶情ヲ取合セテ脚色シタルモノ」である。ガイ・フォークスの火藥陰謀は、史上周知の事實だから別に述べない。（第四）**『女權擴張情理岐（ぢよけんくわくちやうじやうりのふたまた）』**一幕、英國テー・イー・ハルマー作とある、「此脚色ハ所謂コメジー即チ滑稽ノ演劇ニシテ過度ナル女權者流ノ肺肝ヲ摘發シ併セテ輕薄男子ノ情態ヲ描出シタル者ナリ」云々、末松青萍はかういつてゐる。これは梗概を說くまでもなからう、大

抵推察のつく話である。

此の四篇は何れも抄譯だが、大部分は口語體であることは注意すべきである。又原本そのものが「英國劇場にて近時興行に係る脚色」書ばかりであるから新味がある。譯者の目的たる「西洋演劇の一班を知らしめて」「演劇改良」に幾分にても役立てんといふ意志は、十分成就されたらうと思ふ。因みにもう此の時は演劇改良會が設立されてゐたのである。その二は

『歐洲佳劇・斷腸花』。この原作については前に一寸述べてある。この單行本は宇田川文海氏譯となつてゐるが、宇田川氏は橫文に熟しない人と聞いてゐるから恐らく名義人であらう。さもないと文章だけ訂正したか。原著はジェームズ・スタッフォーヅの『青年學生』（或はスペイン學生ともいふ）といふものゝよし。元來脚本なのを小說風に譯し換へたものなることは例言に明白である。スペイン・アルケラの大學生ビクトルがジプシイ女（實にさる豪家の女）ピレシイと相思の仲となつた、樣々な事情や障礙などのために思ひを遂げることが出來なかつたが天緣つひに全く、惡漢が滅んで善人榮えるといふ勸懲話である。元が脚本だけに全篇殆んど會話で出來てゐるがそれが皆口語體である。『あひびき』以前の翻譯に口語體、言文一致の分子が多くなつて來たことが朧げながら看取される。その三は

『戀娘婚姻事情』。上に冠して西洋演劇脚書と題し、傍に註して『演劇猶禮吉』とある。フランスのユーヂーン・ラビシュ原著のアメリカ譯を重譯したもので、譯者は桂原良太郎、有賀岡次二氏、坪内博士の序文が載つてゐる。當時の演劇改良風に促され、西洋演劇の見本として公にされたものなることは例言に明かである。英譯

の題名に「蹂躙られた求愛」と書いてあつて悲劇じみてゐるが、内容は輕快なフランス式喜劇、寧ろ茶番道化に近い。譯文はいさゝかぎごちない口語體だが、讀んでは面白いものである。

同じフランスの物の脚本に『當世二人婿』といふのがある。長田秋濤原譯、依田學海戲編となつて居て、殆んど飜案といつて可いものだから詳しくは述べない。原著はドクトル・エル・ジェップレーの『佛國文範』といふ書の中にあるものといふが、シェークスピアの『リア王』の影響に成るとかいふ。和裝半紙本二冊。

明治二十年の飜譯文學界を語るときは、森田思軒の擡頭を注意しないわけにはいかぬ。

森田思軒。 森田思軒、名は文藏、備中笠岡の人、文久元年に生れ、明治三十年に死んだ。享年僅に三十七。大阪の慶應義塾支塾に英語を學び、上京して慶應義塾に入つたが、歸郷して郷里の興讓館で漢學を學んだ。明治十五年再び上京し、矢野龍溪の世話で報知新聞社に入り、同十八年支那に、次いで歐米に漫遊し、十九年歸朝した。思軒の飜譯者として立つたのは、此の翌年から死ぬ三十年まで足掛け十年間である。彼は此の間に、ポウ、ホウソーン、デッケンズなどの英米物、ジュール・ヴェルヌ、ユーゴー、ストーヴェストル、チョッケ、その他の大陸物を飜譯紹介し、名聲大に揚つて、一部批評家の間には「飜譯王」の名でさへ呼ばれた。彼は飜譯者として始終したが、當時は一飜譯者としてのみならず、文學批評家として文壇から重視された。その批評は舊式の鑑賞批評であつたが着眼に鋭い所もあつた。彼はユーゴーの紹介者として殊に有名であり、自得もしてゐたらしい、且つ事實これは十分彼の功と認めて可く、所謂周密文體は此のユーゴーの飜譯によつて完成の域に達したのである。

思軒は生前餘りに偉大な名聲を馳せた爲めか、死後彼の翻譯は甚しくアンダーエスチメートされるに至つた。だが何人が貶すにせよ、誹るにせよ、それによつて漫に思軒の功と價値は動かされるものではない。田山花袋氏が『小說作法』の中でいつてゐる如く、明治の翻譯文學をビコンスフヒールドやリットンからユーゴーに一轉化を試みさせたのは思軒の功であつた。又從來非常に亂暴であつた譯語譯法を一新して、所謂周密文體を完成さしたのも思軒の功であつた。此の二條は明治の翻譯文學を論ずる者が何うしても認めなければならぬところである。

一二

二十一年度の翻譯文學を前年度のそれと比較するときは、數に於いて可成り減じてゐる、恐らく二分位かも知れない。それが更に二十二年のものに至ると更に減じて二十一年の半數近くとなる。何れにせよこの數字は十九年度二十年度のやうな翻譯文學全盛の時期が去つて下り坂になつたことを示してゐる。それには種々な原因が擧げられやう。先づ翻譯文學に飽きたゝめとも見られる。又翻譯文學の需要の少なくなつたことも事實であらう。蓋し一つには西洋を知るに必須の知識は大體吸收されてしまつたし、一つには翻譯によらず原書を直接よむ人が殖えたといふこともあらうからである。萬事につけ自主的意識が動いて來、文藝方面も創作慾が旺にならうとしてゐるといふ點もある。讀者の知識が進んだので以前のやうな出鱈目な好い加減な翻譯では承知されず從つてさういふもの〻淘汰から數に於いて減ずる結果になつたとも考へられる。又その頃より眞面目な翻譯が多くなつたことは事實でもある。以上の種々な條件が幾分か宛でも與かつてかういふ結果を生じたものと見るのが至當である

らう。然し何しても社會的風潮に變化を生じて歐化主義がやゝ受けが惡くなり、國粹が唱道されて反動的になつたことが與つて力があると思ふ。然し反動といつてもたゞ反對し反撥し合ふ意味ではない、此等の飜譯文學から取るべきものはとつて揚棄したものと見ての國粹主義である。これは注意すべきだ。此の期間の譯書も依然英國ものが壓倒的多數を占めてゐること、前期以來と同じことであるが、これも又反動の風潮を生んで、やがて英國物を歡迎しない風が現れる原因となつたと思ふ。

一面量的に大體以上の如き結果を生じて來てゐるが、他面質的にも一大變革を生ずべき機に臨んでゐた。從來羽振りをきかしてゐた政治小說めく飜譯は表面は殆んど見られなくなり、あつても讀書界の第一線に立つ程威張つたものではなくなつて來、且又譯者のイデオロギイ添加の如きは全くなくなつたといつて可い。文學として眞面目なもの、小說として面白いもの、藝術的香氣の高いものが歡迎される風が見えて來た、飜譯の態度としては必ずしも周密文體を用ゐなくとも、原作を離れたものよりも原作に卽したものが喜ばれるやうになつた。殊に著しいのは、創作方面の技術的革命から、言文一致が飜譯文學にも入つて來たことで、この點では言文一致は飜譯文學の方面にも革命的な出來事であつたのだ。

此の質的變化を見事に代表してみせてゐるのが、二葉亭四迷の『あひゞき』である。

さて政治物は少くなつたとはいへ、そこには惰力といふものがあり、殊に社會が社會でだから、全然政治物と飜譯文學が絕緣するわけには行かぬと見えて、二十一年度の分にも少しはある。然しその何れ餘り大した力の入

つた面白いものでなく又世間から歡迎もされてゐないところに、時代の風が反映してゐる。

英國物としては、政治小說めく看板を出してゐるのに『奸雄之末路』と『政黨情話』ぐらゐのものであらう。（少しづゝ含まれてゐるのは他にもあるが）

『奸雄之末路』。ロード・リットン原著、『カルデロン・ゼ・コールチール』（モトノマヽ、原作カルデロン）といふ。譯者は韜庵吉田熹六、徳島縣の人、生時新聞記者として盛名があつた。此の小說の内容は凡例に「西班牙の正史に據りて趣向を立て」云々とあるやうに、スペイン王フィリップ三世朝の政爭史ともいふべきもので、中心人物は侯爵ロデリゴ・カルデロン、表題の奸雄とはこれである。カルデロンが微賤から立身し、一時スペイン大宰相レルマ公の謀臣として赫々の威權を握り、邪行專横を極めたが、天運循環して斷頭場に身を滅すことの物語である。勿論大意譯であらうが、讀み去り讀み來つてゐるうち彷彿として何やら當時の政府當局大官連中の某々を諷するところがあるやうにも感ぜられる。カルデロンが愚人を賀つて太子の意に媚びるため獻じようとした婦人が自分の棄てた娘とわかる、その緣で昔の愛妻の遺書を讀む場面など、此の小說の見所であらう。だが此の飜譯で何よりも面白いのは、その凡例に見える譯者吉田氏の飜譯文體論、言文一致反對論である。

近來西洋の小說を譯述する者日に月に多を加へ隨ふて其文體一樣ならず各々其見る所を執て機軸を出さんと競ふより種々樣々の文體現はれ中には驚き入たる大膽なる奇文の譯述家も見受くるやうなり何れを是として何れを非とすること素より謭劣、余の如きものゝ得て評論を下す可き所に非らずと雖も余は亦た謭劣なりに自家一己の見識無きにあらず徒らに言文一致に拘泥して言文一致ならざる我邦の文字文章を以て强て言文一致ならし

めんと欲し却て原書の意を誤り漫りに蕪雜なる詞句を弄して高尚優美の趣味を失ふが如きは余の取らざる所なり又た漢字漢語は俗耳に入り難しとて力めて俗談平話の體に倣ひ平易に平易にと心懸くるの極、堂々たる王族貴族の談話を寫すにも往々、手前、ソウジヤアないか、何ダ馬鹿野郎などゝ云ふが如き尾閭千萬なる詞句を用ゐて獨り人情を穿ち得たり飜譯の上乘なりと鼻を高むる天狗連の議論にも服する能はず(中略)されば求めて難句難字を用ゆるは素とより難なれど又た從來世人の耳目に慣れ來りたる字句を用て其人情風俗を寫すに於て何の差支も無き筈なり

吉田氏が守舊家であつたか否かは別として、當時、此の言文一致反對論に胸中の不平を洗掃されたと感じた人々は少くなかつたであらう。文例は略すが、流石に地の文はもとより會話までも言文一致の影も見えない。

『革命餘聞・英雄之世路』。表紙に The Fortune of Conqueror と題し、別に Tales of French Revolution と記してあるから、フランス大革命時の英雄連の逸話言行でも記したものかと當然考へられるが、內容は全然違ふ。「征服者の運命」は何れでもよいとして、革命は革命でもフランス革命ではない、アメリカ革命卽ちアメリカ獨立のことを指すものである。譯者の自序に南北戰爭のことに係るといつてゐるのも、間違ひで、事實はアメリカ獨立戰爭前記といふべきものである。

千七百六――七十年の交、北米クリーヴランドの人ゴスプ・ハムプトンなる豪傑が、英本國の虐政に慨し、奮然自由民權の說を唱へ、合衆正義黨なる祕密結社を結んでアメリカの獨立を計る、これを助けるに佳人ナラッセイあり、壯士バァレン、マァレイ、ザアクシイス、バアカンロウス、佳人アナァイン、その他があり、共に盟約

して米國各州を巡回して遊說し、獨立の氣勢を煽る。最後にいよいよ實力行使の段になつて官憲に捕はれて、何れも志をもたらして刑場の鬼となるといふ、悲壯な物語である。

米人チャンダアス原著といふが、原著が小說であるか歷史であるか、明瞭しない。從つて書中の事件が小說であるか宣傳であるかも明言出來ないが、譯文に關する限りでいへば、先づ日本の舊自由黨時代の壯士志士の經營活動をそのまゝ水滸傳式稗史に描いたものと考へれば可い。譯者の醉夢仙史阿部齊吉といふ人については何等知るところがない。就中面白いのは、ゴスプをして發奮せしめたといふジャプ、サンダンといふ異國の物語が頗る日本（ジャパン）の往時乃至當時の壓制政治の有樣を諷してゐるかと見える。萬事につけて志士が英政府を罵る語が、直ちに當時の自由黨の志士達が政府攻擊に用ゐた口調とよく似通つてゐる。「況んや萬物の靈なる人にして天賦の完全なる自由を有しなさんと欲して能はざる事なき力を保ちながら壓制苛酷なる（英）政府の束縛を甘んじて受るは誠に下等動物の性質にも劣りたる者と言ざるを得んや」云々、實によく似てゐる。政治小說としてはもつとも政治小說らしいものであるが、然しその政治的イデオロギイの點で四五年立遲れと見られる。

『英國奇聞・政黨情話』。といふものがある。譯してブライト氏原著、米の舍中廼（本名八木中庸）譯補といふ。後に改題して『世界第一之美人』といふ。内容はブライト氏の『英國史』によつて一六八八年の英國革命、卽ち英國民が國王ジェームス二世を逐ひ出してオレンジ公ウィリアムを迎立した顚末を骨子として、女の敎誡ホルテルトと美人ハートとの情話纏綿で色を添へたものである。譯者の意志に、これによつて米國今日の富强を生ずるに至つた原因の一端を知らしめんとするにあるといふ。國民に不羈獨立の氣性があれば國家が榮えるといふこと

を說教したいのであるといふが、さりとは廻り遠い拙い眞似をしたものである。

此の年の出版に成るフランス物にガボリオー原著、宮崎夢柳譯で『佛國史談・義勇兵』といふものがある。これの主意内容の如何なるものかは夢柳の緒言で分かるが、——

本編は原と佛國有名の小說家俄勃牢の記述に係り一千八百七十年佛帝拿破翁第三世が普國と釁隙を生じ來りて巴里城上の風雲旣に殺氣を帶ぶるに方り曾て聯隊長たりし一老翁公旦周が一夕其の朋友兒孫に對して講談演說せしところのもの即ち一千七百九十二年代佛國王政の竟に亡び共和政府の將さに興らんとするの際普國の强兵勁軍を擊破して以つて一大凱歌を奏したる義勇兵の事蹟にして其間名士の雄辯を揮ふあり美人の奇厄に罹るあり或ひは自由を唱へ或ひは權利を論ずる等當時最とも熾んなりし憂國愛民の氣象情況を描き出して宛然目に在り云々

といつてゐる。デュムリエーがアルゴンヌの森林地で普軍總督ブルンスウイックを大敗さした事蹟を描いたものだが、ガボリオーはこれを以て普佛戰爭當年の佛人の敵愾心を刺戟しようとしてゐるのだから大に義勇兵を賞めるのはいゝとして。これを日本の自由民權の方に引いて來るのは少し牽强である。然し專ら民間の志士の血氣を鼓舞する爲めと考へれば、夢柳の主意も通るであらう。始め大阪の東雲新聞に連載されたものである。

其の時に當りてや府民は多くは各十字街頭に各倶樂部に及び國民の權利の何物たるを了知せしむる爲め設置されたる各集會所に不斷常住するが如き姿にて屋外演說者は每夜到る處の陌上巷邊に群集を呼び催ふしつゝ時事を痛論し或ひは風に閃めきて其の影暗き紙燭の下に當時の諸新聞を朗讀し群衆に聽聞せしむるあり各公園の如

きは勿論憤激の餘り殆んど狂するに似たる人民の大群衆を以つて晝夜の別なく擁圍され其の景況の悲壯慘憺たる雲泣き風哭く凄ましきこと譬ふるに物なかりし中にも人民が國家の事に熱中せる一證として見るべきは地主家主にして慨世憂民の情の最も深く且つ厚き面々には其の政治上の持論を公衆に明示せざる程の人々に己れの持地若くは持家を貸し與へざるに至れること是れなり云々（第一回）

昔日の夢柳の譯文とは全く違ふものとなつてゐる。この邊にも周密文體の影響が見えてゐるわけである。

「**政治上之放逐人・千里風煙**」。これは前篇だけより出なかつたものであらうか、わたしの目睹したものは何れも前篇だけである。ヴィクトル・チッソーとコンスタン・タメローの共著の『三逃亡囚人の冒險』を英譯から重譯したものである。重譯者は天眼鈴木力で、末廣鐵腸と西村天囚が補述の名で加筆してゐる。シベリアのネルチンスク鑛山に苦役中の政治犯紫豪がその情人那哲智を伴なつて逃走する。警吏長耶阿陳駒がこれを追うて追ひつくが途中の冒險に生命を助けられてから却つて二人の護衛のやうになつて艱難を分かつ、此の書では原作の前半で終つてゐるが、却々面白いところがある。たゞ譯文が二名家の加筆があるに係らず如何にも生硬で、通讀するにひどく骨を折らせるだけが惜しい。又前篇だけでは政治的効果が甚だ少ないが、露國乃至シベリアに對する一つの興味の現れとして解すれば、それだけで輕視されぬものがある。

此の年、瀧本誠一氏（後の法學博士）の譯で『獨眼龍』といふフランスの政治家レオン・ガムベッタの傳記が出てゐるが、これは所謂小説でないに係らず、その文字が如何にも政治小説的色彩に富み、文中には政治小説なるかの如く受け入れた讀者も少なからずあつて、大に流行したものである。

更に谷口政德氏纂譯の『血涙萬行・國民之元氣』は表紙に Madame Therese などと記してあるので、例のシャトリアンの同名の小說の譯でゞもあるかと思ふと、全然これに緣のないもので、ウィルヘルム・テルを中心としたスウィス獨立史を小說化したものである。例言に

本書は國民の元氣と題し瑞西獨立の顚末を記述せしものなり而して書中の事實は概ね正史に據りて少く演義したるに過ぎざれば彼の空中に樓閣を構へし假作ものと同しからず云々

といつてゐるので明白である。これは四五年前現れたら大に歡迎されたものと思ふが、此の年では正に完全に旬(しゆん)遲(さく)れの感なきを得ぬ。

此の年度に於ても、『報知叢談』が相變らず勉强なもので、長短合せて約十篇を掲載してゐる。前年度の例によらずともいゝが、矢張り一括して最初に紹介して置かう。

『夢中夢』（二十一年一月）、覺後庵譯、パァシイ・リンウッドといふ青年紳士が、通りすがりに或る催眠術師を素見すつもりで立寄り、未來の豫言をして貰ふと、今に或る婦人と戀し合ふことになり、その爲めに決鬪するぞといはれて大に呆れ且つ驚く、然るに此の婦人に戀する一武官ペルピイ中佐といふのもこゝへ卜なつて貰ひに來てゐたが、服裝その他からリンウッドと知り合ふといふ女が自分の戀人なことを知つて、リンウッドに暗に敵意を抱く。間もなくリンウッドは、友人マーチ大佐の紹介で或る舞踏會で問題の佳人と知り合ふ、ボーモールといふ。此の會で二人は早くも意氣投合して人まぜもせず踊つたことがペルピイの感情を害し、決鬪となる。さうして決鬪の結果、ペルピイはリンウッドの態度の立派なのに感心して却て彼の親友となる。元來ボーモールの父ゼ

ームズは急激革命黨の一人であつたが、リンウッドが名家の子なのを見て、ボーモールを利用して自分の味方にしようとかゝる。ベルビイは譯があつてゼームズ等の計畫一切とその危險なことを知つてゐたので、頻りにリンウッドがゼームズ一派になることを止める。が、然し勢の赴くところは何とも分らぬ、ゼームズ一派は遂に大示威手段を準備する、ベルビイは遂に非常手段として、ボーモールを合意的にパリに誘拐する。ゼームズとリンウッドの二人は止むなく大會を外にして、ベルビイとボーモールを追ふ。さうしてパリで始めてベルビイ等に會つてその眞意を知り、大に感謝する。ボーモールは無事にリンウッドに嫁する、といふのである。原作原著者ともに未詳、譯者の覺後庵も判然しないが、思軒臭が紛々としてゐる。

『大氷塊』(二十一年二月―四月)、靜廬外史譯、靜廬外史の何人なるかは兎も角、行文には森田思軒の周密文體らしい臭味は十分ある。これの原作はジュール・ヴェルヌの『毛皮の國』(The Fur Country)といふもので、ハドソン灣毛皮會社から北緯七十度以北の地に新に毛皮獵獲根據地を拓く命令を與へられたレライアンス鎭のホブソン一行と、北極探險のために一行に加はつた英國の女流探險家バアネット夫人、及び此地に於て皆既日蝕を觀測するために英國グリニッチ天文臺から派遣されたブラック博士等の大冒險を語つてゐる。ホブソン一行は、命令の通り北緯七十度以北の地たるバサースト岬に新根據地を定めたところ、一夜大地震があつて、此の岬が大陸から離れて島になつた、而かもたゞの島ではない、元來この岬は地下幾尺が皆氷塊から成つてゐたのに、それと知らぬホブソン一行は氷塊の上に新根據地を定めたのであつた。かくて一行の大氷塊上に於ける冒險生活が始まる或は北に、或は南に漂流する、氷塊が次第に融れて小さくなる、小さいものが更に缺けてくる。さうしていよう

よといふ土端場に當時の露領アメリカ地方に漂着して救助される。その氷がかけて島が日に日に小さくなつて行くあたり、讀者に手に汗を握らせる。ヴェルヌはこの作でも例によつて豐富な北極地方の知識、及び地質、天文その他の科學知識を十分に驅使してゐる。當時報知新聞がこの作を譯載したのは、北海道その他北地の經營が問題になつてゐたので、そこを當て込んだといふ氣味が幾分あつたのではなからうか。

「幻影」(二十一年四月－七月)、笠峯居士譯、これも文章が全く思軒調である。原作及び原著者は未知に屬する。然しこれは「報知叢談」中で有數の面白い作である。單行本がないので人が知らず、從つて讀まれもしないが、面白い點では此の頃の飜譯小說で第一等のうちに入るべきものであらう。全篇が悉くギルバァト・ボーガンといふ主人公の自叙物語體になつてゐる。ギルバァトは少年の時から視力に障碍があつたが、遂に二十五で內障碍のために盲目になつた。一夜彼は持ち前の我儘氣分から附添に言はず密かに自邸を紛れ出て街頭を散步した、然るに歸途道を間違へて、自分の邸だと思つて或る家に入り込んだところ、その家で偶然にも血腥い人殺しと誘拐の悲劇の現場に飛び込んでしまつた。勿論盲目だから、ギルバァトには何も見えないが、何人かゞ殺されたこと、少女が無理にこの家から連れ出されたことだけは記憶に殘つた。彼も殺される筈だつたのだが、盲目だつたので麻醉劑を飲むだけで助けられた。これが發端である。

その後、ギルバァトは專心視力恢復につとめたが、幸ひ良醫師に會つて、遂に光明の世界に更生することが出來た。彼は、この闇中も例の奇妙な家の悲劇のことが始終氣になつてゐたが、手掛りがないので如何とも出來ない。やがて彼は一友人と伊太利に遊んだところ、チュリンの寺院で一美少女と邂逅した。勿論初見で知つてゐる

わけがないのに何となく前に會つたやうな氣がした、それから精力を濫費してロンドンに歸つて來た、さうすると一日思ひがけなく例の少女とリゼント街で又出會つた。好奇の心を抑へかねた彼は、遂に少女と同じ下宿に宿をとつて、何氣なく交際をもとめる、少女はポーリン・マーチといふ。然しテレサといふ附添女がゐるので、此の交際も容易に進展しない。暫時するうちにギルバァトは全くポーリンの美しさに魅されて、ポーリン無しでは何うにも出來なくなる。それで附添のテレサを買收してポーリンの身の上を聞き、結婚を申込む。するとポーリンの叔父といふ醫學士セネリーが、意外にも快く承諾して、早速二人を結婚させた。

ところが結婚後ギルバァトは大變な事に氣がついた。それはポーリンは何か過去に非常なショックに會つて記憶喪失症にかゝつてゐることだ。ギルバァトの折角の愛情も全く蠟人形に注がれるやうなものだ。ギルバァトはこれに堪へかねて伊太利に行つてセネリーにあひ、その原因を訊く、セネリーは答へない。處が、此の時、ギルバァトはポーリンの兄アントニイと稱するマカリといふ男に會ふ。マカリはセネリーがポーリンを勝手に結婚させたと聞いて非常に憤慨し、セネリーの正體を聊か暴露する、セネリーは伊太利の革命黨で、多年の運動にポーリン兄妹の資産を蕩盡し了つたのだといふ、マカリ自身も此の運動でセネリーと進退を共にしたのであるが、やがてマカリはロンドンに來り、頻りにギルバァトの邸に出入する、マカリはギルバァトをも革命運動に引き入れようといふのである（伊太利の統一が成つたが、王政が氣に喰はぬのだ）。一夕マカリは酒氣に乘じて懷抱の毒を吐き、長劍を拔いて空を切る。と、劍光を見たポーリンは何か思ひ出したかの如く、俄に邸から走り出して、或る町の妙な家に入る。ギルバァトも追ひかけて來てみると、これは何うも以前に自分が悲劇に面した家だといふことが

直感でわかる。二人は不思議な幻影（ヴイジョン）を見る。それは次に本文のまゝで引用する。

此時蠟燭は余の背後なる煖爐（スートフ）の棚に在り我々の居る一室と彼の前面なる一室との間の隔ての戸は半ば放（ひら）けるのみなりしかばコナタなる蠟燭の光は殆ど次の室には照らし及ぶことあらず次の室は全くのヤミにてありしなり余は二三秒間（セカント）吾妻の手を握り居りしが此時忽ち異樣なる一種の感の我心を襲ひたり、時有りて夢の中に二個の人物現はれ出て己れは孰れの人物の心持身振をなし居るや辨せず二個の人物一個の如くに混同して想はるゝことあり余は今ま恰も此の夢の中なる想の如き一種の想になれるなり、余は今ま身は芳因（ボーライン）の手を執りて椅子のホトリに坐せるなるか斯く坐しながら同時に亦た身は彼のピヤノの前に坐し半ば放（ひら）ける戸の間より次の室を視入りたるなり、余は此時決して芳因（ボーライン）のホトリを去らず身はヤハリ其椅子の傍に坐せるなり去乍ら同時に亦た身はピヤノの前に坐して次の室を視入れるなり、コはソも次の室の內は燦然として燈光晝の如く明らかなり余は一目して其室內の一切の光景を見るを得たり、ソコに按排しある器具の件々壁上に懸れる繪畫の種々窓には黑ズミたる色の帳（とばり）垂れ煖爐のうへには大なる鏡立ち室の中央には一脚の卓子（テーブル）を置けることまで皆な明らかに認め得たり、卓子の上には大きやかなる一個のラムプ輝やき居り其の卓子の周邊には四個の人物ありて團坐せり

シカも其の四個の中の二個は余が熟識せる顏にて今ま恰も余と相對して卓子に手をつきながら乘りかゝりざまになり不意に驚ける氣色にて己れが前面なる二三尺サキの一物を視つゝ居る其の人物は是れマガひもあらぬ伊太利の醫學士芳因（ボーライン）の叔父施黎（モネリー）なりしなり

施寮の右手に於て卓子のホトリに立ち今にも敵のツカみ懸らんを待ち構ゆるが如き體格にて其眼ら顔は爛々と睥睨りつゝ面色銀壺にも太く澹して見へたる人物は是れ英國語を話す伊太利人自ら芳因の兄と稱せる馬荷なりしなり馬荷も亦た施寮と同じく其の一物を視つめ居りしなり

施寮の背後に立つ身材短き一個の人物は其の頬上に傷痕ありされども余には識らざる顔なり此人物も亦た施寮馬荷と均しく同じ一方を視つめ居るなり

三人の視線の聚まれる處に一個の少年男子あり今まさに其の椅子より倒れたるが如くにして己れの胸上に貫かれたる匕首の柄を隻手(かたて)に握り煩悶せり疑ひもなく此の少年男子を刺せる者は最も其のホトリ近く立てる馬荷なり

余が以上の光景を認めたるも一秒間(セコンド)の事にして余は驚き芳因の手をはなして立ち上がれば亦た是れ如何に燈光輝やける一室は安くに在るや余が認めたる人物は安くに在るや今眼前に現われたる痛ましく恐ろしき活劇は安くに在るや皆な消えて痕なく獨り徐々燃え下れる蠟燭の余が背後に薄暗く立てるのみ四顧闃然として淋き家のうちに呼吸するものとては唯だ余と芳因と二人あるのみ。

ギルバァトはあの時の證人はこれだと覺る。それで今度マカリに會ふと、何故人を殺したかと責める。マカリはさてはあの時の盲目少年がニセ盲目であつたのかと觀念して、實はあの少年はポーリンの初戀の人だつたのだが主義の爲めに止むなく犠牲にしたので、ポーリンの病氣もそのためだと語る。ギルバァトは大に狼狽する。自分の最愛の妻が、始終他人を慕つてゐるといふ考へに堪へかねるのだ。それで今一度セネリーに會つて眞相を知ら

うとするが、セネリーはこの時ロシアで革命騷動に關係したので捕縛されてシベリアに送られた後である。ギルバァトは決然シベリヤまでセネリーを追ふ、さうしてイルクックでセネリーに會つて、眞相を聞く。すると意外にも殺された少年がポーリンの兄アントニイであつたことがわかる。セネリーがアントニイ兄妹の資産を伊太利革命運動に投じたことは事實だが、アントニイはそれと知らず、成年になるとセネリーに保管の資産の返還を求めた、さうして彼の夜もその談判してゐたのだが、アントニイが激昂してセネリー等を山師と罵つたのでマカリの一擊に落命したのだと知れた。ギルバァトが安心して歸國するとポーリンは病氣が癒えてゐて、長い間ギルバァトを待つてゐるところであつた。セネリーはシベリアの苦役で死に、マカリはフランスで銃殺された。ギルバァトとポーリンは幸福な生涯を送つた、といふのである。

「定數」(二十一年八月)、蕉陰散史譯、これは大した作ではない、かつてナサリーといふ女虛無黨員の色に迷つて虛無黨員になつたフラビアンといふ英國青年が、その裏切のため米國行の汽船中で復讐される話である。

『炭坑祕事』(二十一年九月―十月)。紅芍園主人譯、これは森田思軒である、原作はジュール・ヴェルヌの『洞窟の子』(The Child of the Cavern)といふものだが、炭坑の二字を標出したのは、事實炭坑の怪事を語るからでもあるが、折柄高島炭坑の坑夫問題が喧しく論議され始めてゐたから、それを狙つた點がある。スコットランドのアバァホイル炭山の老監督シモンが、廢坑後十年間も坑内に頑張つて、遂に新炭層を發見する。さうして舊主人の工學士ゼームス、我が子のハーリーと共にこれを探險して、立派に廢坑を再興する。ところがこの炭山の主ともいふべき正體不明な怪人がゐて、種々な手段で、この炭山の再興を妨害する。そのためシモン、ゼームズ、

ハーリー等が一時に洞内で餓死させられやうとしたこともある。ところが、或る日ハーリーが、この炭坑の近くのベンロモントの岩穴を探險した際に穴中から少女ネルを救ひ上げる。これが縁となつて、ネルとハーリーは夢中になり、やがて結婚とまで話がすゝむが、ネルが穴から引上げられてから、怪人の妨碍が益々甚しくなる。ネルは怪人の正體を知つてゐるがいはない。然しいろいろな手蔓から、その怪人がネルの老祖父、この炭坑のもとの火番(モンク)であつたシルファといふ男だとわかる。ネルとハーリーが、いよいよ結婚といふ日、シルファは最後の手段で坑内の人間を鏖殺しようとかゝる。

一同はシントパウルの院内に到着せり群がり照らせる電氣燈の光は許多の太陽を一時に並べ懸けたる如く燦然として目のとゞく限り明かならざる隈もなし既にして例の如く式も次第に了はり来りて人々は皆な一方に退き立ちて院内の中央には僧正と皮黎(ハーリー)と余兒(ネル)のみで留まりける僧正は徐ろに呪文を把りあげつゝ厳粛なる音吐を以て「皮黎(ハーリー)汝は余兒(ネル)を汝の妻となし自今以後永く之を親み愛して渝はらざるを誓ふべき歟」皮黎は欣然として「余は之を誓ふ」僧正は更にコナタに向ひ「余兒汝は皮黎を汝が夫となし」といふ詞の未だ訖(をは)らざるに忽ち戸外にスサマジキ物音すると思ふと均しくマルコルム湖の一方に崩して壁を成せる巨岩の一個自から脱け墜ちつマルコルム湖の水は其の罅隙に滔然注ぎ入れり是はと驚く間もあらずや今まで巨岩の脱け墜ちたる中より一個の丸木舟の闖然として走せ出でつゝ看る〱湖の中央に来りたり舟の上には一個の老人銀の如き頭髪をふりみだし尺に餘れる髯は雪然白く垂れて其胸の半を掩ひ身には黑色のマントルを纏長に着下だしつた手に一個の安全燈を提げて屹立せり

老人は低く鋭き聲を發し「炭水氣上に在り、今ぞ汝等一同に怨のほどを知らさん」と罵ると同時に彼の爆裂瓦斯に特有なる一種の薄き臭來つて鼻を撲てり

蓋し今ま巨岩の脫け墜つるとゝもに其の内部に鬱積せる夥しき爆裂瓦斯の噴出して一時に浮散したりしなり彼の老人は今まや最後の策により爆裂瓦斯を放ちて一同を焦殺し以て皮黎及び念兒の結婚を止めんと欲せるなり庶武(ゼームス)及び其他の人々は早くも戶外に飛び出でしが何をなさん暇もあらず唯「走れよ、速かに戶外に逃れ出でよ」

と呼はるのみ

然しこれが成功せず、シルファは湖底に影を潜め、ネルとハーリーは無事結婚する。その他古城の怪火、怪梟ハルなどの景物があつて、これ又一氣に面白く讀了させる。例の如く石炭に關するヴェルスの造詣が披瀝されて讀者が知らず識らずの間に一かどの石炭通になる。原抱一庵は田舍でこの飜譯を讀んで大に感心し、批評を書いて思軒に送つたところ、それで文才が認められて、中央文壇に出て來たのだといふ。

以下は皆短篇で格別いふに足るものもないからたゞ題目と掲載の時日だけ示して置く。譯者は何れも臥禪居士と署名してある。

『**女旅客**』（二十一年十一月）

『**右　足**』（同）

『**密封書**』（同　十二月）

『**元　日**』（同　同）

『猫』（同）

『倫敦辻馬車』（同）

『時計獄』（同）

『報知叢談』はこれで此の年の分が終つてゐるが、その前後を通じて一言すると、明治の翻譯文學に貢獻した功は誠に大きい。その過半がジュール・ヴェルヌの科學小説である點で、ブルジョア政黨の機關たる報知新聞がかゝる小説の紹介に啓蒙的意圖をもつてゐたことは否定出来ない。又、此の翻譯小説叢が全部森田思軒の手に成つたものでないことは明白であるが、何人が譯したにせよ、新聞に出る際に思軒の手で徹底的に潤色されたものと見られ、從つて何の篇も文章に可成りな思軒臭がある、いはゞ『報知叢談』は思軒を中心として發展したものといふ氣がする。これが翻譯家として思軒の全盛時代である。思軒の周密文體は、今日からは妙に生硬な晦澁な文章の見本といふ風に見られてゐるが、當時文體がまだ定まらぬ頃は歐文直譯風と漢文讀下し流を加味した此の文體は、文壇に一種の清新な印象を與へて歡迎されたものに違ひない。少くとも一時はさうであつたのだ。さもないと、思軒の文壇的勢力が、翻譯王といはれるまでに伸びるわけがない。惜しいことに、思軒は此の機會に立派な文學的價値の高い作品を紹介することをせず、たゞ新奇な面白いものゝみを主眼とした。これはジャーナリストの立場として恕すべきであるかも知らないが、思軒が今日文學史的に次第に評價が減じて來たのは、その紹介した作品の價値による點が大分ある。然し、それはそれとして、かゝる時代に西洋小説の大衆的面白さを教へてくれた思軒その他『報知叢談』同人の功績は、決して黙殺湮沒に終るものではない。

報知が「報知叢談」で飜譯小説に力を入れ始めるや、多年の好敵手東京日々新聞も飜譯小説を載せ始めた。その一部は既に二十年の條で說いた通りである。此の年も幾種か譯載してゐるが、それは後に追々說くことにしよう。こゝで通例の順序に復して、古典文學の紹介に筆を戻す。

英國物のうち、シェークスピヤの飜譯が數部ある。

『**みなれざを**』。表紙にわたのとろみ戯譯とあるが、わたのとろみの何人かは奥附で判明する。當時の文科大學生、後の文學博士和田萬吉氏である。原作はシェークスピアの『オールズ・ウェル・ザット・エンヅ・ウェル』で、かつて鎌倉の旅宿で此の作をよんで面白かつた餘りその大意を譯述したものといふ、はしがきに詳しく見える。意譯とはいひ條、全然原作にのみ依つたものでないことも、同じくはしがきに見える。即ち「あるところはおのがあむじ出でたることを加へ、又あるところにはもとつふみのおもふきをも變へて」云々とある。文體は雅文物語體、擬古體ともいふべきか、所々謠曲ぶりを眞似たところは譯者の趣味と造詣を見せる。第七段「浦のゆふなぎ」から文例を引用する、——

指環の玉の玉椿八千代の春を契るらん。

王「いかにべるとらむ、餘りに芽出たき折にてある間、時に取つてのことを謠ひものに作りて、一指舞ひ候へ
へれなも相舞ひ仕るべし

べる「これ又當座の面目なり宣旨をいかで背き候ふべき、

べる「とし月も、すぎの後の水慣棹（みなれざほ）、見なれて君を忘れしはなぞ、みなれて君を忘れしはなぞ、

へれな「水慣棹、見なれて有れども火には、焦がるゝものと君は知らずや君は知らずや、君は知らずやと謠ひつ舞ひつする云々。

「鏡花水月」。渡邊治譯、これはシェークスピアの「間違ひの喜劇」の眞面目な全譯である。「此書譯法の體裁總て原本の儘を寫し趣向順序段落章句、一切私意を交へたる所なければ」云々と斷つてある通り、原作を忠實に逐字譯にしたもので、當時としては出色の成績であると見るべきものがある。本文の十中九迄は、普通の談話體を用ゐてゐるのも特色であらう。卷頭に「讀者に告ぐ」の一文があつて、シェークスピアの翻譯のこと、西洋演劇の大略のことなどを親切に說明してゐる。「鏡花水月」の題號は譯者の友人某氏の下すところで、その說にいふ、——

本書の脚色はアンチフォルス及びドロミオの兩兄弟各々容貌風度の相肖たるより諸々の錯誤を引起し、傍らより之を見て俄に其眞僞を判するに苦しみし有樣は鏡花を眺め水月を掬するの趣に異なる可からず鏡裏の花果して眞の花ならず、水中の月亦果して眞の月ならざるも人の誤つて之を認識するは、左にアンチフォルスならざるに其アンチフォルスたるを疑はれ又左にドロミオならざるに其ドロミオたるを怪まれたると一般、双々相比して其兩對を想ふに足る可し云々

序幕の第一エフェサス侯御吟味の場のうち、商人イージオンの述懷長文句から文例を引かう。——

(上略)モト私はシラキュースの生れにて、妻を娶り、夫婦の間も睦まじく、商賣繁昌、少しの苦勞もござりませず、折々はエピダムの港に渡り、交易の利益を多く、身代も延びるばかりでござりまする其內に、エピダムの出店なる番頭某の身の上に事ありたれば、跡の取締なさんが爲め、懷しき妻を國に殘し、エピダムに右往許り

逗留いたして居りましたが、何にがさて賴み少なき女心どうぞ妾も倶々に伴て居て下されと、たツての所望に斷はり兼ね、ソンなら此方に來たが宜いと申し遣はしましたれば、妻も旅路に恙がなく、まいりまして、後ち間もなく、軈がて双兒を安々と生みましたに、その顏容、寸分違はぬ生れゆゑ、見定めつかぬほどなるを、唯だ兄弟と呼び分けて居りましたに、同じその頃泊りあはせし旅籠店に賤しき一人の女子あり、是れも程なく産の氣づき、産み落したは、矢張双兒でござりました、此れも又似寄るはおろか瓜二ツ、私共に取りましては、同じ思ひに同じ有樣、不思議と云ふ外、ござりませぬ（下略）

『自由の答恩愛の紲・豪傑一世鏡』。板倉興太郎譯、小野友次郎校閲で、尾形月耕の畫が入つてゐる。卷頭にシェークスピアの略傳と、此の譯書の原作『コリオレーナス』についての解題があり、それも却々親切である。

凡例の一節にいふ、——

演劇改良の補助ともならんかと譯者この春頃より英國の戲作者塞士比亞(セキスピヤ)の筆に係れる哥略拉那(コリオレーナス)と云へる院本の飜譯に着手せしがこの頃漸く出來上りしを以てこれを自由の答恩愛の紲豪傑一世鏡と題し文の拙きをも顧みずして出版せり云々

これによつて譯者の志が何處にあつたかゞ分かり、市川團洲の序文があるのも同樣肯づける。（他に原竹外の序がある）。從つてその飜譯が文章體裁とも當時の歐舞伎劇を模したことも大體推察のつくことであらう。文例——

哥略拉那陣屋の場

本舞臺は總て假陣營の體。上段に哥略拉那擲勝丟士(おうふらじあす)の兩將酒を酌みかはし居る。下段に二三人兵士並び居る。

上〽沛然と雲を叫び。轟然と風を起せし龍虎さへ今は互に打解けて心も睦しき一冊の中。哥崎拉那は飲かけし

盃やをら下に置き

（哥略拉那）某は今夜こゝを引拂ひ。羅馬城壁の前近く。新に陣營を構ふる心得で御座る。又貴殿には羅馬の使を兩度まで受引かざりし某が心底を。羅爾西（ウォルサイ）の議事官に。よろしく御披露被下度し

上〽思ひ入てぞ頼みけり。壊肆丟士片頰に笑み

（壊）そは頼まるゝ迄もなく。某歸りし其節には。鐵石に等しき貴殿の心底。委敷議事官等に披露致し乾度お執成仕らん。この儀は御心配あらるゝな。ソレハさうと。昨日哀訴に參たあの老人は一體何物で御座るぞ

（哥）さればで御座る。あの二度目に來りし老人こそ。某が常に父よ父よと敬ひし。議事官美尼紐士亞寬立巴で御座る。羅馬の市民があの人を。吾陣營に送りしは最後の竊策にて候はん。某も外面にては。いと辛く待遇せしかど。舊情故誼忍び難く。五臟六腑も斷つ計り。あの要求書を送りしも。羅馬を救ふ爲ならず。只だ彼の老人に花を持たせん某が微志。かゝる親密なる舊交をかくつれなく扱ひしも我に二心なき證據なれば。貴殿よろしくお察し被下

上〽折ふし騷ぐ陣屋の外

トがやがや騷々しくなる（下略）

『正本はむれつと』。山田美妙譯、「いらつめ」所載。序幕だけしか出てゐないが、續稿は出なかつたものであらう。美妙自身「今度及ばぬ大膽な考を起し、力のかぎり原文の勢韻を存し、殊更に文體は力めて言文一致體

に近づけ、當つて推けやうと此とほり」といつてゐるので、覺悟の程が知られる。文例を引けば――

(バァなァど)なるほど一理あり氣な御說、あの怖ろしい人の姿……しかも其等の戰爭の根本――その人が如此俺們の前へ甦ふて御出なされたのも所以無くはムりますまい。

(ほ)小さい塵も眼には障る。往昔羅馬の榮へた頃、まだ「シィザー」も死なぬ前には墓地に主なく却つて分街に負傷者などが唸つて居たとか。まこと血の露、火の星影、天常闇となる時は月も蝕はれて朧となる。世の前兆といふものは決して爭はれぬもので、それ故今度の事などもこりや只事ではムりません

(この内幽靈ふたゝび出て來る)。

譯文だけで見れば、なかなか苦心した佳譯といつても可い。

以上はシェークスピアの原典によつた飜譯であり、戲曲としての價値を認めての上の試みであるが、以上の外にラムに依つたもの乃至依つたかと思はれるものが又數種ある。その一は、『幽靈』、これはラムの物語の中「ハムレット」の條を譯したものだが、勿論直譯ではない、譯者は井上勤氏。表紙に大きな白髑髏の出てゐるのが面白い。次に十九年に端を發した『泰西奇談』の續篇が三部出てゐる、『女房持虎の巻』、『嵐の巻』、『智孟物語』の三部である、何れも『じやじや馬馴らし』、『テムペスト』、『アゼンスのタイモン』をラムによつて紹介したもの、譯者は叢菊野史仁田桂次郎である。次に『豪華之夢』(鶴江小漁譯、學藝之世界)、これも『タイモン』であるが、矢張りラムによつたものらしい。『情海の波瀾』、柳香痩傳譯述とある、某新聞に譯載されたものといふが、『冬物語』の作り替である由。これは何方を原本にしたか一寸調べかねるので、そのまゝとする。

飜案が一つ、『四つの緒』といふ、朝日新聞(大阪)所載のもので原作はシェークスピアの『御意のまゝ』である。後に單行本にする時、『汝所好』といふ原名に近いものに改めた。新聞の方には飜案者の名が出てゐないが、單行本の方には宇田川文海とあるから、先づ文海の筆になるものと見て可からう。

大陸の古典物には、ラテン喜劇の飜譯がある。『滑稽狂言・雙兒の錯誤』がそれだ。原作者はラテン喜劇の大家プローダス、譯者は相良常雄とあるが、末松謙澄の序文を見ると末松氏の力が大いに與つてゐるらしい。ラテン原語直譯ではなく、英譯からの重譯であるといふが、譯文が如何にもよくこなれてゐて、如何にも喜劇らしい味がある。容貌酷似した双生兒の兄弟の一人が亡父の遺志をついで幼い時失はれた兄弟をさがしに出かける、それが同じ町に來ていろいろな間違ひや滑稽やを演ずる。地名も人名もすつかり和名に直してあるが、譯文の體はあくまでも飜譯の體裁を失つてゐない。

序幕　第一齣

幇間須本治(スポンヂ)出で來り

(須)あの若い人達は己イラに須本治(海綿の義)といふ名を附けたから、何故だと言つたら、己イラが食事をするときにや、何時でも食卓を、奇麗に拭き取るのが癖だからだと、そりやさうと己イラ熟々考へて見るに俘虜を頸で繋いだり、逃れたがる奴隷(やつこ)に足枷を入れたり、色々にして引止めて置くのは餘つぽど馬鹿らしいことだ。何故だと言つて見ろ、可愛さうに不仕合な人間を、此樣事で無理往生に引止めて置かうなんぞと熱心ばあせる

ほどヤレ逃げ出さう、ヤレ隱れようといふ心は、屹度增して來るもんだ、譬へば鎖で繫いだ日にや、何うか斯うかして、その鎖を脫けようと目論み、足枷を入れりやそれを摩り切らうとか、又は大石で釘を打拔かうとか樣々に工夫をするもんだから、此樣な事は本統に駄目だ、夫れよりか大丈夫逃げねへよふにせうと思やア、肉と酒との鎖止めが上分別、御馳走の食卓に其奴の口を縛り附けるのが第一の上策だ、毎日々々好み通りの肉と酒をたつぷり飽くほど充てがひさへすりやア心配には及ばん何時までゝも決して逃げねへ事は受合だ。

「**警世奇話**」。加藤幹雄氏譯、原書は Fable de Fénelon といふものゝよし、內容は上下二卷に別れ、(上)は「王を撰擧せんが爲め衆獸の集會」、「梟の話」、「蜜蜂の話」、「龍と狐の話」、「牝熊と子熊の話」、「二小獅の話」、「好事の爲に禍を招ける狐の話」、「猿の話」、「快樂島に旅行の話」、「ジゼスの指環の話」、「ニール河とガンジュ河の話」、「メレンクトンの話」、「アルフハルート王及びクラリフヰールの話」、「アリストヌースの事蹟」の十四話下卷は「蜜蜂と蒼蠅の話」、「狼と小羊の話」、「二狐の話」。「猫と兎の話」、「深慮の爲禍を招ける鳩の話」、「二匹の鼠の話」、「猛勇を擬せる兎の話」、「皇后と若き村娘の話」、「女王ジゼールと王女クロリザントの話」、「一小公子の話」、「一千六百九十年に於ての假定旅行の話」、「ロジモンとブラメントの話」、「波斯人アリベーの話」、「フロリーズの話」の十四話が收まつてゐる。これで全部か何うか未詳であるが、然し譯はフランス直接譯で、なかなか咀嚼された譯文になつてゐる。

『**小說神髓**』。かういふと題目だけで讀者は驚くかも知れないが、西洋小說の神髓をとつて紹介するといふ意

味で、此の年二月から女學雑誌に掲載され始めたものであるが、その第一編としてスコットの歴史小説『ケニルウァース』が紹介されてゐる。飜譯といふには遠く、梗概といふには詳し過ぐるもので、實に數十回に亙つてゐるが、完結してゐない。且つ編中、説明の不十分のため、所々出來事の連絡のわからぬところがある。エリザベス女王の當時、寵臣サッセックス侯とレスタア侯と勢力を爭ふ、サッセックスにはラウレーあり、レスタアにはバアネーあり、共にその主人を助けて勝たしめようとする。エリザベスの御前體はレスタア侯の方がうけがよく、やがては英國王位に上るのではないかと思はれてゐる、女王がレスタアの居城ケニルウァースに行幸して恩寵を示す。ところが困つたことには、レスタアは鄕紳ラブサートの女エメの色香に迷ひ、これと密婚してゐる。女王の寵を維持するためにはこれを隱して置かなくてはならぬ、それで表面だけ暫時家臣のバアネーの夫人となつてゐよといふが、勿論エメはきかぬ。そこでかねてエメに思ひをかけて拒まれたことあるバアネーはこゝぞとばかりエメをレスタアに讒言して、エメはその幼馴染のトレッセリアンと嫁くに通じてゐるといふ。レスタアは怒つてエメを殺し、トレッセリアンに復讐しようとする。丁度紹介されてゐるのは、レスタア侯が、いよいよ覺悟を定めてエメの部室に趣くところまでゞある。

『奔彪榮華の夢』 ロード・リットンの『ポムペイ最後の日』の譯で(女學雑誌掲載)、譯者は青柳小史、誰かは知らぬが、譯は逐字直譯で、眞面目なものである、惜しいかな、第六回の愛西殿堂で中絶してゐる。

さて現代物に移らう。これも英國から始めることして、第一は東京日々所載の『牛島の戰爭』である。これは譯

者の署名がないが、塚原澁柿あたりではあるまいか。著者は愛蘭土生れの小說家ウイリアム・ハミルトン・マクスウェルであり、マクスウェルは實際ウェリントン公の指揮の下に半島で戰つた一人であつた。これは恐らく彼の半島戰爭の小說集『野營』(The Bivouac) から拔いたものかとも思ふが、何しろ六回(出陣)で中絕してゐるので、全體が何ういふものか分からない。古武士らしいオーコンナ少佐と陰險なウリフ大尉とが少女マリを爭ふ、マリは元來は少佐の人格を戀つてゐたのだが、今や色魔の大尉に魅されかけてゐる、そこへ半島戰爭への出發命令が來る、少佐は武士の本懷と勇んで出發するが、大尉は事に托して本國に殘る。といふところまでゞある。何で中絕したものか惜しいと思ふ。

同じく日々所載の『凱法吾士』はウィリアム・エインズウォースの同名の歷史小說を譯したものであるが、前は詳しく後は粗略で、先づは梗概に近いものである。ガイ・フォークスといへば說明するまでもない、火藥陰謀(一六〇五年)の主役と見られてゐるが、然し本當の首謀者はロバァト・ケーツビイ(此の譯書では、カテスビイとなつてゐる)で、既にガイの陰謀より一年前の一六〇四年に議會爆破の陰謀をたくんだことがあるといふ。今度の陰謀でもガイ即ちギドォ・フォークスは點火役を命ぜられたのだ。この小說は原作は相當に讀める筈だが、この譯ではあまり面白いものになつてゐない。文例略す。

『影法師』。竹の舍主人即ち饗庭篁村の傳へたもので初め讀者に出た。これはヂッケンズの『クリスマス・カロル』の、先づ飜案的飜譯である。勿論何人かゝら聞き書したのに違ひない。竹の舍にはまだまだ此の種の聞き書きがあるが、これは南翠の新しがりと相對して注意すべき點であらう。

末松謙澄譯有名な『谷間の姫百合』の第一巻が出たのも此の年である。年内に再版が出てゐるのでも持囃され方の激しかつたことが分かる。第二巻以下は文學博士末松謙澄と署名してあるが第一巻だけは二宮熊次郎と合譯となつてゐる。原作を『ドラ・ソーン』といふことは初版の例言にも見えるが、原作者の名ベルサ（バアサ）・ホーム・クレーは再版の例言に至つて始めて見える。譯者青萍逸人は例言のうちに此の書の飜譯の用文についていろいろ語つた後、飜譯の文體その他について、初版の例言に於いて、——

飜譯の體裁は已に普通語となれるもの丶外は力めて漢語を省き且つ古雅に渉らず鄙俚に陥らざる一種の近俗文を用ひたり是れ譯者が最も苦辛したる所にして其目的は獨り目にて見るのみならず丼にて聞くも容易に了解する事を得せしむるに在り

といひ、又再版の例言に於いて、——

此書譯文は力めて言文の一致を期す言文をして一致ならしめんとすれば獨り文をして言に讓らしむる所あるを要するのみならず言も又文に讓つて妨げなきものは宜く幾分歟之を讓るべし因て其初歩として書中御座の二字の如きは語勢上差支なき丈け力めて之を削りたり左樣で御座りますを左樣ですと短縮せし如き是なり

といつてゐるが、言文一致云々は勿論會話だけに限り地の文には及んでゐない。又更に初版の例言で「原書は其文の絶妙なるにも拘はらず重複の字句頗る多し是等は便宜刪略して改良を加へたり」と斷つてあるから所謂原作の全譯ではないとみてよい。一寸衒學臭紛々としてゐるので如何にも讀む氣の出ない物であるが、讀んでみると露伴の『新羽衣物語』に似た味ひの可憐な戀物語である。成人と洋子との交渉よりも綠と瑠璃の双生姉妹の戀物

語の悲喜劇さまざまなのが面白い。第一巻に入つてゐる月耕の畫が餘りよく出來てゐないので當時いろいろと非難されたといふ、成る程餘りいゝ出來とは見えない。挿繪は毎巻畫家を異にしてゐるが、第二巻水乃(野)孤芳の畫が一番面白い。初版と再版以下とで字句に相違がある。左に初版から緑の死のところを文例に引かう。

(前略)緑は寫眞入をしつかと押へ

此れをお見せ申す事は出來ませぬ半藏殿私しは怖がりはしませぬ手ひどいことをしてはなりませぬと云はれて半藏は我を忘れ嫉妬の焔に堪へ兼ね緑が持ちし寫眞入を奪はんとあせれば緑は此所をせんどと片手に寫眞入を押へながら片手に彼方の腕を支へて暫し互に爭ふ中ザンブと立ちたる水煙月に映つて玉なす浪にきやツと一聲女の叫び緑が自から落たりしかそも亦半藏が誤りの怒り可愛さあまツて憎しみの怪の力あまりては遂に緑を落せしか夢を破ぶりし水鳥と梢を拂ふ風のみは知らば知るらん落ちたるまゝ波間をもがきもがきつゝ血走る眼物すごく乾度此方を睨みしが無情の荒波かぶせ來て頓て姿は見えずなりけり良ありて只一度白き兩腕波の間にあらはれ出で最期の際の苦しみに連りにもがくが如く見へたりしがこれぞ此世の別れにてさやぎし水は再び收まり波間を走る小夜風は岸邊の蘆にそよふきて月猶高く空に懸れり

譯者が本書の主旨を概見するに足るといつた香川皇后太夫に呈する書から左の一節を引いて此の項を結ばう。

抑嬢百合ノ作ル所以ハ徒ニ花月ヲ嘲弄シ讀者ノ眼ヲ娯マシメントスルニアラス彼ノ成人夫妻ノ事歴ハ以テ門葉素訓甚タ相懸隔スルモノ漫ニ伉儷ノ約ヲ結フハ終生ノ不幸ヲ免レサルコトヲ示スナリ緑瑠璃二女遭遇ノ異同ハ以テ處女躬行ノ抑揚ニ供スルナリ凡ソ如此ノ類ハ皆世ノ風教ニ關スルモノニシテ云々

原書の主旨より譯者の素志の方が更に明かに見えてゐるかと思ふ。

「優勝劣敗・猿の裁判」。ダーレイ氏原著とのみで原書は何といふのか不明、井上勤氏の譯である。此の書は小說といへば小說、小說でないといへば小說でない。原著者がダーウィンの人猿同祖說を駁撃する主旨で、裁判體の筆記物風に書いたものである。見樣によつては一種の奇書であり、文數が少ないので明治初期翻譯文學中の珍書の一つとされてゐるやうだが、文學的價値は全くない。

フランス物では、「浮世の巷」、これは岡野碩著となつてゐるが、著者の點でも斷つてある通り、實はフランスの小說家ユージェーヌ・シューの『パリの祕密』を翻案風にして紹介したものである。前編だけより見たことがないが、恐らく後編が出なかつたものと考へる。原作については岡野氏はかういつてゐるが、大體原作の意義を正しく把握してゐるといへやう。

此文は巴里の祕密と題せるユージェーヌ、シューと云ふ人の作にて時の立法に不平を抱き發して哲學的の一大寓意小說となりし(そが意をとりて世界を我(日本)に寫りしものなり)其寓意のあらましを揭げなば「法律は貧者に與さず「政府は教へずして制するなり」「惡を罰して善を賞せざれば善を爲す者なし」「法律は時刻を以て不幸者を製造するの機械とす」「女子は法律の犧牲なり」「社會の惡風は法を以て縮むべきに法は却て之を令す」と云ふに在り氏固より法律家にあらざれば其說く所皆法理に當ふや否やは知らず之を作る更に向ふ一念を動し既に國會の議題ともなりて一時藹然たりし傑作にて云々

岡野氏の翻案前編は丁度原作の「第一」の章の四分の一位のところ、少女フルール・ド・マリが惡漢達の群伏に遭

つてその牧歌的な田舍家から再びパリにつれ戻されるところで斷れてゐる。梗概を語るべきであるが、世界大衆文學全集中に入つてゐる武林無想庵氏の梗概は、とてもよく出來てゐるので、私は讀者に武林氏の本をお讀みになることをおすゝめして、こゝでは別に梗概を語らない。岡野氏の飜案は、全然たる飜案で成るべく洋臭をなくしようとしてゐるが、(例へば變裝してパリに種々の祕密を探るゲロールシュタイン太公ロドルフを大日本帝國南洋殖民地日出島太守大公爵准一品北畠倉顯公とし、フルール・ド・マリを百合香姬としてある類)、然し何うにもならないで持て餘してゐるやうな點も見えなくはない。概していへば、よく讀みこなして要領を摘んである點、作者シューの意のあるところを失はぬやうに努めてゐる點は、多とすべきであらう。同じ飜案でも中にはこれは巧いと思ふところもある、スラッシャア(シャルニュール)といふ無頼漢が、ロドルフの生命を助けた褒美としてアルゼリアの領地監督に拔擢されて出かけて行くところがあるが、アルゼリアを北海道にかへて、北海經營の急を說いたところなど、時節柄として恰好の思ひつきとして賞めていゝところである。岡野氏は有名な演藝改良論者であるか、その改良意識を當時の社會の害惡に向けて、自家の意見を述べる代りにシューの此の小說を譯し、これに自家の社會改良意見を述べさしたものであらうと思ふ。

『佛蘭西二人皇后』。 小川忠武譯、(「やまと錦」第一號より)、これはアレキサンドル・デュマ・ペールの「女王の頸環」といふ、革命時代の裏面史の一部を描いたものである。內容は、フランス革命前期の上流社會の爛熟頹廢的氣分を示す一模範とされるダイヤモンド頸飾事件といふ醜聞に一解釋を下したのである。大僧正ロハンとマリイ・アントアネットの間に行はれたといふ此の事件については、大抵のフランス革命史に書いてあり、私も前

に書いたし、又雜誌「改造」その他でこの事件を詳しく書いた人があるから、いさゝか興を殺ぐ意味で、こゝでは何もいはぬことにしよう。

探菊散人の『殘花憾葉櫻』もこの年だが、自序によると、フランス小說の翻案である。

その他フランス物としては、ヴェルヌの小說の譯を澤山紹介されて居り、又盛に再版されてゐることを記憶されたい。

『**椿の花把**』。アレキサンドル・デュマ原著とあるので大抵知れやうが、有名なデュマの『椿姫』の翻譯である。譯者は加藤紫芳、先に『鍛鐵場主』を譯した加藤瓢乎と同一人である。初め讀賣新聞に連載されたといふが、後に『小說萃錦』に收まつたものが、やがてそのまゝ合綴されて、單行本とされてゐる。英譯からの重譯かフランス語からの原語譯か、判然とはわからないが、前の『鍛鐵場主』も、フランス人の原作を、直ちに譯したらしい痕跡があるから、これも矢張り、大體原語譯と見てよからうか。本譯といつて可い程度の翻譯ではないが、省略の箇所も要領よく省略し、一章を一章として譯してある。私意で好い加減に剪裁を加へたものではない。大體滿意すべきものであらう。文例を引く、――馬耳牙理の改悛のところ、――

（上略）穴掘等は並の荷物にても取り扱ふ如く、いと無造作に開きに掛りしが棺桶は釘にて堅固堅牢に出來て居たれど地の中に在りて螺旋の錆み居たる爲め容易く蓋が開き同時に得も言れざる臭氣紛々と發散し植ゑたる樹木の若香も夫が爲め香りを失へり穴掘等は此の臭氣に鼻を押へオヽ臭ひと云つゝ後へ飛び退きしが警吏官は役目なれば迯げ除く事も成らず迷惑ながら側に立寄り阿耳曼等と共に棺の中を差覗けば死體の上に白布を被ひ置の

先が少し現はれて居るのみなりしが警察官は此ときまた穴掘に對ひ「早くせよ」と命じたるにハイと對へて一人の男が手を延して其布を解き端を摘んで引退れば阿耳曼が待に待たる瑪耳牙理が現はれたり其面相の悪しさ話すもなか／＼物凄く兩眼が朽て穴のみ殘り脣は腐れ落て白き歯をむき出し黒き髪の毛は亂れて顳顬に附着し青き頬を蔽へり左れど余は此怖しき顔が世に在る間は雪の如く白くして頬は薔薇を彩り類少なき美人なりし事を知れり阿耳曼は變り果たる此姿を見て悲歎の涙胸に迫り腸も絶るばかりなるをヂット堪へてハンケチを口に嚙みしめブル／＼慄へ居たりしが云々

フランス物が幾分退歩した氣味があるのに、引換へて、いきなり躍進を續けて來たのは、ドイツ文學とロシア文學である。これに反して伊太利、西班牙等の南歐文學は殆んどなくなつた。これは矢張り當時の日本の國家的關心を反映したものと見て然るべきであらう。

此の年譯刊のドイツ物には何ういふものがあるか。

『波斯奇談・奇遇夢物語』。横山峯一譯、横山氏は鳥取縣の人といふ。此の飜譯の主旨はその緒言に見えるが先づ「今日は萬事改良の世界也、されば小說も改良すべし」と論じ、進んで

今日吾人は宜しく是が改良を施し兒女を教育するの一部分と爲す事こそ簡要ならめ是れ則ち新奇の著述あり歐米小說の譯書ある所以なり

といつてゐるので大體分かる。又此の飜譯の由來と原書についてはかういつてゐる、——

余は去る八月暑を上總國鹿野山に避け獨英米の小說を繙きて讀みたるに實に爽快を與へたる中にも獨逸千一夜

物語は情を解き得て妙なりとこれを人に聞く歐米にてアラビヤ ナイトと共に有名の小說にしてこれを讀まざる者稀なりと是に於いて千一夜物語の内を和譯して名けて波斯奇談回春物語といふ云々

わたしは寡聞にしてドイツにさういふ小說があるか、又何人の作であるかも知らない。然しこの譯を讀むとこれは通常の『アラビヤン・ナイツ』の末段と同じやうである。然し今譯者の言を尊重して別のものとして見て置く。今此の譯書を一讀すると、意譯を巧みにこなしたところがあるかと見れば叙もぎくしやくした直譯にするなど、概して譯文拙劣、又周延の挿繪も面白くない。文例は略して梗概だけを述べよう。

卑賤の出生の三姉妹は或る時希望を述べ合ふ、長二人は王の麵麭燒と料理番に嫁したしといひ、末は王妃になりたしと誓ふ。折ふし微行中の王はこれを聞いて各々その希望をとげさす。日の經るにつれて長姉二人は大いに妹の身分を嫉妬し、亡き者にしようと巧む、そして妹が生んだ三子をその都度、犬、猫などの死骸とすり變へたので、遂には王も不興して王妃を魔法使として牢獄につなぐ。此の三子、即ち二人の王子と一人の王女とは、そのすり變への都度、川に流されたが、丁度折よく老園丁に拾はれて養育された、長がバアマン、次がペルウィス、王女はパリツァデーと呼ぶ。老園の苦心により何れも諸藝に熟達する。老園が死んだ後の或る日、一老女が來て滿舌鳥、歌樹、金色泉の三奇事を告げる。王女は王子に勸めてこれが探索に赴かしめる。第一に出かけた王子バアマンは、種々冒險の後、一人の乞食僧から、三奇事の在處を聞くが、とゞ、その戒めを破つたので化石する、次にペルウィスが出かけるが、兄と同じ運命にあふ。最後に王女パリツァデーが出かけ、やうやく三奇事を發見し、且つ二王子を蘇生さして共に歸着す。三人宮裡幸福な生活に入る。或る時、王は獵して二王子に遭

つたが、二人の由來を尋ねて奸惡な姉達の悪計を知り、王妃を救し、王子を宮中に伴つて、王室がめでたく繁昌する。

『春雪馬利御最期』。　これは單行本ではない。明治二十一年二月二十八日から三月二十八日迄七回に分けて配付された東京日々新聞の附錄である。その合本になつたのが往々古書肆の店頭などに見かける。原作はシルレル作『マリア・ステュアルト』だと斷つてあるが、本文を讀んでみるとどうもドイツ原語から譯したものではなく英譯からの重譯である。譯者は署名してないが福地櫻痴である。全五幕の中、第一幕だけは忠實に原作を模さうとして七五調を地にした逐字譯を用ゐてゐるが、「第二幕よりは譯本の體を一變し專ら筋書の體裁を用ゐて趣向の絶妙奇警を示す」ことになる。緒言にはメリ・ステュアートに關する史實が詳敍してあり、編末に此の書飜譯の用意、史實と脚本との相違、シルレルの作意、各幕の細評を述べたものを附錄としてある、飜譯としては親切此の上もない。内容はメリがエリザベス女王によつてフォーゼリンゲーに幽閉されてから處刑されるまでゞあるが比較的忠實な第一幕から文例を引かう、――乳母ハンナ・ケネディと差向つての述懐の一節である。

(馬)ア思へば〳〵其昔しわれ世に在りし其頃はわが氣に入らんと爭ひて機嫌とり〳〵佞ひしも今は昔に引かへて苦き言葉に窘なまされ心ぐるしき此樣は我身に報ふ宿業と思へば恨なきものを(中略)…彼が面を見るにつけ怒に堪へて談禮(メリの先夫)が苔蒸なせる荒墓の下より出て怨言のぶる心地のせらるゝぞ我身に祟り玉の緒の絶るを見ざる中は去し恨の霽ざるか

(賢)とは又なぜで御座ります

（馬）半者其許は忘れもしつらんが忘れがたきは我が罪科重き惡業つくりたる其の命日も正しく今日心ばかりの追善も責て懺悔の功德せん

（晉）良や恨の侍るとも永き歳月あさましや此の世からなる地獄の苦み怨みも夫にて晴つらん況てや當世高僧の法の力に導かれ今は解脱をせしならん

（馬）イヤのふ其の罪業の重ければ我が無き夫の執念は我に纏ひて鬱憤を晴さんものと我をせめ日ごとに見ゆる苦患の數々祇園精舎の鐘の音は諸行無常と響くとも深き怨の執着は凝り固まりて解はせじ世に有り難き御佛法に秘密の功力たへなるも飽まで執ねき怨靈の胸の焔は消やらじ

『旅路の空』。ヴィルヘルム・ハウフ原作『メルヘン』集たる『隊商』の飜譯、譯者は稻城田中鉛吉、幻夢生秋元隆太郎の二氏、（一）鶴鳥加里夫王之譚、（二）波登実救助譚、（三）美少年耶奇参之譚、（四）斷臂譚の四篇が收まつてゐる。アラビヤ沙漠橫斷の隊商が同じ沙漠の騎馬武者隊と遭遇して、一夕徒然を慰めるため物語の席帳をひらく、それが發端なので『旅路の空』と題したのであらう。何れもドイツ語からの原語譯であることは一讀したゞけで分かる。話（一）は魔呪によつて鶴鳥となつた加里夫が魔呪を忘れたので元の人間に還るに苦む話、話（二）は義賊阿流山が牟斯多を助けて美人波登実を救出す話、話（三）は少年耶奇参が老女魔に誘はれてその使役にされたこと、故郷に歸つても姿形が變つてゐるので兩親にさへ相手にされないこと、老魔から教はつた料理法で王の料理頭に立身すると、鵞鳥に化身された美人の助けによつて昔形に復ることとの話、話（四）は希マンヂヤと醫師官呂奇のこと、醫師が希マンヂヤの復讐の手先に使はれて花嫁（姉妹の娘）の首を斬つた爲め、斷臂の刑をうける話。

四篇何れも面白い。譯文も、いづれ逐字譯ではなからうが、平易流麗、些も苦澁でない。譯者の造詣もさこそと思はれる。第(二)の耶香夢少年が老魔の家に作はれたところを一節引く。

此の時老母は長き椅子を耶香夢の前に持ち來りて慥と据ゑ居き其側には彼の飯臺を連ねて次第々々に部屋の隅に押し付け最早是處より出ることのならぬ樣にとりなしたり老母は童にうち向ひ(老)噫ぞ和兒は疲勞れてありつらん先づ此の椅子に坐り給へ年倚を幼なき和兒の力に人の腿脊を負ふことさこそ疲れてありつらめと云へば耶香夢は訝かりて(耶)和女はさのみ恐ろしき事宜ふやよしや疲れてありつる共たかの知れたる蕪の籠なるに何程のことやある和女は吾が母の店にて買つる事を忘れしか(老)然か思ふは誤れる也先づ此の蓋を開け給へと云ひつゝ莞爾と打ち笑みしかば童は益々訝かりて籠を手元へ引き寄せつ蓋を開けば異むべし今まで蕪と思ひの外身の毛も竦つ二三の腿脊ゴロ／＼と轉げ出でしにぞあなやと許り驚きたる云々

『妖怪船』。譯者は杏堂散史高橋禮五郎氏、例言に

本書ハ獨國ノ小說家ウヰルヘルム、ハウフ氏ノ著セル小說集ヨリ「隊商」ト名ケタル一編中ノ一章ヲ譯セルモノナリ云々

原書が矢張りハウフだといふことがこれで分かる、又

譯文ハ專ラ平易流調ニス故ニ稍ヤ卑俗冗長ニ流ルヽヲ免レズ

といつてゐるので飜譯の用意が分かる。編中小林英といふ人の筆になる彩色挿繪が二葉ある。船上月佇きところ幽靈の出てゐる一葉が殊に面白い。表紙の模樣も奇拔である。内容よりせば『幽靈船』といつた方が一層當つて

ゐる、除雨の一人デハメットなる者が仲間への物語の體となつてゐる。かつて或る海で難船して何處かの大船に漂着した、此の大船には金銀財寶數多あるが生人が一人もゐない、たゞ甲板に互ひに斬り殺し合つた體の死人が二三十人ゐるだけである、ところが夜になると此等死人が生き返つて在りし日の修羅を繰り返す、これが毎夜續くので、丁度船がインドの或る港についたのを幸ひムウレイといふ呪法者に依つて幽靈を退散さして貰ふ、此の時帆檣に釘附にされてゐた船長の靈の告白によつて、彼等が無慘な死をとげさせた族僧の呪りであつた、とわかる。これは嘗て明治初期飜譯文學では珍本の一つであつたが、今ではさうでもない。

ロシア文學に就ては、ツルゲネーフ移入の外、數の點ではいふに足らないが、そのツルゲネーフが後來明治文壇との交渉で重大な意義をもつので、刮目して語る必要がある。

『あひびき』。明治飜譯文學の正調定まる。 明治二十一年の『國民之友』第二十五號(七月六日)第二十七號(八月三日)の二冊に、『あひびき』といふ題でツルゲーネフの小説が二葉亭四迷譯の名で公にされた。量からいへば僅たる一短篇で、當時無心の一般讀者に何れ程の感銘を與へたかは疑はしいが、これを今日から歴史的にいへば、實に眞の意味で明治飜譯文學の正調、その本流を告げる第一聲であつた。

誠に明治の飜譯文學の正調は此の『あひびき』の一篇が公にされるに至つて定まつたといへる。私の所謂第三契機は此の『あひびき』によつてもたらされた。然かも順序は第三であるが事實は劃期的の重大さをもつたものであり、これ以前の時期なり變化なりを全部これの出現に到る準備にもしめる程目覺ましいものであつた。今日『あひびき』の有名なのは、飜譯文學の正調を定めたといふよりもむしろ後來の明治文壇に多大な影響を及ぼし

た點からであり、或る程此の點では初期の『花柳春話』の淺くて廣い影響に比して深くて遠いものを與へてはゐるが、さういふ點から引離して一篇の飜譯として見ても、形式內容ともに淸新な革命的なものであつて、これと對照するときには、優にこれ以前の諸期を總括して飜譯前期と呼んで可いだけの價値鈞重がある。

然しながらいかに革命的といひ條、『あひびき』は何等從來の飜譯文學、飜譯意識又は飜譯態度に負ふところがなく獨自の天才によつて獨自に生じたものであらうか。從來の文藝史家は『あひびき』を過褒のあまり多少さう見る傾向がありはせぬか。が、私としてはかういふ見方に疑問をもつ。事の成績からいへば天來的に見える『あひびき』も、仔細に觀察すると矢張り從來の飜譯文學の總てから、從來の飜譯意識なり飜譯態度なりから何等かの點で負ふところのあるものと見るのを妥當としないであらうか。私は先づ『あひびき』の特徵を一瞥したい。『あひびき』の飜譯としての特徵を、從來の飜譯文學と照合して擧げてみれば、形式卽ち文體としては、言文一致であること、內容としては、從來屢々飜譯の理由として揭揚された世道人心の稗益云々や西洋早や學びの教科書的なものでなく、純藝術的なものであり、飜譯の動機も純藝術的感興によること、此の二點を容易に擧げることが出來やう。

さて飜譯文學が言文一致と結び付くに至つたのは二葉亭四迷をもつて嚆矢とするのは今日の通論であり、大體異論はないが、然し私はかう附け加へたい。二葉亭以前既に飜譯文學には口語の分子が次第に多くなり、言文一致に結びつくべき機運が動いてゐたと、此の事は私が前にもいさゝか記して置いた筈である。二葉亭をもつて此の機運までも創造したとなすのは間違つてゐると思ふ。さてその二葉亭の用ゐた言文一致の飜譯文體は何ういふ

ものか。私は第九回以來、明治十八年『繫思談』が出現してから翻譯文學界に周密文體なるものが行はれ、それが森田思軒に至つて大成したことを述べた。わたしは二葉亭の翻譯文體が、此の周密文體が言文一致の精神と結合して一新體を生じたものであることを斷ずるに躊躇しない。後に文例を掲げるが、『あひびき』の文章はその言文一致といふ點を別にせば、宛然たる周密文であることが容易に看取され得る。事實、二葉亭は周密文體の大成者森田思軒の崇拜者乃至愛好者であつたことは、彼の愛讀書十種中に思軒の『探偵ユーベル』のあるのを見ても知られるのである。勿論周密文體を言文一致に結合させることは一種の革新事業であり、これには偉大な天才の作用の要ることはいふまでもない。だが以上によつて『あひびき』が、歴史的にいつて從來の翻譯文學と全然無關係な條件の下に生れて來たのでないことだけは推知されやう。

此の周密文體と言文一致體を結合させた點から、私は『あひびき』を明治翻譯文學の劃期的轉機であり、所謂正調を定めるものといふのである。

轉じてその內容的特質、卽ち純藝術的といふ點に至ると、從來の翻譯文學との間に根本的相違がある。從來の翻譯文學は、多くこれによつて西洋を敎へ、西洋の人情風俗習慣學術奇事あらゆるものを敎へ、所謂世道人心の稗益云々を主眼としたものなることは今更こゝで述べるまでもない。純藝術的なるものゝ紹介のないのは當然である。よしあつてもその紹介の仕方が全然如上の目的によつて支配されてゐるので結果は同じである。二葉亭が純藝術的作品を選んでその純藝術的內容をそのまゝ紹介したのは、彼の藝術眼がいかに淸高であり、彼の藝術家的天分が如何に豐富であるかを證して餘りがある。此の紹介の仕方こそ、從來の翻譯文學に對して革命的相異を

建てるものである。『あひびき』の飜譯革命的意義を主として此の點に置きたい。

『あひびき』の出た當時の一般讀者は何れ程の感銘をもつてこれを讀んだか。虚心に想像して、此の言文一致の文章と清新滴るやうな内容とからさへ、妙なものだ、變なものだ、バタくさいコヂれたものだ位の印象より與へられなかつたらう。だが少數の純な心の持主には一種の藝術的天地の開眼となつた。此の開眼を受けた連中には後來明治文壇の驍將となつた國木田獨歩、田山花袋、島崎藤村などの青年がゐた。

『あひびき』や『めぐりあひ』の譯が『國民の友』に出た頃、私は白金の學校にゐた。二葉亭氏といふ人は其時代から私の胸に刻みつけられた。私ばかりではない。私の友達は皆な左樣だつた。柳田國男君が若かつた頃私は君と一緒にある雜木林の中で夕方を送つたことがある。『あゝ、秋だ――』と其時柳田君は『あひびき』の中を私に諳誦して聞かせた。あの一章は私もよく諳記したものだ。國木田君があの飜譯を愛誦したことは『武藏野』の中にも書いてある。（島崎藤村氏『長谷川二葉亭氏を悼む』）

もつて一斑を知るべきであらう。

『あひびき』（原名同）は英譯『獵人日記』の第十九篇に當る。左に「國民之友」掲載のものから文例を引かう。

秋九月中旬といふころ、一日自分がさる樺の林の中に座してゐたことが有ツた。今朝から小雨が降りそゝぎ、その晴れ間にはおり〳〵生ま煖かな日かげも射して、まことに氣まぐれな空ら合ひ。あわ〳〵しい白雲が空ら一面に棚引くかと思ふと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押し分けたやうな雲間から澄みて怜悧し氣に見える人の眼の如くに朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けて

ゐた。木の葉が頭上で幽かに戰いだが、その音を聞いたばかりでも、季節は知られた。それは春先する、面白さうな、笑ふやうなさゞめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し聲でもなく、また末の秋のおど〳〵した、うそさぶさうなお饒舌りでもなかつたが、只漸く聞取れぬ程のしめやかな私語の聲であつた。……………………………………………………………………

ア、秋だ！　誰だか禿山の向ふを通ると見えて、から車の音が虚空に響きわたつた。……

二十九年刊『かた戀』の中に收まつてゐる『あひびき』は多少辭句を訂正されてゐる、注意して讀まるべきだ。

以上のやうに、二葉亭四迷の『あひびき』の一篇はよく明治飜譯文學界の正調の基礎を定めた。だが當時の情勢からいへばそれは先驅ともいふべく、その定めた基礎が堂々と正調となるには未だ多くの時日を要した。それで二十一年から二十二年の飜譯文學界は依然舊來の周密文體を主流とし、傍流いろいろこれに沿つて續いて行くのが見られる。

同じ譯者の『**めぐりあひ**』は、前記島崎氏の記憶では『國民之友』に出たやうになつてゐるが、さうではなしに金港堂の『都の花』に出たものである。ツルゲネーフの短篇『トリイ・フストレーチイ』（英譯 Three Meetings）といふものゝ譯であるが、これも『あひゞき』に劣らぬ程の感興を敏感な青年に與へたことは、島崎氏の言でも知られる。『あひゞき』の方が、主として新しい自然の見方を教へたのに對し、この『めぐりあひ』の方はその繊細ないやうなロマンチックな詩的情緒が讀者の心に新しい世界を啓示したものであらう。これは、二十九年刊の二葉亭飜譯集『かた戀』の中に『奇遇』と改題して收めてあるが、文章がやはりまるで書きかへられてゐる。

待ちわびるでもなく、又昔しの仕合を憶ひ出すでもなく、何とも言へぬ感情に胸を惱まされて、自分は背て身動をもせず、此月の光と露とを浴びた寂然な園の前に立在んで、どういふ積りか、只管やさしいうすくらがりの中にほの赤く見える夫の二つの窓を視詰めてゐるとふと家内に accord（調子を諧せる音）が響いた……自分は我知らずぶる／＼とした。

此のツルゲネーフの淸純な感化をうけた人達は、大抵後に三十年代になつて自然主義文學の闘將とうたはれた、思ふに日本自然主義の特色の一つがこゝにやはりありはせぬか、主情的なロマンチックな氣味を帶びたあの特色がこの邊から尾を曳いてゐはせぬか。

「雷霆帝」。コキャーエフの『ヨワン・グローズヌイ』（イヴン雷帝）の譯で、東京日日に掲載されたもの、譯者の樹下隱士とは何人か、未詳である。この歷史小說の紹介の如きは、明白に、時人のロシアなるものに對する關心の現れと見ていゝ。冒頭の處に、「頭を高加索に擡げ、尾を東察加、差我廉等に乘れ、爪を磨ぎ眼を鋭くして印度の良港を窺ひ支那の隙に乘じて滿洲を攫取せんとするものは誰ぞや」云々といふ作者の文句が添加されてゐるのでも、それが知られる。此の小說は、大體イワン帝が如何にして貴族の跋扈を制して帝權を固めたか、帝權を固めるためには一切のものを犧牲にし、あらゆる殘忍な手段も辭せなかつたこと、從つて奸臣の跋扈と密告政治が公行し、貴族等が如何に無辜の死をとげたか、都府が如何に理由のない使伐を被むつたかが、事細かに語られてゐる。帝、皇太子、奸臣マリユタ・スクラドフ等の慘虐な行爲を經とし、滅亡貴族の遺孤たる壯士ウラジミール、リユボーフ姬などの運命を緯として、閒々ロシアの當時の形勢を傳へ、露帝代々の征略主義一朝に成つた

のでないことを明らかにしてみせてゐる。イヴン帝の晩年の幹部をボリス・ゴドノフの出身をもつて結末としてあるが、ロシアといふものゝ起源を知るには必要な小説である。

一三

探偵小説。「繋思談」の條やその他で、「繋思談」以前の翻譯は概して内容偏重、内容さへわかればあとは何うでもいゝといふやうな主義だといふことを述べた。森田思軒が外形内容併重主義の翻譯の大成に貢獻したといふ意味で、此の内容偏重主義を徹底させ、寧ろ意識的自主的に和風を帶びさせて大當りを取り、大衆的に翻譯文學の流行を盛にしたのが黒岩涙香である。涙香小史の名が明治の翻譯文學界に擡頭し始めたのは明治二十年から二十一年にかけてのことである。

涙香のことは世間の人がまだよく知つて居り、彼の翻譯の多くは現に可成り讀まれてゐる上、嚴密に考へてみて翻譯といはんよりもむしろ梗概翻案に近いものであり、且つその數が隨分夥しい上その範圍が探偵小説に限られてゐるので一々取り立てゝ論述することはやめよう。こゝでは翻譯に對する彼の態度を彼の言葉をかりて一瞥するだけにする。明治二十二年五月刊の『法廷の美人』の序文を見ると、涙香が何ういふ態度で翻譯したかといふことが大體わかる。

「後暗き日」を「法廷の美人」と題するは頗る不當なり、否寧ろ僭越なり、然れども本文に至つては更に僭越より甚だしき者なり、余は一たび讀みて胸中に記憶する處に從ひ自由に筆を執り自由に文字を綴りたればなり

稿を起してより之を終るまで一度も原書を覩はざればなり、原書を書齋に遺し置きて筆を新聞社の編輯局にて執りたればなり、斯く原文に合はざるは言ふ迄も無く、趣向も又原趣向に合はず、之を譯と言ふは極めて不當なれど、譯に非ずと言はゞ又剽竊の譏り模倣の嫌ひを免れず、依て強て譯と言ふなり、本文既に斯くの如し、故に其表題の原書と異るは咎むべし、怪しむべからざるなり、不當と言はゞ言へ僭越と譏らば譏れ、余は飜譯者を以て自任する者にあらざるなり。

これによつて涙香自身既に自分の飜譯小説を飜譯と見なかつたことがわかるのである。明治二十一年から二年にかけて何ういふものを飜譯してゐるか、左に表にして掲げて置く。

明治二十年『**法廷の美人**』（二十二年五月單行、今日新聞）原作ヒュー・コンウェイ『後暗き日』

明治二十一年『**裁判小説人耶鬼耶**』（二十一年單行、今日新聞所載）原作エミイル・ガボリオー『寡婦ルルージュ事件』

同　年『**有罪無罪**』（二十二年單行、繪入自由新聞）原作エミイル・ガボリオー『伯爵の祕密』

同　年『**似而非**』（二十三年單行、『惡黨紳士』と改題、繪入自由新聞）原作フォルチュネエ・デュ・ボアゴベイ『封ぜられし唇』(Sealed Lips)

明治二十二年『**魔術の賊**』（二十二年單行、『銀行之賊』と改題せるもあり、繪入自由新聞）原作米國小説『ドナルド・ダイク』

同　年『**梅花郎**』（二十三年單行、繪入自由新聞）原作者はジョオジ・マンヴィル・フェンといふが、彼の何作かは未詳

明治二十二年『美人の手』（二十三年單行、「片手美人」と改題、繪入自由新聞）原作フォルチュネエ・ボアゴベイ『義手』

同　年『無殘』これは創作小説で二十二年七月「小説叢」で發表

同　年『塔上の犯罪』（二十三年單行、原譯名「此の曲者」、繪入朝野新聞）原作フォルチュネエ・ボアゴベイ『The Angel of the Chimes』

同　年『眞ッ暗』（二十二年單行、繪入自由新聞）原作アンナ・カサリン・グリィン『リイヴンウォース事件』

同　年『決闘の果』（二十四年單行、東西新聞）原作フォルチュネエ・ボアゴベイ、同名

同　年『美人の獄』（二十三年單行、繪入自由新聞、これに丸亭素人と共譯なり）原作フロレンス・マリヤット作といふ、未詳

同　年『劇場の犯罪』（二十三年單行、都新聞）原作フォルチュネエ・ボアゴベイ『オペラハウスの犯罪』

同　年『幽靈』（二十三年單行、都新聞）

發表年月未詳『裁判小説大盜賊』（二十二年單行、繪入自由新聞）原作エミイル・ガボリオー『書類百十三號』

同『銀行奇談他人の錢』（二十二年單行、都新聞か）原作エミイル・ガボリオー、同名

同『海底の重罪』（二十二年單行、何新聞か未詳）原作、ボアゴベイといふ、未詳

同『指環』（二十二年單行、都新聞）原作フォルチュネエ・ボアゴベイ『猫眼石の指環』

その原作のわかつてゐるものも分かつてゐないものもあるが、フランスのガボリオー、ボアゴベイの探偵小説

を主とし、英米の作家がこれにつぐ。此の大量生産を見て、如何にその人氣に投じたかを察すべきであらう。涙香は日本の講談を西洋流で行く覺悟でやつたものに違ひない。而して此等の作の多くは今日なほその魅力を失はずに反覆讀まれてゐる。飜譯に用ゐた文體は純然たる言文一致でこそなけれ(會話だけ口語)、極めて平俗な大衆の耳に入り易いものであるが、一旦得意の場を寫すときには、筆端に何ともいへない魅力と鬼氣があつて、立派に涙香體ともいふべき文章を成してゐることは、世間の讀書人のよく心得てゐるとほりである。

以上涙香流の飜譯態度は涙香一人にとゞまらず、遂に主流にはならなかつたが、一種有力な傍流として明治飜譯文學界を經、今日までも多少續いてゐる。

一四

明治二十二年に於ては、前年についで飜譯文學界に於ける新陳代謝の機運が愈〻促進される。量的減少も前年來引續き、又質的變化も、飜譯動機も前年萠生したものが次第に生長して來る。飜譯の形式も長篇が少なく短篇が主體となつて來る、文章も思軒調の周密文體が漸く一時程勢が強くなくなつて、二葉亭流の言文一致、鷗外流の擬古調等が、興味を惹き、又それと共に北歐獨露の文學が次第に時人の關心を增加し、南歐伊西のものは影をひそめる。總體に古典がぐつと減じて近代現代文學が紹介されるやうになつた。英國物は依然數的には壓倒的に多いが、文壇の興味から漸く遠くならうとし、英學、英語學研究の副產物的存在になりさうな形勢になつて來てゐる。いはゆる意味での政治的分子は殆どなくなり。あつてももう自由民權ではない、廣い理解による社會的根

據をもつたものと變つて來る。何れからいつても二十一年、二十二年は明治飜譯文學界の一轉機たることは明白に看取される。

郵便報知新聞の『嘉坡通信・報知叢談』はこの年も續く、而かも此年主として譯筆をとつてゐるのは、思軒自身でなくて門下格の原抱一庵であるらしく、こゝにも亦一種の交代を見るのである。その記載された作物を擧げると、――

○探征隊　西濟生譯（二十二年一月―三月）
○代言人　臥禪居士譯（二十二年四月―五月）
○猿聲　同（同　五月）
○まちがひ　同（同　同）
○是はソモ　同（同　同）
○月珠　省庵居士譯（同　六月―十一月）

これに準ずべきものに

○衞士　抱一庵主人譯（同　十一月―十二月）

此のうち讀むに足るものは『探征隊』と『月珠』だけであらう。『代言人』から『是はソモ』まではほんの一二回の短章で格別面白いものでもない、又『衞士』は、可成り面白い活劇を生じさうであるが、新聞に出たまゝのと

ころでは、眞の發端であり、いつ頃のことかもよくわからず、又篇中の各人が如何樣の運動を辿るのかも分からない。たゞ米國の或る戰爭（南北戰爭か）に關するものであることは察せられる。今のところは、これ以上は語る材料がない。

『探征隊』は何うもジュール・ヴェルヌの原作らしいが、それもまだ考定してゐない。スコットランドの貴族エドワード・グレナーバンが新婚旅行のヨット遊びの歸途、密書の入つた壜をひろふ。それを見ると、文字が海水に浸みてよくわからぬが二年前、ブリタンニカ號が難破したとき、船長グラントが救助を乞ふ者を認めたものである、紙中その難破場所の緯度が書いてあつたので、グレナーバンは斷然グラント一行を搜索しようと決心する。新妻のヘレナもこれを助ける、更にグラントの二子メリー及びロバアトといふ少女少年が一行に加はるので、大に活氣を添へる。一行は先のヨット、ダンカン號に乘つて難破船の消息を求め、南米パタゴニヤに至り、そこを隈なく探險するが、そこではグラント等の消息が得られない。ところが、よく考へてゐると密書の讀み違ひからパタゴニヤに來たことが發見されたので、グレナーバンの一行は更に濠洲に向はうとする。こゝまでゞ譯載された分は中絶してゐるが、多分この先き又濠洲に着き、一行は濠洲探險を遂げ、こゝでグラント一行を見つけ得るであらう、こゝにもグラント一行が見當らずば、又更に他の土地へ向けて出發する、かくしてヨットで世界を一周することになるのかも知れない。

『月珠』は、ウイルキイ・コリンズの『ムーンストーン』の譯で、省庵居士とは抱一庵主人と同じ人である。前々の臥禪居士も恐らく抱一庵主人のことであるまいか。『ムーンストーン』は頗るつきの長篇であるが、省庵

居士は原書の第一編『ダイヤモンドの喪失』に當るヴェリンダァ夫人ジュリアの從者ベテレッヂの手記の終りのところまでを殆んど逐字譯的に紹介してゐる。『ムーンストーン』の梗概を知らうとするには、今日便利な冊子が出來てゐるから（改造社世界大衆文學全集中）、それによつて頂くこととして、こゝではたゞ文例を示して、蓄庵居士即ち抱一庵の文章が如何に思軒に似てゐるか、といはんよりは如何に極力思軒を模してゐるかといふことを示さう（彼は終生思軒の影響を脱しきれなかつた）。

印度には古來月珠と云へる有名の黄色ダイヤモンドありこは舊と四の手ある佛像の額にはめありしものにして此の佛像は即ち彼國にて月の神となす所なり而して此のダイヤモンドが一には其色黄なるより又た一には其の月を表する佛像の額に在りて其の光澤常に月の盈虚につれて增損するとの言ひ傳へよりして斯に月珠の名を得たり耶蘇紀元一千年代回々教の敵將マモード戰勝の勢を以てソムノースの靈地を陷れソムノースに數百年來存立せる最舊の寺院を取りて其の寶物を抄略せり彼の月の佛像も當時其の寺院の中に在りたりしが幸にして三個の僧侶のために救はれて回々教徒の手に落つるを免れたり三個の僧侶は夜中潜かに之を擁して逃れ走り印度にありて第二の靈地なるベナールスに投じたり云々

月珠の何物なるかを引用で說明するため此の一節を引いたが、こゝは比較的思軒に似てゐないところである、それでさへかくの如くであるから、その似たところは、全く識別し難いものがある。

以上は以上として、此の年譯刊された飜譯文學を語れば、先づ古典としては、古いも古いアリストートル時代のものが一つ。

『人さまざま』。一名を『氣質の繪畫』といふ、自笑居士譯で此の年讀賣新聞に連載され、後單行本となつた。原本は有名なギリシヤ古典、セヲフラスタスの『キャラクタアズ』(Characters)で、それをヲーベルマイエルのドイツ譯から重譯したものである。いはゞ日本の氣質物の類で、別に筋立つと小說といふのではない。(第一)腹の知れぬ人、(第二)おべつかる人、(第三)おしやべりな人、(第四)おひやくしやう、(第五)愛嬌を賣る人、(第六)わるすれもの、(第七)口聞たがる人、(第八)虛說家、(第九)あつかましい人、(第十)吝嗇人、(第十一)無作法なる人、(第十二)トンチンカンな人、(第十三)おせつかいな人、(第十四)虛氣もの、(第十五)物節のわるき人、(第十六)御幣かつぎ、(第十七)不滿なる人、(第十八)邪猜する人、(第十九)身體のむさくろしき人、(第二十)五月蠅き人、(第二十一)作飾を爲る人、(第二十二)根性卑しき人、(第二十三)自慢する人、(第二十四)高慢なる人、(第二十五)臆病なる人、(第二十六)共和政府の貴族黨、(第二十七)年にも恥ぢぬ人、(第二十八)毒舌家、(第二十九)邪黨辯護人、(第三十)根性きたなき人(あたじけなし)の三十型の人間が收まつてゐる。

『悲風慘雨・倫敦塔』。ウィリアム・ハリソン・エィンズウァース原著、原名も同じく『ロンドン塔』、譯者は三木愛花氏、既に意譯と斷つて居り、又序文にも

(前略)因て急に稿を起し。其妙處を抄し。枝葉を捨て。通じて一書を作す。要するに裒然たる大著を以て。譯して一小冊となす

といつてゐるので、全譯でないことがわかる。これを原書と對校してみると、前半は稍や詳しく、中間數章は省略に從ひ、更にダッドレイ叛を謀るところが一章あるだけでそれ以下はない。或る意味で本書の見せ場ともいふ

べき肝心のジェーン・グレイ死刑のところなど、全然省かれてゐる。三木氏は更に序文で譯者の意旨をかう述べてゐる、——

抑英國は方今世界に雄視し萬國其鼻息を伺はざるなし。而して其倫敦も、亦英國第一と稱する大都府にして、之が旺盛を說かざるものなし。今試に此雄視旺盛の原因を求むれば其原因別に有り。倫敦塔をして、世界無比の大牢獄たらしむるも未だ以て四隣の外敵を閉し、一國の反民を懾服するを得ず。英國今日の雄視、倫敦今日の旺盛に於て。何の功か有らん。（中略）嗚呼天下の安寧は、長城に依らず。國家の隆興は牢獄に依らず。讀者之に悟つて益する所あらば。譯者が蕪慢の罪は。問はずして恕する所あれ。

本書の紹介を國民的自覺に益あらしめんとてゞあることが察せられる。やゝ政治小說めくところのあるのは、いふまでもない。

『家庭教育・園の咲分』。オリヴァ・ゴールドスミスの『ヴェークフヒールドの牧師』の翻譯で、譯者は泰東居士植木貞二郎といふ。「弟妹を益せんため」などと標榜してゐるが却々好い譯である。此の翻譯書は少いものであるが、他の人の手に成る譯書が坊間よくあるから詳しく述べない。珍らしくも饗庭篁村の序文がある。

女學雜誌に『理想紳士』と題してミス・マロックの『ジョン・ハリファラクス・ジェントルマン』が譯載されてゐる。譯者は月の舍しのぶといふがこれは女學雜誌の主宰者巖本善治の匿名であるといふ。「はしがき」にいふ

嘗て女學士先生の「理想紳士」と云へる社說四回を讀み、後に斯る紳士のあれかしと切望したり。因てミのロック孃が、「ジョン、ハリファックス、ゼントルマン」を讀るに及びて、端なくも此に觸する一個の理想紳士

を得たりける、則はち其大要を摘み、之を本邦の出來事に直し、少さか先生と感を同うするの意を表す、實に是れ女性が理想する紳士の高尙ならんことを祈るが爲めなり、忍識す

女學雜誌としては恰好の小說を得たものであるが、然し『ジョン・ハリファックス』は決して敎訓小說としてのみ讀まるべきではない、その小說としての成功が更にこの書の敎訓をして成功させたものである、この點では『天路歷程』と同じことである。共に小說として立派なものであるが、紹介の動機が動機なので後世いゝ感じで面白くよむ小說ではなくなつたやうな氣がする。

『伊太利の囚人』。森田思軒譯(國民之友)、これは小說らしく譯してあるが、ヂッケンズの『The Uncommercial Traveller』といふ紀行隨筆集からとつた同名の文章で、小說ではなく蓋し事實である。伊太利の國事犯が、そのかつて己れを自由にしてくれた恩ある英國人(實はアンガス・フレッチャアといふヂッケンズの友人)に對してその葡萄園で產した第一釀の葡萄酒を贈る話、ヂッケンズはその巨大な德利を賴まれて長途の旅行の間閉口する、而かもその酒はまるきり酢になつてゐたといふ、これに拘らず、これを預かつて來た人も、貰つた人も、こんな旨い葡萄酒をのんだことがないといつて飮んだといふ。文例は略す。

『夜と朝』。明治二十二年の飜譯小說のうち種々の點で最も注目すべき特色あるものはロード・リットン作益田克德譯の『夜と朝』である。特色として著しいもの三つ、第一、全篇言文一致の點で『あひびき』をうける。第二連記を用ゐた點で明治十九年の渡邊治の『政海之情波』と續く。第三、飜譯の態度に於いて涙香小史流である。連冊發行の點で珍らしがる人物があるが、これは既に例がある、明治十三年井上氏の『月世界旅行』、同十六

年井上氏の『亞非利加内地・空中旅行』などがそれである。分冊十二冊每冊二三葉の挿繪が入つてゐる。畫家は不明であるが、原書の挿繪を模したと思はれる痕がありありと見える。畫法が素朴で面白い。森田氏は此の飜譯の由來を序してかういつてゐる、

予此頃微恙に罹り蓐居すること數十日、偶ま老父母等余に西洋小說の講話を請ふて、止まず、折柄若林氏來る有りて其談話を筆記せん事を望む、仍て余が曾て一讀したる英國「ブルワルド、リットン」氏の著せる「ナイト・エンド・モーニング」を講話し、若林氏此を筆記する事とはなりぬ、

更に原書の趣意についてはかういつてゐる、

此書は別に斬新雄技の趣向あると云ふに非ざれど、著者の最も意を用ゐたる眼目の點は法律の罪惡と、道德の罪惡とを區別し、又富貴の家に生れて僅かに教育を受けたる青年と、財產を失ひ親族朋友に見棄られ、孤獨以て千辛萬苦の實劇を經歷せし青年の成跡を巧に書きあらはし、妙に人情の隱微を穿ち、閲讀の間覺へず人をして奇と呼び快と稱せしむるものあり、云々

尙は此の飜譯には森田思軒の序文がついてゐて、それが明治飜譯文學の大勢を知る文獻として貴重なものであることは、既に前に述べたところである。文例に大尾の一節を引かう。

豐穩は必夫悲甫の奧方となり、必夫と共に『ホレンサイド』の寮に樂しき月日を送りました。或る時のことと豐穩は自分と必夫の間に出來たる男の子を抱き美しい顏で、さも嬉し氣に必夫を眺め世の中といふものは、不思議なものですねェ……昔しの事を想ひ、又今のことを思へど夢のやうで少しも分かりません昔は馬鹿娘と世

間の人に云はれたものが、今は自分の子供を教育しなければならぬことになりました・・・どうも覺束ないものと存じます」必夫(ヒリップ)は莞爾と笑つて「イヤさういふものではない、凡そ教育といふものは慈愛の教育に勝るものはない・・・どれ其子をお出し」と云て子供を高くさし上げた。此時は恰も夜が明け離れた時で旭日勇ましく東の窓へさし込みました。

『いさ子』。表紙に原作名が書いてある。ウッド女史の名作『イーストリン』の譯である。譯者は織田純一郎。飜譯文學界に於ける奇才織田氏の最後の光輝であるとでもいはうか。此の譯書の由來については、序に

(上略)余閑散無聊小說を繙いて讀む。偶阪上氏(『花柳春話』の出版者)來訪ふて曰く、(中略)眞に是れ小說の世の中なり。然ども西洋小說の飜譯に至つては寔に曉星の寥々たる如きのみ。先生嘗て花柳春話の譯あり後東京を去ること數年復た著譯あるを聞かず、今や幸に來り寓す、豈に一本を飜して此小說の世の中に刊行するの意なきやと。余乃ち繙く所の書を示して曰く、是れ余が昨年歐米を漫遊する際、英京倫敦に於て購ふ所のものなり云々

とあるので分かる。たゞ織田氏が、此の小說について、「其結構主として一女子の運命に係るものなりと雖も、國會議員の選擧、裁判所の公判、貴族の驕奢、細民の貧困、凶徒の奸策、無辜の寃罪、男女の愛情等、列叙する所廣大にして、而して人情の微を發し、世態の密を顯はすに至ては、實に人の意外に出で」云々と語つてゐるのは如何にも法律家經世家型の見方を示して居り、十年前の『花柳春話』も十年後のいさ子姫も同一觀念の下にあることを推察させる。飜譯の態度が比較的原作に忠實であることは、その例言に

此書は直接に字句の通ずる限り原文を直譯したるものなれども時に章句の位置を轉換し言語を擅用せし所あり
是れ看客の解し易からんことを欲してなり然れども其原意に至りては毫も損する所なし看官幸に之を諒せ

と云つて居るのに見、又實際原作との對校によつて明瞭である。流麗な、讀みいゝ譯だが、時々は直譯に失したところも見える。會話だけは全部口語體をとつてゐる。人名を和名に變へるのは、『谷間の姫百合』その他眞面目な翻譯にも、その例があるが、飜案ならいざ知らず翻譯で人名や地名だけを和風にするのは一寸意味をなさぬと思ふ。挿繪は武内桂舟である。文例、——

（上略）人の感動は誰しもありとは云へ河原がいさ子の顔を見たりし時は。タヂ〳〵と二三歩後へに退みたり。いさ垂れたる毛髮。愛らしき眼。又河原の来れる爲に散らせし頰の紅は明白にいさ子姫なることを顯はしぬ。いさ子は「秋信さん」と叫びながら。震へる手を出して。數步後へに歩みし河原を捉へたり。河原はいさ子を見て夢の醒めたるものゝ如く室内を見廻はしぬ。いさ子「妾は貴方のお赦しがなければ死ぬことが出來ません。情願貴方を向かないで少しの間妾の方を(見て)唯だ赦すと云ふて下されば其れで妾は平和に死なれます」河原「いさ子。和女。ハ 傳母ですか——。傳母のお愛でしたか」。河原は何を云ふたるや夢見し心地して聞えざりし いさ子「吁赦して妾を赦して下さい。妾は未だ死にもしませんでした。邪の病氣から回復しまして妾は恐ろしく容子が變りました。其れ故誰も妾を知りませんでしたから此家へお愛と云ふて參りました。如何しても離れて居る事が出來ませんで。秋信さん情願お赦しなすつて下さい。」 河原の心は旋轉の中に在りて其才智は忽ち失せたりき。

伊原青々園氏の小說『子煩惱』は確か此の小說の飜案らしく讀んだ記憶がある。
米國系の文學が珍らしく數篇紹介されてゐるが、これはこのころ米國に對する日本の再認識運動が強まつた爲めである。

『幽靈新郎』。有名な物語でワシントン・アーヴィングの『スケッチ・ブック』の中の一篇（同名のもの）である。アーヴィングがオランダの或る町の旅館で聞いた物語となつてゐる。ランドショルト公の姫君が新郎に見える日、新郎アルテンブルフはランドショルト城への途中、賊の爲に命を落す。臨終に出會つたその友スタルケンファストが遺言により代りに新郎となつて城に赴き、遂に眞實姬に想はれて夫となる話、「幽靈」とはスタルケンファストがわざと怪談めかしく夜中に新婚の席を去つてアルテンブルフの葬式に會するからで、眞實は身代り新郎といふべきであらう。

公は彼の武士と共に出口に來れりコヽは高き穹狀の天井の下にあつて燈の影もいとホノ暗く幽然とせり彼の武士は立ち留りてホと息を吐き顧て公を視つゝ物スゴキ音調にて「今は唯だ御身と余とのみ。余は御身に余が去るの故を告ぐべし、余は他にのがるべからざる堅き約あるなり」

公「何ト、御身は代人を遣はして其事を了すること能はざる歟」

「代人にては叶ひ難し余が自ら往かねばならず余はウルツブルグなる寺に往かねばならぬなり」

公は更らに魂を消しつゝ「エヽ、ソは明朝まで待つを得べし、明朝御身は御身の新婦を携へて共に往くべきなり」

彼の武士は前に十倍せる物スゴキ音調にて「否、否、否余は新婦を攜ゆる能はず、噫余は死せるの人なり余は剿盜の爲めに殺されたり余の肉體はウルツブルグに横はれり此の夜半に余は葬らるゝなり墓は余を待てり余は余の約を履ねばならず」

彼の武士は其まゝに黑毛の馬にうち乘りて吊橋をわたりたるよと見えしが早や蹄の音は夜風の響の裡に沒して聞こえずなれり

思軒の周密文章も、一時は重苦しいガツボツしたものであつたが、此の頃になると漸く錬れて甘味が出て來る。同じくアーヴィンの『リップ・ヴァン・ウィンクル』が、『新世界の浦島』(少年園)と題して森鷗外に紹介されてゐる。これが美妙齋流の言文一致である點は面白い(ありますの調)。好い譯ではあるが、然しドイツ譯の重譯であると思はれる點で、矢張り多少の誤謬を犯してゐるのは止むを得ない。

ホドソンに沿ふて登つて行つた事のある旅人は、必ずケーツキル山脈を記憶して居るでせう。これはアパラツチヤン山脈の幹から出た小枝で、遙に西に向いて、仰いで見れば、麓は河の際に瀕れて、嶺は空に聳え、自づと近隣の地を支配して居ます。四季の更り、天氣の更りは勿論、一日の内でも、時每に不思議にも色と形を更へるのは此山です。それだからこの山の見える所に住む村娘は、皆なこれを晴雨計にします。好い天氣の續くときには青か紫の衣を着て、その大膽な限界線を曇のない夕空に畫き、時としては、近傍の森林には、雲も翳も見えぬに、その巓は、鼠色の霧で環を掛けられ、西山に入り掛つた夕日の、最後の光線に照れて、凱旋者の如く冠の様に光り輝きます

ブレット・ハートが一篇、これも森鷗外が『洪水』と題して紹介してゐるが、これはハートの小品集の中にある。『Hgh Water Mark』の譯である。その言文一致體であるのに注目すべく、而かもこれには幾分二葉亭の臭味がついてゐたやうに受けとれる。譯文の見本を左に出す。ドイツ譯の重譯たるは明白である。

水の引いた迹で見ればデッドロゥの澤の惘れ氣な姿が丸で打出して目の前にある。低い海綿の樣な表面はゆら〳〵とした參兒かと見える程に黒い沼になつて居て、そこから泥雜りの水が蛇のやうに委它りながら靜かにねば〳〵した滑りさうな溝をこしらへて太平洋の廣い入江に流れる、彼處此處に青黃いろい艸の取殘されたやうな斑が見える、この艸の痩せた、ぬる〳〵した莖は厭な、濕つた土臭い匂ひがするから日の目を見ずに育つたものといふことは直ぐに知れる、この沼の平たい、變りのない淋しさは人の妄想を呼出すことはない筈だが、それでも妄想を起せば、あの波のうねりのやうな、打寄せられた浮木は直ぐに又た、今一旦引きは引いたが、また厭でも高潮になつて戻つて來る水の悲しい知らせの使になるだらう、かう思つて見ればこの一面の土地には暗い影がさして、縱令日が照つたと云つて、この影は散らして仕まう譯には往かぬ。

ボウと同時代のホーソンが二篇、『夢ならぬ夢』、『心の浮畫』が大島正健(只今文學博士)によつて女學雜誌に紹介されてゐる。前者は『フハンタシー』、後者は『フハンシース・セウボックス』と題するものゝよし。前者はダビド・スヲンといふ少年が路傍に晝寢の一刻の間にその身を中心に起りつゝあつた出來事を描いたもの、後者は反對に、一老人が、壯年の時、血氣に任せてかくかくに行はんとして、僅に思ひ止つた事を思ひ起して良心の咎めに慚愧する話、ともに、從來紹介されたいはゆる小説とは全然違つた一種神祕的なロマンスの世界を啓いてみ

せてゐる。勿論當時の一般讀者に何程の影響は及ぼさなかつたとしても、二三の心ある人々には感謝されたと思ふ。譯もまた、原作の體にかなつてゐるかに思はれて佳い。

其一つは月影の景色にて、後の方には低き小屋あり、前の方には立ち木あり、牛木の影に隱れつゝ、きら／＼と月の光に映りて見ゆるは、若き男女の姿なり。男は立ちつゝ腕を拱き嘲る、眸も見下す眦も、共に恨を含んで見えたり。女は其前に跪き、恥ぢ苦の重みに堪へ難くやありけん、願言せんと合せたる、手をも上げ得ぬ目をも又、地の上にのみ注げるまゝなり其優しく、麗はしく、又た憐にも、震へて居たる姿さへ受け引かぬ男の心をば和げ寛むる様子もなし、其體其風、恨めしてふ物の形を具へてをりたらば、此男の如くにあるなるべし。スミスは眼鏡に目を寄せて、中の浮畫を覗へば、小屋といひ、樹といひ、人といひ、不思議にも皆見覺えありて、若き男の容貌は昔屢々鏡に寫し、紛ひもあらぬ我が姿、又其女と見えたるは、我初戀に思ひ初めし、マルサ・バローにてありたるなり。（『心の浮畫』より）

それにつけても此の頃の飜譯者の語學的知識の進歩も、感嘆すべきものがある。

『あるのん物語』。山田美妙齋譯（女學雜誌）、米國の女流作家アメリイ・ライヴス女史の作であるといふ。

あるのん物語を書く時の女史の眼中には人間の情慾——特に色慾——が純粹の愛と混同して、俗眼には愛が色慾で、そして色慾が愛としか見えぬ、それを憤慨した情が先ら溢れて居たやうに見えます。まづ本文を出す前、破つたのは「罪」の一語で、徹頭徹尾その罪の因果が貫いて尾を引いて居ます。

あるのんといふは何だといふと、のあ・ぜ・ばとりあるくの第四男、すなはち、しゃむ、はむ、及びじゃふぇす

の弟である。從つてこの小說の世界は舊約聖書時代の古ユダヤである。あるのんは、不信者の娘あせなすと一緒になるので、父のあから勘當される、あせなすも神の子の愛を拒んであるのんと一緒になつたので、二人は神にそむいた生活をする、その結果どうなつたかといふので、小說としてはさう傑れたものであるとも考へられないが、たゞ美妙の譯文は立派なものである。青年美妙の語學的才能のすぐれたものであつたらうといふことはいつも考へさせられるが、『あるのん物語』の譯文も實に立派で、而かも彼の小說によく見るやうな、いや味な言文一致ではない。

　折しも月は空に掛かつて居て萬物が渾べて白く、山の松は蒼い空の面に白銀の流蘇を崩してゐるやうで、そして月は天上の淸い光を下界に通ずる唯一つの途などとも思れます。
　まだ名殘の茜は燃ゆる火の餘命を繫いで居てそして其の間に黑ずんで散つて居る雲は巨人が書き捨てた文字の痕のやうです。
　巢の中では鳥が眠さうな話をして居て、そして夜風は山の角々に囁やいて居ます。

　フランス物を擧げると、これは小說とはいへぬがユーゴーの『祕密會議』(迦澗室主人譯、經世評論所載)といふのがある、「隨見錄」(Things Seen)の一節で、一七九三年、巴里の町のある家の密室でダントン、ロベスピエール、マラー三人が政敵征伐の密議をしてゐる場面の描寫であるが、短いものだが實に傳神の筆といふか實に生仲な政治小說よりは遙か面白い、政治的効果も、區々たる作者のイデオロギイを宣傳されるよりはずつと効果があ

らう。

此の三人は誰々なるか。第一の人をロベスピールと稱し。第二をダントン。第三をマラーと稱せり。室内には此の三人のほか。後に半個人も居ることなし。其の取圍みつゝある。テーブルの上には。何品を載せたるか。ダントンの前には。栓をなしたる徳利と。ルーソー氏が。嘗て麥酒を飲む時に用ゐし物に類せる酒盃あり。マラーの前に一の珈琲碗あり。ロベスピールの前に一の書類ありて。其の書類の傍には。今世紀の始めごろ巴小學校に於て。多く用ゐたる。鉛製の墨汁壺ありて。其傍に又一本のペンあり。書類の上には。ベスチールの雛形を彫刻したる銅印の。最も重やかなるぞ。仕餝もなく載せ置き。テーブルの中央には。佛國の地圖を廣げ置けり。（經世評論第六號）

『探偵ユーベル』。森田思軒の譯、これもユーゴーの『隨見錄』の中の最も有名な一部で、小說的記事ではあるが、ユーゴーがそのジェルシイ流謫中に實際出遭つたスパイ裁判事件であるといふ。思軒の書後を讀めば彼が如何程の苦心をもつてこれの飜譯に從つたかといふことがわかる。此の篇こそ思軒の周密文體の好見本であるといひたい。この篇が二葉亭の愛讀するところとなつたことは前に述べた通りである。文例略す。これには木村毅君の精良な校訂本があるから（東京堂版）、詳細はそれに讓る。志のある人は就いて見られるが可い。

此の年日本人派の一人杉江輔人が「筆之力」といふ雜誌を起したが、これに『レ・ミゼラブル』の試譯が載つてゐる、『落魄』と譯してあるといふが、これでは意味が通じない。もつとも發端だけで消えてしまつたので、別段人の注意にはのらなかつた。譯者は澁花居士といふ、長澤別天の別號である。

それからユーゴー「海の苦難者」が「渡海難」と題して朝比奈知泉に譯されたが、これが第一期「新小說」に初めの方だけ少し出てゐる。前の漢文直譯流、「繋思談」流よりは少しこなれては來たが、然しまだ流暢美麗だとはいひかねる。

『大叛魁』。森田思軒譯、ジュール・ヴェルヌの原作だといふことは、思軒の序に書いてある。ヴェルヌの何といふ作かは、ヴェルヌその人の小說が此の頃中々入手されないので、久しく判明しなかつたが、今や明瞭になつた。これはヴェルヌの「蒸氣の家」(The Steam House) といふものである。場所はインドである。一八五七年の土兵叛亂とこれに續いた英印双方の大虐殺を先づ背景として記憶して置く必要がある。此の時の叛亂の首謀即ち大叛魁であつたプーナ王の世子ダンドーバント俗名ナヽサヒブは、同志數名と逃れたが、九年の間復讐の怨を忘れず、折あらば英國人に復讐しようとし、南部中部印度を密々巡歷して煽動しつゝある。一方又五七年の亂に最愛の夫人をナヽサヒブの手で殺された(と信じてゐる)佐官マンロー男爵は、友人の工學士その他と「蒸氣の家」といふ一種の大旅行車をつくり、これにのつて北印度漫遊の旅に出るが、佐官の心中には何とかしてナヽサヒブと出會つて、國のため、父母のため、妻のためにナヽサヒブの生首をとりたいと思ひつゞけてゐる。ナヽサヒブは果して又擧兵して英國政府に抵抗したが、間もなく破れて打死したといふ風說が傳はる。然しマンローはこれを信じない、益々その蒸氣の家の旅行をすゝめる。譯出されたのは、前編だけで、後編が譯出されてゐないので詳しくは知り難いが、思軒の傳へる如くんば、——

下編は更らにヒマラヤ山の雄絕なる景色を叙するに筆を起し佐官萬妻(マンロー)が途中終に傘沙毘(ナヽサヒブ)の僕カラガニのあざむ

く所となり拿沙昆の虜となり兩個の死體茲に始めて面を對するを以て一篇の眼目とす是に知る嚮きにダンゲートの最居にあり英丘の爲めに殺されたるものは拿沙昆にあらずして其兄ニコラスなりしを而して何ぞ料らん一個不思議の狂女子『知らぬ火』は即ち萬斐夫人の幸に免かれたるものならんとは云々

といふのだといふ。後編の方が趣向もいよいよ面白く、悪氣の家の活動も見るべきものがあつたことゝ考へるが今は仕方がない。

『毛家莊祕事』。これも森田思軒の譯ではあるが、原作は何であるか未詳である。作の内容はいはゞ一種の冒險探偵復讐譚といふやうなもので、北米メリランド、ピエドモント地方にモーリス家といふ舊家がある。こゝの家に二十年來の一大疑案がある。二十年前の某夜老主人ジェームズ・モーリスが何者かに慘殺された。その犯人が今なほ知れぬといふのである。勿論嫌疑は種々な人にかゝつた、そのうちで最も重く疑はれた人は近所に住つてゐた地質學者のダシスといふので、ダシスには種々無罪を證するに足る材料もあつたが、十分とはいかず、遂に獄中に憤死してそのまゝになつてゐる。ところが、故あつて南米智利からこの地方に遊びに來た學士ハオースなる人物が、この疑案を解かうとかゝる。それには然しそれだけのわけがあるらしい、元來慘劇の夜老主人ジェームズの寢てゐた室は、その夜ジェームズの子ジョンが新婚の寢室に當てゝあつたもので、從つて犯人はジェームズを狙つたのでなく、ジョンを狙つたものであらうと考へて、略ぼ犯人の見當をつける。彼の心中に疑つてゐるのは、これも近所でゐて此の頃よくモーリス家に出入してゐる佐官リンコルンといふものである。然しリンコルンとハオースとの間には、この事件で對立的にならぬまでも淸算さるべき事態があるらしい。その何事である

かは、まだ詳しく說かれてゐない。且つ又現在はリンコルンとハオースは少女ケリー・モーリスを廻つて妙な脫合ひとなつてゐる。新知己ハオースの方が、舊知己リンコルンより彼女の氣受けがよくなりつゝある云々」そこで此の小說は途切れてゐる、原作が分からぬので、後半の筋書の調べやうもない、然し何やら物凄い、底氣味のわるい、而かも奇々怪々な小說であるらしい。

『綠葉の歎』。アルフォンス・ドーデー作、森鷗外譯、『水沫集』の方に收まつてゐるものには『綠葉歎』となつてゐる。普佛戰爭直後の人情交錯を描いた短篇である。言文一致、說明略す。たゞドーデーの作のまとまつた紹介はこれが最初であらうか。

『音調高洋箏一曲』。森鷗外譯、これはスペインの戲曲家カルデロンの『ザラメヤ村長』と題するものである。『水沫集』では『調高矣洋絃一曲』と改まつてゐる。

ドイツ文學は前年より更に進んで來た。而してその進步が、鷗外森林太郎の出現によるのはいふをまたない。

『舊小說』四章、中井錦城譯、ゲーテの『ウェルテルの悲しみ』のうちの四條だけ抄譯したものである。キヤッセル版の英譯からやつたのだといふが、あの英譯が定評のある惡譯なので、この譯も原文と對照したら定めし出來の惡いものであらう。

ゲーテの作品を一つ擧げれば、女學雜誌に**『伊太利の佳人』**といふのが出てゐる。小林愛軒居士の譯であるといふ。原語直接譯かそれとも重譯かよく分らない。物語とはイタリの某豪商が、今迄貨財の集積にのみ心をとられて結婚や家庭などといふことは考へもしなかつたところ、或る偶然のことから子供がほしくなつて一佳人と婚

した、然るに豪商は家庭生活ばかりしてゐると病氣になりさうだつたので、蓋に再び海に航して貿易に從事することになつた。出發に望んでその妻に約すらく、人間は習慣の動物だから、感情をもらす相手がなくてはなるまい、お前も若しさういふ相手が欲しいなら、篤實な人格のある人を見つけて相手にするがよいといつた。妻は何をそんな馬鹿な事を、泣いて別れを惜んだ。然し暫時時が經つうちに次第に心淋しくなつて來た。それで誰か離の相手を探してゐるうち、心に叶つた一少年が見つかつた、丁度その少年が此の美人のところへ尋ねて來るところで中絶してゐる。原作については未だ調べてゐないので何といふものか、宗教を仰ぐ。

『戯曲折薔薇』。レッシング原作、森鷗外、竹二共譯、原作は『エミリア・ガロッチ』といふもの。鷗外の飜譯紹介について、以上及び以下説明を大概略したが、それはいふまでもなく、鷗外のかゝる飜譯は、いろいろな形式で今日なほ極めて手近に又容易に讀むことが出來るので（又自然讀んだ人が多いことであらうが）、別段事々しく梗概を述べたり、影響を語つたりする必要がないと思ふからだ。此の年鷗外の飜譯文學界に於ける活動は實にめざましい程で、若くて元氣であつたせゐもあらうが、小氣味がよく切りまはしてゐる。さうして鷗外が種々な作品を紹介すると共に、日本の浪漫主義が勃興の機を促進されたかに見えて來るのは、これは私の僻見ではあるまい。眞の意味で、西洋の「文學」の世界に日本人の眼を開いて見せ、日本人の文學觀念に大きな感化を與へた鷗外の存在は全文壇的に意義の大きなものであつた。私は此の點で、二葉亭が此の年をもつて官報局を引退したのを惜しいとも惜しいと思ふのである。

『玉を懐いて罪あり』。ホフマン作、森鷗外譯、ホフマンの『スキュデリー夫人』を譯したものである。あま

りよく知られた作品であるから、說明略す。

『傳奇トーニー』。テオドール・キョルネル原作、森鷗外、三木竹二共譯、鷗外漁史の「はし書」(二十二年十一月二十五日讀賣)にいふ。

作者は二十二歲で打死した自由團の隨一人、太刀先も筆先も人に負けない血氣の若者です、然し親許へ遣つた手紙にも

前略、前週には仄平何(サツペン)に書いた三幕物トーニーと申すを脫稿仕候、筋立てはクライストの「ゆひなづけ」が原にて、所はサント、ドミンゴ、時は千八百三年に御座候、誰れに讀んで聞かせ候ても滿足がり申候、自分にも仄平何體が大分スラ〳〵と出るやうに相成り候歟と考へ、自ら許す所も御座候

(千八百十二年二月一日維也納から親許へ遣つた手紙)

とある通り、まだ稽古の積で書たもの、クライストの「沈鬱」とやらいはれる樣な處が何處かへ往つたとパ人の噂は兎も角も、讀で遣る程の直打は屹度あります、此狂言は維也納で始めて興行になつて、大當りのその上に、トーニーを勤めた、矢張りトーニー(アダムベルゲル氏)といふ女役者はこの緣で作者の妻に成ました、ア、筆先の功名、太刀先の手柄、いづれ劣らぬキョルネルを三木と合體して譯したものも、同じ稽古の心ですが、功名と手柄とは何處かへ往つて仕舞ました。

明治二十二年十一月　　　鷗外漁史しるす

トーニーは雜種女バベカンが白人と戀に落ちて生んだ少女だが、バベカンは白人に棄てられたので、白人を凡て

慨んでゐる。然しトーニーは自分の肌の白いにつけ、白人に同情してゐる。丁度、島の黒人が自由のためにフランス軍と戰つてゐる最中のことである。一夜フランスの落武者グスターフが手兵と共に難をのがれて、ベベカンの家に來る、ベベカンは拒んでいれないのを、トーニーが竊かに入れてやる。これから波瀾と情熱の多い物語が展開するのだが、丁度此の時は序幕だけで中絶してゐるので、こゝで語れないのが惜しい。

『破茶碗』。森田思軒の譯、プロシヤの作家ツエッケの同名の作といふ。獨國文學美觀中に出てゐたものであるといふ。思軒がドイツ文學を譯し、鷗外が英米文學を譯すなど、兩樣の意味で時代人の外國文學に對する考へが窺はれる。『破茶碗』の文例を引く。

ある夏の夜甚だ蒸し熱して安らかに眠る能はざりければマリエッタは纔に曉に向ふを待ちかね其床より起き出でり曙日の第一の光りは海波を射りレリニアンの小島を射り更らに來りてマリエッタが小さき室の窓に當り輝やけりマリエッタは衣服を着け泉に赴き面を洗はんとて戶外に出でたてりマリエッタは此の早晨の景色を賞しながら濱邊を散歩せんと思ひしかば其の帽子をさへ戴けり

泉に赴むかんとするには家の背後なる岩を越え棕櫚と橙樹との間を穿ちゆかねばならずマリエッタは此のときに限りて容易に是等の樹間を過ぐること能はざりし何となれば今ま進みかゝりし前面の樹の繁みかく蔭を作せたる棕櫚の下に一個の身材高き少年が手のホトリに極めて麗はしき花一束を置けるまゝ熟睡しゐるを見たればなり

南フランスの或る海岸の小村での出來事で、村一番の美少女マリエッタといふのがある、村一番の若者にヨリ

ンといふのがある、二人は内心互ひに慕ひ合つてゐるが、互ひの腹の中が分からないので、人前ではわざとよそよそしくしてゐる。或る時、市で、マリエッタが綺麗な茶碗をほしがつてゐるのを見て、コリンはこれを買ひとり、匿名でマリエッタの許に贈つた、ところが、それが途中でかねてマリエッタに懸想して結婚を申込んでゐた判事某の手に落ちたので、判事はこれを自分からの贈物にしてしまふ、コリンはこの茶碗にいける花束を毎朝こつそりマリエッタの家にとゞける。ところがある朝、茶碗を清めに出たとき此の花束の贈主がわかつたので、マリエッタがコリンが默つてさうしたことをするのを責める、二人が花束を押しつ返しつ爭ふうち茶碗をこはしてしまふ。判事は、怒つてコリンを法廷につれ出すが、その爲めに却つて、この茶碗がコリンのものだつたとわかり、判事自身が閉口する。さうしてマリエッタとコリンは、判事の巧みの裏をかいて結婚してしまふ、といふのである。

『沙漠の旅』。獨幹散史譯、前にも述べたヴィルヘルム・ハウフの原作『隊商(キャラバン)』の全譯で、繪入朝野新聞（から江戸新聞へかけて）に連載されたもの、譯もこなれた佳いものである。（但し原語譯ではない）。

『鬼車』。隔戀坊補譯とある。隔戀坊とは巖谷小波の戲號の一つである。此の譯が小波氏の手に成ることは小波氏の自叙傳『我が五十年』を見るが可い。此の飜譯は始め硯友社機關誌『我樂多文庫』第十三號から掲載され十七號（此の時『文庫』と改題）で完結したもので、此の年（二十二年）に春陽堂から單行本として出版された。原書は何か分からない。何れドイツあたりのメルヘンでもあらうか、然し事柄は英國ものである。森地獄の一眼魔が或る王子から受けた恩に感じていろいろその王子を助けて金髪大王とまで立身させ、三人の美人の夫にする話であ

る。單行本には年恒の挿繪があるが、それにも增して面白いのは、松岡緑芽の手に成る『我樂多文庫』掲載のものゝ挿繪である。

「あらし美さほ草紙」の花 ツルゲネーフ原作、五七居士譯（大和錦所載）、原作は『ナカヌウネ』卽ち邦譯『その前夜』をロシア語から直譯したものである。五七居士については、愚考であるが、嵯峨の舍氏や二葉亭四迷の語學校時代の友人たる佐波武雄氏であらうと思ふ。佐波氏の『ナカヌウネ』の飜譯原稿を博文館に安くうち込んだ爲めに嵯峨の舍氏と二葉亭の間に妙な爭ひが起つたといふことは、嵯峨の舍氏の追憶で明白になつてゐる。『やまと錦』第七號から第十三號までつゞき、第十三號には最後の譯しきれぬ分を梗概として、最後まで掲げてゐる。然し譯文は、何うも佳いとは賞めにくい、何のことか意味のわからぬ所も數箇所ある、この書には幾種かの邦譯もあるから、改めて梗概を語らぬが、文例だけ擧げて置かう。

ソノ時大口を張りたる如き深穴の突然前に顯れてアナヤト思ふ間もなく、橇車は千尋の底に落込むとひとしく嘲嗤は笑ひゐたりハツと思ふ間に無底穴に葉列那々々々と呼聲の聞えたり「葉列那」と此度は明了に耳朶に響きしかば葉列那は急に頭を擧げ振回り見て茫然たり今夢の中に見たる雪の如く白き巖御丙夫は最鷹翔より半ば起かゝりて大なる嬉しさうた君き眼元にて葉列那を見、頭髮は猶に振り亂り髯は可笑しく開き其傍かに打ち亂りたる面には恐ろしきに憂愁を添えたる趣を顯はしたり（昨）葉列那小生はもう死ぬのだ、葉列那は我を忘れてれツとばかり彼の傍に飛つきて其胸にすり寄れば（昨）何にもかもこれで終つた、小生は死ぬ……左樣ならば小生

の可愛さうな妻ヨ左樣ならば我故鄕ヨ……と云つゝ長腰掛の上に膝を屈めて打伏したるまゝ絕入りて言もなし（下略）

美人エレナの熱愛は得たが、病氣には勝てず、インザロフは故國の大事に急ぐ道で、滿腔の感慨をもたらして遂に死ぬ、丁度その場面である。

それと同じものが、同じ博文館の「日本之時事」に『亡國憐才美人草』といふ題で數回出てゐるが、これも五七居士となつてゐるからして、やはり同じ佐波氏の譯であらう。

此の年はロシア文學として纒つたものとしては、先づこれで終りであるが、ツルゲネーフと日本文學の關係は可成り古く且つ深い、決して自然主義時代になつてから出來たものではない、寧ろロマンチシズム以前からかういふ風に感化をうけてゐるのである。

『於母影』。　明治十五年の『新體詩抄』以後、譯詩の見るべきものが全然無いわけではない、然しながら、此の年に於けるS・S・S（新聲社）の譯詩集『於母影』の發表は、當然この方面に於いて『新體詩抄』以後の劃期的なものと見られて可からう。その內容を分類すれば英國が四篇（シェークスピヤ「オフェリヤ」、バイロン「いねよかし」、「マンフレッド」、「曼弗列度」（漢譯）、ドイツが過半數で十一篇（列臨「月光」、ギョウテ「ミニョン」、我爾晏「思鄕」、シェッフェル「笛の音」、ハイネ「あまをとめ」、グロック「花さうび」、ケルネル「わかれかね」、ホフマン「わが星」、レナウ「あしの曲」、フェルランド「あるとき」、色弗綠「別離」）これに唯詩一篇（高青邱「野梅」）、日本古典一篇（「平家物語」鬼界ケ島）

を揃へてある。形式からいへば、新體詩あり漢詩ありで、その新體詩にも七五調、散文調、八七調、八六調、等があり、又漢詩の方にも七言古風、五言古風、八五言歌行體などがある。勿論その紹介に於ても鷗外漁史が中心であるが、譯としての滿足不滿は別として、此の譯詩集が、その主情的リズムをもつて日本近代詩のロマンチズムに貢獻するところが多かつたのは事實であらう。有體にいつて、我等は「いねよかし」の譯にも「オフエリヤ」の歌にも譯詩としては多少の不滿を覺えるのであるが、然しそれは原詩と對比しての上のことであつて、此の譯詩集の如く斷片的に紹介されてたゞ讀者の感興に訴へてある限りの場合には、又これでも可いであらう。

何れにしろ譯詩はこの研究では十分に論述してゐる餘裕がないので、他日に問題を殘す。（昭和二年執筆、新潮社版「日本文學講座」所載、昭和九年八月增訂）

飜譯文學研究

——その歴史的意義について——

一　序　説

西洋文學の飜譯の出現には、西洋文學知識の理解及び移入を條件とし、西洋文學知識の理解及移入は、西洋文化一般との接觸を豫想する。だからむづかしくいへば飜譯文學の研究には、西洋文化一般と日本との接觸から始めなくてはなるまいが、然しこゝでは問題も明治以後と限られ、紙數も若干と制限されてゐるわけだから、あまり力んで大袈裟な眞似をすることはやめる。それけ止めるが、然し西洋文學知識の移入のことだけは、この問題の性質上何うも全然やめるわけにいかないので、極々大ざつぱに述べてみる。

西洋文學知識の日本への移入が、何れ程古く溯るか、間接には(支那あたりを仲介にして)何れ程古く溯るものであるか、よく分からないが、相當古いものがありはしないかといふ氣がする。然し先づ直接西洋文學知識が移入したのは、足利時代の南蠻人渡來からといふのが、先輩の定説である。この時から徳川初期の鎖國令が出るまでは、宗教文化を中心にして、可成り世俗文學の知識も入つて來た。鎖國令が出て禁書の律が設けられてからも、西洋人の渡來が絶無ではなかつたので、矢張り多少の文學的知識が移入された形跡がある。而してそれ等の知識は流石に和蘭人乃至和蘭語によつてゐる。徳川の晩期、西洋人の渡來が默認といふ形になつてからは、從來和蘭

人や和蘭語を介して入つて來たものが、各國から直接移入される端緒がついた。各國といつても主として英（米も）と佛であるが、此等の國々から文學書が可成り輸入されたことは、今日明白に證明される（註二）。此の二國は本國の政策上、對日外交に大に力を入れたので、いつか和蘭を押しのけて、幕末維新の際には、日本に取つて最も關係の深い國家になつた。兩者競爭の形で、結局佛が幕府には幾分優勢であつたらしい。然し當時紹介された西洋文學は和蘭のものか（ジヤス、コリダス『新未來記』明治元年譯、『和蘭美政録』文久元年頃）又は和蘭語によつたもの（横山由清『魯敏遜漂行紀略』安政四年、更に溯つて嘉永年間の黒田行元『漂荒紀事』）であつたのは、止むを得なかつた。

明治時代に入つて、新興日本に對する英佛の利害が匹敵するので、その外交的角逐は當時つゞくが、佛は間もなく普國と戰つて破れたので、實力に於いて遂に英國に一步を讓り、明治初期の日本に對する英國の勢力が非常に强くなつた（背景にには經濟的勢力が控へてゐること勿論）。それにつれて此明日本で英國文化乃至英語の知識が壓倒的な勢力をもち始めたのは當然で、これは當時の學生乃至學校の統計を見ても分かる。從つて此の頃移入した西洋文學の知識が大半は英國のものであり、佛國がこれにつぎ、他は目立つて少なく、而かも佛國以下の文學の多くは英語を介して移入されたもので、英國文學以外は必ずしもその國の文化の勢力を代表するものといひ難い。兎に角英語及び英國文學が全盛であり、東京大學に於ける教授用語も英語と一定した程であつた。

明治十四五年頃から、英佛の自由主義的政治思想の蔓延に手を燒いた政府は、獨逸思想によつてこれを喰ひ止めようとし、獨逸學を奬勵し、獨逸に留學生を出し政府の制度組織に獨逸式を加味したりしたが、もうこの時に

に日本の社會に深く喰ひ込んだ英國風英國文化といふものゝ勢力を一掃することなどとても出來るものではなかつた。これは然し英國の東洋に於ける經濟的勢力が獨逸に遙かすぐれてゐた爲めでもあつて、人爲だけでは仕方がなかつたのである。又露國は東洋に對する野心を一時引込めたので、油斷がならぬと思はれつゝも、明治初期は英佛程に深い交渉はなかつた。それで明治初期には、獨露共に、文學上からいへば、英佛とはとても比較にならぬ程勢力が少なかつたのである。

以上の如くで、明治初期に移入された西洋文學の知識は英國文學か又は英語を介したその他の國々の文學が絶對多數である。それが二十年代に入つては勿論、三十年代、四十年代、明治時代の終になつて、英國文學が、反動的に顧みられなくなつても、英語といふものが日本人の文化生活に恐ろしい勢力をもち、今だにもち續けてゐる。吾等は英文學を餘り愛好しない時でも他國の文學をよむのに英語の力をかりることが多い。これは結局英國なるものゝ勢力が如何にいまだに日本人の生活に浸みこんでゐるかを語つてゐるものである。

さて、以上を序説として、當面の問題はといへば、讀者さへ迷惑でないなら、初期は簡單に濟して明治二十年代以後の飜譯文學研究に主力を分けたいのだが、講座といふものゝ性質上さう筆者の勝手にだけ出來ぬものと思ふから、矢張り初期を主として述べて、二十年代以後はほんの大勢を暗示するに止める。

又飜譯文學といつても、基督教文學の飜譯紹介はこれだけで立派な一つの研究題目となるものであるから、ここでは特殊な二三のものを除いては宗教文學の飜譯の方には踏み込まないことにする。

註(一)　靜岡葵文庫貴重洋書目錄を見よ。

二 明治十年までの翻譯文學

明治の政治、社會、文學、その他百般のことが明治十年の西南戰爭を境としてくつきりと區劃されるのは、注意すべき現象である。翻譯文學の方でも丁度言ひ合した如く、矢張り十年前と十年後と分れてゐる。さうしてその標示杭になるのが有名な『花柳春話』である。

此の十年間に各種の翻譯が可成り澤山出たが、それにお伴でもするやうに文學の翻譯も少しは出た。蓋し、その出來榮えからいへば翻譯文學などと威張つて持ち出せる代ものではない。それでは此の頃は誰も西洋文學を讀む者がなかつたかといふとさうでもない、明治以前に比すると大した進歩で、幕末から明治初年へかけて西洋各國の小說その他が可成り入つて來た證跡があり（註一）、又愛讀したといふ人もゐる（註二）。又一般的な西洋文學の基礎知識も多少は知られてゐた（註三）。そこから蓋し翻譯文學といへるだけの翻譯文學が生れなかつたのは、當時外國語の讀める所謂洋學者なるものは醫者か科學者か外交官で甚だ文學を重視せず、又文學の知識をもつた人々もさうなかつた。第一時代の文學觀念が勸善懲惡一點張りで、小說などは士君子の手にすべきものではないといふ位であるから、文學を愛し、これを理解する人々がゐても、翻譯して紹介しようといふまでには、小面倒なカムフラージュ的理由をつけて、本來の利用厚生主義に牽强してからでないと出來ないといふわけだ。手もなく、此方の文學が盛んでないので、西洋文學の翻譯もいゝのが出來なかつたといつても可い。

それでも、先づ幾分か文學に緣のあるものを拾ひ上げて年代順に並べてみれば——

明治元年「新未來記」（近藤眞琴譯）
明治四年「西洋夜話」（石川彝譯）
同　五年「魯敏孫全傳」（齋藤了庵譯）
同　六年「通俗伊蘇普物語」（渡部温譯）
同　　年「訓蒙話草」（福澤英之助譯）
同　七年「開化進化後世夢物語」（上條信次譯）
同　　年「西洋孝子流別奇談」（小林謙吉譯、明治五年の譯であるといふ）。
同　八年「暴夜物語」（永峯秀樹譯）
同　　年「西洋歌舞伎葉武烈土」（譯文紹介、平假名繪入新聞）
同　九年「天路歷程」（村上俊吉譯、七一雜報）
同　十年「胸肉の奇訟」（民間雜誌）
同　　年「回世美談」（山田正隆譯）

といふやうなものである。その他斷片的に西洋文學の消息を傳へたものはいろいろあるが、明治十年までの飜譯文學らしいものは以上十餘部で盡されてゐる。尤も文學といふ語の解しやうによつてはまだ大切なものがある。中村正直の「西國立志編」（明治三年）の如きものがある。「西國立志編」は從來修養書とされて文學書とはされてゐないが西洋文學知識を豐富に含んでゐる點からも見直さるべきもので、中村先生はかういふ方面からも明治文

學の恩人といへる人なのである。『西國立志編』中の挿話を脚色した劇に『鞋補童教學』と『其粉色陶器交易』(共に明治六年、佐橋富三郎脚色)がある。

以上の飜譯文學について、極簡單に語ると、明治元年の『新未來記』は、蘭人ピテスコリデスの著で一八六五年(慶應元年)の刊行、原名を「アンノ、チヴインチス、ホンデルト、ソエイフ、エン、セスチフ、ホーシ、デリツキ、イン、デ、ツー、コムスト」(紀元二千六十五年又は未來之夢記)といふもの、[illegible]、慶應四年四月)。二百年後を想像した未來記である。明治元年に譯稿が出來てゐたが、何かの都合で十一年刊行になつた。主人公の「余」がロージャア・ベエコンとファンタシヤ(幻し)嬢に導かれて宇宙旅行に出ることになつてゐる。上條氏の『後世夢物語』は同じ本を後版の英譯から重譯をしたものである。篇中政治に關するところが多少あるので、十年後續出する未來記的政治小説にいさゝか關係するものがあるかも知れぬ。明治四年の『西洋夜話』は主としてパーレイ萬國史を和解して多少稗史的文字にしただけのもの、五年の『魯敏孫』は稿本であるが、内容は黒田行元の『漂荒記事』の初頭を齋藤氏の名で上梓したもので、『新未來記』と倂つて蘭學崎語の夕榮ともいふべきであらう。『伊蘇普』に興味ある話柄を二百餘篇を拔き、他書から若干補入してある。物が物だけに理解專一を旨として俗語口語を交へた一種の文體で譯してあるところが面白い。『開學話草』もやはりイソップの譯であるが、これには九十餘話あり、譯文は普通文だが、譯そのものは、渡部氏のものより要領を得てゐる。七年の『洗別奇談』の原書は一八六七年佛國出版の『レクチュール』といふものであるといふが、大方さういふ名の文集か短篇集かから此の一話を拔いて譯したものであらう。インドで成功した佛國商人マキスが歸國の途中難船にあふ。余は孤島

に死ぬが、殘つた兄と妹は父に廻りあひ、共に種々冒險の後黒人王を斬つて國のため大功を建て榮華を得るといふので、大分小說めいたものである。「暴夜物語」は英譯の重譯で漁夫の物語からカリフが黒島王を救ひ出すところまでゞある。譯者の永峯氏は明治十年前の飜譯界を牛耳つた有名な人である。此の年平假名繪入で『ハムレット』の紹介が出たが數回で中絶したといふ。假名垣魯文の筆とも古河默阿彌の筆とも傳はつてゐる。「天路歷程」は基督敎主義の「七一雜報」(十五號から)に連載されたものであるが(十二年刊行)、これは英語からでも佛語からでもなく漢譯からの重譯であり、譯文が大部分口語體であるのは、注意すべき點である。十年の『胸肉の奇訟』はいふまでもなく沙翁の『ヴェニスの商人』の梗概であるが、原作からしたものか又はラムの書かによつたものか、分からない、慶應義塾の民間雜誌に連載されたものだから、筆者は福澤門下の鬼才たる某々氏の連中であらう。『回世奇談』はこれもロビンソンの譯であるが、刊否未詳である(版權書目では少くとも一二册は出たことになつてゐる)。

時代が利用厚生に夢中になつてゐる最中であり、又文學觀念もまだ至つて卑いので、以上の飜譯文學紹介の動機もかゝる思想から出て居り、主として婦女童蒙の敎訓のため、乃至西洋文明の理解を增さしめる補助としてといふ實利的精神から出てゐる。もつとも西洋の人情も東洋と變らぬとか、又は西洋の世態人情を知りたいといふ好奇心たつぷりな、然し多少直接の實利心を離れた態度も混つてゐるところが見える。原書も何等撰擇せず手當り次第譯したといふ風があり、譯文も、たゞ內容を傳へるに專らで原文の味ひといつたものまでは勿論及んでゐない。然し紹介されてゐるものに兎もかく古典が多いから、西洋文學的作品の基礎知識を紹介したともいへるし

逐年文學らしいもの丶紹介になつてゐると見られぬことがない。然しさういふうちにも、いろいろな意味でヴルジョア意識を表象した冒險小說たる『ロビンソン』が何度も紹介されかけてゐる點が注意を惹く。

註(一)　靜岡葵文庫貴重洋書目錄を參照せよ。

註(二)　古くば高野長英、近くば神田孝平、尺振八等。

註(三)　「明六雜誌」二十五號西周の「知說」、同西周の美妙學說等、明治七年「西洋雜誌」(鳥山啓)の洋詩の話、村田文夫「西洋聞見錄」(明治四年)後篇卷四、洋詩の事等、村田の紹介が洋詩の知識を多少まとめて紹介した最初であらう。

三　明治十年以後

明治十年までは西洋文學の紹介に殆んど國家別の意識があまりないが、(寧ろ總體として英國のものとして紹介されてゐたといつても可い)十年以後西洋文學の紹介飜譯が盛になるにつれて、英佛伊等といふ國家別の意識が加はつて來る。私は今迄飜譯文學について度々書いたが、皆年代順にばかり書いて來た。歴史的研究には本當はそれで可いのであらうが、又それ以外の方法も一寸考へられないが、こゝでは此の國家別意識の見えるのを幸ひに、先づ國分けにして書いてみたい。國分けの年代順作者別といふことにしたい。

英國文學

前に述べたやうなわけで、明治初期の飜譯文學は我が國と最も密接な交渉のあつた英國文學の飜譯紹介に大半を占められてゐる。さうしてその英國文學中飜譯紹介された作物の數量で第一位に立つものはシェーク

スピアとリットン卿であり、ビコンズフヒールド卿とスコットがそれぞれこれに次ぐ。それで先づ此の四人について語り、その後で他の注目すべき作物に及ぼしたい。

シエークスピア。 明治十年以後二十二三年頃までに飜譯紹介されてゐるシエークスピアの作品は大體左の如く數へられてゐる。

明治十二年「李王」（和田垣謙三漢文譯）（King Lear）
同　十六年「人肉質入裁判」（井上勤譯）（Merchant of Venice）
同　　　年「ジユリアス・シーザル」（河島敬藏原譯）
同　　　年「佛國某州龐吉侯情話」（桑嵐先生譯）（As You Like It）
同　十七年「自由太刀餘波鋭鋒」（坪内雄藏譯）（Julius Caesar）
同　十八年「何櫻彼櫻錢世中」（小宮山天香原案 宇田川文海執筆）（Merchant of Venice）
同　　　年「何國皇子斑烈多物語」（坪内雄藏譯）（Hamlet）
同　十九年「春情浮世の夢」（河島敬藏譯）（Romeo and Juliet）
同　　　年「羅馬盛衰鑑」（河島敬藏作譯 小宮山天香）（ジユリアス・シーザル劇と同じもの）
同　　　年「泰西奇談 冬物語 因果物語」（叢菊野史仁田桂次郎譯）（The Winter's Tale 及び Measure For Measure）
同　　　年「西洋歌舞伎種本」（竹内餘所次郎譯）（King Lear）
同　　　年「セキスピヤ物語」（品田太吉譯）（Lamb's Tales from Shakespeare）

同　二十年「西洋娘節用」（木下新三郎譯）（Romeo and Juliet）

同　　年「誠之鏡」（同人）（Pericles）

同　　年「カゼリン婚姻奇話」（教育雜誌）（The Taming of the Shrew）

同　　年「當世二人婚」（長田秋濤原案 依田學海翻案）（King Learに基くものか？）

同二十一年「豪傑一世鏡」（板倉與太郎譯）（Coriolanus）

同　　年「みなれざを」（わたのとろみ譯）（Alls Well That Ends Well）

同　　年「泰西奇談女房持虎之卷」（叢菊野史譯）（The Taming of the Shrew）

同　　年「鏡花水月」（渡邊治譯）（Comedy of Errors）

同　　年「泰西奇談嵐之卷」（叢菊野史譯）（The Tempest）

同　　年「幽靈」（井上勤譯）（Hamlet）

同　　年「正本はむれつと」（山田美妙譯）初頭一部分、「いらつめに」連載。

同　　年「泰西奇談智盃物語」（叢菊野史譯）（Timon of Athens）

同　　年「四つの緒」（宇田川文海翻案）（As You Like It）

同　　年「汝所好」（同人）（「四つの緒」を改題せるもの）

同二十三年「三人令孃」（條野採菊翻案）（King Lear）

右のうちでシェークスピアの原作によつたものとラムの「物語」によつたものとある。明治十六年から十八年頃

にかけて河島敬藏氏は別にシェークスピアを數篇譯したといふが、それは試譯したといふに止まつて最近まで世に出もしなかつたものであるからこゝには掲げずに置く。（竹村覺君著「日本英學發達史」一八一頁その他參照）。なほ以上の外に僕の手控から從來發表されてゐないものを數種拔いて掲げると――

明治十三年「愛姫譚」（未見）（Cymbeline か）
同　十六年「春宵夜話」（黎嵐生）（「麻吉侯情話」は此の一部なり）
同　十七年「歐洲奇聞花月情話」（菊亭香水譯）（Romeo and Juliet）
同　十八年「落花の夕暮」（九皐生譯）（Romeo and Juliet）
同　　年「榮枯の夢」（同人）（Macbeth）
同　　年「雨後の花」（同人）（Alls Well That Ends Well）
同　　年「マッカベス」（拔萃）
同　十九年「葉武列士倭錦繪」（假名垣魯文）（Hamlet）
同　二十年「轉合笑話」（譯者無署名）（Comedy of Errors）
同　　年「妙縁奇遇白金の指環」（管城子譯）（Cymbeline）
同二十一年「豪華之夢」（鶴江小漁譯）（Timon of Athens）

等がある。何れも古新聞雜誌及び雜書を讀過の際拾ひ上げたものであるが、貴重な資料的文獻であるからそのうち詳しく「沙翁書誌」でも書いて紹介したいと思つてゐる。專門的に努力して探したらまだまだ澤山出るかと思ふ

が、これだけでも研究家には相當貴重な參考となるであらう。

以上でも分るが、明治初期といふ比較的短かい間にこれだけ澤山紹介された作家は他國は勿論英國にもない。實に壓倒的の多數であり、それだけ何等かの形式で當時の文學に影響してゐることを想像し得る（面白いその影響を辿り得るものも多少あるが、暗々裡に部分的影響を受けたものに至つて數へることが出來ないであらう）。英文學としてさう讀み易くないシェークスピアがかう澤山紹介されるといふのは、當時として不思議とも思はれるが、表面的にいへばそれは矢張り、沙翁物が代表的英文學であり、英國だけでなく世界的に斷然優つた人氣をもつて居る上、作品としての優秀といふことが、幼稚な頭の日本人にも分つたからに違ひない。又に注意すべきは、所謂沙翁中、封建的意識の強く出た英國史劇が一つも紹介されずに、普遍的に人心に訴へる悲劇喜劇のみが譯されてゐる點である。此の沙翁物歡迎の現象を社會的階級的に說明することは、興味ある研究題目の一つであるが、今はその餘裕がないから止めるとして、フリーチェの『歐洲文學發達史』中の沙翁論が種々な點で有益な基礎的暗示を與へてくれるであらう。フリーチェはシェークスピアを英國商業資本主義文化の最大詩人と見、封建貴族とブルジョアジイ及び彼等の文化との衝突をシェークスピアの大作の不斷のテーマと見てゐるのである。

シェークスピアの作品に最も早く親しんだ人は誰か、又最も早く讀まれた作物は何か、これは別樣の意味で矢張り面白い研究題目となり得る。僕は今のところ決定的にこの問題に解答を與へるだけの資料をもたぬが、少くとも福地櫻痴が最も早く沙翁物を讀んだ日本人であることだけは確かである。（彼は明治五年に草した文章に沙翁の作から引用してゐる。）又福地に關する限りでいへば、『ジュリアス・シーザァ』が可成り早くから讀まれてゐること

が分かる。櫻痴が沙翁物を手にしたのは幕末洋行の際であるらしいから隨分古いものといへる。

リットン。 シェークスピアの次に多く飜譯紹介された英國文學はリットンの作物であつて、——

明治十一年「花柳春話」（丹羽純一郎譯）（Ernest Maltravers 及び Alice）

同　十二年「父子奇遇 白浪艶話」（小川漁史譯）「驥尾團子」所載、（二十四年單行（Paul Clifford）

同　年「人間萬事金世中」（福地櫻痴原話 河竹新七譯）（Money）「歌舞伎新報」所載

同　年「寄想春史」（丹羽改め織田純一郎譯）（The Last Days of Pompeii）

同　十三年「龍動鬼談」（井上勤譯）（A Strange Story）

同　十四年「昔ゆうぜん荒夢物語」（上田秀成譯、未見、恐らく未刊）（Eugene Aram）

同　十六年「通俗花柳春話」

同　十八年「慨世士傳」（坪内逍遙譯）（Rienzi）

同　年「繫思談」（尾崎庸夫譯、藤田茂吉閱）（Kenelm Chillingly）實は大學時代の朝比奈知泉氏が譯したものである。

同　二十年「ハロールド物語」（磯野德三郎譯）（Harold）

同　年「文學小說 連理談」（服部撫松譯）（Eugene Aram）

同二十一年「奸雄之末路」（吉田嘉六譯）（Calderon the Courtier）

同二十二年「夜と朝」（益田克德譯）（Night and Moring）

同二十四年「保羅（ポール）、苦里堡（クリッフォード）」（萩の家主人卽ち粟屋關一氏）

リットンは元來が多作家ではあるが、この飜譯紹介の數も可成り大したものである。僕の未見の紹介や飜譯が新聞雜誌に散見してゐるかも知れぬから、これ以上に多少の増加があるものとしなくてはならない。

此等の作品の個々についての解題は、前に度々書いたことがあり又他にもあるので、今又それを論說することはやめよう、たゞ何故リットンがかう澤山譯出され、又讀まれたかといふ點を問題として述べて見たい。

當面の現象に卽していへば、リットン物の流行は織田氏の『花柳春話』が劃期的に成功し大流行を極めたからであるといひ得る。然しそれは何故かう大流行を極めたか、蓋し此の書はあらゆる點で當時の讀書社會の要求を滿足させることが出來たからである。明治九年、十年と殺伐な空氣に包まれてゐた社會が清新な趣味に渇してゐたこと、當時の西洋崇拜熱をあくまで滿足させたこと（固より著者が貴族で政治家であり、内容が英國社會上流の描寫である等）、小說の筋が才子佳人が多年流離艱難の後團圓するといふ、最も日本人好きのする小說理想の具現であること、當時要求され始めて來た政黨政治の消息を幾分にせよ傳へてゐること、皮相的ながら自由主義が織り込まれ、小說を勸懲の具と見る當時の日本人の考へと合致してゐたこと、漢譯文章に清新な味があつた[illegible]こと等々が、その理由の諸點である。

『花柳春話』に「政治小說」のレッテルを張りたがる人が相當ある、然し譯者織田氏の意圖にはこれを政治小說として紹介する考へがあつたのではない、彼がこれを紹介することになつた動機は英國の流行小說で英國の風俗人情を知るに、都合のよいものだからといふのである。又この小說の出版當時、譯者もこの小說を特に政治小說だからといふので飜譯したのではない、矢張り西洋の人情小說社會小說として飜譯したのであつた（例へば[illegible]

北の序文を見よ)。後の政治小説の起るのに多少の刺戟となつた點は認めるが、『花柳春話』そのものは政治小説ではない。獨り『花柳春話』ばかりでない、リットンの小説の飜譯といへば何でも政治小説かの如く見るのは間違ひである。これはつまり十五年以後政治小説といふものが要求されるに及んで、リットン物の或る物(例へば『慨世士傳』、『繫思談』)が政治小説のイデオロギイをもつて譯出されたところから溯及的にさう見なされるに至つたのであるが、これはよろしくない。從來政治小説乃至飜譯政治小説といふ語は、恐ろしく亂暴に使用され、リットンの『夜と朝』の如きは勿論、バァサ・クレイの『谷間の姫百合』の如きにまで及ぼされてゐるが、凡そ政治小説イデオロギイか政事的事件を中心としてゐない政治小説といふものは考へられぬ筈である。この點は必ず改められなければならぬ。

以上の如くして、リットン物が流行したのは、當時としては流行するだけの理由があつたのである。然るにその流行の社會的意義を求めて、「沒落貴族階級」(フリーチエ)たるリットンの文學が流行したのは解するに苦しむといふ論者がある(註一)。これは「沒落貴族」といふ語に餘りに公式的に拘泥して解するから、さうなるのである。フーリチェは同じ場所(『歐洲文學發達史』の二一三―一四頁)で立派に、明治初期社會にリットン物の繁昌して然るべき理由があることを暗示してあるではないか。

若しも貴族階級の一方の代表者達がどん底に沈んで行くとすれば、他の者達は、最初はバイロン風の上流社會の伊達男、流行の數へ子、美味な食卓と機智に富んだ談話の評價者から、次いで政治闘爭に惹きこまれ、經濟學を研究し、金持の女との結婚によつて自己の物質狀態を改善し、議會に出、大臣を覘つてゐるペルハムのや

うに。ブルジョアに轉化してゐる。全社會を推し進め、登場人物の行動を方向づける主要な神靈は、——利得、富、金錢の禮讃である。ブルワア（リットン）の脚本の一つは『金』といふ題を與へられ、その主題は「幸福は金にある」といふ幕切れの絶叫に含まれてゐる云々。

貴族が階級的には沒落するが、沒落してブルジョアジイに轉向して幸福を握む。かゝるリットン小説の社會は同時に或る意味で明治初期の社會的變動をサンマライズしたものと云つても可い。かゝるテーマをもつた小説がかゝる社會に流行するのに、何の不思議があらう。金の爲めに、翻譯翻案されたリットンの作品について見ても單に流行につれて偶然取上げられたやうな一二の作を別とせば（『龍動奇談』の如き）、それぞれ流行するだけの理由があつたのである。『花柳春話』は、ブルジョア出身の青年が學問才智によつて貴族に打ちかつて成功する（戀名譽、富に於いて）物語であり、『寄想春史』にもブルジョアが貴族（僧侶）と抗爭する一面があり、『白浪譚話』には富貴榮達のためには妻をさへ犧牲にするといふ小ブルジョア（プラントン）が描かれてゐる。前述引用文中の脚本『金』即ち『人間萬事金世中』については更めていふまでもない、『慨世士傳』も人民が貴族政治に勝つ物語であり、『繫思談』では、人生のあらゆる試錬に若い日の夢を振り棄てて新に生活戰場に力を試みるべく踏み出す青年が主人公である。『奸雄之末路』は專制政治家の最期を描いたもの、『夜と朝』は沒落貴族が愛の力でブルジョアと更生して幸福を得る物語である。以上を綜合しても、明治初期の社會にリットン物が流行した意義が略ぼ理解されると思ふ。

デスレリー（ビコンズフィールド卿）　大抵の人は、此のころヂスレーリの小説も可成り澤山翻譯されたものゝ

やうに考へてゐるが、事實はリットン物よりずつと減り、約三分の一即ち次の五種よりない。

明治十七年「政黨餘談春鶯囀」(關直彥譯)(Coningsby)
同　十九年「三英双美政海之情波」(渡邊治譯)(Endymion)
同　二十年「雙鸞春話」(牛山鶴堂譯)(Henrietta Temple)
同　年「政海冒險大膽書生」(井上勤譯)(Vivian Grey) 雜誌「文學之花」所載。
同　十一年「昆太利物語」(福地源一郎 塚原靖譯)(Contarini Fleming)

此のうち『大膽書生』は數回掲載されたのみでいはゞ斷片であるから、これを省くと先づ四種である。此の四種のうち純政治小說は『春鶯囀』と『政海之情波』の二部よりないが、ヂスレーリを移入させた最初の動機が政治的興味にあることはいふまでもない。さうして『春鶯囀』がブルジョアが貴族と妥協して政治に當ることを趣向にしたもの、『政海之情波』は、ブルジョアの一靑年がこの才智と美貌によつて貴族を凌いで政治的成功を得ることを描いたもの、更に『昆太利物語』は典型的なブルジョア貴族たるコンタリニの生涯を敍べたものであり、從つてそれぞれの意味に於いて明治初期の社會に歡迎された(少數ながら熱心に)のは怪むに足りない。然しフリーチェによつて「帝國主義的ブルジョアジイの未來の核心」とレッテルを張られたヂスレーリが何故もつと紹介されなかつたか、リットンでさへあれ程歡迎されたのだから、ヂスレーリの如きはもつと澤山飜譯紹介されていゝではないかと思はれる。然し事實はかくの如くで、ヂスレーリの最も特色ある社會小說『シビル』も紹介されず又最も國權思想を發揮した『タンクレッド』も紹介されてゐない。矢張りこれは、當時の社會狀勢に都合のいゝ

ものが選ばれ、當時の社會狀勢にピッタリしないものが避けられたと見るべきであらう。當時社會意識の最も表面にあつた問題は立憲政治の確立であり、政黨政治の要望であつた(何の爲めに要望したかはいふまでもない)。資本主義の社會問題は、當時はまだ全般的には取り上げられてゐなかつたし、又國權伸張に專心する實力がなかつた。(たとひ思想的には民權論と密接してゐたにせよ)。從つてヂスレーリ紹介も、主として、立憲政治、政黨政治の觀點からなされてゐるのが分かる。ヂスレーリの紹介は、當時の政治小說に多大な影響を與へ、『小說神髓』の時代と相俟つて、爾後の政治小說の形式を決定したといつても過言ではない。さうしてかゝるヂスレーリの作品の影響を最も多く受けたのは改進黨側の政治小說家であつた。改進黨は內治第一、對外平和を主義とする政黨であり、國權伸張外干涉を第二義とする。此の點からも亦、當時紹介されたヂスレーリは、ツリーチェのいふ如き意味でのヂスレーリが主ではなく、英國流の政黨政治家としてのヂスレーリが主なのだといふことが裏書きされる。かくてヂスレーリの小說の紹介は、當時の社會狀勢から若干の制限を受けたが、然しヂスレーリ自身に對する歡迎熱は驚くばかりで、當時の政界第一流の名士尾崎學堂は彼の傳記を稗史風にして『經世偉勳』なるものを書いたが、この大部の二冊ものが何版となく賣れたものである。(よくヂスレーリのヤング・イングランド運動と、新興日本即ちヤング・ジヤパンなるものと類似視されるが、然し前者は一種の反アル運動であり、後者はアル中心運動であることをよく考へてみなくてはならぬ)。

スコット。スコットの作物の紹介も多い方ではあるが、然しこれも亦、人が想像してゐる程多くはない。

明治十三年「春風情話」(橘顯三譯)(The Bride of Lammermoor) 實は大學時代の坪內雄藏先生譯

同　十七年「春窓綺話」（服部誠一纂譯）（The Lady of the Lake）　實は高田早苗坪内雄藏二氏の譯、中の漢詩數篇だけ天野氏の手傳ひとある。

同　十八年「壽其德奇談」（横山鉼呂久譯）（Tales of a Grand Father）

同　十九年「梅蕾餘薫」（牛山鶴堂譯）（Ivanhoe）

僅に四種である。スコットはいふまでもない、ロマンチシズムの封建的回顧的方面を代表する歴史物の大家である、日本に移入した最初の原因は、日本人の歴史趣味に合致した爲めであるが、然しそれが餘り澤山に飜譯されなかつたのは、やはりリットン等を流行させた一半、即ち當時の社會に全般的に訴へる力を缺いてゐた爲めであらう。これは、以上四部のうち比較的もてはやされた「春窓綺話」と「梅蕾餘薫」を考へてみるとわかるのだが、これ等は單に詩として又は歴史小説として讀まれたのではなく、政治のころもをかけられ、政治小説といふ觸れこみで歡迎されたのである、然しもちろんそのころもは要するにころもに過ぎなかつたので、さう大に歡迎されるといふわけには行かず、僅かに當時まだ愛讀者の多かつた馬琴流の稗史趣味と通じたものがある點で「梅蕾餘薫」が比較的多く讀まれたに止まつた。

モーア、スウィフト、デフォー。以上の外に注意すべきは、サア・トマス・モーアの『ユトウピヤ』（Utopia）が明治十五年に『良政府談』と題し、十六年に『新政府組織談』と改題して刊行されてゐる、勿論政治熱に投じようとしたものである。スウィフトの『ガリヴァ旅行記』（Gulliver's Travels）は始め『鵞瓈皤兒回島記』（十三年）として何の政治的意義なしに刊行されたが、後に政治小説として繰返された（『大人國旅行』二十年、『小人國發見録』二十一年）。二書ともに餘り流行しなかつたらしいのは、政治は政治でも當時の社會に當嵌まつたイデオロギイで

なかつたからである。獨りデフォーの『ロビンソン』だけは十年以後更に二度譯されてゐる。橋園仕史『九死一生 魯敏孫物語』(明治十二年)、井上勤譯『絶世奇談 魯敏孫漂流記』(十六年)、牛山鶴堂譯『新譯魯敏孫漂流記』(二十年)、これである。前にも暗示したが、フリーチェの所謂「商業資本の冒險家の姿を明瞭な型」を描いたこのダルビ・ァ了童議小說がかくまで種々の形で歡迎されたのは(『西國立志編』と共に)、明治初期の社會の性質を表示する意味深い現象である。

英國文學に關してまだまだいろいろ語るべきことがあるが、英國だけに偏するのも本意でないから、英國はこれだけで切り上げて佛國文學へ移ることにしたい。

註(一) クオタリ日本文學第一冊(昭和八年一月)二三三頁。

佛國文學

明治十一年以後譯述された佛國文學で年代順といへば、先づフェヌロンの作物を擧げなくてはならぬ。フェヌロンの作では有名な『テレマック冒險譚』(Les Aventures de Télémaque) が

明治十一年「へねろむ物語」(作藤正毅譯・未見)

同 十二年「哲烈禡物語」(宮島春松譯)

同 十六年「哲烈禡奇談」(伊藤信三郎譯)

と三度まで繰返して譯されてゐる外に

明治二十一年「哲世奇話」(白洲梁雄譯)

といふのがある。此の後者はフェヌロンの『ファーブル』(Fables)を譯したもので、今日では前者よりも稀本になつてゐる。抑も當時の社會人は『テレマック』に何を見出してかく歡迎したかといふことは一考に値する。これには面白い話であるが、十六年に「鐵烈奇談」を譯した伊澤信三郎は、後に織機業者として成功した人物だがこの書をもつて人世に於ける最大教訓書となし、常に服膺することを忘れなかつたといふ。この書はルイ十四世の王子の爲めに智德涵養の具として著された書物で、文學的にも立派なものだといふが、明治初期の社會に於いてはブルジョア成功者を養成すべく利用されたのである。次は一足飛びにユーゴーに移るが、——

ユーゴー。詩人乃至小説家としてのユーゴーの名は相當早くから傳はつてゐた(例へば明治十二年「今世西洋英傑傳」中に見える)。然し彼の作が實際明治文壇乃至讀書界と接觸したのは、少しく遲く十六年以後のことである。板垣退助が後藤象二郎と洋行したとき、ユーゴーに會つて、政治小説論を吹き込まれ、それには俺の小説から讀ませろといふので、ユーゴーの小説を持返つて、自由黨關係の新聞に記載した。然し當時はまだ大衆に文學的理解が缺けてゐたせゐか、思つた程は歡迎されず、デュマ、ヂスレーリだけの人氣がなかつた、二十年前に至つて森田思軒といふ熱心な紹介者と民友社一派の努力とで、ユーゴーの人道思想といふものが可成り廣く行亙り、部分的には相當深く浸透もしたらしい。

明治十七年「佛國革命修羅の衢(ちまた)」(坂崎紫瀾譯演)(Ninety Three) 自由新聞掲載

同　十八年「佛蘭餘聞緒夜の月」(未詳)(原本右同、續譯ともいふべきか)

同　二十年「五日紀變英雄之肝膽」(桑城野田藤吉郎譯)(Histoire d' un Crime)

同　　年「寸鐵美人之腦」（井上勤譯）（Les Misérables）「文藝之花」所載 分製

同二十一年「隨見錄」（森田思軒譯）（Choses Vues 英譯で 'Things Seen'）國民之友

同二十二年「探偵ユーベル」（同）（Hubert）同

同二十三年「クラウド」（同）（Claude Gueux）同

同二十五年「懷舊」（同）（Bug-Jargal）同

同二十九年「死刑前の六時間」（同）（Le dernier jour d' un Condamné）

以上の外に思軒門下の原抱一庵が二十四五年頃『哀史』を飜譯しようと試みたが、斷片一二篇發表したのみで遂に成らなかつた。思軒も勿論『哀史』のことは心掛けてゐたが、これは全然着手に及ばずして死んだ。兎もあれ、明治初期（思軒以前）に限つていへば、ユーゴーの作物は僅々一二篇より紹介されてゐない以上、その紹介されてゐる作物もさう讀者に受けてゐはしない、これは少し案外だが事實なのである。眞先にフランス革命を描いた『九十三年』が紹介されたのは、當時の政治熱から見て當然であるとして、それが大して受けもせず、ユーゴーそのものが名の高い割に思軒以前は餘り關心をもたれなかつたのは何故であらう。これは矢張り初期當時の社會の政治的要求にユーゴーの所說とぴたりと合はぬものがあつたからである。當時の社會の大勢は立憲政治の確立を理想としてゐたものであるのに、ユーゴーの同情は寧ろ社會主義人道主義に向つて居り、アンチブルジョア的分子が多分にあつたので、自由黨左翼の少數が讚奉したのみで、まだ一般讀者にはさう受けなかつたものであらう。それと共にブルジョア政治がやゝ確立しかけて、インテリゲンチヤがブルジョアと反目しかけて來

た二十年後から、ユーゴーが力を得て來るのも、同じ理由から理解されるのである。

デュマ(父)。 明治初期にはデュマ父子とも飜譯紹介されてゐるが、普通デュマといへば Père 即ち父の方をさす。こゝでも父の方だけに就いて語つて置かう。デュマの飜譯紹介された作品も調べて見ると、有名な割に數は多くない。デュマも相當早くから讀まれたといふが、譯されたのは

明治十四年「五九節操史」(松岡龜雄譯)(The Forty-Five Guardsmen)
同　十五年「西洋血潮小暴風」(櫻田百衞譯)(The Memoirs of a Physician)
同　　年「自由乃凱歌」(宮崎夢柳譯)(Taking of the Bastille)
同　十七年「鮮血の花」(同)(「西洋血潮小暴風」の續篇)
同　二十年「三人銃卒」(加藤紫芳譯)(The Three Musketeers) 讀賣新聞
同　　年「西洋復讐奇譚」(關直彥譯)(The Count of Monte-Christo)
同二十一年「自由乃凱歌」(宮崎夢柳譯)(舊譯を增補したもの)

此處までゞいへば數はスコットと略ぼ伯仲のところであるが、一時の人氣はスコットを遠く凌いでゐた。デュマもスコットも同樣に回顧的な歷史小說を書いたのにと思ふかも知れないが、それは內容が違ふからで、スコットのは主として封建時代のことであり、デュマのはフランス大革命が中心となつてゐる。十五年前後は、自由黨の勢力の最も強い頃であり、彼等の或る者はフランス革命の人々及びロシアの虛無黨、愛蘭の借地黨に大に共鳴してゐたものである。從つてフランス革命を小說にしたといふだけで歡迎される資格は十分あつたのに、今一つ

理由があつた。それは此の頃政治小説が注目されたの著作も促されつゝあつたが、急場の間に合はなかつたので外國小説の飜譯に政治的イデオロギイを吹き込んで、政治小説に代用した。デュマの歴史小説はこの代用に最も都合よく出來てゐたのである。それで自由黨の豪傑連が俄に政治小説家となるに皆此のデュマを利用した。それだけに一時の人氣が素晴らしかつたが、自由黨の勢力が下火になると共に、かういふ豪傑連の飜譯的政治小説も下火となり、創作政治小説が起つて來たので、デュマ物もあまり喜ばれなくなつた。だが、二十年以後更に本來の歴史小説といふ姿で更に紹介されることになるわけである。

ジュール・ヴェルヌ。 初期に飜譯された佛文學で何といつても壓倒的に多數でもあり、從つて歡迎もされたのは、ジュール・ヴェルヌの小説である。飜譯の數もリットンと匹敵するか、それ以上であらう。

明治十一年「八十日間世界一周」（川島忠之助譯）（Around the World in Eighty Days）
同　十三年「九十七時二十分間月世界旅行」（井上勤譯）（From the Earth to the Moon）
同　十六年「亞弗利加内地卅五日間空中旅行」（同）（Five Weeks in a Balloon）
同　　年「月世界一周」（同）（A Trip round the Moon）
同　十七年「六萬英里海底紀行」（同）（Twenty Thousand Leagues Under the Sea）
同　　年「五大洲中海底旅行」（太平三次譯）
同　　年「自由の征矢」（井上勤譯）（Martin Paz）
同　十八年「英國太政大臣難船日記」（井上勤譯）（The Survivors of the "Chancellor"）

同　年「拍案驚奇地底旅行」（三木愛花 高須墨浦譯）（A Journey to the Centre of the Earth)

同　十九年「月世界旅行」、「空中旅行」等合本。

同　二十年「萬里絶域北極旅行」（福田直彦譯）（The English at the North Pole)

同　年「學術妙用造物者驚愕試驗」（井上勤譯）（Dr. Ox's Experiments)

同　年「政治小説佳人之血淚」（同）（「自由の征矢」の改題）

同　年「佛曼二學士の譚」（紅芍園主人譯）（The Begum's Fortune）報知叢談

同　年「鐵世界」（森田思軒刪潤）（前者の單行本）

同　年「盲目使者」（羊角山人譯）（Michael Strogoff）報知叢談

同二十一年「炭坑祕事」（紅芍園主人譯）（The Child of the Cavern）報知叢談

同　年「大東號航海日記」（森田思軒譯）（A Floating City）國民之友

同　年「瞽使者」（森田思軒刪潤）（「盲目使者」の單行されしもの）

同　年「通俗八十日間世界一週」（井上勤譯）

同二十二年「大叛魁」（森田思軒譯）（The Steam House)、第一期新小説

先づ二十二年までで止めて置くが、此の外に當然ヴェルヌとしていゝやうな飜譯ものがまだ多少ある、その他私が全然知らぬものもあらうから、今少し數が殖えると思ふ。實に初期の飜譯文學中では一二を爭ふ程の夥だしいものである。以上のうちにはかつて一度それ等について述べたことのあるものもあり、まだ述べたことのない

ものもあるが、今は然し個々について語ることは一切やめて、その飜譯の社會的意義だけに一考を拂つてみる。

ヴェルヌ物がかう澤山紹介されたことについては、木村毅、柳田太郎の如き人々の説明があり、勿論大體に於いて正鵠を穿つたものであるのに、誰しも異論はない。ヴェルヌの小説は流石に科學小説といはれるだけあつて科學的發明乃至發見を興味の中心としたものは勿論、普通の冒險探偵小説と目されるものでも科學への關心が必ず伴なふ。さらでも西洋の物質文明、即ち科學文明に驚異の情を禁じ得なかつた明治初期社會の人々は、此等の小説を讀んで、科學の力の如何に恐ろしいものかを今更のやうに感じ、科學文明萬能の思想を抱くに至つたことは、想像される。此の點で此等の小説が、工業資本主義の日本の出現を豫想させるものといひ得る。日本の將來が科學文明に依らなくてはならぬといふのは、此の頃上下萬人の痛感してゐたところであつたが、ヴェルヌの小説が、かういふイデオロギイを更に强化し、更に宣傳するに力があつたことは認めて可からう。

此の科學小説といふ新ジャンルは單獨で前後の明治の文壇に發達しなかつた。これを生育するだけの科學思想なり科學知識なりが、まだ當時の日本にはなかつたからである。然し興味あることは、二十三年前後から政治小説が變調を來して國權伸張をイデオロギイにもつに至つて、科學小説はこれを合體し（例へば『浮城物語』）、進り辿つて三十年代の冒險小説（押川春浪を代表的作家とし、『新造軍艦』の五部作を代表的作物とするもの）に結びついてゐる。勿論これ以後科學思想が普及するにつれて、探偵小説から大衆的讀物にまで來てゐるのはいふまでもない。

ヴェルヌに似て非なる作物はア・ロビダーの『第二十世紀』である。ヴェルヌは流石に時代の科學的知識をしつかりと攫んで、豐かに正しく想像を使つてゐるが、ロビダーのは、道具立の大きい割合に想像が空虚であり、

科學的知識もさう正確とはいひ難い。然し面白さの點では、これ亦た捨て難い。

露國文學

英佛文學を除くと、注目される程譯出紹介されてゐる外國文學はない、强ひて言へば露西亞、獨逸、伊太利の文學も多少あるから、さう區別して次に語ることにするが、その數は實に寥々たるものである。たゞその前に特別に述べなければならぬのは、露國文學だが、それも、虛無黨文學が明治初期に特殊な意義をもつてゐるからである。

ここで一寸困ることは、いはゆる虛無黨文學が全部露國文學かといふ點であるが、實は虛無黨の活動なり歷史なりを中心にして（又は部分的に取入れて）敍述した各國文學の總稱である。そこでこれを露國文學の條下に述るのは大に不都合なのであるが、然し虛無黨といふものは本來露西亞だけの產物であり、筆者は國を異にしてゐても、その資料は大抵露國に仰いでゐるものであるから、先づ露國文學の條で虛無黨文學に說き及ぶことを大目に見ていたゞく。そこで主立つた虛無黨文學を數へてみると、——

明治十四年「魯國の烈女ヴェラサシュリッチ糺問の記」（曙新聞）
同　年「西國烈女傳」（田島象二編）（第三章は上記ヴェラの糺問記である）
同　年「魯帝弑逆記」（大久保常吉）（アレクサンドル二世暗殺の記事）
同　十五年「魯國奇聞烈女之疑獄」（柚田策太郎譯）（十四年曙新聞の記事單行）
同　年「寃枉乃鞭笞」（宮崎夢柳譯）（上記のヴェラ傳を更に小說化せるもの）

同　年「虚無黨退治奇談」（川島忠之助譯）（Paul Vernier : The Chase of the Nihilists）

同　年「露國虚無黨事情」（西河通徹譯）

同　十六年「クロプトキン侯傳」（朝野新聞）（Stepniak : Underground Russiaの一部）

同　年「一讀千金 憂世乃涕涙」（宮崎夢柳譯）（Edward King : The Gentle Savage）自由新聞

同　十七年「魯國虚無黨祕錄」（自由新聞）（右Underground Russia）

同　年「露國安那物語」（坂崎紫瀾譯）（「虚無黨退治奇談」を更に講史化せるもの）土陽新聞

同　年「虚無黨實傳記 鬼啾啾」（宮崎夢柳譯）（Stepniak : Underground Russia をもとにせるもの）自由新聞

同　十九年「通俗虚無黨形氣」（冷々亭杏雨譯）（Tourgenieff : Fathers and Children）未刊・譯者は二葉亭の別號

同二十一年「政治上 放逐人 千里風煙」（鈴木天眼譯）（Tissot, Amero : Adventurs of the Three Fugitives）

同二十二年「美人の手」（黒岩涙香譯）（Boisgobey : The Cold Hand）

わが國人の虚無黨に對する關心は、明治十一年のヴェラ・ザシュリッチ事件以來漸く高まつて來、十四年のアレキサンドル二世暗殺をもつて最高潮に達したと見られる。殊に自由黨側の青年政客が虚無黨の活動に關心をもち、これを政治小說化して宣傳に利用したことは上表の示す通りである。而かもその宣傳には申合したやうに虚無黨なるものゝ恐るべき憎むべきものなることを強調しつゝも、彼等が必死を分とした神出鬼沒の活躍に何かしら英雄的なものを感じてゐる。勿論自由黨側には幾分これを模して華々しい實行運動を試みたものもあつたが、大抵は當時の廟堂有司に對する警告乃至威嚇として持ち出したのに止まる。而かもその模倣實行が徒らに失敗し

てたゞ世人の恐怖を買つたのみ、却つて自由黨勢力失墜の一因となつたといふ、或る意味で今日の左翼小兒病者の態度と比較されるものであらう。かくて自由黨の勢力が失墜すると前後して、虚無黨の活動もやゝ溫和になり、いつしか日本人の關心圏外に逸した。後、日露戰爭前後、別の意味で虚無黨に對する關心が再燃する、即ち虚無黨がわが敵たる露國の內部を蝕ばむ有力な結合たる點に於いて、彼等の活動を同情的に見たものである。

明治初期の虚無黨文學については、木村毅君の詳細な研究があるので（『明治文學展望』の中）、今更贅說する必要を認めないが、たゞ一言して置きたいのは、所謂「立志社の社會黨小說」といふものである。これは竹越氏の『新日本史』（上、一九一頁）の記事が根本になつて出來た說であるが、あの一節は非常に時間を壓縮した記事であるから一寸誤解が伴なふ、指原氏の『明治政史』にもこれと略ぼ似た記事があつたかと思ふ。社會黨小說云々の一項、革命歌謠の一項等は一種追記の體で、何も立志社が草創の當時の一プログラムとして、かゝる事をも手がけたといふのではない、いはゞ後には歌謠や小說にまで手を伸したといふべきところであつたのである。それを立志社の草創時、即ち明治七年の條で何もかも說明してあるので、相當長い間の立志社の仕事が皆此の一二年の事のやうに解され、從つて明治十年前に早くも魯國社會黨の非運を小說に作つた云々といふ結論になるのだが、十年以前には、虚無黨に關する興味なり關心なりが小說を作る程まだ高まつてゐない（且つ此の小說とは恐らく十七年の『露國安那物語』をさすものと思ふ）。竹越氏の記事はよくよむと別に間違つてゐないが、人を間違はせ易いことは注意すべきである。

虚無黨文學を別にせば、露國文學の紹介された作品は甚だ少ない。

明治十六年「花心蝶思録」（高須治助譯）（Pushkin : The Captain's Daughter）

同　十七年「蓋世偉聞露國水滸傳」（エルマックのシベリヤ征服記）

同　年「名將佳人遠征奇談」「露國水滸傳」の單行（小野多三郎譯 三木愛花閲）

同　十九年「北歐血戰餘塵」（森體譯）（Tolstoi : War and Peace）

同　年「スミス・マリー之傳」（高須治助譯）（「花心蝶思録」の改題せるもの）

同　二十年「他邦侵略露人氣質」（八木半痴譯）（エルマック傳を小説にせるもの）

同二十一年「あひゞき」（二葉亭四迷譯）（Tourgenieff : Rendez-vous in The Sportsmen's Sketches）

同　年「めぐりあひ」（同――Three Meetings――）

同二十二年「憂國偉才美人草」（五七居士譯）（Tourgenieff : On The Eve）日本之時事（及び大和錦）

同二十三年「二羽の鳩」（湖處子譯）（Tourgenieff 原作と評）國民新聞

二十二三年までにはトルストイも相當讀まれ、ドストイエフスキイさへ讀まれるに至つたが、然し飜譯文學としては、上の如くツルゲーネフの全盛である。これは、最初虚無黨文學として親し味をもたれた、露西亞文學だけに、ツルゲーネフの名も虚無黨の文字の名付親として、虚無黨文學との關連に於いて最も多く興味をもたれたものであらう。明治十六七年頃にツルゲーネフに關する記事が往々新聞に見えるのも、その邊の消息を語つてゐる。プーシキンもトルストイも紹介されてはゐるが格別問題にもならなかつた。前者はたゞ露國の人情小説といふ格で、後者は單なる戰記物といふ格で紹介されたものである。『あひゞき』、『めぐりあひ』はともに當時の文壇

への影響上飜譯文學史上重要視すべきものだが、今此の初期だけでいへば、異樣な作品を異樣な文體（言文一致）で譯したといふ點が注意を惹いた位のもので、格別讀書界の問題にもならず、石橋忍月の批評が出るに及んで僅にさうかと合點するものがあつたのである。なほ東方侵略の英雄エルマク傳が反覆して紹介されてゐるが、これは露國東漸に矢張り當時の人々も漸く注目してゐたところから出た興味と冒險企業の精神を買つたものであらう。

獨逸、伊太利、西班牙の文學

大分注意して敍述して來たのだが、矢張り豫定のプラン通り行かぬ。然し規定の割當枚數は疾うに越えてゐるのだから、一切を抛棄して、此の三國の飜譯文學を略敍して終稿としたい。

獨逸は大國家としては新興國であり、東洋に對する關心もさう古くないし、又我が國が接近したのも勿論普佛戰爭以後のことであり、殊にその學術思想に着目して、これが採取を奬勵したのは十五六年からであるから、その影響も皮相的で、その文學の紹介も初期にはまだいふに足らない程である。然かもその移入の契機が政治的動機からであつたことは、政府當局が、獨逸學によつて英佛思想を防止しようとした點と對照して、いさゝか皮肉の感がある。

明治十五年「哲爾自由譚」（山田郁治譯）（Schiller : Wilhelm Tell）

同　十七年「獨逸奇書狐の裁判」（井上勤譯）（Göethe : Reinecke Fuchs）

同　十九年「一讀千嘆歐洲書生氣質」（寸木田人譯）（未詳）譯者はシュレーデルの「スッデンテン、ウント、リユツオウェルン」といふものだと斷つてゐる。

同　年「維廉得自由の一箭」（中川霞城譯）（Schiller : Wilhelm Tell）

同　二十年「沙漠旅行亞拉比亞奇譚」（中川霞城譯）（Hauff : 英譯名 The Caravan）

同　年「鐵血政略」（渡邊治譯）（小説といふのではない、ビスマークの傳をやゝ稗史めかしたるもの）

同二十一年「奇遇夢物語」（横山寧一譯）（譯者によると、原書は「阿剌比千一夜譚」といふが、恐らく「アラビヤンナイツ」か）

同　年「妖怪船」（高橋輕五郎譯）（Hauff : The Story of The Haunted-Ship）

同　年「旅路之空」（田中柏蔭譯）（Hauff : 英譯名 The Caravan）

同二十二年「鬼車」（隔鱗坊、巖谷小波譯）（ただメルヘンとあるも、グリムなるべしといふ）

同　年「破茶碗」（森田思軒譯）（Zchokke か : The Broken Cup）第一期新小説

同　年「玉を懷いて罪あり」（森鷗外譯 三木竹二）（Hoffmann : Fräulein von Scudery）

鷗外の出現と共に獨逸文學が本格的に紹介されることになる。初期に於いてはハウフその他一二を除くとシルレル、ゲーテともに政治的意味から翻譯紹介されたものである。ハウフ、グリムの紹介と後年の少年文學の發達とは勿論關連してゐるものと見て可からう。

伊太利は美術を教へたが、その新興文學は殆ど傳へてゐない、たゞボッカチョの『十日物語(デカメロン)』がそれも古典として移入されてゐるのみ。

明治十五年「群芳綺話」（大久保勘三郎譯）

同　十八年「指環ノ裁判」（米谷又勤譯）

同　十九年「想夫戀」（佐野尚譯）

同　二十年「鴛鴦奇觀」（近藤東之助譯）

同　　年「密夫之奇獄」（菊亭靜譯）

その他には

明治二十年「人情小說花情粹話」（大石高德譯（佛譯にて "Nouvelle Piemontaise" といふもの）

を見るのみ。

西班牙に至つては更に甚しい。セルヴンテス『ドン・キホーテ』の紹介三部で全部である。

明治二十年「歐洲新話谷間之鶯」（齋藤良恭譯）

同　　年「歐洲情史美人之良」（中村柳塢譯）

同　　年「鈍喜翁奇行傳」（ワ、シ譯篇）（教育雜誌）

大急ぎであるが、先づこれで擱筆とする。

その他、古典文學、アラビヤンナイツ等について、又飜譯文學と明治文學との交渉、初期以後の大勢等に就いて語るべきであつたが、もうこれ以上續稿を許されぬので、これ等の問題については他日の機會に語らう。

（昭和八、一〇、二四、改造社版「日本文學講座」）

日本文學に及ぼしたる西洋文學の影響

——資料を中心にして——（岩波書店版「世界文學講座」の爲めに）

一　態　度

此の項目は、正宗白鳥氏、宮島新三郎君、私と三人の分擔執筆となつてゐるが、正宗氏が小說を中心としての概論、宮島君は評論を中心としての記述であるに對し、私の分は資料を中心といふことになつてゐる。卽ち正宗宮島兩氏の分はこの項目をそれぞれの立場から現象的に論述されるのであるが、私のは、西洋文學の影響をうけて成つた作品そのものを解剖しつゝ、兩氏の論述に具體的實例を提供するといつた役廻りである。作品の解剖といつても、敍述の進行上全然それぱかりやつてゐるわけにも行かぬから、勢ひ三人の記述が重複したり、かち合つたり、多少入違つたやうなところが出來てくると思ふ。それも文字通りの多少なら恕していたゞきたいが、若し何處かに根本的に相違したやうな點が生じて、何れに據るべきかなどといふ疑問の生じた場合、遠慮なく照會されたい。分かるだけの事柄はお答へしよう。

たゞ現象的記述と違ひ、解說的の敍述は紙數を比較的多く要するから、兩氏の分に追隨してあまり低調とでは下つて來られまいかと思ふ。又、私の解說する作品も、私の見たうちで西洋文學の影響の著しく出てゐるもの、露骨に見えるものを主とするつもりである。日本文學中で西洋文學の影響をうけたのはこれだけしかないのだと

遮斷されると大に迷惑する。例へば明治の新小說の如き、西洋文學の影響なくしては起らなかつたものであり、その點で現象的にいへば、明治の新小說の何れにも西洋文學の呼吸が通つてゐるわけであるが、然し資料中心と態度を定めて見ると、何れもこれも取り擧げて論ずるといふことは不可能に屬する。從つて主とするものを選び出すのは餘儀ないわけである。

それで本篇を讀むに、正宗、宮島兩氏の分を參照して頂くことは勿論であるが、その他、內田魯庵氏の「日本文學に及ぼしたる歐洲文學の影響」(『日本文學講座』第十八卷所收、昭和三年七月、新潮社)、野上豐一郎氏の「日本文學と外來思潮との交涉(四)・西洋文學」(岩波講座『日本文學』所收)・豐田實氏の「日本に於ける英文學研究」(岩波講座『日本文學』所收)等を參考されると、益するところがあらう。

敍述進行の形式は種々あらうが、こゝではやはり平凡な年代式をとつて置く。讀者もその方が要領を得易いであらう。年代の區分は、明治以前、以後に大別し、明治を小別して、二十年頃までを第一期と見、二十年以後三十年前後までを第二期と見、それ以後四十年前後までを第三期と見たい。然し私の敍說が第三期を何のくらゐ下り得るかは、今のところ疑問である。大正時代、昭和時代に入るものは、私は他日の研究に待つべきを覺悟してゐる。

二　明治以前

日本文學に對する西洋文學の影響を正確に資料的に辿り得るのは、明治以後、殊に明治十年以後である。それ

以前は、資料的には餘り正確には辿れない。然し先輩諸氏の研究でその影響の跡を辿るべき暗示が種々なされ、中にはやゝ正確かといひ得るものもある。今それ等の研究を綜合し、それに私の調べたものを多少加へて、一種鳥瞰圖式の前驅的概說をつくつて序論に充てよう。それも、漠然とだが、足利時代、德川時代、德川後期の三期に分ける方が便利である。

足利時代　天文十二年（一五四三年）の葡萄牙人渡來をともかく西洋人と日本との交渉の最初とし、それから織田、豐臣時代を經て、いはゆる鎖國令の頒布された德川家光の寬永年間までの約百年間を總括してかう呼んで置く。此の時代に渡來した西洋人、當時のいはゆる南蠻人はその宗教傳道なり、その貿易交渉なりによつて有形無形に日本文化に相應著大な貢獻をしてゐることは、先輩諸氏が言ひ盡してゐるところで、今更贅するまでもない。それを文學の方から吟味すると、耶蘇教會から傳道のために派遣された伴天連達が、研究家の謂ふ所の切支丹文學を可成り早く持ち込んで來、それと同時に切支丹文學と關連して歐洲文學の古典、殊にラテン文學の精粹ともいふべきものが斷片的に傳はつたことは、今日では明白に立證される。今一方、これは想像に止まるが、傳道以外の世俗的目的で渡來した船長や商人達の中に多少文學趣味を解したものがあつて、口傳的に歐洲の世俗文學の消息を日本の好事家者流に授けたやうに思はれる。かくして當時紹介された西洋文學の中、この頃以後の日本文學に影響したものが少くとも二つある。これを文獻的にいへば「伊蘇保物語」の飜譯であり、口傳的にいへばヘリシイズ傳說の移入である。「伊蘇保」の現存する最古譯は文祿二年（一五九三年）の切支丹版であるが、德川時代に入つて慶元本、寬永本、萬治本などの諸本が生じたといふ。それは勿論文學として受理されたのではなく、

教訓書として多少持て囃されたものであらうから、文學的影響といふ點ではいふに足らぬと思はれるが、それでも新村出博士はこの物語を利用した作物として『戯言養氣集』(元和活字本)、『爲愚痴物語』(曾我休自著、寛文二年—一六六二年刊)、『繪入教訓近道』(爲永春水著、天保十五年 一八四四年刊)を擧げてゐる。その他部分的にこの物語に負ふものはまだ多少あると思ふ。ユリシイズ傳說の移入のことは明治三十九年(一月號早稻田文學)に坪內逍遙博士が始めて唱へられたのであるが、その移入の經路は、藝文第一年三卷(明治四十三年六月)で新村博士が考證してゐられる通りであらう。卽ち南蠻黑船の船長等(主として葡萄牙人)が筑紫の濱邊の何處かに語り傳へたとする說である。此のユリシイズ傳說が足利時代から德川時代に入つて數種の百合若物を生むに至つたと見られてゐるが、その百合若物の名は、『百合若大臣』(足利時代の作、寛永頃刊)、『百合稚錦島』(八文字屋自笑作・寶曆二年—一七五二年刊)、『百合若野居鷹』(萬亭叟馬作・文化五年—一八〇八年刊)、『百合稚高麗軍記』(作者未詳、明和元年—一七六四年刊)、『百合若大臣島眠』(南仙笑楚滿人作・寛政十年—一七九八年刊)、『百合若丸弓勢名譽』(綠亭可山作、文化十一年—一八一四年刊)、『百合若軍法鑑櫻』(志滿山人作、文政二年—一八一九年刊)、『百合若物語』(刊年作者未詳)等を數へる。最も有名なものは近松門左衞門の作『百合若大臣野守鏡』(寶永七年—一七一〇年作)であらう。なほ島津久基氏は足利時代の古小說『天狗の內裏』なるものとヴァージル(Virgil)の『イーニイド』(Eaneid)の類似關係を論じたが、これは注目すべき研究である。(昭和二年十月、新潮社『日本文學講座』第十一卷)。追々この種の新研究が公にされ、當時の日本文學に對する西洋文學の影響が意外に深く浸み込んでゐることを實證してみせてくれるかも知れない。

徳川時代　これは寛永鎖國令以後（一六四〇年前後）から八代將軍吉宗が享保五年（一七二〇年）洋書の禁を解いた前後まで約百年間を假稱する。この間は純然たる鎖國時代で、和蘭陀人以外の西洋人とは交易しなかつたし、洋書の禁があつたので、西洋の文物も殆んど輸入されず、從つて西洋文學の消息の如き、詳なものは全くない。これは一つは和蘭陀人が文學國民でないのにもよる。然し日本國民の心に育まれた異國情調の消へなかつたことは、和蘭陀と名のつく器物の珍重されたのでも知られるし、當時の平民文學たる俳諧の如きものにも、十分その證據がある。（新村博士「南蠻文學概觀」、新潮社「日本文學講座」第十九卷所收）

徳川後期　吉宗以後幕末まで約百五十年間を總括してかういふ。この時期以後は西洋文物の研究が默認されたが、西洋人との自由交際が許されず、和蘭人以外の西洋とは國家的に交際しなかつたので、讀まれた書物は科學理學醫學等實學に關する蘭書であり、從つてこれを蘭學と總稱した。この間多少文學關係の知識も輸入されたらしいが、その事實は正確には立證され得ない。安永三年（一七七四年）の『異國奇談和莊兵衞』（遊谷子著）はスウィフト (Jonathan Swift, 1667—1745) の『ガリヴァ旅行譚』(Gulliver's Travels, 1726) の翻案といふ説があるが、この作は風來山人（平賀鳩溪）の『志道軒傳』（寶曆十三年—一七六三年刊）に基くといふから、後者こそ『ガリヴァ』の影響と關連されるべきであらう。文政三年（一八二〇年）に阿蘭陀芝居といふものが興行されたといへば、文化七年（一八一〇年）に市村座に上演された『心謎解色絲』が和蘭陀人の口傳した沙翁作『ロメオとジュリエット』(Romeo and Juliet) の傳來を示すといふ説も、一槪には否定はされまい。たゞ何れもその和蘭的影響を考證することが出來ない。然し何れにしても、蘭人蘭學を介して若干の西洋文學の知識が移入して來たと信じて可いこ

とは、澁川六藏の『英文鑑』下篇（天保十二年 一八四一年ー四月）に沙翁、ミルトン(Milton)、ポープ(Pope)、アヂソン(Addison)、スタアン(Sterne)等の名が出てゐるといふ一事でも、想察される。既に西洋文學の知識の移入があれば、その何等かの影響も假想されて可い。

嘉永六年米國軍艦が浦賀に來てから以後は鎖國の實がなくなり、諸外國と世界的交際を始めるの餘儀なきに至つた。それで幕府は實際の必要上、從來消極的に西洋の學術を攝取してゐた態度を積極的に改め、俄に西洋學を奬勵することになつた。從つて蘭學以外に、英語、露語、佛語、獨語等が次第に研究され、同時に幕府は從來天文方の管轄となつてゐた蘭學研究部ともいふべきものを獨立の西洋文物研究所に改め、安政四年（一八五七年）に蕃書調所と稱して（爾後洋書調所、開成所等と改稱）、語學校、西洋研究所兼外交文書取扱所といふ如き重要な一機關を組織した。かくて安政から文久となるにつれて洋學は大に起つたが、洋學の興隆と共に西洋文學（廣義にいつて）が移入されたことも疑ひ得ない、而かも單なる知識としては勿論、書物の形でも持ち來されたことであらう。文政年間に於ける賴山陽の『佛郎王歌』（ナポレオンを詠ぜるもの）や中島廣足の阿蘭陀の鄙歌の如きは暫く措くも、安政文久頃譯されたとかいふ勝海舟の『思ひやつれし君』といふ蘭譯讃美歌の如き、嘉永初年頃の譯といふ蘭譯『ロビンソン・クルーソー』(Robinson Crusoe, 1719)の紹介たる『漂荒紀事』の如き（譯者は彥根人黑田麴廬）はこれを證して餘りがある。神田孝平が文久元年（一八六一年）譯した『和蘭美政錄』（此の書原本、近年吉野博士發見。J. B. Christemaijer : Be'angrijke Tafereelen uit de Geschiedenis der Lijfstraffelijke Regtspleging ENZ. 1830 神田氏これを『死刑彙纂』と譯す）といふ二篇の探偵物語（「楊牙兒奇獄」、「靑騎兵吟味一件」）の如きもその明證の一つ

とするに足りる。その他文學に準ずべき歷史、地誌、風俗雜記の類は相當澤山著譯されたことは、いふまでもない。かく西洋研究熱が盛んになるに及んで、それが民間にも波及し、西洋を題目にした種類の戲作小說が始めて現れるに至つたことも亦當然といはなければならぬ。

此の種の戲作小說は、僕の見た以外にもまだあるかと思ふが、僕の見たものは、(一)假名垣魯文作『童繪解萬國噺』(萬延二年―一八六一年春刊)、(二)岳亭春信作『萬國奇談役』(文久元年 一八六一年 五月刊)、(三)山亭秋信作『緑 柳五ヶ國草紙』(文久二年?―一八六二年?―三月刊)、(四)東洋山人編『畫本習字萬國參戲話』(文久三年―一八六三年作、未刊)、この四種である(文久元年魯文作『萬國人物圖繪』は小說とはいへまいから、こゝでは擧げないことにしよう)四種とも作者が違ひ、趣向が違ふが、當時續出した西洋紹介の著譯物に據つて啓蒙的に西洋なるものを俗解しようとした意圖に於いては同一である。今此等の戲作をこゝで詳細に語つてゐる餘裕がないので、簡單に一言して置かう。(一)は、名の如く萬國の歷史地理風俗を童蒙に教へるために試みられたもので、佛英魯米まで及んでゐるが、過半は魯と米で占め、米國が單獨で半分を占領してゐる、さうして魯國の部は大部分は彼得大帝の傳記、米國の全部は華盛頓の傳記であるが、彼得の傳記が殆んど潤飾がないのに引換へ、華盛頓の一代記は全然稗史小說となつてゐる。(二)は、何によつたか未詳だが、子供同志の爭ひから南米と北米との間に戰爭の起る話、此の一話しか出てゐない。(三)は、僕の見たのが殘缺本(三編四篇のみ)で全部の趣向を明にし得ないが、これも場所はやはり米大陸で、ボストンとかグルウンランドとか、ウィモウとかいふ種々似合ひの地名が散見してゐる。ただ話の筋は何うも作者の假作したものではあるまいかと思ふ(種子があつても極の少さ)。カラントン(地名)の姉で

い王の臣下アクントウなる者が王に情人を奪はれたのを怨み、未開蠻地の王になつて復讐をしようとする。その地への途中種々な水滸傳式な冒險にあふことを記したものである。(四)は、彌次喜多を復活させて萬國漫遊を企てさせ、その間に萬國の人情風俗その他を敎へんとしたもの、初輯のみ稿本で自藏してゐる。初輯以後が著作されたか否か未詳である。

此等の戯作の作者についても語れば多少語り得るが、少々急ぐから、明治以前はこの邊で打ち、切り次に明治時代に入ることにしたい。

三　明治時代——第一期

想像は想像だが、幕末から明治初めへかけて可成り西洋文學書が輸入されたといふ想像は、全然根據のないものではない。靜岡縣立葵文庫の目錄に貴重洋書目錄といふのがあり(今は現物は方々へ移讓されたといふ)、その貴重洋書なるものは多く舊幕府が靜岡移封の際持ち込んだものだとかいふが、その中に文學書が可成り多數ある。先づ英書の文學の部では、

George L. Craik. LL. D: A Manual of English Literature, and of the History of the English Language (ed. London 1866).

Rev. Henry Thompson :—History of Roman Literature (2. ed. London 185).

Walter Thornbury :—Ice Bound (London 1856).

Holme Lee :—Against Wind and Tide (London 1856).

Laurence Sterne :—Tristram Shandy (Philadelphia 1858).

Sir E. B.-Lytton :—What Will He Do With It ? (New York 1861).

などの名が見え、佛譯の文學の部では、

Chateaubriand :—Oeuvres Complètes (Nouvelle éd. Paris 1859–1861).

Cervantes :—Don Quichotte de la Mancha (Traduit par Louis Viardot Paris).

Charles Dickens :—Bleak-House (Traduit sous la direction de P. Lorain. Paris 1866).

——Dombey et Fils. (——).

——Vie et Aventures de Nicolas Nickleby (——).

——David Copperfield (——).

——La Petite Dórrit (——).

——Vie et Aventures de Martin Chuzzlewit (——).

——Barnabé Rudge (——).

——Le Magasin d'Antiquités (—Paris 1865).

——Les Temps Difficiles (——).

——Contes de Noël (——). 原作 Christmas Stories.

——Paris et Londres en 1793 (Traduit par Mme Loreau. Paris 1866). 原作 A Tale of Two Cities.
等の名が見える。その悉くが舊幕府が持ち込んだものでないにせよ、靜岡移封後買入れたものがあるにせよ、何れにせよ、西洋文學書が相當多數に輸入されたことは事實であらう。從つて舊幕英學者中に尺振八や外山正一のやうな文學好き（寧ろ小說好き）がゐたのも不思議がないわけである。一方又、明治初めの西洋崇拜熱から生れた全國各地の洋學校では競つて西洋人の教師を招聘したが、その洋人教師が又大抵文學趣味をもつてゐたらしく、多少とも西洋文學の傳播に與かつた（例へば東京のサンマァスが沙翁を傳へ、熊本のゼンスがミルトンを傳へた如き）。かくて西洋文學と日本人の生活とは次第に親しみを增して來たが、然し西洋文學が日本の文學に影響を與へるところまでにはまだまだ行かなかつた。理由としては、時代が草創の際で人心が落ちつかず、西洋文物制度の輸入に專らで文學的創作など閑却されたこと、又日本の文學（純文學）が封建時代の遺習からまだまだ輕視されてゐて、これの制作に從ふ人々は戲作者といふ特別グループ扱ひをされ、西洋文學の翫賞などとは凡そ緣の遠い階級だつたことなどが擧げられる。それだけに明治といつても初期の十年位の間は、西洋文學の影響もあるかなきかの極く心細いもので、明治六年刊の『其粉色陶器交易』、『鞋補童教學』の二脚本が中村敬宇譯の『西國立志編』（Samuel Smiles : Self-Help, 1859）に基いて居り、明治八年に時の劇作家古河默阿彌が沙翁の『ハムレット』（Hamlet）を飜案して『西洋歌舞伎葉武烈土』といふものを平假名繪入新聞に掲げたといふ（未見）外は取り上ぐべきものもない。尤も戲作小說界そのものが一般に衰へてもゐたが、それにしても時代を語る西洋臭い戲作家といへば僅に假名垣魯文があるのみ。而かもその西洋臭さたるや、文明開化の名の下に西洋化する日本社會を反映する

か、極く皮相的な生囓きの西洋の知識を織り込んだ程度の代物で、西洋文學の影響などは先づないといつて宜しい。しかし時代觀念の相違で、魯文自身は（さうして當時の讀者も）自作に織り込んだ生囓きの西洋知識を西洋文學の知識と思ひ込んでゐたものと考へ直して（當時は文學觀念に恐ろしく廣汎な分野を宛てがつてゐた）、彼の作中最も西洋臭い著の『倭國字西洋文庫』に就いて一寸語ることにする。

此の作は、魯文の前作『萬國噺』の引き延しとも見られるもので、順次に西洋各國の珍聞奇話を紹介する腹組みを立て、その第一着に那勃列翁一代記を書いたのだといふ。材料は魯文の友人「英國通辯鐵川河文紀」（後に岡文紀と號した三世風來、河原英吉）なる人物が英人の畫工ワッグマンから聞いた一夕話によつたといふが、正傳と違ふことは斷わつてある。もつとも此の頃は那勃列翁の傳記的知識が相當に廣まつてゐたのでかう斷わらずには書けなかつた。然し『萬國噺』で華盛頓を書いたときに、華盛頓の父をメリケンとよぶなどと平氣で述べた魯文のことだから、在來の草双紙の趣向は勿論、種々雜多なものを手當り次第借用してゐる。流石に父母のことは出鱈目にはいつてないが、故あつて貧乏漁師の子として生ひ立ち、悪魚退治に早く武勇を見せ、文非道の奸吏をこらし富豪の女に想はれるなど、西洋の那翁傳記學者を驚倒させる記事が續々出て來る。奸吏の鞘宛から太白星の靈氣が散じ、それが那勃列翁の心に宿ること（他日天下を亂すといふ張本）、奸吏に暗殺された養父母の仇を即座に討つが、その爲めに、却つて養父母の下手人と疑はれて刑殺されるところを天主道人に助けられる一段など、『兒雷也』や『水滸傳』中の豪傑と少しも違はない。これも、魯文の多くの作物と同じく未完に終つてゐる。大體これによつて當時の小説作者の西洋に關する知識の如何なるものであつたか、及び日本文學にそれが何の程度に消化

されてゐたかゞ察せられると思ふ。

もつとも、當時の人々の文學觀念によると、西洋文學の影響に成つたものとして、少し硬いが瓜生政和著の『西洋新書』(明治五年）の如きものがある。過半は日本使節の隨行記めく體で、その行く先々の土地土地の歷史、地理、風俗、珍談などを啓蒙的に紹介したもので、やゝ稗史的な味ひの文章が往々挿入されてゐる。然し今日の目では文學の部類に入るべきものではあるまい。その他、此の『西洋新書』程度の啓蒙的著作ならば相當澤山あるか、今は省いて述べない。

明治十年の亂がとに角維新の大仕事に或る段落を與へたとすることには、今日別に異存のある人はなからう。明治の政治、社會、文物、何れも十年後から建設期乃至建設準備期に入つて來る。十年までは草創期であつて、大小の動搖が不斷につゞいてゐる。社會人心が幾分安定してやゝ生活らしい生活に入るのが十年後である。十年の間主として實用的な西洋知識の供給に專一であつた。西洋研究が、漸く文學の紹介に眼を向けたのが十年前後その結果が先づ二つの飜譯小説となつて現れた。丹羽（後に織田）純一郎譯の『歐洲奇事花柳春話』(明治十一年）及び川島忠之助譯『八十日間世界一周』(同)、前者は英國のリットン卿 (Lord Lytton, 1803—73) の作『アーネスト・マルトラヴァース』(Ernest Maltravers, 1837) 及び續篇『アリス』(Alice, 1838) を抄譯したもの、後者は佛國のジュール・ヴェルヌ (Jules Verne, 1828—1905) の同名の作 (Voyage autour du Monde en Quatre Vingts Jours, 1872) を全譯したものである。此の二小説が、共に明治十一年に公になつたといふのは決して偶然ではな

い、機運に合したものと見るべきであらう。これ等の小説の内容の如何は、前々から私も方々に書いたことがあるし、他の人達も書いたことであるから、今は繰返さないが、この二小説はそれぞれの立場から明治初期の小説界に著大といつても可い影響を與へた、無形的には誰もいふところだが、有形的にもさういひ得る。左に私の知り得たうち著しいものを一二述べようと思ふが、その前に、何故に此の二小説がさういふ影響を與へるに至つたか、その要因ともいふべきものを吟味してみよう。先づ（第一）に西洋小説だからである、西洋心醉時代萬能時代にはこれが第一の條件となる。（第二）には内容がそれぞれ當時の讀書社會の注文に當て嵌つてゐた、即ち『花柳春話』は本筋が才子佳人の西洋式人情小説で日本の小説讀者には理想的な團圓をする上、背景が政治社交などの實際的知識を得られる、又『世界一周』の方は金の力を如實に示した文明利器の宣傳書であり、日本人の大好きな冒險小説であり、文明野蠻の比較講釋であり、傍ら一種の世界案内書たる役目を兼ねてゐる。何處から何處まで當時の日本人の理想なり憧憬なりを滿足させてゐるのだから、持て囃されたのも無理がない。（第三）はその文章である、何れも漢文讀み下し的な、今日の學生諸氏には英語よりも縁遠いやうな存在であるが、此等の小説が戲作者流の文章でなくかういふ文章で書かれたことが何れ程その流行を助けたか知れぬ。何故なら當時小説が戲視されてゐたのに、漢詩文が識者階級唯一の高等文學とされてゐた、だから若し此等の小説が戲作者流の文章で書かれてゐたら、如何に西洋小説でも舊臭い印象を與へ、これを愛讀することを避けた人々が多かつたに違ひない、反對に漢文流の文章で書かれてあるので、普通なら小説など手にもとらぬ人々も愛讀して恥ぢないといふことになる。とにかく此の文章は當時としては讀者に清新高尚なものと感じられたことは事實で、この點の影響

だけでも大きなものがあつた。此等の小說が當時乃至後來の日本文學に與へた影響を總體的にいつてみると、新要素の注入によつて創作熱を刺戟したこと、創作の目的、描寫の手法、文章等で、創作の模範となつたこと(少くとも、從來日本人のもつてゐたものを力强い明白な信念にしたこと)、譯者(卽ち當時では作者)が戲作者ならぬ紳士である點で社會が小說を輕蔑する態度(卽ち時代の文學觀念)を改良させる端を開いたこと、西洋小說の面白さを敎へ、一種の西洋小說熱を起させたこと(爾後の飜譯續出もこれによる)等々を數ふべきであらう。それでは此等の小說が創作界に影響した具體的の例を一二述べてみよう。

明治十二年、卽ち『花柳春話』の公にされた翌年にこれの意識的模倣たる『艶才春話』、『鶯蕉春話』の二小說が現れた。『艶才春話』の作者は菊亭香水(佐藤藏太郎)、初め中津の「田舍新聞」(固有名詞)に載つたので餘り世人の注目も惹かなかつたが、十七年『慘風悲雨・世路日記』と改題して出版されるや、俄然時好に投じ當時の讀書界を文字通り風靡し去り、十餘種の異版が出たことは、明治文學史上昭著な事實と傳はつてゐる。これが『花柳春話』を意識的に摸したものであることは、著者が私に與へた手紙に徵して疑ふべくもない。『世路日記』の初刊本たる「艶才春話」(明治十五年刊)と『花柳春話』と比較してみると、文章は勿論挿繪まで模倣してゐることが分かる。內容の趣向は、ある田舍の學校で少年教師が生徒の少女と將來を相約するが、機緣熟せずして互ひに離れて苦勞する、殊に少女には貞操に迫られる危難が度々ある。然しやがて少年の苦學が實を結んで、物質的成功を得、遂に萬難を排して兩人が團圓するといふので、これ又『花柳春話』と殆んど同じである。『鶯蕉春話』(後に改めて『鶯蕉春秋』といふ)の作者は土佐の人和田竹秋といふ。趣向は支那小說と『花柳春話』を折衷した如きもの、

大筋は。某生あり、隣家の處女某と互ひに才貌を愛し合つてゐたが、一旦相通ずるに及んで強て自由を得んと試し、二人で亡命する、途中悪漢の難に遭つて互ひに相失ふ。だが流離數年の後に遂に大婚を全うするといふので隨處に『花柳春話』の趣向を借用してゐる。文章に至つては模倣が明白に見える。その他、單に題名のみ似せて某々春話、某々何話と稱した類や、單に文章だけ模倣したものは、まだまだ澤山あるが、こゝへ一々持ち出すにも及ぶまい。

『花柳春話』は日本人の小說理想に適合するところがあるために直ちに模倣者が出たが、『八十日間世界一周』の方は、十九世紀の科學的知識の應用が主眼となつてゐるために、さう直ちに模倣しようといふものが出なかつた。たゞ金の力が中心になつてプロットが進む點で(主人公が種々な困難危急にのぞむが皆金力で解決するので)、時の識者の或る人々には一種唯物的な文學觀をもたしめたであらう。この作が機になつて、井上勤氏のヴェルヌ物が續々と紹介され、森田思軒の出現となり、矢野龍溪の『浮城物語』(明治二十三年)となり、遠く三十年代に入つて押川春浪の冒險小說の全盛まで線を引いてゐる。

明治十四五年から飜譯文學界に變調を來し、西洋小說の紹介に政治的色彩を含んだものが出始める。これは即ち時代の政治熱の反映で、やがては政治小說の創作に導びくものであるが、最初は西洋小說の飜譯乃至改作としてのみ現れた。十五年の櫻田百華園主人意譯『西洋血潮小暴風』(Alexandre Dumas père:—Les Mémoires d'un Médecin, 1846—48)、宮崎夢柳譯の『自由乃凱歌』(同:—Ange Pitou, 1851. 英譯名 The Taking of the Bastille)の如きは、譯とはいひ條、正しくば改作乃至著といふべきものであり、又同年の川島忠之助譯『虚無黨退治奇談』

(Paul Vergnier? :—La Chasse au Nihiliste, 1880)は逐字の佳譯であるが、坂崎紫瀾はこれによつて『露國安那物語』(明治十七年、土陽新聞)を作つた。佛蘭西大革命に關する小說は、此の頃の政治運動家が金科玉條視してゐたルソー(Jean Jacques Rousseau, 1712—78)の『民約論』(Le Contrat Social, 1762. 中江兆民譯、明治十五年)の背景をなすものとして愛讀されたが、明治十四年に亞歷山二世を暗殺した露國虛無黨の活動は新たな興味をもつて世人の好奇心を誘つた。それで彼等の活動や運命を描いた實錄や小說が相當流行した。前記川島氏の譯の如きその見本の一であるが、以上の外に主なるものとしては、大久保常吉編『魯帝弑逆記』(明治十四年刊)、柚田策太郞抄譯『露國奇聞烈女之疑獄』(明治十五年刊、ヴェラ・サシュリッチのこと)等の實錄、宮崎夢柳著『寃枉乃鞭笞(むじつのしもと)』(明治十五年刊、『烈女之疑獄』を小說化せるもの)、同『虛無黨實傳記鬼啾啾』(明治十七年自由燈、十八年刊、ステプニャク Sergius Stepniak, 1852—95 の『地底のロシア』"Underground Russia" 1882 に基づいた小說)、『鬼啾啾』を更に日本化したものに同夢柳著の『芒(すゝき)の一と叢(むら)』(明治二十一年刊)がある。

此等の政治的飜譯文學中で、當時の創作界に最も大きな影響を與へたものは、何といつても矢野龍溪纂譯の『齊武名士經國美談』(明治十六年—十七年)であらう。この小說は何よりも先づ政治的宣傳に成功して、青年政治家の長く愛讀するところとなつた、又一流政治家の創作的試みといふ點で、時人の文學觀念を高めるに効があつた、さうしてこれが文學的にも立派なものだと分つて、政界の名士乃至文壇の名家に政治小說を創作させる自信と動機を與へた。城陽加藤政之助の『英國名士天綺談』(明治十八年刊)、藤田鳴鶴の『濟民偉業錄』(明治二十年刊)は皆これを模倣し、これに刺戟されたものである。須藤南翠が政治小說に轉向したのも、『經國美談』に動かされた爲めで

あり。又その政治小說としての習作たる『旭日美譚』（明治十六年）、及び『慨世照日奇』（明治十九年、政治新聞）はともに意識的に『經國美談』を極力模倣したものたることは、一讀して知られるのである。尾崎學堂の『新日本』は、動機は『經國美談』から得たにせよ、手本にしたのは『繫思談』（藤田茂吉、尾崎庸夫譯、ロード・リットンの『ケネルム・チリングリィ』（Kenelm Chillingly, 1873）明治十八年刊）である。『雪中梅』、『花間鶯』で名を揚げた末廣鐵腸居士も、龍溪の風を聞いて起つたものに違ひない。十年代の小說界に對する西洋文學の影響から筆を轉ずるに當り、一寸附言して置いた方が可いと思ふのは、『デカメロン』（Giovanni Boccaccio : Il Decameron, 1352）のことである。『デカメロン』の初譯は明治十五年大久保勘三郎譯の『歐洲情話 鄙方鶯話』であるが、その中の一話をとつて敷衍した小說が三部出てゐる。即ち『想夫戀』（第五日目の七話）、『露意奇説』（第三日目の三話）、『鷲夫之奇獄』（第四日目の十話）がこれである。此の三部は何れも菊亭靜、即ち明治初期翻譯家の尤たる高瀨直爾の手に成るものと推される。又此の『デカメロン』式の說話形式は、十九年の郵便報知新聞が『寡婦通信・報知奇談』なる小說欄を設けて外國小說の紹介を試みたときに先づ利用されたことを記憶されるべきであらう。

十年代の詩と戲曲について簡單にいつて置かう。十年代の翻譯文學及び政治小說をもつて西洋文學の影響の雜然不純物を交へて文壇表面に醱酵したものとせば、この底に潜んで、而かも清い純な影響を與へられてゐたものが今一つある。これは西洋詩歌による影響である。元來詩歌の移入紹介は、明治四年『西洋明見錄』、明治七年『西洋雜誌』に洋詩の一斑が出てゐる位で、小說よりも古い。然しその性質上當時の大衆的人氣を博して流行を極めるに至らなかつたが、選ばれた少數者を通じて將來の日本文學に純な深い影響を與へた。此の影響の[illegible]と

表現されたのは、東京大學文學部を中心とした十五年七月の『新體詩抄』(外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎三教授の合作)である。當時の東京大學が兎もかくかゝる西洋文學研究の一中心となつてゐた點から見て、當然の現象といふべきであらう。內容に飜譯が多く、創作は數へる程しかないが、所謂新體詩を唱道したその革新的意氣に甚だ尊ぶべきものがあつた。

新體詩創作を刺戟した最大影響は西洋詩の影響にあることはいふまでもないが、一つ二つ考慮に入れて然るべき他の要素がある。第一は時の政治熱の宣傳手段として取り上げられたことである。この點からも多少創作慾を刺戟され、作家も作品も出た。『自由の歌』その他の作者小室屈山、『自由詞林』(二十年刊)の作者植木枝盛(えもり)の如きが出た。十五年から翌年にかけて出た『新體詩歌』(竹內節編)にはこの二つの影響の作品が入つてゐる。政治熱に詩歌を利用するのは非難があるにせよ、新體詩の發達には有效であつた。スコット(Sir Walter Scott, 1771—1832)の『湖上の貴女』(The Lady of the Lake, 1810)が譯刊されたのも政治熱の賜物である(『泰西活劇春窓綺話』明治十七年一月、名義人は服部誠一、實際の譯者は高田早苗、坪內雄藏の二人、篇中の漢詩が少し天野爲之の手になつた)。

今一つ新體詩の創作を刺戟した影響は、宗教文學方面から來る。その代表的なものは、湯淺吉郎(半月)の『十二の石塚』(明治十八年)に見られるが、影響としては舊約聖書とミルトンであらう。

沙翁の作は明治でも可成り早くから讀まれ、十年代の飜譯文學にも沙翁の作物の抄譯全譯梗概紹介が數多くあるが、大抵は小說視されてゐるか、詩句として妙を買はれてゐるので、戲曲として眞價を認められてゐない。沙

翁が戯曲として眞に理解されるのは坪内博士が專心研究されるに至つてからで、明治二十二三年以後となつてゐる。從つて十年代にも沙翁物が種々の點で當時の文學界の樣々な方面に影響を與へてゐたことは想像されるが、明白にその影響を示す劇としては『何櫻彼櫻錢世中』（明治十八年、宇田川文海）位に過ぎぬ、これは『ヴェニスの商人』の飜案である。

明治初期の戯曲は、小說に比しては勿論、詩歌に比して西洋文學の影響を受けることが一般に最も少ない。

明治二十年の前後兩三年間を、俗に歐化時代とよぶ。歐化主義は明治政府の傳統政策で抑もの始めから行はれて來たものであるが、十八九年に至つて伊藤井上を中心とした急進的歐化政策が採用され、それが制度文物は勿論、一般社會の風俗習慣にまで影響して、社會改良熱なるものが旋風の如く日本の上下に渦卷いた。元來が日本の經濟的發展を背景にした條約改正問題の爲めといふ方便的動機から出たものであつたにせよ、日本國家をして何うしても近代文明國家の仲間入りをさせるためには、かういふ突飛な社會革新的手段も或は必要であつたかと思ふ。たゞ聊か皮相に走り過ぎた點は史家の論定する通りであらう。

この突飛な歐化時代が日本の文學に如何なる影響をもたらしたか。文學も正しく此の兩三年の間に一の革命的洗禮をうけた。さもなくとも文學の方では、西洋小說の刺戟その他によつて制作上に一變化の起るべき機に臨んで居り、又西洋文學の知識の普及より結果する一種の比較研究から文學觀念に將に革命を起さうとして來てゐた。これが歐化時代の改良熱に口火を點けられて一時に燃え上つたので、世人もその活動の急且つ多樣なのに驚いたらしいが、然しこゝに至る種子は永い間暖ためられて來たのである。

此の文學革命のことを語る前に一寸注意して置かなくてはならぬことがある、それはこの時代以後、西洋文學と日本文學が直接に接觸することが漸く多く、從つて日本文學への影響も飜譯を介せずに來る機會が多くなつて行くことである。この點は前期と少し事情を異にして行く。勿論西洋文學の知識が普及したといつても、作家の何人もが飜譯を必要としない程その知識が行渡つてゐるのではなし、且つ作家の中には現在飜譯から影響されてゐる事實はあるが、然し前期程露骨な無反省な模倣は少なくなつた。この事を記憶して置いて頂きたい。

文學革命のことは正宗氏も宮島氏も書くに違ひないから重複すると思ふが、簡單に語つて置く。廿年前後の文學革命は、前述のやうに、西洋文學の（寧ろ廣くいつて西洋文明の）刺戟によつて日本文學が如何にしても一轉回をしなければならなくなつた結果の現象である。此の革命的精神が文學界に最も力強く現れたのは、明治十八年九月の坪内逍遙の『小說神髓』であり、從つて『小說神髓』は文學革命の聖典視されたのは當然であらう。

逍遙は東京大學の出身であるが、大學に入る前に既に日本文學にかけては一かどの研究家であつた。これが大學に入つて西洋小說趣味を鼓吹され、次第にこれに讀み耽るにつれて、いつとはなく彼の頭腦の中で彼此小說の比較研究がなされて來た。偶々或る事情から「文學とは何ぞや」の問題を解決する必要に迫られ、その頭腦中に自然に生長した知識を組織立てなければならなくなつた。かくて生れたのが『小說神髓』である。理論的にその組織を助けたものには、西洋のものでは『フォーラム』(The Forum)、その他の西洋雜誌に見えた文學論、小說論、文藝批評、『大英百科全書』中の小說論、二三文學史中の論說、飜譯では菊池大麓譯の『修辭及華文』("Rhetorics and Belles-Lettres" in "Chambers's Information for the People")（明治十二年）、フェノロサ教授『美術

眞說」（明治十五年）等である。明治十六年中江兆民の譯した『維氏美學』（Eugène Véron: L'Esthétique, 1878）は當時としては稀に見る名著であり、逍遙がこれを讀んだなら益を得ること少々ではなかつたらうと思はれるが『小說神髓』を起草したころにはまだその存在を知らなかつた。

さて『小說神髓』を中心とする文學革命の精神が時の日本文學に如何なる改造的影響を與へたか。それは凡そ三つに要約することが出來よう。第一は在來の日本的文學觀念の建て直し、第二は小說の描寫手法の改良、第三は表現の根本たる文體の創案、これである。このうち第一と第二は坪內逍遙によつて成されたが、第三の解決は他の二人の天才を俟たざるを得なかつた。

第一に於いて、逍遙は西洋小說と日本小說の比較から、小說の本質が人情の描寫にあるので教訓や風諭にあるのではないと論じた。日本文學は從來その社會的事情から讀者の性質が限られてゐるので、教訓道德を文學本來の目的にするやうに發達して來たが、これは横道にそれたもので、いつまでもこのまゝでは不可ない、文學は宜しくその教訓本位の勸懲主義をすてて描寫本位の獨立主義に還るべきであるとした。第二に於いて、逍遙は、小說の本質が彼の所謂沒理想無勸懲の描寫にありとする以上、從來の稗史小說に見る如き誇張的理想主義を排して寫實主義を執るべきであると說いた。何れも當時としては最高といふべき文學的理論と經驗から割出したものであるだけに、技葉の點には揚足のとれる部分が少しはないに係はらず、議論の根本は動かなかつた。彼の讀んだ西洋小說がスコット、リットン、デュマ、ディッケンズ、サッカレー程度のものであるので、その寫實主義は決してそのまゝ後の自然主義理論と結びつけられるものではなかつたが、然し從來日本文學に混同されてゐたロマン

スと小説の觀念を分析し、日本人の頭に朦朧とながら始めて近代小説の存在的意義を叩き込んだ功は大きなものである。日本文學はこれによつて封建文學の殻を脱し始めて世界近代文學の軌道に乘ることを得たのである。だが此の革命的精神の背後には、近代的國家の仲間入りをしかけてゐる日本があつたことを忘れてはならぬ。

表現文體の問題は、逍遙は暗示しただけで解決せずに終つた。逍遙の暗示は、内容と表現の一致といふことであつた。然しこの問題は、間もなく二葉亭四迷、山田美妙の二人によつて言文一致文體の創始となつて一應解決された。此の問題については語るべきことが多い。西洋文學熱の昻上と共に西洋的表現も重視され、いはゆる周密文體を生じたこと、これが言文一致への刺激になつてゐることなど、今少し語りたいが、長くなるのを恐れるので略す。

總括的にいつて歐化時代の産物たる此の文學革命は、歐化主義が歐化政策の失敗と共に不徹底なものに終つたと同樣に、やはり幾多の點で不徹底に終つたことは否めない。だが日本文學から封建的殘滓を清掃して、眞に近代文學に向ふ方向を定めた功は、如何に再檢討しても打ち消すわけには行くまい。

文學革命以後の文學界を語る筈であるが、その前に此の期の飜譯界のことを一通り見て置かう。

此の期の飜譯界の第一の特色は、創作界と飜譯文學とが劃然分れたことである。前期に於いては兩者が混同された上、飜譯文學が文壇の主流となつてゐたが、此の期に入つてから以後次第に創作が文壇の主流となり出し、飜譯は依然勢力をもつてゐたに係はらず、傍流的に見なされるに至つた。

それから大體の傾向としては、此の期の飜譯文學には、主として露、獨、佛の如き大陸諸國の文學が紹介され前期の英國文學全盛とはつきり別れる。又前期では紹介されたものが古典か、乃至は第二流以下の大衆的人氣作家の文學であつたが、此の期に入つては、選擇の標準が藝術的効果の點に置かれ、又近代的といふ點も考慮されて來たやうに見うける。これ等の點は、近代文學の仲間入りをしかゝつてゐた當時の日本文學を生長せしめるためといふ立場から試みられたものといつて可い。紹介された作品が浪漫的なもの、寫實的なもの、悲劇的、喜劇的なもの、構想の面白いもの、性格描寫の取るべきもの、冒險もの、探偵ものなど、種々樣々なものがあるのは此の事實を裏書きしてゐるもので、正に近代日本文學誕生の支度の一つといふべきであらう。

この期の飜譯文學家及びその主な譯物を擧げると、（原題の未詳の分は英譯題名を入れて置く）

森田思軒

『鐵世界』(Jules Verne : 英譯名 The Begum's Fortune, 1880) 二十年

『瞽使者』(——: Michael Strogoff, 1876) 二十一年

『探偵ユーベル』(Victor Hugo : Choses Vues の中) 二十二年

『クラウド』(——: Claude Gueux, 1824) 二十三年

『懷舊』(——: Bug-Jargal, 1825) 二十五年

『隔簾影』(Miss Braddon : Lady Audley's Secret, 1862) 二十六年

『無名氏』(原作者原作とも未考ヴェルヌものか) 二十七年

『十五少年』(Jules Verne：英譯名 A Two Years' Vacation) 二十九年
(ヴェルヌには完全なビブリオグラフヒイがないらしい、年代は誤謬を保し難い。)

二葉亭四迷

『あひびき』(Tourgeniev：英譯名 Sportsman's Sketches, 1352 の中 Rendes-vous) 二十一年
『めぐりあひ』(――：英譯名 Three Meetings) 二十一年
『かた戀』(――：英譯名 Asha, 1857) 二十九年

森　鷗外

『水沫集』中の諸短篇　二十五年
『埋木』(Ossip Schubin：原名未詳) 二十三年
『卽興詩人』(Hans Andersen：英譯名 The Improvisatore, 1853) (二十五年―三十四年刊)

內田不知庵

『鳥留好語』中の諸短篇　二十六年
『罪と罰』(F. Dostoievsky：英譯名 Crime and Punishment, 1866) 二十六年
『凄涙』(Tolstoi：Polikushka, 1861) 二十五年
『めをと』(――：英譯名 The Family Happiness, 1859) 二十七年

若松賤子

『小公子』(Mrs. Burnett : Little Lord Fauntleroy, 1898) 二十四年(初譯)

『雛嫁』(Charles Dickens : David Copperfield, 1849 の一節) 二十五年

『親ひ歌』(原作原著者ともに未詳) 二十七年

黒岩涙香

『人耶鬼耶』(Emile Gaboriaux : L'Affaire Lerouge, 1866) 二十一年

『眞暗』(Anna K. Green : The Leavenworth Case, 1878) 二十三年

『白髪鬼』(Marie Corelli : Vendetta, 1886) 二十六年

『鐵假面』(Fortuné du Boisgobey : 英譯名 The Iron Mask) 二十五年

饗庭依緑軒

『依緑軒漫錄』(ユーゴオ、リットン、ヂッケンズ三家を紹介論評せるもの、飜譯物ではない。) 二十六年

高安月郊

『損害と侮辱』(F. Dostoievsky : 英譯名 The Injured and Insulted, 1867) 二十六年

『社會之敵』(Henrik Ibsen : 英譯名 An Enemy of the People, 1882) 二十六年

『人形之家』(——: 英譯名 A Doll's House, 1879) 二十六年

以上は當時の大勢を示す其の一斑である、決してこれで十分といふのではない。これは譯者の何を見ても分かると思ふ。譯家については大抵定評のある人々で今更格別注意する程のことはないが、高安月郊にはただ一言して置

く、月郊は餘りに時代に先立つた爲め始終不遇の位置にあり、文學史家からも當然かち得ていゝ筈の認識も與へられてゐないが、西洋文學の移入を研究する時決して逸してはならぬ人である。月郊の文壇的自敍傳ともいふべき『明治大正時代を經て』(昭和四年刊『東西文藝評傳』所收)は、日本文學に對する西洋文學の影響に心を留める人人には必讀の一篇であらう。

ともあれ此等の飜譯は日本文學に對してそれぞれ有形無形の影響を與へたが、中にはその影響の著大なものがある。二葉亭の『あひびき』の如きがそれで、明治文學の爛熟期ともいふべき自然主義時代に第一線に立つて活動した國木田獨歩、田山花袋、島崎藤村等は青年時代にこの一篇によつて藝術的開眼を得たものといふ。鷗外の『即興詩人』が、泉鏡花の傑作『照葉狂言』の粉本となつてゐることは周知の事實である。又涙香の深偵小說の如き當時の文學界からは殆んど齒すべからず位の待遇をうけてゐたものであるが、今日からいへば大衆文學の祖として大にその價値と意義を見直さるべきであらう。又二葉亭、鷗外、不知庵、月郊等の人々はその深い西洋文學の敎養によつて創作家に轉向するに至つた、さうしてこの期に活動した人々もあり、次の期に活動した人々もあるが、西洋文學の影響からいつて注目すべき事實である。

では此の期の文學界のことを語る。歐化主義に煽られた小說改良運動が大に創作を刺戟し、十九年から二十年二十一年へかけて小說の全盛期となつたは可いが、折柄盛り返して來た政治熱に感染して新作小說の大半は政治小說となり、識者を啞然たらしめた。たゞ前期の空想半分の稗史風なるものと違ひ、描寫に寫實的分子を加へ、政治も現實の理想化となつてゐる點で文學革命の洗禮を示してゐる。これは然し、ビコンズフヒールド (Lord

Beaconsfield, 1804—81）の小說などの紹介から來てゐるところもある（『春鶯囀』（Coningsby, 1844）關直彥譯、明治十七年、『政海之情波』（Endymion, 1880）、渡邊治譯、明治十九年）。

政治小說も然し一時的な變態的現象で、『小說神髓』にいふ寫實小說が始めて文學界の正系として認められ、爾後明治新文壇の基調が定まつた。たゞ前にもいつたが、この頃の寫實といふのは寫實的手法といふ意味で、科學的眞理を描寫するといふ理論的根據をもつた自然主義時代の寫實と混同してはならぬこと、いふまでもない。

西洋文學の影響に成つた文學革命であり、その文學革命から生れた明治の寫實的新小說であるから、西洋文學に學ぶところのあるのは勿論であるが、前期の諸作のやうに內容の趣向を無批判的に模倣するやうなことは流石にせず、專ら西洋小說の形式について學び、又その情緖なり空氣なりを取つて自家の文學を豐富にする工夫をした。かくて從來の創作形式たる長篇小說が次第に西洋文學から學んだ構成布置をもつに至つたのみならず、日本文學にはかつてない近代文學の特產物たる短篇小說といふ一新形式が發達するに至つた。

だが筆を資料的敍述に戾すと、此の期の創作家中、最も西洋文學の影響をうけてゐるのを數へてみると、巷人組では條野採菊、福地櫻痴がある。採菊は卽ち戲作者の遺老山々亭有人の後身であるが、實に不思議なアダプタビリティの持主で、西洋小說を盛んに飜案改作しては新聞小說界の人氣を得、沙翁の如き古典物から（例へば二十三年の『三人令嬢』が "King Lear" の飜案であり、二十四年の『花の深山木』が "Othello" の飜案である如き）、ライダア・ハガート(Sir. H. Rider Haggard, 1856—1925)の如き通俗物にも及んだ（二十六年の『幻影』が "Jess" (1887) の飜案である）。櫻痴は才のために累されて政界に志を得ず、新聞界にも見離されて遂に戲曲小說の筆を執

るに至つたが、又好んで西洋文學の翻案をした、例へば『鬼島嵐』（二十四年）の如きは『ハムレット』を翻案して奪胎の妙を見せてゐる。春の舎主人の『一圓紙幣の履歴ばなし』（二十四年）がアヂソン（Joseph Addidon, 1672―1719）から脈を引いたものたるはいふまでもない。花形作者たる尾崎紅葉にも翻案は案外に多く、『夏小袖』（二十四年）、『冷熱』（二十七年）・『隣の女』（二十七年）等を始め、その生涯の翻案ものは十指に餘るであらう。その小說的作物中絶筆ともいふべきは、ユーゴーの『鐘樓守（しゆろうもり）』（三十六年・Notre Dame de Paris, 1831）であつたといふ。又彼がゾラ（Emile Zola, 1840―1902）を讀み、『アッベ・ムーレの墮罪』（英譯名 Abbé Mouret's Transgression. 1875）や『彼の傑作』（英譯名 His Masterpiece, 1886）に感心したことは、よく知られてゐる。原抱一庵は、『闇中政治家』（二十四年）等數篇の作があるが、思軒門下と稱されるだけ、ユーゴーやヴェルヌの臭ひがある。二葉亭四迷、矢崎嵯峨の家は共に露西亞文學を根柢にもつ人、前者の『浮雲』（明治二十年）、後者の『初戀』（二十二年）その他の如き、明白にそれを示してゐる。森鷗外は名に負ふ獨逸文學の研究家であるが、單に獨逸に限らず、大陸文學を熱心に紹介して新興日本文學の生長を一方ならず助けてくれた。その出世作たる『舞姫』（二十三年）及び『うたかたの記』（同年）、『文つかひ』（二十四年）等は獨逸を話說の地とした傑作で、西洋文學獨特のロマンチック情調を傳へ、後の作家文學者でその洗禮をうけたものが少なくない。蘆花はこの期に於いては一般的にはさう眼を惹かなかつたが、その清新な作風と人道的感傷主義で多少評家に注意された。彼はユーゴー及びトルストイの研究家であつた。高安月郊も初め英國のロマンチシズムの詩歌や露西亞の小說等を耽讀し、『天無情』（二十四年）・『犧牲』（二十六年）の如き作品を發表した。早くからイブセンを研究し、後に劇詩人として終始

した人である。大衆的方面で今一人擧げられていゝ人に中村花瘦がある。彼は硯友社[illegible]の一人であるが、よく探偵小說を翻案しては涙香の向ふを張らうとかゝつた。勿論大した成功はしなかつたにせよ、探偵小說趣味の普及に力のあつた先驅者の一人として、今日では今少し注意されても可からう。

最後に「文學界」の一團がゐる。「文學界」は必ずしも西洋文學宣傳の雜誌ではなかつたが、その中心主力が、西洋文學愛好の青年連であり、此等青年は西洋文藝、殊に英國浪漫派の詩歌及び南歐文藝に刺戟されて盛り上つた感情をロマンチックな詩と評論に表現した。當時は時期なほ早く文壇の片隅に高蹈してゐたのみで、中心上す出て來ずに終つたものゝ、その感化は深く且つ永い。北村透谷、島崎藤村、戸川秋骨、平田禿木、上田柳村等はこゝに生ひ立つたものである。

戲曲については、歐化主義時代に演劇改良熱が洋行者流の間から唱へられ、紳商やヂレツタンチヤが改良協會を造り、改良論を公にしたことが幾度もあつたが、それが西洋演劇の影響によることは認めるとして、たゞ概して外部からの、即ち芝居小屋からの改良を主としたものであつた。だが、小說改良の先驅として文學革命に先鞭をつけた坪内逍遙が小說から戲曲に轉ずるに及んで、こゝにも内からの改革が始まつた。逍遙は勿論日本戲曲の傳統を十分尊重はしたが、然しその作劇の模範を沙翁に取つた。彼は二十二三年沙翁の專門的研究に沒頭し、これを講義し、翻譯したのみならず、遂に自信を得て、二十七年に『[illegible]』を、二十九年『[illegible]』を、三十年『牧の方』を公にした等、これ等は何れも沙翁研究の結果に大に影響されてゐた。

この頃啓蒙的に外國演劇の事が種々紹介され、又劇の根本を論じた戯曲論の如きものも出たが、要するに西洋の戯曲論を祖述したものであり、殊に獨逸文學側から出たものが多い。石橋忍月、森鷗外などの名が擧げられる。

此の期の新體詩の生長は小說界の發達に次いで注目すべき現象であるが、これ又、詩形詩想に於いて西洋文學に負ふところが多い、負ふところといふよりも手を引いて歩かされたといふ觀がある。

先づ擧ぐべきは山田美妙である。此の才人は歐化主義の波に乘じて現れ、小說の改良、言文一致の創案、更に轉じて新體詩の創作に向ひ、見るべき功績を殘した。今日美妙の新詩史上の功は何といつても韻律開拓の點にあると見るべきであるが、その土壤には西詩に對する愛好心があつたことはいふまでもない。美妙出現後の詩界は幼稚ながら詩論創作共に漸く盛んになり、詩人と見るべき人々も多少は出た。二十二年の譯詩集『於母影』は森鷗外等のS・S・S(新聲社)の手に成るものであるが、その聲調の流麗と悲哀の精神を傳へたのは、詩壇への貢獻として注目すべきであらう。

美妙出現以後、『國民之友』には宮崎湖處子あり、女學雜誌派には戸川殘花、磯貝雲峰、その分身たる評論派、文學界派には北村透谷、島崎藤村等があつた。湖處子は、陶淵明とアーヴィング(Washington Irving, 1783—1859)、ウァーヅウァース(William Wordsworth, 1770—1850)に學ぶところがあり、雲峰はバイロン(Lord Byron, 1788—1824)その他を譯したが、その代表作たる敍事詩『知盛』(二十五年)にはスコットの模倣が見られる。透谷は詩壇切つての野心家で、劇詩の創作を試み、二十四年『蓬萊曲』を公にしたが、バイロンの『マンフレッ

ド』("Manfred" 1817) とゲーテの『ファウスト』("Faust" 1790—1832) の影響が露骨に出てゐる。この劇詩といふ新詩形の現出が、西詩の影響中もつとも著しいものゝ一つである。藤村の『朱門のうれひ』(二十六年)、岩崎泡鳴の「魂迷月中刄」(二十七年) の如きはこれ等劇詩中見るべきものであるが、共に詩想及び構成に於いて沙翁悲劇の影響乃至模倣の跡が辿られる。

新體詩に對する西洋詩歌の影響といふ點では、なほ大學派の若手學士、殊に上田柳村などの力を認めなくてはならぬ。又ラフカヂオ・ハアン (Lafcadio Hearn, 1850—1904) の來朝の如きも、この點からは重視すべき出來事であると思ふ。

評論界に於ける西洋文學の影響を一瞥して此の期を終らう。抑もこの評論といふ文學上の新ジャンル(genre)の明治文學界に發生したことが、西洋文學の影響であつて、既に明治十八九年頃、「評論」なるものを盛に起すべき說が唱へられ、その根據として西洋では此の種の文學が極めて盛であり又重視もされてゐるからといはれてゐるのでも、知られる。坪内逍遙の『當世書生氣質』(明治十八年)は明治新小說の尖端をきつたものといはれてゐるが、その完結後高田半峰(早苗)がこれを批評した(十九年、中央學術雜誌)。文學上の批評らしい批評はこの邊を嚆矢とするであらう。批評の一般的變遷については何れ宮島君が語るであらうからこゝで述べる必要もあるまいし又元來がさういふつもりもないが、今資料的に注目すべき事實を拾つて行くと、先づ二葉亭がベリンスキイ (Vissarion Belinsky, 1811—48) を基準にして坪内逍遙の『小說神髓』や『書生氣質』を評したといふ

ともあれ、二十年前後から評論界が漸く賑やかになつて來たのは、何れもそれぞれ西洋文學の刺戟によることで論より證據、當時一般評論界に重きをなしてゐた德富蘇峰の『國民之友』にせよ、文學界に指導的勢力をもつてゐた森鷗外の『しがらみ草紙』(明治二十二年)にせよ、西洋批評文學の滋味で生長してゐた事實を見るが可い。評論界に民友社調の一體を始めた蘇峰は文體に於いてマカウレイ (Lord Macaulay, 1800—59) の、思想に於いてエマアソン (Ralph Waldo Emerson, 1803—82) 及びアーノルド (Mathew Arnold, 1822—88) の影響をうけたことは事新しくいふまでもない。『國民之友』と對立的に置かれる『日本人』派評論家の代表者たる三宅雪嶺がカーライル (Thomas Carlyle, 1795—1881) を好み、思想的にスペンサア (Herbert Spencer, 1820—1903) に影響されてゐるとは、自ら語るところである。文學に緣の近い方では、石橋忍月のレッシング (G. E. Lessing, 1729—81) を擔ぎ出すこと、內田不知庵の博士ジョンソン(Dr. Johnson, 1709—84) に私淑するところある、共に當時では有名なものであつた。若しそれ鷗外のハルトマン (Eduard von Hartmann, 1843—1906) 美學を後見役とした哲學批評に至つては、當時の文壇で當る者なしとされ、彼の沒理想の大論戰には、流石の坪內逍遙も受太刀に苦んだと傳はつてゐる。

更に『文學界』一派の主情的詩人的評論 (ペータア Walter Pater, 1839—94 を傳へたことに特に注目される)、やや遲れて出た大學派の『帝國文學』派新人達のそれの如き、何れも西歐批評文學に負ふところのあることは、いふを俟たない。

さて僕のプランではまだ半分にもなつてゐないが、もう豫定のスペースは盡きた。せめては結論的に明治時代

の殘りだけでも略說しようと考へたが、然しさうなると、資料的敍述が現象的になつて、正宗氏や宮島君のところと全然同じものになつてしまふ恐れがある。一方又、以上を見來つて、中世以來西洋文學が日本文學に如何なる影響を與へつゝあつたか、殊に明治以後の日本文學に如何に大きな影響を與へつゝあつたかといふ一斑を、曲りなりにも資料的に傳へたやうな氣もするから、私の分擔した分は此の明治時代第二期の終りをもつて、勝手だが切り上げて置かう。

（昭和七、十一、二五）

明治初期の飜譯英國小說（未完稿）

一

「花柳春話」　丹羽純一郎譯　明治十一年

「花柳春話」、正しくば「歐洲奇事花柳春話」といふ。ロード・リットンの原著で、丹羽純一郎の譯、服部誠一の校閲にかゝる。

全部五冊即ち本編が四冊、附錄が一冊、何れも繪入である。薄淺黄ボール表紙、黑クロースの背といふ裝釘で四六版、本編四冊のうち初編から三編までは明治十一年十月印行、四編明治十二年一月印行、附錄は明治十二年四月印行と日附されてゐる。初編から三編までは出版人高橋源吾郞、發兌人坂上半七、四編と附錄は出版人坂上半七と名を署してゐる。挿繪の銅版工は名を署してゐないので何人とも知れない。描くところの人物、服玩、器物、房樓、風景、何れも當時苦心の餘に成つたものであることは見受られるが、巧妙の文字でむくひる程の出色の出來栄ではない。たゞその珍なるところを認めれば足る。

初編の首に成島柳北の題言があつて、花柳有情の說を吐いてゐる——

花ノ情無キモ芳脣笑フガ如ク、嫣然トシテ雨中ニ開クヤ。誰カ看テ情無シト謂ハン。柳ノ情無キモ。嬌腰舞フガ如ク。裊然トシテ風前ニ立ツヤ。誰カ看テ情無シト謂ハンヤ。況ンヤ圓顱横目同ジク人ト生レシ者ニ於テヲヤ。（中略）然ラバ則全地球上一切ノ情世界ノミ。固陋學士或ハ云フ泰西諸國ハ。人々實益ヲ謀リ。實利ヲ說キ

敢テ風流情痴ノ事ヲ聞ハズト。是極メテ妄誕。余嘗テ航遊一年、親シク看破シ來ルニ、彼我ノ情相契ス。毫モ差異無キナリ。（下略）

明治十一年春日柳北仙史弘識於墨上柳暗花明書屋とある。

別に明治十六年刊に『通俗花柳春話』があるが、これについては、後に述べる。

二

『花柳春話』をもつて明治飜譯小說の嚆矢とした森田思軒（藤田茂吉譯『夜と朝』に對する思軒の序文）以來、この小說の原作を單にリットンの『マルトラバース（マルトラヴァース）』とのみ言ひ傳へてゐる。然し私の寓目したリットンの原作『アーネスト・マルトラヴァース』は、此の飜譯では第四編の六十三章に相當するところまでで終つてゐる。六十四章から六十六章に至る三章は『マルトラヴァース』の續編『アリス』を抄取したものである。附錄の原名は何といふか、その原作はわたしが未だ寓目を經ぬ所であるから未詳である。但ケンブリッヂ版『英國文學史』卷第十三の末尾に收まつてゐる諸家著書目錄中のリットン卿小說書目には此の附錄に相當するものは見當らない。江湖博雅の示教を俟つ。

著者ロード・リットン、即ちエドウァード・ジョオジ・リットン＝ブルウァは、小說家にして政治家を兼ねた近代英國の理想的才子である。一八〇三年五月二十五日にロンドンに生れた。本姓はブルウァ、一八四三年母が死去したので以後母の本姓たるリットンを合せてリットン＝ブルウァと稱する。一八六六年にネブウォースの男爵を授けられてからロード・リットンと呼ばれる。彼の物を書き始めたのは、未だ少年の頃からで、處女作『イ

スマエル、その他の詩』が公にされたのは一八二〇年である。一八二五年にアイルランド生の美人ロジイナ・ホイーラアと結婚したが、そのために母親と不和になり、收入の路が途絶した。此の出來事が偶然にも彼の驚くべき多産の文學活動を刺戟する原因となつた（此の結婚は然し不幸な結果を來し、一八三六年に別居することゝなつた。『マルトラヴァース』の出る前年である。）小說の處女作『フオークランド』は一八二七年に出版された。『マルトラヴァース』は一八三七年、續篇『アリス』は三八年の作である。彼は一八三一年に議會に入つた、初めは自由主義であつたが後次第に保守主義に傾くに至つた。そしてロード・ダアビイの第二回內閣の時殖民地大臣の椅子に就いた。死んだのは一八七三年一月十八日であるが、その間、社交家として、編輯者として、政治家として活動し且つ家庭的には不幸な夫婦關係の爭議に惱みつゝも、不斷の努力をもつて小說、詩、戲曲など六十種に及ぶ文學的作物を發表した。

彼は徹頭徹尾才の人であつた。彼の多方面は何人も認めるところであるが、同樣に驚くべきは時代の趣味好尙の變化を未顯に察知する一種の本能的知覺力である。第一期には、彼はウェルテリズム、伊達者生活、犯罪を取扱つた小說を著した。第二期には、一種獨特な歷史小說を發展させた。第三期には『ラインの巡禮者』（一八三四年）に見る如く、英國の口碑的歌謠とテユートン民族の傳說を合したものを公にした。第四期には僞而非哲學的說教を取り込んだ（『マルトラヴァース』は此の期に當る）、第五期には、比較的眞面目な落着いた「英國生活の種々相」を描寫せんとかゝつた。その後、『未來の人間』（一八七一年）で新しい科學がゝつたユートーピヤの輪廓を示した、最後に『ケネルム・チリングリイ』及び『パリの人々』（一八七三年）で、富の俗化力によつて變化される性格と社

會を描いてみせた。

リットンの當時に於ける人氣は凄いものであつたらしいが、今日では第二流乃至第三流の作家として十九世紀の群小說家中に一席を占めてゐるだけである。見え透いた技巧と、無理な誇張的な華麗さとは當時人氣を集めた最大原因であつたらうが、今日では却つて彼の作物の根本缺點と見られてゐる。讀んで、才人の才筆としては感心させるが、あるが儘の眞(トルース)を描いたものとして人の靈をうつものが全然ない。

リットンの諸作中の傑作は『ペルハム、別名紳士の冒險』(一八二八年)であるといふ。その他著名のものとして

『ポール・クリッフォード』(一八三〇年)
『ユージイン・アラム』(一八三二年)
『ポムペイの最後の日』(一八三五年)
『リエンジイ』(同)
『ハロールド』(一八四八年)
『カクストン家の人々』(一八五〇年)
『不思議な物語』(一八六二年)

『アーネスト・マルトラヴァース』は、後世の文學史家や研究家から重視されてゐないにせよ、著者リットンにはなかなか得意の作であつたらしい。一八四〇年の自序にも、これは自分の今までに書いた凡ての作中で最も

圓熟した、概していつて最も包括的なものであると自讃してゐる。彼の語るところによれば、此の作の本來の趣意、即ち哲學的デザインたる人間の道德教育、乃至修練（アプレンテイスシツプ）といふ思想はゲーテの『ウイルヘルム・マイスタア』に負ふものである。但し『マイスタア』に於いてはその修練は藝術のそれであるが、此の小說の述るものは實生活のそれである。それで此の作中の人物その他一般の機構媒介（エイジエンシイ）をあるが儘の人生の明晰に調和させようとした。但し「あるがまゝの人生」といつても俗惡な外部的の人生をのみいふのではない。比較的多く眼に見え、且つ比較的多く形體的な特徴をもつと同時に精神的神祕的な特徴をも持つ人生を指す。時と環境の影響の下に性格を發展させるといふ考へは、マルトラヴァース一人に限らず、篇中の人物シサリニ（チェサリニ）、フレーラ（フェラァズ）及びアリス・ダービル（ダーヴィル）にも及んでゐる云々。

アリスは實在の女性によつて描いたので、彼の女の少時の無學、家庭――初戀――新なる夫婦關係にかゝはらず、持し續けた此の異常な感動すべき忠實さ――殆んど中年期に及んで、幼少時に愛敬してゐた戀人に再會すること、かゝる凡ては現に生きてゐた或る婦人の眞實の冒險をぼかして模寫したものであるといふ。マルトラヴァースに至つては、現存せる一著作家を寫さうと試みたといふだけで頗る曖昧な言辭を弄してゐるが、恐らく著者自身の面影が多分に籠もつてゐはせぬであらうか。

三

此の小說の譯者丹羽純一郎は、京都の人、彼については、『書物往來』第三年第一號所載の石井研堂氏のものされた傳記が唯一の文獻かと思ふ。よつてこれを抄出して譯者を知るよすがとする。（その後種々發見があり此の傳記

は訂正を要することになつた、それは後の「傳記篇」を參照してもわかる、然しこれは此の當時には唯一の傳記資料で歴史的のものであつた)。

織田氏はもと三條家の用人丹羽氏の子なり、少壯朝命を受けて昌平校に學び、明治維新後、尾崎三良君と同時に英國に留學せり、歸來『歐洲奇事花柳春話』、『龍動繁昌記』等の著書あり。

氏の英國留學は、三條實美の子公美の附添なりしなり、然るに輔導宜しきを得ず、公美をして折花攀柳の人たらしむ。實美之を憎み、終生仕官を差止む。土方久元亦もと三條家の侍なり、この時氏を面責して、汝男子ならば、こゝにて切腹すべしとまで極言せしといふ。氏これより姓を織田と改む。幸に氏の譯書は好評なりしかば、氏謂へらく我一管の筆、名を成すに足る、何ぞ斗米に腰を折らんと。高駕顧を懐めず、人は其友を見て其人の性行を概知すべし。氏の著書『春話』、『繁昌記』、兩書とも、服部誠一校閲と題す。服部は『東京繁昌記』、『東京新誌』等に好んで誨淫の文を賣物にせる卑陋文士なり(編者云く、服部氏につきては自ら異說がある、讀者注意をのぞむ)。その素行知るべし。氏亦常に黑縮緬の羽織を着流し、ぞろつとしたる身裝にて狹斜の巷に出入し、『黑縮緬の先生』の綽名あり。(云々)

『春話』の後、數種の譯著あり。又刑法治罪法を警官の爲めに講說す。明治十六年三月ころ、山田喜之助、曲日補隆、漆間眞學、服部誠一等と相結びて共同出版會社の事を起したることあり。後ち京都府會議員に擧らる。又大阪朝日新聞に聘せられて主筆たり。歐米新聞事業視察として洋行せしことあり、これ二度目の洋行なりといふ。(云々)

氏の新聞事業に盡せし功績は尠からず、板垣退助と謀りて社會新報を起し、又京都の日之出、神戸の又新に精彩ある筆を振ひしことあれども、何れも時勢の先驅に立ち過ぎたる爲めか、之等の位置を永續せざりしは惜むべし。(云々)

時代の先驅たる才人も晩年は悲慘なる窮境に終始したものらしい。

(上略)全く世間に關せず、漸く窮乏を告ぐ、然れども一片の俠氣あり、慈惠的後援を受くるを屑しとせず總て故舊の門に出入せず。京都市外田中村は夫人の緣者あり、老後を送るに都合よからんとて引移りたれども、特に力になる程のこともなく、益々窮乏に陷り、五十錢一圓の小使錢にも差支ふることあり。加之病さへ起りていよいよ窮す云々。

かくて大正八年の二月、年六十七八にて病んで歿したといふ。

『花柳春話』飜譯の動機については、丹羽氏が石井研堂氏に話したところによると――

彼の原書ロード・リットン著「アーネスト・アルトラバース」は、英國留學中に之を得、回航の船中に讀了したりしが、歸朝後其要領を譯述せしものなり。僅五六十枚(分册發行なれば)のものにて定價六十錢は當時不廉なりしも、賣れ行き好かりし爲めに、發行書肆坂上半七は少なからざる利潤を得たり云々。

譯者自身又『花柳春話』附錄の末尾に跋してかういつてゐる――

牢度倫(ロードリットン)氏の小說二十二卷を著し細かに古今の人情を探つて遠近の異俗を記し一讀以て人生の悲歡正邪を詳知するに足らしむ而して我朝の爲永春水の著に係る梅暦等の如く讀者をして徒らに痴情を釀發せしむる者に非る

なり且つ其書概ね實跡ある者に基き彼の空中に樓閣を架き憶ひて有る可からざるの人情を寫出するの類に非らず故に其言切にして其情深し是れ乃ち其書名、人口に膾炙して遂に我邦語を以て之を翻譯せしむるに至る所以なり云々

評するところ同じく一種の人情小說であるのに彼を是とし我を非としてゐる態度に、西洋のものとさへいへば何物にせよ無條件で優秀なもの高尙なもの、模範とすべきものと思ひ込むを常とした當時の西洋崇拜思想の反映とはいへるが、然し小說といふ語を德川時代の戯作に對する觀念とのみ結びつけるより仕方のなかつた人々が、「かゝる西洋小說に接するや、規模の巧妙、構想の複雜、思想の豐富なるに驚いた」(『明治文藝史』高須芳次郎著) 心理が朧ろげながら明白に看取される。

譯者は、更に明治十六年刊の『通俗花柳春話』に於いて此の小說譯出の目的を次の通り揚言してゐる。卽ちその總叙に於いて、先づマカウレイの言を引いて、史は法律史、戰爭史、風俗史の三つの一を缺いても完全な史ではないといひ、而かも世に此の三者を兼備した史書はないと論じ、制度治亂の史を補ふに風俗人情を描きし稗史小說をもつてすべき必要があると說き下げ——

此に於てや摩康蕾(マカウレイ)の言に從ひ漢土の書を讀ば則ち併せて其小說を閲し泰米の史を見ば則ち亦其稗史を讀む（中略）蓋し史を學ぶ道なり此書は英人李頓氏の著にして英國近世の風俗人情を寫して剩す所なく政治家の内幕、黨派の事情、親子の親、夫婦の愛、貴賤の別、貧富の差其事は吾人の見て而して未だ見ざる所を載せ人の知て而して未だ識らざる所を記す。（中略）故に余嘗て英國より還の後此書を譯して以て世に之を公にし曰て英史を讀

む人をして其近世の風俗人情を知らしめ且英史の本體を完備ならしめんことを望めり。（中略）以て啓蒙英史の風俗篇に充んとす云々。

又同第三編緒言にかくある――

久方の雲の那邊(あなた)や和田海の波路遙けき異國の書を繙き讀むなべに其事情(ことわけ)の千態萬狀(かずかず)を我日本の婦人等又は幼稚童兒(わらべ)にも語り聞せて西東國も風俗(ならひ)も變れども變らぬものは人情の悲歡哀樂世の中の勸善懲惡なる事を讀ま欲しくは思へども余知人の寡きのみか看ん毎に說も得ならず偶然アリス、マルツラバースと呼る冊子の有ければ讀るが儘に飜譯(かきかへ)て彼の事情を知らせんとものしたれども云々。

以上の語葉によつて、丹羽氏が此の小說飜を譯した目的は二段に簡約することが出來る。曰く日本人に西洋の人情風俗を知らしめること、これを知らしめることによつて英國史を理解する補助たらしめること、是である。此の目的は、二段に分ければかういへるが、事實第二の目的は第一の目的から副生するもので獨立せる一の目的とはし難い。そこで以上二つを一つにに合してかう換言することが出來る。曰く情的生活を介しての西洋そのものの紹介、これである。從來の抽象的主知的西洋の紹介でなしに、具體的實例によつて情的西洋に日本人の眼を開かしめんとすること、是である。而して此の小說の世間に歡迎された事實、模倣的著譯の續出した事實に鑑みて情的西洋紹介は十分にその目的を果したといつて可い。世間に歡迎された理由としては、當時の西洋崇拜熱に迎合したこと、時代が清新な讀物に渴してゐたこと、內容が才子佳人が流離多年の後團圓するといふ日本人の小說的理想にひたと當篏つてゐたこと、政治的色彩のあること、皮相的な道德的倫理的說教卽ち勸善懲惡的意見のあ

ること、など考へられると思ふ。

四

『花柳春話』五冊、本編四冊は相通じて章に分けること六十六、附錄は十二。每章の下に支那の小說戲曲によくある體例を追つて七言二行の漢詩體聯句の破題がある。概してその一章の內容の大體を暗示的に述べたものである。例せば——

第十一章　蝴蝶仙遊總一夢　春園花落鳥空啼

譯文の文體は當時流行した新聞調の漢文直譯體である。假名は片假名を用ゐてゐる。譯し振は抄譯と意譯の二つを混じ、時としては自由に改作に近い程度に剪裁を施してあるところも見える。『要領を譯述せり』云々といふ丹羽氏の語葉が成る程と頷ける。初、二編はやゝ原作に忠實、三編から自由に取捨を始め、四編に入っては殊に自由任意を極めてゐる。或る章を合し、或る章を削り、節で略し、文句で省き、或は加へしてある。然かも譯文の流麗と丹羽氏の才力とのためにその痕跡を露骨に感じさせない。思ふに丹羽氏は西洋に遊んで得た豫備知識と十分な語學力で原作を存分讀みこなしてゐたものであらう。私は可成の興味をもつて、再讀することが出來た。

こゝに一つの疑問があるが、それは後に述べることにする。例を引かう——

第八章　人間百事易レ取レ敗　月有二雲雨一花有レ風

杜鵑血ニ叫ンデ綠樹陰ヲ成シ艶鶯口ヲ雅シテ牡丹花ヲ着ントシ恰モ是レ春末夏初ノ天ナリ時ニ見ル樓亭中ニ開ヒテ窓下ニ萬卷ノ書ヲ積ミ瓶花盛ンニ綻ビテ牀上ニ一張ノ琴ヲ置キ中ニ佳麗ナル一少女アリ頭ニハ雲鬟ノ雲髮

ヲ結ンデ身ニハ浅紺ノ美衣ヲ着ケ籠中ノ鸚鵡ニ新詩ヲ教ユ傍ラニ一少年アリ机ニ凭テ頻リニ書ヲ讀ミ一室ノ景況、活畫ニ異ナラズ誰カ此兩人ヲ羨マザルモノアランヤ時已ニ斜陽、剩紅ヲ斂メテ遠鐘黄昏ヲ報ズ少年帙ヲ收メ少女ニ對シテ曰ク余ハ此薄暮ノ時ヲ愛ス卿亦然ルヤ曰ク妾最モ此時ヲ好ムコト恐ラクハ君ヨリ甚シカラン曰ク他ナシ唯此時ハ妾ガ君ヲ思フノ情殊更ニ切ナレバナリ疑フラクハ君却テ妾ヲ思ハザルベシマルツラバース微笑シテアリスノ額前ニ垂ル、數縷ノ絲髮ヲ撫シ去テ曰ク黄昏ニ卿ヲ看レバ眞ニ少年ノ如シ曰ク妾若シ少年ノ如クナラズンバ君ノ愛忽チ衰フル歟曰ク余レ始メテ卿ヲ見ルヤ卿ノ容貌少年ノ如クナラズンバ焉クンゾ卿ヲ愛スル此ノ如ク深キニ至ランヤ曰ク妾ハ之ト異ナリ縱令君老大ナルモ妾ノ心ハ固ト一ツノミ(中略)何トナレバ妾眼ヲ以テ君ヲ見ルト雖モ元ト思フ所ヲ以テ見ルアレバナリ故ニ若シ君ノ嚴威默思ノ顔ヲ思ヘバ妾ノ心眞ニ恐怖スベシ若シ君ノ喜笑歡謂ノ顔ヲ思ヘバ妾ノ心眞ニ喜悦ニ堪エズ知ルベシ妾ノ君ヲ見ルハ全ク眼眸ニ非ラズシテ思想ニ在ルヲ然レドモ妾ガ眷戀ノ情太ダ切ナレバ終ニ君ノ老顔ヲ拜スルニ及バズシテ死スルアランノミ是妾ガ固ヨリ願フベキ所ナリマルツラバース曰ク卿ノ言タルヤ情理ヲ兼ヌ誠ニ愛スベシ曰ク妾ガ心、君ニ語ルアリト雖モ猶ホ未ダ語リ盡サヾル所アルヲ恨ム妾若シ詩歌ヲ作ルヲ得バ常ニ妾ガ心ヲ吟詠シ以テ君ニ語ルアラン。(下略)

初編第六十頁—— 六十三頁

本文の間、彼の國風俗人情制度などに係つてそのまゝでは日本の讀者に受入にくいと思はれる點には「譯者曰く」として評註説明の語葉を挾んでゐる。例へば——

(上略)家童來テ晩餐ノ衣裳ヲ備フ

譯者云ク英國ノ風晩食ヲ以テ一日ノ盛饌トシ禮服ヲ着ケテ其席ニ就クヲ例トス。

五

以下、『花柳春話』の梗概を、未讀の人々のために便宜上、編を追ふて略說してみる。

初篇は凡て十六章、挿繪五葉、わたしの所藏の原本では『マルトラヴァース』の第一編十七章に相當する分である。その第十六章が既に本文にはない。

少年アーネスト・マルトラヴァースがドイツ留學から故鄕へ歸る途中或る荒野で道を失つて惡漢ダーヴォルの小舍に一夜の宿を求める。此の家の少女アリスとこの少年客と一見互に棄て難い思ひを抱く。これが抑もの發端である。この夜、アリスは少年に父の害意を告げて逃がしたが、父の縁から自身も家出する。途中アーネストに出會つて進退兩難を訴へると、アーネストは事の源は自分にあるので、先づ歸省を止め、アリスに十分な教育を與へて獨立の生活の出來るやう仕込んで恩返をする決心を堅める。かくて師と弟子の關係で無邪氣な共同生活が始まるのだが、師と弟子の關係が何時しか埒を越えて戀人のそれと代はる。その中アーネストは新聞で父の病氣危篤を知つて歸る。留守中アリスは惡漢なる父に見付られて强迫されて何處ともなく連れ出される。アーネストは父の葬式を濟してアリスの許に歸り、此の由を聞いて百方搜索したが分からない。生別死別の悲を忘れるため假父クリイヴランドの別莊に滯在中、神心過勞から憂鬱狂の如くなる。暫時してそれも癒えて、ラムリ・フェラアズなる少年と共に東方漫遊の旅に上る。

第二編は第十七章から三十二章に至り、自藏の原本では第二編第一章（全五章）、第三編（全四章）、第四編第八章

までに相當する。但し第八章は譯文にない、挿繪八葉。

マルトラヴァースとラムリの漫遊は數年に及ぶ。歸來ネープルスなる佛國公使邸の招宴でマルトラヴァースはド・ヴァンタドウル（ベンタドァ）夫人と知已になり、夫人に戀するが、彼女の忠言に心を飜へして、スウイスのコモ（ガモー）湖畔に讀書逍遙の人となる。こゝでモンテーニュ（モンティン）氏夫妻、夫人の弟詩人チェサリニ（シサと友達となる。此の平和な生活も長くはなく假父クリイヴランドの病氣の報によつて、マルトラヴァースは英國に歸ることになる、此の時モンテーニュ氏は靑雲の志を立てゝ奮鬪せよと勵ます。

又アリスは父に伴なはれてアイルランド地方まで行つたが、父の眼を盜んで脫走する。此の間彼女はマルトラヴァースの子を生む。その幼兒を抱きつゝマルトラヴァースによつて仕込まれた音樂唱歌によつて食を得つゝ故の住居に歸つてみれば主人が變つてゐて、マルトラヴァースは何處にゐるか分からない。又も漂泊の旅に出るところをリスリイ夫人に救はれ、リスリイ夫人の知人富豪テムプルトンによつて音樂教師として身を立てることが來る。漸く安心したところを又惡漢の父に見つかる、が、テムプルトンの計らひによつて後暗い身の上の父はそのまゝ立ち去る。

三編は第三十三章より四十九章に至る十七章で、自藏の原本では『マルトラヴァース』の第四篇九章から第六篇の終までに相當する。その間第五篇第六章、同第八章、同第十三章は譯文にはない。挿繪九葉。

アリスの父ダーヴィルは尙ほ近所に徘徊してゐたが、一夜怨あるテムプルトンに出會つて、危害を加へんとする。其の時彼を追跡中の捕吏が現はれ、ダーヴィルは捕吏の一人を射殺して自身も射殺される。

マルトラヴァースはロンドンに歸つて、クリイヴランドの强要に依つて社交季をそこに過したが、やがて田舍の別莊に退いて讀書思索し、二年後著作を公にして才子の名を馳せる。後一年餘更に一書を公にする。此の間モンテーニュ氏の來訪がある。更に昔の戀人ヴァンタドゥル夫人との邂逅がある。一日古蹟見物の途中驟雨にあつて一旅店に雨宿りをした際二人の交情が又も危險なものに高まりかける、此の同じ旅店に偶ふとアリスが雨宿してゐて端なく戀人の姿を見て驚喜するが(マルトラヴァースは知らない)、ヴァンタドゥルとの喋々喃々の場面を見て失望し氣絶する。このゝちマルトラヴァースはロンドンに出る。一年後、チエサリニが訪問する。俱に相伴して某教會に說教をきゝに行くと、こゝにアリスが老人の夫及び少女子を連れて來てゐるのにあふ(アリスは氣がつかぬ)。歸途馬車を追ふが及ばぬ。ラムリが外國から歸つて、叔父テムプルトンと親戚サクシンガム侯を操り奸智を弄して立身出世を企らむ。一方マルトラヴァースは精神過勞から讀書著作を禁じられる。そこで止むなく議員として公事につくすことになる。サクシンガム侯の女フロレンスがマルトラヴァースに意を寄せて來る。アリスはこれより先故あつて形式的にテムプルトン夫人となつてゐたのである。

四編は第十五章から六十六章に及び、原本では『第七(五章)、八(九章)、九(八章)』の三篇並びに續篇『アリス』を卷の分に相當する。譯文六十四、五、六の三章が『アリス』に相當する分である。原本第七篇第二、三章合して譯本第五十五章、原本同第五章はない、第八篇第二章(譯本五十四)は抄略甚し、第三、四章合して譯本第五十五章となつてゐるが抄略が甚しい、原本第九篇は第一、二章合して譯本六十一章を成し、五、六、七章合して譯本第六十三章となつてゐるが抄略の甚しいことは勿論である。第八章は譯書にはない。『アリス』に至つては部分的

に物語の大意を傳へたのみで譯といふのは當らないといつた方が分からう。

姦人ラムリは、フロレンスとマルトラヴァースの交情を妬んでチエサリニの戀慕を利用して離間策を講する。フロレンスは一旦マルトラヴァースと別れたが、眞相を悟つてこれを悔恨し、遂に疾病をかもす。マルトラヴァースとの交情は恢復したが病はいえず、愛人の手に抱かれて逝く。こゝが全編中最も悲愴な場面である。此の間テムプルトンはヴァーグレーヴ（バーグレーブ）卿となり、アリスは同卿夫人となるが、間もなく卿は死に、ラムリを相續者とする。

マルトラヴァースはフロレンス死別の苦痛を紛らさんとてパリに遊ぶ。此の時ラムリもヴァーグレーヴ夫人（アリス）及び少女カメロンを伴へてパリに遊ぶ。ラムリは少女カメロンの機嫌をとつて彼の女の夫とならうといふ野心を持つてゐるためである。だが、一夜フロレンスの死から狂氣してラムリを怨んでゐるチエサリニのために旅館で刺殺される。マルトラヴァースはラムリの跡始末に赴いて始めてアリスに再會する。

此處に疑問がある。それは丹羽氏の抄譯した『アリス』に相當する部分が、私の寓目した流布全集本の原本『アリス』とは種々の點で、可成大きな相違があるので、續篇アリスに異本でもあるか、丹羽氏は承知して改作したか、漫然卒讀して思違へたとかいふことである。わたしは何うも此の第二の說が當つてゐるかと思ふが、然し疑問は疑問である。相違の例をいへば、『アリス』の方では、此の後マルトラヴァースが此のテムプルトンの少女カメロンと戀仲になる。ラムリはこれは大變と又々奸策を弄してこれは實は君と昔の戀人アリスの娘だと欺く、それでマルトラヴァースはカメロンの母ヴァーグレーヴ夫人にあふと、アリスなので双方吃驚する。即ちアリスと

の再會はラムリの殺される可成り前に當る。こんな例がまだまだあるのである。

附錄は原本に寓目せぬので譯し振の如何を評することが出來ない。然し大體に於いて本篇とさう變つてはゐまいと思ふ。內容はマルトラヴァースとアリス再會の後日譚で、二人は目出度夫婦になり又カメロンにはリガードといふ軍人の夫が出來て目出度く團圓する。（挿繪は八葉ある）。以上が此の小說の大體である。

六

『通俗花柳春話』全四編は上の小說を通俗化せんと試みたもので、私の寓目した合本は明治十七年十月印行と目附されてゐる。叙や緒言の日附奥附等に徵し、各編第一頁から始つてゐる點から見て、何れは分冊で出版されたものと思ふ、（その後分册入手、刊行年月判明）。此の方には服部誠一校閱の語がなく、每編の挿繪も筆者が異つてゐる。畫題は概して同じであるが構圖や人物の姿が、殆んど凡てに亘つて可成り相違してゐる。『花柳春話』の銅版に對し、これは木版である、大小も、『花柳春話』の一頁大なのに對し、通俗の方は二頁大である。『花柳春話』の挿繪に比較して此方が幾分か見るに足るものがある。筆者は矢張り不明である。又每編の首には草双紙の口繪風にその中の主要人物を描いたものがある。初編に總叙（明治十七年秋十月）があり、二編に藤田貫之（[illegible]）の緒言があり（明治十六年十月）、三編に丹羽氏が鴨西漁史の號で緒言を書いてゐる（明治十六年初冬）。總叙及び三編の緒言の一節は前に引用してある。

譯文の文體は全部平假名(ひらかな)を用ゐた馬琴流の七五調が主となつてゐる。『花柳春話』との間の大きな相違といへば、挿繪とこの文體との違ひぐらゐのもの、內容的には根本的な相違はない。儘此出入があつてもそれは部分的、斷

句的の出入で、內容そのものゝそれではない。たゞ「婦女兒童」に示すためとあるのでか、情事に關する叙述は可成りぼかしを試みてゐる。例へば、『花柳春話』の初譯第一章(十三頁)でマルトラヴァーがアリスに向つて——

僕若シ幸ニ卿カ朱唇ヲ一嘗スルヲ得ハ能ク安眠ニ就カンノミ云々。

といふところを『通俗花柳春話』では(中の初編第一章十六頁)

僕若しや幸ありて貴君の若き美女に瞬間談話ことを得ば能く安眠にや就ぬべし云々

となつてゐる類である。

四編通じて六十七章、章每に漢文口調の聯句の破題があるが、文句は『花柳春話』の純漢詩的なのとは可成り違つて、馬琴の『八犬傳』その他に見えるものを眞似てゐる。例へば——

第廿九章　惡緣固く結びて父兒再び會し
　　　　　前因契淺くして母子情を絕つ

『通俗』の初編十六章(一——一六)は『花柳春話』の二編十八章まで、『通俗』の十四章(一七——三〇)二編は『花柳』の二編の終まで、『通俗』の三編十六章(卅一——四六)は『花柳』の三編、『通俗』の四編二十一章(四七——六七)は『花柳』の四編及び附錄にそれぞれ相當してゐる。各編首の外題を別にして編中の挿繪は、初編に八葉、二編に八葉、三編に八葉、四編に十一葉ある。左に文例を引いて此の篇を終ることにする——

其翌日の夕まぐれマルツラバースは例に因りフローレンスを訪來り醫師の記せし診斷書を讀ば病の益々重く死期も近にあるなれば、いと無情ことに思ひ悽然として一室に坐する時看病の婢女靜に來り、夫人は睡覺させ給ひて和君を問せ在すれば疾々來ませたまへかしとマルツラバースは聞や否直ちに病の床に行き其有樣を打見る

に昨日と大に異なれば最もいたう驚けども面に之を見さず病床に寄添て面を和げ病着の心地如何にと問ければフローレンスは微笑て妾の病は日に増して益々重り侍へば和君に別れ參らすも必ず近く侍るらん然れども妾は死すことを毫も憂しと思侍らず如何にとなれば此日來和君の情益々厚く日々妾を間慰めて病を忘れさせ給へりと又其父を顧て妾は生て猶未だ乃翁の鴻恩を報ひはせで將に死すべき期迫れり願ふは乃翁に先立て死ぬる不幸の罪咎を宥させたまへと打謝ればサクシンガムは眼をしば叩き答も得せで居たりしがフローレンスは既に早身體衰れて氣も將に絶なんとする狀なればマルツラバースは藥を與へ其苦痛を解んとすれども歯を噛しめて咽喉に入べくもあらざればフローレンスの名を呼ぶこと三回四回に及びたれば漸く細く眼を開てマルツラバースの顔を眺め恰も嬉げに莞爾と笑其まゝ息は絶えにけり。（第四編第五十九章、百二十五頁）（東京新誌第二號附録、大正十五年九月一日）

「寄想春史」　丹羽純一郎譯　明治十二年

一

『寄想春史』、正しくいへば『歐洲奇話寄想春史』、これもロード・リットンの原著で丹羽純一郎の「抄譯」、服部誠一の校閲に成る、抄譯とは譯者丹羽氏が自ら斷はるところである。

此の譯書は初編だけで久しく愛書家の間に珍重されて來たが、近來明治初期の飜譯物の盛に翻出される運に際會してか、それが全部三編で完結し、而かも三編完全に刊行されてゐることが發見されるに至つた。初編緒言

であることやその他裝釘一切『花柳春話』と同樣である。初編は明治十二年六月印行、二編は明治十二年十一月印行、三編は明治十三年三月印行と日附されてゐる。三編共に、出版人高橋源吾郎、發兌人山中市兵衞と名を署してゐる。注意すべきは三編には表紙にも奥附にも譯者の姓が丹羽でなく織田と改まつてゐる點である、思ふに前號丹羽氏略傳中に見える改姓の事は十二年と十三年との間にあつたものであらう。毎編の挿繪は『花柳春話』と同じく銅版であるが、たゞ東光舍銅刻とのみあつて畫工の氏名は分からない、筆致より察して『花柳春話』の畫工と似てゐるところが少なからずあるが、概して『花柳春話』の稚拙に比すると稍や巧みであるといへる。ただ原書中の出來事の年代に照して西紀第一世紀頃のものであるべき風俗衣裳等一體の圖樣が、十九世紀後半頃のそれを模型として描かれてゐるのは、見方によれば却つて面白いともいへるが、大體として可成り看者の興趣を殺ぐ。

初編の首に譯者の筆に成る凡例が七則ある、何れも「女兒稚童ノ未ダ海外ノ事情ヲ諳知セザランコトヲ恐レテ聊カ玆ニ婆心ヲ」表し、この譯書の內容の肝要な數點について、豫備知識を與へんと試みたものである。例せば

一 盆伯(ポンペイ)ハ羅馬(ローマ)ノ一都會ニシテ拿破里(ネープルス)ヲ距ルコト三里ノ東ニ在リ嘗テ地震ノ爲メニ破壞セラレ古昔ノ物皆ナ埋沒ス後チ千數百年ニシテ地ヲ鑿チ羅馬ノ古物數千品ヲ得テ今博物館ニ納メ縱覽ニ具フ倫氏(リツトン)盆伯ニ掩留シテ地理及ビ古書古物ヲ實見シテ此書ヲ草スレバ言々眞ニ迫ル讀者小說ヲ以テ忽カセニ看過スル勿レ

一 渭西神(イシス)ハ埃及(エジプト)ノ神ナリ古昔埃及人數種ノ神靈ヲ祭リ國人ヲ惑ハシ以テ金銀ヲ奪フ猶ホ我ガ稻神(イナリ)ヲ祭テ巫者ノ人ヲ詐僞スルガ如シアベシス盆伯ニ來テ渭西神ヲ祭リ人心ヲ惑溺セシメ竊カニ金錢ヲ貪ル者ナリ

一　アペシス」ノ妖術ヲ以テ人ヲ惑殺スルハ稍ド兒戲ト一般讀者或ハ之ヲ見テ見ルニ堪ヘザル者ト爲サン然レドモ其事今ヲ距ルコト二千年ノ前ニ在レバ人心開ケズ明將智者モ亦之ヲ信ズル者少ナカラズ即チ我日本ノ前日ヲ以テ之ヲ證スルニ足ル顧クバ讀者自カラ其時世ニ處シテ讀了センコトヲ

等の如きものである。他の四則は羅馬國のこと二則、「丁瑣里のこと一則、「美南耶剛のこと一則、合せて七則ある。

二

『寄想春史』の原作については、譯者丹羽氏は何等語つてゐないが、譯書の初頭を一讀したのみで有名な『ポムペイの最後の日』であることが明白である。『ポムペイの最後の日』は、『花柳春話』の原本『アーネスト・マルトラヴアース』に先立つこと三年、一八三四年リットン三十一歲の時の作である。

傳によると、一八三三年の秋、リットンは小說の材料を探しに、イタリイに行つた。そしてネーヴルスに落ちついて、ヴェスヴィァス山の活火を眼前に眺めつゝ此の小說を書いたのである。此の作の由來するところを詳しく知るには、一八三五年の初版につけられたリットン自身の緒言を讀むのが一番よろしい。幸に丹羽氏は此の緒言を意譯して第三編の末尾に跋語として附錄してゐる。いさゝか長いが、わたしはこれをその儘引用しよう――

著者羅馬史ヲ讀ミ美山ノ噴火盆伯ノ毀沒ニ至テ未ダ曾テ卷ヲ掩ッテ世運ノ變遷ヲ歎ゼザルハアラザルナリ以爲ラク舊ヲ溫ネテ新ヲ知リ千年ノ昔ヲ今日ノ世ニ顯ハスハ小說家ノ任ナリ宜シク盆伯ノ事跡ヲ捜テ一部ノ書ヲ記ス可シト此ニ於テ南歐ノ伊太利國ニ行キ居ルコト數月朝暮、美山ノ煙ヲ眺メテ昔日ノ侈奢ヲ想歎シ諸日地中海ノ浪ニ臨ンデ往古萬騎ノ榮貴ヲ追想シ坐ロニ感慨ニ堪ヘズ遂ニ筆ヲ染テ此書ヲ記ス然レドモ事跡僅ニ千餘

年ノ前ニ係ルヲ以テ風俗慣習、宗教政體、盡トク古昔ニ探テ而シテ其缺漏ハ之ヲ博物館ニ就テ補ハザレバ貫平タル古昔ノ事情ヲ審カニスル能ハズ豈ニ一大難事ト謂ハザル可ケンヤ然リ而シテ余ノ此書ヲ著ス所以ノ者ハ蓋シ羅馬帝丁逹（タイタス）ノ世ヲ以テ極盛ノ時トナシ萬國ノ人民皆ナ羅馬ニ來リ交際最モ當時ニ繁昌セルヲ以テナリ故ニ希臘ノ漂民グローカスイオンアリ歷山ト盆伯ノ通商盛ニシテ埃及ノアベシスアリ古昔人心ノ頑愚ナルヲ以テ渭西ノ神託アリ耶蘇宗ノ始萠ヲ記シテナザレンアリ隆世ノ惡弊ヲ擧ナコロデヤスアリ貴賤貧富ヲ揭ケテダイモンドアリ而シテ瞽女ニデヤニ至ツテハ余之ヲ天地朦昧ノ時ニ當ツテハ瞽者却テ能ク方向ヲ究知スルト云フノ一話ヲ聞テ此ニ記載ス人物已ニ在レドモ其人活動シテ且ツ衣食談話セザレバ木偶人ト一般啻ダニ讀者ヲシテ蔗境ニ入ラシムル能ハザルノミナラズ抑モ亦小說家ノ素意ニ悖ルト謂フ可シ故ニ余數十卷ノ書ヲ讀ミ數十人ノ識者ニ質シ衣服飮食、言語思想ヲ模出シテ以テ千餘年前ノ昔ニ見ルガ如クナラシム然レドモ元來拙筆鈍舌亦遺漏ナシト爲サズ唯ダ昔日ノ風習慣俗ヲ載セテ其實跡ニ背カザルヲ希フノミ

以上を讀むと、この作が如何なる動機で思ひ立たれ、如何なる態度で創作されたかといふことが、大體分かる。而して更に、一八五〇年版の自序中に、「此の作は、意外にも一般公衆にとつて飽くまで歡迎される幸運をもつことが出來たので、著者は反對の批評からこれを辯護するために數言を費す如き仕事をせずに濟む」云々に照してみると、此の作の人氣の如何なるものであつたかゞ分かる。從つて著者の名聲を當時に揚げるに大に寄與したことは勿論である。

此の小說が今日に至るまでリットン作中最もポピユラーなものであることには何人も異議がないであらうが、

價値の問題に至つては自ら別である。或は彼の最大傑作といひ（キャッスルマン氏の如き）、歴史小説界に於ける天才の傑であるといひ（一八七三年四月の『テムプル・バー』誌）、或は相當重視しても代表作といふ程度までには重視せぬ文學史家もある（ダブルユー・ティ・ヤング氏の如き）。恐らく公平の見地は、これは初期キリスト教を描いたあらゆる小説の中最成功せるものゝ一つであつて、今日猶ほ十分一讀に値する（アンドルウ・ラング）といふ邊であらう。概していつてリットン氏特異の作の一とする點は一致してゐる。ケンブリッヂ英文學史さへ、この小説について數言を費やして、かうだけ云つてゐる、『この小説は、その中心興味に社會的變動でなしに自然的變動をとつてゐる點、又内容の性質上全然假作創造の人物を採り入れてゐる點でリットンの他の歴史小説とは毛色を異にしてゐる。この小説はロッカートが一八二一年に『ヴァレリウス』で試みた古典時代の物語の流行を、一般的な確實なものとした。リットンは、晩年に及んで、一八七二年に刊行された『スパータ人ポウサニアス』に於いて此の型の小説に歸つてゐる』云々。

丹羽氏がこの書を譯した動機はよく分からない、大方『花柳春話』の當つた爲めに引續いて同じリットンの傑作をといふのでやつたと思ふが、案の外この方はさう成功はしなかつたらしい。書物往來第二年一號、石井研堂氏筆『丹羽純一郎』の中、譯者丹羽氏が石井氏に話した語葉として——

その次の飜譯小説は（書名を聽きもらす）、宗教上の事柄多かりし故前書ほどは賣れざりし云々

とあるのは、正しく此の譯書をさしていつたものであらう。

三

『寄想春史』全三編、通じて回に分けること三十五毎回の下に漢詩體聯句の破題があること、それが概してその回の內容の大體を述べたものであることは皆『花柳春話』と同樣である。但し『花柳春話』のそれは七言であつたがこれは九言である。例せば――

第　一　回　盆伯街頭嬌鶯唱二春曲一　綠珠樓上胡蝶弄二花蘂一

第三十二回　天柱全折古都歸二灰燼一　地軸已裂人寰爲二焦土一

全編譯文の文體が當時流行の新聞調の漢文直譯體であること、假名に片假名を用ひてゐることも、亦『花柳春話』と同じ。譯し振りは既に譯者自身抄譯と斷つてゐるからそれで盡きてゐるが、これは、『花柳春話』の初は詳にして編を追ふて略にして行くのとは反對に、大體初編より後に及ぶに從つて聊か詳を益す、章を省き章を合し節を省き節を合するのは『花柳春話』と同じであるが、概して原作の數章の意を酌んで譯書の一章とし、萬遍なく要領よく原作を紹介してゐる。かゝる抄譯は、原作を存分讀みこなして我が藥籠中のものとする程度に至らなければ仲々出來難いものである。單に抄譯だからといつてみだりに輕蔑すべきではない。丹羽氏の手腕は認むべきであらう。譯文例に依つて流麗、『花柳春話』に比して一段を益したかの感がある。たゞ上記の如く、原作の內容を萬遍なく紹介する流儀で抄譯されてゐるので、筋の變化が聊か急調になり、十分に一の顚末を了解する暇のないうちに直ちに次の變化が續いて來ることになつて、さう樂々とした氣持では讀過が出來ない、殊に宗教上、乃至似非哲學思想じみた問答や說教の多いのも、場合によつて讀者の心を倦厭せしめる一因となる、これは丹羽

氏が石井研堂氏に語つたのが、實際であらう。文例を引用する、——

波濤漸ク平カニシテ舟路始テ穩ヤカニ海風吹落テ東天僅ニ明カナリ西ノ方美山ヲ回顧スレハ黑烟天ニ聯テ紅焔雲ニ閃メキ殷々轟々ノ聲唯タニ南山ノ遠雷ノミナラズ昨朝見ル所ノ白堊粧瓦ハ今朝已ニ礎壊シテ復タ有ルナク唯タ遙カニ水藹ノ朦朧トシテ岸邊ヲ鎖スヲ見ルノミ誰カ之ヲ悲歎セサル者アランヤ船夫已ニ天ノ明クルヲ看テ喜色欣々トシテ復タヒ世界ニ出ルノ思ヒヲ爲シ且ツ海波稍ヤ穩カニシテ風潮共ニ宜シケレハ戒心一時ニ解ケテ盡ク眠ニ就キ船中寂トシテ唯タ鼻息ノ絢々タルヲ聞クノミ此時ニデヤ徐々的ニ身ヲ起コシテグローカスヲ覘フニ彼レ亦熟睡シテ傍ニ人アルヲ知ラザルガ如シニデヤ其手ヲ執テ之ヲ撼キ又之ヲ前ノ如クニシ悄然トシテ曰ク願クハ君、萬神ノ保護ヲ被リイオント共ニ一生ヲ全フシ時トシテハニデヤノ往事ヲ追想スルアレヨ吾此世ニ在テ復タ君ニ益ナシ因テ今哀別ヲ報ズルナリト言了テ嗚咽流涕漸クニシテ舷頭ニ就キ欄ニ凭テ海水ヲ覘ヒ且ツ曰ク是レ吾カ爲ミノ安樂淨土何ソ躊躇スルヲ要セント此時一陣ノ微風髯髮ヲ吹キ斜メニ他ノ論見ニ乘ルニデヤ之ヲ揭ゲテ天ヲ仰キ低聲ニシテ曰ク吾レ何ノ惡緣アリテカ斷念スル能ハズ隱憂滿腔物トシテ悲歎タラサルハナシ生テ此憂ニ遇フハ寧ロ生ナキニ如カンヤ知ラズ吾レ復讐テ彼レノ害スルコトアルヤ然レトモ彼レノ九死ヲ救フコト已ニ二回ナリ冀クハ以テ吾カ罪ヲ償フニ足ラン既ニ之ヲ償フトナラハ吾カ心頭ニ快然タリ是レ則チ吾カ喜悅ノ終リナラン今自ラ魚腹ニ葬テ泉下ニ君ノ幸福ヲ禱リ以テ死後ノ望ミト爲サンノミト言了ル時海中ニ墜了リ船夫夢忽チ驚キ舷頭ニ就テ水上ヲ見レハ波間纔カニ白色ノ物ヲ見レトモ直チニ沈沒シテ去ル所ヲ知ラス船夫卒テ復タ前ノ夢ヲ續テグローカスイオンハ徐々睡リ覺メテニデヤヲ搜索スレトモ其所在ヲ知ラス驚イテ之ヲ船客

ニ問ヘトモ前夜ヨリ人ノ之ヲ知ル者アラザレハ之ヲ覓ムルニ策ナク兩人始メテ彼カ投身シタルヲ思ヒ悲歎限リナク徒ラニ海面ヲ望ンテ哀涙潸然タリ（第三編第卅五回第百六頁——百九頁）

本文中往々註解の語を挿むことも『花柳春話』と同じである。例は引かんでも可いのであるが、たゞ餘り人口に膾炙してよく畫になど描かれてゐる一節があるので、それを引いてみよう、——

此時灰燼稍ヤ踈ニシテ熱雨漸ク止ム兩人手ヲ携ヱテ市門ニ到レハ門衞屹然トシテ立チ神色自若トシテ門ヲ護ス〔譯者云フ後世𡈽伯ノ地ヲ穿チ門衞ノ甲冑ヲ着セシ骸骨ヲ掘リ出タセリ蓋シ古羅馬ノ法嚴ニシテ兵士ノ進退、一ニ號令ニ從ハザルナシ故ニ此地震ノ火災ト雖モ命令下ラスンバ敢テ進退セサリシナリ强國ノ律令以テ想ヒ見ル可シ〕

『花柳春話』の例にならつて未讀の人のために、『寄想春史』三編の梗概を添へようとしたが、再考するに、『寄想春史』はこの題の譯書こそ珍本で少ないけれども、原名通り『ポムペイの最後の日』と題した方は、先に大町桂月の名による抄譯があり、最近又わたしの畏敬する中村詳一氏の全譯物も出て、訪問甚だ得易いことであるから、『花柳春話』が彼の譯書以外に內容を窺ふよすがのない類と場合を異にしてゐるかと思はれる。それで、梗概に筆をつけずに、こゝでこの解題を結んで置くことにする。（東京新誌三號、大正十五年十月十五日）

「春風情話」一　橋顯三（實は坪内逍遙）譯　明治十三年

一

『春風情話』、表紙にはソル・ヲルタル・スコット原著、橋顯三譯述と記されてはゐるが、橋顯三氏はただ名義上の譯者で實際の譯者の坪内逍遙博士であることは、博士自身の御言葉によつて今日では明瞭にされてゐる（早稻田文學第二百三十三號「明治文學胎生期續篇」所載「回憶漫談」六頁）。此の飜譯小說は二種の意味に於いて、——即ちスコット物の最初（現在では）として、又坪内博士の處女出版として——明治初期の飜譯文學中重視すべき意義がある。

此の譯書の表紙に『春風情話』壹篇と斷はつてあるのは、勿論後篇刷出の豫定からであらう、然し實際刊行されたのは第壹篇だけに止まるよし、坪内博士の御話である。奥附には、明治十二年三月十六日版權免許、同四月出版と日附され、譯述者橋顯三、出版人中島精一とある。書名の『春風情話』が丹羽氏の『花柳春話』を擬したものとのことも、同博士の御話である。卷頭小川爲次郎氏の雅文體の序があり（此二葉は木版）、次に譯者の「春風情話附言」がある。此の譯書の原作のこと、飜譯の態度などを略ぼ記してあつて、この譯書には大切の文獻であるから、全文を左に引用する、筆者が大學生時代の坪内博士たるはいふまでもない、——

この書は英國の文章家公・歐垂・蘇格のものしたるランマルムールといふものにてむねとはエドガル島林といふものと瑞紫といふ女のことをしるしその物語因果應報のことわりにもとづき人情のこまかなるふし〴〵を

の手ぶりのさま〴〵なるけぢめをもあはれにをかしく取なし心ゆくばかりに書き寫していとも〱おもしろき雙紙なりかつその書ざまもすこぶる我國にてもてはやす傳記小說に似たればこれを讀み見ん人は八重の汐路をへだてよろづのさまことなる國にても物のあはれのいたりふかきくまはなほたがへることなくてゑをうつせる小說の類もじねんにおもむきをおなじくせるを知りぬべしことにこの書は同氏の著述おほきが中にもとりわけすぐれたる名あるものにていはゆる悲壯(ツラジデイ)の體とて悲哀をもて一篇の主意とし言葉の花ことにうるはしく筆の文もいとめでたくそのこゝろむけの巧なるにいたりてはげに一唱三歎の妙ありとやいふべからんされど僕(おのれ)かつたなき筆もて書きうつしつれば今は金玉の聲も瓦礫の響とかわりゆきたらんといとはづかし

僕(おのれ)この書を譯(うつ)すに原書(もとつふみ)のまゝにてはなか〱にきゝにくゝさとりがたきふしはたおほければその大意をのみ譯しとりたるもかつ〱ありしかはあれど後段の伏案前章の照應とも見ゆる所にはかならず心を用ゐて一字一句といへどもおろそかにせずまた言葉も幼童(おさなきひと)のこゝろゑやすからんをむねとしつればひたすらにめやすく耳ぢかきをゑらびとりあらたに畫圖をさへ添へて文中の意(こゝろ)をしらしむる助とこそはしたれされどその畫圖は僕がさかしらもてつくり出でたるものなれば文中の意味とはいたくたがへりの疑をおこしうちかたぶきをこづく人もかつはありなめどそはかゝらんすぢものにせんにはさりがたきしわざぞとみゆるしたまひねかし

この物語は蘇格蘭といふ王國にてありしことなりそもそも蘇格蘭といふは大英島の北部にありてむかしは獨立したる王國なりしが一千六百年の頃よりはじめて英吉利國と合併してそが政をうくることゝはなれりこは今の世の幼童はたれも〱もいとよくこゝろゑたることなれどなほとをにひとついぶかしくおもはん人のためにと

てかくは驚かしをくにこそ

二

この譯書の第壹篇は本文一〇四頁、それが四回に分れてゐる、每回漢詩風の破題があるのを「花柳春話」などと同じである。否な寧ろ博士が當時心醉してゐられたといふ曲亭馬琴の作に似せたものといひたい。目次の立て方の

第一套　紅涙霑レ襟古堡夕　白刃閃レ雪刑場曉

第四套　飛二銃丸一壯夫斃二危窮一　沒二山井一妖婦遺二禍難一

とあるのや、別に卷中姓氏目次のあるところなどは馬琴の小說を讀んだ讀者の破顏してうなづくところであらう本文前に口繪が二葉あり、本文中に挿繪が四箇所ある。畫工は署名によつて芳𦯶年參と知られる。人物、風俗、器玩、悉く日本の武家時代の樣式に化して描いてあるのが注意を惹く、と同時に此の小說に寫されてゐる古い昔の物語に何とはなくしつくりと一脈相應するものがあるやうな感じもする。譯し振りは、前に引用した附言に見える通り、大意を摘んだもので、普通の意味の抄譯とも違ふ、文體は博士の御話の通り全く馬琴張りの七五調八六調が基調となつてゐる、然し獨自の持味を出してゐないでもない、例を引けば、——

（上略）「瑠紫阿朱通」は得知らぬ男に扶けられて、泉の傍まで至り着しが、此時まで自己に復りし體なければ那の壯夫は甲斐々々しく「瑠紫」が被たる袿衣の裾を水に浸し、「瑠紫」の口にそゝぎ入れて介抱することや半刻

あまり、其水喉に通りたりけん、「瑠粲」は忽然として息吹返し、あたりを見まはすうつくしさ、花の容顔色青ざめ、鬢の毛は打亂れて、宛然水精「獰夜奴」が、其戀人に見縦され名殘惜みし面影も恁やとばかり思はるゝ欹斜る柱に倚かゝりて袿衣の裾のしどけなく、水に浸りてないがしたるは、雨に惱める花の陰に深山鶯かいひそめ囀りかねる風情あり、「瑠粲」は暫時茫然と、死生の間を辨難て居たりしが、纔て自己に復りけん、父君やいますと、彼方此方眼の限り見回せど、更にその影をも見ざりければ、此はいかゞなり給ひつると、悲しさ、怖さこき泥て、父君々々と泣き叫ぶも道理なり、壯夫これをうち聞て、姫君心安く思ひ給へ、「阿朱遁」ぬしは恙なし、程なく此所へ來らせ給はんといふを半も聞あへず、然いはるゝは寔なりや、否寔にはあらざるべし、前には荒牛追逼り、逃るゝ道もあらざりしを、怎か父君恙なくおはしまさん、いで我儕親ら那邊へ行き、父君の安危を定めてんと、立あがらまくする程に、疲れ果たる手弱女の、爭でか一歩も歩行るべき、忽ち小石に躓きてあはや倒れんとこそしたりけれ、傍に居たる壯夫は先刻より此爲體を見るといへども心に深き理由やありけん扶けんともせで居たりけるが、この有樣にこらへかね、やがて走り寄りて抱きとめつゝ、徐再び元の處へ坐せしめて、これに向ひていへるやう、「阿朱遁」主は天の助ありて不思議に危難を免れ給ひたれば、程なく此所へ來ますべし、ようなき事に心を痛め、病を起さば却て父君への不幸ならん、和君は一度息絕て身體甚だ疲れたれば步行をなすはあしかるべし今暫時と打念じて、家人の來るを俟せ給へと言葉やさしく慰めたり、其時「瑠粲阿朱遁」は全く自己の心に復り爰にはじめて眸を定めて那の壯夫を熟々見るに思ひ掛けなき人品にてもとの根ざしも賤しからぬ、白羅紗の獵場衣裳を身に着し「門手呂」と呼び付けたる獵場帽子を目深に冠り額に垂

るゝ黒髪の飾も惜し氣に壯夫が面を覆ひ隠して全く見ることを得ざれども年の頃は二十あまりになりもやしつらん色は雪も恥づるばかりにて鼻筋とほり眉秀で顔の匂いとあでやかに風采のなつかしき氣高けれども驕からず婉柔なれど自から雄々しきふしのあらはれて青柳の烟に籠る春の月錦木の色に映れる秋の山も此人の姿には及ぶまじと思はれたり、されどいかなる憂き事やありけん、いと不樂にて物思ひに沈むが如く見ゆめるは外の見る眼も覺束なくて深き仔細のあることゝおしはからる、かくて「瑞葉」は暫時が程は彼の人をあからめもせず打守り居たりつるがその物いひたるけはひなど此世の人とも覺えず、ゆかしき限りなくて不圖見やりたる顔付を、かなたよりも同じ心に見返されて我ながらはしたなき心地せられ、ハツと赤らむ紅葉の、うら恥かしくその儘にさしうつむきてしばし物も得言はざりしが、猛ては果てじと漸々に思ひかへして頭をもたげ深山鶯密音に打ほのめかしていへるやう（下略）

本文第四回の末の方からの引例であるが、主人公と女主人との初對面の場面で、譯文第壹編は、こゝで瑞葉とこの壯夫が本意なく別れるところで終つてゐる。壯夫とは乃ち主人公エドガー・レヴンスウード、譯文の所謂鳥林の長である。

三

此の飜譯小說の原書がスコットの作『ランマアムーアの新婦』であることは、譯者が附言に述べてゐる通りである。『ランマアムーアの新婦』の出版は一八一九年、所謂スコットの小說叢書『ウェーヴァリイ小說』中の第八『地主の物語』の第三集に相當しスコットランドの傳說に有名なデリムプル家の悲話を骨子としたものである。

傳に依ると此の時スコットは病氣で自ら筆を執ることが出來ぬので、此の作及び『梅蕾餘薫』の原書たる『アイヴァンホー』その他二三の作は何れも口授によつたものといふ。此の作は從來スコット作中では大して重視されてゐたものではないらしいが、近來エルトン教授その他の研究家の認めるところとなり、その暗鬱な悲劇的な點詩趣豐かな點ではスコット作中第一とまで推奬されるに至つてゐる。スコットランド有名の事件を取扱つたものだけに、篇中の人物には一々實在の人物がモデルとなつて居り、スコット自身此の作の序篇にそれを指示してゐる。兩々對比してみれば何か面白いものが出來るかとも思ふが、こゝでは左まで立入る必要もないのでやめる。

此の小說はこれ以後飜譯は出てゐないと思ふし、又スコットなどは云々と今日の讀書子から輕視されがちなため恐らく此の小說を讀まれる人も少ないことゝ思ふから、私は左に梗概を添へて置く、若しこれに刺戟されて讀者諸君のうちに一人でも、この小說を讀みたいといふ志望を起される方があれば、それは筆者の望外の幸である。但し太簡に失するのは、止むを得ぬことゝ承知されたい。

此の物語の時代は第十七世紀の後半、場所はスコットランドの東部ロシアン地方のレヴンスウッド古城を中心とする。此の古城はもと同名の領主のものであつたが、故あつて今は時めく尙璽官サア・ウィリアム・アシュトンに奪はれ彼の居城となつて居る。舊城主アラン・レヴンスウッドはウルフス・クラッグの破城でアシュトンを怨みつゝ淋く死ぬ、その葬式の日、事の行違があつて、アシュトンは法會の場に役人を向けさせ、葬式を中止させんとし、更にレヴンスウッド一族の怨をかふ。アランの子エドガーはアシュトンの威勢旺なスコットランドでは到底芽の出る折がないと覺悟し、外國へ出發せんとする、然しその前に怨重なる父祖の仇アシュトンに一刀報

ひたいとて付狙ふ。或る日アシュトンは最前の娘ルーシイをつれて野山を逍遥してゐるうち、途に迷ひ、野牛の群に圍まれて生命を失はんとする。此の時誰とも知れず樹の間から發砲して牛を斃して父娘を救ふ。仇を復なんとしたエドガーが見るに見かねて助けたのである。アシュトンは人を呼びに里に馳せて行く、その留守の間にルーシイとエドガーが始めて顏を會せて二人とも故知らぬ胸の轟きを覺える、二人の戀の始め、惡因緣の始めである。前に述べたが、坪内博士の譯はこゝで終つてゐる。さてルーシイは仇のエドガーの面影を忘れかね又エドガーは復仇の心を忘れる、同じ心の二人は度々出會つて終に結婚の約束をする。然しルーシイは弱い女性の身ゆゑうち付けに父母に打ち明けることも出來ず、エドガーも公然結婚の申込みをするわけにも行かぬ。そのうちにエドガーの友で、かねてこれもルーシイを思つてゐたバックラウといふ若者が叔母の死によつて俄に富貴となり、アシュトン家に公然結婚を申込む。アシュトン、殊にアシュトン夫人がそれに大賛成し、熱心にルーシイを說く。そこでルーシイは仕方なくエドガーとの約束をもらす、アシュトン夫人は大に立腹してエドガーに婚約破毀の手紙をかゝしめる。然しエドガーは手紙では承知せずルーシイと直接會つて口づから決心をきゝたいと求める。ルーシイは母親付添でエドガーと會見するが、脆いは女性、殊にルーシイのやうな世間見ずの弱い性格の婦人に斷然とした返事が出來やう。勢ひエドガーにはルーシイの心變りと見える結果で終る。可憐のルーシイはすでに此の頃から幾分心が錯亂してゐたかも知れない。間もなく母の一人ぎめでバックラウとの結婚となるが、その結婚の夜、祝宴終つて新郎新婦が新枕のときに至り、ルーシイはつひに發狂して新郎バックラウに瀕死の重傷を負はしめる。

ルーシイは間もなく狂つたまゝ死ぬ、バックラウは外國に去つて杳として行くところを知らず、エドガーは、一日ルーシイの兄ヘンリから挑まれた決鬪に應ぜんとして決鬪場に赴く途中、誤つて海岸の浮砂(クイクサンド)に馬を乘り入れて無慘の最期をとげてしまふ。悲劇といへば悲劇、悲慘極まる物語である。

因みにいふ、時折音樂會などで曲名を聞く、あの歌劇『ルチア』(ドニゼッティ作)は、材を此の小說から借りたものである。

四

私が「春風情話」の古本を金五錢也をもつて神樂坂の露店でかつたのは、大正十年ごろでもあらうか、或は八九年頃かも知れない、然しその頃はこんな珍本とは思はず、又勿論坪內博士の譯だなどといふことは知りもしない。たゞ同好の木村毅君などに見せて、互ひに得意がつたぐらゐのものである。だから後に神代種亮氏に會つてこれが坪內博士の譯であると聞き、又十四年七月の早稻田文學(『明治文學號』胎生期續)の博士の『回憶漫談』中で左の一節を讀んで、內心少なからず驚いたのである。

『十五年……これではならんわいとやゝ眞面目になりかけた時分の試譯が二種あつた。其一が「該撒奇談」であり、其二がスコットの「ブライド・オヴ・ランマームーア」一部分の譯である。後者は在學中の出版であつたので、故橘顯三氏(橘靜二氏の父)の名を借りて、「春風情話」といふ匿名で世に出した』(下略)

此の坪內博士の自記を、私が今度博士御自身から御聞きした御話で數點補つて敷衍してみよう。自分とは博士御自身をいふ語である。

『自分は馬琴好きから、馬琴とスコットが一脈相通するものがあるので、スコットが好きになつた。そして筆ならしとして此の作（『ランマアムーアの新婦』）を譯してみる氣になつた。

『原作は從來はあまり傑作とされてゐないやうだが、あの何ともいへぬ悲劇的なところが自分の氣に入つた。あの時の自分の氣持にぴつたりと來た。スコットの紹介に此の作を選んだ點など、或は特異といへばいはれやう。』

『あれを譯したのは明治十二年の冬期休業の間で、あの一篇で報酬は十圓か十五圓ぐらゐであつたらうか、勿論大して賣れもせなんだので第壹篇だけで沙汰やみとなつた。

『名前人の橘顯三氏といふのは、當時本郷元町にあつた通文學社といふ私立學校の校主橘某氏なる漢學者の息子であつた、此の人の弟槐二郎氏といふのが自分と大學の同窓であり、又友人の高田君（早苗博士）など、學生の身ながら何れも此の學社に教鞭をとつてゐたので（自分も後になる）、それやこれやの關係から槐次郎氏を通して名前人となつてもらつたわけ、顯三氏が何も自分の親友といふわけでもない、寧ろ高田氏とは親しかつた方である。同氏の子息の靜二君は後で高田君の祕書となつた。何でもこの頃、顯三氏は何處か會社へ勤めてゐたやうに思ふ。全然文學に縁のある人ではなかつた。もう大正の初頃に故人となつたかと思ふ。

『序文を書いた小川爲次郎といふのは、高田君の友人で、此の頃橘氏へ出入してゐた人で、大學關係の知人ではない。好事家で讀書家でもあつた。高田君のすゝめでこの人に譯文に手を入れてもらつた、然しこれも僅の二三箇所ぐらゐのものである。後朝日新聞に關係したり、實業界に携はつたりしてその方面で成功され、たしか今年大阪邊で死去されたかと思ふ。（東京新誌第四號所載・大正十五年十二月十五日）

戲作中の外來種二三について

一

少々、妙な題目のやうに思はれるかも知れないが、引のばして説明すると、幕末から明治初期へかけての戲作小説中に、外國を種子にして趣向を構へたものが幾篇かある、そのうち僕の寓目したもの二三について解題めいたものを書かうといふのである。もとより此の種の材料集めも研究も專門にやつたのではないから、とても諸君子の前などにひけらかせるものではないと思ふが、かうして一石を置いたら、或は後の研究家が完全にしてくれるだらうといふことも考へられるので、御示教お願ひのしるしまでに、一二回書かせていただく。

それから外來種、即ち外國といふ觀念をこゝでは一寸制限して、西洋、歐米諸國といふ意味にだけとつて貰ふことにする。本來なら支那印度も入るのであらうが、只今のところ時間が許さないからさう大風呂敷をひろげかねる。この點も御諒察をお願ひする。

ところで、外來種の戲作小説の嚆矢は何か。これに對して、嚴密な意味では、僕は知らない。『百合若大臣』の傳説がホーマアの『ユリシイズ』から出てゐるといふ、それは室町時代の舞の本か何かにあるといふから、外來種の小説も案外早いものであらう。だからこれを戲作と限つても、何時誰々の作が、その嚆矢だなどと斷言出來る自信は僕にはない。正直にいふと、僕は、文久元年の『萬國噺』より以前のことは知らないのである。元來かういふ文學上の新ジャンルの嚆矢調べといふものは、隨分面白いものでもあり、又後世の學者にとつて有益なも

のでもあるが、如何せん、僕今のところは他の仕事で手が一杯なので、そこまで踏みこみかねてゐる。然しこの分野も何れ早晩何方かに調べていたゞかねばなるまい。樂しみにしてお待ちしてゐよう。

そこで、僕のいふ外來種の戯作小説の二三といふのは、つまるところ、『萬國噺』以後の二三のことである。どうも度々駄目を押すやうで恐縮だが、どうかさう思つてお讀み下さい。

では、いさゝか突然だが本文にかゝる、——

『童絵解萬國噺』（をさなゑときばんこくばなし）。僕、此の作の四編までは知つてゐるが、何うも五編もあるといふやうにも聞いてゐる。一編から三編までは萬延二年、即ち文久元年春出版され、四編は同元年秋出版されてゐる。假名垣魯文の譯で、一壽齋芳虎の畫とある。譯といふ條、勿論魯文が横文字をかなつて自分でやつたわけではない、邦文翻譯、乃至漢文和譯を意味する。『海國圖志』、『増譯采覧異言』、『亞墨利加一統志』、『西洋雜記』の諸書にもとづき「童蒙婦幼に見安くせんとて、皇國言葉を假名文に解和らげし珍説異聞、彼新奇の事實を」採つたものである。兎に角元來が際物仕事で、魯文に別に一貫した用意があつたのではないことは、各編の撰定が再三變つてゐるのでも分かる。

今編を追つて内容を簡單に紹介すると、初編上の前半に、「佛蘭西國の部」として、フランスの地理、文物、工藝、交易その他について極く大略を記したもの、勿論正確どころではないが、然し種本があるだけに、全然荒唐無稽な描寫ばかりでもない。初編の上の後半は、「英吉利國の部」大英國成立の由來、地理、宮廷の儀禮、ロンドンのこと、海軍の盛大なことなどを、前半と同じ調子で略説してある。然し如何に外國の國情に無理解不案内で

あつたかといふ事は、次の一節を讀んでも分かると思ふ。(漢字を少々入れる)

いにしへよりそのくにの王はをとこなるときもあり女のこともありてさだまらず當時は女王にてくらゐにつきたるのち屬國の王のむすこをふたりむかへておつととなす女王朝にのぞみてまつりごとをきくときはふたりのむこぎみも又そのみぎひだりにあり云々

初編の下卷は「魯西亞國」の部であるが、これは以上と少々趣きを異にし、地理の說明が一寸あるだけで、あとは全部彼得大帝一代記である。こゝに於いて幾分小說らしい氣味が出る。然しこの彼得の事蹟は正史によつた通りのもので、格別面白くもない。さればとて一概に小說として貶し去るべきものでもない。史實の要領はよく摘んである。かたりな女帝とぺいとる三世のことが一寸附言してある。

初編の豫告で、第二編には「おらんだ、あめりか、なんきのありさまを傳へる」云々とあるが、何ういふ都合でか、いよいよ出た第二編は「北亞墨利加合衆國部」である。これは或ひはアメリカといふものが、同じ外國でも當時の日本人の興味の中心になつてゐたので、早く知らせたいといふ作者の腹か、或は早く賣りたいといふ書肆の腹から變更されたものと思ふ。

第二編「北亞墨利加合衆國部」の上卷は、主として歷史で、英國殖民地の由來、政治組織、和蘭人との抗爭及び勝利、ういるれむ、(ウィリアム・ペン)が、功によつて新地を賜はり、ぺんせへるふあにいを創めたこと、佛蘭西、人との抗爭及び勝利、英本國の苛斂、十三國の檄文、佛蘭西殖民地人を助ける、英本國の講和、共和政、大統領わしんとん大統領となる、代々の大統領の姓名などに及んでゐる檄文にいはく。(漢字を入れる)

天道民を生じ萬衆多しと雖もこれ同胞兄弟のごとくおのおのそのせいといい（不明）の智を授けその分を安んぜしむ又強きものは少なきものを虐たげ且つ愚かなる民に教へなければ遂に禽獸に等しきを憂ひ給ひて民の爲に國の主を立て民を保ち護らしむ元國の主を立つる心は民を強く虐たげて國の主に備へる爲にはあらざるなりわがあめりかはもとより頭分のものはなかりしがいぎりす人来るに及びてわが土地に下としわが民を家来とすわが國人も亦喜びて思ふには必らず我が人民を保ち愛し病ましめざるべし云々

漢譯したものゝ大意を酌んで（或ひはそれを聞きかじつて）捏ち上げたものに違ひない。然しこれでも自由民權の啓蒙的宣傳の第一聲と後世からいはれないとも限るまい。たゞ檄文に全然そんなイデオロギイのなかつたこと、又ある筈がないことは、いふまでもない。

第二編の下卷は、合衆國の地理、物産（金銀その他）、機械製造、出版、政治、教育（學問所）、結婚のこと、衣食住のことなどに及んでゐる。此の結婚の習慣についての記事などは引用すると面白いのだが、餘り長くなるのでやめて置かう。要するに海外新文明の諸相を知らぬので、たゞその奇異なのに wonder の眼を見張つてゐる趣であるのは、お愛嬌であるが、然しこれでさへが、當時としては相當進んだ知識であつたのであらう。

第二編の豫告で、第三編にはおらんだ、いすぱにや、とるこの物語り云々とあるが、これ又現實の第三編は全然違つたものになつてゐる。第三編は第二編で記述さるべくして記述されなかつた、アメリカ發見とコロンブスの記事が冒頭にあり、それからアメリゴ・ヴェスプッチのことらしい記事（おめりきゆすといふ）があり、飛んでワシントン一代記に及んでゐる。コロンブスやアメリゴの傳は幾分歴史的事實に據つて書かれてあるが、ワシント

ン一代記になると、全くの小說である。つまり日本の草双紙的趣向に飜案されたワシントン傳であり、これこそ魯文譯ではなしに、文字通りの魯文作といつた方が可い。左に此のワシントン一代記のところだけの梗概を傳へて置く。それは實に面白いものである。

魯文先生のお話によると、ワシントンの父はメリケンといひ、母はパリナといふ。父はアメリキュス、即ちアメリゴの末孫で、母はコロンブスの末孫といふ、メリケンは才智あり、武藝に秀れ、且つ英吉利第一の美男であつたので、女王に召出されて近侍として仕へた。美男だけに言ひよる女性も多かつたが、パリナだけ緣があつたと見えて、メリケンの方でも憎からず思つた。だがメリケンは惡人の奸策にかゝり、國寶の夜光珠の蟲干しに、うつかりパリナと情事を語つてゐたうちに、此の珠をこはされてしまふ。それで女王もお氣に入りの家來ながら不儀はお家の何とかで、メリケンをパリナともども新世界へ流罪にする。然しパリナは却つてこれを喜ぶ、といふのは、父の遺言でアメリキュスの末裔と結婚して、新世界へ渡れば子孫繁昌疑ひなしとあつたからである。かくて二人は波濤を冒し、怪魔神を退治して新世界に渡り、開墾事業に從事して、大富豪となる。かくてパリナは一子を生み、げおるげ（ジョオジ）と名づける。即ち吾等のワシントンである。

）此のゲオルゲ君、幼少より才智逞ましく、殊に軍事的才能は天稟とも見える。十八の時にかくまく山の怪物を退治して、大に武勇を顯はす。此の怪物は大變なもので、頭が上下二つあり、上の頭に眼が二つ、下の頭に眼が三つ、全身青鱗に圍まれ、爪の銳どきこと劍の如く、怒つて口から青煙を吐くと、これに觸れる人間が立所に死ぬといふ、恐ろしいとも恐ろしいものである。ゲオルゲは此の怪物を退治した歸途、山賊の手から一美少女を助

けたのが緣となつて、その兄ふらんきりんと邂逅する、フランキリンは大望の士で、浪人の親方めく人物に描かれてゐる。かくてフランキリンの請ひによつて、ゲオルゲは彼の家を訪ひ、大に感謝されて饗應をうける。（少女がれるは後にワシントンの妻となる）

第四編は三編のつゞきで、主としてあだむすの物語である。あだむすとは卽ちアメリカ第二代の大統領となつたジョン・アダムス（1735—1826）のことである。アダムスの傳の出來事もわが魯文先生の頭腦中から生れ出たものが殆んど全部だといつて可い。本物のアダムスは法律家出身で武勇の士ではないが、魯文は彼を水滸傳に見える九紋龍乃至武松の如き人物にしてしまつた。十八の時母をつれて山間に花見に出たが、母の命によつて花を折りに谷間に下つた暇に、大蛇が出て母を一呑みにする。アダムスは新世界守護の仙女と靈童の助けを得て、此の大蛇を打ち取り、母の仇を酬ふ。アダムスの村の庄屋はその人物を見込んで、一人娘の婿にして跡を讓る。折しも英佛その他殖民地戰爭が始るので、アダムスは一軍を率つて土地の備へとし、日夜百姓を集めて武藝を講じる。さうして一日それが緣となつてフランキリンと知りあふが、豪傑と豪傑だけに互ひに百年の知己の思ひがある。又フランキリンの談によつて、アダムスは世にゲオルゲ・ワシントンなる英傑があることを知り、交りを結びたいと願ふ。かくて機を得てワシントン、フランキリン、アダムスの三名士が義を結び、十三州の獨立に盡すことになるが、それは第五編に說かれる筈となつてゐる。

然し、此の第五編乃至それ以下は遂に出ずに止んだものではあるまいか。確言は出來ぬが、僕の所藏の『萬國噺』に發賣元で合本にしたものがあり、それは四編を二冊に合綴して、題簽に全と書いてある。大野萬吉のもと

は小關三英譯の『合衆國小誌』上卷によつたものといふ。僕はその書を讀まないから、果して然るやいなやは何ともいへない。

恐らく諸君子は、これを讀んで魯文先生の大膽にあきれ、魯文なるものを作家として如何にも無責任な男だと思ふかも知れないが、然しそれは今日の知識からいつての話で、當時としては何よりも思ひきつて、かゝる新しい分野に筆をつけた魯文の機轉を多とすべきであつたらう。彼が群戯作者を拔いて明治初期まで勢力を保つてゐたのは、全くこの機轉の賜物である。僕は魯文の無鐵砲に呆れもするが、兎もかく彼の機轉はエライと思ふ。

此の作全四編八冊（草双紙流の計算にすれば十六卷）のうち、四冊強がアメリカ及びこれに關係した出來事に割かれてゐるのを見ると、當時の人々のアメリカなるものに對する異常な關心も知られやう。

次に紹介するのは、『萬國奇談袋』岳亭春信作、一梅齋芳春畫である。岳亭春信には一世と二世とあるといふが一世は嘉永初年に歿したといふから、これは二世であらう。山崎麓氏の『日本小說家人名辭書』によると、

一世岳亭定岡の門人、二世岳亭定岡、師の畫名春信をも繼いだが畫を描かなかつた。通稱は岡部助左衛門、下谷廣小路の名主、明治八年頃橫濱に住む云々

とある、この作の序に「東都忍川市隱」云々とあるのにみても、此の人らしい。文久元年五月の序があるから、恐らく魯文の『萬國噺』でも當つたのを見ての急思案か、さもないと本屋からの注文で、間に合せ仕事をしたものであらう。序には三夜云々とある。然し同じ場當りにしても、魯文はともかく一部の作にまとめて讀めばよめ

るやうに造つてあるが、此の「奇談集」に至つては實に古浦道圓の代物である。その「高國」を冠したのは、當つたら續けてかくつもりであつたかも知れない。然し二國以下がないところをみると、流石際物好きの江戸子も一編でこりたものと見える。僕の見た限りでは三十五丁の切付本めくもの一冊よりない。

種本は何か原話は何か、一切分からない。然しまさか作者の出鱈目でもあるまいと思ふが、一應梗概だけ記してみる。或は何の話か、何方か敎へて下さるかも知れない。

發端に「今は昔、南アメリカのマツソネの出來事」とある。そのマツソネで多勢の子どもが鳥の羽を團扇で煽いて遊んでゐたところが、その中のソウシといふのがセンチといふのと爭つて傷をつけた。センチの父親ハンシウルなるものが、ソウシの父親モウシヨウといふものを、家事不取締で訴へたので、マウシヨウはマツソネに居られず、妻子をつれて北アメリカの新イスパニヤに逃れるが、その時行きがけの駄賃にセンチをさらつて行く。ハンシウルはこれを知つて國王に訴へ出たので、國王はセキステンなる大將に命じ、軍兵を率ゐて新イスパニヤに押寄せさせる。

モウシヨウ一家は、初めリヨウガン山といふ山の中に隱れてゐたが、やがて新イスパニヤの太守チヤウキといふ者の家人となる。チヤウキはセキステンの兵が押寄せたと聞いて、モウシヨウを大將にして防がせる。これはチヤウキがかねてモウシヨウの妻リユウリに通じてゐたので、此の時を幸ひ彼を亡き者にしようといふ、巧みをめぐらしたのである。モウシヨウはセキステンと戰つて破れ、自殺しようとするが、そこを漂流人シヨウンシヤウといふものに救はれ、リユウカン山の道士センカンといふ者と三人志を合して、チヤウキに仇を報ひ、リユウリ

を奪ひ返さうと計る。だが初めは計畫が齟齬して、モウショウはチャウキの手に死ぬ。然し、終りはチャウキもセンカンの設けた陷穽に落ち入つて命を失ふ。かくて、センチはセキステンの手に渡されるが、兩國の紛亂はこれから絶えなかつたといふのである。

戯作とも小説ともつかない代物ではあるが、兎に角話の筋道をみると、眞さか作者の出鱈目とも思へない。いづれは何か此の頃讀まれた漢譯の外國地誌か歷史の類にでもあつたか、又は英學者か蘭學者にでも敎はつたものか或は此の作自身はかう下らないものであるが、然し原話を探し當てたら案外面白いものであるかも知れない。

（昭和八年三月五日「外來語研究」第二輯所載）

二

「綠柳五ケ國草紙」。此の本は極めて少ないものと見えて、僕、今まで可成り根氣よく探しもし、人に聞きもしたが、まだ他に所藏してゐるといふ人を知らない。探したのは理由があるので、僕の所藏本が、三編と四編とだけの殘缺本なので、完全なものを見たかつたからだ。それで、今この解題を書くに當つても、遺憾ながら此の殘缺本に依るより仕方がない。

幸ひなことに、第四編に序文があつて、作者や、作の動機、年代など、いろいろな事を敎へてくれる。長くもない文章だから全文を引いてみやう。

孝の眞似して孝をなし、惡の眞似して惡となる人あり。學者の眞似して學者となるは千度むづかしき潔ながら鵜の眞似を。烏の才先及ばぬ鯉の瀧の水。岳亭兒が濁りに染り。井の内の鮒大海を。綴合にしたる五ケ國草紙

問屋が四編の催促に。机の上に取ちらす。此正本の植字版。板元に渡た三冊目の除本。引上箱の中よりして。
廻らぬ舌の口上にこそ

文久と云年　彌生廿日

忍川席亭に　山亭秋信記

この序文で、作者が山亭秋信といふ人であり、岳亭春信の弟分であり、この戯作も春信の『奇談袋』を眞似して手がけたものであることなどが分かる。又文久とばかりで何年か分からないが、『奇談袋』の年代から推して二年頃の作でもあらうか、だが『奇談袋』があまり賣れなかつたらしいのに、この方が少々賣れたらしいことは、出版書肆の催促をうけて四編を書いたといふのでも知られる。作者秋信については、僕は何等知るところがない。忍川席云々といふのは、こゝの主人でゞもあつて、片手間に文章を弄してゐたものでもあらうか。

この小説の梗概をいふのだが、今も話したやうに、三編と四編とよりはないのだから、それだけしか話せない。この物語りも、矢張り米大陸が舞臺になつてゐる。

北米大陸、カラトンに都する妙帝王（メッチィワック）といふ王があつた。その臣下にアクシトウといふ野人があつて、主家を奪はうといふ惡たくみをしてゐたが、その惡たくみの一助としてカンティロ父子に目をかけてゐた。カンティロの娘マフジンはいつとなくアクントウの妾のやうになつてゐた。ところが一日妙帝王行幸のことあり、カンテイロはアクントウの入智慧で龍珠玉といふ寶物を獻じて王の近臣に加へられる。王は又マフジンの色を愛し、都へ連れ歸つて寵した。カンテイロを王に近づかしめたのは、アクシトウの巧みであつたが、アクシトウはマフジンをも取り上げられるとは思はなかつた。カンテイロ父子は王に近づくと、アクシトウとの謀合のことは

忘れ、却つて自分達の榮華を計るに腐心した。アクントウはこれを怨み、酒宴に托してカンテイロを毒殺し、グルウランドの大王となつて妙帝王に仇を酬ゐるつもりで、その地へと出奔する。この時ボストンのカウホロといふものが、妙帝王の寶物ジカンの劍といふのを持ち出しアクントウに加擔する。

アクントウ、カウホロの二人はグルウランドを指して行く途中種々の危難にあふ。それが甚だ水滸傳などに似てゐる。ラウセキ山の大蛇、山麓の居酒屋で毒酒に中てられること、土豪ケイフルの手下に捕へられること。船遊びに托して殺されやうとすることなど、いろいろある。だがアクントウ一人は兎もかく逃れて、海賊コウリヤウに助けられ、新オランダへ渡る。その代償として、コウリヤウは、北アメリカ王の病に必要なあめ牛の膏油を調へよといふ。アクントウは計をもつて新オランダの村長サンデスの家に入り、その情人トウリヨを欺き、これと通じて、サンデスのあめ牛を手に入れ、生きながら燒いた膏をとる。ところが、新オランダの代官モルランは急にあめ牛の生皮を要する事があり、サンデスにそれを命ずる。然るに肝心の牛はアクントウに燒き殺されてゐるので驚いてゐると、モルランは却つてサンデスがわが命に應ずるのが嫌さにした仕業かと疑ひ、サンデスを入牢せしめる。トウリヨは大に悲み、計をもつてアクントウを計り寄せ、サンデスを助けようとかゝる。

この後が何うなるものか、僕には分からない。これが僕のもつてゐる第四編の終りである。きつと波瀾(?)の多い物語りとなるのであらうが、何うも想像のしやうもない。勿論そのストーリとて言語道斷なもので、『奇談袋』にも劣らぬヨタがあるらしいが、然し全部が創作ではなく、幾分か原話めくものはあつたであらう。たゞそれが『奇談袋』の場合と同樣、一向何だか見當がつかない。それにしても、早く完本を見たいものと思つてゐる。

『栗毛譚客萬國夢戯話』。これは未刊本であるらしい。僕のところに草稿本が初編一冊ある。勿論この一冊きりで終つたものであらう。作者は東洋山人とある。僕の藏本は黒頭巾横山健堂の藏書本であるが、僕のところへ此の稿本をもち込んだ古本屋は、魯文の戯筆だといふふれ込みであつた（横山氏もさう云つたといふ）。然しどうもよく讀んでみると、魯文ではないらしい。第一東洋山人の署名の下の印記が魯文常用の蔓形に文の字ではなく、柳亭種彦の源氏つなぎの六角印である。又本文の中に、

東洋「東洋何故ならばネ一昨年捷早、鈍亭魯文が萬國譚といふ合巻を楽述て弘世たから、萬國の風土はいゝかげんに戯述、何んでも貴公がた兩個が滑稽話を主としなくつちやア向後大的お行ませんよ、第三編へ至そんならもう萬國譚の野史が世行たか、魯文先生もよつぽど狡楽人だねへ云々

といふ一節がある。いくら魯文でも自分の本ならかう露骨に廣告は出來まい。廣告するにしても、しやうがあると思ふ。この頃この印記をもつて著作に使へさうな人は二世種彦より外にないと思ふが、二世種彦は東洋山人と號したことがあつたか何うか。著作の年は、序に文久三年なることが明記されてゐる。全體の趣向は勿論一九の『膝栗毛』を眞似た萬國道中記で、十編完結のつもりであつたことも序文に記されてゐる。然し初編だけで後が出來なかつたらしいことは、前にいつた通りである。又その材料には、『地球説略』、『三才正誤』、『萬國綜覧』などゝいふ本を使ふといふことも、本文中に斷はり書きがしてある。

初編即ち初回は發端で「兩個戯て萬國の事説を問ふ、東洋答て五ヶ國の風土を説く」と題詰がしてある。兩個即ち彌次郎兵衛、北八の二人が王子稲荷の靈驗の夢に、一九の畫像から、隣州の東洋山人なるものに趣向を聞い

て萬國道中をせよと告げられ、やがて駿府に尋ねて來て山人にあひ、先づ五ヶ國（露、蘭、英、佛、米）の風土の大略を語られて、道中の豫備知識を養ふ、さうしていよいよ米國へ渡るため横濱に出かけるところで終つてゐる。先づ米國から振出しに、五ヶ國を次々と道中し、その奇事滑稽を一々風船に托して山人の許に報知しようといふのである。

以上の部分を書いてしまつてから山崎麓氏の「日本小説書目年表」を調べてみると、滑稽本の部に『増補東海道膝栗毛』といふものがあり、その作者は狗々山人となつてゐる。これは慶應三年から明治三年までかゝつたものといふ。この狗々山人といふのが、二世種彦（即ち高橋種秀、笠亭仙果のこと）の別號である。さうすると、二世種彦にこの『夢戯語』の如き著作があつたとしても怪しむに當らない。東洋山人と號したことが見つからないとしても、これはその時だけ假に用ゐたものかも知れないから、強ひて拘泥するにも及ばぬかとも考へる。彼は恐らくこのころ此の種の滑稽本にも筆を向けて、局面打開を試みやうとかゝつたものかも知れない。何うも、東洋山人は二世種彦らしい臭ひがして來た。然し後考を俟つことにする。

『倭國字（やまとがな）西洋文庫（せいやうぶんこ）』。假名垣魯文作、一名那勃烈翁一代記ともいふ。然しこれは多少注意を要するので、今日ではこの表題の通り、『西洋文庫』即（そく）『那勃烈翁一代記』となつてしまつたが、實はさういふ意味ではなしに、既刊の『西洋文庫』が那勃烈翁一代記の部分に相當するといふつもり、いはゞ『西洋文庫』の中の那勃烈翁一代記といふ意味である。それといふのは、作者魯文の意圖では、これをもつて『萬國噺』の續篇とし、同様なプランを逐つて、文字通りの西洋文庫にしようといふつもりであつた。それは初編の序に、この作をもつて西洋知識の初

學入門とするといふ意味が見えてゐるのみならず、凡例に

ふらんすのものがたりをはればいぎりす、めりけん、ふるいす、とるこ、ろしや　のくにぐにへうつりゆきつゝきさまざまのめづらしきはなしをあらはすべし云々

とあるのでもそれがわかるのである。

魯文はこの作の材料なるナポレオン傳について、初編の凡例の中で「吾友英國師精機井河丈紀なる人英の畫工ワクマンといへるものゝ一夕話なるよしにてかたれるまゝにそをたねとしてあらたにつゞりまうけたりワクマンのはなしもとづくところなきにあらねどおもふにかのくにの小説なればかならずしも實錄とおもふはたがへり」といつてゐる。この河丈紀は、後の岡丈紀河原英吉と同一人で、三世風來山人の戯作名をついだ。ワァグマンとは例の有名な畫工ワァグマンのことである。普通のナポレオン一代記でなしに小説の一代記だといふのである。これは果してさうか、それとも魯文が豫防線を張つたのか、この頃ナポレオンについては可成り正確に知られてゐたので、魯文は此の作の物語が實錄と違ふのを氣にして、辭を重ねて、「このきうしの趣きとことなるところあるはもとよりかの土のつくりものがたりなればなるべし」云々と頻りにワグマンのせゐにしてゐる。然し文體からいつて、ワァグマンの物語が小説から出てゐたにせよ、魯文がこれに加へた創作の分子の方がずつと小説的なものであることはいふまでもない、その創作に當つて、萬亭應賀の『釋迦八相倭文庫』の筆法にならつたとは、三編の序で自ら斷つてゐる。

この作は初編は明治四年か、第二編第三編は明治五年春、或は三編ともに五年に出たものか。第四編は出たと

いふ説があるが、僕はその板下本を所藏してゐるから、未刊といふ方が當つてゐるらしい。事實又第四編の刊本になつたのは、今迄に見たことがない。さて普通のナポレオン一代記なら何もわざわざ梗概を語ることは要らないのだが、これには種々な珍説奇聞があり、西洋のナポレオン學者も驚嘆するやうな事柄が續々出て來るから、後學のため梗概を述べて置かう。「こゝにふらんすのはりすよりにしにあたりてひとつの地ちありなづけてこるしかじまといふ」このコルシカ島にボナパルテリユスといふ漁夫があり、妻のカロル（モカアルともいふ）との間に一人の子があつてこれをナポレオンとよんだ。（如何です、諸君一寸驚いたでせう）。ナポレオンは生來才智逞しく、武勇あり、又敎へぬが文事にも暗くはなかつた。十二の年から父の手助けとして漁に出で、鯨取りを家業としてゐたが、十五の年にはコルシカ島を荒した惡い鱷魚を退治して大に名を揚げた。時の國王は島司モンゴルからそれを聞き、是非ナポレオンを見たいといふので、モンゴルはナポレオンに土地の豪商で船持ちのフルチといふのを添へて都パリスへ差し上せた。ところがこゝに一事件出來、といふのは、モンゴルの下役たるガラバスなるものはフルチが娘ホテンニヤに懸想し、フルテ家の水夫スドロを買收して、頻りにホテンニヤに艶書を送つてわが意を通ぜしめたが、ホテンニヤは勿論聞き入れない。一日スドロは又もホテンニヤの室に押しかけ、無理にもガラバスの許に連れて行かうとしてゐるところへ、フルチとナポレオンが上々の首尾でパリスから歸つて來る。ナポレオンはスドロ狼藉を見て、これを散々打ち懲した。スドロは逃げてガラバスの許に行き、萬事巧く行つたのにナポレオンめのためオヂヤンになつたと詐つて告げる。ガラバスは大に怒り、今度は自身手下をつれ、結納をもつて押かけ婿にやつて來るが、又もナポレオンに打ち懲され、這々の態で逃げ歸る。ガラバスは更にナポレオ

ンを暗打にしようとするがこれも成功しない。ホテンニヤはナポレオンに戀を覺えるやうになる、

コルシカ島の國府から三里餘りにアフリヤ山といふ險山があり、こゝに妖怪があつて旅人を惱まし、里の美女を掠めるといふ噂が立つたので、島司モンゴルはその退治策を議する。すると土地の人々は、これは教導寺の天主道人の法力でないと退治されぬといふ。この道人は仙術を得た老僧である。モンゴルは、然らばといふので、ガラバスに命じて道人を迎へさせる。道人はガラバスの心樣ねぢけてゐるのを知つて會はない。それとも知らぬガラバスは己が權力を誇る餘り、教導寺の怪塔石星塔を部下に崩させる。さうすると一大音響と共に怪星が四方に奔り去る。（これは水滸傳にそつくり）、一大英雄が起つて天下を亂す徵がこゝに見えたのである。

こちらはナポレオン、一夜病氣でねてゐたが、夢に神童が現れ、珠を口に押入れてくれるかと思ふと病氣が治つた。それで兩親に告げて、教導寺へお禮參りに出かけると、その不在にガラバスの手下が襲つて來て、兩親を殺す。ナポレオンはそこに歸り合せたので直ちに兩親の仇を酬ひはしたが、却つて親殺しの疑ひをうけて、捕はれの身となる。（これも水滸傳、武松の成行と似てゐる）、ナポレオンは母モカアルの臨終の期に始めて自分がこの夫婦の實子ではなく、コルシカ島アヤシヲの鄕士カルロボナパルテとマリアラチ・アラモリニとの間の子だが、父は叛逆の嫌疑でパリスに引かれたので、ひそかに出入のリユス夫婦に次男ナポレオンを托して養はせたものだと知つて、慨然として大志を起した。以上で刊本の三編まではある。

これより先島司モンゴルはアフリヤ山の妖怪退治につき、パリスへ出かけた。すると、夢に天主道人が現れてあれは劫を經た蝦蟇の化物だが、自分は僧侶の身で生あるものを殺すことは出來ぬ。これはコルシカ島の英雄た

るナポレオンに退治させよと告げる。モンゴルは奇異の思ひをなし、早速國王にその旨奏上して島に歸らうとすると、途中暴風に逢つて生死も知れなくなる。ところが、モンゴルの不在中に、ガラバスは吟味役のプリインといふものに賄賂をやつてナポレオンの審問を自分の都合のいゝやうに結着させ、死刑と定めてしまふ。だが刑場で天主道人が大鷲に化して、ナポレオンを助ける。(この邊は「兒雷也」にそつくり)これが第四編の終りである。

此の趣向を追ふて行けば、これからナポレオンが世に出るまでは大變な事件が續くわけだが、何ういふものか四編で終つた上、三編までより刊行されなかつた。これは今一方の『西洋道中膝栗毛』などが當つたので、かういふものを續けてゐられなくなつた爲めか、それともかういふインチキ物語りではもう讀者が滿足しなくなつてゐた爲めか、恐らくはその何れでもあつたらう。

外來種の戲作ものとしては、なほ「格蘭氏傳倭文賞」(明治十二年、魯文作)があり、これについても語らうと考へてゐたが、然しこの方は單にグランドの傳記を小說風にしたゞけで、格別のこともない上、あまり長くなつてはと思ひ直して、これで一先づ打ち止めとした。何うも種々な不明の點が多く、調べも行屆かず、人前で話になるものではないが、これが機緣になつて此の邊の文學が今少し注意をひくやうになつてくれたらと、たゞそればかりをこひ願ふ次第である。(昭和八・四・十二)(昭和八年七月一日「外來語研究」第三輯所載)。

ドストイエフスキイの日本傳來について

一　想像と推測

露語が日本に傳來されたのは、正確には何時の年かわからないが、年表では大體文化十年（一八一三年）ごろ譯官馬場佐十郎が渡來の露國人に就いて學んだあたりが最初となつてゐる。此の年から明治維新まで約五六十年の年月が經つてゐることであり、この間露國との接觸も多少も多少とも繰返されてゐたわけであるから、露語の研究も多少の進歩のがあつたらうし、これにつれて露國文學の知識が眞の少しでも入つたものと思ふ（現にピーター大帝の傳說など相當詳しく入つてゐる）。そこできういふ文學知識のうちに、ドストイエフスキイの名が雜つて傳來しなかつたか何うか、勿論今日では文獻的にこれを確めることは不可能ではあるが、全く有り得ぬことでもあるまい。その頃の露國は何分敎育の普及しない讀書人の少ない國らしかつたから、適々日本へ渡來するやうな冒險者達に、ツルゲーネフ、トルストイ、ドストイエフスキイなどを讀んでゐるやうな氣の利いた人間がゐたらうとは思はれぬといへば、それまでゞあるが、何うも此の頃露語露文研究家の間に名前ぐらゐは傳はつてゐたのではなからうかといふ氣がしてならない。

かういふと途方もないと笑はれるかも知れないが、最近明治文化研究から溯つて幕末文化も種々研究され、その結果實に案外だと思はれるやうな發見が續々ある。私自身に不幸にして露文露語が殆んど讀めぬので、露語の

日本傳來を辿るだけの力がないが、若しその道の人が本氣で調べ出したら案外いろいろな掘出しものがあると思ふ。その意味でかゝる露國文學の名も、意想外に早く傳來してゐないとは限らない。

但しドストイエフスキイの名が維新前に傳來してゐたにしても、作物は恐らく維新後までは日本人の間に傳來しなかつたものであらう。これは人の名といふ如き形のないものと違つて、書物といふ形のあるものであるから今のところ維新前の傳來は先づないものと信じて可いらしい。

二　明治初期に於けるドストイエフスキイ

明治初期になると、半ば推測的ながら略ぼ文獻的にドストイエフスキイ傳來の徑路が辿られる。

その推測的にといふのは、十年以前のことであるが、僕は明治十年以前に於いて、ニコライ關係の露人の手によつて、何うしてもドストイエフスキイの作品の知識が斷片的にせよ日本へ傳來されたものと假定出來るやうな氣がする。或は露國本國からの新聞雜誌の評論紹介によるなり、或はよくある名文集、文章軌範流の拔抄本によるなりして、日本に傳來されたものと思ふ。然し今もいふ如くこゝまではまだ推測たるを免れない。

明治十年後に至つて漸く文獻的にドストイエフスキイの傳來を辿り得る。東京外國語學校の創立は明治十年以前にあるが、そのうちに露語科といふものが出來たのはいつごろか、いづれ明治十年以後間もなくであらう（或は最初からあつたものかも知れない）。然るに此の露語科なるものが、事實は露文學科で露國文學知識の移入の本源となるに至つたのである。而かもそれは全くその教科書と教師の文學趣味によるといふ。といふのは語學研究に

は文學書による方が、修辭その他文章の稽古等の點で便利であり、特に露國には文學が他の學問より進んでゐて立派な本といへば大抵文學書であつたので、學校の教科書にも自然文學が用ゐられたといふのである。教師としても明治十三四年までゐたアンドレー・コーレンコといふ露人や、それの後をうけたニコライ・グレイといふ來人などは何れも文學趣味に富んでゐて、生徒に盛に文學書を讀ませ又講義もしてきかせたといふ。これは日本に於ける露國文學研究の先達たる矢崎嵯峨の屋、二葉亭四迷などの實驗したところで、此の人々は主としてグレイの指導の下に、ツルゲーネフ、トルストイ、ドストイエフスキイの如き露國文壇の大家の作に親むことが出來た。然し此の三大家の中で比較的名も知られ、作物も早く紹介されたのはツルゲーネフであり、次はトルストイであり、ドストイエフスキイが最も遲かつた。(單に早い點でいへば明治十六年刊のプーシュキン「花心蝶思錄」がある。これは「大尉の娘」の梗概譯である)。ツルゲーネフが比較的名を多く知られてゐたのは、譯があるので、當時自由民權運動の盛んな時で、露國虛無黨の活動が若い日本人の注意を大に惹いたものである。然るに此の虛無黨即ち虛無主義者(ニヒリスト)といふ語がツルゲーネフの『父と子』に出てゐるので、認識不足な當時の讀書子はツルゲーネフを虛無黨の元祖位ひに勘違ひしたものらしい。それで彼等はツルゲーネフの名に大に興味をもつたといふわけである。

ドストイエフスキイは、矢崎氏、二葉亭などは勿論明治二十年以前に讀んでゐたらしい、さうしてこの作は『罪と罰』が矢張り最初に讀まれたものらしい。これについては、甚少ながら文獻的根據がある。

三　ドストイエフスキイ紹介者內田不知庵

明治二十年十月二十四日の時事新報に、露國小說の流行と題して、歐米に露國小說が非常な勢で流行してゐることを述べた記事があるが、この前後から露國文物の外國語譯が盛に出て來たのが、その一因であらう。その結果がわが國にも影響して、遂に明治二十二年の春、英譯の『罪と罰』が日本に傳來して來、それが內田不知庵(後に魯庵)の手に入つて、ドストイエフスキイ傳來に一新紀元をつくることになつた。

內田氏がドストイエフスキイを知つたのは、二葉亭と知り合ふ前である。然かも尾崎紅葉の口から聞いたといふに至つては、甚だ面白い。紅葉は、又それを矢崎氏から聞いたので、物はドストイエフスキイの『罪と罰』であつた。內田氏は、ド氏のこの作のうはさと共に、その英譯の丸善に來てゐることを知り、早速馳せつけて手に入れた。然し內田氏も最初は單なる好奇心から買入れたものらしく、暫時讀みもしなかつたらしいが、その年(二十二年の)夏、富士の裾野に遊んだ時、他に讀むものがなくなつたので、澁々これを讀み出したところ、忽ちドストイエフスキイに魅了され、三日二夜を徹して讀了して、深くドストイエフスキイの藝術の偉大深酷なのにうたれた。氏はその時の印象を、「恰も曠野に落雷に會ふて眼眩めき耳聾ひたる如き、今までに曾て覺えない甚深の感動を與へられた……それ以來私の小說に對する考へが一變して了つた」云々といつてゐる。內田氏は、感服のあまり、此の偉大な藝術を同時代の日本人に紹介しようと欲したが、思ひきつて譯筆をとる自信もなく、又譯出しても理解されるか何うかも分らなかつたので、これを飜案して一小說をものさうといふ案を立てさへした(然し完成されなかつたといふ)。翌二十三年春、氏は同じく英譯で『虐げられし人々』(坪內先生の贈物といふ)を讀んで又別樣の大きな感激を經驗した。

内田氏と同じ頃、内田氏とは全然何の連絡もなくドストイエフスキイの作物を讀み始めた人に高安月郊氏がある。高安氏も内田氏と並んでドストイエフスキイの日本傳來には忘るべからざる一人である。明治二十五年十一月内田氏は遂に『罪と罰』を譯出して刊行した。それには二葉亭の並々ならぬ努力が加はつてゐるといふ。蓋しこれが日本に於けるドストイエフスキイの作物を飜譯した最初である。然し同年だがこれより數ケ月前に、既に此の小説を紹介したものがある。それは國會新聞（二十五年五月二十七日）に出たもので、「ドストイエフスキイの罪書」と題する、筆者は松原二十三階堂主人である。二十三階堂の自ら語るところによると、彼はこの梗概を二葉亭から聞き出したものであるらしい。これはあまり人のいはぬものであるが、ドストイエフスキイの小説を紹介した最初の文獻ではあるまいかと思ふから、一寸擧げて置く。

此處に至つて、先づドストイエフスキイの傳來も先づ軌道にのつた形である。これ以後のことは標路を辿るにも格別面倒なこともないと思ふし、紙數も丁度つきたから、これを機會に明治二十五年をもつて打ち切つて置かう。（九・一・三一）（浪漫古典創刊號ドストイエフスキイ研究號所載、昭和九年四月一日）

明治新體詩の先驅

――西周の功績――

一

明治十五年の『新體詩抄』をもつて、明治新體詩の嚆矢とするのが、その方面の研究家の通説であり、從つてこの『抄』の編者たる外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の三氏は新體詩の創始者といふことになつてゐる。誰しも一應はこれに異論がない、況やその方面には素人といつても可い僕などは、異議をさしはさむどころではない。ところがこゝに一寸した發見めいた事實があり、明治新體詩の先驅を明治十五年から十二年まで繰上げなくてはならぬのではないか、と思はれるやうな形勢になつて來た。つまり人でいへば、外山、矢田部、井上諸氏から西周まで溯らなければならぬことになつて來たかと思はれる。

此の發見の由來はといふと、かういふ次第だ。この文章の公にされるころにはもう書店に出てゐるかも知れぬと思ふが、近々『西周哲學論文集』といつた書物が、さる大書肆から出版されることになつてゐる(その後昭和八年十月二十日刊行)。この書の編者麻生義輝氏については、世間的には知らぬ人が多いかも知れぬが、篤學稀に見る人で殊に幕末海外文化移入史の造詣には驚くべきものをもつてゐる。僕は偶然な事から知り合つて種々有益な示教を得てゐる。この『西周哲學論文集』は麻生氏が數年苦心の結晶であるが、これについて明治哲學界の大御

所たる井上哲次郎博士が序を書いて下すつた。ところでこの井上博士の序文が新體詩史上容易ならぬ文獻となるのである。

　この序文をこゝに引用することは、出來ないことではないが、それは出版書肆なり編者なり井上博士なりへの禮としてまだ控ふべきであると思ふからやめる。然し井上博士はこの序中で西周の學問的功績を種々のべられた後で、かういふ意味の一節を語つてゐられる。「自分達は明治十五年に新體詩抄といふものを出して新體詩の先驅といはれたが、西氏はこれより三年も早く明治十二年にすでに新體詩の試みをしてゐる。實に偉いものだ」云々さうして明治十一年刊の西周譯『心理學』（これはメンタル・フイロソフイといふので、今のサイコロジイの心理學とは少し違ふ）の中の、新體詩的試譯を引用しさへしてゐる。僕は麻生氏の許で井上氏の序文を一見して驚いたのである。これは容易ならぬ參考文獻だと思つたから、なほ麻生氏にかう訊ねてみた。「何うでせう、これは井上先生は西周を模倣したのだといふ意を意外に含ませてあるやうに受けとれますが」、すると麻生氏は「さうです。自分は井上先生にその點を質ねたら、先生は意識的には兎もかく潜在意識には勿論西周のやつたことがあつたに違ひないといつて、模倣説を否定されなかつたのです」と答へられた。これは、この序文の文獻的價値を要求するものといはなければならない。僕は益々驚いたのである。

　西周譯『心理學』の本は僕も一本藏してあるが、然しまさか中にさういふ貴重な文學知識が混入してゐるとも思はなかつたので、別に今迄に讀んだこともなかつた。それで麻生氏から種々な教示をうけてから、歸宅して早速『心理學』を引出して始めから叮嚀に探して行つた。すると、下卷（十二年刊）第二編第二章「美案章第」七四

頁（再版にて）に至つて、井上博士の引用した新體時的試譯詩句を發見した。曰く

劍ヲ杖ニ。松蔭ノ。巖撲ヘテ、吐息ツク。時哉見ニル。若武者ハ。是ハ抑軍ノ。使カヤ。見レハ衣ノ。美麗サ
新郎カトモ。訝マタル。其鬚髯ノ、新剃ハ。秋田ヲ刈レル。刈稻ノ。齊ヘル様ニ。サモ似タリ。近ヅク儘ニ。
馨フ香ハソモ。時款貨舗ノ。娘カモ。指ニ挾メル。香盒ノ。何爲ナリヤ。時々ニ。鼻ニ翳シテ。嗅クメルハ

殊に興あるは、此の詩句がシエークスピアから出てゐるといふことである。これは「ヘンリ四世」第一部第一幕第三場の句である。これを知つて。僕は實は三度驚いた。

詩句はこれだけであるが、もうこれだけでも、立派に新體詩の先驅といつて可い。殊に先驅者中の先驅者たる井上博士が、却つて先驅的功名をほめられたといふのであれば、もう立派な折紙である。自分の仕事はたゞそれを報告したゞけで終つたやうなものだ、とさう僕は考へたが、然し何うでかういふ本は人もさう知らんのだからと思つて、此の本の中に何れだけの西洋文學の知識があるか一つ虱つぶしに調べて見やうと思つた。それが即ち次の結果となつた。

二

中村正直の『西國立志編』や『西洋品行論』が西洋文學の知識を可成りにもつてゐるやうに、西周譯の『心理學』も、その點は可成り豐富なものである。元來精神哲學なるメンタル・フィロソフィだけに、中に美學的研究の一項目があることは勿論であるとし、詩人文人の名、傳記的斷片、詩句が方々に相當多く織り込まれてゐる。今その主なるものを順序よく拾ひ上げて行くと大體次の如くである。先づ上卷第一部第一篇第五章（九六頁）にミ

ルトンの詩句がある。

四時如レ環往復回　此日一去不二再來一
春花之朝秋月夕　推移如レ流吾已哉

同第二部第二篇第二章（二一八頁）にホーマアの紹介がある。同第五章（二三〇頁）には伊甲帝國の名が見え、同頁から次頁へかけてミルトンの「極樂失亡」についての記事がある。同第七章（二三八頁）にはホメロル（ヲナーロル）の紹介がある。二五二頁にシエークスピヤ、ミルトン等の名が見える。かういふ風にペトラーク、カウパア、ドクインシイ等事實の斷片は無數あるが、然し讀者も煩雜であらうから、それは止めて、以下は譯された詩句だけにして置きたい。

アーケンサイド（上、五百十一頁）

何物是雅趣　勢力內部具
活潑且勇壯　逢レ物則傾注

ミルトン「イルペンセロソ」（下、三十二頁）

穆彼天女　幾聚維神　如レ慈如レ愛　靜閑嚴淑　深思沈默　敬虔眞純　淸宴[illegible]　[illegible]　[illegible]
花後如レ雲　斯伯魯亭　[illegible]　客兮納レ領　悵兮垂レ眉　[illegible]　[illegible]　[illegible]　[illegible]
仰レ天而立　欲レ有レ所レ言　眼睛入定　維是爾魂

シエークスピヤ、「シイザー」中の一節と思はるゝもの（下、六十二頁）

安也好二戲樂一　終日事二舞踏一
甲也不レ好レ戲　又不レ知二音調一
生平肯二笑謔一　笑則耀二其傲一
冷笑疑二其嘲一　大噱訝二其諂一
嗟此無情子　何事能堪レ笑

詩句中安ハ安敦ヲ指シ甲ハ甲側斯ヲ指ス云々

カウリーの詩句（下、二百二十九頁）

軀ハ朽チ魂ハ消ヌル後ノ世ニ遺ルハ何ゾヤ名テフ一文字
該撒ノ勳耀ク羅馬國四文字ノ假名ニ光遺シテ

不署名の詩句（下、二百三十九頁）

神乙女振リ榮ヘ翻ヘス羽衣ハ見エヌ隈ナシ陸モ海路モ

同人の詩句といふ（同頁）

狂婦何事罵二疾風一　吹二去片帆一杳靄中
良人一去無二音信一　謾使下吾儂歎中飛蓬上
孤衾半夜眠不レ得　浪間空見月上レ東
海鳥夢驚飛鳴去　汪洋無際水連レ空

噫狂婦夜々岸頭火　添ニ將柴薪一待ニ歸舸一
舸不レ歸兮舸不レ歸　悔恨滿レ胸淚交墮
猶有ニ寸心消不レ得　獨對ニ蒼冥一終宵坐

以上の譯詩をよんで一寸考へさせられたことだが、以上の譯詩の體を考へてみると大體三種である。漢詩體のもの、和歌體のもの、今樣體卽ち新體詩體の七五調のもの、これである。丁度明治の初期の小說が、雅俗折衷文に一時落つくまでは、漢文、漢文よみ下し、草双紙風體などの樣々な文體を經驗したやうに、新體詩もあの體になるまではやはり、漢詩、和歌などの體をも試驗的に借用してみたことがあるといふことは注目すべき事實でもあり、又當然のことではあるまいか、かうして新體詩は時代の新しい感情をうたふために生れたとしても、その體はやはり傳統的に舊文學につながつてゐるやうに思はれる。詩の體をまで新しくするには更に更に長い革命を得なければならなかつたのであらう。

これは然し新體詩研究家の問題である。僕としては、當面の主意は、西周譯の『心理學』には種々貴重な西洋文學の知識が入つてゐるといふことを報告しさへすればそれで可いのである。

それにしても、明治初期の文學界に與へた西周の足跡は、吾々の今迄考へてゐた以上に大なるものであつたらしい。詳しい硏究はこれからであらうが、然しお互ひに著眼だけはして行きたい。僕はこの頃になつて明治文化明治文學の無盡藏なることをつくづく感心してゐる。實際無盡藏なのだ。もうこの邊で硏究も一段落であらうなどと考へてゐると、何處からともなく意外な資料がヒョコリと出て來て、今迄の硏究の不備を示す。全くそれ

を取入れる、これでいゝと思つてゐると、又新しい資料が出るといふわけ、全くニュートン先生ではないが「眞理の大海」の岸邊で砂を拾ふ如しだ。(八・一一・六)(昭和八年十二月、書物展望第三卷第十二號)

傳記篇

『暴夜物語』譯者　永峯秀樹

一

永峯秀樹(ながみねひでき)氏は、甲斐の國北巨摩郡淺尾新田の人である。嘉永元年六月朔日の生れといふ。本姓は小野氏、父小野通仙は蘭方の流を汲んだ土地の醫師であつた。長兄は小仙、次兄は寛、二人とも、有名な蘭方醫戸塚文海の弟子、三兄民也(たみや)は、これも有名な京都の醫師廣瀬元恭の弟子であつた。

秀樹氏は通仙の末子であつた。通仙から「いろは」だけは教はつたが、寺小屋には全く行つたことがなく、家で兄小仙の筆寫に成る三字經を習はされた、これが學問の始めであつたといふ。

八歳のとき甲府へ出て來た、それは父通仙が、その暫時前から、淺尾新田の方は小仙に任せ、自身は甲府に出て開業してゐたからである。此の時まで、秀樹氏は兄の家で子守りなどをしながら頻りに勉強してゐたが、それではならんといふので、いよいよ甲府に呼びよせられ、官立の徽典館といふ學校に入つた。その時最初から四書を無點本で讀まされたことが強い印象を殘してゐるといふ。四書から五經へ移つたが、その頃から軍書、本紀物などを盛に渉獵し始めた。五經も面白いので、詩經あたりから師力をからず自分で讀んでたうとう卒業した。

十八九までには詩文も可成り達者になり、何時の詩會文會に出ても、まう人にひけをとらなかつた。會讀、殊に歷史物のそれが上手なことは有名であつたが、それは軍書の知識が豐富なので當然のことであつた。

かうして十九歳まで甲府にゐたが、此の年の春甲府を出て京都に遊んだ。

はじめ父通仙は、秀樹氏が十五六の時に、よくかういつて聞かした、お前は二十になるまでは養つてやる、二十になつたら獨立せよと。そこで秀樹氏は十八歳の年の暮に密かに決心するところがあつた、此のまゝ二十までゐたところがあと二年だ、いつそ飛び出すなら一年も早い方が可いと。

此の頃の秀樹氏は血氣の時代ではあり、當時の空氣が空氣であるので、一廉の少年志士を氣取つてゐた。文學が相當出來たばかりでなく、劍道の方にも可成りの素養があつた。秀樹氏が十五歳の時、史記の項羽本紀に感じ先づ一人の敵を學ばんといふ志を起した、さうして土地の土橋某（後森某といふ）について劍を學んだ。少年時から背が高く力が強くてよく力試しなどをやつたこともある、竹筒に鐵棒を入れたものを振り廻して見たり、立樹を押し倒してみたり、いろいろやつた。それこれで、武道の方にも一人前の嗜みがあつたのである。

さて前のやうな決心を固めてゐた矢先、丁度徽典館の學頭内藤某氏が京都に行くことをきいた。秀樹氏は好機至れりとばかり、内藤氏に京都まで伴はれんことを乞ふた。そして内藤氏の承諾を得たので、勇んで甲府を離れた。丁度十九歳の年、即ち慶應二年の一月である。

かくて秀樹氏は江戸を通り、京都に向つたが、京都で何をしてゐたかわからない。恐らく普通の見聞と修業、その他に出でなかつたらう。だが此の年の秋チフスにかゝつて九死に一生を得た。はじめ友人がチフスにかゝつた。秀樹氏は醫家の子弟で多少心得もあるしするから、その友人を介抱してゐた、そのうちに自身感染したのである。それで三兒民也の師匠筋に當る廣瀨元恭の家で養生させてもらつた。此の元恭は醫師は醫師だが、たゞの

長袖ではなく、兵學操練も講ずるといふ豪傑であつたといふ。秀樹氏はまた恢復しきらぬうちに眼を使ひすぎたので、つひに近視眼になつてしまつた（然しずつと後まで氣附かずにゐた）。

慶應三年に秀樹氏は江戸に下つて來たが、その頃平山圖書頭（成信氏のち省斎）の朝鮮に使する議が幕閣にあつた。秀樹氏はそれを聞いて、朝鮮に遊びたい一心から傳手をもとめて平山氏の從者になつた。然し間もなくその議がやんで、朝鮮行の志は遂げられなかつた。

秀樹氏が小野姓をすてゝ永峯姓をついだのは此の前後のことで、それは平山氏の世話による。譜代の永峯良吉といふ人の株が空いてゐたので、從兄弟といふ名目で此の永峯氏の後取りに直つたのだといふ。それで爾後永峯氏を名乘つた。

平山氏には都合一年間ばかりも世話になつてゐた。その間に前のやうに、永峯氏をつぐことになつたが、翌慶應四年（明治元年）には同じ平山氏の世話で撤兵組（これをサッペイグミと讀むよし）に加へられた。秀樹氏のつもりでは、此の組には榎本その他洋行歸りの連中がゐるので、或は何かの手蔓で洋行でも出來はしなからうかといふにあつた、だが洋行どころか、調練も何もせぬ中に維新の騷動になり、秀樹氏も脱走組に加つて上總に走つた。

上總に走る前、撤兵組にゐるとき五人組で上書し、それが當局に尤もと採用されて、下役者に抜擢された。今でいへば下士官格といふところである。意見書といつても大したことはない、大體をいふと、此の時は慶喜公の東下後で、幕議は恭順謹愼を旨とすることになつてゐる。然るに撤兵組の宿營（今の撤兵銅像附近）の土塀に孔を穿つて銃砲をねらはしめてある。秀樹氏はこれを愚なりとする說を當へ出した。大方針は恭順と決しゐる、それが偏

をねらふとは矛盾も甚しいといふのである。秀樹氏の組にこれに同じた兵士が五人あつた、そこで秀樹氏が執筆者となり五人組の名で意見書を出した。やがて上司は秀樹氏を呼び出して、意見書の趣き、尤もの次第だと賞めた、が、どういふつもりか、序に官軍本營を偵察しては呉れまいかといふ。そこで秀樹氏は兎に角承知して引下り、家に歸つて田舍武士の風をして當時官軍の本營のある池上の本門寺に出かけたが、もともと近眼の上に江戸附近の地理は一向知らない氏のこと故、道に迷つたり彼是して一向本門寺の方に出ない、その間に夜が明けたのでそのまゝ復命したといふ珍談がある。此の意見書上申の結果、下役並に取立てられたことは今も述べた通りである。

脱走兵となつた秀樹氏は上總一宮藩に使者となつて行つて（同志三人と）、太政官日誌に名をのせられたり、その他一寸活動したらしいが、要するに大した事はなく、鹿島まで行つたときに引き戻されて江戸に歸つた。太政官日誌に名が出たので、甲府の親類から心配して教へてよこしたから、賊として何か罰があるかも知れないと待つてゐたが何の沙汰もなしに濟んだ。

二

王政維新となると同時に、徳川家の家臣の半數は靜岡へ移住した。同じ移住にも有祿移住と無祿移住とあつたが、秀樹氏は三人扶持もらつて有祿移住をした。さうして下役並の役付が今度は一生徒として沼津の兵學校に入學し、英語や數學やを本式に勉強し始めた。

だが英語の單語の教授だけで半年もかゝるといふ程度なので、學校の學科は思ひきり、これもフランス語を少

しやつた中川將行といふ友人を力に獨學でぐんぐん洋學研究を進めた。だから秀樹氏の英學は手ほどきこそ沼津の兵學校であるが、實は殆んど獨學であるといつてよい。力と賴むのは友人中川氏と『智環啓蒙』であつた、此の『啓蒙』をたよりに、自力で地理學初歩とか、さういつた書物をしきりに讀んだ。そのうち、どうやら力も出んでパーレイの萬國史を讀んだが、此の書によつて秀樹氏の世界觀が根柢から覆へされ、大に自覺するところがあつた。のみならず、秀樹氏の此の後の生涯の方針は此の一書によつて定まつたといつてよい、萬國史の一書は今日何人も顧みない位な通俗歴史入門書であるが、當時の秀樹氏にとつては全く聖書のやうな價値をもつてゐたのである。

それは何かといふと、簡單にいへば、秀樹氏はパーレイの萬國史によつて世界の大勢を如實に敎へられた事である。初め志士氣取りのまだ失せない秀樹氏は主家を倒した薩長を恨む心を和らげかね、機會もあらば國内に仇を構へようと念じてゐた。ところがパーレイをよんで世界の大勢を知ると、こんな精神ではならぬと心から悔ひた。亞細亞の他の諸國は東漸する西洋の勢力に抗しかね、皆その餌食になつてゐる、日本が獨立を失はずにゐるのは海國だからである。今の間に自分達青年がしつかりせぬと英國かアメリカに國を取られまいものでもない、それには海軍が第一に必要である、徒らに小憤にとらはれて、それを報復するために陸軍戰術を研究しようなどといふ精神ではならぬと悟つた。これは誠に秀樹氏の生涯の一轉機であつた。

そこで沼津の兵學校を退かうとしたが、修業生といふ名で若干公費をうけてゐたのでさう自由勝手に我儘が出來ない、だがとにかく色々にして沼津の方をやめ、明治四年の九月に同志五人と東京に出て來た。勿論學資の海

軍兵學校に入るためである。

五人で東京に出て來たが、折角目的にして來た海軍兵學校はもうその年は生徒の募集濟み、あとは來年でないと入れない。五人にはその一年間を支へる資力がない。そこで時の海軍兵學校長の赤松則良に泣きつくことにした、赤松氏は勿論舊幕人であり、且つ秀樹氏等は沼津を出るときに勝海舟から赤松氏宛の添書をもらつて來てゐたのである。その時赤松氏のいふには、慶應義塾は好い學校だから彼處に入ると國家有爲の人物になれると思ふが、然し學資がなくてはそれも出來まい、何うだ、いつそかうして見ないか、幸ひ兵學校に數學敎官の口が三つ空いてゐる、お前達五人のうち三人が敎官になつてみろ、その方が生徒からよりも早く士官になれるかも知れぬと。背に腹は代へられぬわけで、秀樹氏は赤松氏の勸誘に從つて、中川氏外一人と海軍兵學校の數學敎官となつた。生徒にならうとして出て來て先生になつたのだから面白い。當時草創時代の空氣がよくわかると思ふ。尤も沼津の兵學校は當時數學の點では喧しかつたので、秀樹氏もこゝで二三年も勉强したのだから相應の素養はあつたものと見てよい。

さていよいよ海軍兵學校の敎官として出勤したが、秀樹氏が何を敎へたら可いかと問ふと、係のものは近藤眞琴氏の譯した新版の幾何學書を出してこれを敎へてくれといふ。度學即ち幾何學は沼津で少しやつてゐるので全然素人ではないが、沼津でやつた方のはプラクチカル・ジオミトリであつて、ユークリッドではない、ところが近藤氏の譯はユークリッドの方である。これには流石の秀樹氏も弱つた。ところがだんだん近藤氏の譯書を見てゐるとその圖形などが何うも前に見たやうな氣がする、そこでよく考へてみるとそれがわかつた。秀樹氏がまだ

撒兵組の何かで江戸にゐたころ、古本屋で一冊の數學原書を見つけた、中を披いて見ると、よく分からぬが何か役に立ちさうに思はれる、それで一朱ばかり出して買取つて置いた。氣がついて筐底から此の原書を出してみると寸分ちがはぬ、近藤氏の原本と同じである、且つ何うしても原書の方がよくわかる。そこで秀樹氏は大に喜び安心して幾何學の教授を始めた。ところが當時幾何の先生などないので此の俄先生が大に名聲を揚げた。山本權兵衛伯などは此の頃氏から幾何を教はつた一人であるといふ。

秀樹氏はかうして教授しつゝ一面海軍士官に必要な學科を勉强し、つひに海軍少尉になつた。教授の方は幾何から轉じて航海術を教へることになつたが、丁度イギリス生れの外人教師が來たので、外人教師の助手となつて教授を手傳ふことになつた。ところが、外人教師は生徒にノートをきれいに書けと叱る、それは參觀人などに見せるつもりからである、ところが秀樹氏は、生徒のノートは元來が覺書で他人に見せることを主とすべきものではない、それ故必ずしもきれいに書かずともよいといふ主張である。それで間なくその外人教師と喧嘩をしたので、それが原因になつて航海士官にされ、軍艦に乗り組まされることになつた。

秀樹氏は、初めて軍艦にのつて横須賀まで行つた。同僚は海岸の景色を頻りにほめる、ところがその景色が秀樹氏には見えない、模糊たるものである、此の時まで自身の近視眼に氣がつかなかつたのである。それで歸つてから校長に申告して航海士官を辭さして貰ひ、文官教授として兵學校傳習科に教鞭をとることになつた。

此の時面白い話がある。秀樹氏が東京に上陸してから眼鏡屋をたづねて眼鏡をかけようと思つた、そして初めて近視眼の眼鏡をかけてみたところ、世界が急に生れ代つたやうに美しいものに見え出した。そこで秀樹氏がこれ

な呉れといつたら、眼鏡屋の主人は驚き呆れた顔をして、それは近眼の眼鏡だからお止しなさいといつて止めたといふ。

此の後の秀樹氏は三十年一日の如く海軍教授として終始した、兵學校が江田島に移ると矢張りそれについて移つた。かうして明治三十五年に及んだが、かねて後進に路をゆづる志のあつた秀樹氏は、此の年日英同盟の締結されたのを機として教職から引退した。

三

私が秀樹氏を訪ふたのは昭和二年九月二十四日で、吉野先生の御伴して出かけたのであつた、以上に述べた秀樹氏の傳記を御聞きすることが出來たのは全く吉野先生の御配慮によることで深謝にたへない。

此の時私は、秀樹氏の飜譯の談話も多少筆記してゐるので、それを斷片的だが左に記したい。

先づ秀樹氏が飜譯に着手したときの抱負は、先づ世界の様々な事を知らしめて日本人の島國的獨尊心を挫くにあつたといふ。

『暴夜物語（あらびやものがたり）』（二冊）の如きも、勿論此の目的から出てゐるので、異國異代の風俗習慣の一端を知らしめ當時の日本人を啓發するつもりから譯したのである。あれに用ひた原書はタウンセンド版といふ青色の小本（多分現在ウォールド・ライブラリ中に收められてゐる抄譯『アラビヤ夜話』がそれであらう、タウンセンド某の序があつたと記憶してゐる）であつた、秀樹氏は元來『アラビヤ夜話』は好きの山で、別に大形のレーン譯をもち出して見せて下さつた。秀樹氏の譯は勿論二冊より出なかつたといふ。

他に秀樹氏の譯で有名なものに、ギゾオの『歐洲文明史』がある、これは勿論英譯からやつたものである。
秀樹氏の譯書の最初のものはウォーカアの『富國論』（二册）といふ經濟學の書物であつた。
その他算術書、物理書、農學書まで譯してゐる、だが今はその題名も何も忘れてしまつたといふ、勿論手許に譯本などはない。農學書といふのは、或る書物の中に日本の人糞肥料のことが書かれてあるので、それに興味を覺えて飜譯したものであると。
それから「智氏家訓」及びその續編『家政要旨』（和二册）これは英國のロード・チェスタアフヒールドの『子に與ふる書翰』を譯したものである。教訓の仕方が如何にもあけすけで、人情の微に入り細に亘つてゐる點を面白いと思つたから譯したのであるといふ。
外に『代議政體』といふものがある、これはミルの『レプレゼンタチヴ・ガヴメント』の一節を抄譯したものであると記憶してゐる云々。（昭和二年十二月三日）
此の稿を書いてから二日、所用の歸途電車の中で吉野先生にお會ひした所「永峯さんは亡くなりましたね」と仰言られたので悵然とした。十二月三日といふから私が丁度此の稿をかきかけてゐた最中であらう。私はその新聞廣告を見なかつたのである。私共のお會ひしたときは大分老衰されて、腎臓を病んでから身體が自由にならぬ旨をこぼして居られたが、かう急に亡くなられるとは思はなかつた私共としては誠に好い折にお話を伺つて置いたものと思ふ。かくてこの稿は永峯氏に關する殆んど唯一の文獻となるかも知れない。現に亦、明治初期文化功勞者の一人たる永峯氏の逝去に對し、こゝに哀悼の意を表する。（十二月八日追記）

『花柳春話』譯者　織田純一郎傳

一

獨り飜譯文學研究の上からばかりではない、一般明治小說史上からいつても「飜譯王」森田思軒をして、文學の「趨向」を一變せしめたりと嘆ぜしめた『歐洲奇事花柳春話』の譯者たる織田純一郎の名は、文學史研究家からいささか輕視され看却され過ぎてゐるやの感がある。此の點からいへば、私など、第一に織田氏の傳記研究に着手してゐなければならぬのだが、他事に追はれてまだその實現を見ないのは、何ともお恥かしい次第である。私が先に「花柳春話」を解題紹介したところは（研究篇『明治初期の飜譯英國小說』參照）、織田氏の傳記的資料としては、殆んど何等の文獻もなく、僅に書物往來に出た石井研堂氏の記事と、雜誌英語青年の第四十卷第十一號に出た死去記事と位がその全部といつていゝものであつた。その後吉野博士主宰の「明治文化全集」の編輯に參加した時に織田氏の未亡人古都子刀自の現存を知り、刀自から種々示教を得たり、又京都の重久篤太郎氏から特殊な資料を頂いたり、自分でも多少調べ上げたりして、あの解題を書いたところに比べると、幾分詳しい傳記を發表が出來るやうに自信がついた。然しまだまだ十分なものとはいへないので、そこは今もいふ通り慚愧恐縮な次第だが、こゝでは目をつぶつて次善乃至次々善主義を取ることゝし、出づ分かつただけで未完稿を書いてみることにする。その十分なものは、諸君の高教を仰いで他日を期するといふことにして置く。

二

純一郎、織田氏、その舊姓は丹羽氏、だが、本姓は實に若松氏である。

一條家の諸大夫若松備前守永福の次男甲之助(いづれ諱は某といふのであらう)、これが三條家の諸大夫丹羽豐前守正庸の養子となつて丹羽氏を名乘り、純一郎と改めた。始め丹羽氏には出雲守正雄といふ養子があつたが、正雄は元治元年甲子七月十九日の變に「主君の御意を受け御國の爲めに勇ましく相はてし」(織田吉都子刀自談話原文)てしまつた。正雄には子がなかつたので、豐前守正庸は改めて親族の若松氏の次男を正雄の養弟にしたといふのである。ところが丹羽氏に後に實子が生れたので、純一郎は曾祖母方の姓織田氏を名乘つて分家するに至つた。

それで即ち織田純一郎である。若松甲之助―丹羽純一郎―織田純一郎、こゝの關係が少しやゝこしい。

純一郎の養兄たる丹羽出雲守正雄は「甲子殉難士傳」や「近世報國百人一首」([illegible])やにも見えてゐるが、甲子の變に死んだことは死んだに違ひないにしても、何も長州勢に加はつて蛤門に押寄せたわけではない、そこは未亡人の書簡原文が誤解されさうだから、他事ながら訂正して置く。正雄は江州馬淵村の人、佐々木氏、初名は聯、醫生であつたが、後に丹羽豐前守正庸の養子となつて出雲守正雄と改めたのである。三條黄門實美に重用され、いはゞ股肱の臣といふ格で、可成り國事にも奔走した。文久三年の七卿落の時には彼は實美に從つて長州に入つた。元治元年春、七卿の寃罪を歎訴するために京師に入らうとしたが、伏見で幕吏の手に捕へられ、そのまゝ六角の獄に投ぜられてゐた。ところが、七月十九日禁門の變で兵火が起り、それが六角の獄にも及びさうになつたので、幕吏は罪囚の處置に窮し、三十人程の志士を全部斬殺してしまつた。その中に正雄も入つてゐ

たのである。斬られた時年三十一といふ。

純一郎の生れたのは、嘉永四年五月二十二日、場所は當時若松氏の邸のあつた烏丸岡松町といふところ、今日では丁度同志社大學の構内になつてゐるといふ。

昭憲皇太后がまだ一條家の姫君で末君樣と申上げてゐたところ、若松備前守永福が御學問のお手ほどきをして差し上げたことがあつた。それで備前守の次男たる甲之助、即ち幼き純一郎も時々一條家へ上つては、末君樣の御學問のお相手を仰せつかる機會を得たといふ。

幼少時分の純一郎については、今のところ他に何等聞いてゐない。學問も實父以外に何人かに就いて學んだものと思ふが、誰に就いて學んだものか、國學か漢學か、何ういふ書物を愛讀したか(稗史小說の如きも好きだつたらしいが) その邊のことは一切未詳に屬する。たゞ聰明俊敏、眉目秀美な少年であつたらうと想像されるだけに止まる。

三

明治元年には純一郎は十八歲である。

此の年新政府の改組に當り、彼の主家たる三條實美は岩倉具視と並び維新の元勳として、議定を以て副總裁を兼ねるといふ重い位置に就いた。この時、三條家の諸大夫たる丹羽家、而も實美の股肱の臣として王事に死した丹羽正雄氏の養弟たる純一郎に何等かの論功行賞的恩典があつても不思議はない。即ち純一郎の留學、これだ。第一が東京昌平學校への留學、第二が高知致道館への留學、第三が遂に海外留學、この三度とも、純一郎は皆官

費で學問することが出來たのである。

純一郎の昌平校留學は、從來幕末ごろとされてゐたが、石井研堂氏の注意で『昌平遺響』を讀んでみて純一郎が昌平學校に學籍を於いたのが、明治二年春からであることを知り得た。此の後昌平學校に籍を置いた人々の中には磯部四郎、色川圀士、西德次郎、河島醇、山本權兵衞、長崎省吾、内藤素行（鳴雪）、村岡良弼、村上珍休、松田正久、北村快藏（透谷の父）、等がある。さうしてその中に主家三條實美の弟公恭もゐるが、勿論純一郎と同行したものであらう。この時の昌平學校は然し皇學が主で漢學が從といふものであつたので、純一郎も漢學と共に平田派などの神典とか日本の古典を讀まされたものらしい。然し教授が内紛ばかりしてゐて大した實益はなかつた。だが純一郎はこゝにはさう長く居らず、明治二年の中には、もう土佐高知なる藩學致道館に遊學したといふ。致道館は山内容堂が力を傾けて經營したもので、洋學校、醫學校等もあり、當時有數の學校であつたので、諸藩から遊學するものも少くなかつた。

純一郎は、致道館に何を學びに行つたか、恐らく漠然と出かけたものではなからう。私は何うも此の頃からして純一郎に洋行の志があり、洋學校で英語を勉強しようとかゝつたものではあるまいかと思ふ。さうして純一郎の洋行の希望は、恐らく主家たる三條實美の内諾位を得てゐたものではなからうか。

純一郎の高知滯在も恐らく一年位であらう。一年位洋行準備をした後で、太政官辨事から海外留學させる旨の命令が下つたのである。明治政府が正式に留學生を外國に派遣したのは、明治四年岩倉大使一行の外國に赴いた時だといふから、名は留學生といつても、たゞ費用を官から出して貰ふといふ位で、何をやれとも何を調べよと

もいふ義務を課されてゐない極寛大なものであつたらしい。

純一郎の留學に赴いた年時が、從來或は明治二年といはれ、明治三年といはれ、これを決定する材料がなかつたが、私は先年小泉三申氏の好意で同人諸氏と西園寺公の「歐羅巴紀遊」といふものを見たときに、初めて、純一郎が公と同行したことを知つた。卽ち明治三年庚午十二月三日横濱出發である。同行者には西園寺公の外に、南貞助、外山捨八、木村熊二、大儀見一郎など、何れも後に知名の人物となつた人ばかり、尾崎三良も亦同行したといふが、西園寺公の紀遊には尾崎の名が見えない。十二月二十八日サンフランシスコ着、十二月晦日に同地を發しワシントンに赴き、一行は明治四年一月十四日大統領(有名なるグラント將軍)に謁見してゐる。一月十六日ニューヨーク出帆、二十五日ロンドン着である。一行中外山、木村、大儀見等は米國に止まり、純一郎はロンドンに止まり、西園寺公は更に二月七日ロンドンを出發してパリに着いてゐる。

純一郎は暫時ロンドンで英語勉强や諸方見物に時間を費した後(靜岡藩の留學生freeze谷言成の『英行日誌』(稿本)を見ると明治四年六月十五日純一郎とロンドンで會面してゐる)、遂々北方スコットランドの首都エヂンバラに赴き、そこのエヂンバラ大學に入つて政法の學問を專攻した(未亡人書翰)。思ふに、近いオクスフォード、ケンブリッヂを選ばずして遠いエヂンバラに赴いたのは、入學資格の關係からであらう。かくて同大學を卒業して、明治七年一旦歸朝した。(これは政府の留學生引揚方針によつたものとも考へられる)。

純一郎が歸朝して幾ばくもなく、三條家の嗣子たる公恭(實美の令弟といふ、實美の實子公美が幼少だつたので公恭を家督にしたものといふ)が洋行することになり、その附人といふ格で純一郎は、七年十月再度英國に渡ることに

なつた。さうして純一郎自身は、今度ロンドンのテムプルバーで法律博士シャーウッド氏について勉強し、バリスタア・アトローの試驗に及第した。此の試驗は相當やかましいもので、英國人でも正式にこれに及第するのは、さう容易でないといふから、日本(殊に當時の英人からいへば半未開國たる)の遊學生でこれに及第するといふのは、並々ならぬ努力と學識を要する。當時の純一郎の滯英生活の一面がいかなるものであつたか、これで證明されるであらう。公恭は何を勉强したか、後に判事とかその他司法關係の官にあつたことを思ふと、これも亦法律を勉强したものであらう。

少々後になるが、彼と會つた英人マクドナルドの手記を讀むと、彼の敎養學識のことを大に賞讃して書いてあり、「やせぽちの身軀に不相應な大きな頭をしてゐて、日本人らしくない大きな眼をした、見るから聰明さうな人物」であつたと書いてある。かくて公恭と純一郎とは明治十年の冬歸朝した。

ところで、歸朝後の彼に關して一傳說がある。公恭は滯英中可成り遊蕩したものらしい、これに對してお附人純一郎は何ういふ態度をとつたものか、何うもこれをいゝことに益々煽ぎ立てゝ我先に遊んだとも考へられないが、さうかといつて面を犯して諫言したとも見えない。そこは若い者の純一郎ことであり、且つ彼自身の後年の遊蕩癖から見ても推察がつくが、要するに要領よくやつたのではなからうか。然し純一郎は監督職である。公恭に惡行があるとその責は彼の上に歸する。公恭は歸朝後、實美の不興を買つたといふ。同時に實美は純一郎に對して大に怒るところがあり、一生彼の官仕を禁止したといふ。これも三條實美に從つて長州落をしたことのある土方久元の如きは、大に純一郎の所爲を責め、汝男兒ならば切腹して罪を謝せといつたといふ。

かくて彼は丹羽家から去つて織田氏を名乘ると同時に、彼自身、意を官途に絶ち、著譯教授の業をもつて口を糊することにしたのである云々。

Maybe or not may be である。さうかも知れない、さうでないかも知れない。一切は證據のない傳説となつてゐる。織田家の件は實子が出生したからといふのが直接の原因であらうと思ふが(十二年度改姓)、純一郎の歸朝後の生涯が表面華やかでゐて何となく不遇めくところがあるのを考へると、恐らく何か此の傳説にいふ如き紛糾があつたとする方が眞實ではあるまいか。

而かもかういふ紛糾なり事情なりがそこにあつたといふことは、純一郎自身にとつては當時は甚だ芽出度からぬ出來事であつたに違ひないが、今日明治初期の文學なり文化なりの研究に寢と食を忘れる我等の如き連中にとつては、誠に有難いことであつた。それは、純一郎が畠違ひの『花柳春話』の譯筆を執るに至つたのは、かういふ事情があつたので、衣食の必要がさうさせたといはゞいへるからである。

もつとも純一郎自身はそんな事はおくびにも出さない、たゞ飜譯動機を「歸航の船中、無聊の餘りこれを讀んで見たら甚だ面白かつたから」とだけいつてゐることは、石井氏への談に明白なる通りである。

四

『花柳春話』については、既に詳しく語つてある。その次の『寄想春史』についても又然り。

準文學的著作としては『龍動新繁昌記』(明治十一年)、『佛國巴里斯新繁昌記』(同年、未完)等があるが、何れも當時都鄙に流行を極めてゐた『東京新繁昌記』(服部撫松著)を眞似た文體である。

純一郎が此等の英國小說を譯刊するや、文名が大に揚り、これ等を模倣する作物が續出する有樣であつて、從つて收入の方も潤澤であつたらしく、此の頃は盛に文人墨客連中(服部撫松の如き)と交際し、折花攀柳の遊びに耽ることが甚しく、風流才子を以て目され、諸方の花街では「黒繻縮」の先生と綽名されて、大にもてたものであるといふ(古都千朱亡人との情緣もこの際に成つたものといはれる)。これは聰明な彼として似つかはしくない脱線振りであるが、或は前記三條公一件に絡まる官仕禁止から來た自暴自棄的氣分も手傳つてゐたのかも知れない。

勿論純一郎の專門は政法の學であつたので、風流文學に耽る一方、別に警察官吏に請はれて刑法を講じたり、刑法の注釋書を著いたりした。(法律的著作は他にもまだあると思ふ)。

丁度此の頃は又民權自由論の勃興期に當つてゐたので、彼は又蘊蓄を傾けて數多の啓蒙的な民權論政治論を公にして相當歡迎された。それ等の一二を擧げると左の如きものがある。

「日本民權眞論」(明治十二年)

「通俗日本民權精理」(同　年)

「通俗日本國會論」(明治十三年)

これに續いて尙ほ數册の政治的啓蒙の著作がある。

「時弊論」(同　年)

「國勢論」(明治十五年)

「政治難易論」(明治十六年)

今右の諸書によつて純一郎の政治的意見を簡單に述べて見よう。

純一郎の大體の立場をいふと、勿論民權自由論贊成であるが、英國留學者の例に漏れず大體は英國的立憲政治を讃美して居り、總ての點で改進黨的政治思想を抱いてゐたらしい。然し彼はあくまで啓蒙者としての住地を離れず、具體的の國會請願運動や政黨運動にはさう熱心でなかつたらしい。さうして彼自身の政治的旗幟としては曖昧な中立主義をかざしてゐた(內心は兎もかくとして)。强て曖昧にしたといふのではなく、恐らく此の時代に比較して、純一郎の方が餘りに政治法制の專門的な知識をもち過ぎてゐたので、勢ひ當時の實際政治運動に對してさう熱心になれなかつた、それで獨り高く標置してゐるうちに、次第に取り殘された形になつたものと見て可からう。兎に角彼は若干の啓蒙的著作を公にしただけで、身を以て此の運動の指導者の位置につく如きことは考へても見なかつた。こゝに又、恐らく彼の當時の風流生活が祟つてゐはせぬかと、私は見てゐるのである。

彼の解釋によると、民權とは、下から强請するものではなくて、上から與へられるものである。具體的にいへば、日本人民の民權は正しくば日本の天子から與へられるものであり、人民が政府に迫つて擴張すべきものではない。成る程人間には天賦の權はある、然し國家といふものゝ中に生活してゐる以上は、天賦の權とて束縛があるのは當然である。民權論者はこれを第一に承認しなくてはならぬ。この點で彼の意見は、自由黨流のルソー的天賦人權論とは根本的に違つてゐた。又人民の側からいへば、民權の擴張は人民の實力によつて實現さるべきもので、實力なく自由勝手に出來るものではない。こゝでいふ實力とは智力と金力をいふ。此の二つの力が强くなると、政府といへどもそれを認めて、それに相當して權利を與へないわけに行かない。從つて人民の第一義務

は實力養成につとめることである。又政府としては、人民に約束した權利は當然與へるがいゝ、若し政府が約束を履行しなかつたら、人民はその時こそ大に政府を攻めていゝわけだ。例へば、單に西洋風の思想を楯に政府攻擊をするのはいかぬが、五ヶ條の御誓文を根據として民權擴張を唱へるのは、當然と見なくてはならぬ。又民權家を以て自任するものは、その主張を力強くするために、先づ品行を愼み、家庭を淸め、獨立の氣魄を養ひ、その上學問を博めなければならぬ。その學問も、先づ日本の學問を十分修めて洋學に及ぶことが肝心である。さもないと洋學を十分利用することが出來ぬかも知れぬ。かうして人民の實力が政府の力と均衡がとれるやうになると始めて眞の民權擴張が行はれるといふ。

彼は流石英國で勉强した丈けあつて、ミル流の自由の將へ方の根本たる束縛が自由の根元といふことを知つてゐて、それを說いた。（『日本民權眞論』の最後で「束縛ノ法立テ自主自由ノ權起ルコト」といふ一項を力說してある）。然しかういふ說は、當時の普通の自由論者からはあまり歡迎を受けなかつたと思ふ。

明治十二年十三年と進んで來ると、漠然たる自由民權の叫びが、國會論となつて來た。純一郞は如何にも先覺者らしく、早くも『通俗日本國會論』の一篇を公にして、日本には如何なる國會が適當してゐるかといふことを警告した。その根本はこれも主として英國流で、日本の國會は大體は英國議會を範とすべく、上下二院を設け、制限選擧に依り、議員に歲費を與ふることが必要だと說いた。憲法については、明白に國約といひきらぬものゝ、その所說を綜合して見ると、どうも國約憲法を可とする意見をもつてゐたらしい。此の國會の點では、純一郞は全く改進黨人士と同一意見であつたといつて可い。

その他、國會の歴史、國會の識能、國會議員の主義（公を先とし、私利に趨るべからず）、言論自由のこと等を諄々と說いてゐるが、今これを一々繰り返すまでもあるまい。

彼の自由な折衷調和の立場が最もよく現れてゐるのは、その著『通俗時弊論』である。當時の政治、法律、學問、交際等社會各般の現象について意見を述べたものであるが、概して、當時歐西崇拜の風が強いのを慨し、日本を知つて後に西洋を學ぶべきことを主張してゐる。

意見としては、大抵公正穩妥なもので、執るべきところが多かつたと思ふから、識者は感心したと思ふが、大衆を說得するには、大聲疾呼しなくてはならなかつた。ところが純一郎には、さういふ大聲疾呼、野に叫ぶといつたやうな熱がもち合さなかつた。雅醇な紳士ではあり得ても、凛々とした氣骨の見るべきものがない、鬪志がない。それで折角の卓說も罷弱なものになつてしまふ。これが思つた程強い反響を生じなかつた所以であらう。

五

明治十六年、純一郎は、服部誠一、湯目補隆、山田喜之助、漆間眞學等と共同出版會社を起して、主として歴史政治經濟等飜譯書の出版に當つたが、餘り結果が思はしくなかつたらしい。（事業も中絕）。十七年、東京を去つて京都に赴き、七月京都滋賀新報に入社して始めて新聞記者生活に入つた。（十七年十月京都滋賀新報は、中外電報と改題）。彼はかくて筆陣を張る傍ら、京都府會議員に選擧されて、實際政治にも參與した（後參事會員を兼ねる）。又十八年四月の日出新聞の創刊に當つては大に盡力したものである。

此の年十二月、彼は中外電報を去り、（大阪）朝日新聞に主筆として迎へられた。彼は編輯を主宰する傍ら廢絕

してゐた論說欄を再興して例の中立主義から時人の啓發に盡力した。

二十一年五月第三回の洋行、これは朝日新聞から同社の擴張に資すべく、特に歐米新聞事業視察として赴いたものである。これが日本の新聞社で記者を歐米視察に特派した最初であつた。この行、彼はかねて知遇を得てゐた陸奧宗光が駐米全權公使として赴任するのと同船したので、いかにも得意らしく思はれた。同年十一月末歸朝。

歸朝後間もなく二十二年一月五日、朝日新聞社は別働隊の大新聞「大阪公論」を發行して彼の主筆に委ねた。さうして西村天囚、竹越三叉、上野岩太郎、西河通徹、中川澄、津田純一等が彼の下で働いた。これは同社が前年十月東京で發刊してゐた「東京公論」と東西相呼應するもので、別な意味で政治氣分が濃厚となつて來た時代の風潮に順應し、自由黨派の大新聞「東雲新聞」に對抗することを目的としたもので、政治上の立場としては中立を標傍とした(『本山彥一翁傳』二二三頁參照)。東西公論の發刊は恐らく純一郎の建議に成るものであつたらう。

だが折角意氣込んで着手した此の新計畫も、純一郎に經營の實才が無かつた爲めか、新聞全體が餘りに理想に奔り過ぎた爲めか、それとも何等か事情があつたものか半年で退き(大阪公論は二十三年五月廢刊)、單に朝日新聞の通信員として東京に出張することになつた。これが二十四年に及んだが、その年十一月に至つて朝日を退社し、自分で主筆兼社長として、「寸鐵」新聞を發行した。これは萬事彼の親分視されてゐた陸奧宗光が後援したものといふことであつた。

六

こゝで純一郎の翻譯小說『いさ子』のことを語つて置かう。

『いさ子姫』は明治二十一年の洋行のお土産である。原本はヘンリ・ウッド女史の『イースト・リン』(East Lynn)で、純一郎はその一八八八年十月に出たばかりのものを買つて來た、さうしてそれの面白さを『花柳春話』の出版者坂上半七に話したところ、『花柳春話』で味をしめてゐた坂上は是非それを譯してくれといふので、譯筆をとつたといふことになつてゐる。譯書は全六卷に分冊されて刊行され、第一卷は二十二年十月、第二十三年一月、第三卷は二十三年六月、第四卷以下これに準じてそれぞれ刊行されたと思ふが、今私の手許にあるのは第四卷以下六卷迄が合本されたものであるから、各卷の刊行年月日は正確には知り難い。合本は二十六年五月の出版である。合本は上下二冊で出たものらしいが、上卷も同じく二十六年であらう。

これに就ても既に略ぼ語つては置いたが、此の小説の原作は通俗小説として有名なものであり、『谷間の姫百合』の原本たるバァサ・クレイ女史の『ドラ・ソーン』(Dora Thorn)を凌ぐ程の人氣のあつたものであり、譯文としてく少くとも當然『谷間の姫百合』と併稱されて然るべきものであるのに、『谷間の姫百合』の有名である割合に、『いさ子』を稱する人々が少ないから、追補的に語り加へて置かう。

譯文の態度は、『花柳春話』、『寄想春史』と違ひ、出來るだけ原文に卽した直譯的のもので、地は文章體だが會話は言文一致體である。こゝにも此の十年間の文運推移の跡が明瞭に出てゐる。篇中の人名その他は、『谷間の姫百合』その他の如く、日本風に引直してあるが、これは讀者の爲めといふ點からは兎もかくも、飜譯としては面白くない。殊に此の種の比較的眞面目なものに於てはなほ更然りである。なほ譯文の調子は、前半は割合によく出來てゐるが、後半、殊に終の方に近づくに從つて直譯に失し往々何の意か把握に苦むところがあり、果して同

じ純一郎の譯文かと疑はしめる。思ふに、此の頃は純一郎は、政海の激變につれて可成り多忙であつたといふから、その爲め十分推敲することが出來なかつたのかも知れない。

此の小說は何ういふものかといふと、譯者純一郎は、敍文の中でかういつてゐる、――

其結構主として一女子の運命に係るものなりと雖も、國會議員の選擧、裁判所の公判、貴族の驕奢、細民の貧困、兇徒の奸策、無辜の寃罪、男子の愛情等、列敍する所廣大にして、而して人情の微を穿ち、世態の奧を闡はすに至つては、實に人の意外に出で、且文章巧妙、言語の艶麗なる、近世稀に見る所なり。云々

本筋は普通の（やゝ大衆的な）人情小說であるが、純一郎の心算では幾分かこれに政治的時事的意味を與へようとしてゐるらしいところが、以上の引用を一讀しても分明であらう。

先づ主な人物をいへば、マウント・セヴァン伯（山の井伯）の姬君レデイ・イザベル（いさ子姬）、辯護士アーチボールド・カーライル（河原秋信）、陸軍中尉チャールズ・レヴイソン（鶴崎時之助）、この三人である。いさ子姬は鶴崎中尉に心を動かしてゐたが、鶴崎は山の井家の財產に目をつけてゐたので、山の井伯の沒後、邸宅が人手に渡るまでに零落したのを見て、もう姬と婚する意志がなくなつてゐる。姬は鶴崎の心志がわかつたので、彼をいやしみ、河原秋信の妻となる。かくて數年の幸福な生活がつゞき、二人の子の母となる。ところが、日頃親交ある判事ジョン・ヘヤー（檜山）の子リチャード（律彌）が殺人の嫌疑で逃げかくれてゐるのを見るに見かね、秋信は、律彌の姉のバーバラ（花子）といふのと密々に助命に奔走する。花子はかねてから秋信に熱烈な愛を抱いてゐる女性であつた。それが端なく、いさ子姬の嫉妬を招く（且つ秋信の姉と仲も惡い）。これを見たのが好色漢鶴崎で、姬の

嫉妬を利用して自分との舊情をあたゝめるやう仕向け、遂に姫とフランスへ駈け落ちしてしまふ。秋信はいさ子姫が何故逃げたか眞の理由がわからぬので、暫時待つてみるが、いよいよ鶴崎と駈落したといふことがわかるので、いさ子姫を離婚して、人々のすゝめで花子を娶る。ところが、鶴崎は、いさ子との間に子が生れる頃にはもういさ子姫に倦きてゐた。折も折、鶴崎の叔父某が死去して財産が鶴崎の手に轉がつて來たので、これ幸ひと、いさ子姫に愛想づかしをして英國に歸る。いさ子姫は鶴崎との間に出來た不義の子と共に暫時フランスに殘つてゐたが、次第に生活に窮して來るので、英國に歸つて方法をつけようとし、隱家を出る。だが途中汽車の衝突で自身は大怪我を負ひ、子は死ぬ。漸く生命だけ助かつた姫は、見るかげもない姿で故郷に歸る、さうして秋信と花子との關係が自分の誤解だつたと知り、何とかして罪の償ひをしたいと思ふ。丁度その時秋信と自分の間に生れた子が病氣になつて人手がいると聞き、子の愛にひかされて、變名變裝して乳母に住み込み、獻身的に働く、かくてその病兒が死ぬが、いさ子姫も長い無理な生活のたゝりで病氣となつて死ぬ。死際に秋信に一切を懺悔して、赦される。（鶴崎は、後にこれこそ殺人犯人だと分かり、處刑される。）

この小説は確か、伊原青々園氏が飜案して『子煩惱』と題して、大に受けたことがあるやうに思ふ。

文例は略す。

七

『いさ子』のことを語つたついでに、その前に出た純一郎の創作小説のことを語ることにしよう。それは、『政治家社會』といふ政治小説と、『大阪紳士』といふ諷刺小説である。共に明治二十年に出てゐる。『大阪紳士』（二

十年三月刊)には行幸奇事といふ角書がある。この年一月、明治天皇は昭憲皇后と共に、孝明天皇三十年祭を執行はせられるため京都へ行幸になり、その序に大阪にお立寄になつた。その時大阪では両陛下歡迎熱が甚だ盛んであつたが、それが少々程度を過して、或は小學女生徒に皆洋服を着ると命じてみたり、學校を休んで奉迎の稽古ばかりをさせたり、いろいろ非常識な事があつた、純一郎はそれを目撃して、大阪人士に平生の訓練を警告するところあらんが爲めに此の小説を書いたものといふ。これは何も梗概を擧げてまでいふ程の作ではないやうに思ふから、それは止めて置かう。

たゞ注意すべきは、此の小説の序文が一種の小説論になつてゐて、當時純一郎程度の智識階級が「小説」といふものを何う考へてゐたかを知るべきいゝ資料になる。

小説の目的は人情風俗を模寫するに在り而して其體二あり曰く實談曰く空談云々

といふもので、尾崎學堂の『雪中梅』序などと誠に似たものである。

『政治家社會』(二十年十月刊)、これは初編のみで終つたが、恐らく極めてアンビシャスな意圖の下に構想されたものであるらしいことは、ヂスレーリ(ビコンズフヒールド卿)の傑作『エンヂミオン』を模したといふ當自身の言葉でよくわかる。

時代は恐らく明治十八年の夏のころと見える、野には自由黨、帝政黨が解黨して、改進黨が獨り壁塁を保つてゐる、朝には太政大臣が廢されて新な内閣制に移らうといふ、丁度その時を覘んで發端としてゐる。尤も何しろ長篇の眞の發端だけであるから、取りとめて語るべき筋といふ如きものもない。そこは諒して頂きたい。

梅澤金吾は、英學に達し、政法の學に深く、文學の嗜みもあり、前途有爲の士であるが、今は根岸に隱棲して臥龍先生を學んでゐる。一日銀座に友人を尋ねたとき、改進俱樂部の幹事高畠某にあひ、俱樂部に伴はれて最近の政狀を種々談論する。憲法調査のため洋行中の山口俊正(恐らく伊藤博文のこと)が歸朝して廟堂の大改革が行はれようといふこと、民間でもこれを機に大に氣焰を揚げ頽勢を挽回しようといふことが、高畠とその友大内によつて唱へられる。梅澤は根岸の寓に歸る時、端なくも上野で惡漢に苦しめられてゐる佳人を救ふ、その時梅澤は指環を拾ふが渡すに及ばずして佳人を見失ふ。

幾くもなく梅澤の根岸の寓へ友人の新聞社長山地源吾が尋ねて來て、外務卿長門義助(恐らくは井上馨)が、梅澤の著した政治小說「袖の雫」を讀んでその識見と、公正な政治主義(中立である)に感心し、政府へ採用しようといふ旨をもらしたことを傳へる。梅澤は思ふ所があつて卽諾しない。

大臣藤村美明(三條實美公)はその向島の別莊に内閣諸官を會して、山口の歸朝も近づいたから、近々政府に一大改革の要がある、それについては先づ自分が職を辭さうと思ふといふ旨を話す。閣員一同、種々な理由を持出して辭職を思ひ止まらせようとするが、藤村はきかない。それで皆も萬止むを得ないといふことになる。

やがて山口は歸朝する。朝野を擧つて歡迎する中に只一人、此の歸朝を歡ばぬ人がある、それは佳人お玉だ。お玉はかねて山口から妾に望まれてゐたのだ(これが梅澤の助けた佳人で、後に梅澤と何か關係を生ずるのであらう)。

改進俱樂部では、此の際言論自由、地租輕減その他のスローガンを揭げて大々的示威演說會をやることに決し梅澤をも仲間に入れようとする。然し梅澤は、山口が何れ改革すると思ふからその改革の程度を見るまでは、と

いふので、仲間に入ることを辭す。

こゝで、此の初編が終つてゐる。政治家者流、學者仲間の小説の常として、テクニクその他の點でとゝのつて居らず、文詞も生硬であり、趣向も水滸傳や馬琴を眞似てゐることは、はつきり手に取るやう露出してゐるが、純一郎の小説創作熱を知る上に於て、又時代の知識階級間の政治小説熱を知る上に於て、又明白にヂスレーリに刺戟されたと斷言してゐる點に於て、又生きた政治現象を捉へて材料としようとした點に於て、研究家の一讀を煩はすべきものであらう。

八

「寸鐵」の發行は明治二十四年十一月二十一日、廢刊は翌年の二十五年十二月二日であるが、此の一年足らずの間が新聞記者としての純一郎の最も得意な時代であつたらしい。

此「寸鐵」新聞は織田主筆の外、陸奥宗光、中島信行、大江卓、岡崎邦輔、關直彥等が匿名で論説を書き、記者としては三木貞一（愛花）、村田誠治、山口松五郎、水谷乙次郎（幻花）、關巖一郎等が居、時事短評や小説の外、諷刺的狂畫の奇なものを續載してゐる。

といふのが、明治新聞研究の權威宮武外骨翁の言であるが、全く型破りの、氣のきいた小新聞であつた。今その立場を明示した社告の全文を左に掲げてみよう。

○我社新聞寸鐵は紙面狹小なりと雖ども、又無用の記事多からずと雖ども、其論ずる所は最も進歩せる理想的精神より溢出せる快論痛言、其記する所は確實神速、文章は簡明流暢、眞に是れ普讀家種の寶庫、世の鉗に觸

幅を廣大にし、塡むるに冗長無益の記事と偏頗古陋の學說とを以てするの愚に倣はず。
○我社新聞寸鐵は、政黨の機關に非ず、又世に謂ゆる御用新聞に非ず、權威に屈せず、世論に佞せず、不羈獨行、讜議直論、其言はんと欲する所を言ひ、其行かんと欲する所に行く、魔來らば魔を打ち、佛來らば佛を打ち、筆刄向ふ所、亂絲立ろに斷つ、寸鐵能く人を殺し、又能く人を活す、眞に是れ社會の殺人劍、又活人劍。
○我社新聞寸鐵は、十九世紀末の新主義に則、社會の道德を改良し、風俗の廢頽を矯正せんことを勉む、然りと雖ども、彼の阿世曲學の徒が、僻古の風教を名として、猥に人世の自由を拘禁するの迂を學ばず。
○我社新聞寸鐵は、其社友中多く當世知名の政治家、博士、學士、技術家、及び實業家を網羅す、故に政府の內幕、政黨の魂膽、學藝の蘊奥、實業社會の表裏利害等炳焉火を睹るが如く紙上に瞭々たるべし、然れども凡そ世の新聞雜誌が、讀者を欺瞞し去らんが爲め、其紙上に無數社友の姓名を併列し、羊頭を懸けて狗肉を賣るの陋を恥づ、故に殊更妄に社友の姓名を揭げず。
○我社新聞寸鐵は、時々前記社友の名論卓說を揭載す、是を以て讀者或は其文字の非凡絕倫、尋常記者の筆に非ざるを疑ふものあらん、然ども終に其筆者論客の何人たるを知る能はざるべし、是れ眞に明治のジュリヤンなり。
○我社新聞寸鐵は、營利を目的とせず、故に定價頗る低し、蓋し定價の低きは新聞紙其物の價格を高からしめんと欲するが故のみ。
以上恐らく純一郞の筆に成るものであらう。此の社告はたゞ「寸鐵」初號に出てゐるのみでなく、暫時の間每號

掲載されてゐる。明治のジュリヤン云々とあるが、これは恐らくジュニヤスの誤植で、例の有名な匿名「書簡」の著者たるジュニアスを指すものであらう。

この新聞で純一郎は、論説を書いてゐる外に、一種の暴露的政治小説とも見られる政界裏面の醜状を穿ち物語を幾つも續載してゐる。

「魔窟怪叢」
「田舎議員」
「請願征伐」
「黒怪議員」
「再選準備」

の如きものである。殊に「魔窟怪叢」の如きはJ・Nと署名してゐるが、これは純一郎の舊名丹羽純一郎の略稱であらう。その他何れも署名はないが、純一郎の手すさびたること、一讀して疑ふ餘地がない。他に「鶯濱はつね生」といふ名で

「十夢」

といふ政治小説を掲げてゐるが、純一郎の寓が根岸であつたのを考へ合せて、これも純一郎の作ではないかと思ふが、何うであらうか。此の「十夢」が一番纏つた政治小説らしい政治小説である。作者十夢に内閣總理大臣となり、當時の政治上の諸問題の理想的解決をしてみせることを書いた皮肉な面白いものである。

純一郎が餘りに政界暴露をやるので、「寸鐵」は二十五年二月と三月と二度停止を喰つてゐる、閣員陸奥宗光を親分としてゐるのに、尙ほ且つ二度引續いて停止を喰ふといふのは、よくせきのことだと思はれる。が、然し此の時は內閣が議會解散派と非解散派と二つに割れ、陸奥は後藤と共に非解散派であり、內務は解散派の大將品川彌次郎であつたから、陸奥の機關紙が品川からいぢめられたのも無理がないところである。

二十五年七月、松方內閣が更迭し、八月伊藤內閣成立したが、陸奥は入つて今度は外務大臣になつた、さうして「寸鐵」は此の年十二月二日遂に廢刊してゐる。この廢刊は陸奥の外相就任と連關せる事情があるかとも思ふが、飜つて思ふに、「寸鐵」發刊の目的が、品川その他の非立憲派に對抗する必要から來たものとせば、その目的を達した今日、最早や「寸鐵」の存在を必要としなくなつたとも見られるから、廢刊の事情をその邊から說明しても可いかも知れない。

九

「寸鐵」廢刊後の純一郎の傳記的事實については、私の知識が段々少なくなる。

此の後數年間、純一郎は新聞記者生活から足を洗つて、官省の囑託的位地を得て諸種の調査に從事してゐたものらしい。その詳細は分らぬが、明治二十六年には、農商務省に頻りに出入して何か省關係の調査に從事してゐる。又二十八年六月には、內務大臣野村靖の密命を受けて暹羅、安南地方の視察に出發してゐる。此等は何れも陸奥宗光の世話であらうと思はれる。

陸奥の死は明治三十年八月であるが、純一郎は、この後官省方面の關係が自然と斷れ、又もとの記者生活に舞

ひ戻つたものらしい。

爾後三十三年迄は、星亨、岡崎邦輔等と自由通信社を始め、文星の始めた東京政治學校に講師として關係した外、一切分明しない、神戸又新日報に主筆記者として働いたといふのが、この間のことではなからうかとも推されるが、或は朝日入社の前ともいふから、明白でない。明治三十三年に至つて、十月、板垣退助監督の下に、純一郎は若宮正音と協力して『社會新報』を發行した。純一郎はいはゆる社長といふ格で、三十四年四月まで編輯兼印刷人として署名してゐる。この新聞は、西郷從道、板垣退助等の首唱で出來た風俗改良會の機關であるが、事實は、風俗の改良といふよりも、社會改良、殊に貧民問題に力を入れたものであつた。これに從事した知名の操觚者としては坂崎紫瀾がある。純一郎は論說の外に、三十三年十一月十五日から、『苦勞』と題する英國小說を翻西漁史の號で譯載してゐる。

『社會新報』の廢刊は三十四年か三十五年か、よくは分からぬが、純一郎はその終まで在社してゐたか何うか。此の後の純一郎は漸次不遇不如意の境遇に落ちて行く一方であつたらしい。或る傳記的文章には相岸に幽棲して書畫文墨の事を樂しんだと書いてゐるが、それは多少體裁をかざつたので、一時書畫の周旋を米塩の資にしてゐたものらしいとのこと、だが流石に一片の意氣があり、次第々々に窮乏になつて來ても、友人や故舊から恩惠的援助を受けることは屑しとせず、彼等の門に暮夜出入する如きことは好まなかつた。

明治四十一二年頃から、純一郎の身體には異常が感じられ、腦患の兆が見えて來た。療養に手を碎いたが、それが漸く昂進して來るので、友人岡崎邦輔、陸奥廣吉伯(宗光の嗣子)などの忠告で、大正三年に夫人の生地なる

京都市外田中村に引揚げて靜養することになつた。もつとも夫人の生地といつても格別賴りになる親戚があるわけではなく、生活の窮乏が甚しかつた。時として五十錢一圓の小遣錢にも困る程であつたといふ。

かくて大正八年二月三日、此の明治新文學界の先驅者織田純一郎は、六十九の齡で零落の裡に歿した。（死亡の地は京都市高野玉岡町となつてゐるが、これは田中村と何ういふ關係になるか、田中村が市區に編入されたものか、又は織田氏が移轉したものか）。

附記。純一郎の實弟若松永胤も文學を好み、明治十三年に『春霞黄金の双蝶』（例の金之助の物語の戯作化したもの）を出版してゐる外、明治二十七年には大阪朝日新聞の通信員として馬關に駐在してゐる。

川島忠之助傳

引

川島忠之助氏の名は、明治初期の飜譯文學を一瞥したことのある人なら必ず知つてゐる筈で、實に川島氏は明治十一年の『八十日間世界一周』(ジュール・ヴェルヌ原著)、明治十五年の『虚無黨退治奇談』(ポール・ヴェー原著ルニエ)の譯者、明治初期の飜譯文學界の先覺として、フランス文學紹介に口火をつけた一人として、明治文化研究家に當然その功績を記憶されて可い人である。然し專門の文士でなかつたので、その傳記なども今迄研究家の間に知れてゐなかつたのだが、私が下手の横好から深入りして、いろいろと明治初期飜譯家の傳記などを調べてゐるうち、偶然な機會から川島氏の現存の人物であることを知り、氏に面會を乞ふて種々その閲歴を話していたゞき、あまつさへ氏の略傳を自筆で認めてさへいただいた。今度早稻田文學(昭和二年四月)が明治文學研究の追加號を出すのを機會に、氏の傳記を草して同好の士の研究資料に供する。

本傳は川島氏自筆の略傳に、私が氏から直接伺つた談話を參照して傳記にも取捨増補を試みたものである、專ら事實の直を旨としてみだりに文飾を加へない。若し事實に誤謬があれば私の記憶違ひか聞違ひかのためである。諒察を願ひたい。

一

川島忠之助氏は嘉永六年五月三日の生れで、今年七十五歳(昭和十年一月現存、八十三歳)、生れたのは江戸本所外手町であるから當然江戸子なのだが、次に述べるやうな事情から只今では千葉縣浦安の人となつてゐる。父君は川島與六知脩(おくろくともより)といひ、舊幕府御料所手代(幕府の直轄地方郡代又は代官に隷屬する身分の輕い官吏)で、氏はその末子である。當時父君は代官增田作左衞門の配下に屬して江戸詰であつたが、方々の遠國勤務が厭になり又健康も思はしくないところから、一時名代を立てゝ役を辭し、下總葛飾郡行德在の浦安(字猫實(あざねこざね))に川島氏の名義で數畝の田地を購ひ、傍ら地引網の漁業を始めて、半農半漁の生活に隱れんとした、これは川島氏の三歳の時であるといふ。それ迄家族は矢張り江戸の家にゐたのであるが、いよいよ仕事が落ついて、これならといふので家族を浦安に迎へようとしたときに、丁度安政四年の大暴風で、折から起つた海嘯のために、家屋はいふまでもなく漁船漁具の一切が流失した。ところが惡い事には伴があるとはよくいつたもので、一方父君の名代を勤めてゐた川島氏の從兄弟に當る人が、公金の引負を拵へるといふ始末。それで父君も我を折つて再び役人に歸ることになり、當時新に飛彈の高山の郡代に拔擢された增田作左衞門の手に屬して高山に赴任したのは、安政六年である。川島氏も父君に三四箇月遲れて兄君、姉君などと共に高山に赴き、慶應二年十四歳の春まで同地で成長した。生長と同時に敎育といふことが考へられるが、それは士分必修課目たる漢學が主であつたことは疑ひがなからう。慶應二年父君が病死されたので、家族一同江戸に引上げることになり、川島氏も江戸に歸つた。元來父君は漢方の醫術を好み、求める人があれば投藥などしてゐたが、一つには當時世間が穩やかでなく次第に險惡に赴いて行く風が見えるのを察して、二人の男子を士籍に置くことを望まなかつたところから、末子の川島氏には醫

學を修めさせようとの意志をもつて居られた。然し當時高山のやうな土地では即々實學の研究など思ひも及ばないことであつたから、遂に果さなかつた。江戸に出て間もなく、兄君は家を浦安に移して、浦安の舊田地を耕作し、川島氏にはその名義代として若干の修業費を呉れるといふ事になつた。川島氏は江戸でお定まりの漢學を勉强する傍ら、時勢柄兵式調練に加はつて小銃をいぢつたりした。江戸に歸つた始めは、父君の遺志通り醫學でも研究するつもりであつたらしいが、世間の騷々しさに何等纒つた學問をされる暇もなかつたのであらう。そのうち間もなく明治維新となり、德川幕府の瓦解となつた、これが川島氏が十六歳の時に當る。

二

明治元年の末に川島氏は、製圖工見習といふ名目で横須賀製鐵所（造船所の前身）に入つた。これは氏の今一人の從兄弟中島才吉氏の慫慂による。初め幕府當局はフランス公使の忠言に從つて文武兩方面にいろいろな改革設備をしたが、その一つに横濱語學所といふのがあつた。これは一見フランス語を傳習する學校のやうに思はれるが事實は單にそれだけではない、人材養成を目的とした一種の陸軍士官學校に外ならなかつたのである。教師は皆フランス政府から派遣された陸軍士官で、生徒は何れも幕府旗下の有爲な子弟ばかり、こゝを卒業すると大抵幕府の陸軍士官となる。中島氏はこの語學所の出身で、砲兵指圖役まで昇進しに人であるが、幕府瓦解、明治政府樹立に當つて、その習得したフランス語が役にたち、横須賀製鐵所の通譯をつとめてゐた。横須賀製鐵所もフランス公使の忠言による幕府の設備の一つで、名は製鐵所といふも實は海軍根據地（鎭守府内にあつた）であつて、こゝでフランス海軍士官が幕府の傳習生といふもの（二十名位）を教育してゐた。（然し此の傳習作は明治

になる前に解散した)。此の製鐵所は明治に入つて當然明治政府の管轄に歸したが、然し長官から技師長に至るまで依然としてフランス人であつたから、通譯附でないと用が足りず、通譯の勢力が却々あつた、中島氏が此の通譯の一人だつたわけである。此の中島氏が、川島氏が幕府瓦解にあひ、浦安あたりに逼迫して途方に迷つてゐるのを見て、それでは横須賀に來い、自分が世話をするからと勸めた、そこで川島氏は渡りに舟と(內心はともかく)横須賀に行き、中島氏の斡旋で同製鐵所の製圖工見習となり、フランス語の勉强に熱心し、旁ら英語を修めた。此の時の製圖掛長のフランス人某は幕府時代傳習生を預つたこともあつたので、見習工でも職工として待遇せず、宛も幕府傳習生の復活した一人のやうに親切に取扱つてくれたといふ。

明治二年、新政府の方針決せず、製鐵所の敎師達に俸給を與へなかつたりしたので自然敎授が中止になつた、それで川島氏は見習工をやめて横須賀から横濱に出で、語學練習のため、フランス人の齒科醫アレクサンドルの許に使丁として住込んで苦學した、何れ誰かに傳手を得たのであらう。此の間の勉强は殆んど文字通りの苦學であつた、敎へをうけるにも語葉は思ふ様に通ぜぬ、本で勉强したいにも本はない、村上英俊の『佛語明要』が唯一の參考書といふ有樣である。だからたゞもう分からぬなりにフランス人のいふことを聞くより仕方がない。此のアレクサンドルの許で一六何年かに出版された日本葡萄牙辭書のフランス譯を始めてみたときには天地間にこれ程重寶な書物もあるかといふので欣躍した程であつた、アレクサンドルの許にあること五箇月、同三年の春になつて明治政府の方針が決定して第一回の傳習生を募集したので、氏はそれに應募し、首尾好く選に當つて造船機械科に入つた。氏の直話によると、傳習生時代は天性數學に鈍く手先が無器用なので、大に困難したといふ。此

の數學に鈍い氏が後年銀行家として終始したのだから、世の中は面白い。

明治五年、いよいよ傳習生々活を終つて官途につき、海軍省十五等出仕(判任最下級)を拜命して月給拾二圓貰ふことになつた。氏の實地の仕事は鍛冶、製罐、造船であつたが、矢張り此の無器用に禍されて役に立たない。これではならぬ、いつそ一思ひに止めようかと思つても勝手にやめるわけにも行かず、内心煩悶々としてゐると、これを知つた從兄弟の中島氏は、今度も又川島氏のために恰好の行先を探してくれた。中島氏は此れより先横須賀から轉じて神奈川縣廳の通譯になつてゐたので縣令陸奥宗光とは親しく知合つてゐた。ところが此の頃陸奥氏は大藏省の租税頭で羽振が好かつたので、中島氏から陸奥氏に川島氏の事を話し、何とか使つて貰へまいかといつた。當時の大藏省の範圍は廣いもので内務の一部、農商務の全部、その他までその管轄に包含してゐたものである。恰もよし、明治政府は上州富岡に製絲場を建て、外國人（フランス人）を經營主任にして、此の五年の初めに機械の運轉を始めたばかりのところであつた、此の製絲場が陸奥氏の管轄であり、又實際フランス語通譯が必要なところから、陸奥氏の聲掛りで富岡製絲場の通譯になつた。然し海軍省の方では勝手に止めるのは宜しくないといつて、大藏省の方へ遣つてはしまはず、仕方がないからたゞ貸すといふ名義にし、それで大藏省租税寮雇といふことになつて富岡に赴任した、これは明治五年の春だといふから、製鐵所には眞の暫時よりゐなかつたものと見える。富岡の方は月給三十圓。

富岡には一年半ばかりゐた。此の間職務が職務だから富岡に來たいろいろな公人私人と知合つたらしいが、其中當時の大藏省三等出仕澁澤榮一、小野組糸方の番頭古川市兵衞、横濱の絲商龜屋（原善三郎）などが主なるも

のとする。殊に澁澤氏とは、氏の從兄弟の澁澤喜作（前の彰義隊々長、後租税寮七等出仕）がイタリヤとフランスに養蠶取調に出張したとき川島氏の從兄弟の中島氏を通譯に伴つたやうな關係もあつて、單に上官下僚間の一面識といふだけではなかつたらしい。

三

川島氏の自筆略傳によると「翌年秋初全ク官海ヲ離レ某商會ニ入リ佛國ヘ渡航ノ筈ナリシガ偶々此事中止ニ至リシニヨリ身ノ自由ハ得タレドモ風來人トナリ果テ」云々。氏が富岡の通譯を止めたのは明治六年秋の初であるが、これには理由がある。此の引用文中某商會といふのは小野組のことであるが、小野組は吾が國の養蠶製絲が日々に盛んになるのを見て、海外直取引に着眼し、いよいよフランスに糸店の支店を置くことにして、その支店長には最近ヨーロッパ養蠶の本場を視察して來たばかりの澁澤喜作氏を宛てる筈であつた。そこで澁澤氏から、何うだ、通譯としてフランスに行かないか、といふ相談が川島氏にもちかけられたので、川島氏の意は大に動いた。それで海軍省の方は病氣と稱して免職にしてもらひ、租税寮の方は好意上、雇をよろしいといふことになつて、もうすつかり官途から足を洗ひ、フランス行の日取の決定を待つてゐた。ところが好事魔多し、その出發は延期になり、遂に不可能に終つた。當時內情が分からないので、途方に暮れたが、段々聞いてみると大體次のやうな事情が伏在してゐたのである。

元來小野組は三井と並んで明治政府の公金を預り、それによつて手廣くいろいろな事業を經營してゐたのであるが、此の頃に至つて兩家とも度々不謹愼の所行があるので、政府では、公金に對して擔保を入れさせること、

擔保を入れることが出來なければ公金を取り上げることゝいふ內議を決定した。然るに三井では此の事を逸早く嗅ぎ出した（何れは井上馨あたりからであらう）ので、急に地所の値上をやつた。それで三井は助かつたが、そんな事を知らない小野組は擔保を入れることが出來ず、遂に潰れてしまつた。當然フランスの支店どころの話ではなかつたのである。だがその小さな飛沫が川島氏にもはねかゝつて、氏は月給を棒にふつた。而かも海軍の方からも拾貳圓がそのまゝ入つてゐたから月給を二つ一時に棒にふつたのである。これは成る程痛かつたらう。是は明治七年のことである。

かういふ譯で暫時「風來人」として身の振方を考へてゐたが、禍福は糾へる繩の如しといふやつで、矢張り富岡が緣になつて、そのうち横濱の蘭八番商館に番頭として入ることになつた。それは富岡製絲場の主任をしてゐたフランス人ブリューナアといふのは、もと横濱蘭八番商館のシルク・インスペクタア（生絲撿査係）をしてゐたので、此のブリューナアが川島氏の失意を聞き、蘭八番の主人に話し、改めて主人から話があつて（主人も度度富岡で川島氏と知合つてゐた）外國人の書記の下働きとして入ることになつたのである。尤もブリューナアの方では幾分恩に酬ゐるといふ志もあつたのであらう、それは川島氏が富岡にゐる頃、外國人同志に葛藤が起つて政府の決裁を要したことがあつたとき、氏が大に奔走したことがあつたからである。蘭八番商館では、主として諸官省の間の用事の通譯を受けもつてゐたらしい。此の頃氏が頻りに漢學の研究を始めたことは、一面その好學心がいかに强かつたかを證する。

此の新生活に入つてから一年餘もたつたころ、川島氏が富岡で知合つた諸氏の計畫に成つた[illegible]が實現

されることになり、これに關連して川島氏の最初の洋行がいよいよ事實となるに至つた。明治九年である。

四

此の蠶紙直輸出の實現までには可成り複雜した由來がある。丁度一八六〇年頃からイタリヤ、フランスなどヨーロツパの養蠶地方で蠶兒の流行病が蔓延し、それから出來た繭は繭にならない。たゞ日本だけが頗る結果が可い、それで日本の蠶卵紙が彼地で高價に賣れた。そこで日本では大に蠶卵紙を製造して巨利を博してゐたが、フランスの學者パストウルなどが蠶兒の病氣を調べた結果、段々改良が出來ることになり、日本の蠶卵紙が賣れなくなつて來た、日本では當然蠶卵紙の過剩狀態になつた。ところが明治九年七月十七日、ヨーロツパでは恐ろしい晩霜があつて、イタリヤや、フランスの養蠶は全く外れた。日本ではこれを聞いて、今年こそはと大に馬力をかけて蠶卵紙をこしらへ、いざ賣らうといふ段になつて、外國商人たちはシンヂケートを組織し、さう澤山高い金で買はない。そこで日本政府では民業救濟の意味で（幾分身から出た錆といつた氣味もあるが）百萬圓程買上げた。買ひは買つたが何う處分していゝか分からない、いろいろ考究評議した結果、イタリヤに賣り込むが可いといふことに定まつたが、大藏省勸業寮の役人が自身出張するわけには行かない。そこで政府から澁澤氏　三井の益田氏、横濱の籠善の三人に、誰か先方に蠶卵紙をもつて行くものを選定してくれと賴み込んだ。そこで前橋の豪商下村氏、二本松士族梅原氏などが主立つた人物となつてイタリヤに行くことになつた。此の時澁澤氏から川島氏に話があり、前のフランス行の埋合せに今度通譯兼監督としてイタリヤに行つては何うかとの事であつたので、川島氏は早速蘭八番館の主人に話したところ、歸國後又本館に歸つて來るなら、留守中代理を入れるといふ

條件で許さうといふことになつた。川島氏は喜んでイタリヤ行承知の事を返事した。

かくて一行五名（南宮敬次郎もその中の一人であつた）が發程したのは、明治九年もあと一月と押詰つた十一月二十五日であつた。往はアメリカ經由としたがこれは當時フヒラデルフヒヤに開催されてゐたアメリカ獨立百年記念博覽會見物のつもり、先づサンフランシスコに上陸し、こゝで日本へ歸朝の途にある使節田中不二麿氏にあつた、それからニューヨークに出て、フヒラデルフヒヤに廻つて見物を濟し、フランスに渡つて、パリ、リヨンからイタリヤに入つて、ミランについたのは明治十年一月中旬。いよいよ目的の蠶卵紙賣込にかゝつたが、これはもう散々の不成功、此のイタリヤ滯在中、川島氏は閑を偸んでスウイス、パリ、ロンドンなどに赤毛布旅行をやつた。一行は不成功のまゝ、六月初旬ネープルス港から乘船、途中セイロンに碇泊してゐたとき、フランスに行く日本人（富井政章、今泉雄作）から西南戰爭のことを聞いて大に驚いた。横濱についたのは七月十五日。川島氏は再び蘭八番館に歸つて番頭生活を續けることになつた。

五

川島氏が『新說八十日間世界一周』の飜譯に着手したのは、歸國後間もなくのことであつたらしい。川島氏の語に「概シテ閑暇ノ任務ニ服セシヲ以テ佛文小說飜譯ヲ試ルニ至リシナリ」云々とある。此の小說の原作は洋行以前、當時パリ三井物產支店にゐた從兄弟の中島氏から贈物にもらつたもので、川島氏は一種異常な感興を覺えた。ところが洋行の際アメリカの某驛で小憩したとき、賣場の中を覗くと此の小說の英譯があつた。これを買つて車中の徒然を慰めたが、この英譯にはアメリカの部に原作にない增補がしてある、川島氏は此の小說に一層の

興味を感じた。それで社會啓蒙の一端とも思つて飜譯の筆を執ることになつた。前編は自費出版で、明治十一年六月出版、有名な織田純一郎氏の『花柳春話』より四箇月早い。出版所は慶應義塾出版部だが、これは知己の朝吹英二氏が部長をしてゐた關係からといふ。前編が意外に賣れたので、後編は出版部の方で出版を引受けてくれた、これは十三年六月の出版。川島氏の直話によると、二冊合して前後二百六七十圓の收入があつたと。

猶ほ明治十一年に、これも富岡の外人葛藤入件で知合になつた時の租税權頭松方正義から租税寮に入つてパリに行かぬと勸められたが、思ふところがあつて懇に辭謝して應じなかつた。

第二の飜譯小說『虛無黨退治奇談』は、明治十四年の暮から十五年春迄の間に脫稿したもので、同十五年九月の出版これも慶應義塾で出版を引受けてくれたが、餘り賣れなかつたさうで、川島氏の手には一錢も入らなかつたといふ。

『虛無黨退治奇談』はいろいろな意味で甚だ面白いものであるから、これについて語りたいのであるが、飜譯の動機その他については此の書の序文に詳しいし、又木村毅君が昭和元年十二月號の『改造』に書いてもゐるからそれを參照して貰ふことにして、私は此の書に多少の由緣のある一場のローマンスを語るに止める。

此の『虛無黨退治奇談』に依田學海の序のあることはこれを一讀した人の誰でも知つてゐるところであるが、川島家に現に所藏されてゐる此の譯本には、依田翁が手づから朱字で評を書入れてある、而かも通一遍の評ではない、文字通りの細評である。何の因緣もありさうにない漢學者の依田翁とフランス學者の川島氏の間に何ういふ因緣があつたのか。依田翁の夫人といふのが、川島氏の橫須賀時代の親友の姉であつた、學問好きな川島氏の

こと、殊に當時多少文筆に緣があり漢學を頻りに耽讀してゐたことだから、依田翁の名は承知してゐたらう、何時となく向島の依田家に出入して文学上の教へをうけてゐるうち、翁の二女某の可憐な姿が川島氏の心に深く刻み込まれた。川島氏は親友を介して依田翁に此の娘さんを欲しいと申込んで、快諾された。川島氏の方では今年（十四年）は二十九だから來年三十になつたら引取るといふ約束をした、ところが一方川島氏は後に述べるやうな事情から急にフランスに行くことゝなつたのみならず、他方中島氏の兄君（夫人は川島氏の姉君）の死去に會つてその遺族の扶養を引受けなければならなくなつた。それで依田翁に引取延期を申し込んだところ、引取を延期するのはよろしいから、入籍だけして欲しいといふ、それで入籍して同棲は待つことにした。これは表面の交渉だが、西洋の戀愛結婚を知つてゐる川島氏の内心には、先方の娘が父の嚴命で此の結婚を承知しても、果して自分に愛をもつに至るか何うかわからぬので、それまで待たうといふ心算があつたのではなからうか、兎にかく此の戸籍結婚は數年間續いたが、明治二十一年、川島氏が何も知らずに妻を迎へようとしてフランスから歸國したときには、依田翁の令嬢はもう姉君や親友やの手で立派に離婚されてゐたのであつた、何れいろいろな理由があつてであらうが、譯を知らぬ川島氏には如何に意外に思はれたらう。

因に依田翁の「譚海」第三卷佛國演劇のところに女婿川島忠之助云々とあるのが、此の一件の記念である。

六

明治十五年に、横濱正金銀行はフランスのリヨンに出張員を出すことになつた。當時蘭八番館の輸入品はキヌリン、カナキンなどが主であつたが、その第一の顧客は富屋、即ち堀越角次郎であつた。然るに、此の堀越家で

は横濱正金銀行創立以來の大株主であつたところから、いよいよリヨン出張員を派遣するに臨んで、兼ねて眷顧してゐた川島氏を推擧し、氏に交渉して來た。が氏は此の時最初は二の足を踏んだ、といふのは萬事蘭八番にゐる方がよい樣に思はれた、第一俸金の方からいつても蘭八番の方がずつとよい。然したゞリヨン出張員の仕事といふのは極めて閑散なものであると聞いたので、氏の好學の志は勃然と動いた、それが實際なら行務に携はる傍ら大に勉強が出來るかも知れないと。それで熟考の末リヨン出張員になることを決心し、萬事打合せが濟んで、此の年五月七日横濱解纜、二度目の洋行の途に上つた、マルセイユ着は六月二十日、リヨンに落ちついたのはその後二日目であつた。來てみると、成る程事務は頗る閑散である、そこで豫ての希望の通り、當時リヨンに留學してゐた富井政章氏（後に博士）の世話で法科大學の聽講生となり、午前は登校して講義を聞き、午後は事務を執り、更に餘暇には文字通り東西古今の書を渉獵した、綱鑑易知錄、前後漢書などの史書、プルターク英雄傳その他のギリシヤ、ローマの古典を殊に愛讀した。かういふ半學生の生活は約二年弱の間つゞいた。

その間、明治十七年には矢野文雄氏、本野子爵などの來遊客に會つた。殊に川島氏はギリシヤ、ローマの史籍を耽讀し、プルタークを愛誦して措かず、その中のイウメニイズ傳を飜譯した程熱度の強いときであつたから、「經國美談」の著者とすつかり意氣投合し、爲めに銀行事務を大に詰らなく思ひ始めた。矢野氏もこれを聞いて、では報知新聞に入つたら何うだ、一つ一緒にやらうかとすゝめたので、川島氏も一度はその氣になつたりした。

そのうち大藏省の方針が一變して今迄の消極政策をすてゝ積極政策を採用したので爲替取扱事務が激増し、夜を日についでも手が足りない程になつたので、もう暢氣な學生々活などして居られなくなつた。元々學問のため

に腰掛のつもりで銀行に奉職したのであるから、かうなつては頗る目的が顚倒し、甚しく失望したけれども、もう何うにもならない。而かも時日が經つにつれて銀行の方の待遇も改善され、少くともリヨンに居る間は生活に窮することがないと思はれるやうになつたので、居据りと覺悟をきめた。川島氏自らはかういつてゐる、「鷄鶩ノ爲ニ一生ヲ銀行ニ捧ルコトニナリシ運命ノ奇シキニハ今ニ至リテモ猶低回禁シ得サル所ナリ」云々。此の時本店から手傳ひとして寄越したのが、『鐵烈奇談』の譯者伊澤信三郎氏であつたのも面白い。

七

明治二十一年に川島氏は七年振りで歸省した、その何の爲めかは、川島氏自身に語らしめよう、「二十一年四月里昻ヲ發シ歸省ノ途ニ就キシハ未タ同棲セシコトナキ妻ヲ迎フル爲ナリキ然ルニ意外ノ運命ハ我ヲ待チタ、アリテ同年十一月里昻へ歸任ノ時拱帶セシ新婦ハ依田ノ女ニ非スシテ當時元老院議官タリシ石井忠亮ノ二女ナリシ」云々。

此の後、川島氏は明治二十八年の春迄リヨンに在勤し、そのまゝで行けば猶幾許かの年數を同地に過さなければならない身であつたが、夫人が肺炎を患ひ、豫後が悪るかつた結果、醫師に、これは「故山ノ風ニ觸ル、ノ外醫藥ノ療治スベキ所ニ非ス」と宣告されたので、今は歸國後のパン問題に屈托してゐる場合でないと決心し、斷然病婦と三幼兒を擁して歸途に就いた。それは此の年の三月の末方であつた。幼い子供等の傅役として、當時馬車製造業見習のためにフランスに來てゐた一青年を伴つて歸つた。

途中サイゴン碇泊中、船中から火を發して他船に乘り移ることなどがあり、幾多の困難を閲して上海まで來た

とき病夫人の病が益々重り、つひに上海埠頭繋船中に永い眠についた。五月八日のことである。此の時にはもう日清媾和條約締結後ではあつたが、その報が未だ來ないので上陸することが出來ず、翌九日船が支那海を離れるのを待つて涙をのんで蒼波の間に葬つた。(因にいふ、川島氏は四年後に再婚〔戸籍では三婚〕したが、此の夫人も大正六年に逝去された)。

神戸に着いて婦翁石井氏その他親戚諸氏の出迎へを受け、やがて折から神戸へ出張中の正金銀行重役相馬氏にあつて、當時紀州和歌浦に退隱中の石井氏方で暫時休養の上東上することを許可して貰つた。川島氏は當時の心事を正直に告白していふ、「此頃ヨリ心頭ニ往來スル所ハ三幼兒ノ外ニモ扶養中ノ眷屬ヲ如何ニ處置スベキヤノ麵麭問題ニ外ナラザリキ是ハ老生ニ於テ探ルベキ所ハ稍々佛語ニ通ズル而已ニシテ銀行事務ノ如キハ殆ント門外漢タリシヲ以テナリ」云々、心ひそかに馘首を分としてゐたものであらう。

然るに意外にも急信で至急東上の旨を促して來たので、六月の末に横濱本店に出頭したところ、當時支配人小泉信吉氏逝去後未だ日本銀行から氏の後任者を定めて來ない、それで副支配人山川勇木氏の雜務蝟集、その繁忙名狀し難かつた。といふのは元來正金銀行は制度一切を英國風に倣つたものであるから、證書類には皆頭取、支配人、副支配人、支配人心得の記名を要する、それで山川副支配人がかういふ記名などに忙殺されてゐては肝要の行務に事を缺くに至る恐があるので、その緩和策として川島氏を副支配人に任命し即日證書記名の事を擔當させる筈であるとの旨であつた。川島氏も事の意外に大に驚いた、だが首席副支配人山川氏は、同氏がロンドン支配人勤務の頃からの先輩であり、且つ事實銀行營業上の首腦人物であつたので、若し此の人に就いて教授を受け

つゝ努力したなら「式ハ素養ナキ老生ニモ麵麭ヲ離ルル憂目ヲ見ル事モナキ譯」と稍々危惧の念を輕くしたのである。

本店で習業二箇年半の後、明治三十年の暮にインドのボンベイに支店長として赴任、三十一年二月初旬ボンベイについた。此の時迄同地の支店は假設のまゝで頗る規模の小さいものであつたが、既に開設三年目の事であるから日本との貿易の發展と共に銀行事業も十分擴張の見込が立つたので、場所も現今使用中の建物に移り、他の同業外國銀行と對抗するまでになつた。

明治三十二年四月歸朝、直ちに東京支店開設の命をうけ六月初旬日本銀行前の、同行所有の建物中にて開店、三十九年七月再び横濱本店に轉任を命ぜらるゝ迄七箇年餘東京支店にゐた。「老生ニ於テ着々得意ノ時代アリシトセバ此七ヶ年ナリトス」云々。此の間北清事件があり、北京へ銀行代表者を一人駐在させる必要があつたので川島氏がその選に當つたが、當時何分家を離れることの出來ない事情があつたので辭退した。「此一事、今ニ至リテ猶遺憾措カザル所ナリ」と川島氏は自記略傳中に特記してゐる。

自記略傳の文はつゞく、「本店ニ入リテ初メ二ヶ年餘ハ無任所ノ體ニテ滿洲金融事情ナドノ調査ナドニ費ヤス其内四十年ヲ以テ所謂伴食取締役ノ末班ニ列シ四十二年ニ至リ本店營業ノ支配人ヲ兼ネ山川勇木支配人ノ下ニ本店ダケノ營業ヲ擔當シ四十五年春實務滿三十年且六十歳ノ老朽ヲ以テ現職ヲ去リ重役ハ依然トシテ大正六年ニ至リ全然銀行ヲ去ル身トナル」云々。たゞ松方公の懇囑によつて就任してゐた横濱埋築會社顧問の役は暫時つとめてゐたが、大正十四年三月に至つて老齢の故をもつてこれも辭し、全く悠隱閑散の身となつた。川島氏はその自記略

傳を結んでかういつてゐる。「老生ハ明治五年初テ海軍省十五等出仕ノ辭令ヲ受ケシヨリ昨年(十四年)全ク退隱セシ迄滿五十三年、當初ノ目的ヨリ一タビ外レシヨリ意ハザル方面方面ヘト唯麵麭ヲ追フテ彷徨シ來レル者ニシテ何等確乎タル意志モナク唯其時々ノ風ノ儘ニ働キシハ我ナガラ苦笑ヲ禁ジ得ヌ所ナリ」云々。

川島氏に私が初めて面會したのは、昨昭和元年九月の候と記憶する。初め私は銀行家として終始した人と聞いて、內心牙籌を鼻の先にぶらつかせた人物ではあるまいかと危ぶんだが、會つてみて驚いた。童顏皓眉、諄々として語る樣は丁度老書生の態である。而かもその好んで語るところは、支那の經史のこと、ギリシヤ、ローマの古典で、プルタークの英雄傳のことは、再三再口頭に上つた、老莊を談じ、陶淵明を引き、李杜を賞したかと思ふと、古ギリシヤの英雄イウメニイズの不運を嘆ずる、と一轉して漢高祖を論じ、唐太宗を評し、腹笥滾々としてつくるところを知らない。私は、祕かに驚いて、歸途、あれでよく銀行家などになり切つて居られたものだと獨語せざるを得なかつた。とはいへ、何も銀行家を輕侮していつたのではない、その型を破つてゐる點の甚しいのに驚いたのだ。今本傳擱筆にのぞんで、改めて川島氏の健康をいのる次第である。(昭和二年三月十四日)

『哲烈禍福譚』譯者　宮島春松

宮島春松（はるき）は一代の奇士である、單に『哲烈禍福譚』の譯者としてのみ後世に傳へらるべきではない。彼の本領は他にある、彼が畢生の事業としたのは雅樂による國樂制定である。彼の經營した雅樂協會の後身たる松代雅樂協會は、微と雖も今に命脈を傳へて儼存してゐる。春松は所志を遂げずして逝いたが、その事業は明治音樂史中に一項目を占めて然るべく、引いては明治二十年前後の歐化反對、國粹保存の思想を藝術界で最も强く鮮に反映した一例として見ても、明治文化史上、藝術思想史上看過し難いものであると思ふ。從來、春松の名は『禍福譚』の譯者として傳はつてゐて、彼が生命を打ち込んだ雅樂協會の事にまで及んでゐるものはない。春松を傳へて彼の國樂制定意見、雅樂協會の事業に及ばないのは、春松を傳へることに於いても甚だ遺憾が多いといはざるを得ない。

春松紹介の第一功勞者は信州上田の飯島花月氏である。私は花月氏を介して春松の門人で松代教育界に令名ある長岡萱二郎氏と相知り、その招きにより松代を訪ふこと二回、長岡氏の手許にある春松關係資料を悉く閲覽手記することが出來、又更に長岡氏を介して春松の遺友河原綱正氏、原昌誠氏、春松の令弟一桂（舊宮島愼三郎氏から春松傳の資料を入手することが出來た。その他松代の人大日方大助、太平喜間多にも種々助力して頂いた。以上諸氏殊に長岡氏に對して深く感謝する。

一

宮島春松の春松は、ハルキと訓ませたいのが本人の心算であつたさうだが、今ではシユンシヨウと普通訓みならされてゐる。春松は明治維新後の名で、前名は善太郎、諱は重愼といふ。信州松代藩士宮島嘉織重利の長子で嘉永元年八月十七日、松代竹山町に生れた。

嘉織翁は前名政之助といひ、同藩藤岡氏から出て宮島氏を繼いだのである。此の時仲人口を利いたのは有名な佐久間象山であつた。宮島家は安藝宮島から出で、長尾政景の臣宮島豐前守を祖とし、松代藩では名ある家柄であつたらしく、此の頃は祿も三百八(或は五)十石となつてゐたが、家族が多勢であつたので活計は甚だ豐かではなかつた。

春松は少時藩黌に入り、藩士松木源八について漢學を學び、傍ら武藝を習つた。槍劍ともに所謂素質のよい方であつたが、餘り身を入れて稽古せず、平生俺は痛い事はいやだと豪語してゐた。だが弓馬の方は可成り達者であつたといふ。父嘉織翁の關係から佐久間象山と緣故があつたので入門すれば何時でも出來たのだが、俺はあの將(象山顎に美髯を蓄ふ)が嫌ひだといつて遂に入門しなかつた。一體が子供時分から利かぬ氣の人物で、人が右といへば直ぐ左といふ。だから友達の間でも憎まれ者で一敵國を成してゐたし、又友達もさう澤山は出來なかつた。武藝の方は今いつたやうに身を入れなかつたが、學問の方は相應熱心に勉强したものと見え、後年の飜譯物やその他の文章によつてその力が覗はれる。

だが春松が此の頃から何よりも一心に學んだのは、音樂、殊に雅樂であつた。

春松の父喜織は音樂に精しく箏及び三絃などを彈じ、又尺八を好くした。伯父藤岡伊織は能樂の嗜みが深かつたが、始め自分に子がなかつたので太く春松を愛し、十歳になるかならぬから自ら謠曲を教へて仕舞を習はせ、能管を吹かせ、當時の名手大谷津又藏に入門させたので可成りの進境を見たといふ。だが春松は父の音樂趣味はかゝる俗樂に滿足してゐることが出來ず、いつしか轉じて雅樂を好み、金井御楯（通稱福藏左衛門）について橫笛及び箏を學び、その妙を得た。

松代藩に雅樂が行はれるに至つたのは、藩主感應公眞田幸貫の獎勵に依る。幸貫公は白河樂翁公の二子で出でて眞田家を繼いだ人であるが、父樂翁の好古の趣味を稟けたが、中古以來武家の式樂となつてゐる能樂がまだ俗樂の域を脱してゐないのに飽足らず、我が國古來の正樂を復活させんと欲し、臣下の逸材高田幾太法吉を選んで江戸に遣はし、幕府伶人東儀將曹に就いて笙篳篥箏を學ばしめ、更に京都に往つて管絃を修得せしめる處があつた。幸貫公自身法吉に學んで頗る琵琶を好くされたといふ。かくて高田法吉から金井御楯に傳はり、金井御楯から春松へ傳はつた。尤も春松が御楯に就いたのは弱冠までのことであつて、上京後は自身に各伶人に就いて刻苦研鑽して蘊奥をきはめ、遂に『雅樂協會』を創立するに至つたのである。

尙ほ維新前の事として、少時藩主文聰院幸教公の近侍として召されたが、無意味に時間を空費することを厭ひ病に托して辭したといふ。だが、後に眞田幸民伯が宇和島の伊達家から養子になつて來たとき、年齡が同じか同じ位かで近侍として奉仕した。

二

明治元年、春松年二十一。松代藩では藩兵を出して官軍の一部隊として北越遠征に從はせたが、春松は出征しなかつた。

此の年の冬、舊幕臣（元伊豫大洲の人）で兵學者の武田斐三郎（名は成章、竹塘と號す）を聘して新に藩校を設立し、これを士官學校と呼んだ。だが名は士官學校でも、實は洋學教授を主とした一種の洋學校であつた。

この時春松は初期生としてこれに入學し、斐三郎から英語、フランス語並に兵學を學んだ。これが春松が洋學勉强の始めであつた。師の斐三郎は英佛二國語に堪能で、航海、築城、造兵の術に長じ、幕命によつて函館に五稜郭を築き、又王子に反射爐を作る等種々功があつたので砲兵頭に拔擢されたが、幕府瓦解の際どさくさに暴徒に襲はれたので、難を松代藩邸に避けた。松代藩ではそれを機として斐三郎を幕府から借りて兵制を整備させんとしたのであつた。

明治三年十一月、紙幣兌換、貢米減免等の件が原因で、松代藩に百姓暴動があり、爲めに藩政府が顚覆されて一時無政府狀態になつたので、自然士官學校も閉校の止むなきに至つた。（間もなく廢藩置縣の議が起つたので、斐三郎は松代を辭して東京に歸り、明治政府に仕へて、陸軍大佐、士官學校學科提理となつた。）

此の前後（或は明治二年ともいふ）、春松は改めて眞田家の家從を命ぜられ、藩公が知事を止めて東京永住として上京するや、春松も隨從上京して、暫時は他念なく眞田家に仕へてゐた。

そのうちに、明敏な春松には朧氣にもせよ天下の形勢といふやうなものが分かつて來たらしい。西鄕、大久保木戸その他當時まだ壯年の政治家達が萬障を排して小氣味よく破壞の後の新施設をして行く有樣を目のあたりに

見て、これは安閑としてお大名の供従になつてゐる時ではないといふ氣が動き出した。折よく相知の松代藩の青年十二三輩が遊學の爲め上京し、眞田家のお長屋を寄宿として築地邊にあつた西洋人の學校（カラザァ氏英學校か）に通學し始めたので、春松も直ちに家從の役を辭し、此等の學生と伍して同じ洋人の學校に通學した。幾くもなく先師武田成章（斐三郎）の塾に入り、又開成學校に入つて盛にフランス語を學び、居ること二年、明治七年頃、武田氏當時（陸軍大佐、士官學校學科提理）の引立で陸軍省に入り、十二等出仕（當時の十二等は月給二十五圓）を拜命、當時創設されし陸軍士官學校の教官となり、專ら砲兵科の兵法戰術書の飜譯に從事した。此の頃は吾が國の兵制が專らフランス式を採つた時であつたから、春松の飜譯が如何程多く軍事教育に貢獻したかは容易に想像される。士官學校の教程の如きも亦春松の手に成つたものが多かつたといふ。尚ほ明治初年の官員錄には左の如くあると（飯島花月氏示教）、——

明治七年官員錄

陸軍兵學寮十二等出仕　二十五圓　ナガノ宮島春松

明治八年八月の同書、陸軍省の部に

十二等出仕　ナガノ宮島春松

明治十年十二月の同書、陸軍士官學校の部に

十四等出仕　ナガノ宮島春松

明治十二年一月改正

陸軍十四等出仕　二十五圓　長野　宮島春松

（此の時の十四等出仕も月給二十五圓であつたと）。

明治十年後間もなく春松は士官學校をやめ、陸軍省飜譯官となり、主として小石川砲兵工廠内にあつた砲兵軍議所の飜譯に從事した。

三

士官學校をやめるについても尋常な事でやめたのではないらしい。十年の西南の役の當時は、天下鼎沸とまで行かなくとも相當騷がしかつた。春松は勿論大の西郷派で、西郷の子分の二三氏とも親交があつた。中でも同じ士官學校の教官某が一番の親友で、此の人とは隨分一緒に遊んで盛んに飲み廻つたものらしい。此の人も西郷擧兵の報を得るや直に官を棄てゝ馳せ歸つた。春松も血氣盛んな時ではあり元々豪氣な人物であつたから、戰爭に出かけたくて堪らない、それで官軍になつて行かうと願つたが、上司は、大尉ならよいが少佐にはしてやれないといつた、ところが、相知の某（確か野津道貫だといふ）が少佐で行くのに俺がその下の大尉で行けるかといふ勢ひ、そんな不平も原因であつたといふ。

春松の弟の秀松が書生にやられてゐたといふ薩摩隼人は恐らく此の親友の士官學校教官と同一人物と察せられるが、これも却々の豪傑で、勿論獨身、官製の戎衣の外、家にゐるときには一枚の廣袖どてらがあるのみで、お勝手には牛の片足を腰骨から切斷したまゝのものを吊して置いて朝夕それを切りむしつて煮た。尤もこれと同じ事は春松の勝手でも行はれたといふ。此の人は、月俸を得ると財布のまゝ晦日に來集する米屋酒屋等の前に投げ

出し、彼等をして分に應じてその中から取り去らしめた。所有品としては春松の賞つた佐久間象山の一幅と金鎖の正服を納める行李一個だけ、その淡泊なことは言語に絶してゐた。數多の書生を養ひ、喜んでその困窮に伍し、得るところは皆投げ出して顧みなかつたと。

四

士官學校辭職の頃から、春松の遊蕩は大分猛烈になつた。場所は大抵九段であつた。然し一人で出かけたので弟の秀松は遊蕩の道では兄より大分先輩であつたが、初めはその秀松さへ少しも知らなかつた。それもその筈、若い頃は酒こそ飲んだが甚だ謹格な人間で、女の話なぞしたこともない眞面目一點張り、上京後間もなく妻帯の話が親戚中に起り、松代の豪家の稱津氏の女某といふ美人を候補に擧げて勸めてみたところ、春松は、今は勉強中の身で妻帯どころではありませんときつぱり斷つたといふ。一口に云へば馬鹿に堅人であつた。だから弟さへ知らずにゐたのも尤もなのである。

ところが、一夕、或る旗亭で秀松が友人四五輩と盛にメートルをあげてゐると、席に侍してゐた一藝妓がかういつた。近頃貴郎と同姓の宮島何とかいふ人が盛に遊ばれますが、とても偏屈で、女達は皆こはがつてゐます。その中で一人新宿から來てゐる吉村の何ちやんだけはひどくその方を尊敬し、犠牲的に奉仕してゐますと。秀松が不思議の頭を傾けるのを見て、現に今夜も來て向ふで遊んでゐますといふ。秀松もまさか兄ではなからうと思ひ、密にその座敷を覗つてみたところ、豈計らんや正眞正銘の春松が虎髯を扱き撫でながら大氣焔の眞最中、その傍に一小妓が侍し、前には尚ほ多くの藝妓が並んで謹聽してゐる。そこで秀松は思ひきつて、やア兄さんといつ

て飛込んだところ、ヤ、秀か。これは、これはといつた騒ぎ、此の夜以來秀松は春松の斯道の祕書格となり、萬事如才なく采配を振ふことになつた。それまで秀松は兄に叱られ通しであつたが、急に重用されるやうになつた丈に大得意であつたといふ。

だが春松の遊び方が次第に猛烈になるにつれ、流石の秀松も閉口して、終には反對に諫言を呈するまでになつた。かういふ風で、春松は大負債を負ひ、度々國から金を取り寄せた。初め數回は松代の父も何に入るかと思ひながらも默つて送金してゐたが、段々國にもこの遊蕩振りが知れ、親族會議の悲喜劇が繰り返された揚句、伯父藤岡氏が出京し、その氣に入りの小妓を落籍して先づ妾の格で同棲させた。これが春松夫人おしゆんである。

此の頃、春松の收入は月七十圓位であつたといふが、九段で遊ばうが新宿で遊ばうが吉原で遊ばうが、勘定する時決して自分で金錢に手をふれなかつた。いつでも俸給の袋ごと持ち歩き、さア此の中から勘定をとれと突き出して店の者にとらせて、一度も自分で勘定したことはなかつたといふ。

五

「歐洲小説・哲烈禍福譚」は明治十二年四月に版權をとつてゐるから、少くとも譯筆はその前に執られたものと推される。飜譯の動機は奈邊にあつたか、春松の緒言によれば泰西の名著を紹介したさの餘り嗚呼を顧みず譯筆をとつたといふ意味のことが推察されるが、勿論それが最大動機であつたらう。だが丁度此の時は春松の放蕩が最も猛烈であつたのであるから、これから生ずる若干の阿睹物も目的の一つであつたかと思はれる。それから發行書肆の太盛堂の方で春松に依頼したことも（緒言）事實であらう、何故ならば太盛堂ではこの以前に或る古書

を豫約出版することを企て、豫約者を募集したが、それの實行が出來ずに、『哲烈禍福譚』をもつてこれに代へたものだといふから、要急の事情があつたと見るべきが至當である。

『哲烈禍福譚』は、全三十六冊をもつて完結する筈（緒言）で、豫約價は一冊五十錢であつたといふ（鶯亭花月氏示教）。私の所藏本には第一卷に定價十五錢とあるが、これは後に附けたものか。（尚ほ私の所藏本第五卷の裝後の一丁裏に「明治十四年六月四日午後六時頃　品川新宿壹丁目四拾貳番地遊藝俊（？）太郎方　若松春々亭卑衣」と書いてある、明白にお女郎さんの愛藏品と見えるが、當時春松の零落してゐた頃と思へば一寸面白い）。これが三十六冊が全部出なかつたことは、今日では先づ確實と斷言して可いと思ふが、さて何冊まで出たかといふことは輕々にはいへない。一時大阪の岡田氏の七冊本が最も完全で七冊までかとされた。だがその後八冊本を所藏してゐる人が二人までもゐることがわかつた。今日では八冊以後のものはまだ見當らない。こゝが問題である。春松の令弟一條愼三郎氏（現存、臺灣國語學校音樂教授）の談によると、一時十二冊迄は所持してゐたし、松代の自宅には二十冊位もあつた記憶があるといふ。それから卷第八は明治十三年六月刊行であるが、それから三年半も經た十六年十二月春松が松代へ歸省した時『哲烈』の談話が盛に出たことを、矢張り愼三郎氏が聞いてゐる。更にその後明治十八年愼三郎氏が初めて上京した際に、まだ完成してゐないらしく、春松の譯したものを從弟の藤岡甲太郎が命ぜられて文章をこねまぜ、春松の前に出しては叱られて又直したりしてゐたといふ。明治十三年六月の八冊きりで絶つたものなら、その後のかういふ事情を何う說明して可いか、明治十八年まで五年間一冊も出ぬのに尚ほ譯文をいぢつてゐるとは何うも普通では解し難い。或は何等かの必要上遂に舊稿を取り出して續刊

しようとしたものかとも思ふが、わからない。確證のない限り刊本冊數未定として置くより仕方がなからう。

假名垣魯文閲、三浦義方校となつてゐるが、三浦義方は同鄕の友人で飲み仲間であり、魯文とは義方を通して知つたものであらう、或は書肆の懇請で名をかりたのかも知れない。『哲烈禍福譚』の譯文の美は誰もいふことであり、それの功が大半三浦義方に歸せられてゐる。(飯島花月氏)。然し義方の校訂は第一卷以下に及ばなかつた(義方未亡人直話、昭和二年現存)といへば、第二卷以下は事實魯文が文章補訂に當つたものか。何れにせよ、元來春松の直譯文が立派なものであつたに違ひないことは、『哲烈禍福譚』を原文と對照してよむと直ぐに看取される。

出版者の太盛堂宇敷則明は長野の人、元の名源(或は元か未詳)之進といひ、春松の父嘉織の友人なところから、春松も種々世話になつた家らしい。此の本を出した頃は神田淡路町にゐたが、後銀座に移つて洋畫や額緣を賣つてゐたといふ。その後のことは知らない。

此書の奥附によると、春松はこの頃牛込市ヶ谷田町に住んでゐたが、後牛込赤城下に移つたものと見え、十六七年の交は既に赤城下に住んでゐた。

六

明治十六年十二月春松が松代に歸省したことを一寸述たが、これは上京以來最初の歸省であつた。春松は例の放蕩から藝妓落籍事件以後父嘉織に會はせる顏がないので、國に歸る機會もなしに數年過したが、此の年十二月三日祖母が歿したので、これを機會に歸省したのである。妻君のおしゆんと子供二人(須磨子と福彥(サチヒコ))、それに出

入の魚屋と子守を連れて同勢六人で大層な勢ひであつた。此時の春松は洋服斬髪になつたといふ。父も母も流石に喜んで歡待した。前後一ヶ月も滯在したが、毎日毎夜の振舞ひに、醫師金井御樹翁や、白井省誠翁、その他雅樂の音樂者が毎日來ては屢々音樂をやつて、中々盛大なものであつたといふ。

明治十八年には末弟愼三郎氏が春松の許に呼び寄せられたので、此の頃の春松の生活を好く知つてゐる。その一節を引いて見よう。「其頃兄は砲兵工廠内にあつた陸軍砲兵軍議所の飜譯官であつたのですが、本官か又は囑託であつたかは不明です、洋服でゆく時もあり又和服でいく時もありました。俸給は義姉即ちおしゆんさんが取りに行つたり、僕も使に行つたりしましたが、其時はいつも陸軍省へ取りに行きました。」

春松氏の同僚は四人ゐたが、中に漢文の方の係りに總生寛(フツウクワン)がゐた。「大奇人で大氣焰家、洋服を着たところを一度も見ません。時々來て大に飲み天下を罵倒して居ました、此人が四人の中で一番親しかつた樣です、其他陸軍側では原田一道といふ少將、此人が其時分砲兵工廠長だつたかも知れません、例の有名な原田直次郎畫伯の父君で時々馬車でやつて來て佛蘭西語の事を話し、又花形勝則といふ少佐「後に少將」、此人も絶ず來て金の事なども心配して呉れました。(中略)其時分兄は毎日行く役所の仕事の外、花形さんからや吉田だといふ人から頼まれて陸軍に關する飜譯を宅で大にやり、從兄弟たちも僕(愼三郎氏)も淸書を命ぜられ、三人時には四人、机を並べてドンドン兄のわからぬ字を淸書しそのお金をとりにあちこちへ使にいつた事があります。」(愼三郎氏對話)。

七

だが此の頃の春松の生活の中心は矢張り音樂、即ち雅樂の研鑽にあつた。

君は「樂」の爲めに學び「樂」の爲めに勉め「樂」の爲めに熱したりかの飜譯の如きは一家生計の費途止むを得ざるの手段に過ぎざりき故に官に在るの時と雖も出勤の途次フト胸中に浮び出づるあれば直ちに樂人の家に至りて晝夜管絃舞曲に徹するを例とせり。

春松の親友中村木公（千代松、前代議士、現に秋田魁新聞主筆たりと聞く）がかう書いてゐる（明治三十七年七月『日本人』第二百十四號）、正に此の通り、春松の生命は雅樂にあつたのである。

春松は明治初年上京以來、學事の暇、公務の間に宮內省の伶官各家に出入し（主として安部家といふ）、舞曲、管絃を學んだ。勿論物によつて精粗巧拙の別はあつたらうが、春松の天才の致すところは、大よその法を極めその術を得、此の間に一定の法則を發見して造詣次第に深く、遂に自ら自在に舞曲を製作するまでになつた。これは後のことであるが、愼三郎氏上京の明治十八年の頃には春松自ら龍笛を專攻し、妻君には篳篥、愼三郎氏には笙を學ばせ、同居してゐた從弟藤岡甲太郎、小幡虎之助には横笛を學ばせ、一家擧つて斯樂を修め、一日として管絃の音の揚らぬ日はなかつた。春松は既に此の頃から心ひそかにこれを一生の事業としてゐたらしい。春松の考へによると、我が國民風俗の正雅でないのは樂の興らぬによる。そこで一國の樂を定めて移風易俗に供ふるの要を認めて之が研究に當る必要があるのに、文部省は折角音樂取調をなすに際し單に歐洲樂に偏して毫も東洋樂、而かも建國この方日本に行はれた諸樂を顧みぬのは輕擧である。よし然らば自分は根本的に我が國風民俗に適切な音樂の取調を志さう、これが春松の雅樂研修の根底にひそむ大體の考へであつたらしい。（そのために令弟愼三郎氏を音樂學校に入學させたりした）。此考へが次第に明確な結果を生むに及んで『雅樂協會』の創立とな

り『國樂制定意見』の發表となつたのである。『雅樂協會』と春松のこと、及び『國樂制定意見』については別に述べることにする。

春松が如何に雅樂に熱心したか、その頃の空氣を髣髴させる爲めに、更に愼三郎氏の書翰を一節を引く。

「其頃兄の宅（牛込赤城下）でも時々樂會を催し、廣くもない宅、入口玄關を上つた處が四疊半か六疊、そこに僕等三人居る、次が八疊、そのつゞきが六疊、それから火鉢のある六疊位があり、それから下女室、勝手位のもの、その八疊六疊を合併し、赤毛布を敷きつめ、茶菓、そば杯を用意し、兄に姉に、從兄二人、僕、時々豐先生、多忠智（僕の先生はめつたに來ません）、又時には安部先生、それから山井基萬といふ樂師、此の人も有名な笛の名人、肥つた元氣のよい人、年輩は豐先生より、ずつと若し、その山井先生も來た事もあります、それで大合奏を屢々催しました。」

豐先生とは笛の師で宮内省樂師の豐時隣、多忠智とは同じ樂師で篳篥の師、僕の先生とあるのは愼三郎氏の笙の師で多忠功といふ樂師、安倍先生といふのは同じ樂師の重鎭で安部季方といふ人、篳篥の名人でもあつたといふ。又時々外へ出て合奏したこともあつた、一番多く行つたのは當時神田三崎町の南部伯爵家であつた。

その内に弟子ともつかず友人ともつかず、雅樂を習ひに春松の許に來る人が少し宛殖えた。『一方宅の方へは關口常信君（明治藥學校を經營した恩田重信氏弟）の先輩安川政二郎といふ神田神保町に化粧屋(？)を開いてゐる藥劑師あり、其人が毎晩の樣に來る、其中に久我仁吉とか石橋助三郎とか尾崎德太郎なんどといふ高等中學の學生が盛に遊びに來て、兄が居つても居らなくても從兄や姉を相手に、皆でマヽ、備さん歡はうといつた調子で、

盛にアメツチノー・ワカレシトーキユ・カミサビテー・ターカクタフトキといつた樣な唱歌を大に歌ひました。或は其尾崎だつたか石橋だつたかゞ金蘭會（稿者曰く、これは石橋の首唱に成る）といふ會を作り、芝の紅葉館で會を開き、兄も僕もゆき、又僕は笙を吹き、鼻眼鏡をかけた多分石橋氏と思ひます其人が演說抔やつた事もあります。僕は尾崎紅葉といふ名は後で知つて居ましたが、それが德太郎君であつた事に驚き、其石橋は同じく小說で有名になつた石橋思案である事を知つて感慨にうたれた事があります。」

此の時膝拍子をとつて唱歌を歌つた學生の一人に、後年春松の股肱となり現に松代雅樂協會の牛耳をとつてゐる長岡資二郎氏の令兄の茂太郎氏も入つてゐたのだが、その茂太郎氏も度々この尾崎、石橋のことを話してゐたといふ。硯友社勃興期の逸話として一寸面白いものである。

後年『雅樂協會』で用ひた新製舞曲は、勿論この頃はまだ製作されてゐなかつたものらしい。

春松は此の頃から變人で、役所に出勤するに帽子を戴かないので、花形少佐はいつかアンペラの夏帽を與へたところ、爾後四季ともそれを兼用した。又靴が足を硬く覆ふを厭ひ、新に買へば直に指先に三角の穴を切つて穿いた。愼三郎氏はよく此の靴を拜領して穿いてゐたが、必ず三角の繼革が當つてゐたといふ。

春松の容貌は中肉中背で、さう魁偉といふ程ではなかつたが、隆準にして方口、眼光炯々虎髯蓬々たる有樣は、一見して凡士でないことを想はせたといふ。

以上、私は宮島春松傳の第一期を書き終へた。爾後第二期の雅樂協會と春松、第三期の最後の春松に分けて、機を見て此の奇士の全豹を傳へたいと思ふ。（昭和三年四月稿、同六月明治文化研究第四年六號）

『雅樂協會』と宮島春松

一

此度執筆の分は、いはゞ宮島春松傳の中第二期に相當する部分であつて、大體明治二十年から明治三十年頃までに亘つてゐるが、春松一生の中、或は國樂制定意見の發表と爲り、或は『雅樂協會』の創立となり、いろいろの點で最も收穫の多い活動をつゞけた時代である。

明治二十三年頃から二十五年頃までは、春松の生活を知るべき資料が幾干もない。たゞ中村氏（千代松）や一條氏の語るところを綜合してみると、依然フランス文飜譯によつて衣食しつゝ、雅樂の研究に身も魂も打ちこんでゐたことだけは想像がつく。いな樂に熱中するの餘り、生計手段の飜譯さへ往々拋擲したらしいことも想像がつく。又此の頃は雅樂の達人として國士的人格者として相應の名を博してゐたらしく、教を乞ふ人、好みを同じくする人、其の人品を敬慕する人達が春松の家に頻りに出入してゐたらしいことも想像がつく。

この頃の春松がまだ陸軍關係のフランス文飜譯者として衣食してゐたことは、明治二十三年頃、補習の重砲兵隊に出張し、暫らくそこに滯在して飜譯の筆を執つてゐた（一條氏談話）といふ事實からだけでも推定がつく。又中村氏の『日本人』所載の追悼文中にも、「君は明治二十四五年の頃で牛込東榎町に住し當時は未だ飜譯職務中と見え、一家の生計狀態を失はざりし」云々とあるから、先づ形ばかりでも一家生計の道は講じてゐたものであ

らうが、何分前にも述べたやうに「官に在るの時と雖も出勤の途次フト胸中に浮び出づるあれば直に樂人の家に至りて晝夜管絃舞曲に徹するを例と」した春松のことだから「樂」の爲に他を眞面目に顧みないといふ態度に變りのあらう筈がない、中村氏の言ふやうに、「家計逼迫夫人の懇請再三次に及び漸く筆硯を見る」やうなことでは緩急其の用に應じなかつたのも無理がない。又飜譯の伎倆が非凡であつたからこそ、辭官後も節々飜譯の囑託に接したらうが、春松の飜譯に對する態度がかうなつて來た以上、囑託の仕事が日に絶えて、「一家八九人」の生計が困窮を極めて來たのは當然といつてよい。

だが春松の國樂制定の主張が漸く認められ、人格が識られて、敎へを乞ふ人々が次第に多くなるにつれて、感激家たる彼の「樂」に對する熱意がますます激甚となつた。事こゝに至つては最早や一家の生計の如き些事（春松にとつてのは）問題とならなかつたものであらう。「二十六年居を牛込より小石川表町善光寺の別房に移せる比ひは終日終夜管絃と親み、飜譯の如きは絶て顧みざる」に至つた(中村氏)。

此の中村氏の記事によると二十六年云々とあるが、事實は二十五年三月頃をもつて陸軍方面の關係の飜譯仕事が絶えたらしい（一條氏）。寧ろ自然に絶えたといふより、又陸軍方面から絶たれたといふより、本人の春松自身が絶つたものであらう。何故なら春松一代の事業たる『雅樂協會』創設の仕事がこの頃既に完成しかけてゐたか乃至着々進行中であつたらしいからである。春松はいよいよ現實を犧牲にして理想を追ふことに決めた。

こゝで私の筆が又一寸想像の世界に入るが、春松の雅樂研究にとつて、此の四五年間は極めて重要な時期であつたらしい。彼の樂理の蘊蓄が益々深くなると共に管絃舞曲の實技の奥祕を極め、獨自の國樂制定といふ立場か

ら雅樂の音律曲製作を思ひ立つたのは（或は內々手を染めたのは）、此の間のことであらう。又その國樂制定論が明確な理想となり、李白のいはゆる「大雅久しく作らず、吾衰へなば竟に誰か陳べん」といふ大きな自覺をもつて彼の胸も心も占領するに至つたのも此の間のことであらう。それだけに、此の彼の理想を說かれた人々は、當の自覺、彼の熱誠に動かされぬわけには行かなかつたであらう。事實又彼はその說、その主張を揭げて當時の名士達を訪問し、彼等の賛助を得たのであつた。丸山作樂、內藤恥叟、岡倉覺三、政敎社派の三宅雪嶺、志賀重昂、福本日南、內藤湖南、敎育報知の日下部三之助、中村（當時奥山）千代松などの人々は彼の意見に共鳴した當時知名の人士であつた。此の人々はそれぞれ『雅樂協會』の設立に、國樂制定意見の發表に、力を吝まず春松を助けたのである。

春松の服裝が甚く人と異つてゐたといふことは、前にも一寸のべたが、それでも、明治十六年歸省の際には洋服に散髮であつたといへば、まだまだ宜かつたらしい。ところがこの頃は總髮で、打紐か何かで結んでゐた、暫く經つと衣服も全く天平式に改め、闕腋窄袖の袍、細い指貫樣の袴を穿き、天平式の冠を戴き始めた、つまり岡倉天心時代の美術學校敎授制服と似たものであつた。彼は平生本邦の衣服の變遷的歷史をみゝし、殊に明治以來の馬乘袴の遺制などは口を極めて攻擊してゐた。その始めて岡倉覺三氏とあつたとき、春松は令弟□□氏の袴を借り、五十目の煙草を袋のまゝに袴に入れ、長煙管を腰にさし、座に上るやいきなり平氣で上座についたので、岡倉氏もその態度なり調子なりの高飛車なのに、これは狂人でないかと思つたといふ（一條氏談話）。

二

春松が雅樂研修の結果、雅樂をもつて「國樂」としなければならぬといふ見地に達し、遂にこれが具體化の第一着手として「雅樂協會」を創立するに至つた心的經過は、概略前章にのべて置いた。然し春松本來の理想からいへば、かゝる私設的小規模の「雅樂協會」を創立するのは、その志ではなかつた。春松自身としては、西洋音樂移入萬能の當時、即ち官の施設は勿論民間に至るまで西洋音樂の輸入模倣にのみ腐心してゐた當時、此の滔々たる風潮に逆行し反起して宮内伶官の各家を說破發奮せしめ、彼等悉くを網羅して、千有餘年の間たゞ雲上にのみ密封されてゐた斯樂を開放せしめ、進んでこれを根據として新樂を樹立し、西洋音樂は參考科目たるに止める程度の、統一ある一大日本音樂團即ち「國立雅樂協會」を建設せんとしたものであつた。

　これは勿論一私人の力に能ふやうな性質の事業ではない。當然國家の手を俟つ大事業である。春松とて勿論それは公邊の勢力に依らなければ行はれないことを承知してゐた。彼は國家を動かしてその國樂制定意見を行はしめる第一步として宮内省に着目した。さうして時の宮内省雅樂部長で掌典長を兼ねてゐた岩倉具綱公に謁してその抱懷を述べようとした。春松は此の一事のためにも可なり苦心したといふ。彼の風采の異常なのを見て、岩倉家の家扶家從達は彼の來意を公爵に取り次がうとはしない、これが幾度か繰返されてから、それではといふので兎に角長文の意見書を認めて公爵の一覽を乞ふ旨を申置いて歸つた。然し公爵からは何の手答もない。そこで春松は止むなく公爵が馬車で歸邸したところを待つて、公爵を玄關に要し、漸く應接間に入ることが出來た。公爵は勿論その意見書などは見てゐない。そこで春松はその理想を滔々と述べたところ、流石に公爵も春松の說に服し、援助の懇請に對しても出來るだけ試みる旨を誓つた。だが各伶官は何れも數百年間連綿と傳統を墨守して來

た所謂家元氣質にとらはれてゐるので、公爵が一場の說諭をした位では合流する筈がない。如何に雅樂部長たからとて各樂家の內心的感情にまで干涉することが出來る譯がない。それで公爵の盡力もやがて徒勞に歸し、春松の志が遂に成らなかつた。春松としては如何にも遺憾千萬であつたらう。然し雅樂の道が既に閉された以上、次善の道によつて我が志を行ふより仕方がない。そこで平生國粹保存思想の立場から春松の國樂制定論に共鳴してゐた學徒達の贊助によつて一の私設的雅樂協會を創立し、これによつて自分の意見を實行せんとしたのである。

岩倉公に面謁したのは何年頃か正確には分からないが、長岡氏の考證によると、明治二十六年以前、大體明治二十四五年頃のことではあるまいかといふ。

三

春松の「國樂制定意見」は、それが雜誌「亞細亞」（日本人の分身）に發表されてゐる點、此の意見の共鳴者達が大概國粹保存主義思想の持主である點、又それ自身一種の國粹保存思想である點からいつて、今日から見れば專ら此の頃反動的に頭をもたげて來た國粹保存思想の所產だとのみ見做し去られる懼れがあらう。然しさうばかり見做し去るのは、春松を誤ることだと思ふ。春松の見地は、深奧な樂理に對する彼自身の理解から生れたもので、いはゞ從前からの彼の持論であつた。それは國粹保存思想が勢力を得て來てから俄に工夫されたものではない。彼の研修の結果が自然に時の國粹保存思想と合致したものである。時世の叫びに驚かされた外的覺醒ではない、時世の叫びにその共鳴者を見出した內的自覺である。こゝは認めてやらなければならない。だが上に縷述されてゐるやうに、その自覺が時論の後援を得て大に强められたこと、その意見が世間に發表され、一時的にせよ

實行さへされたのは大に時論の力によるといふことも、同時に認められなければならぬ。これだけの斟酌を加へた上で、春松の國樂制定論を、當時の國粹保存思想が藝術界に及ぼした影響を語る最も代表的な現象の一つであると説くのであれば、穩當な見方といつて可い。

春松が明確に『意見』と銘をうつたその『國樂制定』の論を世に發表したのは明治二十六年四月で（四月より九月まで六回に亙つて雜誌「亞細亞」に連載された）、「雅樂協會」の發會式と同月であつた。私は『雅樂協會』のことを述べるに先立つて、雅樂協會の理論的根抵たる春松の國樂制定の意見の大綱を春松自身の言葉によつて紹介して見たい。春松の國樂制定論は此の『意見』の外に『國樂制定意見概案』（明治二十八年）がある。立論の根本は『意見』と同じであるが、順序に多少の相異があるので、この二篇を綯ひ交ぜにして紹介することにする。

春松は先づ「樂」とは何ぞといふ點から論歩を起す。——

樂なる者は生類情感の至醇なる發現にして、其の術たるや、外貌表相の現象を假らしすして直ちに生類先天の靈感に訴ふるに物體に存する玄祕なる內部の活動を以てするにあり。其の賴る所は連續せる動作にあり、其の要とする所は諧和せる運用にあり、故に普通に樂といふ者は專ら諧和せる音響より成る技術の謂なりと雖も、かの舞樂の如きも亦其舞容が表相の假模に藉らすして內部の活動を現はすを主とする者に在ては、固より樂の缺くべからざる一科となさゞるを得ず。姑らく普通にして且つ其の應用の最も廣きに取りて、音樂を主要として之を言はんに、六律六呂を經として之を緯するに五音七聲の變を以てするは、東西古今の其の理を同じうする所、嘗て其の變化を窮めて八十四調を得、之を以て樂律を論ずるに其の用洵に此に盡きたり。之を以て東西

古今音樂の變態を推すに、包ね擧げ併せ有せざることなし。之を以て生類情感の發動に擬するに、盡く當らざることなし。斯に知る、世に謂ふ所正雅の樂と云ひ、淫靡の音と云ふ者、盡く此の八十四調の一に屬して、其の術の變化よりして之を論ずれば、苟くも其の音の諧和を失はざらしめば此を取り彼を捨つるに足る者にあらざること、猶ほ生類の情感や喜怒哀樂高雅鄙猥一として本具の性能にあらざることなきが如くなるを(概要)。

春松は論歩を進めて、音樂の極致上正樂と淫樂の區別あることを說く、——

但古人の生類に於けるや、其の抜て而して其の上に位する所以の者、實にかの喜怒哀樂の發して而して節に中ることを能くし、其の鄙猥を去りて其の高雅に就くことを得るに在らば、則ち人間の音樂ある、八十四調悉くすべからざるなしと云ふと雖も、其の擇て而して取るべき者、自ら存する有り。其の淫靡を抑へて而して其の正雅を長ずべきは、固より其の所たらずんばあらざるなり。又かの音樂の極致とする所は、外貌表相の假藻に藉らずして而して高山流水峨々洋々、各々其の內部玄祕の性質を得るにあれば、曲技術巧、繁絃急竹、天生の音響を枉げて奇異の擬聲を爲すは、其の術の高妙を刊りて鄙污に就く者なり。而して此等の術巧は、卽ちかの淫靡の音と相表裏す。此れ實に俗樂の由て成立する所の根底にして、苟くも人類の至精の抒情を表する至高の一科として痛く甄別を加へざるべからざる所なりとす(概要)。

春松の論は更に進んで敎化の要素としての正樂淫樂の取捨のことに及ぶ、——

樂を以て敎化に資し、所謂風を移し俗を易ふるの用たること古よりして已に然り。近世に及で樂の用益々廣く其の通邑大都は殆ど戶ごとに絃歌の聲を聞かざるなきに至る。或は世の古今を分ちて、雅樂の時期、俗樂の時

期、繪畫の時期とし、遷して而して降り、乃ち近世を名づくるに音樂の時期を以てする者あり。其の國風民俗と相關ある、斯の如く其れ殷なりとせれば、則ち國家の樂を制するや、宜しく擇て正雅雍容情性の和を得る者を取るべく、淫鄙儇巧鄙劣の情を興すべき者を避けざるべからず。乃ち人情の偏し易きや、森嚴莊雅に安んずるに堪へずして、往々詼諧幻詭を喜び、動もすれば、輙ち淫靡輭柔に流るゝことを免かれずと雖も定めて國樂と爲し、教化の具とするに至ては、決して俗好に徇へて其の精粹を汚すべからず（概案）。

論はいよいよ國樂制定の標準に達する、——

意ふに、八十四調の多き、樂の淫に脫（原文ノママ）する者、必ずしも一端に限らず。或は壯快、或は凄涼、或は宛轉纖妙、或は雄渾、或は莊雅、或は情悠閒遠、各々其の趣を得て皆聲音の正を失はざるも、風土の異なる、人情の同じからざる、人既に各々其の好む所を分ち、邦も亦其偏ぶ所を岐す。是に於てか、彼れ或は壯快凄涼宛轉纖妙情趣躍々たるを美とし、而して此れ或は雄渾莊雅情悠閒遠優遊して迫らざるを善とし、彼れ此を縵とし、此れ彼を卑とし、相容るゝ能はざるに至る。偏する所あるを免れずと雖も、人の能を成すや、其の偏に由りて曲を致すは適々世に棄材なからしむる所以にして、國の風を爲すや、其の俗に因りて文明を致すは適適各々天地の化育に參せしむる所なれば、國の樂ある、其の俗の好む所に因りて之を長するは固より一種の極致を成就するに益あり。若し更に其の有る所諸國樂を併せ稽へて其の善を簡取し、又八十四調の變を窮めて其の最も雅正高尚の者を擇ばゝ、國樂を制定するの標準斯に遺憾なしとす（概案）。

春松はこゝで論歩を一轉して然らば何をもつて國樂とすべきかといふ具體的問題について論する。先づ國樂制定

について三説の成り立ちを説き、その三説の大意を擧げて一々評を加へ、最後にその意見を述べてゐる。第一は歐洲樂贊成論者の主張を説いていふ、――

第一純然たる歐洲樂を以つて國樂と爲すべし。但、歌章は邦語を用ひ、俗樂は其歌詞音律の淫野なる者は、改良して行ふべし。

其説に曰、音樂の大源は、之を印度に發し、一は西に走り、埃及、希臘を經て、今の歐洲樂となりて、我國へ輸入し、一は東に走り支那を經て我に來り、雅俗の二樂となれり、然れば、其源原と一にして別あらず。今歐洲樂を以つて我雅俗の二樂に比すれば、彼樂の進歩發達、其差實に霄壤萬里、到底我及ぶ所にあらず。果して然らば、我樂を進むるの勞を徒らにせんより、寧ろ彼樂の進歩せる者を採るの易きに若かずと。

第二には俗樂改良論者の主張を説いていふ、――

第二俗樂中の粹なる者を採り、歌詞音律の善ならざる者は、之を改良し、以つて國樂とすべし。

其説に曰く、我邦最も普き者は、俗樂に若くはなく、感情を發せしむるの甚しきも亦然り。然れども、俗樂には其歌詞に淫風甚だしきあり、音律亦不良なるあり。若し此二者に改良を加へば、國樂として恥る所なしと。

第三には雅樂贊成論者の主張を説いていふ、――

第三雅樂を以つて、國樂とすべし、俗樂の如きは、淫野甚だしき者を改良して行はるゝに任すべし。

其説に曰、雅樂は純然たる正雅の樂にして、古來朝廷用ゐらるゝ所なれば、今日既に國樂たり、然れども一般教育上に行はれざるを以て、眞の國樂の名を命ずべからず。其改良等を俟たず、直ちに採て教育に用ゐるべし。

毫も妨ぐる所なしと。

これから以上三說の分析論評を試みてゐる。先づ第一說の評にいふ、——

先第一說の如きも、一理なきにあらずと雖も、音樂は數理物理の如き、專ら理論を旨とし其適否東西を論ぜざるものと異なり、所謂術にして能く其國民の情態風俗に適し、又且以て國民の國家的頭腦を鍛冶せざる可らず。今假に彼の說に從ひ、音樂は一源に發したる者と做すも、今日旣に彼我樂樣雲泥の違あり。是れ皆國民の風俗情態に準じ變轉せる所ならん。尙且歐洲中同一揆の樂を用ふる國にありても、各々其國味を帶び、旋法を採るに至りては、大に別あり。

といひ、獨、佛、伊の例を擧げ、更に歐洲樣の我に適せざる原因を三擧げてゐる、——

加ふるに彼樂の我に適せざる原因三つあり。一に曰音色、二に曰作樂、三に曰財用、是なり。

第一音色に關しては、東西人種旣に別あり、毛髮瞳眼皮膚皆其色を異にし、聲音の色亦一なるべからず。隨て樂器に及ぶべし。歐人を師として其音聲を學ぶは髮に朱を注ぎ眼に藍を點じ膚に白を抹ると一般毫も選む所なからん。彼樂を學ぶには彼を師とせずして誰をか師とせん。此は彼此の辯を俟ずして明なり。

第二作樂に關してや、十二律及び七音の如きは東西別なく何れも樂曲を作るに此七音を用ふること天爲と謂ふべし。然り而して此七音の段階を立つる所の音階、即ち旋法に至ては差あり。是其國風の存する所なり。(中略) 七音中五音を正音(全音)となし、二音を變音(半音)となし、我にありて五音を補佐するの音となし、彼にありては潤色若くは裝飾の音となす。其實一なり。然れば五音は主たり正たり、二音は補佐たり潤色たり。

然れども物の完全ならんには補佐も潤色も亦缺くべからず。故に樂曲を作るに、正音を體となし、變音を補佐となす。彼亦然り。然るに我樂曲を作るや、此變音を用ふること極めて少きも、彼の樂曲を作るや、之を用ふる極めて多く悲哀の曲に至ては、益々甚だしと云ふ。旋法既に用べからず、今又作曲上に此異なるあり。然れば樂曲既に作成りて之を奏し、人心を感動せしむるに至つては、大に別あらずんばあらず。大にしては、遂に風教上に波及するに至る。重んぜずんばあるべからず。約言すれば、我樂は淳朴なり、彼樂は華浮なり。我淳朴を捨てゝ、彼の華浮を採らば如何、樂は移風易俗の効驗ありとは、先賢の格言ならずや。第三財用に關して歐洲の樂を用うれば、器具樂師悉く彼に仰がざるべからず。是國の財政上より見るときは、大計を誤る者と云ふべし。或は月年を累ねば器も師も我に成らんと。其年とは何の年を指すや、今期すべきなし。已上論ずるが如く、果して然らば則ち如何に進歩せるも、純然たる歐洲樂を採用して、我に適せざるや明かなり。此に於て第一説の如きは、全く排斥すべきものとす。

春松の批評は第二説にうつる、曰く——

第二説にありてや、俗樂中の粹を採ると。其粹とは何をか指すや。曰今俗樂の著き者は曰能樂、曰箏曲、曰長唄、曰淨瑠璃類是なり。此中何れを粹と云ふや、余を以て見るときは、國樂の名を命じ、教育に供せんとするに臨では、一も採るべき者なく、若し又改良を加ふるも亦然り、今其理由を陳て此說を駁撃せんとす。能樂以下淨瑠璃類に至るまで、何れの樂にもあれ、一致點とする所は、歌章を唱するに必ず作り聲を用ひざる者なし、俗樂の取捨は、此一點にして既に明かなり、自餘は皆從屬のみ、若し此作り聲を厭せば、俗樂の俗樂たる風味

を失し、地を拂ふて滅するに至るや必せり。此作聲に興味あるを以て、下流に行はるゝこと現時の如く普きなり。能樂の如きは歌詞に猥褻なきも、其已下に至ては、甚だ淫奔なる者あり。故に世人多くは此淫奔なる歌詞を改むれば、正雅の樂たるべしと思ふ者あり。是蓋俗樂の何者たるを毫も解せざるの誤と云ふべし。何んとなれば、音樂は音律の妙を以て人を感ぜしむる者にして、音律を以て第一となし、歌章の如きは之に亞ぐ第二の者なり。然れども此音樂も亦樂章に伴ふものにして樂章音樂相離るべからず。歌章淫なれば、之を唱するの音律も淫、歌章正なれば、亦正なるは物の自然なり。試に見よ、俗樂中歌章を有せざる箏、若くは三絃等の曲ありと雖も、皆其聲淫なり。即ち聞く人をして淫情を發せしむ。歌章なくして然り。是其證なり。能樂の如きは謠曲の音、並に樂器の聲、舞曲の態様、何れも殺伐怒るが如しとは、既に識者の評する所なり。然れば俗樂今天下に普くして又能く人の情を惹く之に若くなしと雖も、其情を惹く却つて淫情を惹くものにして正雅の観を起さしむるにあらず。又歌詞音律を改め、教育に適するの度に達すれば俗樂の興味を失して感情を惹起する力なきに至るべし。又俗樂中、音樂として最上位を占むるは箏曲なりと雖も、是亦概して古來婦女子の玩操に供せる者にして、其聲音極めて柔弱、又其從たる歌詞に至りても、雅言なりと雖ども、多く淫奔怨悲の情を含めるものゝみ。事皆上論の如くなれば、此第二説も亦全く擯斥すべきものとす。

第三説の批評に至つて、春松は、此の説は最も當を得てゐるから、此の一説を採るべきであるといひ、その理由をかう語つてゐる、——

雅樂には先第一に前章所載の如き作聲あることなし。是即ち雅樂の雅樂たる所以なり。歐洲樂にあるも、俗間

無教育の社會に行はるゝ樂は知らず、教育上に行はるゝ者にありては、此作爲寸毫も藉く所なし。素より教育は自然を敎ふる者にして、人爲私作の事を以て敎うべきに非ず。必ず天理天性に據らざるべからず。故に天賦自然の音聲より成立する樂にあらざれば、教育の料に資するに足らざるなり。我雅樂は剛強にして俗樂の柔弱なるの比にあらず。或は史乘のみに由り、今傳來する雅樂を味はざる者の說には、かの藤原氏の柔弱、源平氏出て、音樂も定めて柔弱に流れしならんと。然るに然らず、此の然らざる所以は、樂は當時廣く行はれ、源平兩氏中嗜まざるものなきの勢なりしかども、雅樂の大源なる者は、伶官の特有にして、著しく世の風潮に關からず。伶官、器大ならずと雖も、古來其妙所を極めたる者陸續輩出して、樂道の大本を失はず。降りて今日に及べり。是雅樂の著しく世の風潮に關せず、柔弱に流れずして、剛強を保ちし所以なり。雅樂は我樂なり、今より振興し、發達の途を計らば、其の成果を見るの遠かなる、不適の歐洲樂を學んで、其結果を求めんとする同日の論にあらざるべし。又雅樂を用ふれば、樂師、樂器、悉く内國にして辨ず。是財政を誤らざるものといふべし。

春松はそれより進んで諸樂の律を論じ、更に一歩進めて我が國に現今行はれてゐる雅樂、俗樂、歐洲樂の「起原沿革、作用、現狀、節奏、趣味、樂器等」を舉げて對照的說明をこゝろみた後、遂にかう斷案を下してゐる。曰く「歐洲樂の我に適せざるのこと亦總論に詳かなり。右雅樂を除くの外何れの樂も將教育に適すべからざる者なれば、雅樂を以て國樂と制定するの他復た途あるべからざるなり」（意見）。

更に餘論として、春松は當時文部省の音樂教育を一種の國樂制定事業と見る立場から批評し、——

學制の更新するや、樂の教化に關すること大なるを察し、學校の教育唱歌の一科を設け、文部省は特に音樂取調の事業を興して國樂制定の端緒を開けりと雖も、其の東西古今の樂を併せ稽ふるの跡甚だ草率に屬し、隨て趣舍採擇の際未だ歉焉を免れず。其の目的とする所は、單に西國の音樂を採て之を我邦に應用するの術を講ずるに在りて、我邦の樂を基として之を施行するに西國の教育法を參するに在らざりしが如し。蓋し當時西國の文物を輸入して生呑活剝を愼しまざる者、獨り音樂のみならず、音樂も偶々其の習風を受けしのみ。其の後に迄で、稍々國風民情の存する所を揆り、從前在る所樂器詞曲に擇で所謂改良なる者を施すや、仍ほ此の邦の曲調を狂げて他邦の樂律に合せしめ、彼邦の樂器を改めて此邦の旋法に從はしめず、又專ら研究の料を近代の俗樂に資り、少しく點竄を加へて俗耳に近からしむるのみ。未だ嘗てかの太古正雅の音を改めざる雅樂を採て、之を研究して之を教育に施す所以を講ぜしことを聞かず（概案）。

といひ、又

夫れ雅樂は多く唐に取ると雖も、彼土と本邦との好尙同じからざる律聲呂聲の多少、古已に論ずる者あり。況んや西洋音樂の中、其の曲批衒巧を算する者は、我が俗樂と大差なき者あり。其の然らざる者も、喜ぶ所は壯快淒涼宛轉纖妙情趣躍々たるに在る者の若く、我に在りては、其の淺露を嫌ふ所とす。之を我が雄渾莊雅情悠閑遠優遊して迫らざるを尙び、尤も含蓄を好む者とは、大に間あり。又下りて我が俗樂の浮艶巧冶懷婉悱惻に心醉する者の好みに投ずるを得ず。故にピヤノ、ヴァイオリンの技往々秀絕の者を出すも、士君子の樂む所は竟に此に在らず。子女の學校に受くる所は父母の耳に合はずして、校舍の風琴歲々に增すも通衢狹巷常盤津淸元

の続歌少しも減ぜざる所以。此の若きは未だ以て國樂制定の教化裨補の目的を達したりと謂ふべからず（隠軍）。

といつて、西洋音樂採用の不結果を述べてゐる。

以上は春松が國樂制定意見の大綱である、これを原理として發現した『雅樂協會』の活動を述べるのは、寧ろ私が本稿を草した眼目であるが、春松の國樂論を紹介してこゝまで來たので、私の筆もいさゝか倦んだ譯である。讀者諸彦の頭腦は或は私の筆以上に倦怠を覺えてゐるかも知れない。よつて『雅樂協會』の活動の記述は次回にゆづる。（昭和四年五月明治文化研究第五年五號）

こゝまで書いて來て、私はつひ多忙や他事に深入りした結果、未だに春松傳を完成出來ずにゐる。甚だすまぬ氣がするが致し方がない。春松は此の後協會のため經營と創作と兩方面に奮闘したが、思ふやうにならず郷里松代に引退し、明治三十七年五月二十三日長野で歿した。雅樂協會と春松の晩年のことは又他日何かの機會に詳しく申上げる機會があると思ふ。（昭和十年一月追記）

松島剛

『社會平權論』譯者

昭和二年八月十六日、吉野先生、吉田文學士及び私が、府下駒澤新町に松島剛氏をたづねていろいろな御話をうかゞつたついでに、氏の履歴の大概を筆記した。本稿はそれを淨寫したものである。(昭和三年三月　明治文化研究第四年三號)。

一

松島剛、私達は普通氏の名をゴウと讀んで平氣でゐるが、これは漢音でコウと讀むのださうである。

松島氏はもと紀州藩士で元の名は辰三郎利道(としみち)、明治六年に今の名に改めたのである。父は欽右衛門利忠(としたゞ)といつて、藩主の近侍であつた。父欽右衛門君は元來は紀州宗家の家臣ではなく、分家の松平左京太夫の家臣であつたのだが、宗家の家茂が德川宗家をついで十四代將軍に直つたので、紀州の本家は分家の左京太夫がつぐことになり、近侍欽右衛門君もそれについて本藩の家臣に直ることになつたのである。此の時、剛氏は五歳であつた。生れたのは安政元年十月二日、江戸青山松平左京太夫の邸内である。

剛氏は七つ八つの頃から藩儒について漢學を勉強した、剛氏の先生になつた人は元江戸の鹽谷宕陰の塾頭をつとめた上田章(あきら)といふ學者で、當時藩學の牛耳をとつてゐた。此上田氏は現商大教授上田貞次郎氏の父君であるといふ。

剛氏が十二三位の時といふから、丁度慶應二三年頃のことであらう。松島家の親戚に幕府開成所の幹事をしてゐる人があつて、その人が氏の父君にかう勸めた、「此の頃は何でも洋學のことだ、武士としたところが、幕府を始め洋式調練となつてしまつた、だから子息さんには何うでも洋學をさせなさい。」剛氏の父君は、その人の忠言を納れて、剛氏に開成所でフランス語を勉强させることにした、そこで剛氏は毎日赤坂の藩邸から九段の開成所まで通學することになつた。

此の頃の開成所では、フランス語勉强の學生は三四十人ばかり、敎授には柳河春三、助敎授には後に明治文政敎育方面に忘れ難い功を殘した辻新次氏もゐた。又同じ紀州藩の出で山本長鹿といふフランス語の敎師などもゐた。剛氏はこゝへは足かけ二年、戊辰の年まで通つた。學問は大したこともなかつたが、文法書位は卒業してゐた、日本出來の書物で『法朗西文典』といふ二冊物だつた。字書としては村上英俊先生の『佛語明要』が一部つきり、英語の方も當時の書生の手に入ることの出來るものは例の和紙横綴の部厚なもの一部ぐらゐよりなかつたのである。當時開成所内ではオランダ語が特に重視されてゐたので、特に此の科だけガラタマといふオランダ人の敎師が居り、夫婦で所内の官舍に起臥してゐたが、剛氏など夏方よくガラタマ夫婦が揃つて散歩に出かけるのを見たものであるといふ。住舍には普通の日本家屋にペンキなどを塗つて住まつてゐた。夜毎外出の時には幕府保護の任につくため、別手組といふ一種の護衛巡査めいたものが付いたのである。

そのうちに明治戊辰の年になると、定府の者は皆和歌山に引上げることになつた。和歌山の學館を觀光館といつたが、丁度この引上連中のうちには山本長鹿なども一緒にゐたので、此の學館の一室をフランス語敎室にあて

て藩の有志子弟に勉强させることになつた。剛氏はこゝで引つゞいてフランス語を勉强してゐたが、張合拔けといはうか何となくフランス語に興味がなくなつたので思ひきつて止め、それから前後三年間ばかりは專ら漢學漢詩文の方に凝つたものである。

當時和歌山藩大參事は津田又太郎（後に出(いづる)、陸軍少將まで昇る）といふ人であつたが、これが仲々の英物で、先づ和歌山藩の兵制改良を企て、ケッピンといふドイツ士官（當時少佐位）とドイツ靴工二名をドイツから雇入れ全藩の兵制をドイツ式に改めた。兵士の採用方もたゞ舊士族の者から取るといふのではなく、主旨は今日の徵兵と同じことで、士農工商の差別なく採用することにした。さうして士官養成には別に兵學寮といふ士官學校が立てられたが、剛氏も選拔されて此の兵學寮に入つた。此の頃の兵式制度は成績仲々見るべきものがあつた。實際傍で調練をみてゐても恰もたゞ一人が操作するやうで氣もちがよかつたといふ。その代りケッピンの仕付も嚴酷無類のものであつた。練兵の際に何か不揃ひか無器用な眞似でもすると、馬上からその兵士をピシピシと鞭打する。或る時など何んな咎を犯したものか知れないが、兵士を樹上につるし、下から火を燃していぶし責めにしてゐるのを見たことがあるといふ。

剛氏は兵學寮に入學したが、軍人になるのは素志ではなかつたらしい。明治四年、紀州藩では三大隊位獻兵することになつたが（工兵隊には見るべきものがあつたといふ）、上官から剛氏に、少尉にしてやるが獻兵と一緒に上京せぬかと勸められた。剛氏は反對に軍人志願の抛棄を申出で、英學修業の目的で上京することに決心をした。それも上京して暫時英語を勉强したら、何とか傳手をもとめて洋行しようといふつもりであつた。然し獻兵

仲間は元々同藩の知己ばかりが行くのだから、隊長に頼んで、同じ船にのせて東京まで連れて行つてもらふことにした。品川に上陸したのは丁度明治四年の十二月四日で、雨まじりの霙が冷たくふる日であつた。

二

獄兵は品川に上陸はしたが、萬事草創の時代だから獄兵を收容する營舍などはない。そこでその日は一同品川の女郎屋に宿泊した。剛氏も知己の將校と一緒に待合茶屋に一夜を明かした（勿論何も遊興したわけではない）。翌日漸く行く先が定つて、雪中を歩いて和田倉門見附外の大名遠藤侯の邸に入つた。剛氏も他に行くところもなしするから、當分は此の軍人のところに寢食してゐた。

やがて、その知己の將校と共に築地の小田原町（今の新富町邊）に下宿した、家は醬油屋であつた、當時專門の下宿屋がないので、皆こんな所に下宿したものであつた。

丁度此の下宿の近くに、共慣義塾といふ塾があつた、明治五年に剛氏はこの塾に入學して、こゝに寄宿し、專心英語の勉强にかゝつた。これは新富町の女郎屋を改めたもので、生徒などの噂では、福地櫻痴が經營してゐるものといふことであつた。然し眞否は不明で、剛氏などこゝで櫻痴の姿を見たことはなかつたといふ。間もなく塾は湯島天神に引越したので、剛氏もそれについて行つて依然英語勉强をつゞけた。塾の學生は二三十名、そのうちに南部侯の令息が一人ゐた。その他南部人の生徒は五六人ゐた、教師にも一人南部人がゐた。明治六年四月の東京諸學學費便覽によると、此の塾の塾主が華族南部信民とあるが、大方かういふ因縁から南部人が多かつたのでもあらうか。今からいへばいふに足らないが、これでも當時は慶應、同人社、共慣と並稱されて、三大塾の

一つといふ名があつた(談のまゝ)。尾崎學堂氏が後に慶應義塾の學生のまゝで此の塾の先生となつて、何か面白い失敗をやつたことがあつたと聞く。

此の塾に暫らくゐたが、何うも教師が思はしくないので、芝の愛宕下の勸學義塾といふ方へ轉じた。この塾は大名遠藤侯のつくつたもので、今の仙臺邸のあたりに相當してゐたといふ。此の塾の方は生徒も可成りあり、教師も相當な人物が居り、時には外人教師も來た。尤も此の塾でも教へるところは、共慣と同樣、たゞ譯讀の一科だけであつた。だが今度は家事の都合で折角落ちつかうとした此の塾にもさう永くは居れないことになつた。

元來剛氏の上京は洋行目的の英學勉强といふのであり、機會さへあれば英學はどうあらうと先づ洋行をしたいといふ素願である。そこで上京後間もなく同じ和歌山出身で神奈川縣令をしてゐた陸奥宗光に洋行がしたいものだがと相談した。と、陸奥がいふには、洋行は大によろしい、但し何も知らずに彼地に行くと雜役に使はれるだけで益がないから、少し英語を學んでから行くがよからうと。そこで剛氏は東京に止まつて英語の勉强に專念することになつたわけである。ところが、始め上京の時には、さう長く東京にゐるつもりはなくて來たのであるから、家を出るときには、僅か五十兩か百兩の金を學資にわけてもらひ、これで萬事やるから安心されたい、洋行の方は無錢でゞもやつてみせるからといふやうな意氣込みで出て來た、然るに豫定の計畫が豫定通り實行されずに止つて學校勉强を長くすることになつたので、つひ持つて出た金だけでは不足になつた。それでその不足を國元から給與を仰いでゐたが、國元とて剛氏の所謂貧乏士族のことだから、さう長くみつぐことは出來ない、勢ひ折角の勸學義塾にも永くゐることは出來なくなつたのだ。

此の頃の剛氏の生活はといへば、一月も入湯をせぬこともあり、冬など寒さ凌ぎに宵から夜具にくるまつたまゝ讀書し、眠むくなると水で顔を洗つて又讀書をつゞけるといふ風であつた。尤もこれはこの頃大抵の書生の常習であつたといふ。困つたのは書物の少いことだが、それでも剛氏はこの頃までにグードリッチの歴史物、「英國史」、「佛國史」、『希臘史』とかいふものを讀破し、ホワイトの『萬國史』やクワッケンボスの『物理學』なども一通りは讀むまでになつた。

さうしてゐるうちに學費がないので、いよいよ東京には止つてゐられなくなつた。丁度その時友人の石川縣出身の學生に、石川縣にも英學校があると聞いて、その學生と二人徒歩で遙々金澤まで行つてみた。成る程城内に英學校がある、教師にも慶應を卒業した可成りな人物もゐる、これは可い、こゝで一つ勉強しようと思つたが、東京で出來ない事が金澤に來たから出來るといふこともなく、矢張り學費の出所がなくなつたので、結局和歌山に歸ることになつた。

だが和歌山にも幾らもゐなかつた、今度は近くの大阪へ出て來たのである。當時河口居留地にゐた英人ウイリアムが主としてバイブル・クラスを主宰する傍ら、志望者には英語を教へてゐた、剛氏はこのウイリアムの許に出入して英語英文を正則に學び始めた。これは明治七年のことである。丁度その頃、堺に堺縣（河内、和泉を司配す）で立てた河泉學校といふ英學校があつたが、都合よくその學校で給費生を募つた。剛氏はこれに合格し、この學校で一年位勉強した、こゝは仲々好い教師がゐた、外人にはロンドン生れのグレイリといふ教師が居り、日本人には小泉敦といふ教師がゐたが、此の小泉氏は當時としては有數の英語學者であつた。

此の學校に一年ばかりゐるうちに、縣の經費の關係で學校が廢止となつた。それで剛氏は外人教師のグレゴリと共に又東京に出て來た。始め暫時グレゴリ氏の家に同居してゐたが、やがて慶應義塾に入學した、慶應では學生として勉强する傍ら、幼稚舍の教授をやつた。此の時、慶應義塾では學級が一級から五級位まであり、最下は五級、最上は一級であつたが、剛氏は學力秀拔の故をもつて直に第二級に編入された。これは丁度明治八年頃に當る。當時の學生には岩崎久彌、松平侯爵、黑田長成、門野重九郞、武藤山治、毛利五郞、小早川四郞などゝいふ人たちがゐた、尾崎氏は少し下級であつたかと思ふ。同級には柏田盛文や後に橫濱高等商業學校の校長になつた美澤進などゝいふ人たちがゐたと記憶する。

剛氏は慶應に二年程ゐたが、神經衰弱のために卒業間際といふところで退塾した。

此の頃の慶應義塾は、毎週一回演說會があり、福澤先生や學生有志が熱辯をふるふので仲々盛大なものであつた。學科の方はまだ規則立つたり秩序立つたりはせず、亂讀一點張り、歷史、地理、萬國公法、倫理、數學、さてはアナトミイまで及んだが、かう一見無秩序亂雜なうちにも、自然後々のためには益になるものが何か養成されてゐたらしい。試驗は主として譯讀力を試みるもので、今迄濟んだ本から試みるか、まだ讀まぬ本を下讀みさせて試みるかする類であつた。

三

此より前、慶應義塾の重立つた生徒間にバイブル研究熱が起り、日曜日毎に築地の西洋人タムソンの許に通つたものである。ところが剛氏在學のころになつてバックルの『英國文明史』が入つて來ると、義塾內の空氣が俄

然一變し、バイブル研究などする者が火の消えたやうになくなつた。ところが剛氏はペッタルをよんで却つて西洋文明とキリスト教の關係に着目し始め、これはキリスト教の思想も一通り知つて置かなくてはならないと考へたそこで塾の生徒が誰も行かなくなつたころ、剛氏が一人却つてタムソンの許を訪ねた。それはバイブルの知識を得るのが目的ではあつたが、英語練習といふ副目的もあるにはあつた。とにかく三ヶ月か四ヶ月タムソンの許を訪ねたところ、タムソンは剛氏に洗禮をうけよとすゝめる、タムソンは長老派教師なのである。剛氏も兎にかく受ける氣になつてそれを承諾した。ところがその受洗當時妙な出來事が起つた。

此の日氏と一緒に受洗したのは、中川愛喚といつて十五六の少年であつたが、これは神田淡路町の中川牛肉店の息子さんであつたとかいふ。兎にかく此の中川少年の方が無事に洗禮が濟んで剛氏の番になつた。先づいろいろ信仰とかその他の事について教師との間に問答がある、大概滯りなく濟んだが、最後に一つ教師はかういつた、今後日曜日には必ず教會に來るかと。剛氏の答へにそれは自分としては必ず來るつもりではあるが、今こゝで必ず來るとは斷言が出來かねるといつた、何故といふと、いかに日曜でも、時として父母の命を奉じて外出したり仕事したりしなければならぬことがあり、時として家事都合上外出を許さないことがあることもあらう。從つて今こゝで必ず來ると誓つても、若し來られないときは神明を欺くことになるから、さうと斷言は出來ないと。教師はいふ、それでは困る、洗禮を受けさせるわけには行きませんと。そこで剛氏は、キリスト教がそんな窮屈な形式に拘はれたものとは知らなかつた、そんなものなら此方から御免を蒙らうといつて、洗禮を止めて歸つた。同時にバイブルもキリスト教も抛擲して顧みなくなつた。そして宗教をすてた剛氏は安心立命の道を情操にもと

め哲學書を頻りに耽讀し出した。剛氏が氏の名と離るべからざる緣故を結ぶに至つた『社會平權論』の原本英國哲人ハァバァト・スペンサァの大著『ソーシャル・スタチックス』を讀んだのも、正に此の時である。

四

剛氏はスペンサァの大著とかういふ機緣で相知つたが、その說に大に共鳴した。それで此の書を大に研究したわけだが、研究すればする程面白い、剛氏は心ひそかにこれを譯してみようかと思ひ立つた。それは丁度明治十三年のことである。譯して三分の一程のところに至つたときに、かねて此の事を知つてゐる友人川端久輔（後に大藏省御用掛）に見せた、川端氏もこれを讀んで大に感心した。處が此の川端氏はその頃京橋日吉町にあつた報告堂といふ出版書肆の知人であつたので、いつか剛氏の手許にかういふ書物の譯稿があるといふことが報告堂の主人（大野堯運）の耳に入つた。そこで報告堂が川端氏に連れ立つて來て、是非それを出版させてくれないかと交渉をもち込む、川端氏も傍から頻りにすゝめる。剛氏がまだ早いからとか、至つて拙稿であるからなどゝいろいろ固辭したが聞き入れない。たうとう出版することになつた。題名は始めは『社會平衡論』、後に出版の時に『社會平權論』と改めた。全部を六冊に分け、毎卷定價二十五錢、稿料は一冊について二十五圓宛の約束であつた。かうして第一卷の出版されたのは明治十四年五月二十日である。

明治十三四年といへば國會開設論やら自由民權論やらが大に沸騰しかけた時である。そこへ此の『社會平權論』が現はれたのであるから世間が大騷ぎして歡迎した、何よりも此の平權の二字が有志家の頭にピリッと響いたのである。發兌元へは諸方から注文が夥しく、注文狀が文字通り山積した、いくら刷つても足らず、市內の本屋は

わざわざ詰め切りで製本の出來上りを待つといふ騒ひで、大變な賣行きであつた。土佐の立志社などゝいふところからは電報で何十何百とまとめて注文して寄越した。と同時に譯者たる剛氏に對する原稿請求の書簡が雨のやうにふつて來た、中には何か剛氏を感違ひして邊國の過激志士と取違へたやうな手紙もずゐぶんあつた。出版元の報告堂が大乘氣で次を次をと大催促をする、それで稿料なども約束の二十五圓がだんだんせり上げられて、たうとう全部で二千五六百圓も貰つたといふ。剛氏の著書や翻譯に興味をもち出すに至つたのは、全く此の『平權論』の成功による。この書は後に自由閣その他の書肆から出版されたものもあるから、總體としての部數は何十萬册に上るかわからぬといふ。

翻譯草創時代に第一に苦心を要するのは、譯語の語彙の少ないことである、剛氏も此の點では少なからず苦心をしたものであるといふ。それでいろいろ新譯語を考へ出した、無視する（ignore）などといふ語も、此の時剛氏が始めて用ゐたものであると聞く。

兎にかく此の書が當時の社會に多大なショックを與へたことは事實である。當時板垣伯が此の書に心醉して、これは民權の教科書だといつたのは有名な話である。又自由黨過激派の宮地茂平が、日本帝國政府の支配を脫したいといふので國籍離脫の屆書をその筋に提出したのは、當時社會の耳目を聳動させた事件であるが、これも此の『平權論』中の一節（國家を無視する權理といふ一項）を讀んだ感激が大分その動機を助けてゐるといふ。加波山事件の某々氏等も、東京獄中で此の『平權論』をよんで斷然一黨に參加の決心をしたと語つてゐる（談のまゝ）。

五

剛氏が慶應義塾在學中、幼稚舍の教授として働いたことは前にのべたが、これは氏が育英の仕事に關係した始めであつた。明治十五六年の交、剛氏は再び育英の仕事に歸り、芝山内の某寺に自習舍といふ私塾を開いて生徒に教へた。その他市內の諸方の學校に教師として働いた。

餘談だが、この頃剛氏は再び安心立命問題に惱み、山岡鐵舟をとふて禪のことを聞いたりした。此の時山岡さんから澤庵和尙の『不動智神妙錄』のことをきゝ、それを愛讀のあまり複刻したことがあつた。

明治十七年に剛氏は水戶中學校の教頭に聘されて水戶に赴き、十八年までゐた、尋常中學ばかりでなく、高等中學の教師もかねてゐたのである。水戶にゐる間に文部省で教員資格檢定の命令を出し、檢定資格をのぞむ者に屆書を出させた。丁度加波山事件の前後頃であつたが、剛氏はその屆書に『社會平權論』の譯者であることを書き添へた、ところがそれが祟つたものと見え、氏にだけは檢定資格が與へられなかつた。これが『平權論』から生じた不利益といつたもの唯一の例で、他には別に譯者たる剛氏への迫害といふやうなものはなかつた。

同じく水戶にゐたころ、當時內務省衞生局の役人であつた後藤新平が、水戶に衞生講演に來た。その夜お定まりの歡迎の宴で、偶然にも新平の席と剛氏の席とが隣り合つた。席に置いてある名札を見た新平は、剛氏に向つて、貴君があの『社會平權論』の譯者かと念を押してから、いや自分も『社會平權論』から教へをうけた者であると一禮したのち、貴君程の人材が何うしてこんな田舍で教師などをしてゐるか、ときいた。剛氏は「自分も政治が好きだからその方で志をとげたいと思ふけれど、よく考へてみるに、自分は辯舌は下手で、金もなし、政界

に入つても到底ものにならぬ。それだから改めて教育の方面で十分志を述べたい考へである」と答へた。

これは遙か後のことだが、明治三十三年東京市公民會が組織されて、剛氏もその一員となつたとき、谷干城子に會つた。その時谷子は矢張り『平權論』をよんで大に益を得た旨を語つたといふ。

明治十八年に剛氏は水戸を辭して東京に歸つたが、この間に書肆普及舍から依頼されて、ベインの『メンタル・サイエンス』を譯述した。これは『心理全書』と題されて明治十九年から二十年にかけ四冊ものとして出版された。これは事實三人の分擔譯者（田中登作、佐藤亀世、橋本武）の譯稿に剛氏が統一の朱筆を加へたのみであつたから、比較的短時間にかゝる大部物の譯述を成就することが出來たのである。

この前後に着手された譯書としては、エモス原著『政理汎論』（明治十六年）、『兒童教育論』（明治十八年）、ヌウイントン『萬國史要』（明治十九年七月）、米國陸軍少將ウイルソン氏著『日清文明論』（明治二十一年に第一分冊出版）などがある。

六

明治十九年に埼玉縣不動岡中學へ校長として赴任したが、同中學校は幾干もなく廢校されることになつたので東京に歸り、間もなく青山學院の教師となつた。青山學院の在職は明治十九年から遂に明治三十年に及んだ。

まだ水戸にゐたところ、アメリカ新歸朝の美山貫一氏が縣令人見寧の紹介で學校で講演したことがあつた。その夜歡迎會を開いたが、席上美山氏はアメリカに殘して來た友人（根本正）のことを思ふ友愛の情が頗る濃やかに見えたので、剛氏は再びキリスト教の精神に心を動かされた。それで埼玉から歸つてから神學研究に志を向け、

小方仙之助牧師などに教を乞ふところがあつた、青山學院に入つたのも一つは此の爲めなのである。學院に入つてからいよいよ本式に洗禮をうけた、だが科學に興味の多い頭腦の持主であるから、神學の荒唐な分子が多いのに呆れて、その方には全然信仰をもたなくなつた。

剛氏は青山學院では幹事として倫理をうけもつたが、その敎へるところが儒教流、日本思想流なので大に物議を釀した。剛氏は先天的改革思想の持主であるといつて可からう。青山學院に於いてもいろいろ改革するところが多かつた。當時學院では外人教師全盛で、教科書がアメリカ版、アメリカ流の教育方法で教育する，學科に物理、動物などの科目がない。それで剛氏が幹事となると、日本人教師を糾合して一種の私設教員會をつくり、日本の中學に必備の學科は是非備へることを決議し、それを先づ日本人教師全部に同意させてから本式の教師會に提出して同會の同意を得、三好學、池田菊苗、五島清太郎、丘淺次郎、鈴木孝與（歴史と文學）などの教師を新に學院に入れて、全然中學式に改めた。剛氏自身の受持の倫理科には教育勅語を根本として日本精神を鼓吹した、勅語なども從來掲示されてゐなかつたのを、氏が幹事になつてから斷然掲示させることにした。かう萬事日本式にやつたので生徒も殖ゑた。廣告で生徒を募集することも今日では珍しくないが、あれは剛氏の工夫になる新機軸なのである。

青山學院の改革を見て、明治學院その他のミッション・スクールでは皆これを眞似て中學式になつた。

剛氏は又教師の同志會をつくつて教育方針、教授法などを研究し合ひ、又機關雜誌を發行して日本的教育を鼓吹した。然し剛氏の改革熱はたゞ學院を日本化させただけでは納まらない、氏は進んで外人教師を日本人化させ

ようとかゝつた。剛氏は此の理想を實現させるためにいろいろ努力して外人教師の訓練に從つてみたが、結局彼等の新陳代謝が激しい上彼等の側から反抗を招いたので、いかに努力しても無効であるのをさとり、これは中止のやむなきに至つた。さうして明治三十年それでも學院改革に滿足して辭職したのである。

七

剛氏は明治廿七八年に赤坂區會議員に選擧されて以來、區政刷新に盡力した。明治三十三年に市會議長星亭の收賄瀆職問題が起るや、市政を腐敗瀆職政派の手から擁護する必要ありといふので、東京市公民會が組織された。剛氏は此の時赤坂區の幹事としてこれに參加し、區內の有志を糾合して赤坂倶樂部なるものをつくつて、つひ先年まで活動をつゞけた。

明治三十五年に剛氏は友人の勸めで軍人後援會の評議員となり、更に同會調査委員長の任についた。それは同會の內部に入つてみると會內が紊亂を極めてゐるので、改革を志し、初め友人を勸めて委員長に當らせたのである。ところがその結果が惡かつたので、つひ剛氏の責任となつたわけである。就任の約束は一年間だけといふのであつた。

そこで剛氏は自分が幹事に任じられたのを機會にいろいろ惡評のあつた役員を辭させ、島田三郎、鎌田榮吉、田口卯吉、中島行孝、江原素六、芳野世經、今村力三郎などゝいふ名流を評議員に入れて、同會の基本事業を企てた。明治三十六年に入つて、同會の積極經營策として百年間に五千萬圓の資金をつくるといふ事を發表した。間もなく一年間の約束期限が終ることになつたので、止めようとしてみると、間もなく日露戰爭となり、勢ひとめ

んとしても出來ない。つひに東奔西走、前後六年間後援會幹事の仕事をつゞけることになつた。

明治四十年春、後援會では春季總會を築地本願寺に開いた。此の時蟻首組の殘黨某々は壯士をやとつて總會を妨碍させた、理由は剛氏に金錢上不正事實があるといふのである。總會は妨碍の爲に大混亂に終つたが、會長も役員もよく剛氏の廉直を知つてゐるので某々等の誹謗に耳をかさない。然し剛氏としては固より默して止む譯には行かぬので、自ら進んでその不正事實の調査委員會を開いて貰つた、だが勿論何の結果も出て來る譯はない。剛氏はそれでも滿足せず、更に官憲に賴んで調査してもらひ、始めて寃罪が明白にすゝがれることになつた。そこで剛氏は斷然たる決心をもつて評議員會を開き、故島田三郎氏の辯舌をかりて醜類彈劾の大演舌をなさせ、彼等を一擧に除名してしまつた。と、同時に自身も責を引いて潔よく同會を辭職した。一年後に賴みに來たが、幹事につくことは固辭し、名義上たゞ顧問といふことを承諾した。

剛氏に『兵役革新論』といふ兵役に關する卓拔な持論があるが、それは今こゝで述べない。昭和二年年九月號の中央公論所載吉野先生の時評中に此の論を批評したものがあるから、それに就て見られたい。

八

剛氏の事を記すに當つて忘れてならないのは、氏が日本の地理學に對しても大恩人であることである。剛氏が地理學研究、地理書著述の志を起されたのは、早く明治十八九年の頃にある。剛氏は始めから考へた、近代の日本程一切が急變したことが少い、風俗習慣も一時に西洋風なものになつたが、これでは間もなく日本固有の風俗習慣は滅んでしまふ、有志の士は今のうちに日本の風俗習慣を研究して置くべきであると。そこで風俗

習慣の研究の必要から頻りに日本の地理書を涉獵した、ところがその地理書なるものは、何れも甚だ不完全なもので、大して用に立ちさうもない。そこで自身地理書著作の念を起し、西洋の地理書をいろいろと調べ、西洋の地理學研究法を日本に應用することにした。かくして多大な苦心と長い時間をこれに費して出來上つたのが、明治二十四年刊行の『近世地理學』である。

ポリチカル・ジオグラフィを擴張して一國の現狀を示すものにしようとしたのも剛氏の考へであり、これを人文地理學と唱へたのも勿論氏が最初であつた。

その他山脈に名を與へたこと、日本全國の分け方に古來の八道の稱呼をやめ、地理的地勢的區劃によつて、今日通行してゐる關東地方、近畿地方などゝいふ名をつけたのも、皆剛氏の功である。剛氏の地理學に關する著書は、他に『中外地理學』、『近世地文學』、『地圖集覽』などがある。何れも當時の中等以上の學校で盛んに行はれたもので、これは未だに記憶する人が多からうと思ふ。

以上によつて、私は明治初期文化の貢獻者松島剛氏の傳記を、大體間違ひなく紹介する事が出來たと思ふ。文辭の蕪雜はもとより私の所爲であるが、生人に阿つて行事を飾る事はせず、專ら直敍を旨としたつもりである。松島氏當年七十五、老來益健の態の見えるのは大いに心強い。（松島氏現存ならば今年八十二歳である）

追記　松島氏の著譯書中以上の外有名なものは、『心身論』、『倫理原論』、『教育史』、『正則英語讀本』などがある。又かつて通信教授を開始し、或は雜誌『成功』の前身たる『學窓餘談』を發行して、當代青年の爲めに計つたことがあつた。

尙ほ松島氏譯『社會平權論』と自由民權の伸長については竹越與三郎氏著『新日本史』(中卷)に見えてゐる。左に引いて參考に供する——

此に於てかスペンセルの社會平權論、松島剛の手によりて譯せられ、此好潮に乘じて入り來れり。此書は文明國と稱する英國に於てすら出版の便なく、僅に米國に於て出版せる程なりしに、其一たび譯述せらるゝや先づ之がために最初の洗禮を受けたるものは板垣退助なりき。此大首領が一たび此書を手にしたりとの報あるや、社會活火の導口たる果敢有爲の好少年、擧つて此書を讀みしかば、社會平權の精神は、浩々滔々として社會に注入し來り、已に河津祐之の佛國革命史、リーバアの自治論(林董の譯書)等にし、略ぼ其理論と感情とを作爲したる社會をして、新に一時代を開き、社會と政治の組織とに向つて平權の大義を實行せんと欲せしめたりき。(『新日本史』中卷一一〇頁)

桑野鋭氏のことども

一

都下の諸新聞に、昭和四年八月三十一日の日附で、桑野鋭氏が八月二十九日に死去した廣告が出てゐた。正五位勳五等の肩書があり前王子傳育官といふ記憶があるので、名を見ても同人とは思へない人が多からうが、正しくこれは當年の顧柳散史が七十餘年の長い一生の幕を閉ぢた廣告だつたのである。

私は大正十五年の夏桑野氏に會つてその經歷の概略を聞書にとつたことがある。その後昭和二年四月齋藤少雨莊老のすゝめで、その傳記を『愛書趣味』(第十號)に發表した。その時の考へでは桑野氏にもう一二回會つて疑問の件や問ひ足りないところを今一度尋ねたいと思つてゐた。ところが何分にも「生の戰ひ」の方が大變な闘ひで身のまはりに渦卷いてゐるので、いつとなく忘れてゐた。時々思ひ出しては、早く聞いて置かねと、先方は年寄りだから、と殊勝な氣も出るのであるが、それもこれも一とき精進で、又いつの間に忘れてしまふ。その內に本當に此の廣告になつたわけである。

そこでお詫びと追悼をかねた意味で、『愛書趣味』に掲載した傳記を少々やき直してこゝに二度お目にかけることにする。たゞお斷はりして置きたいことは、私が桑野氏の傳記を知りたいと思つたのは、明治初期の翻譯書群舞奇錄」の譯者としての桑野氏であつたから、氏の顧柳散史としての軟い方面のことにはあまり及んでゐない、

今改めてこゝに書くついでに氏のこの方面の著書や何かも今少し調べてみようと思つたが、その方面のことはどうも柄にないし、それから宮武外骨翁や石川巖氏やその他專門研究家もゐられることだから、何方かお書きになることゝ思つて、やはり元のまゝを少々やき直したゞけに止める。

二

桑野鋭(エイ)氏は、筑後の柳川の人である。安政五年一月の生れ、柳川藩士の桑野庫藏久壽(ひさとし)といふのが氏の父で、氏は二男であつた。戯作物を書くときに好んで用ゐた顧柳散史の號は專ら吉原大門の傍の見返り柳とかゝら出たといはれてゐるが、實は故郷の柳川を顧望して忘れないといふ意味をこめてあるのだといふ。父は早くなくなつたといふが、鋭氏の幾つぐらゐのときか分からない。兄は久鎭(ひさしげ)といつて、鋭氏より十歳も年長だつたが、夙に上京して苦學し、陸軍の測量技師になつた。鋭氏は小さい時から郷先生の兒玉某氏の塾に入つて專ら漢學を勉強した。兄久鎭氏の上京後母と一緒に國にゐたが、家が貧乏なのでいつも生活に苦しんだ。それで、鋭氏も思ひきつて上京したいと思つたが、それも出來ない。といつて手近のところにはいゝ學校もないので、思ふやうに勉強も出來ない。すると丁度明治五六年の頃、近くの大善寺村といふところに中學校が出來た。これはさきに柳川藩と久留米藩と合併して出來た水潴(みづま)縣で設立したものであつた。鋭氏は母に願つてこの中學校に入つて新に勉強し直した。だがどうしても郷關に碌々してゐるのは面白くない、そこで幾らもたゝないうちに中學校をやめて、佐賀の松原の藩學校に遊學した。藩學校といふのは、今でいへば洋學校のことださうである。こゝにはピニヤトル・チャールズといふ外人教師(父はフランス人で母は英人であつたといふ)がゐて英語を教へてゐた。この人

が大分親切に桑野氏を世話してくれ、學問の面倒をよく見てくれた。桑野氏はこの人について當時のいはゆる洋學の素養をつむことが出來た。

此のチャールズ教師の兄といふのが、そのころ長崎出島の七番館で雜貨店を開いてゐた。此の縁故をたどつて鋭氏は何とかして洋行してみたいものだと思つた。それで、幾らもない藏書をうつた金を懷中にして佐賀から長崎まで踏み出し、チャールズ教師の兄さんに會つて自分の素性、自分の志望をうち明け、何とかして洋行の出來る機會を見つけてくれるやうに頼んだ。何かフランスから軍艦でも來たときにボーイにでも世話してもらつて、さうして彼地に行きたいといふのである。だが、さう物があつらへ通りに行くものではない、チャールズ教師の兄さんも散々その無謀なことを說いて思ひ止まらせた。だが鋭氏も若かつたので、そのくらゐのことで思ひ止まるものではない、長崎に留まつてその機會をつかまうとこゝろみたが、肝心の旅費がなくなつたので、柳川に歸つた。だが、歸鄕後はもうシヤニムニ上京のことに心をきめた。それにはあの明治七年の佐賀の亂の刺戟もあづかつて力があつたといふ。戰爭の空氣や功名熱や英雄崇拜心や、そんなものに若い心を刺戟されて、どうしてもこのまゝ朽ち果てたくはないと思つたからである。そして此の上京が事實となつたのは、明治七年、佐賀の亂の後間もなくであつた。

三

上京後苦學したのは勿論である。だが勉强生活は長くつゞかなかつた。

上京して間もなく當時御成門のあたりにあつた勸學義塾に入つて勉强したが、次第に高まつて來る時代の政治

熱に目がさめて(一つは自分で衣食する必要から)「評論新聞」に關係し、頻りに大聲疾呼式の過激論文を書いては藩閥政府顚覆を無上の理想とし出した。こんな調子のものではさう長つゞきのするわけがなく、やがて新聞が發行停止となつた。それが改題して「開化新聞」(これは違ふらしいが聞いたまゝ)となつたので、それに續いて關係してゐたが、これも長くはつゞかなかつた。兎角するうちに問題の明治十年が來た。

四

明治十年は桑野鋭氏の生涯にとつて一大危機であつた。年は若いし、血の氣は多いし、政治は好きといふわけだから、鹿兒島の亂には、亂徒の側に友人が加はつてゐるのを傳手に一味になる氣で、歸省と稱して東京を去つた。東海道を豐橋まで行つてそこから四日市に渡るつもりで船にのると(當時既に四日市には檢查所が設けられてゐた)、運か不運か、氏の乘つた船は難風にあつて志州の鳥羽についた。で、仕方なく鳥羽に上陸し、伊勢伊賀を經、奈良から木津にかゝつて京都に入るつもりにした。ところが此の時京都には明治大帝が御駐輦になつてゐたので、奈良方面では木津に新しい關所めいたものが出來てゐて、擧動不審の者の入京を見張つてゐた。桑野氏はそんな事とは知らず夜晝急いで木津迄やつて來ると、たうとうこの關所に引かゝつてつかまつた。そして何と辯解しても聞かれず、一應訊問の末、京都に護送されて、獄舍に入れられた。が、別に取調をするのではない、拷問をするのでもない、虐待をするのでもない。毎日御馳走を食べさして優待はしてくれるが、たゞ嚴重に禁錮して置くだけである。獄にあること約一週間、解放されることになつたが、その時の命令にかうあつた、此の際歸省は一切罷りならぬ、東京に歸るなら可し、何うぢやと。桑野氏は勢ひ仕方がないから、東京に歸つて來た。

東京に歸つて來たが外に仕方がないので又操觚生活に入り、林正明の近事評論に關係し、傍ら九春社とも知り合つて、服部撫松の「東京新誌」や「江湖新報」などに寄書した。『龍山北誌』、『根津二十四時』その他の戲作著述は九春社との關係の副産物であつた。「東京新誌」で筆禍を買つたこともあるといふが、この邊のことは私の網にないから詳しくは說かない。たゞ十一二年の頃一時學校教師として吉原近くにゐたので、それで廓内の事情をよく知つてゐたのだといふ桑野氏の談を記して置くだけに止める。

五

明治十一二年頃から、自由民權の論が漸く盛となり、民間の國會開設運動の波が高まつて來るや、桑野氏は直ちに此の渦中に投じ、單に文筆で活動するばかりでなく、地方から續々上京する有志と結んで成功を計つた。

そのうち明治十四年になつて、フランス新歸朝の青年貴族西園寺公望が東洋自由新聞を發刊するや、中江兆民、松田正久、上條信次、松澤求策などの諸先輩と共に桑野氏もこれらの編輯に參加した。當時の月給十二圓であつたといふ。だが折角新聞をつくつて一月もたゝない内に西園寺公は明治大帝の叡旨で退社し、たゞ蔭で應援をするといふことになつた。新聞の方では、讀者に默つてゐてはわるいといふので、社告でその旨を發表した。ところがそれがために、新聞社に其筋の手が入り、社員一同一網打盡にひつくゝられた。とゞのつまり松澤氏一人で責任を負ひ、三年の禁獄となつて事が濟んだが、そのおかげで新聞は發行不能になつて止んだ。

此の年、來る二十三年を期して國會を召集する旨の詔勅が發せられたが、民間の有志は二十三年といふのは待ち遠いといふので期限短縮の建白書を出した。桑野氏もこれに加はつて奔走した。自由黨が出來るときは勿論で

あつた。

六

明治十五年に公にされた飜譯小說『英國情史・蝶舞奇緣』は、新聞の方がそれやこれやで少閑を得た折に譯されたものであつた。格別、飜譯の動機などゝいふものはない。たゞかつて讀んでみて非常に面白かつたからであるといふ。まだ譯が半分ぐらゐより出來上らないうちに本屋が聞きつけて、片端から原稿をもつて行つて印刷に付した。當時はまだ貸本流行時代であつたから、小冊子にして連續發行するつもりで、和裝の冊子にして出版したのである。だが僅に初篇二冊出たきりであまり賣れず、後の原稿が大部あつたのが本屋のところから散佚して行衛不明といふわけである。私は當時桑野氏が飜譯に使つた原本といふ小形の洋書を見せてもらつたが、原書も半分ぐらゐは何處に行つたものか破れてゐて無い。惜しいことだと思ふ。元來著者不明の小說で、一八四八年米國フヒラデルフヒヤ發行の『アルビニア、一名若き母』といふものである。

序にいふ、桑野氏の飜譯としては此の外に『建國遺訓』といふものがある、これは明治十六年に桑野氏が助筆してゐた「常總青年」といふ雜誌に連載したもので、シルレルの『ウイルヘルム・テル』の譯であるといふ。これも途中で原稿が紛失して、それきりになつた。

七

明治十五年六月自由黨の機關として自由新聞が發刊されたので、桑野氏はこれに執筆することになつた。これも暫時で振はなくなつたので大阪へ下つて立憲政黨新聞に關係したが、間もなく東京に歸つて「自由の燈」に入

社した。これが明治十八九年のことであつた。

表面はかうして活動してゐる内にも桑野氏は政治運動や政黨に對して多大の幻滅を感じ始めた。一致して當れば藩閥政府などは直ちに崩れるものを内訌ばかりしてゐて、眞に民權のために奮闘する人がいかに少いかといふ點を見て愛想がつきたのである。此の政黨や政治運動への愛想づかしが、桑野氏の後半生をして全く一變した運命をたどらしめる第一歩となつたのである。

八

當時進歩した思想をもつた華族達は同方會といふのを組織して、来るべき二十三年の議會に應ずる準備をしてゐた、會の目的は經驗ある研究家や學者を招いて講演を聞いたり自他の討論會演説會を催したりして、立憲思想を養ふことであつた。本部は華族會館に置きそこから會報として「同方會雑誌」を出すことになつたが、此の雑誌の編輯を或る人から桑野氏に持ち込んで来た。桑野氏は喜んで承諾した。

明治二十二年十一月、明治大帝は皇子明宮を立てゝ皇太子となされ、立太子式を舉げさせられた。此の時同方會の幹部たる小笠原、勘解由小路などゝいふ華族の人達はかねて明宮の祗候となつてゐたので、立太子式には何かと奔走した。その際手不足で人が入用なので、桑野氏も臨時に手傳ひとして宮中に出入することゝなつた。ところが明宮の御養育掛長の曾我祐準子が同郷人であるところから、測らず同子の知遇をうけて本式に宮中の人となつたのである。

大正天皇の東宮時代の東宮主事、今上陛下の東宮時代の東宮主事、王子傅育官、大正六年病氣で辭するまで約

三十年間宮中の人となつてゐた桑野氏については、もはや私が語るまでもあるまい。私が會つたころは、宮内省の依囑によつて、攝政宮(今上陛下)、秩父宮、高松宮、澄宮の御記錄編纂に從事してゐたと思ふ。遺著に『最新東京繁昌記』(漢文)一卷、『酒仙李太白』などがあつて、何れも一讀を許された。『最新繁昌記』には飛行機、女車掌などのこともあつて、なかなか面白いものであつたと記憶する。(昭和四年十一月、明治文化五年十一號)

『鐵烈奇談』譯者　伊澤信三郎傳

『經世指針・鐵烈奇談』の譯者伊澤信三郎氏は信州伊那郡(現上伊那郡)高遠の人、樂石伊澤修二先生の弟、貴族院議員伊澤多喜男氏の兄に當る。安政三年七月十四日、高遠城下大屋敷といふ土地に生れた。父は通稱勝三郎、文谷と號する、高遠藩(内藤侯)の奥祐筆を務め、又四條派の流を汲んで畫を善くしたといふ。母は多計、同藩祐筆内田文右衞門の女である。此の父母の爲人のことは伊澤先生記念事業會で編纂した『樂石伊澤修二先生傳』に詳しいから、それに讓つて贅言しないことにする。兎に角信三郎氏は父母兄弟に於いて惠まれた人であつた。

男五人、女五人といふ多勢の子供である上に小身でもあり、藩そのものも武田耕雲齋の一黨に荒らされたり、色々な事情から大分衰へてゐたので、信三郎氏の幼少時代には、伊澤家の生活は相當苦しいものであつたらう。幸ひ父文谷が餘技の畫の方で收入の道を講じたので、漸く幾分の補ひがついたといふ。

藩黌進德館に入つたのが七八歳の時といふから文久の二三年頃でもあつたらう。進德館には四五年通つてゐたと思はれるが、成績その他の點で聞くところがない、ただ父が父であり兄が兄であるから、その教訓によつて眞面目に勉強したらうと推察されるだけである。

信三郎氏が十三になつたときに明治維新の大變革が起り、士族階級の恐慌時代が始まつた。さもなくとも窮乏勝ちな高遠藩の伊澤家が恐慌の例に漏れるわけがない、信三郎氏はかうして家計の窮苦を坐視するに忍びないと

いふので、自分から進んで松本か飯田の町家(藥種商)に丁稚奉公に赴いた。兄の修二先生は慶應三年十七で江戸に出てゐたが、この時は苦心して洋學を勉強中であつた。

明治三年、修二先生は高遠藩貢進生になつて大學南校に入つたが、やがて幾分か手當を受ける身となつたので間もなく二人の弟を東京に呼びよせた。次弟の富二郎氏はこの時橫濱で船乘りをしてゐたといふ。

信三郎氏は此の時兄に呼びよせられて、丁稚奉公をやめて東京に出て來、兄の監督で二三年みつちり勉強したらしい。何處か正則な學校に入學したものであらうが、その何處かは詳しくわからない。かうしていよいよ明治七年の九月には元の東京外國語學校に入學して、フランス語學を修めることになつた。この時信三郎氏は十九であつた。

外國語學校には十一年までゐた。伊澤家には當時の成績表が三葉ばかり殘つてゐるが、それを見ると明治九年第二期には席次が四、明治十年の第一期には席次が二、十一年の第一期には十二といふ風になつてゐる。

フランス語には可成り趣味も持ち堪能でもあつたらしい、特に數學の優秀な點が目立つてゐる。行狀その他を見ると、活潑な有望な善良な學生だつたことがわかる。

此の頃から既に信三郎氏はフエヌロンの『テレマック冒險譚』を愛讀してゐたらしい、或は學校で敎はつたものかも知れない。兎に角伊澤家には、此の頃の信三郎氏の手澤本であり、且つ『鐵烈奇談』の底本である『テレマック』が殘つてゐるが、その表の表紙の裏に、——

明治十一年六月一日より卅日に一回は必ず此本を復讀す可き者也(原文のまゝ)

とあり、原の表題の下に

鐵烈冒險紀事

裏の表紙の見返しに

鐵。烈。奇。談。

などといふ文字が散見してゐる。或は此の頃からひそかにこれを譯して見たいといふやうな志があつたものか。

明治十一年に外國語學校のフランス語科が廢止になつたので、やむなく大學豫備門やその他の私立學校で英語を勉強した。

明治十三年七月、當時田尻稻次郎氏原六郎氏などの經營してゐた築地の專修學校に入門し、同十六年七月その經濟科を卒業した。在學中は大に田尻氏の信用と愛顧を得たといふ。

『經世指針・鐵烈奇談』の譯刊されたのは、正に信三郎氏が專修大學在學中のことに屬する。明治十六年十二月十一日の出版であるが、十五年七月廿一日版權免許を得てをるから、少くとも十六年に出版された第五編までの譯稿は十五年七月までには出來てゐたものであらう。出版の直接の動機は、學資の足しにもと思つて親戚森氏などの助力で自費出版したものであるといふが、然し單にそれだけでなく、一つは信三郎氏が『テレマック』に對してもつてゐた尊敬の心から進んで譯筆をとつてみようといふ氣にもなつたものであらう。信三郎氏が此の書に對してもつてゐた尊敬のことはその手澤本の裏をみてわかるが、尙ほ私が信三郎氏の子息千三郎氏から伺つた話によると、信三郎氏は後年まで全くテレマック流の人生觀をもつて居り、人は獨立心がなければならぬ、他に謙

惑をかけるな、他の厄介になるなと口癖のやうに教へるのがつねであつた。そして父親が遺産を残してくれるのを待つてゐるやうな息子は駄目だぞと嚴しく戒しめられたといふ。從つて『テレマック』の書を愛重さるゝ事非常なもので、何時も座右から離さぬ位、かつて千三郎氏が自身入用なので一冊買つて來て本箱に飾つて置いたら、信三郎氏はふと見つけて、これは俺の大事な本だ、こんな所に置いてはならないといつて、千三郎氏の抗議も顧みずに持つて行かれたといふ。推して知るべきであらう。

此の譯書は思ひの外に賣れたので、書店からは頻りに第二冊の刊行を催促して來た、だが在學中のことゝて課業多端でなかなか果されない。そのうち修二先生に、學生の身でそんな事に時間をかけるとは何事だと叱られ、つひそれなりになつてしまつた。全部譯刊するつもりであつたことは此の譯書の跋文に見えるが、かういふわけで第五編までの一冊より出なかつたのだといふ。

此の譯書の本文の署名のところに森重遠校閲となつてゐるが、此の森氏は修二先生の夫人千代子刀自の父君で信三郎氏の譯文を訂正したり、多少の出資をしたり、この譯書の出版には一方ならず骨を折つたらしい。此の譯書が白梅書屋藏版となつてゐるが、この白梅書屋とは森氏の書齋の名である。森氏初名は雄助、阿州蜂須賀侯定府の士で、有名な松浦多氣志郎の友人であり、二十七から三十七まで十年間、蝦夷開發に努力した國士型の人物であつた。後晩翠堂といふ出版屋めくものを始め、新聞雜誌を發行してゐたといふ。

此の譯書が、明治飜譯文藝史にどれ程の位置をもつものであるかといふことは、私は研究篇の『明治初期の飜譯文學』の中で述べて置いた。

さて十六年七月、專修學校經濟學科を卒業した信三郎氏は、同年十月日本銀行に就職して三等書記になり、文書局に勤務することになつた。恐らく田尻氏の世話であらう。月給二十圓。

明治十七年二月、日本銀行を辭して横濱正金銀行に入り、フランス、リョン出張所詰を命ぜられて二月十六日横濱を出發し(フランス郵便飛脚船メンザレー號)、四十三日を經て三月二十九日リョンについた。伊澤家には此の時の日記が明治十七年歐洲渡航日記と題して保存されてある。私は幸ひそれを借覽する機を得たが、明治初期の洋行の一般を知る資料として可成り面白いものがある。

此の時信三郎氏の先任出張員としてリョンに留つてゐたのが、ジュール・ヴェルヌの紹介者たる川島忠之助氏であつたのも一奇である。

信三郎氏の滯佛は十七年から二十二年にわたる。だが着佛後さう永く經たないうちに氏の心には何か可成り大きな變化が起つたらしい。正金銀行員としてリョン出張所に赴任した信三郎氏は、やがてロンドンの同出張所へ轉任したが(此の頃の事、信三郎氏が主になりロンドンの日本人同志で毎週一回手製の[illegible]會を下宿で開いてゐたが、その燒く臭氣が猛烈なので下宿人から大抗議をうけたといふ逸話が『赤毛布』といふ本の中に見える)いつの間にか銀行の仕事をやめ、(或はリョンへ再轉任したとせば、その片手間に)リョンの市立織物學校に入學し、明治二十年七月に全科を卒業した。

稿者いふ、此の前後のことが今日からいへば年代的に甚だ不正確である。私は信三郎氏自筆の履歴書を本としてかう書いて置くが、信三郎氏の履歴書も記憶によつた點が多かつたと見えて間違ひがある。依つて[illegible]

郎氏が私の照會に對して下すつた返書中の一節を引用して參照に資したい。

『ロンドンへ轉任した時代は確か十七年の暮ぢやないかと思ひます。ことによると十九年頃かとも思へます。と云ふのは「在英一商人」と云ふとく名で郵便報知新聞と云ふのに蠶業が日本に取つて重大産業なることを投書した切拔がありました、それが明治二十年十二月となつてゐます、而してロンドンには二年ゐたと父が語つたやうに記憶してゐます。

又亡父が正金銀行から貰つた配當金や賞與金を記入した帳簿は二十年で終つてゐますから多分二十年に正金を辭したのだと推察いたします。織物學校へ入學したのはその後と見るべきです』云々（昭和二年六月晦日付）

『履歴書には明治十七年から廿年七月まで里昂（リヨン）の織物學校にゐたやうに記してありますが、父の正金銀行から受け取つた配當の賞與を記入した帳面には確に廿年一月の賞與金貳百何圓と云ふのが記入してありますから正金にゐたにちがひないのですが、この點がどうも判明しません。或はその頃正金の海外支店は暇だつたので、こんなことが出來たのか或は何かの目的で正金にゐたのを誤魔化す爲めに廿年後に入學した學校をこゝへ持つて來たのかどつちかでせう。』云々（昭和二年七月二日付）

以上を綜合して大體を推察して頂きたい。以下信三郎氏自身の履歴書から若干引用しよう。

廿年八月ヨリ廿一年五月ニ至ル

　佛國ロアール州ブールゴアン村ジエドリック氏工場ニ於テ織物諸器械組立使用法等實習シ卒業證ヲ受領ス

廿一年六月ヨリ廿二年一月ニ至ル

瑞西國リウナ(チッヒ)村ホネーゲル氏工場ニ於テ織物器械研究ニ從事シ卒業證ヲ受領ス

廿二年二月ヨリ同年七月ニ至ル

佛瑞獨英諸國織物製産地ノ諸工場ヲ視察ス

かくて廿二年八月歸朝した。さうして歸朝早々技師として桐生へ赴任し、二十四年四月までゐた。

廿二年八月ヨリ廿四年四月ニ至ル

歸朝　日本織物會社織部長專任　織工場設計、器械ノ設置、運轉據組立等全般ノ事ヲ整理シ感謝状ヲ受領ス

廿四年七月以後京都に落ちつき、西陣で獨立して事業を始めた。

廿四年七月ヨリ今日ニ至ル

織物器械改良ノ目的ヲ以テ金綫製造業ヲ創始シ傍ラ織物諸器械ノ製造販賣ニ從事シ且ツ京阪地方諸會社ノ顧問技師等ノ囑託ヲ受ケツヽアリ

今日に至るとは明治三十三年二月のことをいふ。此の年パリ博覽會があり、それに列席するため、二度目の洋行をした。その際信三郎氏は博覽會場でヴァンサンジ紋織機械を見て、その精巧なのに感心し、實物の大部だけをスケッチして歸つたが歸朝後それを土臺にして工夫を重ね、つひに卅四年そのヴァンサンジと同一物を發明製造するに成功した。これが本國フランスに聞えるや、織物界では氏の名を雜誌にのせて大に賞讃したといふ。

大正九年三度目の洋行をしたが、これが最後であつた。

大正十四年八月十三日、此の自助の人伊澤信三郎氏は行年七十歳で京都に歿した。

信三郎氏は短小精悍、却々きかぬ氣の人であつた。非常な精力家で、母の死んだときには東京から高遠まで不眠不休で駈けつけたといふ。だが一面氣輕な若々しいところもあり、人望家でもあつた、しつかりした、自立心に富んだ、賴もしい人であつたといふ。（昭和二年十二月四日）（昭和三年三月東京新誌第二年二號）

沙翁物飜譯家三氏

一 板倉興太郎傳

『豪傑一世鏡』の譯者板倉興太郎氏は、備後比婆郡庄原町の人、明治六年十月生る。板倉重勝の後といふ。土地ではエビス板倉と呼ばれ、父春助は宿屋を業としてゐたと聞く。慶應義塾出身。學校卒業後は鑛山業、株式會社、株式取引等に關係し、專ら實業方面に活動した。なかなかの才物で到る處に手腕を認められたといふ。

板倉氏の家には代々文學に造詣の深い人々を出してゐるが、興太郎の祖父に當る人などは近邊きつての歌人であつた。又同氏の叔父に當る人は二十四五歳で早世したが、それにもかゝはらず、文學者としての天分を大いに認められた人であつたといふ。興太郎氏自身も趣味として書畫和歌俳諧を嗜み、殊に和歌は佐々木信綱博士の門に入つて特別の薫陶をうけた程である。

『自由の笞(しもと)・恩愛の絆(きづな)・豪傑一世鏡』(明治二十一年三月刊)は板倉氏が十五六歳頃の譯にかゝり未だ慶應義塾在學中のことであつたといふ。元來板倉氏の先輩小野友次郎氏(此の書の校閲者)のところへ書肆から飜譯を依賴して來たのであるが、小野友次郎氏は何か事故があつて、それに着手することが出來なかつたので、板倉氏に囑して譯筆を執つて貰つた。板倉氏は少年のことゝて到底かういふ大物を譯す力などなかつたのだが、たゞ英學稽古のためと思つて、辭書と首引をし、且つ同輩の二三子にも助力を受けて兎に角飜譯完成して、それを小野氏

に渡した。小野氏はこれを校閲し、文辭を添削して、板倉氏譯といふ名で出版したのである。

板倉氏には當時他に一二飜譯があつたといふが、それが何か分からない。文藝關係のものであるかないかも分らない。

二　叢菊野史（仁田桂次郎）傳

此の人については、幸ひ私の手許にその漢文墓表の寫しがあるので、それを和譯して掲げる。墓表にいふ――

明治二十四年二月六日、桂次郎仁田君、病を以つて東京の客舍に歿す。年僅に三十四歲。遠近知ると知らざると、痛惜せざるは莫し。越えて十日、邑の慶晉寺先塋の次に葬る。君通稱は桂次郎、淸泉と號し又叢菊野史と號す。四郎忠常三十五世之裔、仁田常種君の第四子也。生れて穎敏學を好み、夙に馬白眉の稱あり。明治維新の初、我、乏を韮山學校教授に承くるや、君未だ弱冠ならず、余に就いて經史を講究す。終日孜々として、毫も惰容無し。余其の成す有るを望めり。是時に當り、世勢一變し、外來頻繁洋學日に盛なり。余君に勸め、謙堂設樂氏に就いて英書を學ばしむ。是れ君洋學を修むるの始めなり。時に明治五年也。六年足柄縣立小田原英學校に入るや、一蹴して儕倫を軼え、嶄然として頭角を露はす。縣令柏木君、君の才學夙成を歎賞す。慶應義塾に入り、日夜切劘し、學業大に進む。八年橫濱居留米人某氏の學校に入りて英語を學ぶ。居ること一年、學業素有り、忽ち通熟せり。九年再び東京に遊び、商業學校に入りて專ら其の學を修め、他日特に大に爲す所有らんとす。十年一月暴に肺疾を發す。醫曰く、是れ積年神を勞するの致す所、今にして厚く治療を加へずんば恐らくは篤疾に至らんと。君乃ち鄕に歸り、家居優遊、攝養備さに至る。故を以て病勢稍々輕し。甚だしく刻

苦せずと雖ども、未だ曾て一日として手巻を釋かざる也。著す所の書、肺勞治論、洋學軌範、英語會話、人類成來論綱、進化管見、泰西奇談、續西國立志編、希臘古代史、其の他若干編、是れ皆科學進益の具耳。平生心を用ふる者は、經世の學也。其の結交する、中村正直、福澤諭吉、矢野文雄、尾崎行雄、是皆千里莫龍、一世に傑出する者、贈答嘗て絶ずと云ふ。君夙に洋學を以て樹立し、鋭意書を讀み、學業夙成なり。其の成るに及んで、不幸肺勞に罹り、荏苒十餘年、大に其志を展ぶることを得ず、以て其の身を終はる。惜しい哉。君鈴木氏を娶り、二子有り。長は一三と稱し、次は健次と稱す、嗚呼君の余に於ける、故舊の好あり、墓表の託、不文を以て辭す可からず。乃ち敢て固陋を忘れ、其の履歴の大略を敍べて、以て墓碑に掲ぐ。洋學氏諡を撰して眞淨院大法日受居士と曰ふ。

明治二十五年壬申五月　　　　函南學校長藤田信撰し、並に書す

墓表で明らかでないところを補へば、仁田氏は伊豆國田方郡仁田村の人、安政五年の生れである。右の墓表中、馬白眉の稱有り云々は、桂次郎氏にさういふ綽名があつたのではなく、兄弟中一番すぐれてゐるといふことを、筆者が支那風に故事を用ゐたのである。馬は馬氏、馬氏五常、白眉最良とある。

仁田氏譯するところの泰西奇談四卷、今日では明治初期沙翁物の稀本のうちに屬してゐるもの（物語因果物語合一冊）は明治十九年八月刊、此の卷には詳しい序文があつて、泰西奇談が如何にして譯さるゝに至つたかといふことがよく分かる。因果物語は『以尺報尺』のことである。女房持虎の卷、これは『じやじや馬馴らし』明治二十一年五月刊、嵐の卷、これは『テムペスト』で二十一年八月刊、智恵物語、これは『アゼンスのタイモン』で

二十一年十一月刊、以上四卷既刊であるが、近刊すると豫告されてゐる佳人乃薄命・十二夜日記は、遂に出ずに終つたらしい。何れもラムの『シェークスピア物語』の譯であることが多物語の序文その他で分かる。又同じ序で見ると、仁田氏が、ラムを讀んで試みに譯筆をとつたのは、明治十七年であつたことも分かる。

（尙ほ仁田氏については昭和九年八月書物展望第四年八號に令息仁田健二氏執筆の傳記が發表されてゐる。）

三　竹内余所次郎傳

明治十九年、ラムのリヤ王物語を『西洋歌舞伎種本』と題して譯刊した竹內余所次郎は、本姓石川氏、矮亭、通天洞等の號がある。慶應元年四月三十日、加賀金澤の弓町に生る。父石川知久（通稱喜太郎）は舊加賀藩の輕士で、氏はその次男である。後年所謂兵隊養子として竹內氏を冒したが、それは名儀だけであつた。金澤醫學專門學校の前身、金澤醫學校藥學部の出身。竹內氏の經歷程波瀾變化に富むものは少なからう。年二十の頃、東京に出て陸軍藥劑官の試驗を受けんとして準備中父の訃に會し、志を果さずに歸鄕した。やがて何かの目論見をもつて小笠原島に渡り、田中鶴吉氏？の許に行つたが追ひ返された。直ちに室蘭開發論といふものを一篇携へて北海道に渡り、先づ函館で、醫師の藥局生、それから札幌で農學校の傳習科生、轉じて新聞記者、戶長役場の書記、ぐつと大きく六萬坪の開墾事業等を試みたが、何れも物にならず、最後に札幌で藥舖を開いて、今度は少し成功した。其の間禁酒會員として奮鬪すること十年、クリスチャンとなり、內村鑑三氏の敎へを受け、札幌獨立敎會員として熱心な信者であつた。

やがて、年四十の頃、折角成功した藥舖を閉ぢ、單身渡米し、桑港の邦字新聞新世界のフレスノ支局長となつ

た。在米一年で歸國。日本社會黨評議員として平民社に關係し、日刊平民新聞に「東京市の大地主」を連載した。これが氏の最も誇つた著作であらうといふ。その頃電車値上運動に參加して兇徒嘯集罪に問はれ、罰金刑に處せられた。その後、又、北海道、東京、支那、臺灣、大阪等に居住し、大正十年九月南米ブラジルに渡航、昭和二年四月二十日ブラジル國サンパウロ市で病死した。年六十四。何しろ職を變ずること六十回餘、居を轉ずる四十幾回といふ記錄の持主であつた。

竹内氏は國民英學會に通つたぐらゐで、外國語の修業はあまりになかつたといふ。「西洋歌舞伎種本」も續稿が出ず、遂にリヤ王物語一冊だけで終つたといふ。（昭和五年六月稿、文獻志料第四輯）

聞書三篇

一　上條信次傳聞書（增訂）

『開化進歩・後世夢物語』の譯者上條信次は信州東筑摩郡南和田村の人、上條喜作の次男である、弘化三年丙午の生であるといふ。

明治五年(壬申)十月信飛新聞第一號に信次のことをかう揭げてゐる。

此人最初放蕩不羈ノ性ナリシガ學問ノ勉ム可キヲ知リ志ヲ立テ東京ニ出テ英學ニ從事スルコト五六年間ニシテ其業進ミ當縣學ノ教官トナレリ是全ク着眼ノ速カナル曩ノ放蕩却テ今日榮名ノ地ヲナシ父母マデモ面目ヲ施セシハ學問ノ功德豈ニ大ナラスヤ

此の記事に信次の年を當申二十六歳としてあるのは、滿歳としての勘定であらう。五六年前東京へ出たとせば、明治初年(元年か二年に)、二十歳前後で上京したもの、上京して東京して東京開成所に入つてそこを卒業した、それが「英學ニ從事スルコト五六年」といふのである。「縣學」云々は、松本師範學校の校長（或は教師）となつたことをさすのである。

學校に在ること幾ばくもなく、やめて上京し、飜譯をやつた、明治七年刊『後世夢物語』はこの頃の譯であると。外に何ういふものがあつたか、一切わからぬ。『夢物語』の發行者が山城屋稻田政吉であることは、後の『東

洋自由新聞』の發行と考へ合せて、注意を要する、これは宮武外骨翁が指示してゐる通りである。（『隨題隨記臨刊』中東洋自由新聞稿）。明治九年春のころ、「東京曙新聞」の論説記者となつて、盛に自由民權を論じ出した。これは勿論當時の英學者に當り前な文明開化讃美から來たものだが、然し政府が矢鱈に民權論を壓迫するに及んで激して一種共和政治の思想をさへ抱くに至つた。此の頃の曙新聞をよめば、上條信次の政治思想の如何なるものであつたか、その一斑が窺がはれるであらう。

此の頃は、今日いふ漢文直譯體、即ち當時の新聞論説調の文章を新家文とよんだが（中村太八郎氏談）、信次は此の新家文の上手であつた。

曙新聞にあること足かけ六年、明治十四年一月十八日、同新聞を退社した。退社の理由は、曙新聞の旗幟變更であらう。社長の岡本武雄が政府に買收されて、今迄の民權主義支持の論調を捨てゝ、政府擁護に傾いて來た。信次はこれに贊成しなかつたので、半分は放逐の型で殆んど喧嘩分れのやうになつて退社したものらしい。同年二月十七日の曙新聞の記事によると

上條信次氏は舊來弊社員なりしが仔細ありて去月十八日退社せしめたる次第にこれあり尤も是等のことは別段吹聽すべき廉にもあらざれば其儘に致し置しに同氏は却て自身に退社したる旨諸新聞に廣告云々

とあるから、さうと察せられる。

信次の方では、又岡本に對する氣持からしても、自由民權派の一大新聞を起して、見返してやらなくてはならぬ。そこで前年十月歸朝した西園寺公望を社長、中江兆民を主筆に、山城屋稻田政吉を金主方にして、『東洋自由

新聞』の出現となつた。

東洋自由新聞創刊に際しての信次の役割は案外大きく、殆んど彼の方寸からこの新聞の出現が割出されたものといつても差支へがないらしい。現に發行趣旨なども、信次の筆になるものであり、松澤求策を西園寺公望に紹介したのも、信次であるといふ。信次は東洋自由新聞發起人中の黑幕であつたらしい。だから或は、かういふ自由主義の大新聞の計畫があるのがわかつたので、今は反對主義となつた曙新聞から退社させられたものではあるまいかとも考へられる。東洋自由新聞の出願は十四年一月二十日であり（出願人稻田政吉、編輯長兼印刷長上條信次）、信次の退社は一月十八日だから、まさか二日間で東洋自由の創刊を說いて廻つて纏めたとは考へられない。だから此の計畫は何うしても、もつと根深いものであつたらうと思ふ。

東洋自由新聞發行の顚末は、宮武翁の前記パムフレットに詳しいから、こゝに繰返すのは一切やめるとして、たゞ此の後の上條信次の經歷に疑問が少くない。

信次は、東洋自由新聞發刊後暫く何をしてゐたか、やがて『明治日報』が起るに及んで、これに關係した、明治日報は丁度自由民權論とは正反對の新聞であるのに、何うしてさういふものに關係するに至つたのか。もつとも、『丸山作樂傳』を見てもわかるやうに、信次は作樂と相當の交際があつたらしいから、その邊から連絡がついたものか知れぬが、何うも、二人が知り合つたのは、遠く開成所頃にあつたのではないかといふ氣がする。もつとも、信次も洋學者出身に似ず、一面非常な學問好きの人で、古事記、日本書紀の如きものを愛讀してゐたといふから（中村太八郎氏談）、何かその邊で、作樂と共通なものがあり、妙なところで共鳴し合つたのかも知れない

（勿論、作業は單なる保守反動家ではなかつたことも、考へに入れる要があるかも知れない）。

明治日報に關係以來、主義一變と（世間なり以前の味方なりから）見られた信次は、今度は中國に流れて、先づ岡山新報の記者となり、ついで十六年三月岡山の吉備日日新聞といふもの、社長になつた。これは有名な民權主義の新聞であつたので、今迄は、信次の變節といふことを半信半疑でゐた人々も、これには一寸呆れたらしく同年五月二十二日の朝野新聞はこれを特記してゐる。

この社にいつまでゐたものか、それは分からぬが明治二十年前には止めてゐたらしい。單に同社をやめたのみでなく、新聞記者の足を洗つて、外國貿易めくことに手を出し始めた。明治二十年三月歐米旅行の途に上り、二十一年五月歸朝してゐるが、これはその外國貿易に關するものであつたといふことである（中村七八郎氏談）。

信次の共和主義のことは、前にも述べて置いたが、これは一寸變つた共和主義で、共和主義の實行は日本ではとても駄目だからよろしく金をつくつてアメリカに渡るべしといふ説であつた。これは本人としては大眞面目の議論で、アメリカ行の資本を得るためだとて、諸所鑛山を探して廻つたことがあつた。

明治二十七八年日清役の後、何ういふ機會からか、駐日支那公使裕庚に『支那改革意見』を示したところ、大に裕庚の傾倒するところとなり、顧問格で支那に渡つた、これが信次の最得意の時代といふ。その改革意見の如何なるものなりやは未見であるが、追々見る機會を得ることゝ思つてゐる。

信次の支那行は前後三度程であつた。

此の頃は別に收入とてなかつたので、支那から骨董物を仕入れて來てそれを賣つてゐた。然し支那顧問の得意

時代もさう長くなく、明治三十二三年頃木下尙江氏が會つたときには、娘といふ女性と二人神田に下宿して支那語を研究してゐたといふが、此の時にはもうあまりいゝ生活をしてゐなかつたらしい。それが次第に零落して、晩年には西園寺公、小松原英太郎、伊東巳代治などのところから合力を受けて生活してゐた。

明治四十五年、偶然鄕里に歸つてゐた時病氣になつて、鄕里で歿したといふ。年六十七か。（昭和三年一月、愛書趣味三年一號所載、昭和十年一月增訂）

信次には最初妻君があつたが、後故あつて離別した。此の夫人には先夫の子があつて、此の人はまだ存命の筈といふ。信次の譯書『夢物語』は當時としては大に賣れ、信次も得意がつて、友人達に話しも見せもしたものであつた。（以上上條氏の友人中村太八郎氏の談話筆記）

二　高須治輔傳聞書（增訂）

明治十六年刊のロシア小說『花心蝶思錄』の譯者高須治輔のことは、いまだによく分からない。元來この飜譯小說にはいろいろ疑問がある、ロシア原語から譯したらしいのに英語らし名前の呼び方をしたり、その上、明治十九年には更に『スミス・マリー之傳』だなどと改題したりしてゐる、果して原語から譯したものか何うか、さういふ疑問があるので、譯者の履歴や生死などを尋ねてみたのである。ところがこの小說が原語譯かどうかといふ疑問は內務省版權書目で完全に分かつたが、譯者の履歴の方が未だに一向分からない。三木愛花、石井研堂、石川巖諸氏の示敎で、兎もかくも何ういふ人間であつたかといふことの輪廓は知られたやうなものゝ、矢張り明

瞭でない。

譯書そのものについては、ロシアの原語譯たることは疑ひがない。即ち今いつた版權書目第二十五號（明治十五年十月—十二月）のうちにこの書の原書を

○加比丹ノ處女

プシキン全集第四卷稗史

西暦一千八百六十九年魯國聖彼得堡ベゾブラーゾフ及ヒカーセイ氏社刊行

と明記してゐるから、右のプーシュキン全集第四卷所收の『キャプテンス・ドゥタア』（大尉の女、又は士官の娘）を底本としてゐることが、明白である。然らば何故にあんなに英語風英國小說風なものにしたかといふと、これは校閲者の服部撫松のわざくれであらう。服部は外國語も何も分かりもせずに飜譯文學界などにも入りこんで種々餘計な事をした人物である。然し一面、當時の日本の文學界洋學界に於ける英國文學とロシア文學の勢力の消長を知るべきバロメータアともなつて、その點は誠に面白い紀念物となつてゐるが（今日からいつて殊に然り）、高須氏が拙くともプーシュキン原作を直譯してくれてゐたら、此の小說のことも、譯者高須氏のことも、却つて力を入れて研究する人が出たであらうのにと、頗る遺憾とする次第だ。

ところで、高須氏に關して分つただけをいはう。

高須治輔（輔の字は助をも通用する、現に『花心蝶思錄』の如きは、此の助になつてゐるが、然し輔の多くの場合輔の字が多い）、墨湘、又は五洞（散史）などと號した。東京の人といふが、生れた場所も年も身分も一切不

明。父は醫師であつたといふ。巧拙は別として、漢文の文章や漢詩などもあるから、漢學も相當やつたものらしい。無論誰に習つたとか、何處で學んだとかは、分からぬ、たゞ當て推量での話である。

問題のロシア語ロシア文學の知識は何處で得たらうか、これには二說あり、一は外國語學校露語科出身といふこと、他の一は、函館の露和學校の出身といふこと、これである。前說は三木愛花氏の示敎に成るものだが、三木氏もさう斷言してゐるのではない、多分さうであつたらしいといふだけ、根據が頗る弱い。然し宮武外骨翁も本人自身から、矢張り外國語學校露語科の出身らしく聞いてゐる由であり、翁に對して高須氏は、當時同窓は五人しかなかつた云々と語つたといふ。函館露和學校說に至つては、直接高須氏を知つてゐたといふ某氏の談として石川巖氏に聞いたのだが、これも高須氏の直話としてその某氏が傳へたものであるといふ。二つの直話に對して何れを是とすべきか、明證を得ぬので二說倂記に止める。

たゞ函館說をとれば、江戶卽ち東京生れの高須氏が、何として東京の學校に入らずに函館に流寓したか、そこには特別な事情があつたと思ふが、それは今のところ白紙として置くより仕方がない。

函館の露和學校が何時頃設けられたものか、何れはニコライ一派の連中が明治初年に創立したものと思ふが、今年月を定かに指示し得ぬのが遺憾だ。

明治十六年に『花心蝶思錄』を公にするまでの高須氏は何をしてゐたものか。前に名を掲げた『函館遊寓名士傳』といふ著述はこれより以前のものであつたかと思ふが、それは別としても、此の頃以後にかけて報知新聞の文苑欄に時には高須墨浦寄稿の漢詩漢文が見えてゐる。又若し明治十四年頃東京曙新聞でロシア虛無黨の事を論

じてゐる高須鐡峯なる人物が、此の治輔であれば、新聞記者をしてゐたこともあると見なくてはならぬ。又服部氏と交際のあるところなどを見ても、當時の文人墨客の仲間入りをして、詩酒徴逐の眞似事ぐらゐをしたかも知れない。

さて明治十六年以後に何をしてゐたものか。これも正確には不明だが、著書文章が二三殘つてゐる。十八年の『地底旅行』のことは既に「研究篇」に述べてゐるから、こゝで繰返さぬが、明治十八年七月十日郵便報知の廣告に

○中央亞細亞露英關係論（上）

といふのが、栗本鋤雲先生閲、高須治輔君譯として見える。又同年十月二十八日の朝野の廣告には

○馬術警策　露國陸軍少將　マホエーヌイ原著

といふものが高須治輔譯として出てゐる。又文章としては、明治二十三年十二月、「日本人」第六十三號以下に

○那翁の外交政略

といふものが見えて居り、同二十四年一月、同誌第六十七號に

○日露の關繫を論ず

といふものが見えてゐる。

猶ほ宮武外骨翁の示教によれば、明治二十一年頃、高須氏大分落魄して仕事を頼みに來しことあり、何うも露シア語などといふ役に立たぬものをやつたので生活に困つてゐると話してゐたとのこと。それで外骨翁は高須氏

を翁の主宰してゐた『頓智協會雜誌』の飜譯掛りとして採用してやり、高須氏の手に成る小品は可成多く同誌に載つてゐる。

三木愛花氏の示敎によると、明治二十四五年の頃、三木氏と同じ下宿屋にゐたが、その頃は大藏省の屬官に任ぜられて月給二拾五圓をとるやうになり、大分滿足の樣子であつた。だが二年ばかりの後には罷めるか罷められるかしてまた遊んでゐたが、今度は外務省に出仕し、一時露領の小さい（ウラジオかハルピンか何處か近いところであつた）土地の領事になつて赴任した。それきり友人の三木氏などゝも音信不通になつた。高須氏は江戸つ子だけに、同志の小酌でもある析は端歌なども歌ひ、一寸面白い人物であつたが、何分女性的な人で、小官吏で甘んじ、文學などは廢したので、その後文筆方面の友人たちとは交通を絶つたとのこと。

此の三木氏の示敎を補ふものに「愛書趣味」第四年一號（昭和四年一月）に掲げられた石井研堂氏の記事がある。

予が高須氏を知つたのは、明治二十四年ごろ、東京神田錦町なる學齡館で發行する雜誌「小國民」を主幹せし時である。

その頃館主高橋省三氏が、どんな緣で知り合になつたか、その邊の事情は知らないが、高須氏に編輯をまかせて、「農學園」といふ雜誌を出したことがある。この雜誌は、廿四年の一月から、毎月一回發行、確とは記憶しないが、二年位續いた事と思ふ。同じ學齡館から發行の二雜誌ながら、編輯室に机を並べてゐたといふではなく、予も高須氏も、各自宅で編輯し、たまく館で顏を合せるに過ぎなかつたから、交際といふまでには至らなかつた。殊に予は氏が露國文學の紹介者であり、日露辭書（丸善版）の編者であることなどは、毛頭知ら

す――この二事を知つたのは、近く十年ばかり前であつた――それに、當時、甚だ使ひ途の無さゝうな露語學者といふのを、實は内心輕侮して居つたのと、高須氏の天真孤峭であつたのとで、相逢ふても、互に青面撩を交はすに止り、共に牛鍋をつゝくといふやうな事が終に一度も無かつた。

當時の高須氏は、農商務省かどこかの官廳に勤めて居つたらしかつた。そして其の雜誌を已めた事情も終に聞知しなかつた。

たゞ、今に記憶に殘るのは、其風采、一見婦人のやうな柔和白皙の優男で、極めて寡默、こちらから話を仕かけなければ、向ふから話をするなどは、殆ど無い人であつた。又、予は甚だ失禮ながら、同氏は極めて融通の利かない人と思ひ定めて居つたことを白状する。といふのは、件の「農學園」の編輯ぶりが本邦の農業狀態に親和せず、記事は農家の青年などに讀ませても、耕耘稼穡に資する所あるまいと思ふ材料で埋め、口繪に石版幾遍ずりといふ手數のかゝつたものを、毎號卷頭に冠しながら、其の畫材は、本邦に譯名の無い畜獸魚鳥、或は殆ど農業に關係の無いものを選び、しかもそれが本文中に詳説あるでもなく、たゞ美しい口繪を一葉添へるといふに止り、金をかけた丈けの實效を疑はざるを得なかつたので、も少し實際に近づけることの出來さうなものと、傍で齒がゆく思はないでも無かつた。

同氏が學齡館から出したものに、薄つぺらな露和會話書があつた。

件の會話書は、明治二十五年八月十五日出版になる。

○自宅獨習 露和袖珍會話　完

といふもので、これには著者高須治輔の上に露語講習會頭といふ肩書がある。當時果してかういふ會を實際やつてゐたものか、又は廣告だけの烏有的なものか、そこは確め難い。

上記石井氏の文中に見える『日露辭書』云々は明治三十七年頃出版された小型の『露和字彙』のことであらう。この時高須氏は長崎稅關の役人をしてゐたらしい(稅關長とか)。奧附には長崎何町何番地と居所も見えてゐたので、遲ればせすぎるかと思つたが、長崎の知人に稅關の方を調べてもらつたところ、單に東京の人でこゝにはさう長くゐなかつたといふことだけしかわからなかつた。

稅關長をやめた後の高須氏は、一時神戶邊にもゐたといふが、その後東京に歸り、赤坂芝邊にて可成り零落して死んだといふ。それが大正年代の初め頃のことであつたと。これは、石川巖氏の談話で、同氏が誰人かから傳聞されたのを、私に敎へられたものである。(又高須氏は初期の中央公論にも關係してゐたといふ、初期といへば三十四五年頃であらうが、關係といふのは何の程度のことか、此等のことは今後の硏究に俟つことにする)。(昭和三年一月愛書趣味三年一月號所載、昭和十年一月增訂)

三　情態奇話『人七癖』とその譯者森澄德聰

『人七癖(ひとのなゝくせ)』については、「硏究篇」中に多少說明があるから、それは繰返さぬが、これは兎もかく明治初期フランス小說の飜譯物の中、珍奇の部に屬する。果して何冊發行されたものか、只今までの調べでは第九冊まで判明して居り、そこで物語も一段落となつたらしく見えるから、これ以下中絕したものではなからうかと考へられるが

中絶といふ明證もないので、疑問のまゝとして置かう。

此の書は、明治十八年二月初編發行、同四月第七編、私の藏本は合本で、八九兩編の刊行年月を確かめ難いがさう飛び離れてゐはしないであらう。矢張り十八年中のものと考へる。發行所は四谷儒古堂、いづれも紙表紙、パムフレット型、毎冊三十頁内外、至つてお粗末な體裁であるが、却つて一味淸雅な印象がなくもない。口繪の外每編挿繪が見開きもの二葉づゝある、畫者は歌川國峯である。初編の口繪は惺々曉齋、假名垣魯文と紙重堂風來(河原英吉)の序文がある、二人とも手一杯に小說論、東西小說比較論を陳べてゐるところ、なかなか愛嬌がある。

原著者は佛國のユージェーヌ・シューと表紙に明記してあるからそれは明瞭だが、たゞ譯者は表紙に二愛亭花實、淡々亭如水合譯となつてゐる、序文にも二人の合譯の如くいつてあるし、本文の署名にも二人合譯となつてゐる。ところが奥附は凡て譯者が森澄德聰一人きりだ。これは何うしたことか、事實森澄氏一人の譯だつたものか、それとも二人合譯を森澄氏一人で代表したものか、そこの處を調べる手掛は、今のところないが、幸ひ川島忠之助氏が森澄の舊知であつた由で、森澄の略歷を敎へて下されたので、漠然と森澄の傳記聞書を揭げるに止める。二愛亭と淡々亭のうち、何方が森澄か、それは分からない。もつとも川島氏とて森澄とはさう親密に交際してゐたのではないといふから、中年以後の事は傳聞が多いとのこと、若し誤謬があれば後々から訂正して行くことゝして、川島氏の示敎のまゝ發表して置かう。

森澄德聰氏は江戸の人(本書奥附には神奈川縣士族とある)、川島氏と同樣、舊幕府御賄所手代の家に生れ、慶應三年中横濱語學校に入つてフランス語を學んだ。その動機等も時勢に動かされたといふより外に特別のものが

あつたか何うか。年は川島氏より一歳下だつたといふから安政元（嘉永七）年生れであつたらう、然しフランス語では却つて川島翁より先輩に當つてゐた。

明治五年川島翁が富岡製絲に雇はれて行つたとき、森澄氏はもうフランス語通譯として勤務してゐた。だが何か不平があり又自由戀愛的結婚などをして多少物議をうけたりしたので、辭職して去つた。富岡生活の一年半ばかりの間、川島翁は同じ寄宿舍に起臥してゐたのであるが、何分裕福な家に生長した、遊蕩的分子の多い人物であつたといふ。フランス語の外に稍や漢學に長じ、平生好んで韓非子を讀んでゐた。

明治八年、川島氏は横濱に赴き Hecht Lilienthal & Co に書記に入つたが、續いて森澄氏も横濱に來た。然しあまり好い就職口はなく、甲から乙、乙から丙と小店小會社などの雇員となつてあるいてゐた。

明治十五年の春川島翁が正金銀行に入り、フランスのリヨンに赴任する際、先年洋行の際、パリで購入して來た小說雜書の類を大概知友の間に分配したが、その際森澄氏に當つたものに、ユージエーヌ・シューの作『七大罪』が一部あつた、森澄氏が後飜譯に使用した原本はこの時川島氏より分配されたものである。

原作者シューのことは、詳くのべると、專門的に失する嫌があるから、今はやめるが、彼の傑作は「さまよへるユダヤ人』（一八四五）と『パリの祕密』（一八四二）の二編で、當時大デュマと互角位の名聲をもつてゐた。『七大罪』は平凡の作と見られてゐたもので、七罪のうちには吝嗇、肉欲、貪慾、傲慢、羨望などがあるといふが、森澄氏の譯した『人七罪』には吝嗇編と銘うつてあるから、恐らくその部分だけを譯したものであらう。

川島氏の歸朝（再度）は二十八年であるが、この後は森澄氏との交渉も絶え、從つて消息にも接しないので共

履歴はよくは分からない。たゞその一女を女優とし守住（森澄）月華といふ藝名で舞臺に上せたこと、其の女が容色があつたので押客が多かつたが、その中の一人某に出資せしめて東京座（神田三崎町の神田劇場の前身）を經營して月華の根據地たらしめ、森澄氏一家は權花一朝の榮に誇つたといふ。だが間もなく同座失敗に歸し、父子及び出資者某も共に杳として消息が絶えてしまつたといふ。從つて森澄の存歿は全く未知に屬するが、恐らくもう故人になつてゐるであらう。或は月華の關係を辿つて演劇研究家方面からでも手繰つて行つたら、何か分かるかも知れない。（明治十五年頃政治演說などして廻つたことは、當時の新聞に見える）。

因にいふ、此の『人七辯吝嗇編』の原本は、此の直後、これとは何の關係もなく、大阪朝日新聞に譯載されてゐる。題して「情利こ、兩鑒人心寫眞繪」といふ。明治十九年十二月十日から譯載し、二十年三月二日大團圓してゐる。此の方は『人七辯』と違ひ、先づ飜譯といはんより飜案に近いものであるが、吝嗇編がとにかく完結してゐるから、內容の首尾を知らうと欲する人はこれに依るべきである。

此編先年其一斑を譯述したる者あれども僅に其十の一二にして止みたり編者全豹の世に顯れざるを遺憾に思ひゐたるに恰好頃来友人某倆之が全編を意譯して贈られたれば此くは飜案の需に從ひしなり然れども編者が菲匠文章の拙劣なる原著の妙の幾分をも盡す能はざるのみか往々却て其體を傷けたる所も多く且志に斬見を添へたる處さへ尠なからねば篇中の妙處は原著の力なるは固より言ふを俟たず或は不都合の處あらば編者が罪と見そなはしたまへ云々

以て、如何なる態度で掲載されたものか察知することを得るであらう。（昭和十年一月增訂）

井上勤とその飜譯小說

——自傳的資料若干——

序

井上勤氏の傳記的資料については、先に『明治文化全集』に氏の飜譯物を收載する際に同人が種々示教を得た手翰二通あり、それが唯一の文獻となつて、『續飜譯文藝篇』所載の井上勤傳が出來たのだが、その後井上氏も歿して遺族に資料提供を仰ぐ道もなくなつたので困つてゐたところ、昨年になつて川島禾舟氏が「書物展望」四月號及び七月號に「井上勤翁傳」及びその追補を書かれてから、井上氏の傳記的事實に可成り光明を得たといへやう。今、上記の手翰を主に川島氏の記事と綜合して幾分自傳めく一篇を書いてみたいと思ふ。　昭和十年一月十六日　柳田泉識

井上不鳴翁(勤父)略傳

(井上勤氏の手翰によれば此の略傳は小島清氏の編に成るものといふ。「　」は私の附記である。)

文化九年、淡路洲本ニ至ル、前羽宗九郎ノ男、名ヲ嘉猛トイフ。幼ニシテ出デテ〔藩〕醫員井上玄貞ノ家ヲ嗣グ玄黙(モク)ト改ム。

文政十二年、ハジメ南洋翁〔姓を記さぬ、或は上記井上玄貞のことか〕ニ學ビ、十八歳京師ニ遊ンデ頼山陽ノ門ニ入ル。

天保三年、山陽歿スルヤ小石元瑞ニ就キテ其業大成ス（廿一歳）

天保十年、藩公ニ侍シテ江戸ニ出ツ、タマタマ箕作阮甫ト交ル（廿八歳）、當時、亞墨竹枝一巻ヲ上梓スルヤ、牧百峰、頼支峰等之ヲ賞揚ス〔川島氏所記によれば、『亞墨竹枝』は弘化三年出版であるといふ〕

弘化三年、藩公ノ命ヲウケテ長崎ニ至リ、シーボルト先生ニ就テ洋法醫學ヲ修ム、コノ年坂井虎山、草場佩川、廣瀬淡窓ヲ訪ヒテ語ル。後年一子百千（春潭ト號ス）ノ長ズルニ及ビ、往年ヲ追想シテ百千ヲ廣瀬[illegible]ノ塾ニオクル。

嘉永三年、〔九月十五日〕、〔長〕男勤（春泉ト號ス）生マル。コノ年我國ニ牛痘種ハジメテ傳ハルヤ、不鳴居士阿波國ニ之ヲホドコス〔川島氏所記に曰く長崎に赴き、西洋醫學特に產科小兒科を學び、嘉永二年種痘法を傳へ、之を徳島に施す、四國に於て種痘の行はるゝ實に不鳴に始まる〕。

安政元年、〔次〕男百千（春潭）生ル。

文久三年、朝廷ニ攘夷ノ議オコルヤ、同志ト江戸邸ニ建言、忠悃切ニ至ル（五十二歳）。

明治五年、芳山、京阪ノ地ニ遊ブ。翁善ク談ジ、老而不衰。コノ頃阿波ノ中洲ニ住ム故ヲ以テ、不鳴居士ト號スルヤ、友人堤洲鈴木孝[illegible]レテ曰、翁スデニ醫ヲ以テ鳴リ、又文辭ヲ以テ鳴ル、不鳴トハ何ゾヤト。不鳴齋、通稱仲庵、字默、別號臥遊齋、文會樓、春漁（六十一歳）。

明治ニ至ルヤ文雅ヲ以テ志ヲ養ヒ、德島縣[illegible]課囑託トナル。交遊スル處ノ人士、〔勝〕海舟、〔中村〕正直、〔西村〕茂樹、〔小野〕湖山、〔三島〕中洲、〔小杉〕榲邨、〔[illegible]〕網紀、〔[illegible]〕百川等、[illegible]ニ於テハ〔岩崎〕

小竹山人、〔廣瀨〕淡窓、〔坂井〕虎山、〔草場〕佩川、〔寺門〕靜軒、〔宮原〕節庵、〔江馬〕天江、〔賴〕支峰、〔牧〕百峰、〔池田〕草庵等、知名ノ士多シ。

明治十二年十二月二日、妻女コト歿ス。

明治二十六年一月廿五日、阿波ニ於テ歿ス。年八十二歲也。

不鳴翁ニハ左ノ如キ著書アリ。

亞墨竹枝　天保十四年

〔川島氏所記曰く、天保十五年に三個年の米國漂流より歸國せし撫養の船乘初太郎に就き、彼國の異風奇習を聞きて之を七言絕句二十八首に詠ぜしもの。弘化三年出版。序は廣瀨淡窓、篠崎小竹が書いてゐる。外國事情を記せる漂流記の初期のものとして、今尙珍本扱ひせられて居る〕。

浪の花日記（鳴門紀行）　安政四年

調練問答附錄　安政五年

調練問答ハ常陸人鈴木豐大ノ著也。不鳴コレヲ補ヒテ藩公ニ奉ル。

航海全針俗解　安政五年三月成

大統歌俗解上下　明治四年

池田之助家職要略　明治十五年

櫻井異傳外篇　武田覺三編　不鳴校並評註。明治十九年

遐邇貫珍和解　年次不明

其他、春漁和歌集、文會樓詩稿、臥遊齋詩抄等アリ、他ニ散佚セルモノ數種。

男勤、上京シテ文部省ニ入リ、カタハラ翻譯ニアタル。

男百千、廣瀬塾ヲイデテ後神戸稅關文書課ニ入ル　百千氏は堀氏を襲ぐ、又詩文を能くした。長く神戸稅關に在り、晩年退官、大正十一年歿、「春潭遺稿」が三冊あるといふ。」

三女アリ、皆嫁ス。

井上勤傳

（文中片カナは井上氏の自記、〔　〕は筆者補註）。

〔嘉永三年九月十五日生・生地は阿波徳島か〕

〔安政三年〕七歳ノ時蘭人ドンコル・コルチス〔ドンケル・クルチウス〕氏ニ英語ヲ學ブ。〔此の實傳とせば、この時不鳴翁に從つて江戸にあり、翁の知己シーボルトの紹介にて學び始めしものと考ふるを至當とす〕

〔文久元年〕十二歳ニシテ同藩芳川顯正ト共ニ薩摩ニ行キ久シク森先生〔有禮か〕ノ許ニ止マル。

〔此の時森有禮は僅に十五六歳であり、就て學ぶ程學問があつたとも考へられぬ〕。

〔文久二年〕十三歳德島ニ歸ル。

〔慶應元年〕十六歳、神戸ニ來リテ海岸四番館ノ通辯トナリ直チニ獨逸領事館ニ入リドクトル・フォケノ獨文寫字ノ援助ヲ爲ス。

其後間モナク大阪ニ移リ、『月世界旅行』ノ英譯ヲ讀ム。〔川島氏調査によれば、獨逸領事館の神戸に置かれしは明治元年、井上氏十九の時といふ。又「其後間モナク」とはいふも、此の間恐らく十年以上の間隔あるのではあるまいか〕。

〔明治元年〕十九歳春三月、デンマーク海底電信敷設船ニ乘組シ北海道諸港ヲ回航シテ東京ニ歸ル。〔此の一條も未考、恐らく通辯として乘り込みしならんが、明治元年に果してかゝる事實ありしやいなや、年代の點は更に考究してみなくては分からない〕。

〔明治元年より十四年まで不明、大阪、德島等に住居せしこと、文筆を弄せしことが知られるのみ〕。

〔明治十四年〕上京、舊藩主蜂須賀公ノ命ニ依リテ大藏省ニ轉任シ關稅局ノ反譯掛トナリ、英人ビッガロー氏ノ關稅論ヲ和譯ス（大藏省藏版）、上卷ハ井上氏ノ譯也。〔轉任とあるを見れば、最初飜譯局勤務か〕。

〔明治十六年〕蜂須賀公佛國公使ニ轉ジ〔井上氏は〕文部省ニ轉ジ西村茂樹君ノ編輯局ニ入テ飜譯ニ從事シタリ。〔次官佐田百川〕。

間モナク尾崎三良君ノ依賴ニヨリ內閣制度取調局ニ法律取調掛トナリ、宮內省制度取調兼勤、元老院議事掛兼勤。〔取調局は十七年設置〕。

後、貴族院ニ入ルノ內命アリ之ヲ辭シテ官海ヲ去ル。〔此の內命は勿論明治二十二三年のことであらう〕。

〔川島氏所記、明治二十四五年頃井上氏は東京を去て神戸移住。〕

〔明治二十六年刊、『神戸港内外商家便覧』といふものに、文藝欄「洋學者井上勤」、植木商に「西洋草木[illegible]賞生師井上勤」とある由。〕

〔五十餘歳にして一度渡米す〕。

〔昭和三年十月二十二日神戸市引町二丁目の自宅にて老衰の爲め死去。享年七十九。〕

私ノ交際セシ方々ハ皆多ク小生ノ世話ニナリシ紳士ニシテ元老院議長柳原君、井上毅君、尾崎三良君、西村茂樹君、芳川顯正君云々。爾後多數ノ名士ニ交リシモ今ハ多クハ此ノ世ノ人ニアラズ御存ジノ通リ多クノ書ヲ讀マント欲セバ人ト交ルコト甚ダ困難ナリ故ニ閉戸先生ニアラザレバ讀書家タルヲ得ズ嗚呼依田百川君曰ク讀書家タラント思ハバ無言宗タラザル可カラズ誠ニ然リ小生ノ反譯小說ハ皆悉ク百川君ノ序文ヲ冠キザルモノナシ始メヨリ其約定ナレバナリ其後依田先生ノ生存中ハ堅ク其約ヲ守リキ。

〔内田魯庵氏談、井上氏は井上毅、西村茂樹、箕本誠一の諸氏とは特に親しく、又就中芳川顯正伯とは親交があつた云々〕。

小生ガ洋書ヲ反譯セシ頃ハ何レノ官省ニ行トモ一ト通リ英獨佛露伊ノ語ヲ讀ミ得ル人物ハ其誰タルヲ論ナク日本文及ビ漢文ニ論ナク流暢ニ書キ得ル人物ハ一日ニ五圓ヨリ拾圓位又ハ貳拾圓ノ金錢ハ容易ニ收得シ得ラレ候故貧乏書林ノ貧乏ナル金庫ヲシボラズトモ容易ニ金錢ヲ得ラレ候故外國語ニ熟達シアレバ金錢ニ乏シキ書生輩ハ無之西周君ノ如キハ一文モ政府ノ金庫ヨリ金錢ヲ月給トシテ取ル事ナク細々ノ生計ヲ立テヲレリ夫レヲ小生等モ親

シク知リ又實見セリノミナラズ西君ノ如キハ死シタル時同氏ノ金庫ニハ何十萬圓ト云フ金錢ヲ有セリト云ヘリ月給モ取ラズ商賣モセズ外國書ヲ讀ムニ巧ミナル書生等ハ其當時ハ大金ヲ握リテ芳原ニ飛ビ込ム者共何百人アルヲ知ラズト云ヘリ其筈政府ハ英文佛文獨文ヲ巧ミニスル反譯者ニ渴スル事甚シキヲ以テ現在ノ如ク十行ニ十字詰メノ反譯シテ貳拾錢若シクバ貳拾五錢シカ取レズ昔時十行ニ十字詰メ反譯料十五六圓カラ高キハ貳拾圓一日ニ貳拾枚取レバ一日ノ反譯料幾十圓ニナリ候事實ニ驚クベキニアラズヤ斯ル有樣ナリシ故貧乏書林ノ反譯料ナドネラウ書生ハ甚ダ稀レニシテ假令ヒ偶々ネラウ貧乏書生アリトモ些少ノ反譯料ヲ取ルノミニテ之ヲ書林ニ與ヘタリ文部省ノ如キ倹約ノ省デスラ十行貳拾字詰反譯料一枚ニタイシテ少クトモ五圓以上與ヘ居リシコト小生之ヲ親シク記憶セリ此ノ模樣ナルニ依リ尋常ノ書林ニ反譯物ヲ賴マレテモ多額ノ反譯料ヲ取リ得タル人物ハ僅少ナル可シ併シ最好ノ珍書ハ此ノ限リニアラズ夫レ故書林ニ賴マレテ反譯シ出版シタルモノハ反譯料ヨリハ面白半分ニテ、金ヲ反譯料ニテ收得スルハ各省ニ飛ビ込ミテイクラデモ取レルニヨリ貧乏書林ヲ相手ニスルハ英書反譯ノ書生達ノミニ有之候獨佛伊ナドノ反譯物ハ各處ノ官衙ニ最好ノ金錢取リ反譯物多々有之リキ右ノ事情ニ付キ西洋語ノ反譯ハ官衙ノ御用ニアラザレバ金錢收得ノ目的ニ適セズ夫レ故反譯デ金錢ヲ收得シ金ヲ蓄ヘタル人物ハ小說ナドニテ富者トナリシ書生ハ壹人モ無之候。

「川島氏所記に曰く、翁が自ら語りし處として傳ふるに、飜譯局へは自ら使はれんことを求めて賣りに行つた。そして試驗を受け及第して採用された。當時は給料の他に、片面十行罫一枚に付き三四圓の飜譯手當を受けた。云々。前記本文中の井上氏の飜譯料は少し過大に失せずやと思はれるので參考のため川島氏所記を掲げて置く。

恐らく此の方が飜譯料としては實際の金額に近いのではなからうか〕。

井上氏夫人コウ子。

〔明治十五年結婚といふ。吉澤氏。此の夫人は井上氏の繼室である由、川島禾舟氏の調査で判明した。此の夫人は文豪内田魯庵氏の叔母君に當るといふ、子なし、明治三十三年歿す。幾分文筆の心得でもあつたかして、後に記す如く井上勤譯、井上鎮子筆記といふ小說が一部出てゐる〕。

〔井上氏の晩年生活、性格、遺族等については前記川島氏の研究に詳しいから參照されたい。〕

井上勤著譯略解

（井上氏手翰に依る、〔　〕は筆者追補）

〔明治十二年　藝者の心得ちがひ　大阪　洗誠軒

藝妓の部（十月）、俳優の部（十一月）二册行刊。こゝでいふ藝者とは「藝ある者」といふ程の義、洋學者の藝妓改良論、俳優改良論と見るべきもの。〕

明治十三年　九十七時二十六同　月世界旅行　大阪　三木佐助

佛文英譯 By Jules Verne 佛文、小本十册ニ分割出版セリ

開卷驚奇　龍動鬼談　德島　世渡谷

英文〔ロード・リットン著エ・ストレーンジ・ストオリイの抄譯〕

〔民權〕國家破裂論

フランス革命史の抄譯の如きもの、民意抑壓の恐るべきを傳ふ〕。

〔**明治十四年**　第一世拿破物登行錄　思誠堂兎屋〕

關稅論　大藏省藏版

米・備具阿郎原著

〔女權眞論　未詳〕

〔スペンサア原著、明治文献目錄〕

明治十五年　良政府談　書林兎屋出版

〔ユトウピヤ〕英文ヲ譯ス、書林兎屋誠ニ出版セシム〔サア・トマス・モーア原著〕

明治十六年　月世界一周　〔博聞社〕

佛文英譯、コレハ壹册ニテ出版セリ〔月世界旅行の續篇〕。

亞非利加内地三十五日間空中旅行　〔繪入自由出版社〕

〔英文〕春陽堂ニテ出版セシム〔春陽堂版は合本一册にて後版である。初版は七册分册もの〕。

人肉質入裁判　〔今古堂〕

セキスピヤ中ノ一劇、此ノ芝居ハ新富座デ芝居ニイタシマシタモノ、廣告的ニ五萬册程モ印刷セシユヘ有名ナモノデアリマス〔此の書刊行前後果して人肉質入裁判の劇が上演されしやいなや、未詳である〕。

絶世奇談 魯敏孫漂流記　〔博聞社〕
英文、是レハ澤山ニ賣レ申候

全世界一大奇書　〔報告堂〕
（アラビヤンナイト）此書ハ今何ホ市場ニ賣リオレリ〔初版は分冊十冊ものとす。後に合本二冊となる〕。

〔新政府組織談　兎屋誠〕
〔良政府談の改題せるもの〕。

明治十七年

六萬英里 海底紀行　博聞社
〔ジュール・ヴェルヌ原著、太平氏譯、海底旅行と同じものなれど、井上氏の方譯がすつと佳〕。

獨逸奇書 狐乃裁判　〔繪入自由出版社〕
此書ハ獨文ノ繪入ニシテ神戸獨逸領事ドクトル・フォケ氏ノ贈與ナリ、其後英文ノ譯ヲ書肆大半手ニ入リ候得共皆ナ今ハ書林ニテ之ヲ紛失セリ
（第二信）過日モ已ニ申シ上シ通リ狐ノ裁判ヲ飜譯スル動機ハ獨逸領事ガ小生ニ獨逸ノ有名ナル繪入原本「狐の裁判」ヲ與ヘラレ、シキリニ此ノ狐ノ裁判ハ最モ面白キ小說ニシテ之ヲ日本語ニ譯シテ出版セバ多數ノ讀者ヲ得ルコト疑ヒナシト申サレ領事親友ノ所持サレシ繪入小說ヲ與ヘラレシモノニ有之其頃富有ナル書肆ノ書林ニテ望月（兎屋トイフ）ノ求メニ應ジテ飜譯セシモノニ有之望月モ頻リニ繪ノ巧妙ナルヲ賞讃セシ爲メ出版ノ折其ノ繪ヲ望月ノ手許ニ取込ミ小生ノ手許ニ殘ラザリシ故其後望月一家ノ火災ノ爲メ何モ燒ケ居ナシ
〔譯本〕狐ノ裁判ノ繪ハ獨逸ノ繪入小說ノ繪ニ相違ナキコトヲ小生ハ確信致シ居候

〔此の譯には内田魯庵氏も手傳ひし由〕

〔白露革命外傳 自由の征矢　繪入自由出版社〕

〔ジュール・ヴェルヌ著マルタン・ポスといふものであらう〕。

〔英國太政大臣難船日記　繪入自由出版社〕

〔ジュール・ヴェルヌ著チャンセラア號、太政大臣とはチャンセラアの譯で、即ち船の名である、これを何か譯有り氣に直したのは、校訂者渡邊義方の細工であらう〕。

明治十八年　全世界一大奇書　兎屋

〔合本一册もの〕。

明治十九年　空中旅行　春陽堂

月世界旅行　同

〔共に合本一册もの〕。

明治二十年　學術妙用造物者驚愕試驗

政治小說佳人の血淚

政治小說妻の歎

此ノ三本人僅カニ小生ノ反譯ナレドモ皆兎屋誠ノ出板ニテ誠急死會社解散ノタメメチャメチャトナリ其後管理人死亡其跡分ラズ〔第一は廣知社刊、第二は自由閣刊、第三のみ兎屋誠刊行である。第一はジュール・ヴェルヌ原著、「オクス博士の實驗」、第二は十七年刊「自由の征矢」の改題せるもの、第三はウイルキイ・コ

リンズの『夫と妻』の譯、前半のみ公刊」。

〔細君の友　　輿論社〕

〔英チャールス・ドイグ夫人原著」。

〔戀慕と嫉妬　第一編　　廣知社〕

〔英ルーシイ・ランダル・コルンフヲルト原著」。

明治二十一年　優勝劣敗猿の裁判

東京每日新聞ノ依賴ニ因リテ反譯セシモノ之レヲ同社ニテ印行セシモノナリ」刊本には東京二書房（西村、福田）梓とある。英國グレイ氏原著、ダーウィンの人猿同祖說に對する反對論を小說化したもの」。

〔幽靈　　鶴仙堂〕

〔ラムのシェークスピヤ物語中、ハムレットの筋」。

〔通俗八十日間世界一周　　自由閣〕

〔川島忠之助氏譯に對して通俗といふ、文章を和らげし意である。ジュール・ヴェルヌ原著、同名小說の譯」

〔明治二十一年　歐米大家文學之花　　柘園社〕

〔A Bouquet of the Literature. 月刊翻譯雜誌であるが、內容は殆んど井上氏の個人雜誌なるかの觀があるので、ここに掲げて置く。第四號迄現存、四號以後は未見。連載內容は

名士遺蹟　政界之暴風

ユーゴー著、屏嶺山樵譯

寸斷分裂美人之腸
ユーゴー著、レ・ミゼラブル、烏金山人譯
政界冒險大膽書生
ビコンズフィールド著、ヴイヴイアングレイ、荷香逸人譯
滑稽旅日記
英國高步著、シンタクス博士三遊記、春泉譯
右のうち眉嶺、烏金、春泉は井上氏なること明白、荷香逸人は或は内田魯庵氏であらうかと考へる」。

〔明治二十五年〕
國の境遇と地租輕減
〔明治文献目錄、未見〕

〔明治三十三年〕
姦策詭計祕密之祕密　大阪　矢島誠進堂〕
〔ガボリオー著、シャンプドースミステリー。井上勤口譯、堀多聞筆記、堀氏は令弟の子息か」。
〔大膽之大膽　大阪　矢島誠進堂〕
〔井上勤口譯、同鑛子筆記、鑛子は夫人コウ子なり」。
〔廣告に曰く、曩に多くの教書を譯出して世の喝采を得たる井上勤先生、近頃園藝を業とするの餘暇、多く歐米の珍書を繙き、其結構人事の極端に依るものを撰び、文は勉めて流暢平易を旨とし、或は全本を譯し或は其粹を湊合して卷を爲すもの多し、弊堂請ふて追次之を梓に上さんとす、本書は其第二にして人間大膽の極端を敍するものなり」。

森田思軒傳記稿

一

此の稿の前半は殆んど思軒の自傳といつても可い。主として思軒が「國民之友」に掲げた隨筆的文章の中から自傳的要素を引用し、それを連ねて先づ思軒が郵便報知新聞記者となるまでの經歷を明らかにしたいと思ふ。而かもその引用も、讀んで實に佳い文章であるから、成るべく長くして、思軒の筆力を示すことにする。

思軒居士（楚客、學人ともいふ）、名は文藏、後に白蓮庵主人等の別號も用ゐる。生地は二說あり、備中小田郡笠岡港の人とも（一）、備中窪屋郡倉敷町の人とも（二）いふが、森田氏は元來笠岡の出であるから、笠岡の人として置く方が無難らしい。然し現に父母を倉敷に省したといふ思軒自身の語（三）もある位だから、倉敷誕生說も全然無稽の說ではないらしいが、これは後に父母の移住したものかも知れない。生れたのは、文久元年七月二十一日である。父は三遷森田佐平、祖父は森田一瓢、母は森田氏。父祖共に商家ながら讀書人であり學問好きな人々だ。少年思軒の體には讀書好學の血液が遺傳してゐた上に、早くから文學的洗禮を受くべき環境にゐたらしい。

その授洗者の第一は彼の父である。

八九歳のをり冬の節父上の膝下に侍して水滸志を讀みたまふを聽きしが宣ひけるは謂はゆる四大奇書に就て古人の品評あり西遊記は云々金瓶梅は云々三國志の如きは正史實錄既に異常出色のものなれば其の演義の面白き

は當然の事なり水滸志が憑空此の如きの妙を結撰せるとは同日の談にあらずと云々（國民之友第七十八號、南窓渉筆）。

思軒八九歳といへば、明治元年二年の交である。此の父は又地方の名望家として小田縣の教導方をつとめ、後に「小田縣新聞」を編輯刊行して地方文化の開發に資した（十五年縣會議員）。思軒と新聞の緣も頗る古いものがある。今一人父に劣らず（或は父よりも大なる）文學的感化を與へた人があつた。それは母の叔父（祖父の弟）吉藏である。吉藏とその感化のことは、思軒の隨筆『尤憶記』（國民之友第九十一號附錄）中、大久保といふ條に語つて詳かである。

世の人の畏れきらふ天變にもさま〴〵あり余は尤も地震を心わるしとす凡そ人は己が惡くむ所に向て神經特に鋭敏となる余は如何なる場合にあり如何なる細微の地震に遇ふも先づ之を感ぜざること希れなり故に童子のころ障子の紙の少しくふるゆること有れば輙ち廝養を叱かり起して急に走りて大久保に避く、大久保とは叔祖吉藏先生が隱居の處なり、先生學を好て財を理むるに短かし產を墜して僅に負郭二頃の田を求め退て躬から耕す一軒の茅屋竹林を背にし二松を門にす旁ねく醫道を嗜みければ頹墻の下多く藥草を藝ゆ先生傲岸快濶にして善く談じ物に拘々せず蛾眉捧心の人先生の談を聞く半晌すれば破顏堆笑せざる寡し、家の街衢を離れて壓下顚越の虞少ければ地震する每に園族の婦幼多く來りて此に投す、地震の節は大抵冬に在り家固まり甚だ廣からず十數の人一個の火達に環り坐して相語る而して最も高きものは先生の聲なり既にして家人甘藷を蒸し尺大の破籃に滿盛して持ち來る白氣騰りて室に盈つ芋頭熱して驟に手にす可からず吹き〳〵之を啖ふこの時復た地震ある

を記するもの無し、先生殊に余を愛し寝るときは必ず之を傍側にす枕頭輒ち舊來の支那小説を説きて且つ讀み且つ講じ余が眠り去るに入て止む翌日暮より出れば族兄族弟等とゝもに山に登り田をわたり跋渉殆ど空腹に堪へざるに至て歸る膳に對して箸を擧れば食味常に什倍す先生余が快喫するを見れば傍らより稱賞して置かず夜に入れば亦た復た前の如し故に一たび大久保にゆけば短くして三數日長きときは旬月を渉り留りて肯て返らざることあり八歳より九歳に至るころ西遊記三國志水滸傳の三部は皆之を先生が枕頭の口授より受けて其の人名と事蹟とを略稱せり當時童子何をか知らん而るに先生の口譜歴々猶ほ耳にのこれるより推すに以て其の咀嚼講評の妙を追思するに足る、特に記す水滸傳の宋江祝家莊を打つ條に李應堅く宋江を拒みて肯て對面せざるとき黑旋風が之を評する一句の調戲あり先生は李逵の詞を述べていふ「定めて人め。（東京に謂はゆる人みしり）をせるならん」と稍や長じて水滸傳を讀み得るに至りこゝを讀むに是れ「那廝想是個兒孩怕見」といふなりき實に此の一句を飜譯するに先生のいへる所より更に切當にして通じ易き詞ある歟、常に余に教ゆらく金聖歎一書尤も人情世態を悉せり獨り今の汝に説與するを得ざるのみと、平生謂ゆる儒者と漢文とを抑へて邦文と大和心とを揚ぐ邦語邦文に就て一家の論あり題して「ひふみ」と曰ふ稿を屬する若干紙にして抛棄せり、先生讀書室に榜せず器皿灑がず到る處塵埃累々家を繞りて棕櫚の葉欅櫳の片陳々相因りて厚さ寸に盈つ、余は幼きながら頗る潔癖なり塵垢芥埃を極めて憎む所而して能く之を忘れて先生の家に眷々せるものは是れ亦の故無くんばあらず尤も憶ふは洲崎と云へる町はなを出づれば一條の綱坡畝畝の間を奔しれり即ち大久保に至るの道なり義に一軒だちの茅屋頃を二松の間に望むときは輙ち童子の心にも未だ嘗て自づから欣怡の思を作さずんばあらざりき

獨り『西遊記』、『三國志』、『水滸傳』が、幼少思軒の空想的食糧であつたばかりでなく、馬琴の『里見八犬傳』の如きも、その好んで讀むところであつたらしい。同じ隨筆に「鄕里の井」の一條がある、こゝにその邊の消息が出てゐる。

鄕里の家、うらに一井あり、水多くして久旱にも涸れず味微しく鐵氣を帶びたれども淸冽たぐひ無し、盛夏の日晝の永きに童子八犬傳を讀みあきて葡萄架下にゆき下女どもの澣衣を擣つほとりに立ちよりて之と些の閑言語を交へ復た去りて井にゆき手づから綆をたぐりて燒つぎの痕縱横せる大茶碗に一ぱいの水を汲み取りてこれを喫す、今や玻璨の盞玲瓏の氷一指呼の間に來る而して尤も憶ふは此に在らずして彼に在り

註（一）　阪田警軒「墓碣銘」、源高湛（森鷗外）草「傳記」

註（二）　須藤南翠草といふ大阪朝日所載の傳記、及び新小説（二ノ十二）の傳記

註（三）　「尤憶記」中の語（國民之友第九十一號附錄）

二

『思軒全集』第一卷頭に揭げてある源高湛こと森鷗外が草した思軒傳は、此の種の文字としては流石に佳傳といふべきであるが、可笑しいことには、あの考證に喧しい筈の鷗外が、此の傳の年代を殆んど全部狂はしてゐる。これは何ういふところから出來たものか、使つた材料に欺かれたのか、人の談話に釣られたのか、一二なら知らず殆んど全部狂ふに至つては何等か特殊な理由がなくてはならぬ。然し何ういふ理由があるにしろ、間違ひは間違ひ、誤算は誤算であるから、文豪鷗外の名に遠慮せず、勝手に訂正することにする。

第一萬延元年生れたといふのがすでに一年先立つてゐる。これは、歿年から逆算しても當然文久でなくてはならぬし、思軒の知友諸家の書いたものを見ても、皆文久元年と認めてゐる。

鷗外所草の傳（以下たゞ傳とのみいふ）に曰く「慶應三年年甫て八歳、啓蒙社に入りぬ。社は五十川左武郎が立つる所なり。」

慶應三年は文久元年からせば、七歳である。八歳は明治元年である。然しこれは何れも訂正さるべきで、元來啓蒙社を鷗外は五十川氏の私塾の如く考へてゐるが、それは間違つてゐるので、思軒自身の說明によれば啓蒙社は、明治初年小田縣で設置した小學校の名なので、小學校を總て啓蒙社とかうよんだのであるといふ。そこで小田縣といふからには、少くとも明治四年廢藩以後出來たものであるから、此の學校もその前後に出來たものでなくてはならぬ。今文献によるに、小田縣は明治五年六月深津縣の改稱されたものであるといふから、かゝる小學校は明治五年設置と見るべきであらう（假に深津縣時代から設置されたにしても、明治四年十一月からである。）明治五年は思軒十二歳である。十二の小學校入學といへば今日では遲過ぎる觀があるが、これはたゞ正式の學校課程についたといふだけで、もうこれより以前相當家庭で敎育されて可成りの學力をもつてゐるに違ひなく、且つ小學校そのものも、今日の如く抑もそもの文字の初步から敎へるのみの場所ではなかつたのだから、それは諒察しなくてはならぬ。「尤憶記」に又啓蒙社時代の記事が一條ある、それは古荒祠といふので、彼のトォマス・ド・クィンシイが亡姉のことを偲べる名文章を讀んだ序に、自家の經驗に說き及んだものである。

余も亦た一個の姉ありドクヰンシイに異りて最も厚篤なるは健全安康にして現に數見の相に上り若し余が十一歳

のころ(筆者註。此の十一歳は滿歳とするか、然らずば十二歳として考へよ)夏の末なりしと覺ゆある日の暮啓蒙社より家に歸れり當時小田縣にて小學校を創立せるの初め皆稱して啓蒙社といへるなり姉は風呂に入りてをり奴婢は皆晩飯の用意店の仕舞に忙はしく往きつ復へりつ織るが如し母上は余を見るより奴婢とゝもに立ちはたらき居給ひし手を停めて余を旁へに招き低聲に告げたまふやう其方(そなた)は勉め強(つと)めて姉にやさしく振舞ふやう心掛くべし決して常の如くあまへてアラ〳〵しき詞など加ゆべからず姉は或は長く生くる能はざらんと醫師の今日語りたりと室隅にてホノ暗ければ母上の顏は善く見えざりしかとも疑ひも無し母上は竊かに涙を飲みたまひしなり余は固より此程より姉の勝ぐれざるを知れり然れども枕に就けるにもあらざるものゝ斯くまでの事ならんとは少しも想ひかけざりき母上の詞を聞ては只だ鼻つまりて唇の微顫するを覺ゆるのみ元氣拔けて背戸に出でたり姉は恰も風呂よりあがりて返り來るに端なくも面を對せり余は兩三年來連りに祖父祖母を喪ひたれば略ぼ死。といへる事を會せり今は姉の顏を見て彼の死。といへる事と之を併せ思へば自ら情を爲し難し幼き時より神を信心するやう敎へられたれば此に至りて憑むべきものは唯だ不思議の靈驗ある神の力のみ村の北隅に小さき丘あり丘の上に稻荷明神を祭る靈驗甚だ揭焉たりと云ふ余は匆々にして晩飯を畢へ獨り步して稻荷の祠に詣る早や夜に乘んとするに加へて町を離れたる僻隅なれば半個の人の影も見えず祠を守る祝吏の懈怠して修繕掃除に意を用ひざれば石段は處々崩れ缺けて雜草其隙に生じ喬木森として柯を交へ一しほ黑暗の色をなせる間に活動するものは唯だ翩翻上下する蝙蝠のみ余は其ころ一種の迷(スーペルスチシヨン)執に染りをりて甚だ臆病なりき半宵厠にゆくさへ自づから心怯それしほどなれば今ま單身斯の古び荒れたる祠の前に跪けるときは竦然としてヒタスラにうし

ろ見らるゝ如く胸打ちさわぎて己が呼吸の音獨り高く耳に響けり、必ず姉の疾を癒したまはるやう三七日は日參して詣るべし若し癒了はらばお百度踏みて願を解かんと念ずるにも心いそげり纔かに念じ畢はるや否や飛ぶが如くして走せ歸れり、斯くて後は毎日啓蒙社より歸るとき必ず路を迂して此に詣せり一二週を經るうち母上にも此事を告げまをせり母上は聞き訖りて善く仕たりと答へたまひしのみ然れども其譽は既にうるみたり、數月を過ごせり、姉の疾は一時癆咳とやらん云へるものに變ぜんとする徴候見えしに幸にそれまでに至らずして癒ゆるを得たり再び健康の人となれり、時は方さに小春の好天氣余は姉と共に母上叔母上に從ひ稲荷の祠にゆきて願ほどきのお百度を踏めり嗚呼一升一降石段の上相顧みる人は悉く是れ滿面の笑滿面の快、爾後此に參詣る廝閣チャーチを過ぎれることも少からず然れども尤も懐ふは彼の赭色の土塊樹の間さび果てたる古き祠を蔽れる黄昏の色に在り

思軒の通學した啓蒙社の主五十川左武郎についていへば、訥堂と號して明治初期關西で相當鳴らした洋學者である。備後福山の人、賴山陽の弟子江木鰐水の甥で、昌平黌その他に學び、戊辰頃から明治の初年にかけて歸郷してゐたところ、かゝる啓蒙社の一を引うけたものである。後又大阪方面に出て教育に從事した。正に思軒師有りといふべきところである。

三

傳に又曰く、「明治五年十三歳にして大阪に遊び、慶應支塾に入りぬ。」

思軒自身も十三歳の春英語を學ぶため大阪に出たといつてゐるから、十三歳は間違ひがないとし、その十三歳

も滿歳と考へるべく、さもないと數へ年十四歳として考へなくてはならぬ。何故とならば、大阪慶應義塾の出來たのは、明治六年十月であり(一)、丁度思軒が數へ年十三の秋だからである。從つて滿十三歳の春とせば明治七年の春となるわけである(二)。鷗外所記の明治五年は全然間違つてゐる。「尤憶記」中、老婦の條を讀め。

十三歳の夏大阪の川口より獨り汽船に乘る、この春初めて英文を學ぶとて鄕里を離れしときは只だ前途に横はれる種々の望みに心浮きたちて六十里を隔て他人のなかに唯だひとり童子の懸り寓するは如何なる心ちする者なるや少しも想ひ設けざりしなり我をともなひ給はりし父上の我が黌舍に入り了はるを見て歸國したまひたる後父上の宿たりし旅籠屋の近邊を過ぎる每に其家を望みては暗に幾滴の涙を催すとき如何なる心ちするものなるや少しも想ひ設けざりしなり諸生は晩飯を畢へて皆な散步するとて出てゆきつ全寮閑然たる中に獨り机に憑りて近ごろ獲たる母上の手紙を取り出だし繰返し復繰返し讀むとき如何なる心地する者なるや少しも想ひ設けざりしなり、僅々三數月の間に幾多未だ曾てせざるの經驗を得て今や三伏の放課に鄕里に歸らんとするなり、汽船に乘るは初めてなり汽船は岡山に着くものなれば岡山より吾が村まで十餘里は別に陸路を走せざる可からす、汽船を出づるときは如何にすべきぞ人力車を傭ふには如何にすべきぞ途中にて飯を喫するは如何にすべきぞ若し茶店に憩ふことあらば茶錢の振合は如何にすべきぞ是等は皆胸底に累積せる疑題なりき然れども速かに鄕里に歸りたしとの念は遂一に是等の疑題を釋くに遑あらしめず我を驅りて早くも汽船の上に置けり、尤も憶ふは當時神戸より乘りたる一老婦あり余が坐作出入に注目して絕えず凝視してゐたりしが遂にすり寄りて御身は外に伴侶無きにやと問ふに至れり余は然るよしを答へたるに親切なる老婦は喩をうるほして已れも神戸に嫁

がしめたる女(むすめ)に一人の孫ありて年齢身材正さに御身と相若けり不幸にして夭折したれば今まで之を祕りて歸國するなりと語れり斯くて後は此の親切なる老紳萬端余の事を世話しくれ岡山に着きても車室から人力車を傭ひ余を載せて只だ挽き出だすばかりにせる後始めて手を分つを肯んぜり、嗚呼九歳のオリバーが病床を離れて獨り倫敦に奔るの一段を見る情景宛然目に在り（下略）

大阪の慶應義塾分校は明治六年十月の設立で、十一月一日より開校し、英書、譯書、洋算、和算の四課目中、隨意に生徒に選擇せしめて教授した。東京の慶應義塾本部から派出張して来た教師には、荘田平五郎、名兒耶六郎、岩田蒂、坪井仙次郎、矢部善藏、矢野文雄（龍溪）、中井芳楠等がある。開塾より八年六月に至るまで總數八十六名の學生が入社した。（以上『慶應義塾七十五年史』第四章一〇八頁—一〇九頁）。

此等の教師の中で注意すべきは、龍溪矢野文雄である。龍溪の父矢野光儀は小田縣令であつたから、その子の慶應義塾教師たる龍溪のことも、案外早くから思軒等の父母の耳には入つてゐたかも知れない。龍溪の交友や門下生に三備の人々の多いのは、さういふところからも出てゐやう。

龍溪が大阪分校長として赴任して来たのは、明治八年一月（三）で、もうこの時には父光儀は小田縣令をやめて東京へ引上げた後であつたが、以前の關係が關係だけに、思軒は特に龍溪に親愛の情を懐いたかも知れない。兎もかく思軒が龍溪との間に直接面晤とも、内弟子ともいふべき關係を作つたのは、龍溪が報知に入る頃か以前の此の時から始まるのである。

傳に曰く「六年十四歳にして支塾と共に阿波に徙り、次で又支塾と倶に東京に徙りぬ。」

大阪の慶應義塾が阿波德島に移轉したのは、明治八年七月であるから、思軒が十四歳、即ち數へ年十五の時である。思軒も勿論龍溪について德島に從つた。

龍溪は明治九年の春まで(四)德島の分校長をしてゐたといふ（分校は九年十一月まで續いてゐる）。九年春東京へ引上げる時德島で敎へた學生中の本塾轉校の希望者を三四人連れて上京した、その三四人の中に思軒も入つてゐたものと見え、今日、慶應義塾に殘つてゐる入社帳には、九年四月二十五日に入社し、本科第二等（最上級の次）に編入されて居り、保證人は矢野文雄となつてゐるとのことである(五)。在塾中の成績は何ういふものであつたか。當時の學業勤惰表によると

明治九年四月二十七日―七月二十七日

○出席（九六點）　算術（八〇點）　小試業（八七點）　大試業（七四點）

本科第二等二十七人中十七番の席順になつてゐる。中位のやゝ下といふところに當る。更に

明治十年一月十日―四月十三日

○出席（四一點）　算術（八一・七點）　小試業（四〇點）　大試業（九四點）

本科第一等十六人中七番の席順で、中位のやゝ上といふところである。

明治十年四月十三日以後の勤惰表には名が消えてゐるといふから、此の以後退塾歸鄕したものと思はれる。なほ『慶應義塾七十五年史』には明治六七年頃の科業表なるものに依ると（同書九六―九七頁）、第二等に於て讀むべき書は、チトレル萬國史、ヱエランド經濟論、ヱエランド修身論、ロビンスン代數初步、ロビンスン高科數學

第一等に於て讀むべき書は、ギイゾウ文明史、エエランド「メタヒジツクス」、エエランド修身論、ロビンスン高科數學、といふことになつてゐる。明治九年思軒が入社したころも、これと略ぼ同じ科目であつたらうといふことであるから、思軒が義塾で學んだものゝ範圍は大體かういふものと考へて可からう。

上京の後思軒は、何ういふ緣故があつたものか、福島の人大江孝之（敬香）、尾崎行雄と芝三田四國町の某家に同宿して書を讀んだといふ、又此の頃の英書を讀む力が大に進んで矢野尾崎に推され、又同人間に學力を認められるに至つたといふ、共に大江孝之が語るところである。孝之の『敬香遺集』中明治文士叢談の條を看よ。

土地繁華なれば土地の狀況一變し土地衰微すれば土地の狀況又隨て一變す今日芝三田四國町に第二等の市街と成りしと雖も明治十年の頃は決して今日あるを豫想せざるなり余は氏（思軒）及び尾崎氏（行雄）と四國町某の家に寓し晝は書を讀み夜は相携へて寄席に赴き鬱を散ず相親む事自ら深し尋で余は郷に歸り尾崎氏は新潟新聞の招聘に應じて京を去り氏亦中備の故居に退く當時余は未だ氏の文藻あるを知らず唯一の好男子なるを記憶す（中略）蓋し氏は早く慶應義塾に在り西書を讀むの力は大に同人に認識せられしが故ありて氏は夙に矢野文雄氏に愛せられ後尾崎氏に推されたるを以て云々

思軒が都下に在ること幾ばくもなく歸郷したことは、右の文中に述べてある通りであるが、その時期は、明治十年の中か十一年か、恐らく十年の方が當つてゐやう。思軒の歸郷については、その何故かゞ正確に知られてゐないが、或る人々の說によると、當時思軒には一種の惡癖があつて、それを友人達に知られたのを恥ぢ、捲土重來、名譽回復の工夫をつけて匆々歸郷したものであるといふ。その惡癖の何たるかは、今こゝで說明する限りで

はない。

註(一)『慶應義塾七十五年史』
註(二)此の稿を書いた後富田正文氏の書翰を得たところ、果して思軒の大阪支社入社は明治七年五月だと分つた。
註(三)『七十五年史』
註(四)『龍溪矢野文雄傳』
註(五)富田正文氏が調査して示教されしもの(富田氏は『七十五年史』の執筆者で塾監局勤務)

四

傳に曰く「八年十六歳にして郷に還り、興讓館に入りぬ。館主を阪田丈平とす。」

前述の如く思軒の歸郷を八年十六歳とするのは誤りで、十年十七歳と假定する方が事實に近い。又傳の語によれば、八年興讓館に入つたやうにも受けとれるが、思軒は自分で

明治十一年余始めて興讓館に遊べるに云々(國民之友第八十五號、南窓涉筆)

といつてゐるから、十一年に入つたものであらう。

興讓館は當時備中後月郡西江原村の地に在つた、これは嘉永六年坂谷朗廬の創むる所である。明治元年朗廬が藝州藩の招聘に應じて廣島に赴くときに、甥の阪田丈平をして館の事を主宰せしめた。丈平、幼名は丈介、諱は丈字は夫卿、警軒、九郎等の號がある。備中川上九名村の人、叔朗廬及び肥後の木下犀潭に學び、井上毅(梧陰)竹添進一郎(井々)と並んで木門の三才子と稱された。後に江戸に遊び、安井息軒に從て教を受けた。學有り、識あり、文を能くし、詩に長じ、全く好館主であつた。(後に縣會議員、衆議院議員等となり、又慶應義塾、高等師

範學校に聘されて教授となつた）。

さて前記の如き覺悟をもつて興讓館に投じて來た思軒の勉强振りは何うであつたか、恐らく凄まじいものがあつたに違ひない。警軒は後で此の頃の思軒のことを追記して曰く——

（前略）修漢學於吾興讓館。强記夙成。詩文優超儕輩。余期以後來賴子成。君亦不自安小成。（竟陽館）

將來の賴山陽をもつて見たといふのは、例の漢文家流の誇張であるが、然し思軒が小成を以て安んぜず、頻りに切磋して才學の進んだことは、事實であるに違ひない。

其の興讓館に入りて贄を阪田警軒翁の門に執るや、學業群を拔き衆を壓し、文を屬し詩を賦するに才華爛發筆下鏗鏘として皆な振金戛玉の音を成す塾中の子弟共の才の多くして師に愛せらるゝことの甚しきを嫉み一夜氏の熟睡を窺ひて布團の上より緊縛して痛棒三百殆ど悶絶するに至つて止みしことあり（三十年十一月十六日每日新聞記事）

といふことも傳はつてゐる位だ。この逸話は然し眞僞保證し難いにしても思軒自身の記載で學塾生活困學の一端を知ることは、興味のないことではない。『尤憶記』の中、晉書の條を引かう。

三伏の放課に諸生各々家に返へる興讓館の內塾東西北三寮及び外塾二寮殆ど皆空しく我は讀みかけし晉書を卒業して美作の溫泉にゆかんと欲すれば二三の友とゝもに獨り留りぬ西寮の樓上やゝ風の通ひよければこゝを讀書の處と定む、さなきだに蚤多くして堪え難きに全寮皆な虛しくなりて久しく血に飢えたれば其猖獗なか／＼に當る可らず、窓前に机二箇を置きて之に戶板一枚を掛架し以て床となす疊のうへはとても片時靜をなす可らず

ればなり、朝早く飯を畢りて西齋の樓下に至り衣を脫して赤條々となり一手に卷を橫へ一手に箒を執り咄嗟一聲歴階して躍上し戶板のうへに飛びあがるうちに早や群蚤双脛に攢り附して斑々黍の穗を望むが如し急に箒を揮ふて之を拂ひおとし始めて坐下するを得夕に至りて樓をくだるとき讀み了はれる卷寸を累ぬ顧視欣然獨り顏を開く、今や寓樓のうへ枕簟水の如し手に儘せて亂抽し讀むに必ずしも課を限らず其樂や洩々たり而して尤も憶ふは此に在らずして彼に在り

「吾書を卒業して美作の溫泉にゆかんと欲す」云々といふ、果して『吾書』を卒業したものと見えて、彼は美作の溫泉に行つてゐる。隨筆『消夏漫筆』(國民之友第五十八號附錄)にその思出があるが、これ亦學塾生活行樂の反面を語るものである。

今より十年ばかり前余が山塾にありしころ一と夏美作の溫泉に遊びたり余は暑を忌むこと甚しければ夏に入りては食量の大に減ずるを例とするに此に來りては物の味常に異りて旨きを覺え心身極めて淸爽なりき寓樓は溪流に枕み山に面し翠色簾を襲ふ住民質朴にして太古の遺意あり溪流多く香魚を産す售るもの皆な其の輕重を秤りて價を定む一日大風あり家屋搖々動々已まず余見る所を賦していふ

烏帽山上雲呑吐。須叟風起雲亦怒。滾々漠々漫大空。天距下土僅尺五。風磯谿壑忽飈旋。卷揚雲脚不成雨。

當時行李の中唯だ山陽手抄の杜韓蘇詩一部あり

警軒夫子は思軒にとつて全く良師だつたに違ひない、だが彼の周圍には良友もなくはなかつた。『消夏漫筆』は又かゝる良友の一人のことを語つてゐる。

昨夜遠く歸る津島顯あり刺を留めて去る刺の一隅を視るに細書していふ備中小田郡新賀村と嗚呼是れ必ず亡友津島灌君の弟なり君余より長ずる一歲余の初めて坂田先生の門に入るや君先づ在り既に頭角を儕輩の間に露はし黌の都講たり君博く群籍に涉り尤も文に長ず爲くる所雅健にして清雄幾と古作者の林に入らんとす余毎に稿を易へて相評す君の爲めに敎へらるゝもの實に尠からず

『漫筆』には更に此の良友の後年の悲慘な死を傳へてゐる。彼は明治十八年八月大阪から歸國の途中、須磨浦で投身自殺したのである。理由は判然としない。『警軒文鈔』中に此の人の墓誌銘があるが、投身の一事は諱んで書してゐない。

思軒は此の頃文は徂徠山陽を愛し、詩は淸朝の諸家（殊に張船山）を好んだといふ。それはそれとして、此の漢學書生の何年かの間に、英書の研究は何うしたものか、矢張り獨學的に續けてゐたものと見るべきであらう。

五

傳に曰く「十四五年の交館を退きぬ。」

思軒、英學書生から心機一轉して漢學書生たること五年、聰明の質に勉强を加へたものだから、その進歩の華華しかつたことは、全く前記の如く、衆生の嫉妬を買ふに十分であつたであらう。思軒がかく漢學專修生となつたのは、果して思軒自身の發意に出たものか、父の注意があつたものか、何れにせよ、これは一見反動的擧動であるが如く見えて、その實は全く時勢に乘じた賢明な策であつた。何となれば明治十四五年來、漸く當時の文學界（廣義にいつて）は漢學復興の形勢に變じ、多年排斥されてゐた漢文學の書物が漸く英語教科書に取つて代る

有樣となつて來た。山路愛山は當年の經驗をかう述べてゐる（『基督教評論』現代日本教會史論九三―九四頁）

> 余の駿河に在りし記憶に依れば此政策の爲めに多くの青年は從來讀みかけたりし英書を抛ちて再び漢籍を手にするに至れり。一たび繁昌したる英學の先生は次第に其門戸を閉ぢて彼等の生活に易き東京に移住したり。學校の教育は當時の文部省の所謂普通教育に重きを置きて外國語の素養は却て閑却せらるゝに至れり。久しく田舍に蟄伏したる漢學生先は再び師範學校中學校に聘せられて其教師の椅子に坐するに至れり。嘗てパーレー萬國史を讀みたる青年は節を折りて再び左、國、史、漢に還らざるを得ざりき。余の如きも英語楷梯を讀み、萬國史の講釋を聞きたる昔は殆んど忘れたるが如く漢學塾に往來して安積艮齋門下の老先生より論語孟子の講釋を聞くに至りたるは當時を顧みて慚愧に堪へざる所なり

豈に獨り駿河に於て然りとのみいはんや、これは明治十五六年以降日本全國に打ち寄せて來つゝあつた反動的海潮の一波に過ぎなかつた。而してその漢學の本家たる支那と日本との間の關係が少々軋轢めくものになるにつれて、あの恐ろしい支那を知れといふ意識が眼ざめ、學生が益々漢學を研究するに至つたのである。

かゝる時代に及んで、思軒は、その多年蘊蓄し得たところを提げて漸く明治の文學界に登場して來る。そのスタートの最初から比較的文壇から好遇された如く見えるのは、思軒の才學文章にも依ることであるが、又愛山のいふ如き雰圍氣の力も與つてゐたと認めて可からう。畢竟、以前は英學者が少く漢學者が多かつたから英學者が尊ばれたのだが、今は丁度その逆になつて、眞に漢學の力があるものは、英學者よりはずつと少ない。漢學に深い思軒の出現が、最初からして老輩に幾分のひけ目を感じさせてゐたことは、事實であらう。

加ふるに思軒の漢學は英學の批評的基礎の上に置かれてゐるから、如何に深くとも普通の漢學者の如く固陋なところがない、從つて時代に逆行する如き愚はしない。英學に通じ漢書を讀む思軒は、時代と社會に對して兩刄の劍を擬したやうなものだ。後年漢英の措辭文脈を折衷して工夫した周密文體を振かざして文壇に志を得、飜譯に批評に深く讀者の渇仰を得て、飜譯王の名を響かしたのも、その源は遠くこゝにありといはざるを得ぬ。

傳記者は、思軒が興讓館を退いたのが明治十四五年、彼の二十二三の交であつたといふ。今それを確かめる證據はないが、恐らくさうであらう。

こゝで一寸いつて置きたいのは、思軒が當時の自由民權熱に對し何ういふ態度を取つたかといふことだ。明治十二年頃から國會願望の叫びが揚り、十三年十四年と經つにつれて、いろいろこれを煽る火の手を得て、全國的の一大運動と化した。思軒の郷里岡山縣の如きも、眞先に願望の建白を出しただけあつて、全國でも最も著名な自由民權運動本場の一つになつてゐた。

青年思軒は、此の次第に高まり行く自由運動の波動に對して果して冷然無頓着に經史詞章を耽玩してゐることが出來たであらうか。文獻的には、此の頃政治に對して思軒が心を動かしたことを證するものは、何一片ない。然し彼は慶應義塾で政治經濟の如き學問の一端を學んだ。且つその先輩に矢野文雄あり、その友に尾崎行雄があり、同郷人に犬養毅があり、その父は地方政治家として有名であり、又その師坂田警軒も、政治は嫌ひではない（彼は岡山縣最初の縣會議員の一人に選擧されたり、後に代議士になつたりした）點々などを考へてみて、思軒

の心裏には政治に對する興味が眞に少しも動いてゐなかつたであらうか。恐らくは、ゐたと思ふ。恐らく意識的には、彼の心は文學者となることよりも政治界に入つて此の方面で華やかに成功しようといふ方に傾いてゐたやうな氣がする。

彼が明白に政治から文學に轉向して來たのは、明治十九年、洋行中に英國の政治界を見聞して後のことに屬する。

明治十五年一月十七日の「南風新誌」第五號に不寢偶感と題して思軒の詩が一首ある。

奔走徒過七歳餘。常遭郷黨笑迂疏。生平議論歸蒸說。少小經濟論歐書。

只賤香奩詩作拙。僅誇蕉量酒延譽。會心獨有乾初九。且守山中一草廬。

當世の輕躁書生と意思自ら天淵の差があると評したいところだが、よく考へて見ると、英雄人を欺くといつた氣味が響いてゐなくもない。うつかり文字通り思軒青年の本心を詠じたものと考へたら笑はれる。乾初九の句を見玉へ、易の上經、乾の卦に「初九。潛龍勿レ用」とある。才德あるもその時を得ぬ人は、靜に時の來るのを待て、時が來たら華々しく打つて出よといふのである。いはゆる逃避的の文學を天職としてゐたのではないのだ。

六

明治十五年夏、思軒は京都に遊んだ。その秋いよいよ再び東京に上つた。此の時の目的は何であつたか、又自發的東上か、誰かに（矢野か尾崎か）招き寄せられたものか、それは分からぬ。矢野も尾崎も、十四年十月の政變で下野して、郵便報知新聞に飛び込んだ。思軒はそれを便りに、恐らく苦學か就職の爲めに東上したものでも

あらうか、而かも此の前の惡辯一件がまだ忘れられてゐるのでもあるまいのに、この上京であるから、餘程の自信と決心をもつてゐたことゝ思ふ。そこで兎もかく次の如き傳記者の文字が生れて來たわけである。

曰く「明治十五年二十三歳にして再び東京に遊び、報知新聞社に入りぬ」。

それは二十三歳を二十二歳と更めれば、この通りである。思軒自身で

明治十五年の秋余東上して矢野先生の門を敲く云々（矢野龍溪『浮城物語』序、二十三年刊）

と語つてゐるから、明白である。

本稿は思軒が明治十五年報知新聞に入社して以後の經歷に關しては餘り材料の持ち合せがないので、勢ひ、これ以前の敍述に比較して簡略にならざるを得ない。十五年以後の事は、今後の研究を經て當然書き改められるべきものと信ずる。

源高湛卽ち森鷗外の思軒傳には十六、十七兩年のことは何等書いて無い。この二年間は、思軒の新聞學勉强期間で、老輩の記者に尾して銳意奮鬪してゐたものと考へて可からう。その新聞記者としての材能を大に發揮するのは、明治十八年に入つて以後である。

だが此の二年間に、別方面に於ては早くも讀書階級智識階級に森田思軒の名が認められることになつた。それは矢野龍溪の著、政治小說『經國美談』に對する漢文體の批評的文字と、今一つは、改進黨の別働隊たる明治協會で發行した機關紙「明治協會雜誌」に揭げられた雜記體文章、これだ。（思軒は明治十六年十月これに入會して

その談話會に毎々出席し、自然に改進黨的色彩ある新人と目さるゝに至つた)。德富蘇峯は記していふ。――

余が思軒君の名を知りたるは明治十七八年の交、經國美談鼇頭の評語中にてありき。云々（明治三十年十一月十六日、國民新聞）

蘇峯は更に他の場處で、「明治協會雜誌」に載せられた思軒の隨筆雜記の面白かりしことを力說してゐたと思ふ。「ビコンズフヒールド卿の出身」を論じたものゝ如き、その一篇である。「早稻田文學」記者は又いふ、――

（前略）其の始めて森田文藏と署して平生の蘊蓄を傾注したりしは『明治協會雜誌』を始とす、而して讀書社會が思軒居士の手腕を認めしは『經國美談』の鼇頭批評なりき云々（明治三十年十二月號）

今初版『經國美談』について檢するに前篇には鼇頭評なく、有るのは明治十七年二月刊の後篇だけである。こゝにその最後の總收的評語を揭げて彼の筆力眼充に接することにしよう。

讀者至此、一部大著、攤閱正卒業、宜掩卷瞑目、回想前後二篇結構之大都、前篇之妙、非後篇之妙、後篇之奇非前篇之奇、局面趣向、畫然各別、」前篇、巴・威諸人拮据經畫之事、專在革正國政、既奸黨竊柄之惡漸貫盈、天先奪之魄、田夫暮入關、而姬人夜侑燕、大憝授元、而醜類伏罪、此皆爲內之道也、」後篇、巴・威諸人拮据經畫之事、專在主張國威、既大冠三至、民人乘障、同盟饑戍、隣邦貳心、叱衣裝之會、而蝶玄黃之血、定蝸角之爭、而當牛耳之位、此皆營外之道也、」二篇立脚不相同、如是則素無怪於其局面趣向之異、而前篇常以民心嚮背見勢、後篇常以邦本固定見勢、巴・威諸人、爲內、惟從民心而已矣、民心一有歸、思國猶思家、欲去之而不可得、於此邦本固定、莫之或間、兵革之難、迫於前、飢饉之災、臻於後、民萬死而不變、故營外者、縱橫注措、

無所顧、遂得成大業焉、然則前後二篇、顯功雖造於巴・威諸人之手、亦皆國民假之也、是爲一部眼目矣、而巴・威先内而後外、不誤本末始終、能代國民、而爲其所欲爲、作者之所以賛以有秩有序、而賛之所以爲盡焉、」若夫前篇齊武之亂、寫出奸雄專制之弊、後篇阿善之亂、寫出詭民弄權之弊、自是政治家之大案、徐講之、則可以爲一場議論矣、作者深意、當有所寓、余與讀者、欲與聞之、

返り點を附すべきところを、煩を避けてこれを省いたが、然しこれでも一通り讀んで分かると思ふ。政治小說「經國美談」の啓蒙的批評としては、よく作の精神なり作者の深意なりを剔抉して鑿々肯綮を穿つものがある。今日いふ文學批評とは違つて、極めて初歩的なものであるにせよ、當時としては當に出群のものであつた。それは、此の小說に掲げてある他の學海、鋤雲等諸家の評語と比較すればよく分かる。同時に、小說をこれ程精細に批評するには自身可成りな小說的乃至文學的知識をもつてゐなくてはならぬわけであるから、思軒は此の頃可成り文學的知識をもつてゐたものと思ふ。現に此の小說の卷末に附載してある小說論にその證據の片鱗が見える。

この點から考へて、思軒は、慶應在塾の頃から既に文學書に多少親しんで居り、又その後の漢學書生時代にも時々は西洋文學の書物に目を曝してゐたものと察する。かうして、思軒は知らず識らず他日文學界に入る準備をしてゐたものといつて可い。

七

明治十八年は、思軒が新聞記者として漸く頭角を現はし、もつとも活躍した年である。

傳に曰く「十八年二十六歳にして歐洲及び支那に遊びぬ。」

これは「支那及び歐洲」といはなくてはならぬ。二十六歳は二十五歳の誤り、これは、思軒が此の年死んだ友人津島氏(上記)を弔ふ文章の中で、君は余に長ずる一歳、年二十六と明記してゐるのでも知られる。

先づ支那行に就いて語らう。

十八年三月四日の郵便報知に「清韓事件」と題して通信員特派の豫告がある。理由は「今度遣清大使既に北京に向はれ且つ佛軍は新戰略を取り東洋多事の際に付」といふのであるが、此の時の遣清大使は、十七年十二月朝鮮の事大黨と獨立黨の爭亂から日清の葛藤となりさうだつたので、談判のため伊藤博文(正使)、西郷從道等を支那に遣はした、それをいふ。佛軍新戰略云々は、十六年から持越しの清佛事件が、十七年に媾和が成るに垂んとして又破れたので、佛軍側でその新事態に對應する爲め更に攻擊戰略を定めたことをいふのである。そこで「一昨二日横濱發の名古屋丸を以て先づ尾崎行隆を上海に特派し來る九日廣島丸を以て森田文藏を北京へ特派せんとす」云々。行隆は尾崎行雄の弟で英語英文の達者であつた、思軒が北京行の任に當つたのは、恐らく彼の漢學と英語とが口をきいたものであらう。

思軒は豫定の如く、三月九日横濱を發して十六日に上海に着いた。思軒の任務は、北京談判(後に天津に模樣代へ)の模樣を直報することであるから、大使が出發した後の上海には一日留つたのみで、十八日海晏號といふので北上し(福地櫻痴等と同船)、二十三日天津着、二十四日栗原亮一等と同行、北京に向ひ、二十六日夕北京着、翌日より數日間、談判地未定のため少閑を得て、北京の内外、圓明園、萬壽山、皇城等を見物したが、大使談判の地が天津と定つたので、三十一日再び天津に下り、具さに日清談判の進行を直報し(十八日天津條約締結)、四

月三十日歸社した。此の間臨時電報による直報の外、上海通信(三月十八日發)、天津通信(三月二十三日發)、天津會議を論ず(三月三十一日發)、北京通信(四月一日發)、天津通信(四月四日、十日、十一日、十二日發)、談判履歴の一端(五月二日)、訪事日錄(五月二日以後)、北京紀行(訪事日錄の四、五月十五日以後數回)、等を報知紙上に掲げた。通信の爲め出張したとはいへ、旅窓繁劇の間の筆としては努めたものといはなくてはならぬ。觀察が細かく、描寫が精しく、文章に一種の魅力があり、報知紙上でも可成り呼物になつたらしい(德富蘇峰氏なども愛讀者の一人であつた)。殊に「天津會議を論ず」の一篇は、會議開始に先立つて、當時まだ和戰何れとも明白に決してゐないが佛國の態度を此の談判に利用し、デスレーリの伯林會議に臨めるが如く、我大使も和戰兩樣の準備で會議に臨めと警告したもの、思軒の政論家の一面を知る好資料である。「訪事日錄」は上海到着以來の自分の行動を中心とした一種の遊記體の文章であるが、これ又面白い。此の頃は支那はまだ堂々たる東洋の大國であるだけに、些細な點につけても、支那の虛實といふものを窺はうと心掛けてゐるが、かういふところは新聞記者的でもあり政論家、經世家的でもあつて、後年の思軒と好對照を成してゐる。北京紀行が殊に讀むべく、一篇の紀遊としても思軒の文章中有數のものであらう。殊に思軒は支那近世の歴史に通じて居り、古典文學にも明るいし、それでゐて西洋方面のことも一通りは心得てゐるから、懷古、感慨、反照の態度が次々と滲み出て、書く物が凡て面白い讀物となつてゐる。

「傳」では、支那行から直に歐洲となるらしく書いてあるが、歐洲行の前に、今一つ報知社の爲めに重大な役目を果してゐる。それは所謂民間窮狀の視察委員の一人として、中國筋を巡回してゐることである。

連年の不景氣に加へて、此の十八年は春來雨多く、農產の不作が豫想された上金融も逼迫し、人民の困憊甚しいものがあつたので、農商務省では書記官を全國八農區に派して、「濟急趣意書」を頒たしめた。報知新聞社はこれに應じて、慘狀視察員を特派することにし、第一着に關東地方に加藤政之助を、中國地方に森田思軒を、九州地方に久松義典を出張させたのである。

思軒は六月十四日東京發、橫濱より海路神戶に向ひ、十五日神戶着、十八日笠岡に着し、六月二十二日笠岡から「中國筋視察報告」の第一を發した。その前文が支那行以來の思軒の心事に少し觸れてゐるから、左に引いて見たい。

今玆三月余は天津談判の模樣を聽訪するため北淸に旅びし事畢りて歸り來りしは四月の末にて時は恰も花落ち葉茂げみ杜鵑の聲のチラホラと樹梢に渡る候なりし人生自ら足ることを知るの難きや我大使が非常の心勞と骨折とを以て十分成就されし日淸會議も共和事の結を得しを喜ぶと共に亦た更に幾分の望蜀の念を胸間に蓄ふることあるを免れず歸り來りて社友と相晤するの次先づ一番に話し出でたるは乃ち是等の意にてありしが何ぞ圖らん憂の一字は至る所余輩の身邊を離れ得ざるものと覺しく余が渡淸以前より催し來りたる內國の不景氣は此折に馴致して轉た其烈しきを加へ一時淸人の無禮を怒りて激昂したる物情は春華と同く逝て跡なく全國を概して困病幽鬱の底に沈み余をして外に向て望蜀の蓄念を主張するよりは先づ差掛り焦眉の新憂を銷遣するの策を講ずることの甚だ緊急なるを感ぜしむるに至れり時しも我社人を各地に派して慘狀の實際を親察慰訪するの議あり（中略）余も亦た其員に備はり且つ自ら中國筋を擇取せり是れ岡山縣は余の桑梓にして多少其風土尙俗に

馴染みあり視察の際幾分の便宜を得ることあらんと思ひたればなり

かくて七月八日玉島から第二報告、七月二十二日備前西大寺から第三報告、八月四日廣島から第四報告（山口縣概況）を發し、至る所農家下層民の窮困を具さに報告して來た。さうして九月九日歸社して後、慘狀視察員たる加藤、久松、森田の三人が合議してその視察したところに依り、「慘狀原因及振救方策」と題する堂々たる大論策を三人の名で十月二十五日の報知新聞紙上から掲げ出してゐるが、此の執筆は恐らく思軒の手に成るものらしく頗る文致の似たるところがある。十五年編輯局の末席を汚したばかりの白面の思軒は、今や押しも押されも一流の記者に伍して來た、單に伍して來たばかりでなく、文章學才の點では往々老輩をして顏色無からしめたことがあつたらしい。現にかういふ逸話もある位だ。――この頃思軒は編輯局留守の矢野貞雄と相談して、犬養、尾崎等諸豪傑の文章を一寸々々朱筆を入れて紙上に載せた。それで犬養などは憤慨して人の文章を無斷で訂正する奴があるかと怒鳴りこんだりした、さうして蔭でも、「靑二才の癖に生意氣だ」と罵つてゐたといふ。だから、思軒の歐洲行も、考へやうに依れば諸老輩に敬遠されたものとも見て見られぬことはない。

歐洲行の一寸前に、報知社では大に漢文欄に力を入れ始めて、支那人陳雨農を雇入れて、毎號執筆させてゐるが、思軒は此の陳の世話掛りとなつてゐたらしい。

そこでいよいよ歐洲行だが、思軒の歐洲行が報知紙上に社告として發表されたのは十八年十一月四日で、それによると、たゞ矢野龍溪と交代に通信事務に當るため、來る六日出發となつてゐる。だが歐洲行をするまでの事情は思軒が自身語つてゐる。思軒は豫定通り六日出發、船中で「船上日記」といふものを報知紙に寄せてゐるが

その船上日記の第一の冒頭にかうある。

余が此度歐米漫遊の事を企てしについては人或は其甚だ唐突なるを怪みて特に其由緣を質ださるゝものも極て尠からざりし實は此企の始て起りしは久き往きの事にして昨春社友矢野龍溪君の海外觀光の途に登りし折旣に同人の代る代る相踵ひて旅立たんことを契りしが奈何せん世事の纏累は須臾も吾人の身を離れず隱顯大小の別こそ其間にありたれ同人皆多少の束縛桎梏を世事より蒙らざるはなく綏々として紆緩の蹤を追ふべき閑日月とては誠に獲難かりしなり之に加るに龍溪君が發軔の後東洋は極めて多事の世の中となり外には佛國が口を安南の葛藤に籍りて禹域を窺はんと欲するの模樣あり曼英露の三國の如きも亦だ各自其利害の繫る所に從ひ之を等閑に付さゞるの勢を爲し具眼の士或は東方亞細亞の命數を此際に逆睹預卜せんと試みるまでに至れり斯る起伏波瀾の時に當り朝鮮亦た禮を我れに失し事宜の趣く所淸廷と最後の談判を開かざる可らざるの趨向を生ぜり而て顧て內國の有樣を見れば市邑衰詘の否運は月を逐て烈しきを加へ且つ天然凶歉の兆すら其間に萠蘖するあるに至り物情の危懼轉た尤も甚だし余輩不佞と雖も恒ねに國家の休戚を以て喜憂となし社會の爲め可を獻じ否を替るを以て務となす內外萬艱是の如きの時に方たり豈に袖手して已む可けん是故に或は再び支那塵埃の地に適いて東洋攻略の是非を講索し或は一たび朝鮮荒凉の地に入りて尊俎折衝の迹を尋ね此外或は討韓の方策を建てて有力者に上まつり或は不景況振救の計を討究して之が實施を謀る等頗る暇隙なきに幾かりし斯く暇隙なきの際に於て飄然歷覽の客となるが如きは余先輩諸朋の背んぜざる所なりしに因り龍溪君の來輸は屢々此に言及せしに拘はらず皆な速かに其の後を踐むこと能はざりしなり九月初旬余が中國地方慘狀親察の役より返りし日に

及んでは世局略粗ぼ靜肅の形をなし左して吾人の急先從事すべき務のありとも見えず但だ差掛り目下の要件なる慘狀原因及び振救方案の考査の完結せし以往は同人皆な稍や身心の閑を看出すことを得たり是に於て始て昨春の契りを温つね不日歸途に就かんとする龍溪君に繼續して通信事務を擔任するの人を派することゝなり余則ち其狗尾となれり

思軒が歐洲行の選に當つた事情はこれでよく分る、「余輩不佞と雖も」云々のあたりは經世家思軒の口調である。

かくて、――

余の旅立ちの議を決せしは十月中旬なりしが勉て發軔を急ぎしが故決議と開行との間わづかに三週日を容れしのみにて身は既に佛國郵船の房中に在るを見たり行李も甚だ匆遽と云ひ殊に一介の野客の別段華裝を須つべきにもあらざれば數套有り合せの衣服靴履の外英書にてトッドの議院政事二卷ディッケンズの小說若干卷其他雜書數部支那書にて詩經文選各一帙清朝二十四家文抄十二册を携へたりしのみにて衣服は寒暄の襲を禦ぐに足り典籍は孤陜の寂寞を破るに足るのみにて止みたり

此の旅仕度と携帶の書目は一寸面白い。かくて船中恙なく十八年十二月　某日無事着英した。途中のことは樣々な人の紀行にもあり、珍らしくもないから一切略すとして、たゞスエズ運河通過の際遙に埃及の奧地を望み、將軍ゴルドンの横死を想つて詠じた詩を一首掲げて置く。

海門濤死落暉曛。埃及原頭崩暮雲。一代將才埋大漠。百年史迹剩荒墳。疲兵枉當新羈馬。武譽空傳常勝軍。
猶喜漢家恩不少。更從身後賞殊勳。

此の詩は思軒一代の作中でも傑作の中に屬してゐるらしい。

注意すべきは、これも右の「船上日記」で知られることであるが、船中の無聊を醫すため盛に西洋小說を讀んで、ロンドンに着くまでに大に文學通になつてゐることである。これなども暗に、後々文壇入りをさせる機緣の一となつてゐると思ふ。

思軒の龍動通信は明治十九年の一月十六日發から始まつてゐる。例のチャールズ・ブラドロウの誓詞問題から日雇稼人の騷動、佛國王族追放の議、佛曼の關係等々を傳へてゐるが、最も力を入れたのは、英國政治世界の局勢、愛蘭事件の問題、改進黨内閣の危急一變、ブラタスの匕首グラッドストーン氏の頸上を一打す（愛蘭問題にて味方のチャムバレーンがグ氏に反撃したこと）、グラッドストーン氏の詭辯、パーネル氏の陰險、等々の項目である。彼は政界の老將グラッドストーン氏が如何に愛蘭自治案に奮鬪して破れたかを實に委細に報導してゐる。彼は本場の政治鬪爭を見て、如何に實際政治といふものが恐ろしいものか、つくづく身にしみて感じたらしい。通信の端々に政治は難しいといふ意味が、時々滲み出てゐるのが見られる。

四月二十九日、矢野氏同道ロンドン出發、ベルギイからドイツに入り、伯林通信がある、これには別に「北歐紀蹤」といふ名がついてゐる。此の行、思軒の行李にはユーゴーの英譯本が二三冊入つてゐたといふ。六月ロンドンに引返し、七月一日リヴァプールから米國に向ひ、米國見物をざつと濟して、十九年八月十九日午後、矢野龍溪、貞雄の兄弟と共に歸朝した。歸朝の記を「回船紀要」といふ。彼の隨筆『消夏漫筆』によれば、彼は矢野氏から寢臺車を買へとて與へられた金で、寢臺車を買ふ代りに、アップルトン出版會社に行つて文學書二十餘部

買つたといふことが見えてゐるが、文學の洗禮がいよいよ深く浸入して來た證據であらうか。

傳に曰く、「十九年二十七歲にして東京に歸りぬ。」

二十七歲が二十六歲であることは、訂正するまでもない。

龍溪は歸朝後早々報知新聞の大改革を企てた。龍溪はそのため鳴鶴、毅、學堂などの豪傑組といさゝか意志の疎隔を來したらしい。然し屈せず、遂にその理想を實現して大形の政治新聞を小形の讀者新聞にし、同時に文學的分子を大いに取入れた。『嘉坡通信・報知叢談』がその現れである。思ふにこの改革については、西洋に居るころから貞雄氏や思軒などを相手に議を練つてゐたものであらう。

此の龍溪の大改革時代から、郵便報知の編輯上の實權は全くその股肱たる思軒の手に歸した。丁度此の年から二十五年までが、思軒の全盛時代である。

思軒が飜譯家として明治文學壇へデビューしたのは、この改革の翌明治二十年に、『嘉坡通信』によつて成したものであつた。（以上前篇完、昭和十年一月稿）

同志社教授　山崎爲德先生

西洋文學移入の功勞者の中でも、翻譯なり著書なりある人々は自然それによつて傳はるといふことがある、だが著書も翻譯もない人々は、その人の亡ぶると共にその功績も、社會的には忘却されてしまふ。然しかゝる人々は、その貢献の點に於て、必ずしも著書翻譯のある人々の下に在るものではない。後者の名にして傳ふべくば、前者の名とて同じことである。而かも前者の名が後者に比して忘却され易いだけ、それだけ此の方がより多く念であるかも知れぬ。

その意味に於て、私は第一に同志社教授山崎爲德の名を傳へたい。

教授は陸中水澤の人、藩士山崎爲義の長男で、安政五年夏生れた。父の爲人その他はよく分らぬが、「西洋の形勢にも通じてゐた」といふから、先づ士族としては有識の中であつたらう。それから勿論多少讀書人でもあつたに違ひないと想像される。十六歲の時、熊本藩野田某が爲德少年を携へて東京に上つたといふ。此の熊本藩野田某とは誰であらうか。恐らく此の前に膽澤縣參事をしてゐた野田豁通（熊本人、後主計總監男爵）のことであらう。爲德十六歲といへば丁度明治六年に當る、明治六年八月野田は青森縣參事から陸軍會計官吏に轉任してゐるから、この轉任の際、水澤に立寄つて、將來有望と見込んだ爲德少年を、東京で修業させるため同行したものであらう。爲德少年は當時秀才として有名で、齋藤實（後の海軍大將、子爵、即ち前總理大臣）、後藤新平（後の伯

學）と共に水澤藩中の三秀才といはれてゐたといふ。だが爲德少年の當時の教養の如何なるものであつたか、それは一切不明である。恐らく學問としては漢學專門であつたのではなからうか。

野田は爲德少年を東京へ連れて來たものゝ當時東京の書生の氣風があまり良くはなかつたので、更に爲德少年を自分の鄕里熊本に送り、有名な大尉ジェーンズが教師をしてゐた熊本洋學校に入らしめた。爲德少年はジェーンズについて英語を學ぶ外、聖書と、ミルトン、カーライル等を知つたらしい。明治八年洋學校を卒業したが、ジェーンズが爲德少年に與へた自筆の卒業證書には、彼の性質を嘆美してあるといふ。

明治九年（或は十年ともいふ）上京して開成學校に入學したが、入學に際し一年跳んで上級に編入された。才學優秀、つねに級の首位を占めてゐた。此のまゝ爲德少年をして開成學校で修業さして置いたなら、少くとも又別に一新平、一實を生じたであらう。ところが明治十年舊師ジェーンズが歸國するにのぞみ、熱心に彼に勸說して神の國の爲めに一身を捧ぐべきことを以てしたので、彼もこれに感激し、遂に橫井時雄、和田正義等と共に開成學校を去つて、京都の同志社に來學した。時の開成學校副總理濱尾新は、爲德少年の才學を惜み、同志社へ赴くと聞いて種々引留めるところがあつたが、きかれなかつた。

彼は同志社では神學を學び、傍ら教師として數學、化學、文學等を教授した。

明治十二年六月、同志社第一回の神學生として卒業し、直ちに母校の教授兼幹事に擧げられて、明治十四年までこれを續けた。

ところが明治十四年、有馬滯在中感冒にかゝり、京都へ歸つて後もそれが癒えず、肺を病むに至り、遂に此の

年十一月九日、二十四歲三ヶ月で死んだ。

彼が同志社で教へた文學は、主として英文學で、沙翁、ミルトン、テニソンその他を講じた。彼は東西の學問に富み、講義に火の如き熱があつたので、自然青年を引きつけて大きな感化を爲した。東西の學問に富むといつても、まだ二十四五の弱齡である。正直にいふと、彼の漢學の知識はさう大したものではなかつた。

彼の漢學の力は、左程ではなかつた。彼は蘇家三氏、老蘇、大蘇、小蘇と云ふべきを、大蘇、中蘇、小蘇と云つてゐた。大蘇は卽ち蘇老泉、中蘇は卽ち蘇東坡、小蘇はその弟潁濱である。又た彼は山陽の阿辰を哭するといふ詩を英譯して、それを女子とした。阿辰は卽ち辰藏にて固より男子である。斯の如き事を云へば、彼の漢學の程度も大したものでもなかつたが…(蘇峯自叙傳第十五)

然し彼の英文學の知識は實に確固としてゐた。彼は英文學諸家中、最もミルトンを好み、ミルトンの大作『パラダイス・ロスト』の如き、初めの三卷を暗記してゐた。夕暮每に、彼は學生をつれてよく近くの御所の構內を散步したが、興到つて彼の口に上つて來るものは、當時の學生の例に似げなく、ミルトンであつた。彼は先頭に立つて、大股に步しつゝ

Of Man's disobedience....

と誦し出すや、學生はこれに和して

Of Man's disobedience....

と朗吟するのがつねであつた。

教壇の彼は、熱烈に詩歌至上主義を說いた。彼は學生に敎へて曰く、詩から神に往け、神から詩は來たのだ。神の無い詩は詩ではない、詩の無い神は神ではない。眞の神に依らなければ眞の詩は作れない。詩と神とを一身に攝して、最も優なるものは、ダビデ、ダンテ、ミルトンである云々。又曰く、人間になるなら須らく詩人たれ詩人は宇宙間第一等の人間だ。人間の職能は詩を措いて他に何がある云々。彼は、學生の理解不理解に論なく、眞向から詩歌至上主義を說きたてた。それだけ又、心の軟い青年學生は、此の先生の英詩の講義を聞いて感激せすに敎場から歸るわけにいかなかつた。

彼はかつて、學生に向つてかういふ話をした。それはグラッドストンと一農夫の逸話だ。「グラッドストンが大宰相の印綬を帶びて大英國の運命を双肩に荷つてゐたころ、その本邸のハワーデン城の近くの一農夫が彼に會つてかう尋ねた。英國政府といふものゝ仕事は一體何であるか、大臣方は每日何をしてゐるのであると。グラッドストンもこの問の答へには困つたが、やがて答へてかういつた、吾等は詩をつくりつゝあるのだと。諸君何うだ、わかるか。」學生は何れも五里霧中にゐるやうな顏を見合せてゐた。そこで先生は說明していつた「それはかうだ。諸君はダビデの詩、エレミヤの詩を知つてゐる、だが彼等の國家が今何處にあるか。誠に國家は時あつてか亡ぶものであるが、その國家の詩歌のみは殘る。英國もその通り、太陽沒せずと豪語した此の大英國とて時あつてか亡ぶ日があらう、その時殘るのは今日の英國を歌つた詩歌のみであらう、こゝに詩歌の不朽不死永遠の生命が宿つてゐることが分かるのだ」と。（以上敎授の講義振り及び講話については、湯淺半月翁の文章及び談話に據つた。文章は大正十五年八月號、愛書趣味第六號所載、「新體詩の創作動機」と題するもの、談話は昭和十年一

月、明治文學談話會席上に於けるものである)。

彼は詩歌至上主義で學生に感化を及ぼしたのみでなく、夙に日本詩歌革新の志も抱いてゐたらしい。また山崎先生は唐詩や和歌の如く、窮屈な法則に拘束され、少數の文字に制限されて居ては、とても英詩の樣に連續する思想感情を充分に表白することは出來ない。今此作を見よと言つて長篇の叙事詩を見せられハット思つたが、よく見ると流石の先生も時流を脱することが出來ず唐詩の古詩體で漢文ばかりであつた。とはいふものゝ、彼の詩歌至上主義、詩歌革新意識が土臺となつて、日本最初の創作長詩「十二の石塚」(明治十八年刊)といふものを生んだ。この長詩の作者湯淺吉郎(半月)は、大西祝(後の文學博士)と共に、實に最も熱心な山崎先生の崇拜者であつたのである。

彼の詩歌で殘つてゐるものが數首あるから、これを附記して置く。

和歌二首

水の面に松山影の寫れるを見て

風さそふ水面の影は動くとも
げに動かめや千代の松山

有馬にて

有馬山かこめる霧は海に似て

あちこち殘る山の島かな

漢詩三首

聞外村氏卒然就眠、有感

壽命如朝露。　人生夢一場。
豈間須勉勵。　忽々到斜陽。

書懷

忽々經過二十春。　無功無德志猶新。
願離塵界遊仙境。　遠駕紫雲伴聖人。

富士山

遠聳青天白雪深。　眼前寫得丈夫心。
神州正氣君知否。　試見東洋不二岑。

彼の墓は最初黒谷の後部、白茅黄草の間にあつたが、明治二十四年十一月、その十周忌に際して同志社の教師生徒は醵金して東山若王子の松林の中に移した。その昔の三秀才の一人で而かも三人中の出世頭たる齋藤貫子は京都に入る毎に、人知れず必ず此の幼時の友人の墓に詣して默禱すること之を久うするといふ。

明治二十四年十一月十五日、同志社に於ける山崎先生十年祭の式場で、『十二の石塚』の作者湯淺半月は、次の新體詩一篇を朗讀して、先生在天の靈を慰めるところがあつた。

「はかまゐり」　　湯淺吉郎

五十年(いそとせ)の、榮へも夢か、夢ならば、さむるまでみよ、人間(ひとのよ)のことみなうつゝ、アヽ神のみめぐみならぬものぞなき、たゞ五十年の夢路さへ、みはてず行きし友をのみ、おもへばいまだうつゝとも、夢ともわかず朝な〳〵心にかゝるしら雲の、小松うづむる若王子、峯の御墓に手向んと、おく露ながら、秋の野の、尾花しら菊手折しも、いづれかよしと定めなく、ゆけばか路のまどひけん、彰榮館の時計臺、鐘の音遠し鴨川の、柳が下の疏水橋、いつ渡りけん、黒谷の岡とも知らずゴソ〳〵と、落葉枯草ふみ分けて、たてる木蔭にアヽ神よ、こゝにもあはれ五十年の、夢もみはてぬ墓一ツ

『山崎爲德之墓
明治十四年十一月九日歿
齡二十四年三月　』

君が名をみるをりしもあれ、涙とめあへぬ袖の上に散りくる木の葉二ツ三ツ

A good son
A good brother
A faithful friend
An ardent patriot
A superior scholar
A successful teacher
A true christian
He rests in peace.

君が碑をよむをりしもあれ、苔まだむさぬ石の上に降りくる村雨二ツ三ツ

『玉しきの都にあれど山里の民を忘れぬ蘇峯の筆、
　うつせみの世にありながら神の國の眞理をしたふ祝（はじめ）の文』

君が枝折し同志社の文の林の花二枝、昔しをしのぶをりしもあれ、時雨は晴て空高み雲間ゆく雁二ツ三ツ

以上を記し了つてから、重久篤太郎氏の好意で、『同志社五十年史』、及び『同志社ロマンス』（松浦政泰氏著、大正七年十月警醒社）を借讀するを得た。『五十年史』の人物篇中の山崎先生傳は、本稿中の傳記の部分と殆んど同一のものであり、格別加ふるところもなかつたが、『同志社ロマンス』には頗る貴重な興味ある資料の散見してゐることを覺えた。その悉くを拔萃するは頁數の許さぬところであるが、二つだけは何うしても轉載を許されたいと思ふ。それは、明治十二年六月山崎先生卒業の際のプログラムと、十二年以降の日記の斷片とだ。

左に掲げる。

明治十二年六月十二日第一回卒業式（式場、東山の麓、双林寺畔文阿彌、午前十時―五時）

奏　樂

一、祝　詞　　山崎爲德

二、耶蘇教は税吏罪人の友　　海老名彈正

三、法律と道德の區別　　和田正修

四、理學と宗教の關係　　森田久萬人

五、傳道師ハ學術アルヲ要ス　　不破唯次郞

六、眞正ノ教育　　市原盛宏

奏　樂

七、使徒保羅一生の祕訣（洋語）　　横井時雄

八、人ニ三性アルヲ論ズ　　加藤勇次郞

九、眞正ノ知識　　浮田和民

十、耶蘇教ハ社會ノ精神　　金森通倫

十一、信者ノ經驗　　小崎弘道

奏　樂

十二、日本學術論（洋語）　　山崎爲德

十三、神學ヲ學ブノ緊要ナルヲ論ズ　下村孝太郎
十四、スペンソル氏ノ説ヲ批評ス　吉田作彌
十五、人ノ禽獸ニ異ナル説　岡田松生
十六、女子教育論　宮川經輝
十七、離別ノ辭　横井時雄
十八、卒業證書附與　新島校長

日記抜萃（松浦氏の抜萃に成る）

明治十二年九月　市原（盛宏）、森田（九萬人）、山崎（爲德）、教員兼幹事の職に就く。事務の分擔左の如し

教育部	デビス	山崎
庶務部	ゴルドン	市原
理財部	ラーネッド	森田

九月十五日　始業。新入生二十餘人。
十一月一日　獵す。兎一尾を獲たり。
十一日　日曜日學校を開く。
第四年級　希伯來書　デビス

第三年級　使徒行傳　ラーネッド
第二年級　同　　　　山崎
第一年級　馬太傳　　市原
女學校　　詩篇　　　新島先生

十二月十七八九日　學期試驗執行。

明治十三年一月五日　始業。同夜始めて內外教員親睦會を開く。爾來二週に一回開會の事と定む。

一月廿九日　午後より休業各級集會を催ふし二時半より女學校に大會を開きデホレスト澤山アッキンソン宇野村上新島の諸氏演舌す。

一月卅一日　花岡山第五周年紀念會を開く。會する者七十餘名、上原山崎デビス加藤ゴルドン德富宮川森田新島和田諸氏演舌す。

四月五日　第三期始業。速成神學科三十名入校。

四月十三日　第二年上級下級合併に關し紛議を生じ新島校長衆生徒の前にて自ら其罪を責め其の手を鞭つ。宮內德山二名登樓の禁を犯し退校。

五月八日　第五第四年兩級ゴルドン山崎と共に石山寺に遊ぶ。歸路和船に乘り最も興あり。我輩幹事と生徒の間に葛藤起り、一旦は市原森田辭職を決心す。

五月卅一日　本田庸一氏九州よりの歸途第二敎會に說敎す。

七月二日　石山柳屋に避暑

七月三日　獅子飛びに至る。偶々大水、獅子隠れを見て獅子飛びを見ず。一茶店に午食して石山に歸る。

七月十三日　大阪基督教大親睦會始まる。今治より伊勢(横井)、彦根より本間、神戸より松山、今村、村上金澤より林、横濱より稻垣、東京より奥野、三浦、田村來る。

七月十四日　朝八時梅花女學校に演説あり。日本内國傳道論(田村、宮川)。午後次の大親睦會は明治十六年横濱に開くことを決議す。夜新島先生説教

七月十五日　休會、淀河舟遊。

七月十六日　梅花女學校にて演舌。基督教文學(飛鳥)、安息日の説教(稻垣)、親睦會の稗益(奥野)、奥野氏の戯謔實に妙。

七月十七日より八月九日迄第一寮上階東北隅の室に居る。井戸古賀と同室。

八月九日　京都にありては勉強出來す。單身有馬に遊び大黒屋に投す。松尾鎌田(原田)、芝、蓑田、中島先づ有り

有馬滞在中の雜詠（詩略す、前稿參照）

富士山

書懐

弔外村氏

八月卅一日　歸校。市原より東京諸學校の狀況を聞く。
宮川市原森田伏見と叡山に登りデビス氏ラーネッド氏を訪ふ。
九月六日　新島校長及市原森田と立會にて山崎九名の新入生を試驗す。
九月廿五日　寺町四條淨敎寺に普通有益演說會を催ふす、聽衆五百、爾後每月第三土曜開催の催となる。演說會の主義(上原)、睡遊之說(宮川)、日本人支那人にしてやらるゝなの說(上原)、人種往生說(山崎)、事を擧るには先後を洞察すべきの說(杉浦)、彈道の道理(山本覺馬)
ビーチョルの信仰の演述を讀む。
十月十日　第二敎會に於てモーゼ一代記を說敎す。
十月十七日　東山双村寺內文阿彌亭にて第二次同志社學術演舌會を開く。聽衆七百餘、天動くか地動くか(綱島)、工藝學術は風俗を矯正するか將之を壞るか(藏原)、世界七變更(森田)、發明家の親玉コロンブス論(市原)、紙幣論(ラーネッド通辯士宮川)、官吏學問論(北村)、人間の四務(山本覺馬)
北村氏の演說は差止めらる。
十一月二十日　文阿彌にて演舌會。心の解剖(山崎)、一大自由世界(加藤)、目の養生(ゴルドン通士綱島)、日本全國金渴論(三輪)、日本國の大敵無學(宮川)
十二月十八日　『ヴェニス商人裁決』を演す。翌日より休暇。五年生と每日密留頓(ミルトン)を讀む。

明治十四年一月一日　我等六人新島先生の馳走に逢ふ。

一月十日　デビス氏歸國。

一月十五日　演舌會。聽衆三百五十。物價騰貴の說（三輪）、關婚姻衛生論（管野）、殖財上の改良（ラーネッド）、統計表論（山本覺馬）、日曜日と文明の關係（新島）

五月十七日　四條劇場（北座）にて大說教會晝夜開會、聽衆凡五千人。

（晝の部、神の性質（金森）、基督の傳（浮田）、靈魂の說（不破）、見えざる神を見る法（山崎）、萬國基督教の現況（ラーネッド）、世界を救はんものは基督教か（新島）、阿彌陀如來の說（ゴルドン）

夜の部、基督教の證據（森田）、眞正の自由（宮川）、愛神愛隣の說（横井）、因果應報（杉浦氏）等）

六月十四日　交詢社員六名四條金蓮寺にて基督教を伐つ。

六月十八日　文阿彌にて之に答ふ。聽衆千。

二十八日　丹波龜岡にて大說教會あり翌日桂川を下りて歸京す。（山崎先生の日記はこゝにて絶筆）

沙翁文獻篇

此の頃見たるシエークスピア文獻の二三について

一　外山博士の『ハムレット』譯ついて

昭和八年五月六日、と書き出すと妙に改まつて來るが、此の日の午後、東京帝大圖書館主催の展覽會で珍らしい物をみた、文字通りの珍物だ。それが即ちこゝにいふ外山博士の『ハムレット』の譯稿だ。

外山博士の『ハムレット』試譯は『新體詩抄』にも見える、又『ゝ山存稿』でも見られるが、私が見たのはそれだけではない、外山博士が正眞正銘の沙翁の原作を全譯しようとかゝつたその稿本幾通りかを見ることが出來たのだ。

外山博士が英文學乃至一般文學に可成りの嗜好と造詣をもつて居たことは一般に知られてゐるが、そのうちでも沙翁の諸作について何れだけ讀んでゐたか、分からない。然し博士は沙翁がすきで、好んで讀まれたものに違ひない。東京大學の年報によると(明治十五年——十六年間の第三年報)、哲學史學の教授だつた博士は、英文學の教授も兼任してゐるが、理學科二年生に對してシエークスピアの『シーザー』とエマーソンの『カルチュア・エンド・ビヘビアー』といふものとを講じ、哲學科二年生に對してシエークスピアの『ハムレット』とエマーソンの『シビリゼーション・アート・エロクエンス・ブックス』(論文集)、マカウレー『フレデリック・ゼ・グレ

ート』等を講じてゐるが、勿論此等の沙翁物は、その時初めて讀んだのではない、數年前から讀んでゐたものであることは證跡がある。例へば十五年三月二十五日の郵便報知に博士は沙翁の『ヘンリ八世』中の一節を譯載してゐるのがあり、同年八月に例のハムレットの獨白を載せた『新體詩抄』が公にされてゐる。だから前々から好きで讀んでゐたものと見える。それやこれやから、時代の西洋文學熱に乘じて、遂に『ハムレット』全譯に手をつけるに至つたものであらう。

たゞ問題は、この譯稿は何年に着手したものか、である。何しろ硝子張りの陳列箱に入つてゐたので、丁度開かれた二枚程をやつとの思ひで手早く寫しとつたものゝ、その上硝子の戸をあけてまでいぢくることまでは出來なかつた(鍵がかゝつてゐたので掛りの委員でも駄目なのだ)。だから譯稿を精査したら何處かに着手の年月が書いてあるかも知れぬと思ふが、今のところでは何うにもなるまい。尤も市河三喜博士も寓目されたといふから、追つて同博士の手で種々な疑點が闡明されるかも知れない。だが、今譯稿の文體や書體其他で想像をつけると、矢張り十四五年を中心に、早くは十二三年、遲くば十六七年、極早くても十年以後、極遲くても二十年を下るまいと考へる。然し何うも十四五年以前とした方がむしろ當つてゐはせぬか。外れても大して外れはすまいと考へてゐる。何しろ早く年代を知りたいものである。(後にきけば、外山家からこの外種々な文書が一堆東京帝大の圖書館に寄附されたといふが、同圖書館の慣行の消毒がすんで整理がつくまでは相當長くかゝるとのことであるから、研究家はまだまだ自由に此の譯稿を目にするわけには行かない次第、從つて僕は自分の眼福を益々喜んでゐる次第である。)

外山博士の譯稿は、散文譯で、第一稿第二稿第三稿とでもいふのか、都合三通あつたやうに思ふ（もつとあつたかも知れないが、今記憶にない）。その一の表題は、

西洋浄瑠璃 ハムレット 靈驗皇子の仇討

とあり、その二の表題には

シェーキスピーヤ氏著 靈驗皇子の仇討

とあり、その三の表題には

シェーキスピーヤ氏著 諸業無常・靈驗皇子の仇討

とあつた。もとより何れが第一稿でどれが第二、第三稿であるか、正しくはわからないが、「諸業無常」と角書きしたものが一番分量も多いらしく體裁も幾分整つてゐたかに見えたのに徴して、やはりこれが第三稿であらう。見本に二枚開いてあつたのも、この角書のある方の譯稿であつた。

次にその譯稿の見本の寫しを掲げるが、何しろ何百といふ人が押し合つてゐる中で、汗をかいてやつと寫したものであり、又元々譯稿そのものがホンの下書きであるらしく、亂暴な書きなぐり體のもので、それに勝手に書き込みがしてあり如何に苦心してもその場で讀めないところもあつた。その邊のところは御諒察を乞ふとして、いよいよ玉手箱を開ける。丁度第一幕　第二場、ホレーシオとハムレットと面會の條である。

併しホレシオ何用ありて（中略）はる／＼來られたかナ（此の間讀めぬところあり）「イヤこれは――左様なことをいはれてはならぬぞ、殊に其方が我が口より其樣なことを我耳に入れて濟まうと思はるゝかコリヤチヤウ

ダンを申すな其方等がナマケ者にあらざることは(でないことは(訂正文句))身共は克く存じて居る。其樣なタハムレを申さすにエルシノアには何用あるか申してしまはれよ、それはそうと(不明)歸るまでには醉はせるから其つもりで居れよ」「我が君實は父(不明)御葬式に臨まん爲に罷越しました。」「人を馬鹿にするな、そうではあるまい、母上の婚禮に臨まん爲であらんがな、」「我が君お察し申します此御婚禮は實にちとお早や過ぎました」「イヤホレシオこれも儉約だ　儉約次第だ、(不明)鹽をかけられたるちまく(不明)の菓は直ぐ婚禮の冷のさい、ホレシオ、未來に於て如何なる敵に遇ふとても彼の日を見るには優るならん、ア、父上が見ゆる樣だ、」「エー我が君何所に」、「ホレシオ、我が心の眼にさ、」「某も拜せしことがありたるが實に優れた君なりき、」「ムゝ長し短しはさて置き總(すべ)ての上で考ふるとき亡き父上の如き者は又と天下にあるまいと思ふぞよ」「我が君昨夜某は拜せしと思ひます」「誰を拜せしとな、」「先君を、御尊父樣を、」「ナニ先君我父を、」「先づお靜まり下され、此の人々を證人に」云々

僕がやつと寫したのはこゝまでゝ終つてゐる。譯文の稚拙さは御覽の通りで、とてもこのまゝ公に出來る代物ではない、矢張りホンの下稿といふに止まるであらう。參照の爲めに坪内先生の譯を掲げて置く、

ハム　實正どうした仔細あつてウイッテンバアグから遙々こゝへは？

ホレ　のらくら根性からでござります。

ハム　いや、其樣な惡口は御身の敵からでも聞きたうない。まして自身で惡ういうてそれを常に信ぜさせるとは以ての外ぢや。なんで御身が懶惰漢(のらもの)であらうぞ。したが此エルシノーアへお出でやつた用事は何ぢや？

ようせぬと逗留中に暴酒（おほざけ）飲むことを教へられうぞ。

ホレ　實は御父君の御葬儀を拜まうとて參りました。

ハム　はて弄（なぶ）るまい。おそらく母上の御婚儀を觀るためであらう。

ホレ　げにおつしやれば、間も無う御慶事。

ハム　なそれ、儉約！　儉約！　葬式に用うた炙肉（あぶりにく）をば即（やが）て婚禮の膳部へも廻す冷いもてなしぢや。あのつれな目を見る程なら怨重なる讐敵と天で逢うたはうがましぢやわい！　父上が……父上の顏が見ゆるやうぢや。

ホレ　え、何處にでござりまする？

ハム　はて、予が心の眼（まなこ）に。

ホレ　それがしも嘗てお目通りを致しましたが、眞に氣高いお容姿（かほかたち）。

ハム　何處から如何（どの）やうに較（くら）べうとまゝ、又とあるまじい人であつたわ。

ホレ　御前正しう夜前（やぜん）お目にかゝつたかと存じまする。

ハム　お目にかゝつたとは、そりや誰れに？

ホレ　御父君に。

ハム　父君に！

ホレ　まづ／＼、御驚愕（おんおどろき）を鎭めさせられ、暫くお聽下されませうず。只今聞上（きこえあ）げまする近頃不思議の一條、そ

の證據人は此れなる人々

重ねていふが、何にしても早く此の譯へ外山氏が手をつけた年代を知りたい、若しそれが明治十八年以前であれば、この譯稿が「ハムレット」の試譯として明治初期の飜譯文藝史上極めて重大な位地をもつことになる、十八年以後になれば、坪内先生の譯が「中央學術雜誌」へ出るから(初頭の一部分にせよ)、資料としての價値が大分減ずることを免れまい。(昭和八、七、七)

二 『春宵夜話』について

明治十六年七月刊かと思はるゝ(七月七日御屆)『西基斯比耶（セキスピーヤ）叢書』のNo. 1「佛國某州領主麻吉（マキシム）侯情話」(翠嵐先生譯述、春夢樓印行)は先年京都の重久篤太郎氏によつて發見され、今日は私の手許にも一部愛藏してゐるがこの譯書はシェークスピヤ物としては今なほ珍本の中に屬するらしい。

これについては、嘗て譯者翠嵐先生とは誰か、又この叢書は續刊されたものかなどゝいふことについて、研究者間に討論があつた位であるが、實は、此の譯本には母胎ともいふべきものがあるので、私は二三年前、東大の明治文庫で古新聞を披閲してゐる際、その母胎を發見した。それは、郵便報知新聞の明治十六年三月十四日から漫言欄に連載されてゐるもので、『春宵夜話』と題してある。この「春宵夜話」は

○ウイントルス・テール
○As You Like It（アズ・ユー・ライク・イト）
○ヴェロナの二紳士
○ハムレット

といふ順序で新聞に出てゐるのであるが、問題の『麻吉侯情話』は、正に右の第二に相當するのだ。これは、『麻吉侯情話』の現物と新聞掲載の分とを比較して見たから明白だ。

『春宵夜話』の第一回の冒頭には譯者翠嵐生なる人の緒言がある（研究篇第五八頁）、それによると、此の『夜話』が何人か社外の人のすさびに成るもので、それを報知新聞に投寄したことになつてゐる。これが社外の人らしく見せた爲め翠嵐生（即ち『麻吉侯情話』の翠嵐先生）なる人の正體を益々分らなくさせてゐることは事實だ。だがこれは手を盡して調べてみるとさう分らぬ問題でもなかつたので、その事は後にいはう。その前に一寸『春宵夜話』の新聞掲載日附を正確に示して置かう。

明治十六年三月十四日（三〇〇三號）―― 二十四日（三〇一一號）
　○ウイントルス・テール
同　年四月五日（三〇二〇號）―― 二十四日（三〇三六號）
　○アズ・ユー・ライク・イト（お氣に召すまゝ）
同　五月三日（三〇四四號）―― 二十四日（三〇六二號）

○ヴェロナの二紳士

同　　六月二日(三〇七〇號)——二十一日(三〇八六號)

○ハムレット

といふことになつてゐる。さうして『ハムレツト』を譯載するころから『春宵夜話』が『春宵閑話』と變つて來てゐる。その原本がシェークスピヤの原曲ではなしに、ラムの『物語』たることは、以上の各篇をラムの原文に對照してみて、明白疑ふところなし、何れもラムの『物語』の各篇に相當するところをそのまゝ飜譯したものである。然しその飜譯の調子が、全然文章初學の書生の手に成つたものとも覺えない(研究篇中の見本參照)、何れかといへば、當時としては佳い譯の方で、總體として文章に何となく品があり老成の趣きがある。いかに若年の書生の筆すさみらしく見せても、さうは受けとれない。殊に、その一部を刊本とした『麻吉侯情話』には翠嵐生が翠嵐先生となつてゐる。これは、若し翠嵐生で濟むなら何も單行の際特に敬稱して先生といはずとも、矢張り翠嵐生譯述でいゝわけであらう。さうしてみると、これは先生らしい人、先生として尊敬されてゐる人の戲筆といふことになる。

それで、此の翠嵐生の正體に餘計興味をひかれることになるのだが、『春宵夜話』といふ母胎に探り當つて後も私は長いこと、この譯者の正體には思ひもつかなかつた。

さてそれはそれとして、郵便報知新聞でシェークスピアのものを譯載したのは、この『春宵夜話』が始めにして終りではない。私はいろいろな機會から、十七年、十八年、十九年と此の新聞を見て行くうちに、他になほ四

つばかりシェークスピヤ物が譯載されてゐることを知つた。それは十七年十二月十六日――二十八日の

〇花間の一夢

十八年四月七日――五月七日の

〇落花の夕暮(無署名)

同　年七月十日――十八日の

〇榮枯の夢

同　年七月二十二日――八月十一日

〇雨後の花

といふものである。『花間の一夜』はシェークスピアの『シンベリン』、『落花の夕暮』は『ロミオとジュリエット』『榮枯の夢』は『マクベス』、『雨後の花』は『末よければ凡てよし』(オールズ・ウエル・ザット・エンヅ・ウエル)のそれぞれ梗概の散文譯である。さうしてこれもシェークスピアの原曲から紹介したものでなしに、ラムの『物語』から紹介してゐることは、對照して讀んだ結果、これ亦明白疑ふ餘地なしといふわけである。

ところで、此の後の四編は誰が飜譯紹介したものかといふと、これの方には、九皐山史、或は九皐生といふ署名がある。九皐生とは何人であらう。これは頭をひねるまでもない、報知社の大幹部、矢野龍溪について勢力のあつた鳴鶴藤田茂吉の別號だ。私が說明するまでもなく、諸君御承知であらうが、鳴鶴といふ號は、詩經小雅鶴鳴篇から出たもので、鶴鳴九皐、其聲聞于天といふところから、鳴鶴と號し、九皐を別號とし、書樓を聞天樓と

號した。現に遺族藤田敏夫氏の所藏される遺物中に九皐生と署名したものもある位だから、間違ひはない。私が何で此の九皐生が藤田鳴鶴であることにかう力を入れて證據立てるのかといふと、此の事が直に翠嵐先生の正體を示す鍵として役立つからだ。『花間の一夢』の序に曰く

余往キニ撒斯比亞ノ稗史ヲ抄錄セル一書中ヨリ最モ邦人ノ耳目ニ入リ易キ小話ヲ譯述シ之ヲ春宵閑話ト題シテ本紙中ニ掲ゲ一ハ以テ泰西ノ稗史ニ存スル風味ヲ知ラシメ一ハ以テ余ガ文藻ヲ培養スルノ一助ニ供センコトヲ期シ三四種ヲ譯シ了レリ爾後故アリテ之ヲ紙上ニ載スルヲ廢シタレドモ既ニ其稿ヲ脱セル者若干種ヲ存セリ今ヤ本紙ヲ改革シ叢話ノ一欄ヲ置テ日々是等ノ文辭ヲ掲グルコトニ定メラレシヨリ遊戯ニ屬スル閑文字モ亦其必要ヲ報ズルニ會ヘリ云々

『花間の一夢』以下四篇の譯文の調子が、『春宵夜話』と全然同調であるが、それは兎もかくとして、右の序文中「余往キニ撒斯比亞ノ稗史ヲ抄錄セル一書中ヨリ最モ邦人ノ耳目ニ入リ易キ小話ヲ譯出シ之レヲ春宵閑話ト題シテ本紙中ニ掲ゲ」云々の一條を、再讀して頂きたい。『春宵夜話』、卽ち後の『春宵閑話』も、亦正しく九皐生(山史)が譯述したことはこれで明瞭であらう。これが明瞭であるとせば、『春宵夜話』の署名者たる翠嵐生(翠嵐先生)は、此の九皐生と同一人でなくてはならぬ、翠嵐、九皐既に同一人であるとせば、九皐と同一人たる鳴鶴と翠嵐とも同人でなくてはならぬ。卽ち藤田鳴鶴こそ、問題の人物翠嵐生の正體だといふことになる。

以上記する所で、翠嵐生(先生)の正體が完全に暴露されたと誇稱するのは少し早計かも知れないが、然し何うも私の斷案は動くまいと信ずる。ともかく、私の此の發見で翠嵐先生の正體を知る大切な鍵をつかみ得たことだ

けは威張つてもいゝと思ふ。

なほ鳴鶴のシェークスピア好きは、次の『花月情話』の條にも一寸出して置いたが、彼の著『觀風叢話』の中にも、そのシェークスピアに對する興味が出てゐる。同書觀劇の記事のところに左の一節がある。

幸にしてセキスピーヤの脚本にかゝるものは大抵其筋立を書物にて知り得るにより言語不通の不便を幾分か補ふて批評は下だし能はざるも俳優の技倆如何は測量し難きに非ず（二〇八頁）

これが遺族所藏の原稿では——

幸にしてセキスピーヤの脚本にかゝるものは曾て大抵其筋立を書物にて知り得たるにより云々

となつてゐて、この「曾て」の二字を消してあり、又「得る」が「得たる」になつてゐる、だから鳴鶴が日本にゐるころから、シェークスピアに興味をもち、これを熱心に讀んだことが推測されるのである。

兎もあれ、これで當時改進黨の大立物の一人たる鳴鶴藤田茂吉にシェークスピア紹介者としての極めて興味ある一面があることになり、彼と明治文學との接觸が、たゞに政治小説『濟民偉業錄』の一書を介してだけには限らぬことになつた。

私は密かにこの自分だけの發見に喜んでゐる次第である。

三　『歐洲奇聞 花月情話』

此の『花月情話』の發見は、私の近頃での快心事の一である。これはシェークスピアの『ロミオとジュリエット』の梗概をとつて小說風に書き直したものであるが、その依つたのがラムの『シェークスピア物語』であるか又はシェークスピアの原典であるか、その點は一寸判明しないが、恐らくはラムの方に依つたものであらう。種種の事情を綜合してさう思はれる。

『花月情話』は、明治十七年二月九日函右日報（靜岡）一四〇四號から第一回が揭載され、二月二十一日一四一四號第六回で中絕したものらしい。署名には「在東京　菊亭香水譯」とあるが、この菊亭は、有名な『惨風悲雨世路日記』の著者佐藤藏太郎である。

私が、菊亭にかういふ飜譯物があることを知つたのは、菊亭自身の私への手紙に依つたのだ。それももう大分前になるが、妙なことから、私は菊亭にかういふ小說があることを知つた。それは『世路日記』のことから菊亭の著作をいろいろ調べてゐた際、明治十六年九月刊行『野路の若鹿』といふ草双紙風續物戲作の卷末廣告で、菊亭香水の著として次のやうな小說に出會つたのである。

『蝶風妬雨花月情史』

これが『世路日記』の前身たる『艶才春話』（明治十五年刊）に增補を加へたものであることは、その廣告の文面にはつきり出てゐたが、これが（『世路日記』の前名であらう）刊行されたかいなかゞ未詳であつたので、幸ひ著者菊亭とは、その前々から書翰を往復してゐたから、早速『花月情史』といふものが果して刊行されたか何うかといふことを照會してやつた。ところが、菊亭からの返事に「それは花月情話といふものであらう、あれはシェ

ークスピアの小說の飜譯で、靜岡の新聞に出たが、譯があつて中絶したので完成してゐない」云々とあつたので私は最初は狐にでもつままれたやうな氣がしたものだ。然しその後度々押問答を重ねてゐるうちに、私から照會してやつた『花月情史』の他に、『花月情話』といふ飜譯小說があることがいよいよ確かめられた、而かもそれは何うもシェークスピア物に違ひないといふので、非常な興味をもつて、これを目にし得る機會の惠まれんことを待つてゐたのである。

ところが、昨年春、他の用事で靜岡の函右日報（東大明治文庫所藏）を調べてゐるうちに、端なく數年間、何處かでいつか見當りはせぬかせぬかと考へてゐた、此の『花月情話』にぱつたりと出會つた。その時の氣持は、嬉しいといふよりも、むしろ有難かつたといひ度い。多年此の一事に思ひ惱むのを自分の用事にしてゐた頭腦細胞の幾部分が、この發見で他の仕事に向けられるやうになつたかと思ふと、實にほつとしたわけである。

函右日報は明治十二年六月創刊、始めは單なる地方的啓蒙新聞であつたが、十七年一月から郵便報知新聞と連絡をとつて、記者井上寛一を借り、又矢野文雄の改革意見を入れたりして、大分改進黨臭を發揮した小形政治新聞となつてゐる。當時報知の記者で矢野の子分だつた菊亭香水がこれに寄稿するに至つたのも、さういふ關係からであらう。

『花月情話』は前述の如く六回で中絶したが、その六回分の目次を掲げると——

明治十七年二月九日　第一回　風動㆓花枝㆒探㆓月影㆒　天開㆓月鏡㆒照㆓花妖㆒

二月十日　第二回　花延㆓月色㆒來㆓池北㆒　月轉㆓花陰㆒在㆓檻東㆒

二月十五日　第三回　十分月滿花多レ影　千樹花開月亦香

二月十六日　同續キ

二月十七日　第四回　憩レ月乞レ延花ノ性命　倩レ花能正月ノ斜欹

二月十九日　第五回　長空影動花迎レ月　深院人歸月伴レ花

二月二十日　同續キ

二月廿一日　第六回　徘ニ徊月下一悲ニ花落一　徒ニ倚花邊一怕ニ月斜一

これを內容からいふと、第一回は發端で、伊太利國威呂那府の兩豪族加美列戸（カピュレットといふところをかういつてゐる）門泥具（モンテギューといふところをかういつてゐる）の睨合ひ、加美列戸家の夜會、門泥具家の一子露美雄のことなどある、第二回、露美雄と魯坐倫との逢られぬ戀、友人辨振雄が露美雄の心を他に紛らすため加美列戸家の夜會に誘ふこと、第三回、露美雄、辨振雄、毛留宇（マアキュシオ）が加美列戸家の夜會に來て、始めて加美列戸家の一女と知らず壽李唉散と會ふ、加美列戸の甥陀非留土（チッバルト）が露美雄を見つけて打擲する、加美列土長者はこれを止める、第四回、露美雄、壽李唉散と舞踏する、壽李唉散も露美雄も互ひに一目で相手を戀し合ふ、第五回、露美雄忍んで壽李唉散に會ふ、こゝで中絶してゐるから、原曲でいふと、丁度第二幕の二場の終に當つてゐる。「研究篇」に既に見本として（第五回續キ）を抄出して置いたが、なほ左に第一回の全文を掲げて置かう。

雨洗フテ更ラニ鮮ヤカナルノ花ハ月ヲ弔ヒ風吹テ落チザルノ月ハ花ヲ憐レム美人ハ才子ノ多病ヲ惻ミ才子ハ美

人ノ薄命ヲ嘆ズ月中幾日カ花羞ナキ花上何年カ月始テ臨ム說起ス一條ノ物語ハ伊太利國威呂那ノ都府ニ財巨萬ヲ有セル兩家ノ豪族アリテ其ノ一ヲ門泥具ト云ヒ今一ヲ加美列戸トゾ稱ヘケルガ兩族共ニ祖先ノ代ヨリ夥多ノ財産ヲ所有シテ負ケズ劣ラスノ身代ナリシガ如何ナル宿怨ノアリモヤシツル此ノ門泥具ノ家ト加美列戸ノ家トハ先代ノ時ヨリモ其間柄睦ジカラデ互ニスレスレノ中トナリ動モスレバ兩家ノ間ダニ風波ヲ生ジ白眼(ニラミ)合テゾ幾多ノ歳月ヲ送リケルガ今日ニ至リテハ兩家ノ緣ニ繫ガル、ノ親戚ハ言フモ更ナリ其ノ召仕ハル、奴婢等ガ如キ輩ニ至ルマデ互ヒニ雙方ヨリ相敵視シテ遇マ(タマタマ)途ニ出逢フ時ナドハ口ヲ極メテ罵リ合フノミ果テハ闘合(ツカミアヒ)ノ喧嘩トナリテ一方ナラズ騒動ヲサヘ惹起スルハ度々ナリシト「一加美列戸ノ主翁(アルジ)ハ或時我ガ家ニ於テ夜會ヲ催フシ城都ノ縉紳ハ勿論威呂那府中ニ其姓名ヲ知ラレシ人々ヲバ職業ノ何タルヲ問ハズ皆ナ之ヲ招待シテ其他尚ホ招カザルノ客ト雖ドモ來クラン者ハ拒マズシテ當夜ノ席ニ列ラシム可キ旨諸新聞紙ニ廣告ナシ數日前ヨリ多クノ人ヲ雇ヒ入レテ饗應ノ用意ヲゾ爲サシメケルガ又若シ斯ル際ノ混雜ニ紛レテ彼レ門泥具ノ一族等潜ビ入ンモ知レ難ケレバ萬一然ル事ノ有ランニハ痛ク彼等ニ恥辱ヲ與ヘテ日頃ノ怨ミヲモ晴ラサンモノト其ガ事ノ用意マデ爲ツラヒツ待構ヘテゾ居タリケル」却テ說ク偖モ彼ノ門泥具家ノ子息ニ露美雄ト呼ベルハ天資才美ノ二ツヲ具備シテ容貌端麗玉ヲ欺キ風姿威アツテ猛カラザル當時ニ得難キ少年ナリシガ如何ナル宿世ノ緣ヤアリケン同都府ニ住ム者ニシテ脊坐倫トイヘル少女ニ深クモ日外(イツシカ)想ヒヲ懸ケテアハレ好キ機ヲ得ルノ時シモアラバ我ガ心ノ丈ヲ打明ケテ彼レガ情ヲ受ケナンモノト會胸(ヒゴロ)ヲゾ焦シ居ルヲバ其ガ親友ナル辨振雄ノミ獨リ心ニ推シ居シトゾ

譯者と署名してゐる菊亭に、英語の知識が皆無といふ程ではないとはいへ、シェークスピアを原曲讀むまでの知

識は無からうと思つたので、此の點確めたところ、正にその通り、これの原話は矢野文雄の令弟小栗貞雄氏から聞いて書いたものだとの返事であつた。それで、小栗氏は何方を讀んだか、それを今一應突き止めるべきであるが、まだ小栗氏には伺つてゐない。然し此の頃報知社の同人連が盛にラムの『シェークスピア物語』を讀んだり譯述したりしてゐる點から見て（前述『春宵夜話』の條參照）、此の『ロミオ』も恐らくラムの『物語』の方から出てゐるのであらうと思ふ。

尙ほ明治十七年二月廿六日函右日報一四一八號に、『花月情話』中止理由として、——

記者曰ク歐洲奇聞花月情話ハ譯者菊亭氏ガ病氣ニテ其ノ續稿ヲ起ス能ハズ依テ全快ノ日マデ一旦中絕ス讀者幸ニ之ヲ欲セラレヨ

といつてゐる。然しこれは單なる表面的な口實で、實は他に理由があつたのである。これは、菊亭がこの『ロミオとジュリエット』を函右日報に譯載し始めたのを、報知社の主筆藤田鳴鶴（これも菊亭の同鄉先輩）が見て、あの話は自分が後で報に載せようとしてゐるものだから、君の方を止めてくれなくては困るといつたので、菊亭も止むなく、中絕にしてしまつたのだといふ。鳴鶴が後に十八年に至つて九皐生の名で同じ『ロミオとジュリエット』を『ラムの物語』によつて『落花の夕暮』と題して紹介してゐるが、その志はもう十七年から決まつてゐたわけである。此の話なども、鳴鶴が如何に眞劍にシェークスピア紹介に打ち込んでゐたか、といふことを知る一資料になるであらうと思ふ。

四　『葉武列土倭錦繪』

明治十九年十月九日、東京繪入新聞三四〇二號から、同年十一月十六日、東京繪入新聞三四三三號までに掲載されたもの。先づ同紙十月六日、三三九九號に

●改良演劇の筋書

狂言題名　葉武列土倭模繪

とあり、此の作を掲載する前置として次の文章を掲げてゐる。

此劇場は英吉利國に於て古今獨歩の名人と呼ばれたる「セーキスピール」と云ふ作者の述る所にて最も名作とて彼國にて愛玩さるゝ演劇なり抑そも此作は千六百三年（我慶長八癸卯年）今を去る二百八十四年前の新狂言にして其趣向は昔日西洋丁抹國の后某が國王の舍弟なる惡王子と密通に及び遂にその本夫なる國王を毒殺し惡王子その位に即て國王となり后は二代の皇后となり給ふ此際先王の嫡子葉武列土親王父王の幽靈の告に依て母后ならびに叔父王の惡事を知り復仇を遂て自殺したる筋の物語なるを去る明治九年中本社繪入新聞紙上に於て纔に三四回掲げしが當時の看客未だ西洋小説の微意有を味ふ者なく闇雲に面白からずとして頗る不評なりしかば斷然續稿を廢し次號の記載を見合しが目下劇場の改良説隆むとなり既に新劇場建築落成の上は此葉武列土傳を我國風に模し新舞臺に演ずる由併し其風聞の眞僞は偖置渓いが專一手柄の仕勝と地獄耳の聞もあへず玆に書

稿の後回を採り次號より歐洲演劇の役人を我日本の俳優似顔繪に比擬模し引續き繪入新聞改良の新紙上にて御覽に入たてまつれば永當々々御愛看の程を希がふ役人替名は次號より御披露と先今日は是切で餘白がござらぬ

明治九年中云々とは明治八年中の間違ひであるらしく、後にはこの三四回とは明治八年九月七日から九月十日の三回となつてゐる。右の前布令は今演劇改良の機運に乘じて舊稿を掲げるといつた風に解されるが、果してこゝに掲げ出すものが、舊稿であれば、これを讀むと明治八年掲載のものをも知り得るわけで、一石二鳥の得があるのだが、如何に舊稿のまゝといつても、十年後の今日多少の訂正はあるらしいから、一石二鳥は先づ蟲の好い思案であらう。十月七日、三四〇〇號には、芝居の名題看板に見立てたものゝ中に

劇場の改良案は
英國の時代狂言
紙上の改良面は
我國の時世狂言

葉武列士倭錦繪
西洋綴　五冊

とあり役々の名が出てゐる。

西洋演劇日本俳優見立役名

立役　葉武列土親王　先王の子當時の國王の甥
立役　丁抹國王頃須壽　先王の弟葉武列土伯父
實惡　宮内卿母衣入壽

立役　洞長將軍
娘形　宮内卿の娘阿部利亞姫
若姐　耀取宇戸前　先王后叉當時の國王の后卽ち二代の后にて葉武列土親王の母
立役　先王の亡靈　頓須壽王扮する俳優の二役

以上の役名が狂言中の立者なり此他の役の人は

諸威國堀珍武良壽
武官丸勢理斯
同　辨鳴吹
兵卒普蘭志須古
宮内卿家來禮鳴度

此他宮内卿近從の役人その外「オルチマンド」「ウラセスクランワ」「キルテンラナン」「オスリッキ」等の役名○大名○奥方○武官兵士○水夫○使丁○家來叉墓所の穴掘二名法師一名使節一名

本文は我劇場に所謂正本體に綴りて御覽に入らまほしけれど從來日本演劇にはしば〳〵道の通語ありて芝蘭の室に入らざれば其香を知らぬ隱微もありとかたま〳〵今世の傍訓新聞も續き物に正本體に模擬して記する者あれど本職の狂言作者が見る時は素人仕事の似た山振に過ぎすとて嗤笑に附するものありと聞けば本舞臺三間のあひだ正面云々の書割より道具立の微細きを省きトムリ升○おもいれなどの煩はしきを言はず文章は操曲浄るりの

院本調に傚ひ近松門左衛門が旬調福内鬼外の洒落に則り記者が怪筆に譯述する所次號大序より追々記す可し

同年十月九日、三四〇二號、いよいよ大序を揭げるに臨んでまた簡單に前布令してゐる。

●院本旬調　一昨日の紙上に題號看板を擧げて西洋演劇の場割を列ねし丁抹葉武列土親王報讐譚の本文は前號にもいへる如く當繪入新聞第七十二號（明治八年）九月七日の紙面より同九月十日と第三回まで其筋書を記載せしがまだ時好に適はずして先王の幽靈と共に立消せしも疾十二年の昔と成行看客も定めし御忘却ならんとは思ひ侍れど去とては重復のおそれあり故に今回は其文體を一變し彼竹豐者流の淨瑠璃院本の轍に傚ひ近松門左衛門雲固を食め福内鬼外屎でも舐れといふ山不看天狗の鼻柱と等く筆頭を勃起て臆面なく陸續編次する者は羅笠隱居童叟なり

これによると果して舊稿のまゝで無く、今度の揭載について書き更へたわけである。明治八年の方のは、恐らく少し詳しい梗概めいたものであつたらしい。

ところで此の羅笠隱居童叟とは誰れか。これは當時繪入新聞の隱居役をしてゐた筆硯童叟、卽ち假名垣魯文に外ならない。それは十一月十五日の條で、「記者假名垣魯文」と明記してゐるから明白である。

そこでこれが、魯文の舊稿を訂正したものとすると、明治八年の分も明白に魯文の筆に成るといふことが分かるわけである。

本文の文例には、みかり屋姫狂亂の場を出したが、こゝには大序の冒頭を一回分出して置かう。

日本の改良劇ハ
英國の時代狂言　葉武列土倭錦繪　大序

(序詞)公羊傳に曰く父の讐を報ひざれば子に非るなり東西洋を隔つれど人倫社會の道替す倶不戴天を一筋に立横文字の筆の跡史籍にとめて水莖の流れ傳ふる彼我交通渡る船路の幾千里水の白泡碧海をやまと錦に織まぜてその面影を模し繪や人王九十九代を知しめす後光嚴天皇の御代なれや(ヲロシ)出羽の國守斯波修理大夫源の兼賴は北朝無二の諸侯とて最上の郡山形に城を築き北陸道に白旗の威風に靡く國民は最上の御所と尊とめり斯る榮華の眺めにも常なき風に春の花一夜に散し太守の逝去世嗣の嫡子葉叢丸は藍より出て藍よりも青き額のすみ前髮箕裘を嗣べき才量の有とは世にもゆるしの色若紫の朱奪ふ先君の舍弟斯波彈正の忠兼壽兄嫂の後室芹戸の前の依賴とてしばしば國の政事とりも直さず太守の威權今は此世に亡き兄の閨房の妻戸を訪れて濡手に粟の摑み取六十餘萬斛高の位置に据りし高櫓見おろす城の堀端に非常を見廻る侍大將當家の勇臣岩室主稅虎長は組下丸勢利介渡邊鳴門の兩個を從へ忍び姿の里出立あやめも分かぬ闇の夜の秋風寥き大手前虎長は立止まり(長)ナント御兩所足輕共の噂には此頃每夜深更に及び怪き乘馬姿の者堀端を通行なす由正しく狐狸の所爲ならむ何にもせよ本城近く奇怪の擧動もし是らの風聞敵の間者に洩聞へなば當家の武威に關係瑕瑾(丸)如何にも左樣拙者等も此事耳へは入ましたれどこは敵方の廻し者が先君他界の虛に附込み異な風說をいひ觸らし當家の武威を挫かむとの計略ではござらぬかと馬耳東風と心に止ず(渡)さ迄懸念もなさゞりしが次第につのる城下の風聞(虎)現見たりといふ者あれば聞流にはうち棄ておかれず(丸渡)我々今宵は此ところにて(虎)その生體を顯はしくれむと四邊を白眼みて三方を拳を握りて窺ふ折しも颯と吹來る風筋はさすがに猛き武士もぞつと身に染む目さき

のかげろう闇にも天と白装束白馬に跨る人影を見るより三人一所に目をする(虎)ヤ、夫へわたらせたまふ御姿は(丸)正く先君兼頼公(渡)若赴此世におぼし殘さるゝありて(虎)かく御姿を現したまふかさもあらば我々へ(三人)仰せきけられ下されョといへど答もあら靈言葉の露もなき人の姿は消て失にけり(虎)如何にかた〳〵今幻しにあらはれたまふは先王の御姿に相違なし拙者つら〳〵勘考致すに先君此世に御心を殘させたまふは御嫡男葉叢丸の御上より他あらじ(二人)拙者等も貴殿と御同意(虎)然らば此事密そ若殿に言上せん何れもござれと虎長が前立後より丸勢渡邊本城さして(三重)入にける

以下順序を追て梗概を掲げる。

(序の二)　最上の本城東御殿

斯波彈正の忠兼壽
芹戸の前
葉叢丸
執事宮内主膳宗晴
嫡男禮之亟晴貞
鳴瀬藏人晋高
桐平捨五郎

兼壽家督相續の本心を飾つて話す(一時の事のみ、やがては葉叢丸に渡さんとするなりといふ)、先君の甥谷地の

白鳥十郎の謀叛、鳴瀨、桐平に命じ偵察せしむ。主膳に敵國に對する手當を怠るなといふ。主膳忰晴貞へ京都勸學院の留學をつゞける願を許す。葉叢丸の浮かぬのをとがめ、重ねてその本心なるものを話す。

(序の三)芹戶の前も、葉叢丸に自分が乘壽と婚せしは葉叢丸のためといふのでいろいろ敎訓する。葉叢丸、漸く自分は別に家督のことを考へてゐるのではないから宜しく敎育をたのむといふ。乘壽喜んで一同と奧に入るそこへ虎長が出て夜前の幻のことをいふと、葉叢丸も自分も心に思ひ當ることがあるといふので、夜半に今一度實驗することにする。

(序の四)晴貞、出立につき實苅屋姬に敎訓する、葉叢丸との戀仲はあきらめよといふ、そこに主膳も出て晴貞のいふのを是認し、葉叢丸との仲を餘り深めぬやう意見する。

(序の五)葉叢丸と亡靈の出會ひ

(序の六)亡靈、葉叢丸に乘壽の奸惡を告げる。葉叢丸、虎長等に復讐の助力をすることを誓はしめる。

(第二場)晴貞出發。主膳、主家横領の大望をチラと示す。

(第二續)主膳、重ねて實刈屋姬を戒め葉叢丸を夫とも主とも思ふなといひきかす。實刈屋一人で心を苦しめる。

(第二續)葉叢丸發狂の場

(第二續)景事　葉叢丸そら物狂ひ

(第三場)葉叢丸、實刈屋の出會ひ（乘壽、主膳覗見）

(第三續)劇中劇

(第三續)奥殿、兼壽、兄の亡靈に責められて懺悔す、葉叢丸はそれを立ち聞き、兼壽の犯罪を確かめる。

(第三續)葉叢丸、母を諫める。主膳を斬る。

(第四場)兼壽怒つて葉叢丸を手討にせんとす、芹戸の前これを止め、京都より禮之亟晴貞を呼び返し、復讐の内意を授け、彼の手で葉叢丸を取除けるやう勸める、兼壽これに同意する。

(第四續)實刈屋が狂亂、葉叢丸にあはんとて參殿、皆で止めてあはせぬ、晴貞歸國。

(第四續)晴貞、父のため復讐の意を示す。

(第四續)實刈屋入水、唱歌に曰く

「君が代に〳〵あふ隈川と賴みてし賤が心もうもれ木の氷の下にとけそむる春まつかひもなく千鳥ともに渡らむ瀨をはやみ碎くる水の玉の緒もたえなば絕ね元の水あふは別れとしら川の關を隔ての憂き世のさまや」

(第五場)墓掘の場。

(第五續)復讐のたくみ、葉叢丸に毒酒を與へる手筈。

(大切)芹戸の前、わざと葉叢の代りに毒酒をのみて死す、晴貞手負ひ、葉叢丸、兼壽にとび掛りて讐を復し、晴貞をして介錯せしむ。晴貞、葉叢丸の介錯を終つてこれも切腹して死す。

以上の梗概で見ても大體察しがつくと思ふが、全體が餘りに多く日本化されてゐるので、知つて讀むと一應は面白くよめるが、讀み樣によると、全然在來のお家騷動物と同一なやうにも受け取られる恐れなしとしない。又

魯文の心算からいへばそれを狃つたのかも知れない。然しこれでは折角「英國狂言」を紹介するといふ觸込みが效かなくなる。かういふ結果になつたのも、一つは、魯文の手記した聞書が極めて簡單なものであつたところから、想像でいろいろと不足を補なはなければならなかつたので、かう特に日本臭いものになつたのであらう。此の點では、一應原作に依つたらしい十八年の『何櫻彼櫻錢世中』の方が確乎としてゐる。

然し先づ先づ魯文の手際としては、『ハムレット』をを此の位にこなしたのでも（大體の掴み方がピントを外れてゐないといふ點で）上出來とほめていゝであらう。

私記　明治初期沙翁書志源流

左記は専門的探究の餘に成つたものではなく、眞の手記、私的備忘錄の類であるので、私記と冠した。

従つて記事は出來る限り簡明を旨とし、說明は成るべく省略する。

大體は私の手控覺帳からの拔萃を中心としてあるが、書志乃至年譜としての體裁を保つ上から、諸家の同種の年表書目等を參照して年代的連絡を試みたところがある。

私の未見のものは、明白にその旨標示した。

明治三年　『西國立志編』第一編十二に「舌克斯畢（シエクスピア）ノ事」（傳記なり）、第九編三にもシェークスピアへの言及があり、第十篇の初頭には『ハムレット』第一幕三場からの引用句がある。

明治四年　西周『百學連環』中詩歌の部にシェークスピアの名が見える。

明治五年　東京日々二二五號社說らしき部分にシェークスピアの引用句あり

長崎エキスプレス一二一號に『ヴェニスの商人』及び『冬物語』よりの引用あり

星亨譯『偉績叢傳』卷七に「英吉利國文士シェキスピール」傳といふものあるも、卷七は未刊なる如し。

明治七年　石村貞一『泰西名言』に『ハムレット』よりの引用あり

「ヨコハマ・パンチ」に『ハムレット』第三幕一場の有名な獨白の飜譯引用あり（口語體）

明治八年　「平假名繪入新聞」に『ハムレット』の梗概載る（魯文執筆、三回で不評につき中絶）。

東京日々九〇九號に『シイザー』第三幕よりの引用あり。

明六雜誌第三十九號「西學一班」（中村正直）の中にシェークスピアの名見ゆ。

明治九年　東京日々（九月二十七日）悄佞説中に『シイザー』第二幕の引用あり、且つ『シイザー』を讀みて感ずるところありてこれを書ける由斷りあり。

此の年開成學校一覽の課目中に「シェクスピール」の一項目あり、教授はサンマルス（サンマース）及び外山正一云々。

明治十年　「民間雜誌」第九八號、九九號に『ヴェニスの商人』の梗概を飜案せる『胸肉の奇訟』あり。

東京日々一八〇六號社説に『タイタス・アンドロニカス』（第三幕第一場）よりの引用あり。

明治十一年　此の頃の河竹默阿彌の手記に『ハムレット』梗概あり、福地櫻痴談によつて筆記せしものとかいふ。

東京大學文學部二年の教科書中「シェークスピール文集」あり（ホートン教授）

クラーク註『ヴェニス商人』（東京大學文學部出版）（山口氏書目・未見）

明治十二年　和田垣謙三『李王』（『リヤ王』の漢文譯）

西周譯『心理學』中シェークスピアよりの引用數箇所あり、就中有名なるは『ヘンリ四世』第一部第一幕第三場よりの引用とす。（七五調譯）

吉田五十穂譯纂（實は尺振八譯稿といふ）『伊呂波分西洋人名字引』四六八項に「シェークスピーヤ」の略

傳あり。

「日本一驥尾團子」第二十七號「紐約繁昌記」中劇場の部に、『ハムレット』の梗概紹介あり。

此年東京大學教科書中シェークスピアの作物多し、(文學部)『シイザー』、『ヴェニスの商人』、『ハムレット』、『リヤ王』、『リチャルド二世』、『マクベス』等の名見えたり。

明治十三年　『西哲小傳』(十二年「西洋人名字引」改題)中にシェークスピア略傳。

乾立夫「泰西名士鑑」上卷四に『シェークスピーア』傳あり

此の年東京大學文學部各學年教科書中シェークスピヤ關係物は、『シイザー』、『ヴェニスの商人』、『テムペスト』、『リチャード二世』、『マクベス』、『ハムレット』等。

「伊勢古事記日曜叢誌」第十七號に『ロミオとジュリエット』の紹介ありといふ(未見)。

「風鳴新誌」第十八號廣告によれば『泰西奇聞愛姫譚』といふもの刊行の由見ゆ、ラムの『物語』による『シンベリン』らしきふしあり。

山崎爲德氏同志社にてシェークスピアを講す。

明治十四年　外山正一『ハムレット』譯稿「諸業無常・靈驗皇子之仇討」は此の年乃至此の翌年の筆なるべし。

東京大學文學部の英文學參考書に、『クレーク氏註シイザー』、『クラーク氏及びライト氏ハムレット』『同ヴェニスの商人』、『同リチャード二世』、『ライト氏リヤ王』等、教科書には『シイザー』、『ハムレット』、『ヴェニスの商人』等。

明治十五年　東洋學藝雜誌第六號（三月）倘今居士（矢田部良吉）『ハムレット』中の一段、報知新聞（三月二十五日）、ゝ山仙士『ヘンリ八世』中の一段（ウールゼイ獨白、）此年八月刊『新體詩抄』中には、以上の二篇の外にシェークスピア物としては『ハムレット』中の一段（ゝ山仙士）『ヘンリー四世』中の一段（同）あり。

竹内節『新體詩歌中』にも同じもの收載されてゐる。

此の年東京大學文學部敎科書中に『シイザー』、『ハムレット』、『リヤ王』等あり。

高田早苗東京專門學校にてシェークスピアを講す。

明治十六年　河島敬藏譯『ジュリアス・シーザル』發表（日本立憲政黨新聞）。此の後河島氏には『ハムレット』、『テムペスト』、『眞夏の夜の夢』、『ジョン王』、『オセロ』等の試譯あり。

『春宵夜話』（後に『――閑話』）、翠嵐生として『冬物語』、『お氣に召すまゝ』、『ヴェロナの二紳士』、『ハムレット』の四篇をラムによりて紹介す。（郵便報知新聞）

『佛國某州領主麻吉侯情話』（翠嵐先生）は右『春宵夜話』中第二の分の單行本である。

『人肉質入裁判』（井上勤）、ラムによる『ヴェニスの商人』の紹介。

明治十七年　『自由太刀餘波鋭鋒』（坪内雄藏）は『シイザー』の全譯。

『花月情話』（莉亭香水、函右日報）は『ロミオとジュリエット』をラムによつて紹介せるもの。

『花間の一夢』（九皐生、報知新聞）はラムによりて『シンペリン』を傳へしもの。

東京大學文學部敎科書中シェークスピアの諸作あること依然たり。

明治十八年　『斑烈多物語』（坪内雄藏、中央學術雜誌）、中絕。

『何櫻彼櫻錢世中』（宇田川文海、朝日新聞）は『ヴェニスの商人』の飜案なり。

『落花の夕暮』（九皐生、報知新聞）はラムによる『ロミオとジュリエット』の紹介。『榮枯の夢』（同）は同じくラムによる『マクベス』の紹介。『雨後の花』（同）は同じくラムによる『末よければ凡てよし』の紹介なり。

「學生學術雜誌」二號『マクベス』

日本文學會「文學雜誌」六號以下『マッカベス』云々。

此年英語會（六月）にて會員（神田乃武、井上十吉等）『ジョン王』の朗讀會を試む。

明治十九年　河島敬藏譯『春情浮世之夢』（『ロミオとジュリエット』全譯）

河島敬藏、小宮山天香『羅馬盛衰鑑』（『シイザー』）

竹内余所次郎『西洋歌舞伎種本』（ラム『リヤ王』）

品田太吉『セキスピヤ物語』（ラム『ハムレット』、『リヤ王』、『ベロナの二才子』、『マクベス』）、卷頭に「セキスピア」傳あり。

叢菊野史（仁田桂次郎）『泰西奇談』の中『冬物語・因果物語』（ラムによる、『因果物語』は『メジュア・フォアメ・ジュア』）、

外山正一『演劇改良論私考』にシェークスピヤの劇についての言及あり。

『葉武列士倭錦繪』（假名垣魯文飜案、東京繪入新聞）、明治八年の紹介の蒸し返し物といふ。

教育雜誌第三號以下「舌克斯畢の傳」

明治二十年　木下新三郎『西洋娘節用』は原曲によつて『ロミオとジュリエット』を傳へたもの（抄）。

同人『哀別奇遇・誠之鏡』（『ペリクリイズ』）

禿山居士『ハムレットの譚』（中央學術雜誌）

『カゼリン婚姻奇話』（教育雜誌）はラムによる『じやじや馬馴し』の紹介。

「轉合笑話」（土陽新聞、「間違ひの奇劇」）

管城子『白金の指環』（土新聞、『シンベリン』）

架空道人『ししりい物語』（學藝之世界、『冬物語』の梗概）

繪入自由新聞「文章三傑小傳」（シェークスピア、ミルトン、スコット）

暘城居士「セクスピア傳」（中央學術雜誌五十二）

文科大學ルソー教授「歐洲演劇の話」（此の中沙翁傳を詳しく紹介する）。

明治二十一年　わたのとろみ『みなれざを』（『末よければ凡てよし』）

渡邊治「鏡花水月」（『間違ひの喜劇』）

板倉與太郎『豪傑一世鏡』（『コリオレーナス』）

山田美妙『正本はむれつと』（いらつめ）

井上勤『幽靈』（ラムによる『ハムレット』）

叢菊野史「泰西奇談」の中『女房持虎の卷』（ラムによる「じやじや馬馴し」）、同『嵐の卷』（ラムによる『テムペスト』）、同『智孟物語』（ラムによる『アゼンスのタイモン』）

鯖江小漁『豪華之夢』（學藝之世界、『アゼンスのタイモン』、これもラムによるものらしい）。

柳香瘦僊『情悔の波瀾』（未詳、『冬物語』の作り替へといふ）。

宇田川文海『四つの緖』（大阪朝日、『お氣に召すまゝ』の飜案、後に『汝所好』と題して單行）。

文苑英華第六號以下「セキスピア傳」（英國詞林傳第一）

羅馬字雜誌「リイア王」

イーストレーキ「馬琴及シェークスピール」（講演）

時事新報「英國にシェークスピヤなし」（ベーコン說の紹介）

報知新聞「しえくすぴあ氏」

「明治文庫」首卷『活人形』（『冬物語』の梗概）

明治二十二年「哲學雜誌」三十一號『シェークスピヤかベーコンか』

『ウィリアム・セーキスピアの傳』（日本大家論集第三十）

香夢樓緣「作者身の上話」（文庫十八號以下、西キスピア傳）

S・S・S「於母影」の中「オフェリアの歌」（國民之友附錄）

明治初期飜譯文學年表

一　本表は、一の私記ともいふべく、私の手許にある備忘手帳から主要なる飜譯文學を書き拔いたものである。

一　此の種の年表は一人の力では完成を期し得ない、研究家諸氏の協力を仰ぐ。

一　本文中解題してある分については、說明を成るべく簡略にした。

一　明治十年以前の分には一二、純文學書といへぬものもある。これは一つは年次を揃へるためにした點もあるが、諒承されたい。

一　發行地中特に明記してないのは、東京であると記憶されたい。

一　同一譯物中、先づ新聞雜誌に掲載されたものは、それを最初に載せた、又數冊に亘るものはその第一冊の刊行年月の條にのみ記し、次卷以下の刊行の條には載せぬ。

昭和十年一月　　柳田泉

明治元年

全世界　未來記

和蘭チオスコリデス著「アンノ、チウインチフ、ホンデルト、フェイフ、エンセスチフ、エーン、ブリッキ、インチ、ツーコムスト」といふ由、公私雜報第七號に見ゆ、千八百六十五年ウトレック刊行、二百年後即ち「紀元二千六十五年、一名未來の瞥見」といふ。愛梅主人譯稿云々、愛梅主人とは近藤眞琴の號である、これは即ち十一年刊「新未來記」と同じものである。

明治二年

西洋易知錄　七　河津孫四郎　知新館

英國大學士科利耳（コルリール）(Collier) 氏著「ゼグレートイヘント、オフ、ヒストリイ」と云ふ（歷史綱鑑）、千八百六十七年刊行、各卷の附記中、西洋文學者の略傳多し。

明治三年

西國立志編　中村敬宇　靜岡 木平讓

原本スマイルス「セルフ・ヘルプ」（自助論）此の書の內容には英文學その他西洋文學に關係するもの可成り多く含まる。

明治四年

西洋夜話　五　寧靜學人（石川彝）　養愚堂

主として所謂ピイタア・パーレーの「萬國史」によりて西洋古代歷史の一夕話を試みしもの。

明治五年

魯敏孫全傳　二　齋藤了庵　香芸堂

高田義甫校、鐵線書屋藏板。

偉績叢傳　四　星亨　萬卷樓

此の書の文學之部といふは未刊なるらしきも目次を見ればホモル（ホーマア）、ベーコン、ウヲルテイル、シヤキスピール等の文學家傳ある筈。

倭國字西洋文庫（なほれおんいちだいき）　六　假名垣魯文　紅木堂

四編二冊版下本自藏す。その書名本來は「やまとがな

せいやうぶんこ」とよむなるべし。

明治六年

通俗伊蘇普物語　六　渡部溫　同藏板

明治五年官許とあるも初篇に明治六年二月の時日を書せる序文あり、六年刊なること明白なりとす。

其粉色陶器交易（そのいろどりたうきのかうえき）　三　佐橋富三郎作　京都近藤

西國立志篇卷之二、パリッシーの事の脚本化せるもの。

鞋補童教學（くつなほしわらべのをしへ）　三　佐橋富三郎作　同

西國立志篇卷十二ガスリーとパウンヅの事の脚本化。

稚兒話の友　一　省己遊人著述　中外堂

「イソップ」と聖書からの抜抄めく話いろいろ。

訓蒙話草　二　福澤英之助　同出版

「イソップ」の抄譯。

西國童子鑑　二　中村正直　同人社

一千八百七十二年美國ハルペル氏刊行云々。

（卷一）詩人の條にスコット、ポープ、（卷二）史家の條にギボン、マッキントッシュ、（卷三）評論家の條に博士ジョンソン、ロード・ジェファアリイの傳あり。

明治七年

珊瑚の虫　一　前田泰一　大阪寶文堂

ユニオン・リーダアの抄譯、教訓もの。

幼童教のはじめ　二　須田辰次郎　甲斐織衛　萬笈閣

必ずしも文學といふにあらず訓話めくもの。

西稗雜纂　未詳　中村正直　同人社

卷二まで自藏す。中村氏が平生讀みし洋書中感せし逸話めくものを手當り次第譯出せしといふ。漢文也。

西洋孝子流別奇談　二　小林謙吉　大阪寶文堂

開化進歩後世夢物語　二　上條信次　奎章閣

奎章閣は卽ち山城屋也。

明治八年

開巻驚奇 暴夜物語　二　永峯秀樹　奎章閣

新約全書評駁　三　田島象二　任天書院

「葉武列士」筋書　假名垣魯文　東京繪入新聞

此の年八月「路加傳」出版。
以後明治十三年に及んで「新約全書」出版完成。

明治九年

天路歴程　村上俊吉　七一雜報

九年四月七一雜報第十五號より同六十六回連載。
明治十二年刊。

漢譯伊蘇普譚　一　阿部弘國訓點　青山清吉

明治十年

回世美談　未詳　山田正隆譯　同人出版

デフォー「ロビンソン・クルーソー」、同年十二月十三日朝野によると第一回分（一册か二册）は發兌せることと確實なりとす。

胸肉の奇訟　無署名　民間雜誌

シェークスピア「ヴェニスの商人」の梗概飜案。

蘆騒氏民約論　服部德　有村藏板

明治十一年

英國

龍動繁昌記　五　丹羽(織田)純一郎　坂上半七

服部誠一閲、原著は英國ジョン・マレー云々、文學書といふのではないが、織田氏の處女譯といふのでこゝに掲げる。

歐洲奇事 花柳春話　五　丹羽純一郎　坂上半七

北歐鬼神誌　一　薗鑑　文部省

チャンバァ百科全書の中。

繪入通俗民權百家傳　三　島田三郎抄譯　萩原乙彦演義　薔薇樓

二編本多省三譯、三編肥塚龍譯、二編三編は洋本四六版一册。

智氏家訓　三　永峯秀樹　種玉堂

佛國

新説 八十日間世界一周　二　川島忠之助　同人出版

ジユール・ヴエルヌ原作。同名、發賣丸家善七、山中市兵衞、後篇は慶應義塾出版社で出版す。

へねろむ物語　二　長澤正毅　渡部溫

版權書目第七號に見ゆ、第十六號返納。原本フエネロンの何か未詳、「テレマツク」か又は「フエーブル」か。

和蘭

新未來記　二　近藤眞琴　青山

明治元年の譯なり。和蘭人ジオスコリデス「紀元二千六十五年」といふものゝ由。

明治十二年

英國

歐洲奇話 寄想春史　三　丹羽（織田）純一郎　山中

ロード・リツトン「ポンペイ最後の日」服部誠一閲。

李王　一　鶴莊居士（和田垣謙三）　未刊稿

シエークスピア「リヤ王」。稿本（英語青年第四十三卷第十二號參照）散文漢譯の梗概本なりといふ。

九死一生 魯敏孫漂流記　橘園迂叟　驥尾團子

天路歷程　一　佐藤喜峯　十字屋

七一雜報に出し村上氏譯を纏めしもの。原本は支那譯天路歷程也。

父子奇遇 白浪艶話　小川漁史　驥尾團子

ロード・リツトン「ポール・クリツフオード」

「ハムレツト」梗概　同

紐約繁昌記、「劇場」の項中。

「人間萬事金世中」　河竹新七記　歌舞伎新報

ロード・リツトン「マネー」、福地櫻痴より聞きしもの。

此の前後歌舞伎新報所載西洋劇梗概左の如し。

「ムエロステン」の「ダッチェス」婦人
「ドートル、ヲフ、ソルジュルス」
「マダム、オーゴット」
「ブラバンのヂョヌビエーブ」婦人

西洋穴探　三　加藤政之助　慶應義塾出版社
初編は、米人ダニエル・ジョセフ・キルワン「龍動雜記」より抜出、二、三篇は　ジョセフ・マツケーブ「ニューヨークの光明面と暗黒面」より抜出。(二、三篇は十三年)。

西洋烈女傳　二　宮崎國嘉　石川錦森堂
エリザベス・スターリング「ノーブル・デイツ・オフ・ウーメン」

西國立志編列傳　一　橋爪貫一　六合書房
ミル、チスレーリ以下二十八人物の小傳、中に文學者數名あり(シルレル、バアンズ、ジョンソン、ゴールドスミス、マッカーシイ、ウオーヅウオス等)

修辭及華文　一　菊池大麓　文部省
チャムバア百科書中「レトリック・アンド・ベルレツタア」の項。

佛國

歐洲小說 哲烈禍福譚　八　宮島春松（ハルキ）　太盛堂
フェヌロン「テレマック」冒險譚、假名垣魯文序、三浦義方校(後魯文校)

西洋滑稽 三笑人　一　山田保抄譯　同人出版
原書はフランスにて出せし滑稽借屋の奇談云々。未詳

明治十三年

英國

鷲りバ兒回島記　一　片山平三郎口譯　九岐晰筆記　薔薇樓
スウィフト「ガリヴァ旅行記」、小人國の部のみ。
本文「兒」字脱す、「兒」字あるを正しとなす。

春風情話　一　橘顯三(坪内雄藏)　中島精一
スコット「ラムマアムーアの新婦」、第一編のみ、中島氏は慶應義塾出版社の代表。

開巻驚奇 龍動奇談　一　井上勤　德島 世渡谷

ロード・リツトン「ストレンジ・ストーリ」

西哲書行錄　一　松井恕助　同人

パアシイ「アネクドーツ」、刊否未詳。

格蘭氏傳倭文賞　九　假名垣魯文　金松堂

グラント氏の傳記を稗史戲作化せるもの也。

佛國

二萬里海底旅行　一　鈴木梅太郎　京都 山本

ジユール・ヴエルヌ「同名」、半紙本和裝といふ。

九十七時二十分間 月世界旅行　十　井上勤　大阪 二書樓

ジユール・ヴエルヌ「地球より月界へ」、初め分册十、十九年合本刊行。

日本美談　一　前田正名　北島

忠臣藏をフランス譯にして、それを又日本譯にせるもの、フランス文は前田正名氏のものにユーディット・ゴーチエーが手を入れしと傳はる。

露國

西洋歌舞伎春の夢　皆夢樓三光　伊勢古事記 日曜叢誌

ロシヤ物なれど、可成り古き時代の物語らし。飜譯不完全にて原作が果して脚本か小說か不明也、主人公ダニシエツプ、女主人公アンナ、リーデア姫云々といふ人物也。

獨逸

瑞西獨立自由の弦(ゆづる)　全廿　齋藤鐵太郎　泉增吉

シルレル「ウイルヘルム・テル」、全篇の刊否は未詳なるも、一册は出たる如し。

未詳

月世界遊行日記　一　莊司晋太郎　開成舍

ウインナの人マルメルスが月世界に上りて、月界の王と會ひ、政治その他を問答すること、及びマルメルス傳といふものより成る。此の傳は小說にあらざる如し（政治にては君民同治を可とするなれど、いさゝか政治的イデオロギーあり）

明治十四年

英國

諸業無常・靈験皇子之仇討　外山正一　稿本
後に「ゝ山存稿」に收まりしもの。恐らく前後の事情より見て此の年か此の翌年かに試譯せしものにはあらぬか。（本書沙翁文獻篇參照）。

昔ゆうぜん荒夢物語　十　上田秀成　同人
ロード・リツトン「ユージイン・アラム」、刊否未詳、版權書目による。

春江奇緣　三　高田早苗　同人
スコット「レデイ・オヴ・ザ・レーク」、この時は版權を得しのみにて出版されず。

米國奇談　春陵情史　某新聞
後に「近世米國奇談」と題せる探偵物語也。

情況證據誤判錄　一　高橋健三　司法省
エム・エヌ・フヒリツプ「著明なる情況證據判例」。

政治論略　一　金子堅太郎　元老院
文藝にあらぬも英文學史上の古典たるエドマンド・バアクの「フランス革命論」その他を收めてあるので收載す。

未開國奇聞　一　山田義容　青山忠雄
第二編は出でざりしものゝ如し。城慶庭が英國より持ち來りし本なり。

佛國

佛國情話五九節操史　三　松岡龜雄　山梨温故堂
アレキサンドル・デユマ「四十五人の近衞兵士」

北極一周　八　井上勤　望月誠
ジユール・ヴエルヌ「大氷原」といふものゝ由、刊否未詳。恐らく刊行せられざりしもの。

地中紀行　十　織田信義　同人
ジユール・ヴエルヌ同名の作、刊行せざりしものか。

伯爾土姿繪　二　水谷由章　岩永氏

リシュブールグ氏作「ル・ポルトレー・ド・ベルト」(一八七九年)といふものゝ由。

獨逸

放鳥古巣緣　山賀蘇逹　麒尾園子

原本その他一切未詳。

合集

魯帝弑逆記　二　大久保常吉　漸進堂

此の件に關して諸新聞に出し報道類を編集せしもの。

西國烈女傳　一　田島象二　弘令社

一種の編輯もの也、第二編は豫告のみにて刊行せられざりしものゝ如し。十九年改題して「婦女立志歐洲美談」といふ。

未詳

歐洲情譜 南柯の榮夢　山田義容　青木忠雄

明治十五年

英國

良政府談　一　井上勤　思誠堂

サア・トマス・モーア「ユトウピヤ」、政治的イデオロギイあるべし。

西洋夫婦事情　一　加勢鶴太郎　思誠堂

チャールズ・ヂッケンズ「スケッチエス・バイ・ボス」の中より抄出せるものと見えたり。

英國情史 蝶舞奇緣　二　桑野鋭　九春社

一八四八年米國ヒラデルヒヤ發行「アルビニア・オア・ヤングマザア」(ヨングモーザル)といふものゝ由。

鴛鴦奇緣 操の綿襷　鼓腹諧史　面くろだぬき

英國奇談 毒婦歐毒勒小傳　土陽新聞

ミス・ブラッドン「オードレイ夫人の祕密」

繪入 西洋天一坊　二　城慶度　青木氏

此が初版、假綴紙表紙二册もの。英國十九世紀の有名の疑案、チクボーン事件の聞書を譯せしもの。

薫兮東風英軍記　一　戸田鐵研　歌舞伎新報社

これは著作で譯ではないが附記して置く。アルフレッド大王の傳記の一節を劇化せるもの、政治的イデオロギイを含む。

佛國革命自由黨魁 眞段郎蘭傳　上一　門田平三　同人

米國アボット氏「ヒストリー・オブ・マダム・ローラン」（一八六〇年ニューヨーク版）。

世界婚姻奇談　一　高垣守正　巖々堂

米人フート氏の「婚姻史」より摘譯す。

印度顚覆史　上一　山田良作　博聞社

ロード・マカウレー「ヘスチングズ傳」。

西洋奇談 富貴の種蒔　一　江川勝信　績文舍

シュキル氏世界史中、ペルシヤ王キロス（サイラス）の事蹟を抄せるものとか。

雄辯美辭法　一　黑岩大（涙香）　輿論社

カッケンボス「修辭學」の抄譯。

譯錫磊雲雀詩　末松謙澄　報知新聞

佛國

壓制政府ノ顚覆　澗松晩翠　政理叢談

一名「自由ノ恢復」、一七九一年パリにて所演の脚本といふ、アルニー・ド・ジエルヴイル作云々。政治的イデオロギイを含むもの。

佛國革命起源 西洋血潮小暴風　一　百華園主人　繪入自由出版社

デユマ「一醫師の回想錄」百華園は櫻田百衞氏。第一編一册にて禁止となる。政治的イデオロギイあり。

佛蘭西革命記 自由乃凱歌　二　宮崎夢柳　同

デユマ「アンジユ・ピトウ一名バスチイユ奪取」、政治的イデオロギイありと知るべし。

虚無黨退治奇談　一　川島忠之助　同人出版

ポール・ヴエルニエ「シヤス・オウ・ニヒリスト」（虚無黨退治）といふもの。

吟行猶太人　譯者未詳　東洋學藝雜誌

ユージエイヌ・シユー「漂泊のユダヤ人」、第一集といふ。第一集「兩世界の極端」の最初のみ。

革命偉聞 勇婦テレーズ傳　河津祐之 小宮山天香　日本立憲政黨新聞

エルクマン・シヤトリアン「マダム・テレーズ」、卽ち後の「斷崖奇緣」の原譯、政治的イデオロギイを含む。

露國

魯國奇聞 烈女之疑獄　一　杣田策太郎　由己社

譯者は福島縣士族といふ。

魯西國虛無黨 寃枉乃鞭笞　一　宮崎夢柳　京都 駸々堂

譯にあらず、著作也、「烈女之疑獄」等を手本にして夢柳が書き上げしもの。

露國虛無黨事情　一　西河通徹　競錦書屋

伊太利

歐洲情譜 群芳綺話　一　大久保勘三郎　宮川

ボッカチヨ「デカメロン」(十日物語)抄譯、七話ありフランス譯よりの重譯なること、「ボッカース」等の後書にて明白である。

獨逸

哲爾自由譚　前一　山田郁治　甘泉堂

シルレル「ウイルヘルム・テール」原語譯也、政治的イデオロギイあり。

合集

新體詩抄　一　外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎　丸善

此の書は八分通りは譯詩である、沙翁、グレー、テニソン、カンベルなど。それでこゝに揭げて置く。

明治十六年

英國

歐洲戲曲 ジユリアス・シーザルの劇　無署名　日本立憲政黨新聞

河島敬藏譯、小宮山天香の文飾せるものといふ。

春宵夜話(後閑話)　翠嵐生　報知新聞

ラム「シェークスピヤ物語」の紹介、翠嵐とは恐らく藤田鳴鶴の戯號也。

○ウイントルス・テール

○As You Like It.

○ヴェロナの二紳士

○ハムレット

佛國某州領主 麻吉侯情話 一 翠嵐先生 春夢樓

前記「春宵夜話」中 As You Like It. の部を單行本にせるもの、繪入人情西基斯比耶叢書 No. 1。

西洋珍說 人肉質入裁判 一 井上勤 今古堂

ラム「物語」の中「ヴェニスの商人」、異版種々あり。

新政府組織談 一 井上勤 思誠堂

十五年「良政府談」の改題せるもの。

絶世奇談 魯敏孫漂流記 一 井上勤 博聞社

ダニエル・デフォー「ロビンソン・クルーソー」、孫を本文中に遜に記せるも、「孫」を正しとす。

通俗花柳春話 四 織田純一郎 坂上半七

龍動塔話 宮崎夢柳 政理叢談

ウィリアム・エンズウァース「ロンドン塔」、初頭少しにて止む。政治的イデオロギイあり。

歐洲新話 花月緣 無署名 大阪朝日新聞

二十年刊「斷腸花」の原譯、「斷腸花」の署名者は宇田川文海也、ジェームズ・スタックオーヅ「青年學生」といふものとか。

因緣奇遇 雨梨花春史 操竹女史 繪入朝野新聞

經烈英談 學びの友 江南橋史 芳譚雜誌

サウジイ「ネルソン傳」、江南云々は嶋崎湊といふ人也。

佛國

經世指針 鐵烈奇談 一 伊澤信三郎 白梅書屋

フエヌロン「テレマック冒險記事」自初至五篇。

魯曹(ルソー)內紋詳傳　栗原亮一　書物出版所

ルソー「懺悔錄」の譯なるべし、刊否未詳

蘆騷氏懺悔記事　小野衞門太　博聞社

前同原書。刊否未詳。

非開化論　一　中江篤介　日本出板會社

表題に DISCOURS SUR LES SCIENCES ET LES ARTS とあり、ルソーの有名な懸賞論文也。

月世界一周　一　井上勤　博聞社

ジュール・ヴェルヌ「月世界旅行」の續篇。

三十五日間空中旅行　七　井上勤　繪入自由出版社

ジュール・ヴェルヌ「輕氣球の五週間」といふもの。

維氏美學　二　中江篤介 野村泰亭　文部省

ユージェーヌ・ヴェロン「レステチク」

露國

露國奇聞 花心蝶思錄　一　高須治助　法木

ブーシュキン「大尉の娘」の抄譯。

雜

全世界(アラビヤンナイツ)一大奇書　十　井上勤　報告社

初版は分册十、後合册二、更に合册一となる。

合集

新譯 泰西詩選　二　未詳　金花堂

明治十七年

英國

自由太刀餘波銳鋒　一　坪內雄藏　東洋館

シェークスピア「ジュリアス・シイザー」、別名該撒奇談。

歐洲奇聞 花月情話　菊亭香水　函右日報

シェークスピア「ロミオとジュリエット」の散文體紹介也。小栗貞雄氏より聞けるものを書きしなりといふ六回中絕。

花間の一夢　九皐山史　報知新聞
「春宵夜話」の續篇、ラムの「物語」中「シンベリン」。九皐は藤田鳴鶴の別號、これの序に、かつて「春宵夜話」を譯した旨ことわつてゐる。

泰西活劇 春窓綺話　二　服部誠一　坂上半七
これが即ち十四年に出願せし「春江奇緣」の改題されしもの。スコット「レディ・オヴ・ザ・レーク」

政黨餘談 春鶯囀　四　關直彦　同
ビコンズフヒールド「コニングズビイ」、政治的イデオロギイあり。

一滴千金 憂世之涕涙　三　宮崎夢柳　成文舍
渡邊壽彥編輯、米人エドワード・キング「ザ・ジェントル・サヴェージ」といふもの、十六年秋自由新聞所載、政治小說也。

秀才奇勳 雪の下萠　無署名　開花新聞
須藤南翠か、原作原著者ともに未詳。トルコの立憲政治完成に關する小說 政治的分子あり。

佛蘭克林 金言玉行錄　一　山田邦彥　杉本
フランクリン「自敍傳」

佛國

佛國革命 修羅の衢　坂崎紫瀾　自由新聞
ヴィクトル・ユーゴー「九十三年」

佛蘭西太平記 鮮血（ちしほ）の花　宮崎夢柳　自由燈
デュマ、「西洋血潮小暴風」の後半。

巴里情話 椿の俤　草廼戸主人　函右日報
少デュマ「椿姬」を全譯せんとの試みをせるもの。

開巻驚奇 第二十世紀未來誌　巻之一　一　富田兼次郎 酒巻邦助　同出版
アルベール・ロビダー「第二十世紀」、稀本の一。

英國太政大臣 難船日記　二　井上勤　繪入自由出版社
ジュール・ヴェルヌ「チャンセラァ號」、此の題號より太政大臣云々といふ角書が生ずる。分册二で中絶。

自由の征矢 (白露革命外傳) 一 井上勤 繪入自由出版社
ジュール・ヴェルヌ「マルタン(マーチン)・ボス」

海底紀行 (六萬英里) 一 井上勤 博聞社
ジュール・ヴェルヌ「海底二萬リイグ」。

海底旅行 (五大洲中) 二 太平三次 四通社
右同、ヒルデブランの銅版畫あり、これが面白い。

獨逸

狐の裁判 (獨逸奇書) 一 井上勤 繪入自由出版社
ゲーテ「ライネッケ・フクス」の散文譯也。

露國

鬼啾啾 (虛無黨實傳記) 宮崎夢柳 自由燈
セルギウス・ステプニャクの「地底のロシャ」を元として集譯補述せるもの、十八年十月刊。

露國安那物語 坂崎紫瀾 土陽新聞
十五年「虛無黨退治奇談」を更に小說化したるもの。

雜

露國水滸傳 (蓋世偉聞) 無署名 吾妻新誌
シベリア征服者エルマックとゴールビの物語。原著者原本未詳。

遠征奇緣 (名將佳人) 小野次郎譯 三木愛花閱 共隆社
右の單行本。

大日本發見錄 (西洋奇說) 一 河原英吉 繪入自由出版社

女俠全傳科戶風(しなとのかぜ) 一 松村操 開成堂
ジャンダークの傳記を小說化せるもの、卷の一にて中絕。

佛國美談 (回天偉蹟) 一 栗屋關一 小笠原書房
ジャンダークの傳記也。

西洋夢浮橋 虎眠庵鴻甫 芳譚雜誌

明治十八年

英　國

何國皇子 班烈多物語　坪内雄藏　中央學術雜誌

シェークスピア「ハムレット」、文體は院本體、第一幕にて中絶。

落花の夕暮　九皐生　報知新聞

ラム「物語」中「ロミオとジュリエット」

榮枯の夢　同　同

ラム「物語」中「マクベス」

雨後の花　同　同

ラム「物語」中「末よければ總てよし」

マッカベス（拔萃）　無署名　文學雜誌

ラムによるものといふ。

何櫻彼櫻錢世中（さくらどきぜにのよのなか）　小宮山天香立案 宇田川文海執筆　大阪朝日新聞

シェークスピア「ヴェニスの商人」の飜案。

壽甘德奇談　一　横山鉎呂久　内田彌八

スコット「祖父物語」といふもの、スコットランドの古史譚。

開巻悲憤 慨世士傳　前一　逍遙遊人　晩青堂

リットン「リエンジイ」前半のみ。坪内雄藏。

諷世嘲俗 繫思談　二　藤田鳴鶴 尾崎庸夫　報知社

リットン「ケネルム・チリングリィ」、實は朝比奈知泉の譯せるもの。初め報知新聞に連載す（一月より）、政治的イデオロギイあり。

印度征略史　一　末廣重恭　同盟書肆

ロード・マカウレー「クライヴ傳」

英國名士 回天綺談　二　加藤政之助　大阪岡島

英國第十三世紀政治改革顛末（マグナカルタ發布）

擬紫西洋天一坊　一　早川熊吉編　眞盛堂

十五年版の再版改題もの、早川は編輯せるのみ。

那翁外傳 閨秀美談　一　秋庭濱太郎　文事堂

アボット氏「ジョセフィン皇后」

羅馬後 落葉奇談　榮華の夢　無署名　繪入自由新聞

ウィルキイ・コリンズ「アントナイナ」といふもの、初頭のみにて中絶。

西洋 人情話　英國孝子ジョージスミス之傳　八　三遊亭圓朝　速記法研究會

原本未詳、飜案物。

佛國

佛亂 餘聞　霜夜の月　無署名　自由燈

ユーゴー「九十三年」

拍案 驚奇　地底旅行　一　三木愛花 高須治助　九春社

ジュール・ヴェルヌ、同名の作。抄譯である。

情態 奇話　人七癖(吝嗇篇)　九　二愛亭花實 淡々亭如水　稽古堂

ユージェーヌ・ジュー「七大罪」のうち吝嗇篇を譯せるもの。全九卷迄刊行せること確實なれど以下不明、恐らく中絶か。

新編黄昏日記　一　天香道人閲 醒々居士著　駸々堂

少デュマ「椿姫」の飜案、小宮山天香の筆といふ。天香後年佛語を學んだといふから、此の時のは自身でやつたかも知れぬ。

薔薇の露　無署名　自由燈

宮崎夢柳の筆か、フランス共産黨青年首領ビゴーの傳なり云々。

伊太利

指環ノ裁判　山王下の木葉天狗　朝野新聞

ボッカチョの「デカメロン」(第一日の三話)

西班牙

歐洲 情史　玉薔薇　無署名　吾妻雑誌

フランス小説にて「欺かれたる詐欺人」といふ由なれど後に單行せる時セルバント氏の小説といつてゐるから、セルヴァンテスの小説のフランス譯からの重譯である。

露國

虚無黨 實傳記　鬼啾啾　一　宮崎夢柳　旭活版所

此の年十月の單行、從來間違つたものがあるから正して置く。

雜

歐洲忠臣藏　一　三木愛花　九春堂

スウエデン王「グスターフ・ヴァサ」が王政中興の事蹟である。

全世界一大奇書　一　井上勤　報告堂

これが合本の初め、此の年一册ものゝ異本あり、廣和堂刊。二十一年又別に一册ものあり、同盟舍刊。

明治十九年

英國

露妙樹梨戲曲　春情浮世之夢　一　河島敬藏　和歌山　耕文舍

シエークスピア「ロミオとジユリエツト」全譯、明治二十年再版あり。

沙士比亞戲曲　羅馬盛衰鑑　一　河島鶯林　小宮山天香　駸々堂

十六年立憲政黨新聞に掲し「シーザル」を單行せしもの。

葉武列士倭錦繪　假名垣魯文　東京　繪入新聞

「ハムレツト」の飜案。

セキスピヤ物語　一　品田太吉　同出版

ラム「物語」中、ハムレツト、リヤ王、ヴエロナの二才子、マクベス、シンベリン、ヴエニスの商人を含む。

冬物語・因果物語　合一　叢菊野史　同人

「泰西奇談」の第一、野史本姓仁田桂次郎。ラム「物語」より「ウインタアステール」と「メジユア・フオア・メジユア」を譯せるもの。

西洋歌舞伎種本　一　竹内餘所次郎　同人

ラム「物語」中「リヤ王」の條

王子羅西拉斯傳記　二　丈山居士　奎文堂

博士ジヨンソン「アビシニアの王子ラセラス」、居士本姓草野宜隆といふ。

政治小說　梅蕾餘薰　二　牛山鶴堂　春陽堂

スコット「アイヴァンホー」

驚天動地　經世偉勳　二　尾崎行雄　集成社

ビコンズフヒールドの傳記をいさゝか稗史めかしたるもの。

三英双美　政界之情波　四　渡邊治　同人

ビコンズフヒールド「エンヂミオン」

舟遊　無腸道人　有益雜誌

ヂッケンズ「スケッチェズ・バイ・ボズ」より抄出、道人は即ち磯野徳三郎也。

春鶯女史之傳　叢菊野史　稿本

マカウレー「マダム・ダルブレー」（ファンニイ・バァニイ女史傳）後に小金井きみ子の名で「しがらみ草紙」に出る。

英國小說　草葉の露　合一　ブラック口述　市東謙吉筆記　金港堂

ミス・ブラッドン「花と雜草」といふものゝ由。

亂咲自由之初花　無署名　自由燈

作者未詳。原著も未詳、チャールズ一世とハムプデンのことを材料とせしもの。政治的イデオロギイあり。

泰西女丈夫　朗蘭夫人傳　一　春の屋朧　大阪帝國印書會社

グレース姉弟著「社會の女王」中ローラン夫人の項。

貞操英國美譚　一　鈴田山人編輯　三村芳南校正　一光堂

譯述兼出版人、「鈴田かれ」とあり。原作は、E. J. Cooke. My Lady Pokahontas といふものゝ由。（豐田實氏調）

蘇國恢復　忠孝美談　尙白散史著　早瀨清

近世米國奇談　一　小川吉之輔編　駸々堂

十四年に某新聞に出し「米國奇談」の單行、譯者は春陵散史といふ。何人か不明である。

婦人地球周遊記　一　內田彌八　上田屋

ブラッセィ女史原著「日光號十二箇月航海記」といふものゝ譯なるよし（豐田實氏調）

天路歷程　一　ホワイト　横濱分社

ジョン・バンヤンの「ピルグリムス・プログレッス」

佛國

西洋風滑稽演劇 南北梅枝態　湖東生　讀賣新聞

モリエール原作なり云々。

志々利譚　空々生　報知新聞

「ジルブラス」(ルサージュ)の一節。空々は小栗貞雄氏

月世界旅行　一　井上勤　自由閣

十三年分册の合本もの、この版は二十一年迄に四版に達す。

空中旅行　一　井上勤　春陽堂

十七年分册の合本也。

世界進歩第二十世紀　三　服部誠一　大阪岡島

アルベール・ロビダー「第二十世紀」といふもの。十六年の初譯と此の版と關係あるが如し、初版を買收して文飾せしものにあらぬかと考へらる。政治的イデオロギイ少しあり。

修羅浮世鍛鐵場主　一　加藤紫芳　大阪日野商店

ジョルジュ・オネー原著「同名」

詩史偶評壯烈譚林　一　久松義典　鳳城書樓

フランス革命史の論評めくもの。

松操美人の生理　三遊亭圓朝口演　やまと

佛國小説で「生埋め」といふ題の小説の由。

伊太利

ボッカース翁十日物語想夫戀　一　佐野尙　丸善

「十日物語」第五日第七話、テオドレとヴィオランテの物語、カストルの佛譯からの重譯であるといふ。ピゴオの挿繪珍重すべし。

獨逸

一讀千嘆歐洲書生氣質　一　寸木田人　由己社

寸木田人は村田豐作、原著はシュレーデルの「スッテンテン・ウント・リュツオウェルン」といふものと、譯者の言明である。

禽獸世界狐の裁判　一　井上勤　春陽堂

十七年刊の再版。

美人薄命 麒麟夢妃兒德（キリムヒルド） 嘉豚房主人 通俗學藝志林

ニイベルンゲン・リイドの冒頭。

維廉得自由之一箭 中川霞城 大阪日野

此の年遂に刊行されず、後に二十三年に發表す。

滑稽演劇 支那皇女虎姫 霞城山人譯 通俗學藝志林

これは元來はイタリー人ゴッツィの作で、それをシルレルは獨逸譯をしたのである。

露國

通俗虛無黨形氣 冷々亭杏雨 大阪日野

杏雨は二葉亭長谷川辰之助、原本はツルゲーネフ「父と子」、刊行されずに止む。

泣花怨柳 北歐血戰餘塵 一 森體 忠愛社

トルストイ「戰爭と平和」、但第一篇數章のみ。

露國情史 スミス・マリー之傳 一 高須治助 高崎

十六年「花心蝶思錄」改題もの。

西班牙

西洋美談 政治之曙 一 曲川漁夫 成文社

スペイン革命に關係ある政治小說めくもの。

雜

伊會保物語 一 大久保常吉 春陽堂

初め繪入朝野に出しものといふ。

楊牙兒奇獄 一 神田孝平譯 成嶋柳北編 廣文堂

ドリウム氏 異國囘島奇談 一 加島斐彥 黎光堂

婦女立志 歐洲美談 一 田島象二 廣知社

これは十四年の「西國烈女傳」の改題せるもの。

一島未來記 一 小島泰次郎 木下賢良譯 堀口

小說にあらず、ロシヤのラリオノフ氏が日本領對馬の未來を豫定せしもの。

通俗海底事情 一 加島斐彥 黎光堂

志別士商人の物語 天峯居士 報知新聞

天峯は矢野文雄。原作未詳

印度太子舍摩物語　竺山樵客　報知新聞

明治二十年

英國

仇結奇乃赤繩 西洋娘節用　一　春畑小史　誠之堂

シェークスピア「ロミオとジュリエット」の抄譯、散文譯、小史は、木下新三郎、後赤司氏を名乘る。

哀別奇遇 誠之鏡　一　春畑小史　品田太吉

シェークスピア「ペリクリズ」抄譯。

轉合笑話　無署名　土陽新聞

シェークスピア「間違ひの喜劇」散文譯。

妙像奇遇 白金の指環　管城子　同

シェークスピア「シンベリン」散文譯。

嗹國皇太子ハムレットの譚　禿山居士　中央學術雜誌

ラムによるものらし。

カゼリン婚姻奇話　無署名　教育雜誌

シェークスピア「じやじや馬馴し」の梗概

情天恨地 ししりい物語　架空道人　學藝之世界

シェークスピア「冬物語」の梗概。

鵞瓈皤兒回島記　一　片山平三郎譯 九岐晣記　山東

十三年刊の再版。

南洋漂流 大人國旅行　大久保常吉　新古堂

「ガリヴァー」の大人國の部を抄譯せるもの。

新譯 魯敏遜漂流記　一　牛山鶴堂　春陽堂

デフォー「ロビンソン・クルーソー」抄譯。

サクソン王の名殘 ハロールド物語　一　磯野德三郎 井上蘇吉 酒井清藏

ロード・リットン「ハロード」抄譯。

文學小說 連理談　一　服部誠一　同盟書房

ロード・リットン「ユージイン・アラム」

昆太利物語　福地源一郎 塚原靖　東京日日

ピコンズフヒールド「コンダリニ・フレミング」、二十一年刊行。

雙鸞春話　一　牛山鶴堂　春陽堂

同氏「ヘンリエッタ・テムプル」。

政界冒險　大膽書生　荷香逸人　文學之花

同氏「ヴィヴィアン・グレイ」

政治小說　梅蕾餘薰　一　牛山鶴堂　春陽堂

十九年版の再版合本。

ルーモルグの人殺し　竹の舍主人譯　讀賣新聞

ポー「同名」

西洋怪談　黑猫　篁村　同

ポー「同名」

滑稽旅日記　井上勤　文學之花

クーム氏「シンタキス博士三遊記」といふ面白い本。

政界小說　妻の嘆　前一　井上勤　兎屋誠

ウィルキー・コリンズ「夫と妻」の前半、此年金櫻堂刊の別本あり。

戀慕と嫉妬　一　井上勤　廣知社

ルシー・ランダル・コンフヲルト「同名」の初頭少し。

贋貨つかひ　春のやおぼろ　讀賣新聞

アンナ・カサリン・グリーン女史「X・Y・Z」の抄譯。

深山木　饗庭篁村　讀賣新聞

ブレット・ハート「ムリス」

曼府の叛亂　塚原靖　東京日日

ウィリアム・エンズウァース「マンチェスタア・レベルス」

鮮血日本刀　二　本多孫四郎　金港堂

英國ノニム・フォーセット「クリスマス前夜の犯罪」といふ探偵小說。

一讀三嘆　三　尾崎行雄　尾崎行隆　金港堂

マクス・オレール「ジョンブルとその島國」

才子佳人驚話 歐洲美談 一 島崎湊 大阪梅柳閣
ウィル・ホワード「スペルバウンド」といふものゝ由
四月改題とあり、何を改題せるものにや。
新案奇想英和小說 新世帶 一 芳丘居士 嵩山房
ウィリアム・ギルバアト「山の魔術つかひ」、居士の本
名は本多金十郎。
小說 雨中花 一 末廣鐵腸・二宮孤松 後凋閣
原本未詳。
才子佳人 奇遇之夢 一 中村柳塢 金玉堂
原本未詳。
歐洲佳劇 斷腸花 一 宇田川文海 大阪寶文館
ジェームズ・スタッフォーヅ「青年學生」
西洋演劇脚本 梨園の曙 一 高橋義雄 金港堂
(一)洋琴調子整（ヘンリー・ジョーンズ）
(二)戀衣乾ぬ間の渚（ゼヲチ・ソーン）
(三)ガイ・フォークス地雷火奇譚（ゼヲチ・マクファーレン）
(四)女權擴張情理岐（テー・イー・ハルマー）
淑女鑑 交際之女王 一 春之家朧 二書房
十九年版「朗蘭夫人」傳の改題せるもの。
批評の鏡 彌兒頓論 一 吉田直太郎 富山房
マカウレー「ミルトン論」
經國龜鑑 一 土岐僙 博聞社
マカウレー「チャタム伯」
名花の餘薫 一 御手洗清和 丸善
フランクリン「自叙傳」
軍人必讀 訥耳遜傳 一 內田道成・岡千仭 內田氏
サウジイ「ネルソン傳」漢文譯。
文明世界 宇宙之舵蔓 一 硯岳樵夫 文盛堂
樵夫・本姓藤間信三郎・學士チャールズの書學より成

功に至るまでの事を記す。原本未詳。

英和對譯 西洋落語　一　牛山鶴堂　成文堂

一覽博識 歐米百家隨筆　一　森斌　中村

原文は「英米諸家文粹」とでも譯すべきもの。

世界實事奇談　一　渡邊修二郎　贊育書院

エドワード・ウィリアム・キング「奇事一萬題」(Ten Thousand Wonderful Things) より。

自由旗風 華盛頓軍記　一　中村柳塢　共際社

當時のことだから、多少の政治的イデオロギイありと見ていゝ。

軍役奇談　一　柴田六郎　陸軍省

原作 Curiosities of War といふもの。

加厘波地全傳 建國偉業　一　安岡雄吉　博聞社

通俗亞米利加史　未詳　江馬春凞　同人出版

繡衣金袍 戰場之花　一　前田太郎 喜多川金吾　春陽堂

ジェームズ・グラント著「クリミヤ戰爭實記」といふものゝ由。譯者は二人とも硯友社關係者也。

英國士官の物語　無署名　報知新聞

非自由結婚談 戀之夜嵐　一　東海道人補編　起業館

トマスとマリーの情話、原本未詳。

商海狂亂　一　久松義典　集成社

譯か著か未詳、十八世紀英國經濟界に大恐慌を起させた南海泡沫會社事件を傳へたもの。

佛國

歐洲奇説 戀情花之嵐　一　香夢樓主人　村上

ル・サージュ「ジル・ブラス」中致命の結婚といふもの、十九年小栗氏譯「志々利譚」(色是空)と同じもの。二十二年「春色花合戰」と改題す。

五日紀變 英雄之肝膽　(上)一　野田紫城　二書房

ヴィクトル・ユーゴー「イストアール・ドン・クリーム」全譯(前半)

名士遭難 政界之暴風　井上勤　文學之花

原本右同。

寸斷分裂 美人之腸　井上勤　文學之花

ユーゴー「レ・ミゼラーブル」の初頭。

西洋復讐奇譚　二　關直彦　金港堂

アレキサンドル・デュマ「モント・クリスト」抄譯。

美人の勳功　採菊散人補綴　やまと

デュマ「紅家の騎士」(シュヴァリエー・ド・ラ・メーゾン・ルージュ」の飜案。

換骨奪胎 書替倭文章　聯畫閑人　讀賣新聞

ジョルジュ・オネー「セルジ・パニーヌ」といふものの由。閑人とは加藤紫芳のこと。

折枝の梅が香　採菊散人補綴　やまと

佛國小說家アルノー氏「メゼリー」云々といふ小說也といふ。

佛蘭二學士の譚　紅芍園主人　報知新聞

ジュール・ヴェルヌ「ベガムス・フォーチューン」(ベガムの五億圓)の抄譯。

鐵世界　一　森田思軒　集成社

右の單行なり。

天外異譚　大塊生　報知新聞

ジュール・ヴェルヌ「ヘクトール・セルヴァダック」

煙波の裏　獨醒子　同

ジュール・ヴェルヌ「封鎖破り」

盲目使者　羊角山人　同

ジュール・ヴェルヌ「ミシェール・ストロゴッフ」單行の際「瞽使者」と改め、森田思軒の名にて單行。

學術妙用 造物者驚愕試驗　一　井上勤　廣知社

ジュール・ヴェルヌ「ドクトル・オクスの實驗」

萬里絶域 北極旅行　二　福田直彦　春陽堂

ジュール・ヴェルヌ「北極に於ける英國人」、露譯よりの重譯。

政治小說 佳人之血涙 一 井上勤 自由閣
十七年「自由の征矢」の改題もの。

慨世史談 斷蓬奇縁 四 小宮山天香 鳳文館
十五年、立憲政黨新聞に記載せし「勇婦テレーズ」の訂正單行本。

社會進化 世界未來記 一 蔭山廣忠 春陽堂
アルベール・ロビダー「第二十世紀」

改良小說 奇遇魯國美談 一 大石高德 金松堂
ドンペイ父子作「ボン・フレール」といふものゝ由。サン・ミシェルの兄弟三人の物語云々。

政教小說 蒙里西物語 一 大石高德 金松堂
佛國カロー女史著モウリス・フェロウとかいふもの。モウリス・ヘラギウとマノン・メーズの物語、實傳の小說化。

泰西美聞 共和之色旗 一 大石高德 金松堂
原作未詳、一八一五年より一八三〇年に至るフランス革命を中心に政治界の事を種々書きしもの。

歐洲小說 西洋梅暦 一 森知齋 箕田直彦 金泉堂
一名を「戀情月廼叢雲」といふ、著者はグールドンジェヌイヤック云々、佛蘭西小說に違ひなし。

脚本は佛國 世界は日本 當世二人婿 二 長田秋濤原譯 依田百川戯編 鳳文館
佛人ジュッブレー「佛國文範」といふものゝ中にある戯曲といふが、元來はシェークスピアの「リヤ王」に基づくものゝ由。

通俗佛蘭西革命史 一 高木秋浦 金櫻堂

戀娘西洋婚姻事情 一 荻原良太郎 有賀國次 山中
一名演劇獨稽古、ユージェーヌ・ラビッシュ作、西洋演劇の筋書、米人ジュリアン・マンガス、ブランダー・マシゥス等の譯編せるもの云々。

愛國偉勳 一 高橋基一 東涯堂
ヴィクトル・ユーゴーの傳記なり。

歐洲小說 黃薔薇 一 三遊亭圓朝 金泉堂

和裝二册物もあり。原本未詳。

孝女美談 沙漠の花 一 淺井榮凞 坂本倚藏 集成社

佛人リストゥ原著といふ。

乞食王 無署名 朝野新聞

佛王ロベルトの頃のこと云々、原本未詳。

伊太利

伊國情史 鶯鶯奇觀 一 近藤東之助 高崎氏

菊亭靜閲（實は作）、ボッカチョ「デカメロン」の中第三日第三話を引延して一部の小說とせるもの、原本は矢張りカストルの佛譯。

泰西情譜 密夫之奇獄 一 菊亭靜 イーグル書房

カストルの佛譯を元として引のばしを試みしもの。「デカメロン」の中第三日第十話。

人情小說 花情梓話 一 大石高德 金松堂

ビトルリオ・ベルセジオ「ヌーヴェル・ピエモンテーズ」（新ピエン婦人）といふもの。作者は當時イタリー有名の新聞記者。

海外情譜 無署名 大阪日報

シシリ、メッシナ國を舞臺とせる小說もの、人物の名にレヲナトウ、ヘロー、ビートリィスなどあり、何本か未詳。

西班牙

鈍喜翁奇行傳 ワ、シ譯編 教育雜誌

セルヴァンテス「ドン・キホーテ」の抄譯。

歐洲新話 谷間の鶯 一 齋藤良恭 共隆社

セルバント氏作「ドンキショート」中より抄出云々、セルヴァンテス佛譯から抄譯せるもの。

歐洲情史 美人の罠 一 中村柳塢 共隆社

これも「ドンキショート」中より抄せるもの。

貧福 薔薇園主人 報知新聞

原本未詳、スペイン、グラナダの物語。

獨逸

鐵血政略　四　渡邊治　金港堂

ビスマルク公の傳記を中心に、歐洲近世四十年間の外交史を說けるもの、極めに稗史的氣味あり。

獨逸戲曲大意　一　久松定弘　博聞社

血淚字句 回天之弦聲　二　葦田東雄　一光堂

スウィス民權沿革の小說、純飜譯ではない。大體シルレルの「ウィルヘルム・テル」あたりを手本にしてゐるらしい。

西洋故事 神仙叢話　一　相南居士　集成社

グリムの童話の譯、相南とは文學士菅了法のこと。政治家としても有名である。

沙漠旅行物語　霞城山人　通俗學藝志林

ハウフのメルヘン集「キャラバン」の抄譯。

維納の春 美術の苑　小哲學士　霞城山人　同

ローバン・フォン・ムレックといふ人の筆に成るといふ。

雜

金驢譚　不語軒主人　報知新聞

ラテン文人アプレィアス「黃金の驢馬」の抄譯。

四十の山賊　矢野龍溪　報知新聞

「アラビヤンナイツ」の中、「四十人の山賊と一人の女婢」

波斯新說 烈女之名譽　一　村上眞助編　文泉堂

右の單行本。

印度太子 亞弗利加奇談　一　同　同

報知新聞に出し「舍摩」の物語の單行本。

他邦使略 露人氣質　一　八木半治　自由閣

エルマックのシベリア使略史。

驕主の情焰　蟻廬主人　朝野新聞

スペイン王ヒリップ二世時代の物語、政治的イデオロギー多少あると見ゆ。

合集

一讀一驚 世界一大奇聞　一　中澤順三編　二書房

報知新聞に出し「嘉坡通信」の合集。目次如左。
○新嘉坡客舍の事
○志別士商人の物語
○印度太子舍摩の物語
○志々利物語
○金驢譚
○英國士官の譚

才子妙案天外奇談 一 東條種家編 大阪 吉岡

「世界一大奇聞」と同種のもの。內容は「奇聞」に比して
○佛曼二學士の譚
○貧福
の二種を增加してある。

歐洲奇獄珍事のはきよせ 一 竹軒居士 共隆社

原本未詳、珍事四種。
○豪賊カルトージ物語
○佛人シャルロター女史遊俠傳
○侯妃麻理の夜叉譚
○伊太利の慷慨家フェリークス實錄

明治二十一年

英國

自由の笞恩愛の綱 豪傑一世鏡 一 板倉與太郎 精文堂

シェークスピア「コリオレーナス」全譯、院本風。

みなれざを 一 わたのとろみ 聽雨堂

シェークスピア「末よければ凡てよし」の抄譯、譯者は大學生たりし和田萬吉氏。

鏡花水月 一 渡邊治 集成社

シェークスピア「間違ひの喜劇」全譯。

正本はむれつと 山田美妙 以良都女

女房持虎の卷 一 叢菊野史 盛進舍

泰西奇談、ラム「物語」による「じやじや馬馴し」。

嵐の卷　一　叢菊野史　盛進舍
泰西奇談、ラム「物語」による「テムペスト」。

智孟物語　一　叢菊野史　同
泰西奇談、ラム「物語」による「アゼンスのタイモン」。

幽靈　一　井上勤　鶴仙堂
ラムの「物語」による「ハムレツト」

「リイア王」の話　羅馬字雜誌

豪華之夢　鯖江小漁　學藝之世界
シエークスピア「アゼンスのタイモン」の散文梗概、ラムによるものであらう。

情海の波瀾　柳香痩僊　某新聞
シエークスピア「冬物語」の作り替といふ、未詳。

活人形　架空道人　明治文庫
同じ「冬物語」の梗概。

政治小說小人國發見錄　一　鳥尾岩太郎　兎屋誠
英國ジョオジ著といふも、スウィフトの「ガリヴァア」の小人國部に基づく。

小說神髓（第一編）　女學雜誌
スコツト「ケニルウアース」の梗概紹介。

影法師　竹の舍主人　讀賣新聞
ヂッケンズ「クリスマス・カロル」の紹介。（「むら竹」第八卷）。

目鏡　同　同
原本未詳「むら竹」第五卷。

昆太利物語　三　福地源一郎 塚原靖　藏玉堂
單行本。（中）は二十年四月、（三）は二十三年十一月。

榮枯譚　稻庵居士　朝野新聞
ロード・リツトン「廷臣カルデロン」といふもの。

奸雄之末路　一　稻庵吉田熹六　集成社
右「カルデロン」の單行。

半島の戰爭　無署名　東京日日
ウィリアム・マクスウエル「ペニンシユラ・ウォア」、初

頭のみ。

凱法苦士（ガイノオークス）　無署名　東京日々

ウィリアム・エィンズウァース「同名」抄譯。

奔彪槃華の夢　青竺小史　女學雜誌

ロード・リットン「ポンペイ最後の日」第六章にて中絶。

谷間の姫百合　四　末松謙澄・二宮熊次郎　金港堂

バァサ・エム・クレイ「ドラ・ソーン」全譯。この小説をよく政治小説の最後のものなどといふ人あるも、以ての外である。

贋貨つかひ　一　春のやおぼろ　駸々堂

二十年讀賣に出しもの丶單行。

短銃奇談　攫眠居士譯補・坐睡迂史删潤　讀賣新聞

ハイ(ヒューか)・コンウェイの著といふ。

歐洲情話花蝶物語　酡蕪柳仙史　大和錦

バァネット女史作(「少公子」の著者)といふ。

革命餘聞 英雄之世路　一　皤溪仙史　自由閣

米人チャンダアス原著「フランス革命の物語」と副題して「勝者の運命」とかいふものといつてゐるが、フランス革命の物語ではなは、詳しくは「研究篇」二十一年の條參照、然し讀んでは面白いもの。

英國革命 姿之夜櫻　一　松の舍主人　金松堂

松の舍主人は高安龜次郎、原作未詳。

英國奇聞 政黨情話　一　八木牛治　精文堂

ブライト氏原著といふ、「英國革命の物語」と書いてある。英國名譽革命の事蹟を小説化せるもの。

人情美談 世界第一之美人　一　米の舍牛痴　イーグル書房

「政黨情話」の改題もの。

摘險發微 奇獄　一　千原伊之吉　京都日本同盟法學會

米人マックウァッテル「歐米名探偵」といふもの丶由。

千代の礎　一　三浦徹　未詳

ウォルトン原書といふ、宗教物なりしと記憶す。

優勝劣敗 猿の裁判　一　井上勤　二書房

英國グレイ原著といふ。進化論反對の小說。

濟浪渾血 金鐵腸 一 城慶度 金櫻堂

サウジイ「ネルソン傳」

月裏兩面鏡 採菊散人補綴 やまと

米國小說「シャドウド・バイ・スリー・デテクチヴス」といふ。

いすかの啄 同 やまと

英國小說らしきも未詳。

村好娘ドラの一生 無署名 女學雜誌

テニソンの「ドラ」の散文紹介。

探偵長駝列兒譚 井上勤 頓知協會雜誌

佛國

警奇世話 一 加藤幹雄 イーグル書房

フエヌロン「ファーブル」といふ假作敎訓物語集。

佛蘭二人皇后 小川忠武 大和錦

デュマ「王妃の頸かざり」

椿の花把 加藤紫芳 小說萃錦

デュマ「椿姬」、讀賣に載りしものゝ再錄といふ。

浮世の巷（前）一 岡野碩 金港堂

ユージーヌ・シュー「パリの祕密」の抄譯紹介。

瞽使者 二 森田思軒 報知社

二十年報知新聞へ載りしものゝ單行。

通俗八十日間世界一周 一 井上勤 自由閣

ジュール ヴェルヌ、十一年川島氏刊のものを今少し文章を和らげたるもの。

大東號航海日記 森田思軒 國民之友

ジュール・ヴェルヌ「フローチング・シティ」の譯。

九十七時二十分間月世界旅行 一 井上勤 自由閣

二十一年十二月第四版發行。

佛國史談義勇兵 一 宮崎夢柳 大阪盛業館

ガボロー（リオー）原著、原名何といふか未詳。

政治上放逐人 千里鳳雛 (上)一 鈴木天眼 數文館

佛人チッソー及びアメロー原作「三逃亡囚の冒險」といふものゝ由、米人コックス英譯。

殘花憾葉櫻 一 採菊散人 金泉堂

フランス小説の由、原書不明。

迷ひの夢 採菊散人補綴 やまと

佛國の實事談といふ。

獨眼龍 一 瀧本誠一 集成社

レオン・ガムベッタの傳記をいさゝか稗史めかしたるもの。

國會之瑕瑾 一 水谷田章 同人出版

ア・フーキエー氏原著「路易王死刑之顛末」といふものゝ由。

獨逸

劣夫傑婦譚 山縣悌三郎 文明之母

ペスタロチ「ゲルトルード・ウント・リエンハルト」

春雪瑪利御最期 福地櫻痴 東京日日附錄

シルレル「マリア・ステュアルト」の紹介。初は戲曲風、後半は物語風。

妖怪船 一 高橋禮五郎 松成堂

ハウフ「キャラバン」の一節。

泰西奇談 旅路之空 一 田中栢城 イーグル書房

ウイルヘルム・ハウフのメルヘン集「キャラバン」中より抄出飜譯せしもの。

獨逸建國志 (上)一 加賀秀一 東京吉岡

血涙萬行 國民之元氣 二 谷口政德 金泉堂

表紙に「マダーム・テレーズ」とローマ字にて記しあるも、「マダーム・テレーズ」とは何等の關係も無し。スウィスの獨立、テル傳等をとりて稗史化せるもの。

鬼車 隔戀坊 我樂多文庫

巖谷小波の譯、メルヘンもの、英國お伽譚めくところあり。二十二年單行。

露國

あひびき　二葉亭四迷　國民之友

ツルゲーネフ「獵人日記」中の「ランデブウ」

めぐりあひ　二葉亭四迷　都之花

ツルゲーネフ「トリイ・フストレーチイ」(三度の出會)といふもの。

霹靂帝　樹下隱士　東京日日

コニヤーエフ「約翰虞ローズヌイ」(イヴァン雷帝)。

西班牙

情讐瑣談　彈鋏生　朝野新聞

スペイン正史を稗史化せるもの。

雜

波斯奇談 奇遇夢物語　一　横山峯一　盛春堂

獨逸一千一夜物語といふものより抄譯云々・然し恐らく獨逸譯の「アラビヤンナイツ」であらう。

亞剌丁(アラヂン)物語　玉藻生　西洋叢談

「アラビヤンナイツ」中「アラデンのラムプ」の條、玉藻生とは長尾藻城氏のこと。

諷世奇談 王様の新衣裝　一　河野政喜　近藤

石川氏目錄による、未見。

改正増補 通俗伊蘇普物語　一　渡部溫　同人出版

明治六年刊の増補版也。

勸懲寓意 伊蘇普物語　一　田中達三郎　木村

警世美談 闇夜之燈　三　上田將　森屋

埃及聖女マリア、矜恤者フィラレト、聖婦フェヲドラの傳。宗教文學。

滑稽狂言 優兒之邂逅　一　相良常雄　金港堂

ラテン詩人プロータスの喜劇。原語譯といふ。

合集

志士感激 歐米太平記　一　福井淳　大阪興民社

フランス、イギリス、アメリカ各革命の逸話を集譯せ

しもの。

各國才子 寄合演說 一 村上司馬編 文泉堂

二十年「世界一大奇聞」と同様の內容のもの。

○新嘉坡通信

○志別土商人

○金驢譚

○印度太子舍廓

○烈女之名譽

明治二十二年

英 國(米國)

曼府の叛亂 塚原蓼洲 小說萃錦

エンズリース「マンチエスタア一揆」、再錄。

家庭教育 園之咲分 二 桑東居士 開新堂

ゴールドスミス「ウエークフヒールドの牧師」

悲風慘雨 倫敦塔 一 三木愛花 共隆社

エンズワース「ロンドン塔」、縮譯。

うつり香 一 矢部五洲 臥雲堂

夜と朝 十二 益田克德 速記法研究會

リットン「夜と朝」

いさ子 六 織田純一郎 汎愛堂

ヘンリ・ウッド夫人「イーストリン」

いすかの啄 一 條野採菊 自由閣

英國小說の飜案物「やまと」へ出しもの。單行。

西洋德婦美譚 二 神田熊千代女史 未詳

旅館の夕 森田思軒 報知新聞

アーヴイング「幽靈新郞」の序。

幽靈新郞 同 同

アーヴイング「幽靈新郞」

新世界の浦島 森鷗外 少年園

アーヴィング「リップ・ヴァン・ウィンクル」
伊太利の囚人　森田思軒　國民之友
チッケンズ「伊太利の囚人」（アンコンマーシャル・トラヴェラーアの中）
小説 洪水　鷗外漁史　しがらみ草紙
ブレットハート「ハイ・ウォーター・マーク」
夢ならぬ夢　湘川漁夫（大島正健）　女學雜誌
ホーソン「ファンタシイ」
心の浮畫　同　同
ホーソン「ファンシイス・セウボックス」
船遊山　芳文　城南評論
デッケンズ「スケッチェス・バイ・ボス」の中より（か）
月珠　省庵居士　報知新聞
ウィルキイ・コリンズ「ムーンストン」
元木の花　條野採菊　やまと新聞
英國小説「愛の力」といふものゝ由。

祕密の婚姻　烏金山人（井上勤）　美術園
ランダル女史作。
理想の紳士　月の舍しのぶ　女學雜誌
ミス・マロック「ジョン・ハリファクス」
わいるどむウあ　山田美妙　都の花
あるのん物語　山田美妙　女學雜誌
米國アメリー・ライヴス女史作。
代言人　臥禪居士　報知新聞
狼聲　同　同
まちがひ　同　同
是はソモ　同　同
衞士　抱一庵主人　同
以上報知叢談所載、原作不明、英米小説らしきもの。

佛國

色是空　一　小栗貞雄　成文堂

二十年「志々利譚」ルサージュ「ジル・ブラス」の中の一節「フェータル・マリエヂ」（致命の結婚）

春色花合戰　一　香夢樓主人　日吉堂
「色是空」と同一原作、「戀情花之嵐」を改題せるもの。

佛蘭西革命記　自由乃凱歌　一　宮崎夢柳　偉業館
デュマ「バスチィユ奪取」（原名ピトウ・アンジュ）

椿の花把　一　加藤紫芳　春陽堂
少デュマ「椿ひめ」（小說萃錦合本）

探偵ユーベル　一　森田思軒　民友社
ユーゴー「隨見錄」の中一節。

小說落魄　渺茫居士（長澤說）　筆之力
ユーゴー「ラ・ミゼラブル」

秘密會議　廻瀾堂主人　經世評論
ユーゴー「隨見錄」中の一節。

渡海難　朝比奈知泉　新小說
ユーゴー作「海の苦難者」

罪人の歷史　虛實亭主人　人民
ユーゴー「イストアール・ドン・クリーム」

薄命　咄々怪史　讀賣新聞
マリー・トルーヅロアー夫人「アムール」の一節といふ。

茨の花　條野採菊　やまと
佛國小說の飜案物、續篇「蘆の穗綿」

戀山賤　尾崎紅葉　文庫
内田魯庵談、これはゾラの「ムウレ和上の墮罪」の飜案である云々。

幽棲　原抱一庵　新小說
佛國小說「シゴクナック」なるものといふ。

佛國三人男　談州樓燕枝　中島
譯といふ程のものではない、然し原作はデュマの「三銃士」ではないか。

大叛魁　森田思軒　新小說
ジュール・ヴェルヌ「蒸汽の家」といふもの。

さすらへびと　藥知　月雪花
ジュール・ヴェルヌ、何作か未詳。
毛家莊秘事　同　新小説
原本不明、ヴェルヌといはるゝもヴェルヌではなからうと思ふ。
探征隊　西濟生　報知新聞
恐らくヴェルヌ「グラント船長の子等」(「世界一周」)といふもの。
樅葉の歎　鷗外漁史 三木竹二 同譯　讀賣新聞
アルフォンス・ドーデー作。
戰僧　森鷗外　少年園
アルフォンス・ドーデー。
獨逸(北歐)
玉を懷いて罪あり　森鷗外 三木竹二 同譯　讀賣新聞
ホフマン作「スキュデリ夫人」
破茶碗　森田思軒　新小説
ツェッケ(チョッケか)「破茶碗」
菩提樹の逍遥　吾醒廬主人　國民之友
シルレル作。
理想と此世　山口小太郎　學林
シルレル作。
戯曲折薔薇　鷗外漁史 三木竹二 同譯　しがらみ草紙
レッシング作「エミリア・ガロッティ」
あやしき少女　小金井きみ子　同
王宮　同　國のもとゐ
星　同　大和錦
伊太利の佳人　愛軒居士　女學雜誌
ゲーテ作。
舊小説　中井錦城　新小説
ゲーテ「ウエルテルの悲み」四章のみ。
傳奇トーニー　鷗外漁史 三木竹二 同譯　讀賣新聞

テオドール・キヨルネル作。

沙漠の旅　獨幹散史　繪入朝野新聞

ハウフ作「キャラバン」（メルヘン集）

縁糸色紅白（えにしのいと）　葉松文内 三啞居士共譯　讀賣新聞

ドイツ戯曲、カルフルモ云々。

レッシング比喩談　石橋忍月　少年園

露國

愛國偉才 美人草　五七居士（佐波武雄）　日本之時事

あらしの花 美さは艸紙　五七居士　大和錦

ツルゲーネフ「ナカヌウネ」（その前夜）、兩者同じもの。後者は完結す。

西班牙

音調高洋箏一曲　鷗外漁史 三木竹二　同譯　讀賣新聞

カルデロン・デ・バルカ「ザラメヤの村長」

合集

於母影　S・S・S　國民之友

五十八號附錄、沙翁、バイロン、ハウフ、レイナウ、高青邱その他詩集。

雜

人さまぐ　自笑居士　讀賣新聞

セオフラスタス「氣質の繪畫」（ヲーベルブライエル獨譯）より。

やまと昭君　尾崎紅葉　文庫

「アラビヤンナイツ」の中、あふむの話を飜案せしもの。

原作不詳

歐洲奇談夢廼曉　菊舍東籬　漫遊會

風薫る里昂の花園　吉田韜庵　朝野新聞

戯曲。フランス物か

無名人　堤齋居士　同

昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

【定價・三圓八十錢】

明治文學叢刊第一卷
(明治初期の飜譯文學)

著作者 柳田泉
東京市小石川區西丸町二五

發行者 神田龍一
東京市日本橋區吳服橋二ノ五

印刷者 谷口熊之助
東京市麴町區土手三番町二九

印刷所 谷口印刷所
東京市麴町區土手三番町二九

發賣所 松柏館書店
東京市日本橋區吳服橋二ノ五春秋ビル內
振替(東京)三九七一六番
電話日本橋(24)二六二四番